

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 650 集

あかまゑ  
赤前Ⅲ遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）関連遺跡発掘調査

2016

宮古市都市整備部都市計画課  
（公財）岩手県文化振興事業団

# 赤前Ⅲ遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）に関連して平成25・26年度に実施された宮古市赤前Ⅲ遺跡発掘調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代前期～中期の竪穴住居や土坑、古代の竪穴住居や鉄生産関連炉・土坑といった遺構、それに伴う土器・石器・金属製品・製鉄関連など多岐にわたる遺物が出土しており、本遺跡が縄文時代から現代に至るまでの生活の痕跡を留めた遺跡であることが判明しました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました宮古市都市整備部都市計画課、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野 洋樹

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県宮古市赤前第7地割6-1ほかに所在する赤前Ⅲ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。  
遺跡番号：LG54-1025 遺跡略号：AMⅢ-13・AMⅢ-14
3. 本遺跡の調査は、防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）に伴う事前の緊急発掘調査である。調査にあたっては宮古市と県教委事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
4. 発掘調査は2カ年にわたって実施しており、対象面積・調査期間・担当者は以下の通りである。  
<平成25年度> 面積：5,900㎡ 期間：平成25年8月19日～12月20日  
担当者：米田 寛・村田 淳・中村隼人・中島康佑  
<平成26年度> 面積：6,627㎡ 期間：平成26年4月8日～9月12日  
担当者：村田 淳・中村隼人・高橋静歩・中島康佑
5. 室内整理期間・担当者は以下の通りである。  
<平成25年度> 期間：平成25年12月2日～平成26年3月31日  
担当者：村田 淳・中島康佑  
<平成26年度> 期間：平成26年5月1日～平成27年3月31日  
担当者：村田 淳・中村隼人
6. 本報告書の執筆は、Iを宮古市都市整備部都市計画課、Ⅲ・Ⅳを村田、Ⅱ・Ⅴ・Ⅵは担当者で分担して執筆し、編集は村田が行った。項目毎の文責は文末に記した。
7. 野外調査における写真撮影は担当調査員、遺物写真撮影については村田及び当センター職員が実施した。
8. 基準点測量及び航空写真撮影は、以下の業者に業務委託した。  
基準点測量・・・㈱鈴木測量設計（平成25年度）・釜石測量設計株式会社（平成26年度）  
航空写真撮影・・・東邦航空㈱ 遺構写真解析図化・・・㈱リッケイ
9. 自然科学関連の分析・鑑定及び保存処理は以下の機関に委託した。  
動物遺存体（Ⅵ-1）・・・青森県教育庁文化財保護課（齊藤慶史氏）  
放射性炭素年代測定（Ⅵ-2）・・・㈱加速器分析研究所  
鉄製品保存処理及び鉄滓の化学分析（Ⅵ-3）・・・岩手県立博物館文化財科学  
炭化材樹種同定（Ⅵ-4）・火山灰分析（Ⅵ-5）・・・バリノ・サーヴェイ株式会社  
石質鑑定・・・花崗岩研究所
10. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々にご指導・ご助言を賜った。（五十音順、敬称略）  
鎌田祐二・高橋憲太郎・竹下将男・野垣好史・羽柴直人・長谷川真・安井健一・宮古市教育委員会
11. 本遺跡の調査成果は、当センター主催の現地説明会及び岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集『平成25年度発掘調査報告書』・第647集『平成26年度発掘調査報告書』で公表しているが、本書の記載内容がそのいずれにも優先する。
12. 調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

# 目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と周辺環境	
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
3	過去の調査歴	4
III	調査の方法	
1	野外調査の方法	7
2	調査経過	14
3	室内整理の方法	15
4	凡 例	16
IV	遺物の分類	
1	縄文土器	17
2	弥生土器	18
3	古代の土器	18
4	石器・石製品	19
5	金属製品	20
6	鉄生産関連遺物	20
V	検出遺構・遺物	
1	調査概要	22
2	竪穴建物	30
3	炉	140
4	焼 土	140
5	鉄生産関連炉	146
6	土 坑	149
7	円形周溝	170
8	溝	172
9	掘立柱建物・欄列・柱穴	176
10	性格不明遺構	190

11 遺物包含層	192
12 遺構外出土遺物	192

## VI 自然科学分析

1 赤前Ⅲ遺跡から出土した動物遺存体について	316
2 放射性炭素年代測定	320
3 鉄関連資料の金属考古学的調査	324
4 炭化材樹種同定	337
5 火山灰分析	340

## VII 調査のまとめ

1 縄文時代	344
2 古代	353
3 中～近世	356
4 総括	358

報告書抄録	555
-------	-----

## 図版目次

第1図 遺跡の位置	1	第20図 S I 07カマド	45
第2図 地形分類図	3	第21図 S I 08	46
第3図 周辺の遺跡	5	第22図 S I 08カマド	47
第4図 調査区的位置	8	第23図 S I 09	49
第5図 遺構配置図	10・11	第24図 S I 09カマド	50
第6図 グリッド配置図(1)	24	第25図 S I 10	51
第7図 グリッド配置図(2)	25	第26図 S I 11	54
第8図 グリッド配置図(3)	26	第27図 S I 11カマド	55
第9図 グリッド配置図(4)	27	第28図 S I 12	56
第10図 グリッド配置図(5)	28	第29図 S I 13	57
第11図 グリッド配置図(6)	29	第30図 S I 13カマド	58
第12図 S I 01(1)	32	第31図 S I 14	60
第13図 S I 01(2)	33	第32図 S I 15	62
第14図 S I 02	36	第33図 S I 16	63
第15図 S I 03・04	38	第34図 S I 16カマド	64
第16図 S I 03SH01	39	第35図 S I 17	65
第17図 S I 05	41	第36図 S I 18	68
第18図 S I 06	42	第37図 S I 19	71
第19図 S I 07	44	第38図 S I 19カマド	72

第39図	S I 20・21	74	第84図	S I 64	138
第40図	S I 22	76	第85図	S H 01・02	139
第41図	S I 23	78	第86図	S F 01～05	142
第42図	S I 24	80	第87図	S F 06～13	143
第43図	S I 25	81	第88図	S F 14～22	144
第44図	S I 26	82	第89図	S F 23～29	145
第45図	S I 27	84	第90図	S X W 01・02	147
第46図	S I 27 カマド	85	第91図	S X W 03	148
第47図	S I 28	86	第92図	S K 01～08	153
第48図	S I 29	87	第93図	S K 09～15	154
第49図	S I 30	89	第94図	S K 16～24・27	155
第50図	S I 31	90	第95図	S K 25・26・28～31・35～38	156
第51図	S I 31 カマド	91	第96図	S K 32～34・39～44	157
第52図	S I 32	92	第97図	S K 45～52	158
第53図	S I 33・34	93	第98図	S K 53～60・63	159
第54図	S I 35	95	第99図	S K 61・62・64～69・71	160
第55図	S I 36	96	第100図	S K 70・72～77	161
第56図	S I 37 (1)	100	第101図	S K 78～87	163
第57図	S I 37 (2)	101	第102図	S K 88～96	164
第58図	S I 38 (1)	102	第103図	S K 97～109	165
第59図	S I 38 (2)	103	第104図	S K 110～118	166
第60図	S I 39	104	第105図	S K 119～127	167
第61図	S I 40	106	第106図	S K 128～140	168
第62図	S I 41	107	第107図	S K 141～154	169
第63図	S I 42	108	第108図	S Z 01	171
第64図	S I 43 (1)	109	第109図	S D 01～04	173
第65図	S I 43 (2)	110	第110図	S D 05～08	174
第66図	S I 44	112	第111図	S B 05	177
第67図	S I 45・46	114	第112図	S A 01～04、S B 01～04・06	178
第68図	S I 47	116	第113図	柱穴配置図 (1)	179
第69図	S I 48 (1)	117	第114図	柱穴配置図 (2)	180
第70図	S I 48 (2)	118	第115図	柱穴配置図 (3)	181
第71図	S I 49	122	第116図	柱穴配置図 (4)	182
第72図	S I 50	123	第117図	S X 01・02	193
第73図	S I 51	124	第118図	S X 03～06	194
第74図	S I 52	124	第119図	S X 07～15・17・18	195
第75図	S I 53	125	第120図	S X 16・19・20、遺物包含層	196
第76図	S I 54・55	127	第121図	土器 (1)	197
第77図	S I 56・57	128	第122図	土器 (2)	198
第78図	S I 58	130	第123図	土器 (3)	199
第79図	S I 59	132	第124図	土器 (4)	200
第80図	S I 60	133	第125図	土器 (5)	201
第81図	S I 61	134	第126図	土器 (6)	202
第82図	S I 62	136	第127図	土器 (7)	203
第83図	S I 63	137	第128図	土器 (8)	204

第129 図	土器 (9)	205	第170 図	土器 (50)	246
第130 図	土器 (10)	206	第171 図	土器 (51)	247
第131 図	土器 (11)	207	第172 図	土器 (52)	248
第132 図	土器 (12)	208	第173 図	土器 (53)	249
第133 図	土器 (13)	209	第174 図	土器 (54)・土製品	250
第134 図	土器 (14)	210	第175 図	製塩土器 (1)	251
第135 図	土器 (15)	211	第176 図	製塩土器 (2)	252
第136 図	土器 (16)	212	第177 図	剥片石器 (1)	253
第137 図	土器 (17)	213	第178 図	剥片石器 (2)	254
第138 図	土器 (18)	214	第179 図	剥片石器 (3)	255
第139 図	土器 (19)	215	第180 図	剥片石器 (4)	256
第140 図	土器 (20)	216	第181 図	剥片石器 (5)	257
第141 図	土器 (21)	217	第182 図	礫石器・石製品 (1)	258
第142 図	土器 (22)	218	第183 図	礫石器・石製品 (2)	259
第143 図	土器 (23)	219	第184 図	礫石器・石製品 (3)	260
第144 図	土器 (24)	220	第185 図	礫石器・石製品 (4)	261
第145 図	土器 (25)	221	第186 図	礫石器・石製品 (5)	262
第146 図	土器 (26)	222	第187 図	礫石器・石製品 (6)	263
第147 図	土器 (27)	223	第188 図	礫石器・石製品 (7)	264
第148 図	土器 (28)	224	第189 図	礫石器・石製品 (8)	265
第149 図	土器 (29)	225	第190 図	礫石器・石製品 (9)	266
第150 図	土器 (30)	226	第191 図	礫石器・石製品 (10)	267
第151 図	土器 (31)	227	第192 図	礫石器・石製品 (11)	268
第152 図	土器 (32)	228	第193 図	礫石器・石製品 (12)	269
第153 図	土器 (33)	229	第194 図	礫石器・石製品 (13)	270
第154 図	土器 (34)	230	第195 図	礫石器・石製品 (14)	271
第155 図	土器 (35)	231	第196 図	金属製品 (1)	272
第156 図	土器 (36)	232	第197 図	金属製品 (2)	273
第157 図	土器 (37)	233	第198 図	金属製品 (3)	274
第158 図	土器 (38)	234	第199 図	銭貨	275
第159 図	土器 (39)	235	第200 図	羽口 (1)	276
第160 図	土器 (40)	236	第201 図	羽口 (2)	277
第161 図	土器 (41)	237	第202 図	羽口 (3)	278
第162 図	土器 (42)	238	第203 図	羽口 (4)	279
第163 図	土器 (43)	239	第204 図	陶磁器	279
第164 図	土器 (44)	240	第205 図	縄文土器分類図 (1)	346
第165 図	土器 (45)	241	第206 図	縄文土器分類図 (2)	347
第166 図	土器 (46)	242	第207 図	S I 01 変遷図 (1)	350
第167 図	土器 (47)	243	第208 図	S I 01 変遷図 (2)	351
第168 図	土器 (48)	244	第209 図	S B 05・06 配置図	356
第169 図	土器 (49)	245			



## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡	6	第10表	製塩土器観察表	302
第2表	基準点一覧	9	第11表	剥片石器観察表	303
第3表	遺構名変更一覧	12	第12表	礫石器観察表	307
第4表	SI01 柱穴計測表	34	第13表	石製品観察表	310
第5表	焼土計測表	141	第14表	金属製品観察表	311
第6表	土坑計測表	150	第15表	羽口観察表	313
第7表	柱穴計測表	183	第16表	銭貨観察表	314
第8表	土器観察表	280	第17表	陶磁器観察表	314
第9表	土製品観察表	302			

## 写真図版目次

カラー写真図版1	363	写真図版28	SI 22	392	
カラー写真図版2	364	写真図版29	SI 23	393	
写真図版1	航空写真	365	写真図版30	SI 24	394
写真図版2	調査区の状況(1)	366	写真図版31	SI 25	395
写真図版3	調査区の状況(2)	367	写真図版32	SI 26	396
写真図版4	調査区終了(1)	368	写真図版33	SI 27	397
写真図版5	調査区終了(2)・基本層序	369	写真図版34	SI 28	398
写真図版6	SI 01 (1)	370	写真図版35	SI 29	399
写真図版7	SI 01 (2)	371	写真図版36	SI 30	400
写真図版8	SI 02	372	写真図版37	SI 31	401
写真図版9	SI 03・04 (1)	373	写真図版38	SI 32	402
写真図版10	SI 03・04 (2)	374	写真図版39	SI 33・34 (1)	403
写真図版11	SI 05	375	写真図版40	SI 33・34 (2)	404
写真図版12	SI 06	376	写真図版41	SI 35	405
写真図版13	SI 07	377	写真図版42	SI 36	406
写真図版14	SI 08	378	写真図版43	SI 37 (1)	407
写真図版15	SI 09	379	写真図版44	SI 37 (2)	408
写真図版16	SI 10	380	写真図版45	SI 38	409
写真図版17	SI 11	381	写真図版46	SI 39	410
写真図版18	SI 12	382	写真図版47	SI 40	411
写真図版19	SI 13	383	写真図版48	SI 41	412
写真図版20	SI 14	384	写真図版49	SI 42	413
写真図版21	SI 15	385	写真図版50	SI 43	414
写真図版22	SI 16	386	写真図版51	SI 44	415
写真図版23	SI 17・18	387	写真図版52	SI 45	416
写真図版24	SI 18	388	写真図版53	SI 46	417
写真図版25	SI 19	389	写真図版54	SI 47・48 (1)	418
写真図版26	SI 20・21 (1)	390	写真図版55	SI 47・48 (2)	419
写真図版27	SI 20・21 (2)	391	写真図版56	SI 48	420

写真図版 57	S I 49	421	写真図版 102	S K 86 ~ 90	466
写真図版 58	S I 50	422	写真図版 103	S K 91 ~ 95	467
写真図版 59	S I 51	423	写真図版 104	S K 96 ~ 99	468
写真図版 60	S I 52	424	写真図版 105	S K 100 ~ 103	469
写真図版 61	S I 53	425	写真図版 106	S K 104 ~ 107	470
写真図版 62	S I 54 · 55	426	写真図版 107	S K 108 ~ 111	471
写真図版 63	S I 56	427	写真図版 108	S K 112 ~ 115	472
写真図版 64	S I 57	428	写真図版 109	S K 116 ~ 119 · 124	473
写真図版 65	S I 58	429	写真図版 110	S K 120 ~ 123	474
写真図版 66	S I 59	430	写真図版 111	S K 125 ~ 128	475
写真図版 67	S I 60	431	写真図版 112	S K 129 ~ 133	476
写真図版 68	S I 61	432	写真図版 113	S K 134 ~ 137	477
写真図版 69	S I 62	433	写真図版 114	S K 138 ~ 141	478
写真図版 70	S I 63	434	写真図版 115	S K 142 ~ 146	479
写真図版 71	S I 64	435	写真図版 116	S K 147 ~ 150	480
写真図版 72	S X W 01	436	写真図版 117	S K 151 ~ 154 · 作業風景	481
写真図版 73	S X W 02 · S H 01 · 02	437	写真図版 118	S Z 01	482
写真図版 74	S X W 03	438	写真図版 119	S D 01 ~ 04	483
写真図版 75	S F 01 ~ 04	439	写真図版 120	S D 05 ~ 08	484
写真図版 76	S F 05 ~ 08	440	写真図版 121	S B 01 ~ 06	485
写真図版 77	S F 09 ~ 12	441	写真図版 122	S P 43 · 142 · 313 · 315 · 317 · S X 01	486
写真図版 78	S F 13 ~ 16	442	写真図版 123	S X 02 ~ 05	487
写真図版 79	S F 17 ~ 20	443	写真図版 124	S X 06 · 07 · 13 · 16	488
写真図版 80	S F 21 ~ 25	444	写真図版 125	遺物包含層	489
写真図版 81	S F 26 ~ 29	445	写真図版 126	土器 (1)	490
写真図版 82	S K 01 ~ 04	446	写真図版 127	土器 (2)	491
写真図版 83	S K 05 ~ 08	447	写真図版 128	土器 (3)	492
写真図版 84	S K 09 ~ 12	448	写真図版 129	土器 (4)	493
写真図版 85	S K 13 ~ 16	449	写真図版 130	土器 (5)	494
写真図版 86	S K 17 ~ 20 · P05	450	写真図版 131	土器 (6)	495
写真図版 87	S K 21 ~ 24	451	写真図版 132	土器 (7)	496
写真図版 88	S K 25 ~ 30	452	写真図版 133	土器 (8)	497
写真図版 89	S K 31 ~ 34 · 37 · 38	453	写真図版 134	土器 (9)	498
写真図版 90	S K 35 · 36 · 38 ~ 41	454	写真図版 135	土器 (10)	499
写真図版 91	S K 42 ~ 45	455	写真図版 136	土器 (11)	500
写真図版 92	S K 46 · 48 ~ 50	456	写真図版 137	土器 (12)	501
写真図版 93	S K 47 · 51 ~ 53	457	写真図版 138	土器 (13)	502
写真図版 94	S K 54 ~ 57	458	写真図版 139	土器 (14)	503
写真図版 95	S K 58 ~ 61	459	写真図版 140	土器 (15)	504
写真図版 96	S K 62 ~ 65	460	写真図版 141	土器 (16)	505
写真図版 97	S K 66 ~ 69	461	写真図版 142	土器 (17)	506
写真図版 98	S K 70 ~ 73	462	写真図版 143	土器 (18)	507
写真図版 99	S K 74 ~ 77	463	写真図版 144	土器 (19)	508
写真図版 100	S K 78 ~ 81	464	写真図版 145	土器 (20)	509
写真図版 101	S K 82 ~ 85	465			

写真図版 146	土器 (21)	510	写真図版 168	剥片石器 (1)	532
写真図版 147	土器 (22)	511	写真図版 169	剥片石器 (2)	533
写真図版 148	土器 (23)	512	写真図版 170	剥片石器 (3)	534
写真図版 149	土器 (24)	513	写真図版 171	剥片石器 (4)	535
写真図版 150	土器 (25)	514	写真図版 172	剥片石器 (5)	536
写真図版 151	土器 (26)	515	写真図版 173	礫石器 (1)	537
写真図版 152	土器 (27)	516	写真図版 174	礫石器 (2)	538
写真図版 153	土器 (28)	517	写真図版 175	礫石器 (3)	539
写真図版 154	土器 (29)	518	写真図版 176	礫石器 (4)	540
写真図版 155	土器 (30)	519	写真図版 177	礫石器 (5)	541
写真図版 156	土器 (31)	520	写真図版 178	礫石器 (6)	542
写真図版 157	土器 (32)	521	写真図版 179	礫石器 (7)	543
写真図版 158	土器 (33)	522	写真図版 180	礫石器 (8)・石製品	544
写真図版 159	土器 (34)	523	写真図版 181	金属製品 (1)	545
写真図版 160	土器 (35)	524	写真図版 182	金属製品 (2)	546
写真図版 161	土器 (36)	525	写真図版 183	金属製品 (3)	547
写真図版 162	土器 (37)	526	写真図版 184	金属製品 (4)・錢貨	548
写真図版 163	土器 (38)	527	写真図版 185	羽口 (1)	549
写真図版 164	土器 (39)	528	写真図版 186	羽口 (2)	550
写真図版 165	土器 (40)	529	写真図版 187	羽口 (3)	551
写真図版 166	土器 (41)・土製品 ・製塩土器 (1)	530	写真図版 188	羽口 (4)	552
写真図版 167	製塩土器 (2)	531	写真図版 189	陶磁器 (1)	553
			写真図版 190	陶磁器 (2)	554

## I 調査に至る経過

赤前Ⅲ遺跡は、「赤前地区（赤前上地区）東日本大震災復興団地工事」の宅地造成工事に伴い、その事業区内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

赤前地区防災集団移転促進事業は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により被災した住民の生命、身体及び財産を災害から保護するため、安全な高台に住居の集団の移転を促進するための事業である。事業対象地域である「赤前上地区」においては、宮古市と地域の被災住民間で協議を重ね、復興まちづくりに向けた合意形成となり、平成24年2月には国土交通大臣に協議し、その同意を得て、集団移転促進事業計画が策定された。

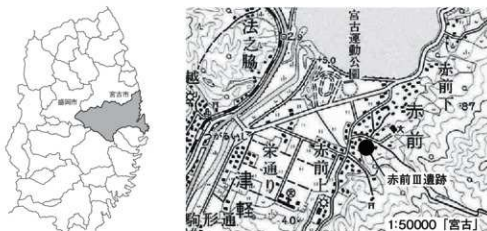
この間、事業の対象地域に係る埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。岩手県においては市町村が主体となる開発に関連する埋蔵文化財調査は市町村教育委員会が担当することとなっているが、復興関連調査の増大と調査員不足の状況から、県教育委員会が協議・調整を行い、本調査に関しては、（公財）岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、宮古市都市計画課から平成25年4月1日付都第76号「赤前地区防災集団移転促進事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成25年4月8日に試掘調査を実施し、工事に着手するには赤前Ⅲ遺跡の発掘調査が必要となる旨を宮古市教育委員会に回答し、宮古市教育委員会は平成25年5月31日付教文第186号「埋蔵文化財の発掘届出について（伝達）」により宮古市都市計画課に伝達してきた。

その結果を踏まえて当市都市計画課は岩手県教育委員会及び市教育委員会と協議し、調整を受けて平成25年8月16日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（宮古市都市整備部都市計画課）



第1図 遺跡の位置

## II 遺跡の立地と周辺の環境

### 1 地理的環境

#### (1) 遺跡の位置

赤前Ⅲ遺跡は、岩手県宮古市赤前第7地割6-1に位置する。宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央部に位置しており、現在の市域は平成17年から平成22年にかけての市町村合併によって旧宮古市に下閉伊郡の田老町・新里村・川井村が合併して誕生した。市域は西に盛岡市、北に岩泉町、南に山田町が隣接しており、東西約64km、南北約50km、総面積1,259.89km<sup>2</sup>を誇る県内最大面積の市であり、人口56,488人(平成25年10月1日現在)となっている。

赤前地区は、宮古市役所から南に直線距離7km程の距離にある。宮古湾奥部東岸となる重茂半島の付け根に位置し、十二神山と月山とを結ぶ丘陵の西側に所在する。北には宮古湾を臨み、西には宮古湾に注ぐ津軽石川が流れている。

遺跡は、赤前小学校から南西側約300mの地点に位置している。今回の調査区は、調査前には丘陵の頂部から中腹にかけて林が広がり、中腹は造成により棚状に削平され、畑として利用されていた。

#### (2) 遺跡周辺の地形と地質

宮古市は三陸海岸を擁しており、宮古湾以北では高位海岸段丘が発達し、以南には宮城県南の牡鹿半島にかけてリアス式海岸が広がる。

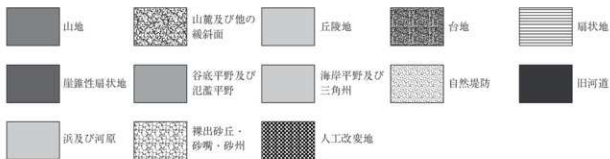
宮古湾はリアス式海岸に属し、西に接する盛岡市との境にある区界高原を水源とする閉伊川と、南の山田町豊間根を流れる豊間根川に端を発する津軽石川との2本の二級河川が流れ込んでいる。閉伊川は宮古市の市街地として利用されている氾濫平野の中を、津軽石川は津軽石平野の中を通過して宮古湾に注ぐ。

宮古湾口付近の地質は、新生代古第三紀に生成された浄土ヶ浜に見られる淡い黄色から白色をした流紋岩に代表される酸性火山岩類が岩盤であり、北部は侵食作用によって岩石海岸や海岸段丘となり、南部は北上山地の沈み込みによりリアス式海岸となっている。宮古湾内の周囲の平坦部は殆どが氾濫平野であり、その下層は白亜紀初期の花崗岩類で構成されている。赤前地区の地形は、津軽石川河口周辺の氾濫平野と東側に南北に連なる丘陵地及び丘陵地の際にある扇状地で構成されている。

調査区は花崗岩類の残積土を地山に、基本土層として0～100cm程の厚さの層が3層重なっている。遺跡は丘陵の斜面部に所在しており、斜面部は北西に向かって、標高34mから10mまで約10°の勾配で傾斜している。その南側を大きな沢が1本と、遺跡の周囲に小さな沢や沢筋がいくつか認められる。そのため、層の厚さはまばらであり、かつ造成によって斜面裾から中腹にかけて大きく切り崩されている箇所もある。

### 2 歴史的環境

宮古市に所在する遺跡は、平成24年12月末現在で644遺跡登録されている(岩手県遺跡情報検索システム「宮古地方振興局管内」による)。近年の一般国道45号宮古道事業等に伴い発掘調査件数や



第2図 地形分類図

遺跡数が増加している。

縄文時代に関しては、管ノ沢遺跡、小沢貝塚、八木沢野來遺跡（7）、高浜V下地神遺跡（19）の調査で早期の土器が確認されたが当該期の発掘件数は乏しく、今後の調査成果が期待される。縄文時代前期になると遺跡数は徐々に増加し、下大谷地Ⅱ遺跡（9）では集落跡が確認された。縄文時代中期に隆盛を迎えた宮古地域では、市指定史跡磯鶏蝦夷盛貝塚や上村貝塚等の大規模集落のほか、下大谷地Ⅰ・Ⅱ遺跡（8・9）や木戸井内Ⅳ遺跡、八木沢Ⅱ遺跡等で集落が営まれていた。後・晩期には遺跡数が減少し、八木沢Ⅱ遺跡で後期の堅穴住居が、糞の神Ⅲ遺跡で晩期の堅穴住居が確認された程度である。弥生時代に関しては、金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡（23・24）の調査で中期後半の弥生土器が出土しているが、宮古地域で当該期の遺構・遺物は上村貝塚で前期の集落が、木戸井内Ⅲ遺跡で後期の土器、管ノ沢遺跡で埋設土器が確認された程度に止まる。

奈良時代の遺跡としては群集墳から和同開珎や麻手刀が出土した長根Ⅰ遺跡や、小堀内Ⅲ遺跡（51）、沼里遺跡（32）、弘川Ⅰ遺跡（41）があり、中でも長根Ⅰ遺跡における特異な副葬品の出土は、律令制下での下閉伊地域における有力者の存在を窺わせる。平安時代になると遺跡数は増加し、鉄生産関連の施設が出現する。島田Ⅱ遺跡においては、製鉄・精錬・鍛錬という砂鉄から鉄を生産するまでの一連の工程が追える遺構や工房が確認され、県内屈指の製鉄関連遺跡と指摘されている。鉄生産に関する鍛冶炉は、鉄製品の生産が行われていたと考えられている八木沢Ⅱ遺跡や、堅穴住居から灰軸陶器が出土した隠里Ⅲ遺跡でも確認されている。この他に、鉄生産に関係する遺構である炭窟が確認された遺跡として八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡（3）や糞の神Ⅱ遺跡が挙げられる。

中世には閉伊川とその支流付近に河川等の自然地形を利用した城館が次々に構築され始める。宮古湾周辺だけでも8つの城館が確認され、このうち金浜館遺跡（22）では15・16世紀代の青磁や15世紀代の天目茶碗が出土している。その他、丘陵上に造られた八沢駒込Ⅰ遺跡（5）の中世墓や木戸井内Ⅳ遺跡の小鍛冶が行われた堅穴建物が中世の遺構として確認されている。近世の遺構に関しては八木沢駒込Ⅰ遺跡や木戸井内Ⅳ遺跡の畑跡や、八木沢駒込Ⅱ遺跡（6）の建物跡が挙げられるが、遺跡数は中世と比較して減少している。

### 3 過去の調査歴

赤前地区の発掘調査は過去に宮古市教育委員会によって行われており、赤前地区に所在する遺跡については遺跡範囲を山地の尾根の張り出しや小河川や沢で区切り、遺跡名を南側に位置するものからAK-01～06の順に略号が付されている。この中で、今回報告する赤前Ⅲ遺跡はAK-03にあたり、以下の表に記した通り過去2回の発掘調査が実施されている。

これまでに調査された遺跡と、検出した遺構数は以下の表の通りである。

遺跡名	調査時期	調査原因	主要検出遺構	報告書等
赤前Ⅳ八枚田	昭和54年	赤前小学校建設	平安時代堅穴住居3、縄文時代早期遺物包含層	「赤前遺跡群 第1次・第2次発掘調査報告書」(1984)
赤前Ⅴ	昭和57年	宅地造成	平安時代堅穴住居2、建物遺構1、土坑2	未報告
赤前Ⅰ牛小沢	昭和59年	個人住宅建築		未報告
赤前Ⅰ牛小沢	平成4年	個人住宅建築	土坑跡35、縄文時代遺物包含層	「赤前Ⅰ牛小沢遺跡～平成4年度発掘調査報告書～」(1995)
小堀内Ⅲ	平成5・6年	道路建設	堅穴住居5、製鉄炉1、鍛冶炉2	
赤前Ⅵ釜屋ヶ沢	平成5年	道路建設	遺物包含層	
赤前Ⅳ八枚田	平成7年	道路建設	縄文時代堅穴住居2、弥生時代堅穴住居2、奈良時代堅穴住居1、平安時代堅穴住居9、製鉄炉1、掘立柱建物1	「赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚田遺跡 赤前Ⅴ柳沢遺跡 赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡 小堀内Ⅲ遺跡～宮古市水産資源経石環境整備事業関係～」(1999)
赤前Ⅴ柳沢	平成6・7年	道路建設	奈良時代堅穴住居1、平安時代堅穴住居1、礎石3	
赤前Ⅲ	平成9年	道路建設	縄文時代堅穴住居1、平安時代堅穴住居2、製鉄炉1、鍛冶炉1、縄文時代前期遺物包含層	



第3図 周辺の遺跡



第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	八木沢古館	城郭跡	縄文・弥生・中世		大字八木沢	
2	八木沢中田	その他	近世	鉄貨	大字八木沢	宮澤文庫 67 集 (2006)
3	八木沢ウツノ沢Ⅰ	集落跡	縄文	埴土遺構、土坑跡、簡式穴葬、縄文土器、石器	大字八木沢第3地割、第7地割	宮澤文庫 551 集 (2010)
4	八木沢ウツノ沢Ⅱ	集落跡	縄文	簡式穴状遺構、土坑	大字八木沢第7地割、第8地割	宮澤文庫 528 集 (2008)
5	八木沢駒込Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、鉄滓	八木沢第8地割駒込	宮澤文庫 574 集 (2011)
6	八木沢駒込Ⅱ	散佈地	縄文	縄文土器 (前)	八木沢第8地割駒込	宮澤文庫 575 集 (2011)
7	八木沢野末	集落跡	縄文	縄文土器 (早・前)	八木沢第9地割駒込	宮澤文庫 511 集 (2008)・573 集 (2011)、旧八木沢野末
8	下大谷地Ⅰ	散佈地	縄文	縄文土器 (前・中期)	八木沢第9地割大谷地	宮澤文庫 511 集 (2008)
9	下大谷地Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器 (前・中期)	八木沢第9地割大谷地	
10	下大谷地Ⅲ	散佈地	縄文	縄文土器、鉄滓	八木沢第9地割大谷地	
11	下大谷地Ⅳ	散佈地	縄文	縄文土器	八木沢第9地割大谷地	
12	下大谷地Ⅴ	散佈地	鉄滓	鉄滓	八木沢第9地割大谷地	
13	曹の陣	散佈地	縄文	縄文土器 (前・中・後)	金浜第1地割西角地	宮澤文庫 511 集 (2008)
14	大谷地Ⅰ	散佈地	縄文		金浜第1地割	
15	高浜Ⅰ坂ノ下	散佈地	縄文	縄文土器	高浜第1地割坂ノ下	田取ノ下
16	高浜Ⅱ今ヶ洞	散佈地	縄文	縄文土器 (前・中・後)	高浜第2地割今ヶ洞	田今ヶ洞
17	高浜Ⅲ野野	散佈地	縄文	縄文土器	高浜第3地割野野	田野野
18	高浜Ⅳ横須賀	散佈地	縄文	縄文土器 (中・後)	高浜第5地割大沢、第4地割横須賀	
19	高浜Ⅴ下地埜	散佈地	縄文	縄文土器 (早・前・中)	高浜第6地割下地埜、地埜	
20	高浜Ⅵ地埜	散佈地	縄文	縄文土器 (中)	高浜第6地割下地埜、地埜	
21	金浜壱ヶ沢	新鉄跡	鉄滓	鉄滓	金浜第1地割壱ヶ沢、西角地	
22	金浜Ⅱ	城郭跡	中世・縄文	土器、帯器、空罎、フラスコ状ビレット	金浜第1地割西角地、壱ヶ沢	宮澤文庫 7 集 (1986)
23	金浜Ⅲ	散佈地	縄文・平安	縄文土器 (前～後)、石器、土師器	金浜第2地割壱ヶ沢、第3地割壱ヶ沢	宮澤文庫 553 集 (2010)
24	金浜Ⅳ	集落跡	古代	土師器	金浜第2地割壱ヶ沢、第3地割壱ヶ沢の上	宮澤文庫 553 集 (2010)
25	金浜Ⅴ	散佈地	縄文・古代	縄文土器、土師器	金浜第4地割壱ヶ沢	
26	金浜Ⅵ	散佈地	縄文	縄文土器	金浜第4地割壱ヶ沢	
27	金浜Ⅶ	散佈地	縄文	縄文土器 (中期)、鉄滓	金浜第5地割高成、第7地割新田原	宮澤文庫 630 集 (2014)
28	山崎	城郭跡	中世	土器、罎器、管	津軽石第3地割山崎、第1地割法ノ脇	
29	長尾Ⅰ	散佈地	縄文・古代	縄文土器 (後)、土師器、鉄滓	津軽石第3地割西角	
30	長尾Ⅱ	集落跡	古代	土師器、鉄滓	津軽石第3地割西角	
31	津軽石大森	散佈地	縄文	縄文土器 (中・後)	津軽石第4地割大森	宮澤文庫 641 集 (2015)
32	沼里	集落跡	縄文・奈良	縄文土器、土師器、簡式穴住居跡	津軽石第4地割沼里、第6地割沼里	宮澤文庫 26 年度調査
33	沼里前	城郭跡	中世	土器、罎器、管	津軽石第6地割沼里、第19地割穴田	
34	根舟沢穴田Ⅰ	散佈地	縄文・古代	縄文土器 (中期)、土師器	津軽石第19地割穴田	
35	根舟沢穴田Ⅱ	散佈地	縄文	縄文土器 (前～後)、石器、土師器	津軽石第19地割穴田	
36	根舟沢穴田Ⅲ	散佈地	縄文	縄文土器	津軽石第19地割穴田	
37	根舟沢穴田Ⅳ	散佈地	縄文	縄文土器 (前・中)	津軽石第19地割穴田	宮澤文庫 27 年度
38	根舟沢穴田Ⅴ	散佈地	縄文		津軽石第19地割穴田	
39	高平組	城郭跡	中世	土器、二の部、罎器、五輪帯	津軽石第9地割赤沼、第10地割内田原	
40	私川 (津軽石組)	城郭跡	中世	管、空罎、土器、二の部、三の部、罎器	津軽石第14地割私川、第19地割内田原	
41	私川Ⅰ	集落跡	縄文・奈良・中世	縄文土器 (前・中・後)、土師器	津軽石第14地割私川	宮澤文庫 29 集 (1991)
42	私川Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	津軽石第14地割私川	宮澤文庫 643 集 (2015)
43	私川Ⅲ	散佈地	縄文・古代	縄文土器 (前・中・後)、土師器、須恵器	津軽石第14地割私川	宮澤文庫 643 集 (2015)
44	曹竹内Ⅰ	散佈地	縄文・古代	縄文土器 (前・中・後)、土師器、須恵器	津軽石第16地割曹竹内	宮澤文庫 26・27 年度調査
45	堀内Ⅰ	散佈地	縄文	縄文土器	赤前第17地割堀内	
46	堀内Ⅱ	散佈地	縄文	縄文土器	赤前第16地割堀内	
47	堀内Ⅲ	散佈地	縄文	縄文土器 (前・中)	赤前第16地割堀内	
48	堀内Ⅳ	散佈地	縄文	縄文土器	赤前第15地割堀内	
49	小堀内Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・奈良	縄文土器 (前～後)、弥生土器、土師器、石環	赤前第14地割小堀内	
50	小堀内Ⅱ	散佈地	縄文	縄文土器	赤前第14地割小堀内	
51	小堀内Ⅲ	散佈地	縄文・奈良	縄文土器、土師器、須恵器	赤前第14地割小堀内	
52	赤前Ⅰ新築Ⅰ区	散佈地	縄文・古代・近世	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器	赤前第13地割新築Ⅰ区	宮澤文庫 53 集 (1999)
53	赤前Ⅰ柳沢	散佈地	縄文・古代	縄文土器、土師器	赤前第12地割柳沢	宮澤文庫 53 集 (1999)
54	赤前Ⅰ八枚田	集落跡	縄文・平安	縄文土器 (早～中)、簡式穴住居、竪口、鉄滓	赤前第11地割八枚田	宮澤文庫 5 集 (1984)、 宮澤文庫 53 集 (1999)
55	赤前Ⅱ	集落跡	縄文・平安	縄文土器 (前・中)、簡式穴住居、竪口、鉄滓	赤前第7地割柳沢、第10地割山崎	本番、宮澤文庫 5 集 (1984)、 宮澤文庫 53 集 (1999)
56	赤前Ⅲ	城郭跡	中世	土器、二の部、罎器、管	赤前第5地割柳田	
57	赤前Ⅰ牛子沢	散佈地	縄文	縄文土器 (前～後)	赤前第3地割牛子沢	宮澤文庫 42 集 (1980)
58	久保田	散佈地	縄文・古代	縄文土器、土師器	赤前第2地割久保田	
59	森畑	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	津軽石第12地割森畑	宮澤文庫 52 集 (1998)

## Ⅲ 調査の方法

### 1 野外調査の方法

#### (1) グリッドの設定(第4・5図)

調査区の設定は、遺跡の全範囲を網羅するように調査区内に平面直角座標系第X系(世界測地系)に従って基準点の設置を行った。具体的には、 $X = -45,900,000$ 、 $Y = 96,160,000$ の座標を基点として一辺100×100mの正方形グリッド(大グリッド)を設定、さらに各辺を25等分して4×4mの小グリッドを設定した。グリッドの呼称は、北西隅を基点として大グリッドは北から南へⅠ～Ⅱ、西から東へA～C、小グリッドは北から南へ1～25、西から東へa～yとし、小グリッドは「IA5b」などと呼称している。

調査区には平成25・26年度ともに業務委託によって基準点各2点と補点各4点を打設しており、それをもとにグリッドを設定した。また、調査の進行に応じて遺構実測用の補点を調査員が追加で打設している。基準点の座標は第2表の通りである。

#### (2) 精査の方法および遺構の記録

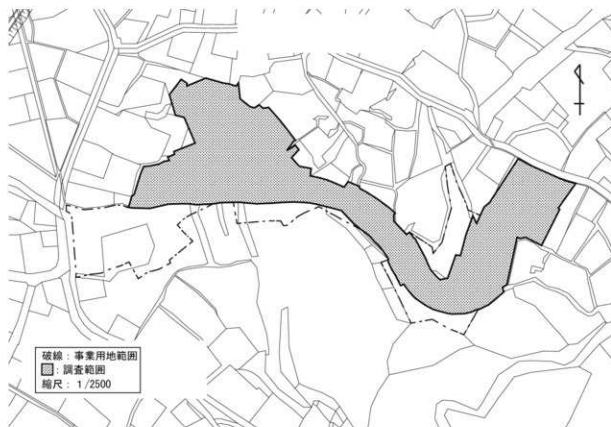
調査に先立って調査区内の雑物撤去を行い、続いて遺構の有無を確認するために数箇所にてトレンチを設定して人力で試掘を行った。試掘の結果、基本的にはⅠ層(表土・盛土)の直下で縄文～古代までの遺構検出面である真砂土層が確認されたことから、調査の迅速化と人力削り量の軽減を図るため、調査員監督の下、重機(バックホー)によって遺構検出面付近までⅠ層を掘削し、その後人力で遺構検出を行った。

検出した遺構には釘やスプレーを使ってマーキングし、さらに一部の遺構については検出状況の写真撮影を行った。遺構名については、平成25年度の調査では排土用地確保等の問題もあり調査区を複数のエリアに区分しながら調査を行った為、野外調査時の遺構名には検出区名と略号を組み合わせたもの(1区SI01等)を使用した。また、平成26年度は調査区の区分はしていないが前年度振替を行った遺構名との重複を避ける為、略号と500番台の番号を組み合わせたもの(SI501等)を使用した。なお、これらの遺構名は、最終的に室内整理の段階で第3表のように変更している。

遺構の掘り下げは4分法と2分法を使い分け、土層観察を行いながら進めた。掘り下げには主に移植鉋を使用し、遺物の集中する地点などでは竹筥なども使用している。遺構のプランや新旧関係が不明な場合は適宜サブトレンチを設定して層位確認を行っている。

遺構については、完掘、土層断面、遺物出土など状況に応じて写真撮影と実測図の作成を行っている。遺構の平面図は、実測用ソフト「遺構くん」(㈱Cubic社製)を用いて収集した数値データをもとにパソコン上で図化した。断面図は、簡易掘り方測量と業務委託によるデジタルカメラ画像を用いた写真解析図化作業によって作成している。また、断面図については一部「遺構くん」を用いて作成したものもある。

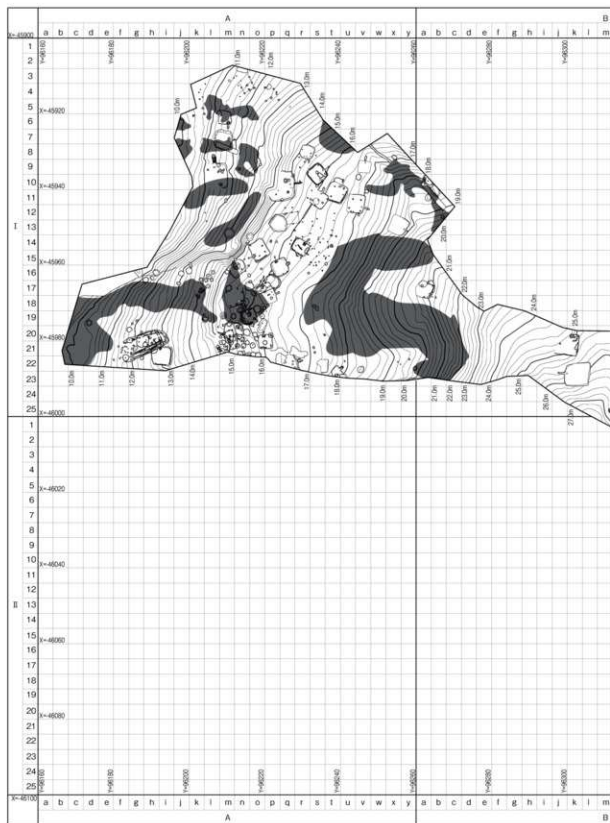
遺構の写真撮影には、6×7cm判カメラ(モノクロ)とデジタルカメラ(キャノン社製一眼レフタイプ、2020万画素)を使用した。6×7cm判は記録保存、デジタルカメラは報告書作成及び広報・普及を目的として撮影しているが、基本的に6×7cm判で撮影したものについてはデジタルカメラで



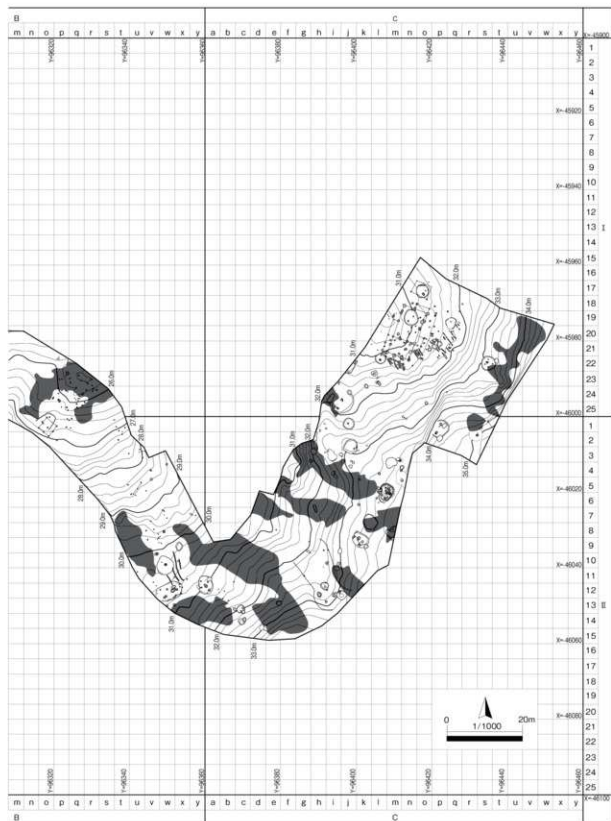
第4図 調査区的位置

第2表 基準点一覧

点名	グリッド	X	Y	標高 (m)	打設年度
T3-1	I A 5 k	-45,918.351	96,202.000	10.639	平成 25 年度
T3-2	I A 20 k	-45,978.591	96,201.454	14.445	平成 25 年度
補 1	I A 8 k	-45,928.086	96,201.065	10.475	平成 25 年度
補 2	I A 20 d	-45,977.585	96,174.598	11.025	平成 25 年度
補 3	I A 23 m	-45,989.136	96,210.690	15.978	平成 25 年度
補 4	I A 16 u	-45,963.987	96,241.920	18.664	平成 25 年度
補 5	I A 8 x	-45,930.874	96,252.184	17.060	平成 25 年度
補 6	I B 12 a	-45,944.814	96,262.572	19.496	平成 25 年度
補 7	I A 12 r	-45,947.723	96,231.360	16.231	平成 25 年度
補 8	I A 9 y	-45,939.864	96,259.872	18.573	平成 25 年度
補 9	I A 11 l	-45,943.497	96,207.346	11.930	平成 25 年度
補 10	I A 17 y	-45,967.887	96,256.208	20.303	平成 25 年度
補 11	I A 20 r	-45,978.033	96,229.708	17.261	平成 25 年度
補 12	I B 21 f	-45,982.158	96,282.777	24.181	平成 25 年度
補 13	I B 22 m	-45,984.560	96,310.296	26.124	平成 25 年度
G1	I B 22 o	-45,987.837	96,318.990	26.212	平成 26 年度
G2	I B 25 m	-45,996.663	96,308.703	27.132	平成 26 年度
G3	I C 24 s	-45,993.650	96,435.640	33.945	平成 26 年度
G4	II C 1 q	-46,003.669	96,427.003	34.821	平成 26 年度
G5	II B 13 x	-46,048.014	96,354.331	31.093	平成 26 年度
G6	II C 10 j	-46,037.211	96,399.432	33.560	平成 26 年度
補 14	II B 6 r	-46,027.868	96,398.548	33.392	平成 26 年度
補 15	II B 5 r	-46,018.993	96,328.354	28.987	平成 26 年度
補 16	II C 7 j	-46,027.868	96,398.548	33.392	平成 26 年度
補 17	II C 3 m	-46,010.700	96,408.644	33.728	平成 26 年度
補 18	I C 24 m	-45,994.088	96,411.537	32.465	平成 26 年度
補 19	II C 3 j	-46,011.485	96,399.066	33.432	平成 26 年度
補 20	I C 24 i	-46,002.394	96,395.908	32.425	平成 26 年度
補 21	I C 25 i	-45,999.650	96,393.404	32.579	平成 26 年度
補 22	I C 22 k	-45,986.653	96,401.463	31.179	平成 26 年度
補 23	I C 21 k	-45,983.411	96,401.92	30.962	平成 26 年度



第5図 遺構配置図



第3表 遺構名変更一覧(1)

竪穴建物	
新	旧
SI01	← 2区 SI01-05
SI02	← 3区 SI24
SI03	← 3区 SI23
SI04	← 3区 SI25
SI05	← 3区 SX01
SI06	← 2区 SI02
SI07	← 2区 SI04
SI08	← 5区 SI01
SI09	← 1区 SI01
SI10	← 1区 SI02
SI11	← 3区 SI01
SI12	← 3区 SI03
SI13	← 3区 SI04
SI14	← 3区 SI05
SI15	← 3区 SI06
SI16	← 3区 SI07
SI17	← 3区 SI08
SI18	← 3区 SI08B
SI19	← 3区 SI09
SI20	← 3区 SI10
SI21	← 3区 SI18
SI22	← 3区 SI11
SI23	← 3区 SI12
SI24	← 3区 SI13
SI25	← 3区 SI15
SI26	← 3区 SI16
SI27	← 3区 SI20
SI28	← 3区 SI22
SI29	← 3区 SX02
SI30	← 3区 SI17
SI31	← 3区 SI19
SI32	← 4区 SI01
SI33	← 3区 SI21 古
SI34	← 3区 SI21 新
SI35	← 3区 SI02
SI36	← 3区 SI02B
SI37	← 3区 SI14
SI38	← 3区 SI14B
SI39	← 3区 SI14C

SI40	← SX502
SI41	← SI509
SI42	← SI508
SI43	← SI511
SI44	← SI513
SI45	← SI512
SI46	← SX507
SI47	← SX504A
SI48	← SX504B
SI49	← SI519
SI50	← SI520
SI51	← SX509
SI52	← SI518
SI53	← SI521
SI54	← SI503
SI55	← SI510
SI56	← SI505
SI57	← SI506
SI58	← SI517
SI59	← SI515
SI60	← SI516
SI61	← SI514
SI62	← SI507
SI63	← SI501
SI64	← SI502

土坑	
新	旧
SK78	← 3区 SK28
SK79	← 3区 SK31
SK80	← 3区 SK25
SK81	← 3区 SK15
SK82	← 3区 SK14
SK83	← 3区 SK30
SK84	← 3区 SK29
SK85	← 3区 SI14SK01
SK86	← 3区 SK24
SK87	← 3区 SI11SK03
SK88	← 3区 SI11SK01
SK89	← 3区 SI11SK02
SK90	← 3区 SK64

SK91	← 3区 SK65
SK92	← 3区 SK47
SK93	← 3区 SK68
SK94	← 3区 SX02SK01
SK95	← 3区 SK48
SK96	← 3区 SK62
SK97	← 3区 SK38
SK98	← 4区 SK01
SK99	← 2区 SK12
SK100	← 2区 SK14
SK101	← 2区 SK16
SK102	← 2区 SK17
SK103	← 2区 SK19
SK104	← SK501
SK105	← SK502
SK106	← SK504
SK107	← SK503
SK108	← SK529
SK109	← SK506
SK110	← SK505
SK111	← SK521
SK112	← SK522
SK113	← SK542
SK114	← SK508
SK115	← SK507
SK116	← SK515
SK117	← SK516
SK118	← SK526
SK119	← SK541
SK120	← SK540
SK121	← SK525
SK122	← SK530
SK123	← SK528
SK124	← SK545
SK125	← SK546
SK126	← SK552
SK127	← SK547
SK128	← SK544
SK129	← SK534
SK130	← SK535
SK131	← SK533

第3表 遺構名変更一覧(2)

SK132	←	SK532
SK133	←	SK554
SK134	←	SK553
SK135	←	SK551
SK136	←	SK538
SK137	←	SK539
SK138	←	SK536
SK139	←	SK531
SK140	←	SK537
SK141	←	SK556
SK142	←	SK555
SK143	←	SK549
SK144	←	SK550
SK145	←	SK548
SK146	←	SK518
SK147	←	SK519
SK148	←	SK509
SK149	←	SK513
SK150	←	SP658
SK151	←	SK510
SK152	←	SK557
SK153	←	SK523
SK154	←	SK524

焼土		
新	←	旧
SF01	←	2区 SF01
SF02	←	3区 SF02
SF03	←	3区 SF03
SF04	←	3区 SF01
SF05	←	SF505
SF06	←	SF504
SF07	←	SF502
SF08	←	SF503
SF09	←	SF501
SF10	←	SF517
SF11	←	SF510
SF12	←	SF519
SF13	←	SF524
SF14	←	SF513
SF15	←	SF528

SF16	←	SF509
SF17	←	SF518
SF18	←	SF532
SF19	←	SF531
SF20	←	SF530
SF21	←	SF523
SF22	←	SF507
SF23	←	SF520
SF24	←	SF521
SF25	←	SF512
SF26	←	SF511
SF27	←	SF529
SF28	←	SF515
SF29	←	SF514

掘立柱建物		
新	←	旧
SB01	←	SB01
SB02	←	SB02
SB03	←	SB501
SB04	←	SB502
SB05	←	SB503
SB06	←	SB504

棚列		
新	←	旧
SA01	←	SA501
SA02	←	SA502
SA03	←	SA503
SA04	←	SA504

鉄生産関連炉		
新	←	旧
SXW01	←	3区 SI08SH01
SXW02	←	3区 SH01
SXW03	←	SX503

溝		
新	←	旧
SD01	←	3区 SD02
SD02	←	3区 SD03

SD03	←	3区 SD04
SD04	←	4区 SX01
SD05	←	SD501
SD06	←	SD502
SD07	←	SD503
SD08	←	SD504

石囲炉		
新	←	旧
SH01	←	2区 SH01
SH02	←	SH502

円形周溝		
新	←	旧
SZ01	←	3区 SD01

性格不明遺構		
新	←	旧
SX01	←	2区 SX01
SX02	←	2区 SX02
SX03	←	2区 SX03
SX04	←	SX505
SX05	←	SX506
SX06	←	SX508
SX07	←	4区 SK02
SX08	←	4区 SK03
SX09	←	4区 SK04
SX10	←	SX510
SX11	←	SX511
SX12	←	SX512
SX13	←	SX513
SX14	←	SX514
SX15	←	SX515
SX16	←	SX516
SX17	←	SX517
SX18	←	SX518
SX19	←	SX519
SX20	←	SX520

\*柱穴は第7表を参照



も同一カットの撮影を行っている。

### (3) 広報・普及啓発活動

平成 25 年度は 11 月 9 日に現地説明会、平成 26 年度は 7 月 15 日に現地公開を開催した。周辺住民を中心に平成 25 年度は約 140 名、平成 26 年度は約 40 名に参加頂いた。また、平成 25 年度分の調査については平成 26 年 3 月 9 日の「平成 25 年度宮古市遺跡調査報告会」でスライドを使用した調査成果報告も行っている。

## 2 調査経過

2 箇年にわたる野外調査の経過は以下の通りである。

平成 25 年度	8 月 19 日	資材搬入し調査開始
	8 月 22 日	1・2 区試掘（～8 月 29 日）
	9 月 2 日	1・2 区調査開始（1 区：～9 月 30 日、2 区：～11 月 14 日）
	9 月 9 日	基準点測量 1 回目（鈴木測量設計）
	9 月 25 日	3 区（西側部分）調査開始
	10 月 1 日	部分終了確認（1 区引き渡し）
	10 月 7 日	4 区調査開始（～10 月 30 日）
	10 月 30 日	5 区調査開始（～11 月 27 日）
	10 月 31 日	3 区内の水道管の取り扱いに関する協議（7 日に委託者側で撤去作業）
	11 月 9 日	現地説明会
	11 月 11 日	3 区（東側斜面部）調査開始
	11 月 18 日	3 区（南側部分）調査開始
	11 月 21 日	航空写真撮影
	11 月 27 日	次年度調査区表土除去開始
	12 月 2 日	次年度調査区検出・養生（～12 月 19 日）
12 月 16 日	終了確認（3 区調査終了）	
12 月 20 日	資材撤収、調査終了	
平成 26 年度	4 月 8 日	資材搬入し野外調査再開
	4 月 17 日	基準点測量 1 回目（釜石測量設計）
	5 月 19 日	部分終了確認（調査区西側引き渡し）
	5 月 28 日	基準点測量 2 回目
	7 月 10 日	部分終了確認（調査区中央西側引き渡し）
	7 月 12 日	航空写真撮影
	7 月 15 日	現地公開
	8 月 1 日	部分終了確認（調査区東側引き渡し）
	8 月 28 日	終了確認
	9 月 12 日	資材撤収、調査終了

### 3 室内整理の方法

#### (1) 遺 構

今回の調査においては一部の遺構について写真解析図化作業を業務委託しており、調査時には①「遺構くん」で作成したデジタルデータ、②簡易造り方測量による断面図、③デジタルカメラ画像から解析したデジタルデータの3者が混在する状況であった。平面図については原則として全て①のデータであるため、遺構図面の合成作業（修正図の作成）については断面図のデータ種別に応じて以下の通り整理を行っている。

##### ①簡易造り方測量の場合

断面図は実測図を等倍でスキャニング（解像度 200～300dpi）して Adobe Illustrator CS4・6 でトレースを行う。「遺構くん」データは EPS 形式に変換し、トレースした断面図と同縮尺で同じ画面上に貼り付ける。両者のセクションポイントの位置を揃えて調整を行い、修正図を作成する。

##### ②写真解析によるデジタルデータの場合

委託先に「遺構くん」で作成したデジタルデータを DXF 形式で送付し、一枚の画像の中に①と同じく平面図と断面図が含まれている図面の作成を依頼する。作成された図面は紙ベースに打ち出し、原稿の校正と同じ要領で指示書きをして調整を行う。

なお、修正図が完成した後はテキストデータとして入力した土層註記を同一ファイル上に貼り付け、さらに当センターの版面（縦 24.0 × 横 16.0cm）に収まるように「遺構くん」ファイル上でレイアウトを行っている。以上の工程を経て作成した図面は全て Illustrator を用いて網掛けなどの処理と配置の調整を行って全体の統一を図り、AI 形式で保存したファイルを完成品として印刷業者に納入した。

遺構写真図版については、野外調査時にデジタル一眼レフカメラで撮影した画像（RAW データ）を JPEG 形式に変換し、一部画像のトリミングを行った後に Adobe In Design CS6 を用いて割付を行った。印刷時には In Design で作成した割付データと画像の JPEG データを印刷業者に納入し、色調整は校正時に行っている。

#### (2) 遺 物

遺物の処理は、平成 25・26 年とも土器類の洗浄から開始した。遺物は水洗・乾燥後に土器（縄文土器・土師器・須恵器・製塩土器）、鉄生産関連遺物（鉄滓・羽口・炉壁）、石器・石製品、金属製品、陶磁器類に選別し、袋番号を付けながら破片数と重量を計測した。その後、土器については遺跡名と袋番号のみをそれぞれの破片に註記した。註記の後には接合・復元作業を行い、第一に遺構内出土のもので器形の復元が可能なのを選別、続いて遺構外出土のもので縄文土器については器形及び文様の特徴があるもの、土師器・須恵器については回転復元実測が可能なものを中心に登録を行い、それらについて実測・拓本を行った。

鉄生産関連遺物については種別ごとに重量を計測したのち、鉄滓については形状をもとに分類を行った。分類基準については第 IV 章に記載している。

石器・石製品については全点登録した後代表的なものについて実測を行った。礫石器は明確な使用痕があるものを中心に選別・登録し、代表的なものについて実測を行った。

金属製品のうち、鉄製品については X 線透過写真撮影を行って遺存状況を確認しながら錆落とし

実測を行った。また、一部のものについては破損防止のために保存処理作業を委託している。銭貨は  
 全点を登録し、拓本と写真撮影を行った。

陶磁器は出土量が少ないため、代表的なものについて実測及び写真撮影を行った。

実測を行ったものについては全てトレースを行い、版下を組んで遺物図版を作成した。

## 4 凡 例

遺構・遺物実測図の縮尺は各図版中に付したスケールの通りである。遺構図版については平面図・  
 断面図とも同一遺構については同縮尺を基本としているが、遺構の規模に応じて両者の縮尺を変えて  
 いるものもある。また、ベルトを境界とした区画設定を行って遺物の取り上げを行った遺構について  
 は各図版中に区画名を付しているものもある。遺構図版の網掛処理及び土器・石器の表現方法は凡例  
 図、土器・石器以外の遺物で判例が必要なものは各図版中に提示している。

遺物写真図版は約2/3～1/3を基本としているが、器形・文様の特徴が認識できる程度まで拡  
 大したものもある。

### 図版凡例

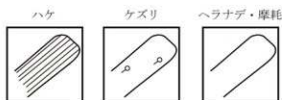
#### 遺構図版



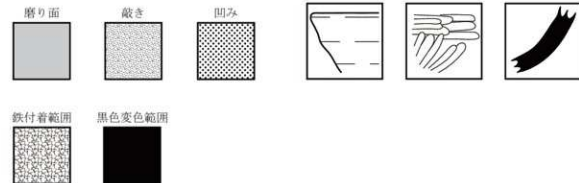
#### 遺物図版（土器）



#### 器面調整の表現



#### 遺物図版（石器）



## IV 遺物の分類

今回の発掘調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、古代の土器（土師器・須恵器・製塩土器）、石器（剥片石器・礫石器）、金属製品、陶磁器、土製品、石製品、骨角器、鉄生産関連遺物（羽口・鉄滓・炉壁）、動物遺存体など多様である。以下では、出土量の多かった土器・石器・金属製品・鉄生産関連遺物について分類基準を示す。

### 1 縄文土器

今回の調査において最も出土量が多く、総量で582,607g出土している。確実に存続する時期としては前期初頭～中期末葉の属するものがあるが、主体となるものは前期末葉～中期初頭に属するものである。これらの土器は基本的には大木式土器の範疇に含まれるものであり、今回は遺構の変遷を考えるうえで大木式土器の型式分類を考慮して以下の通りグループ分けをした。なお、第V章では一部のものを除いて個別の特徴の記載はしていないが、グループの比定が可能なものについては第8表に掲載しており（不明なものは「-」とした）、さらに第VII章で各群の代表例について集成図を作成しているので具体例についてはそちらを参照されたい（第205・206図）。

#### 第I群…前期初頭～前葉

大木1～2式に比定されるグループであり、深鉢形の器形のみ確認できる。大木1式に属する非結束羽状縄文が横方向に施文されるもの、大木2式に属する口縁部に結節回転文または隆帯貼付+刺突列点文、平行沈線文を施すものがある。口縁部形態は平縁のものと波状口縁のものがあり、体部の施文は横方向の羽状縄文や木目状燃糸文がある。なお、147は繊維を多く含んだ胎土で無文であり、早期末に属する可能性もある。

#### 第II群…前期中葉

大木3式に比定されるグループであるが、全形が判明する資料は無い。沈線による円文、細沈線貼付+キザミ、沈線+爪形文などが施文される。

#### 第III群…前期中葉～後葉

大木4～5式に比定されるグループであるが、全形が判明する資料は無い。粘土紐による格子文や山形文、円形文やC字状文の貼付文、口縁部隆帯+指頭押圧が施される。器形的には体部が膨らむもの、直線的に立ち上がるものがあり、口縁部は頸部を持たず体部から直線的に立ち上がる平縁のものと直線的に大きく外方に開くものがある。

#### 第IV群…前期末葉～中期前葉

大木6～7式に比定されるグループで、深鉢形の器形が主体である。深鉢形の体部形状は、長胴形で体部中央が膨らむものと底部から直線的に立ち上がるもの、球形のものがある。浅鉢形もあるが、全形が確認できるものは無い。口縁部には円形や山形の貼付文、篋状工具や半截竹管を使用した平行沈線文や山形文・鋸歯状文が施される。口縁部は平縁のものと4単位の波状口縁のものとがある。体部には縦位または横位に綾線文が施されるものが多い。また、円筒土器（下層d～上層a式）に属する深鉢も出土している。これらの土器は型的には大木式土器とは異なるが、時期的には併行関係にあることからこの群に含めている。

### 第V群…中期中葉

大木8式に比定されるグループであり、深鉢形の器形のみ確認できる。深鉢形の体部形状は、いわゆるキャリバー形のものほとんどである。口縁部及び体部には、粘土紐貼付または沈線による渦巻文や波状文が施される。

### 第VI群…中期後葉～末葉

大木9～10式に比定されるグループであり、深鉢形の器形のみ確認できる。第V群と同様、キャリバー形の器形がほとんどであるが、第V群のものより体部中位付近が屈曲する。区画縄文帯と素文帯で構成され、区画縄文帯は充填縄文のものと磨消縄文のものがあるが、磨消縄文が主体となる。文様は、大木9式に属する「逆U字」状、ステッキ状、楕円文の素文帯をもつものと、大木10式に属する「C」・「S」・「U」等アルファベット状の素文帯を持つものがある。

## 2 弥生土器

21点掲載したが、全形がわかるものが無いため細分を行っていない。出土地点はSF12周辺とII B7～9 u～wグリッドに限られる。砂沢式に属する破片を2点(600・677)、中期後半に属すると考えられる壺の破片を18点(439～442・594～599・601・675～678)、交互刺突文が施される赤穴式に属する壺の破片を1点(619)掲載した。

## 3 古代の土器

胎土と調整の特徴から、土師器・須恵器・製塩土器に分類することができる。

### (1) 土師器

坏・高台坏・甕が出土しており、以下の通り分類した。

坏 底部切り離し技法は回転糸切りである。黒色処理の有無によって大分類を行っている。

I類…内面黒色処理

II類…内面非黒色処理

III類…内外面黒色処理

また、口縁部が直線のまたはわずかに内湾するものをA類、外反するものをB類とした。

高台坏 大分類については坏と同様であり、高台部の高さが1cm以上のものをa類、1cm以下のものをb類とした。

甕 全て非輻輪成形のものである。口縁部及び頸部の形状によって細分を行っている。

I類…口縁部が「く」の字状に斜め上方に立ち上がる単純口縁のもの

II類…口縁部がほぼ垂直またはわずかに内湾する単純口縁のもの

III類…頸部に段を持ち、口縁部が受け口状になるもの

### (2) 須恵器

壺・瓶類と大甕が出土しているが、復原可能な個体が少ないため今回は細分類を行わない。

### (3) 製塩土器

土師器・須恵器と異なり、色調が橙色で厚手の土器片を製塩土器とした。古代の竈穴建物であるS I 17と18のみで出土しており、出土状況から古代に属すると判断した。

## 4 石器・石製品

剥片石器と礫石器を合わせて432点、石製品は2点登録している。細分類は出土量の多い剥片石器・磨製石斧で行っており、その他は礫石器・砥石・石製品に分類して記述を行う。

### (1) 剥片石器

石鏃・石匙・石錐・石篋・石槍・石斧?・削器・二次加工のある剥片・石核が出土しており、119点を掲載した。この中で、出土量の多い石鏃と石匙については細分類を行っている。使用された石材には、材質は頁岩(珪質頁岩)・瑪瑙・リパライトがある。

**石鏃** 平面形が左右対称で、扁平かつ全長が5cm未満のものを石鏃とした。67点掲載しており、基部形状から以下のように分類した。

I類…無茎平基鏃。茎部をもたず基部が平坦なもので、平面形が長三角形のもの・長五角形のもの・三角形のものがある。18点掲載した。

II類…無茎凹基鏃。茎部をもたず基部に抉りが入るもので、平面形は三角形である。出土量が最も多い形態で、43点掲載した。

III類…有茎鏃。尖頭部と茎部の境界は凸状で、尖頭部平面形は、三角形・柳葉形・長三角形がある。可能性のあるものを含めて5点掲載した。

IV類…尖基鏃。平面形が柳葉形で、尖頭部と基部の境界は不明瞭である。形態的には尖頭器と類似するが、全長が5cm未満であることから石鏃に含めた。1点(S46)のみの出土である。

**石匙** 摘み状の突起を一端に有し、二次加工によって片面あるいは両面に刃部を作出したものを石匙とした。15点掲載しており、平面形状から摘み部を上にして置き、抉り部が水平になるように設置した場合、形状が斜めに長くなるもの(I類)と縦長になるもの(II類)に分類した。

**石錐** 摘み部が尖頭状で平面形は石鏃に類似するが、石鏃よりも厚みがあるもの。6点掲載した。

**石篋** ほぼ左右対称で、上端部が狭く下端部が広がっているもの。3点掲載した。

**石槍** 平面形が左右対称で、全長が5cm以上のものを石槍とした。先端部に二次加工を施しており、鋭く尖らせたものである。9点掲載した。

**石斧** 平面形が撥形または短冊形で、先端に刃部が作り出されているもの。なお、今回の調査では刃部付近のみの破片であるS40のみであり、可能性があるものとして提示した。

**削器** 定形した形状をもたないが、刃部が作り出されているもの。10点掲載した。

**二次加工のある剥片** 剥片に二次加工を施して刃部を造り出しているもの。2点掲載した。

### (2) 磨製石斧

未製品も含めて21点掲載しており、形状と研磨の状況から2類に分類した。使用された石材には、蛇紋岩・砂岩・頁岩・花崗岩がある。

I類…いわゆる「定角式磨製石斧」である。両側縁及び頭部が研磨され、正裏両面と側面の間に

稜をもち、断面形が隅丸長方形となる。可能性があるものを含めて14点掲載した。

- Ⅱ類…いわゆる「太型蛤刃石斧」である。断面形が楕円形で、頭部が細く直線的なものである。7点掲載した。なお、未成品で本類としたS130についてはⅠ類の未成品の可能性もある。

### (3) 礫石器

礫の表面に何らかの使用痕が認められるものを礫石器とした。縄文時代のもので古代のものがある。使用痕が微弱なものが多く自然礫との判別が困難であったが、108点を掲載した。使用痕及び形状から縄文時代のもので、磨石・敲石・敲磨器・凹石・台石・石皿・半円状扁平打製石器・石彈・浮子・石冠・石錘?に分類した。

石冠は、SK 82から1点可能性があるものが出土している(S198)。側面に磨り面が認められることから磨石の可能性もあるが、北海道式石冠に類似しており石冠の可能性のあるものとして提示した。平面形が半円形の素材の側縁を打ち欠いて成形されたものを半円状扁平打製石器とした。S107から1点(S137)、SK 67から1点(S194)出土している。古代の石器としては台石と金床石がある。

### (4) 砥石

四角柱状あるいは四角錐状のもので12点掲載した。いずれも凝灰岩製である。形状・出土状況から縄文時代のもので古代のものがあると考えられる。

### (5) 石製品

玉と挾耳飾が各1点出土している。いずれも縄文時代に属するものである。

## 5 金属製品

### (1) 鉄製品

刀子・鎌・釘・紡錘車・鎌・鋤先・鋸・銭貨が出土している。このうち、出土量が多い刀子・鎌・釘については分類を行ったが、紡錘車は全て同一の形状であり細分はしていない。

刀子 関部の形状によって2類に分類している。

1類…刃部側のみに関部をもつ

2類…刃部・棟部の両側に関部をもつ

鎌 平面形によって柳葉式・雁又式・無頸三角形・長頸柳葉式が確認できる。

釘 長さが10cm以上で幅広のものを特に舟釘とした。

### (2) 銅製品

小柄・銭貨・煙管・釣鐘の小型品が出土している。いずれも少量の出土であることから今回は細分類を行っていない。このうち、小柄と銭貨を掲載した。

## 6 鉄生産関連遺物

羽口・鉄滓・炉壁を合わせて119kg出土している。これら鉄生産関連遺物については、第2節で

述べている通り、まず肉眼分類で鉄滓・羽口・炉壁に分類し、羽口は個体毎に登録、鉄滓についてはさらに磁石とメタルチェッカーを使用して細分を行った。なお、今回の調査では鉄鉄に該当するものは出土していない。

### (1) 羽 口

中コンテナで約3箱分出土している。そのうち内外径や装着角度など羽口の使用状況がわかる個体78点を登録した。

### (2) 鉄 滓

鉄滓は、下記の3つの工程を経て分類を行っている。まず第1工程であるが、これは洗浄後に行う肉眼分類であり、この時点では鉄滓・羽口・炉壁に分類する。第1工程で分類した鉄滓については、第2・3工程で強力磁石とメタルチェッカーを用いて磁着の有無や磁着度の違いによる分類を行う。なお、第2工程以降の鉄滓分類に際し用いた用語は、その形状や含有する鉄分の有無を分類者が客観的に表現したものをいい、鉄生産における各工程を意識した用語（流動滓や塊形滓など）は使用していない。これは鉄滓の各出土地点において、異なる工程で形成された鉄滓が混在している可能性を考慮したためである。



- ・鉄塊系遺物…強力磁石で強い磁着が有り、メタルチェッカーで強反応があったもの
- ・含鉄鉄滓…強力磁石で磁着が有り、メタルチェッカーで弱反応があったもの
- ・炉内滓…磁着が無く、炉内に留まって形成された鉄滓で塊状のもの。とくに炉の底部で形成され底面付近の形状が反映されたものは炉底滓とする。
- ・流状滓…磁着が無く、炉外に流れ出た際の状況が形状に反映されたもの

### (3) 炉 壁

大半が鉄生産関連炉であるS X W 01とS I 37SXW01及びその周辺からの出土である。ほとんどのものにスサや長石、石英などの混和物が確認される。



## V 検出遺構・遺物

### 1 調査概要

#### (1) 遺 構

調査区は遺跡範囲の東側、丘陵の西側緩斜面部に位置する。東西方向に長い調査区であり、ほぼ中央を境に西側を平成25年度に、東側を平成26年度に調査を行った。平成25年度調査区は遺跡範囲の西端にあたり、調査区は東から西へ緩やかに下っている。平成26年度調査区は遺跡範囲の南端にあたり、やや西側と南側を流れる沢の方向へ傾斜しているもののおおむね平坦である。標高は、調査区の西端が10m、東端が34.8mあり、傾斜はそれほど急ではないものの約25m程度の比高差がある。基本層序は後述の通りであるが、I層の直下が遺構検出面の主体となるV層黄色土の下層にあたる巨礫を含む層となる範囲（礫集中範囲と呼称、第5図の網掛け部分）が広範囲にわたっている。この範囲では遺構はほとんど検出されておらず、またこの範囲内で検出された遺構は床面にも礫が露出している状況であった。一方で、礫集中範囲以外では特に調査区南西側では縄文～古代の遺構が密集して分布している。この範囲では部分的に礫が露出する部分もあるが、基本的にはV層の砂質土が主体であり、掘削に適していたことから多くの遺構が構築されたものと考えられる。

調査対象面積は、2箇年の総計12,527㎡（平成25年度5,900㎡、平成26年度6,627㎡、以下H25・H26とする）である。2箇年合わせた遺構の検出数は、堅穴建物64棟（H25：39棟、H26：25棟）、炉2基（H25：1基、H26：1基）、焼土29基（H25：4基、H26：25基）、鉄生産関連炉3基（H25：2基、H26：1基）、土坑154基（H25：103基、H26：51基）、円形周溝1基（H25：1基）、溝8条（H25：4条、H26：4条）、掘立柱建物6棟（H25：2棟、H26：4棟）、櫛列4条（H26：4条）、性格不明遺構20基（H25：6基、H26：14基）、柱穴380個（H25：144個、H26：236個）、遺物包含層1箇所（H25：1箇所）である。この中には縄文から近世までの遺構が含まれおり個別の性格や年代については以下で述べるが、ここでは時代毎の分布傾向についてみておく。

まず縄文時代の遺構であるが、東西に長い調査区のはほぼ全域で検出されている。しかし、前述の通り調査区中央に広く分布する礫集中範囲内では密度は低く、礫の露出しない範囲に遺構は構築されている。なかでも平成25年度調査区の南区にあたる調査区南西側と平成26年度調査区の東区にあたる調査区東側は遺構密度が高い地点であり、特に調査区南西側は堅穴建物と貯蔵穴、陥し穴が複数重複して構築されている。また、縄文時代の遺構は前期前葉～中期末に属するものが主体となるが、時期によって占地に違いがある。前期前葉～中期前葉（縄文土器分類第Ⅰ～Ⅳ群）の遺構は調査区の西側の標高の低い地点に分布し、狭い範囲の中で重複しながら構築されているが、一方で中期前葉～末葉（縄文土器分類第Ⅴ・Ⅵ群）の遺構は調査区西側には無く、調査区中央から東側にかけての標高の高い地点に一部重複しながらも間隔をあけて分布する傾向にある。調査区西側には明確に中期後葉以降に属するといえる遺構が検出されていないことから、本遺跡で生活を営んでいた集団は当初標高の低い地点で生活していたものの、何らかの要因によって徐々に標高の高い地点へ移動していったものと考えられる。

古代の遺構は調査区の中央から西側の標高12～26mに分布する傾向にある。堅穴建物から工房へと建て替えを行っているSⅠ35・36やSⅠ37～39のような同一地点での建て替えを除くとSⅠ

15・16のみが重複関係にあり、その他は1～2グリッド程度の間隔を置いて構築されている。最も標高の高い地点に堅穴建物S I 63・64が立地する。今回検出された堅穴建物はいずれも9世紀中葉～10世紀前葉に属するものと考えられるもので、かつほとんどのものが重複することなく構築されている。一方で、調査区中央から東側については鉄生産関連炉であるS X W 03が存在するが、その他の遺構は検出できなかった。ただし、表土中から土師器の破片も出土していることから調査区外のさらに東側や北側に遺構が存在している可能性がある。

中～近世の遺構としては掘立柱建物や墓坑があるが、縄文時代や古代の遺構に比べると数は少なく分布も散漫である。掘立柱建物は最も規模の大きいS B 05が調査区東端付近に位置しており、さらに周辺にはS B 02・06や近世に属する可能性がある柵列や畝間状遺構が検出されていることから、近世段階においてはこの範囲が中心であったと考えられる。墓坑はI A 16・17 1グリッドに分布する5基のみであるが、このうち2基からは人骨が出土している。以上のように、本遺跡では調査区全域で遺構が検出されているが、遺構の分布傾向は時代毎に異なる。これは時代毎に生活に適した地点が異なっていたことを示すと考えられる。

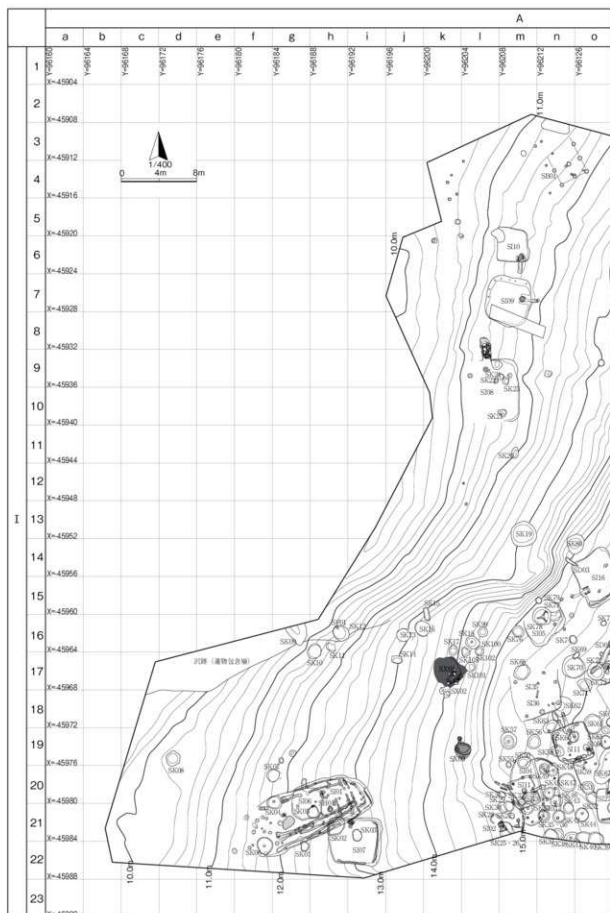
## (2) 遺 物

出土遺物は、土器類5826kg (H25:411kg、H26:171.6kg)、石器432点 (H25:281点、H26:151点)、石製品2点 (H25:2点)、土製品5点 (H25:3点、H26:2点)、金属製品97点 (H25:80点、H26:17点)、銭貨12点 (H25:9点、H26:3点)、鉄生産関連遺物(鉄滓・羽口・炉壁)大コンテナ8.5箱 (H25:8箱、H26:0.5箱)である。今回の調査で主体となる遺物は土器類であり、大半が縄文前期末～中期(第IV～VI群)に属する縄文土器である。中でも後述するように大型の堅穴建物であるS I 01とその北側に位置する遺物包含層から全体の3割以上が出土しており、主体となるのは第IV群の土器である。石器は縄文時代のもので古代のものがあるが、古代のものはほとんどが花崗岩製の台石か凝灰岩製の砥石であり、総量は縄文時代のものに比べて少ない。縄文時代の石器は剥片石器では鎌・匙、礫石器では磨石が主体であり、これらについては出土遺構と遺存状況を考慮して掲載資料を選定した。金属製品は明らかに現代と考えられる製品を除いたものを登録しており、石器と同じく出土状況を考慮して掲載資料を選定した。鉄生産関連遺物は、その多くが鉄生産関連炉及びそれを有する堅穴建物とその周辺からの出土であり、特に精錬炉(S I 37SXW01)を有するS I 37から大半が出土している。第IV章第4節の分類にしたがって分類を行っているが、ほとんどが精錬滓と考えられる赤褐色の流状滓であり、出土地点もSXW01の炉内・前庭部堆積土、S I 37堆積土中と限られていることから、今回は文中に出土量を提示するに留めている。

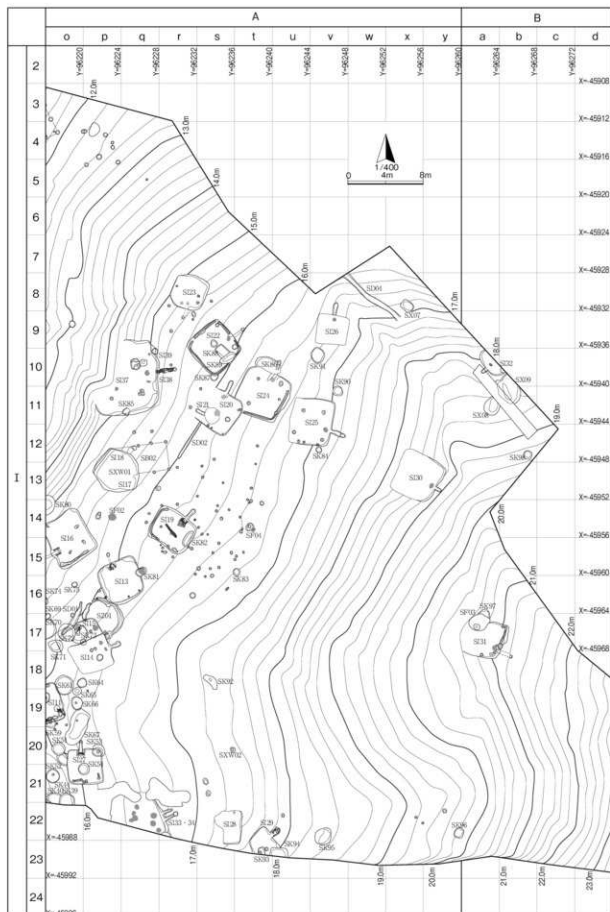
## (3) 層 序

土層の観察は調査範囲が広範囲に及ぶため各地点で行ったが、平成25年度調査区は基本的に表土(I層)の直下にあるⅡ～Ⅳ層のいずれかで遺構が検出される状況であった。最も広く分布しているのはⅢ層であるが、この面でも縄文から近世までの遺構が同時に検出されていることから、調査区全域が造成や植林によって大幅に削平・改変されており、当時の生活面はほとんど残存していないことが確認された。また、Ⅱ～Ⅳ層も大きく削平されている範囲では礫が露出しており(前述の礫集中範囲)、この範囲では遺構はほとんど検出されていない。なお、平成25年度調査に関しては最も堆積状況が良好であった調査区北西側I A 30グリッドで確認した層序を基本層序としている。

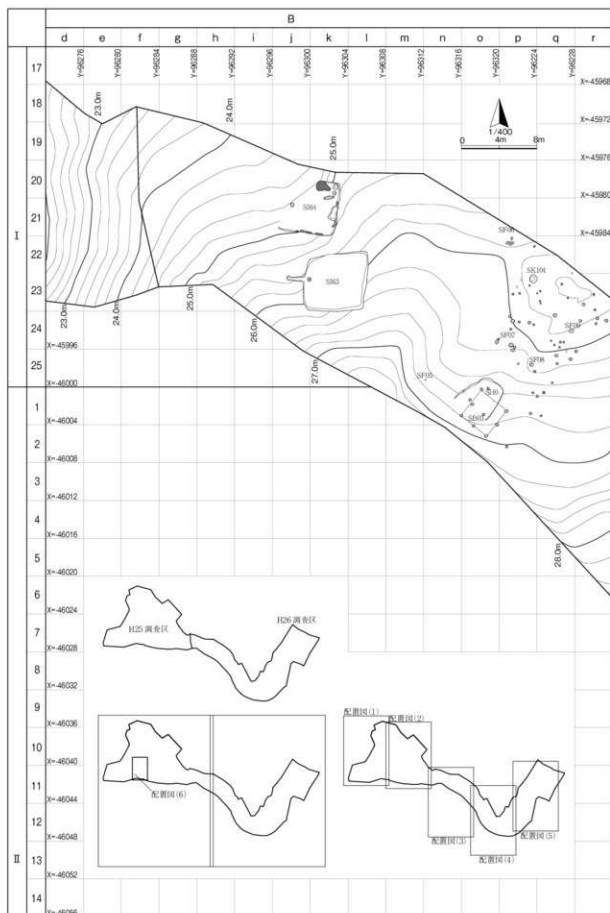
平成26年度調査区は、平成25年度調査区とは隣接しているが高低差があり同一の基本層序を用い



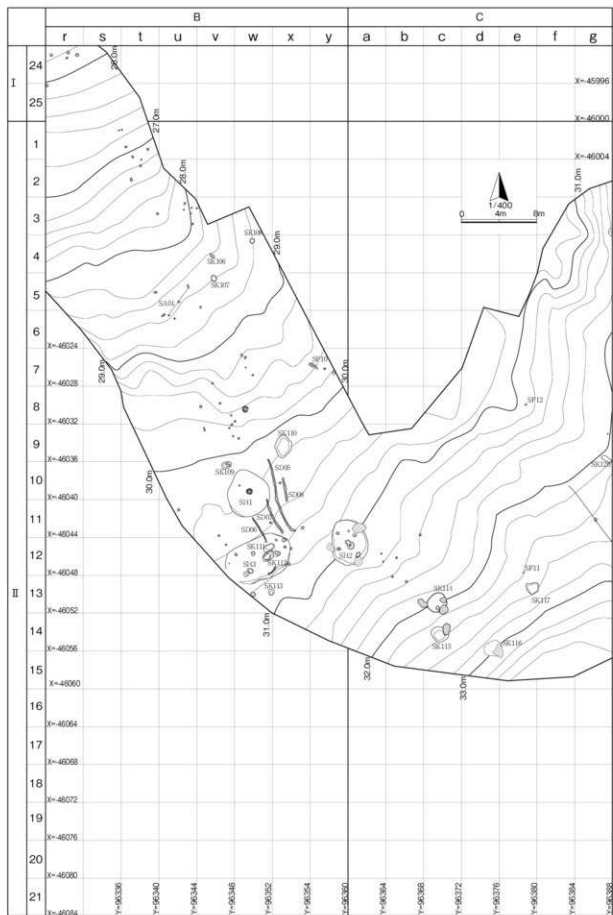
第6図 グリッド配置図(1)



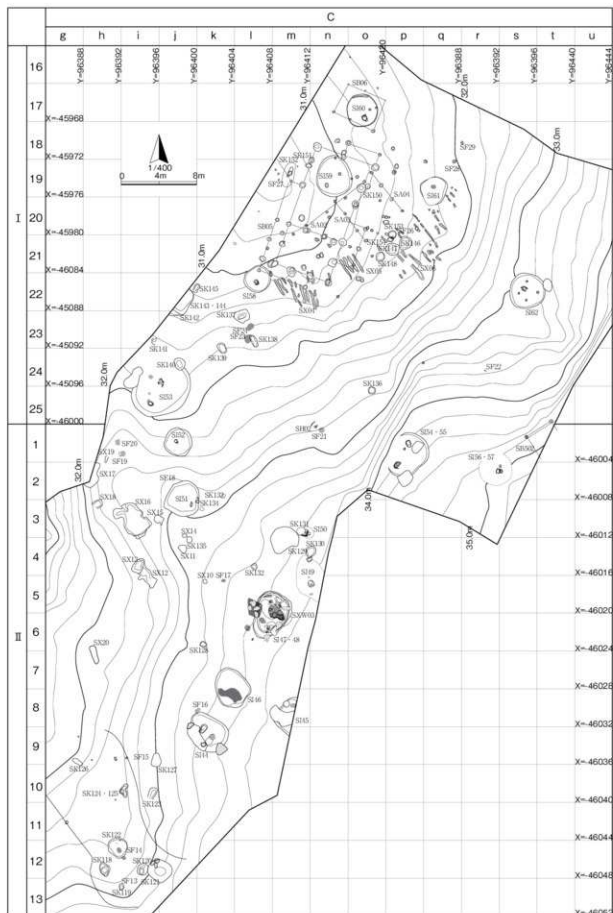
第7図 グリッド配置図(2)



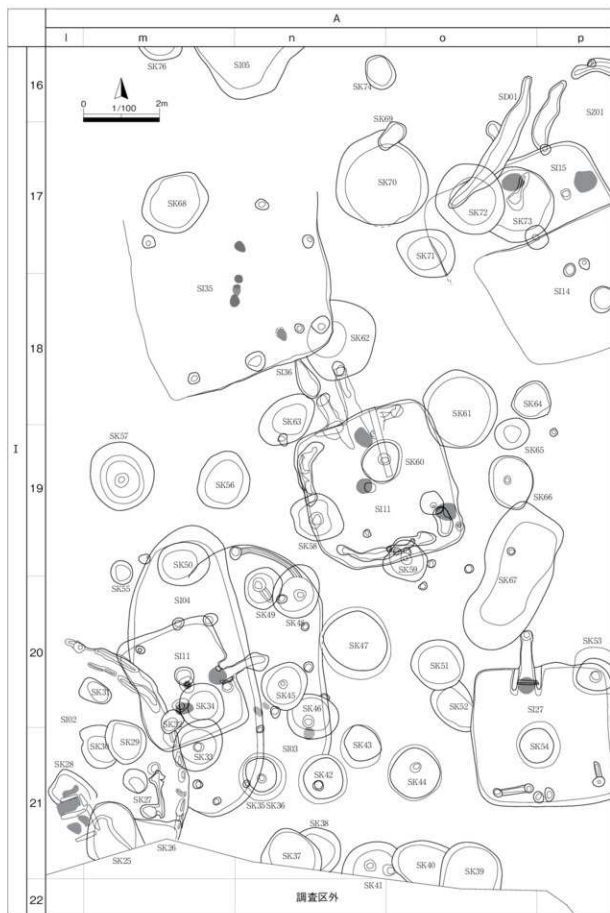
第8図 グリッド配置図(3)



第9図 グリッド配置図(4)



第10図 グリッド配置図(5)



第11図 グリッド配置図(6)



ることができないと考えられたことから、改めて I B 25 q・II B 8 y グリッドにおいて観察を行った。結果として標高の高い平成 26 年度調査区では平成 25 年度調査区では沢跡内では確認されていなかった黒色土が広範囲で堆積している状況を確認することができた。

各年度の基本層序は以下の通りである。

#### 平成 25 年度

- I 層：表土・耕作土 層厚 10～40cm
- II 層：褐色土（一部に十和田中振火山灰（To-Cu）含む） 層厚 20～40cm
- III 層：黄色粘土 層厚 0～30cm
- IV 層：黄色土（真砂土） 層厚不明

#### 平成 26 年度

- I 層：表土・耕作土 層厚 20～50cm
  - II 層：黒色土 層厚 40～50cm
  - III 層：褐色土（一部に十和田中振火山灰（To-Cu）含む） 層厚 5～20cm
  - IV a 層：茶褐色土 層厚不明
  - IV b 層：暗褐色土 層厚不明
- ※ IV a・b 層は調査区中央に埋設していた沢跡周辺に分布する。その沢跡からの距離によって色調が変化しているのみで基本的には同一層と考えられる。
- V 層：黄色土（真砂土） 層厚不明

なお、平成 25 年度の I 層と平成 26 年度の I 層、平成 25 年度の II 層と平成 26 年度の III 層、平成 25 年度の IV 層と平成 26 年度の V 層がそれぞれ対応する層である。加えて最下層以下に礫が露出する層が存在することも同様であることから、この対応関係をもとに遺跡全体の層序関係を捉えると以下の通りとなり、以降の記述における層序の表記はこれに従っている。

- I 層：表土・耕作土 層厚 10～50cm
- II 層：黒色土 層厚 40～50cm（平成 26 年度調査区にのみ分布）
- III 層：褐色土（一部に十和田中振火山灰（To-Cu）含む） 層厚 5～40cm
- IV a 層：茶褐色土 層厚不明（平成 26 年度調査区にのみ分布）
- IV b 層：暗褐色土 層厚不明（平成 26 年度調査区にのみ分布）
- V 層：黄色土（粘土・真砂土） 層厚不明

## 2 竪穴建物

時代に関係なく竪穴状に掘り込まれた遺構を包括したもので、64 棟を検出した。縄文時代のものについては炉を有するものまたは炉は未検出であるが形状的に類似するものを住居、古代のものについてはカマドを有するものまたはカマドは未検出であるが形状的に類するものを住居、カマドが無く、

内部に鉄生産関連炉を有するものを工房とした。各遺構の性格については最後に触れている。

#### SI 01 (第12・13図、写真図版6・7)

〈検出状況〉 IA 20f ~ 21i グリッドに位置する。検出面はV層上面で、当初は複数の堅穴住居が重複する不整形なプランとして捉えた。SI 06・07、SH 01、SK 01・02・04 ~ 06と重複関係にあり、このうちSK 04 ~ 06は本遺構より古く、それ以外のものは本遺構より新しい。

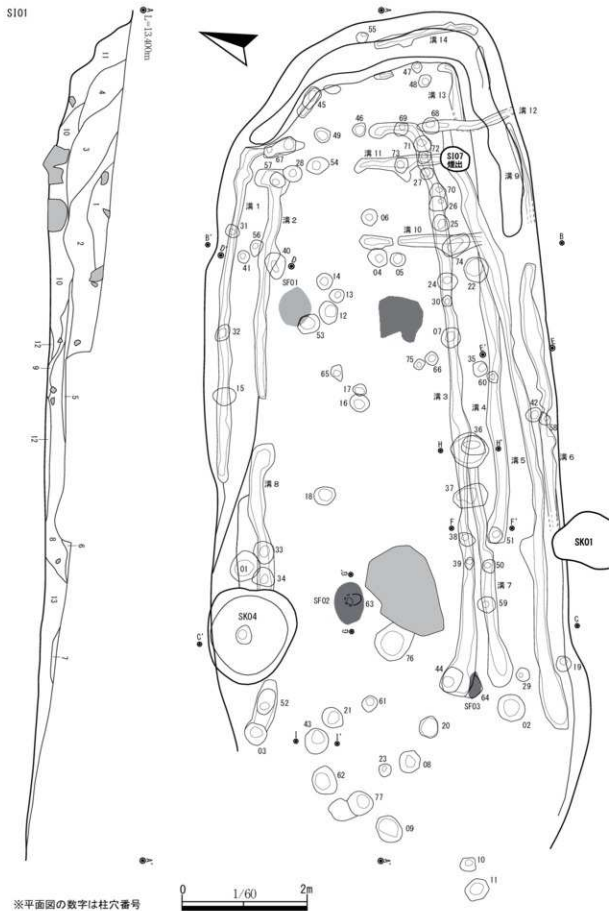
〈形状・堆積土〉 平面形は長楕円形ないし長方形であるが、左右対称形ではなく、北東隅は緩やかに丸みを持つが、南東隅は直角気味に屈曲する。また、短辺側は西側のほうが広く東側が狭い。なお、西側は斜面の傾斜に従って消失する。残存する上面規模は13.6 × 5.2 mである。長軸方向の中軸線を基準とした主軸方位はN - 71° - Eである。床面はV層を掘削して平坦に整えられているが、中央部は南壁西側では巨礫が露出する部分もある。また、水平を意識して作られているが、規模が大きい為か密塞には水平ではなく、東壁裾部と西側の床面が確認できた端部では約0.3 mの高低差がある。壁面は、崩落の影響もあってどの壁面も床面から外方に開きながら立ち上がる。深さは最も残りの良い東壁で1.1 mあり、東壁頂部と床面の最低面である西端部との比高差は約1.5 mである。なお、後述するように本遺構は柱穴と溝の配置から少なくとも4回の建て替え(拡張)が行われた可能性があり、拡張を行うごとに徐々に規模が大きくなっている。加えて最終段階の拡張の際には東壁付近にテラス状の高まりを造成していることが確認できた。このテラス状の高まりは床面から0.4 mの高さに設置されており、東壁の全面と南壁の南東隅から3.3 mの範囲で確認できる。平坦部は壁面を外側に削り出して平坦に整えられており、幅は0.15 ~ 0.5 mである。東壁に沿ってP 55と溝14が掘削されている。

堆積土は13層に細分した。基本的には流れ込みと考えられる自然堆積であるが、9層上面で後述するSH 01を検出していることから、堆積は連続的ではなく中位付近で一度堆積のスピードが緩やかになった時期があったと考えられる。ただし、堆積土上位から第V群に属する土器(89)が出土していることから、中期中葉(大木8式期)頃には埋没していたものと考えられる。

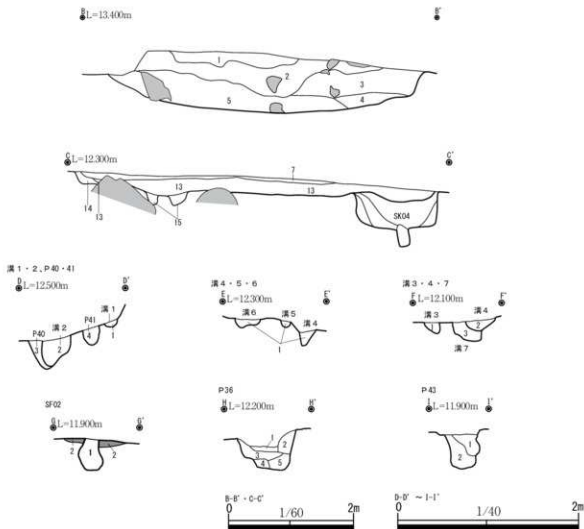
〈炉〉 床面上で焼土は3箇所確認できているが、このうちSF 01・02が現地性のものと考えられる。いずれも焼成が弱く、最も状態の良いSF 02でも平面規模が0.65 × 0.45 m、被熱深度も7 cmと浅い。これは、拡張に伴う整地によって削平された影響もあるが、本来的に使用回数が少なかったために床面の熱変成が少なかったためと考えられる。

〈付属施設〉 柱穴は77個、溝は途切れているものを1条とみなして14条検出した。柱穴の計測値は第4表の通りであり、規模は様々である。床面の中央部には少なく、溝3と重複するものが多数である。柱穴の堆積土は住居内堆積土と同じく暗褐色土が主体であり、柱痕跡が確認できるものは皆無であった。また、埋没時期が近接している為か溝内堆積土とも性質が類似しており、平面検出では新旧関係が明らかにできないものも多かった。したがってその部分については柱穴と溝を横断するように掘り下げを行って断面観察で新旧関係を確認した。後述する各構築段階に属する柱穴と溝の組み合わせについてはこの断面観察を主体として判断している。

〈出土遺物〉 遺物は、堆積土の全域からはほぼ万遍なく出土している(第121 ~ 134・174・177・178・182図)。上層には古代以降の流れ込みと考えられる土師器片が出土するが、それ以下からは基本的に縄文時代の遺物のみ出土しており、後世の時期の擾乱の影響は少ない。土器は90058.2 g出土しているが、これは今回の調査全体の2割近くにあたる。接合率も高く、このうち126点を掲載した(1 ~ 126)。大半が第IV群に属するものであり、この他に第III群に属する土器の破片と、第I・II群



第12図 S101(1)



## S101 (A-A'・B-B'・C-C')

- 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 大型の礫多量に含む  $\phi$ 10mm以下の炭5%・焼土粒3%
- 10YR3/2 暗褐色 しまりやや密、粘性有  $\phi$ 10mmの炭10%、礫少量
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまりやや密、粘性有  $\phi$ 10mmの炭10%、礫
- 10YR3/1 黒褐色 しまり・粘性共に有 10YR2/1 黒色と25Y5/6明黄褐色土を混に含む 焼土を含むが9層より少ない
- 10YR3/1 黒色 しまりやや密、粘性有 SF02埋積土の崩り残し少
- 10YR3/1 黒褐色 しまり・粘性共に有 遺物ほとんど無し 1層由來の埋積土
- 10YR3/2 黒褐色 しまりやや密、粘性有  $\phi$ 5mm以下の炭5%、礫10%
- 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 5~10mmの炭10%、底層に二次堆積炭土(25YR6/6)多く含む
- 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 2~5mmの炭15%、部分的に $\phi$ 30mm程度の礫含む 礫を多く含む
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまりやや密、粘性有 礫以外の混和物無し
- 10YR3/2 黒褐色 しまりやや密、粘性有  $\phi$ 5mm以下の炭5%、礫10%
- 10YR3/2 黒褐色 しまりやや密、粘性有 25Y7/8黄褐色土ブロック10%

## 溝1・2、P40・41 (D-D')

- 10YR3/2 黒褐色と25YR6/4にぶい棕色の混合物 しまりやや疎、粘性有  $\phi$ 1~5mmの炭3% 溝1埋積土
- 10YR3/2 黒褐色 しまり疎、粘性弱 25Y7/8黄褐色砂30% 溝2埋積土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまりやや疎、粘性弱  $\phi$ 2~5mmの炭10%、25Y7/8黄褐色砂20% P40埋積土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまりやや疎、粘性弱 25Y7/8黄褐色砂3%

## SF02 (E-E')

- 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 P63埋積土
- 5YR7/8 棕色 しまりやや疎、粘性やや有 腐変性の焼土で10YR3/2黒褐色土を含む

## P43 (I-I')

- 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1~2mmの炭、黄色砂各2%
- 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に有 10YR2/1黒色土25%、10YR7/8黄褐色土10%

## 溝4・5・6 (E-E')

- 10YR3/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性やや弱  $\phi$ 1~5mmの炭2%

## 溝3・4・7 (F-F')

- 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1~3mmの炭2% 溝3埋積土
- 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1~5mmの炭5%、25Y7/8黄褐色ブロック20% 溝4埋積土
- 10YR3/2 黒褐色~4/4暗褐色 しまり・粘性共に有 上部が黒褐色で下部の暗褐色と徐々に変化 溝7埋積土

## P36 (K-K')

- 10YR3/2黒褐色と25Y7/6明黄褐色の混合物 しまり・粘性共に有 上面に炭化物5%
- 25Y7/6 明黄褐色 しまり疎、粘性弱 10YR3/2黒褐色土40% 埋積土
- 10YR3/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 25Y7/8黄褐色砂10%
- 25Y5/3 黄褐色砂質土 しまり疎、粘性弱 地山崩落土
- 25Y7/8 黄色 しまり疎、粘性弱 埋積土

第4表 SIO1 柱穴計測表(1)

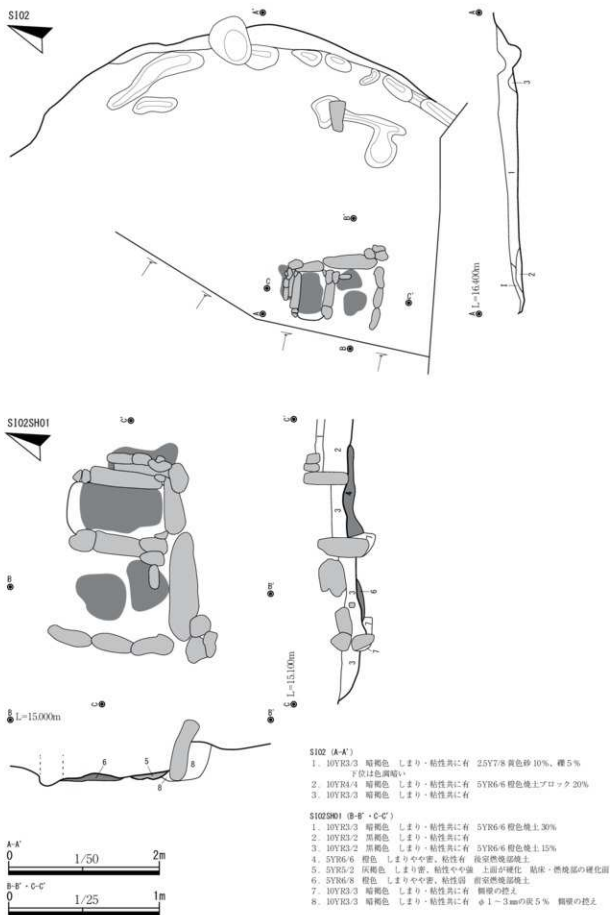
No.	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混和物など
P01	46×46	34	10YR3/2 黒褐	有	弱	黄色砂 10%
P02	46×42	43	10YR3/2 黒褐	有	やや弱	10YR7/8 黄褐色土を壁際に10%
P03	36×33	22	10YR2/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色ブロック 10%
P04	31×30	16	10YR3/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 5%
P05	26×25	32	10YR2/2 黒褐	疎	弱	
P06	27×26	10	注記無し			
P07	33×33	20	注記無し			
P08	37×35	22	10YR2/2 黒褐	有	やや弱	10YR7/8 黄褐色土・2.5Y7/8 黄色土各 10%、疎、 底面付近は黒色
P09	50×39	20	10YR3/2 黒褐	有	有	10YR7/8 黄褐色土を壁際に 10%
P10	29×29	27	10YR2/2 黒褐	有	やや弱	10YR7/8 黄褐色土 10%、疎
P11	39×36	21	10YR2/2 黒褐	有	やや弱	10YR7/8 黄褐色土・2.5Y7/8 黄色土各 10%、疎、 底面付近は黒色
P12	27×26	24	10YR3/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 5%
P13	24×22	10	10YR3/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 5%
P14	37×30	23	10YR3/2 黒褐	やや疎	やや弱	2.5Y7/8 黄色・10YR7/8 黄褐色地山土 15%
P15	37×29	22	10YR3/2 黒褐～3/3 暗褐	有	やや弱	疎
P16	32×28	33	10YR3/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 5%
P17	23×19	16	10YR3/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 5%
P18	35×30	18	10YR3/2 黒褐	疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 5%
P19	24×23	22	10YR2/2 黒褐	有	やや弱	10YR7/8 黄褐色土 10%、疎
P20	37×32	21	10YR3/2 黒褐	疎	弱	
P21	38×31	9	10YR3/2 黒褐			中央に疎
P22	44×38	31	10YR3/2 黒褐と 2.5Y7/8 黄色砂	疎	弱	中央部に砂多い、底面付近が黒色(炭?)
P23	20×20	12	10YR2/2 黒褐	有	有	
P24	34×30	41	注記無し			
P25	28×27	38	注記無し			
P26	29×22	43	注記無し			
P27	22×22	33	注記無し			
P28	32×26	19	注記無し			
P29	24×23	27	10YR2/1 黒			色調以外の注記無し
P30	20×15	21	注記無し			
P31	24×20	41	注記無し			
P32	31×25	32	注記無し			
P33	35×34	54	注記無し			
P34	37×30	35	注記無し			
P35	27×24	46	10YR3/2 黒褐			
P36	63×55	65	1. 10YR3/2 黒褐と 2.5Y7/6 明黄褐	有	有	上面に炭 5%
			2. 2.5Y7/6 明黄褐	疎	弱	10YR3/2 黒褐色土 40%、壁面崩落土
			3. 10YR3/2 黒褐	やや疎	やや弱	2.5Y7/8 黄色砂 10%
			4. 2.5Y5/3 黄褐砂質土	疎	弱	壁面崩落土
			5. 2.5Y7/8 黄	疎	弱	壁面崩落土
P37	57×34	32	1. 2.5Y7/6 明黄褐 2. 10YR3/3 暗褐	疎 有	弱 有	10YR3/2 黒褐色土 40%、壁面崩落土 2.5Y7/8 黄色砂 3%
P38	30×21	41	注記無し			
P39	22×15	18	注記無し			
P40	44×32	35	1. 10YR4/3 におい黄褐 2. 2.5Y6/3 におい黄	やや疎 疎	弱 弱	φ 2～5mmの炭 10%、2.5Y7/8 黄色砂 20% 壁面崩落土
P41	23×21	23	10YR4/3 におい黄褐	やや疎	弱	2.5Y7/8 黄色砂 3%
P42	24×23	40	10YR3/2 黒褐	有	有	φ 2～5mmの炭 3%
P43	40×39	48	1. 10YR3/2 黒褐 2. 10YR5/3 におい黄褐	有 有	有 有	φ 1～2mmの炭・黄色砂各 2% 10YR2/1 黒色土 25%、10YR7/8 黄褐色土 10%
P44	45×30	21	注記無し			
P45	38×21	63	10YR4/3 におい黄褐	やや疎	やや弱	疎少量

第4表 S101 柱穴計測表(2)

No.	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混相物など
P46	24×23	41	注記無し			
P47	20×17	18	注記無し			
P48	22×21	49	注記無し			
P49	27×24	18	注記無し			
P50	25×22	30	注記無し			
P51	24×23	32	10YR3/2黒褐			
P52	44×26	59	注記無し			
P53	36×31	43	10YR4/3にぶい黄褐	やや疎	やや弱	2.5Y7/8黄色砂20%
P54	37×26	34	10YR3/2黒褐	有	有	φ2～10mmの炭10%、2.5Y6/8明黄褐～7/8黄色土上面に10%
P55	19×18	30	注記無し			
P56	25×21	31	注記無し			
P57	29×23	28	注記無し			
P58	24×20	27	注記無し			
P59	29×26	34	注記無し			
P60	23×16	17	注記無し			
P61	27×25	18	10YR2/2黒褐	有	有	上面にφ5mmの炭1%、2.5Y7/8黄色砂20%
P62	50×37	24	10YR3/2黒褐	やや疎	やや弱	2.5Y7/8黄色砂5%
P63	18×(16)	45	10YR2/2黒褐	有	有	SF02を切る(断面図1層)
P64	33×(21)		10YR2/2黒褐	有	有	SF03に切られる(断面図3層)
P65	29×25	24	注記無し			
P66	24×22	10	注記無し			
P67	60×29	36	10YR3/2黒褐	やや疎	やや弱	炭5%
P68	30×29	50	注記無し			
P69	27×24	35	注記無し			
P70	25×22	42	注記無し			
P71	29×25	30	注記無し			
P72	24×20	26	注記無し			
P73	27×23	29	注記無し			
P74	47×33	33	注記無し			
P75	19×16	10	注記無し			
P76	55×55	49	10YR3/2黒褐	有	有	10YR7/8黄褐色土3%
P77	44×32	34	注記無し			

に属する土器も若干出土している。土製品は、不明土製品1点(680)と土器片円盤2点(681・682)を掲載した。680は円筒状の主製品とみなしたが、第IV群土器に伴う貼付した突起の一部である可能性もある。石器は土器に比べて出土量が少なく、形状が把握できるものを中心に剥片石器29点(S1～29)、礫石器9点(S120～128)を掲載した。また、堆積土の低位からは針の可能性のある骨角器が1点出土している(第VI章第1節参照)。

<性格と年代> 平面形が長楕円形プランのいわゆる「ロングハウス」の形態をとる大型の竪穴住居である。底面直上で出土した土器が第IV群に属すること放射性炭素年代測定の結果から(第VI章第2節参照)、本遺構は縄文時代前期末～中期初頭(大木6～7a式期)に構築・使用されたものと考えられる。検出した周溝と柱穴の配置関係から、本遺構は少なくとも4回の建て替え(拡張)を行っていたものと考えられるがこれについては第VII章で検討を加えている。なお、大型住居の性格については集会所説や集住建物説などがあるが、本遺構では焼土の形成も少なく、床面直上からその性格を強く裏付ける施設や遺物が出土していないことから明確にはできなかった。



第 14 図 S102

## S I 02 (第14図、写真図版8)

〈検出状況〉 I A 20・21 m グリッドに位置する。検出面はV層上面で、近年の造成による屋敷境の巨礫を除去中に複式炉を検出した為、周辺に竪穴建物の堆積土及び床面が存在するものとして検出を行った。その結果、本遺構の堆積土である暗褐色土が確認され、竪穴建物として判断したものである。S I 04・12、S K 25～33と重複関係にあるが、平安時代の竪穴住居であるS I 12以外はいずれも本遺構より古い。

〈形状・堆積土〉 西側の大部分が近年の造成によって削平されていることと南側が調査区外へ延びている為全形は不明であるが、残存部分の平面形は半円形で、複式炉の中軸線を基準とした主軸方位はN-18°-Wである。上面規模は、南北5.8 m、東西3.6 mである。床面はV層を平らにすることで構築されており、西側に向かってわずかに傾斜している。検出面からの深さは約0.25 mである。堆積土は3層に細分した。基本的には斜面上方である東側から流れ込んできた暗褐色土の自然堆積であり、炉の付近には焼土粒が混入する。

〈炉〉 床面中央やや南寄りで複式炉を1基検出した。石囲炉+石囲炉で構成されるもので、西壁の石組は造成によって壊されている。ここでは南側を炉1、北側を炉2と呼称する。石材は全て花崗岩で、内壁側の礫は被熱により脆くなっている。構築順序としては、まず炉の石組より広い範囲を掘り窪めて外側の礫を立て並べ、その後中央の仕切り部分に礫を設置して炉1と2を区画する。そして最後に暗褐色土を充填することで石を固定しながら床面を形成している。燃焼部は炉1・2ともに確認されている。いずれも非常に硬く焼け締まった焼土であり、被熱深度は6 cm前後である。なお、炉2の燃焼部焼土は炉内の範囲を超えてさらに北側まで広がっている。

〈付属施設〉 東壁付近で周溝を検出している。北壁付近及び南東壁付近では二重に巡る部分を確認されているが、重複関係には無く両者の新旧関係は不明である。ただし、床面出土の台石(S131)が最終使用時に伴うものであれば、その台石の下で検出された周溝については壁際のものより古いと判断できる。

〈出土遺物〉 1層中及び床面直上から出土している(第134・182・183図)。縄文土器は2687.4 g出土しており、このうち5点を掲載した(127～131)。いずれも第IV～V群に属するものである。また、石器は礫石器3点を掲載した(S129～131)。

〈性格と年代〉 円形プランで炉を有することから、住居として使用された竪穴建物と考えられる。年代については、出土土器が第V群に属するものであることと炉の形態から縄文時代中期中葉(大木8式期)頃に構築・使用されたものと考えられる。周溝が二重に巡る部分があることから床面の拡張を行っている可能性があるが、堆積土や床面の状況からは判断できなかった。

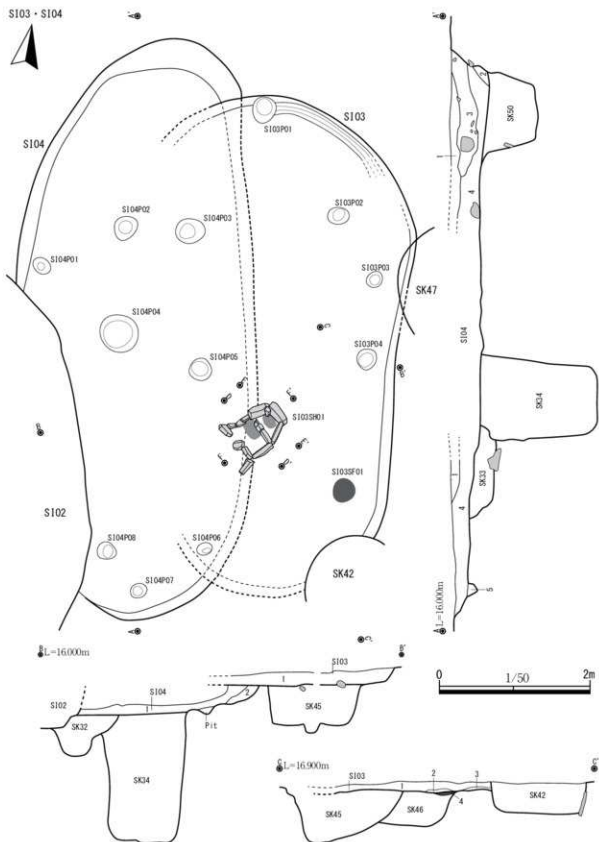
(村田)

## S I 03 (第15・16図、写真図版9・10)

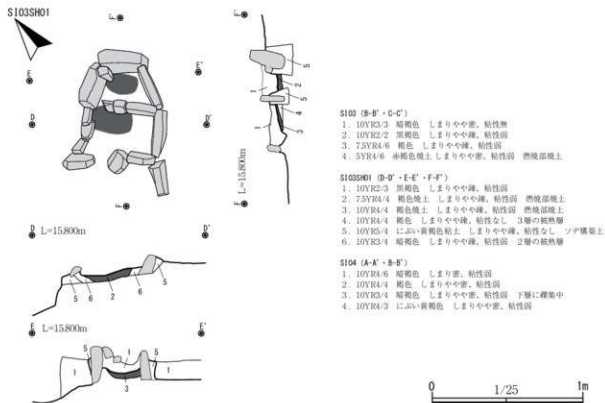
〈検出状況〉 I A 19・20 m・n グリッドに位置する。検出面はV層上面で、不整形な暗褐色土プランを確認した。検出当初は重複する遺構形状が判然としなかったため、プランを一段下げトレンチを入れ、遺構数と形状の把握を行った。結果、土坑群上面の一定範囲に薄く暗褐色土が分布していることが明らかになり、これを竪穴建物跡と判断した。S I 04、S K 42・43・45～49と重複関係にある。S I 04、S K 42・47は本遺構より古く、それ以外のものは本遺構より新しい。

〈形状・堆積土〉 西壁が後年の遺構によって破壊されているほか、遺構上部は削平により失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は長楕円形で、上面規模は6.1×2.1 mである。建物長軸方向を基準とした主軸方位はN-14°-Wである。複式炉の主軸方位はN





第15図 S103・04



第16図 S103SH01

-2'-Wであり、建物の長軸方向とは異なる。床面はIV層を平坦にすることで構築されておりほぼ平坦である。検出面からの深さは5～10cm程度である。残存部分の壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は4層に細分した。堆積土層の主体は暗褐色土で、焼土付近の堆積土のみ被熱し、変色していた。堆積土層が薄く、人為堆積か自然堆積かの特定は不可能であった。貼床は無い。

<炉> 中央やや南寄りで複式炉(SH01)を1基、床面南東寄りの位置で地床炉(SF01)を1基検出した。SH01は2基の石囲炉で構成されるもので、南東の石組が倒壊した状態で検出された以外は、全ての炉石が自立した状態で検出した。ここではより大きい南側の石組を炉1、より小さい北側の石組を炉2と呼称する。それぞれの石組内径は炉1で28×20cm、炉2で40×24cmである。

石材は全て花崗岩で、焼土により近い石材内面は若干被熱し変色していた。構築順序は炉石組よりも一回り広い範囲を掘り窪め、石材を配置したのちに黄褐色粘土を充填し、石材を立たせていた。燃焼部は炉1・2ともに検出されているが、被熱状況は不良であった。燃焼部範囲はともに長楕円形でそれぞれの石組北側にのみ限定的に確認された。燃焼部焼土径は炉1で28×18cm程度、炉2で20×14cm程度である。被熱深度はともに5cm程度である。SF01の燃焼部範囲はほぼ円形で、燃焼部焼土径は直径30cm、被熱深度は3cm程度である。

<付属施設> 周溝1条、柱穴4個を検出した。周溝は床面北東部の一部分でのみ検出している。上面幅は20cm程度、深さは5cm程度である。このほかに床面北部の周溝西端で1個(P01)、床面東部で3個(P02～04)の柱穴を検出した。柱穴の直径はP01が30cm、P02が28cm、P03が18cm、P04が23cm、深さはP01が25cm、P02が70cm、P03が14cm、P04が28cmである。

<出土遺物> 炉内及び住居内堆積土から出土している(第134・135図)。縄文土器は47268g出土しているが、破片が細かく接合率は低い。土器は6点を掲載した(132～136・630)。このうち

136は3m程東側に位置するSK 42から出土した破片と接合関係にある。132～136は第IV群に属する縄文土器である。なお、須恵器(630)が1点出土しているが、これは上位に構築されていたSI 12の堆積土の残存部分から出土したものと考えられる。石器その他の遺物は出土していない。

<性格と年代> 複式炉と地床炉を有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土した土器が第IV群に属する縄文土器であることから、縄文時代前期末～中期初頭(大木6～7式期)に構築・使用されたものと考えられる。

#### SI 04 (第15図、写真図版9・10)

<検出状況> IA 20・21m・nグリッドに位置する。検出面はV層上面で、不整形な暗褐色土プランを確認した。検出当初は重複する遺構形状が判然としなかった為、プランを一段下げ、トレンチを入れ、遺構数と形状の把握を行った。結果、土坑群上面に暗褐色土が一定の範囲で分布していることが明らかになったため、これを竪穴建物跡と判断し検出を行った。SI 02・03・11、SK 32～36・50と重複関係にあり、SK 32～36・50は本遺構より古く、それ以外のものは本遺構より新しい。

<形状・堆積土> 南西壁と東壁を後年の遺構によって破壊されているため、形状の全容は不明である。残存部分から推測される遺構の平面形状は長楕円形で、上面規模は7.7×3.2mである。建物長軸方向を基準とした主軸方位はN-2°-Wである。床面はIV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは40cm程度である。堆積土は4層に細分した。堆積土下層は主体をふい黄褐色土とする。堆積土上層の主体は暗褐色である。壁面は外面に広がるように斜めに立ち上がる。遺構北部の堆積土中層に相当する3層下層には礫が集中し検出された。礫の分布が遺構北部に限定され、壁際下方で三角堆積が認められることと、前述の3層が北端で厚くなるのに対し、南端に至るにつれ薄くなるため、遺構北部からの流入による自然堆積の可能性が高い。貼床は無い。

<炉> 検出されていない。

<付属施設> 柱穴8個を検出した。柱穴は東壁寄りで2個(P 01・02)、西壁寄りで1個(P 05)、南壁寄りで3個(P 06～08)、長軸方向中央で2個(P 03・04)検出した。柱穴の直径はP 01が35cm、P 02が30cm、P 03が32cm、P 04が48cm、P 05が22cm、P 06が24cm、P 07が22cm、P 08が24cm、深さはP 01が42cm、P 02が23cm、P 03が30cm、P 04が27cm、P 05が17cm、P 06が23cm、P 07が24cm、P 08が24cmである。

<出土遺物> 堆積土中から出土している(第135図)。土器は27727g出土しているが、破片が細かく接合率は低い。土器は2点掲載した(137・138)。いずれも第IV群に属する縄文土器である。石器は出土量が少なく、図示できるものは無い。

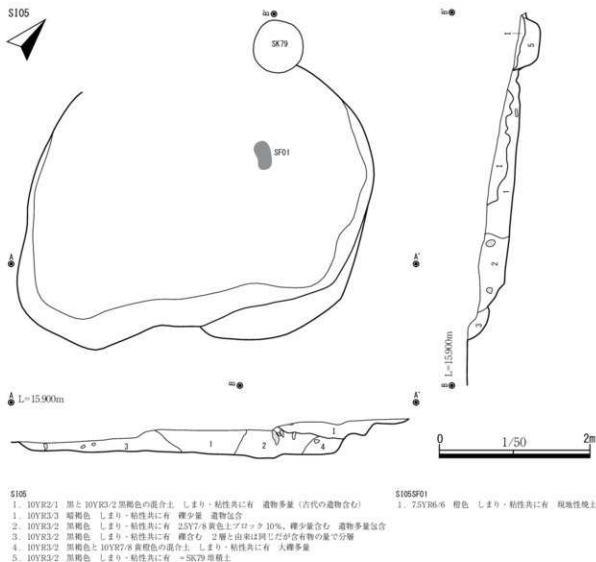
<性格と年代> 炉は検出されていないが、規模及び形状から住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土土器が第IV群に属するものであることと他遺構との重複関係から、縄文時代前期末(大木6式期)に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)

#### SI 05 (第17図、写真図版11)

<検出状況> IA 15・16m・nグリッドに位置する。Ⅲ～V層上面で黒色の不整形円形プランとして検出した。SK 77～79と重複関係にあり、SK 79のみ本遺構より新しい。

<形状・堆積土> 北西側は近年の造成によって壊されており全形は不明であるが、平面形は隅丸方形に近いプランで、残存部分の上面規模は4.6×2.2mである。最も遺存状況の良い南東壁を基準とした場合の主軸方位はN-43°-Eである。壁面の崩落も著しく、ほとんどの部分が大きく外方に開



第17図 S105

きながら立ち上がる。検出面からの深さは、最も深い南東壁付近で約0.5mである。床面はV層を平坦にすることで構築されているが、南側はV層中の礫が多いため床面には凹凸がある。

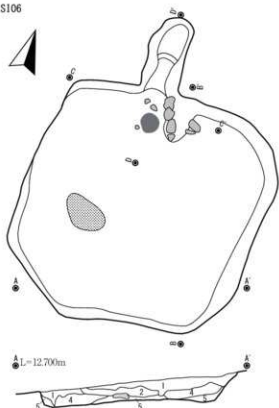
堆積土は5層に細分した。大半が黒褐色土で、壁面に近い部分では大型の礫を多量に含んでいる。断面観察によると、堆積は斜面上方からの流れ込みによる自然堆積と考えられる。なお、後述するように1～3層から多量の遺物が出土している。

<炉> 床面中央やや東寄りの位置に地床炉を1基検出した。燃焼部範囲は楕円形プランをしており、上面規模は0.4×0.22mである。赤色に焼けており混和物を含まないことから現地性と判断できるが、被熱深度は3cm程度と浅い。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土1～3層と床面直上から出している（第135～137・178・196図）。土器は13902.5g出しており、破片も大きく接合率が高い。土器は18点掲載した（139～156）。いずれも第IV群に属する縄文土器である。土器の出土量に比べて石器は少なく、剥片石器は2点（S30・31）、礫石器は1点掲載したのみである（S226）。また、直接本遺構に関わるものではないが、堆積土の上

S106

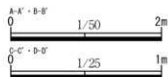
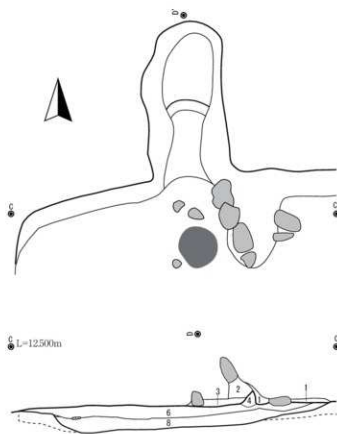


## S106 (A-A'・B-B')

1. 10YR3/2 黒褐色 しまり疎、粘性弱 木の根多量に混入
2. 10YR5/1 に近い黄褐色 しまり密、粘性弱  $\phi$ 30mmの 10YR6/6 明黄褐色ブロック5%、土層粗材少
3. 10YR2/3 黒褐色 しまり疎、粘性弱 礫・織文土器多量
4. 10YR3/1 黒褐色 しまり疎、粘性弱 礫・織文土器多量
5. 10YR3/2 黒褐色 しまり密、粘性弱 炭化物粒1%  
埋跡の三角堆積

## S106 カマド (C-C'・D-D')

1. 10YR3/1 黒色 しまり疎、粘性弱 塚積土1層と同じだがやや色調が暗い
2. 10YR2/1 黒色 しまり疎、粘性弱
3. 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に有 25Y6/6 橙褐色ブロック多量
4. 10YR3/1 黒色と 25Y7/8 黄色の混合土 しまりやや有、粘性やや強 雑積塚土少
5. 5YR5/6 橙褐色 しまり・粘性共に有 燃焼部塚土
6. 10YR5/2 灰褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 雑遺跡には黄色土、カマド跡に焼土含む
7. 10YR5/2 灰黄褐色と 25Y7/8 黄色の混合土 しまりやや疎、粘性やや弱 掘出し付近に礫多い
8. 10YR3/2 黒褐色と 10YR5/3 に近い黄褐色の混合土 しまりやや密、粘性やや強 塚面積塚土



第18図 S106

面から鉄鐸の可能性のある筒状の鉄製品（M 1）が出土している。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。床面直上で出土した土器が第Ⅳ群に属することと放射性炭素年代測定の結果から（第Ⅳ章第2節参照）、本建物は縄文時代前期末～前期初頭（大木6～7a式期）に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 06（第18図、写真図版12）

<検出状況> I A 20g グリッドに位置する。検出面はⅢ層及びS I 01 堆積土中で、黒色の方形プランとして検出した。S I 01 堆積土を掘り込んで構築されているが、S I 01 と直接的な重複関係はなく、その他の遺構とも重複関係は無い。

<形状・堆積土> 平面形は方形で、上面規模は3.4 × 3.1 mである。コーナー部は隅丸方形状で、さらに南壁は少し南側に張り出す形状である。カマドを基準とした主軸方位はN-1°-Wである。検出面からの深さは0.1～0.35 mで、斜面上方に位置する東壁側の堆積が深い。床面はS I 01 堆積土を平坦に整地することで形成されており、西側に向かって若干傾斜している。なお、カマド付近についてはカマド構築時に床面を若干掘り窪めており、その部分には黒褐色土とよび黄褐色土の混合土を充填していた。

堆積土は6層に細分した。全体的に締まりの弱い黒褐色土で、堆積状況から斜面上方である東側から流れ込んだ自然堆積と考えられる。なお、床面南西側では床面から5cmほどの高さで貝類がまとまって出土している。

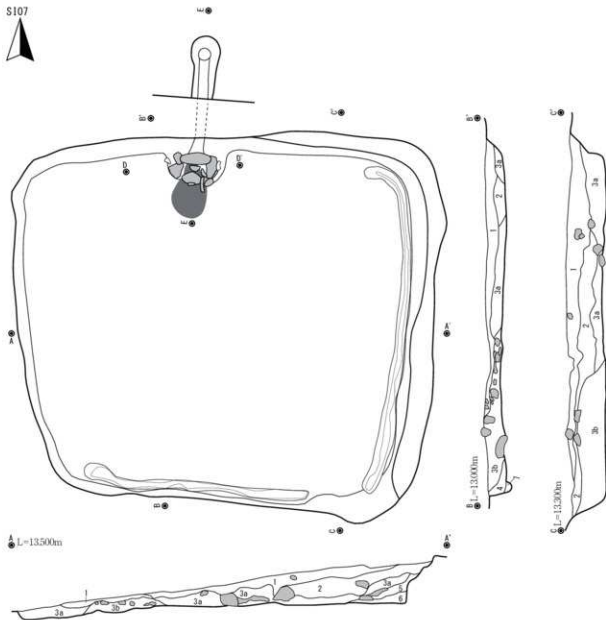
<カマド> 北壁中央付近に1基設置されている。袖部・燃焼部・煙道部が残存している。袖部の遺存状況は悪く、床面中央から向かって左側の袖は残存していない。また、右側袖部の観察によると、礫を芯材として構築されたものと考えられるが、被熱・硬化は認められず全体的に脆く崩れやすい。燃焼部は、0.55 × 0.5 mの範囲で被熱の痕跡は認められるが、明瞭な赤色化・硬化した範囲としては捉えられない。煙道部は北壁際からの長さ1 m、幅0.5 mであり、底面は凹凸が著しい。なお、上面が削平されているため構築方法は不明である。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土は薄いのがほぼ全域から出土している（第137・138図）。土器は13488.9 g出土したうちほとんどが縄文土器の破片であるが、本遺構に帰属すると考えられる古代の土器8点と器形・文様が特徴的な縄文土器8点を掲載した（157～172）。土師器環（158～160）はいずれも轆轤成形で、内面に黒色処理が施される。159は口縁部が内湾するI A類、158・160は口縁部が外反するI B類である。土師器甕（161・162）は2点とも非轆轤成形で、口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。須恵器（164・165）は壺・瓶の体部破片である。また、前述の通り堆積土中から貝類が出土しており、イソジミガイ・オノガイ・コタマガイ・アサリ・イガイ・ウバガイが確認されている。また、1点のみマダラの腹椎？と考えられる破片が出土している（第Ⅵ章第1節参照）。

なお、縄文時代に属するものであるが、剥片石器5点（S32～36）、礫石器3点（S132～134）、滑石製の玉1点（S244）を掲載した。これらの縄文時代の遺物は本遺構の下位にあるS I 01の堆積土から紛れ込んだものと考えられる。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、床面付近から出土した土師器環の年代観から平安時代（9世紀後葉）に構築・使用されたものと考えられる。



## S107 (A-A'・B-B'・C-C')

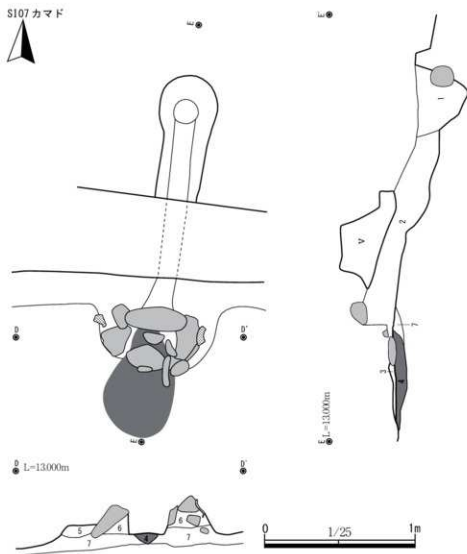
1. 10YR3/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱 木の根多量混入
2. 10YR2/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱 遺物少量包含
- 3a. 10YR3/3 暗褐色 しまり跡、粘性弱 10YR5-6 黄褐色土5%、炭化物粒1%、円礫多量 礫は南東方向から流入
- 3b. 10YR3/3 暗褐色 3層中で特に礫が集中する層
4. 10YR2/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱 10YR5-6 黄褐色土がセザイタ状に30%混合
5. 10YR4/4 褐色 しまりやや跡、粘性弱 10YR5-6 黄褐色土10%
6. 10YR2/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱 炭化物粒1%、しまりの粗い土層
7. 10YR3/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱 10YR5-6 黄褐色土5% 根葉増殖土少

## S107 カマド (D-D'・E-E')

1. 10YR3/1 黒褐色 しまりやや跡、粘性有 礫多量 輝出し堆積土
2. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 下位に25Y7/8 黄色砂、φ1-3mmの発土粒2%
3. 10YR3/2 黒褐色 しまりやや跡、粘性有 25Y7/8 黄色土と5YR6/6 褐色土を狭に含む
4. 25YR3/6 明黄褐色 しまり跡、粘性弱 燃焼地層土
5. 10YR3/2 黒褐色 しまり有、粘性やや強 25Y7/8 黄色ブロック15% 地構築種の控え
6. 10YR3/2 黒褐色と25Y7/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に有 焼燻土
7. 10YR3/3 暗褐色と25Y7/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に有 カマド床面構築土



第19図 S107



第20図 S107カマド

## S107 (第19・20図、写真図版13)

〈検出状況〉 I A 21・22 h・iグリッドに位置する。V層上面で黒褐色の方形プランとして検出した。S101、SK02・03と重複関係にあり、いずれの遺構よりも本遺構のほうが新しい。

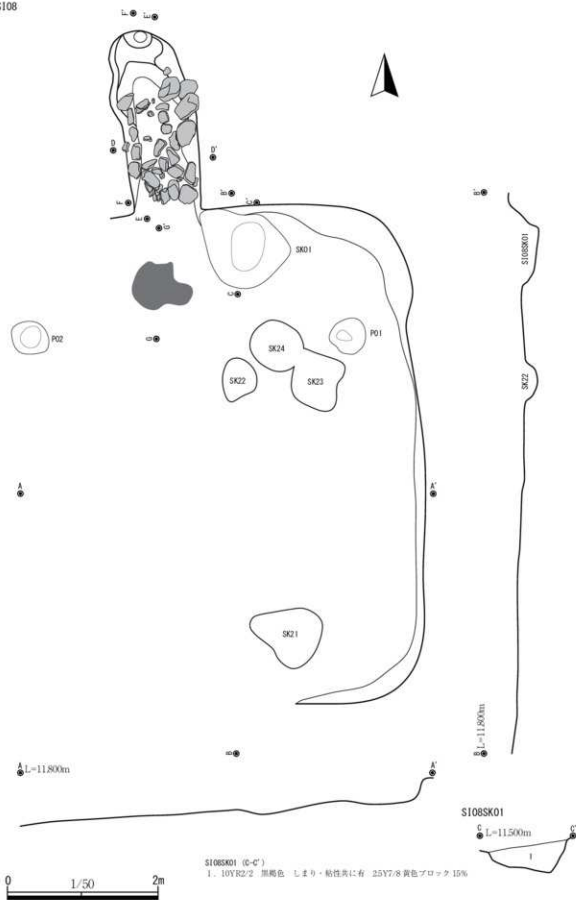
〈形状・堆積土〉 平面形は方形で、上面規模は5.5×4.8mである。カマドを基準とした主軸方位は、N-5°-Eである。斜面上方にあたる東側のほうが深く、検出面からの深さは0.5mである。壁面は本来的には垂直に立ち上がっていたと考えられるが、四壁とも上位は崩落しており調査時点では大きく外方に開く形状であった。床面はIV層を掘り込み、掘り込んだ部分に地山土と黒褐色土の混合土を充填して構築している。ただし、床面中央付近ではIV層中の礫が露出する部分もあり、全城で確認されたわけではない。深さも一定ではなく、確認できた範囲での層厚は5～20cmである。

堆積土は7層に細分した。黒褐色土が主体であり、中～下位には礫を多量に含んでいる。これらの礫は本遺構の南東コーナー付近から西へ向かって帯状に分布しており、検出面の傾斜方向を一致することから、斜面上方にあった礫が雨水等の影響によって本遺構内に流れ込んだものと考えられる。

〈カマド〉 北壁中央に1基設置されている。袖部・燃焼部・煙道部が残存している。煙道部北半と

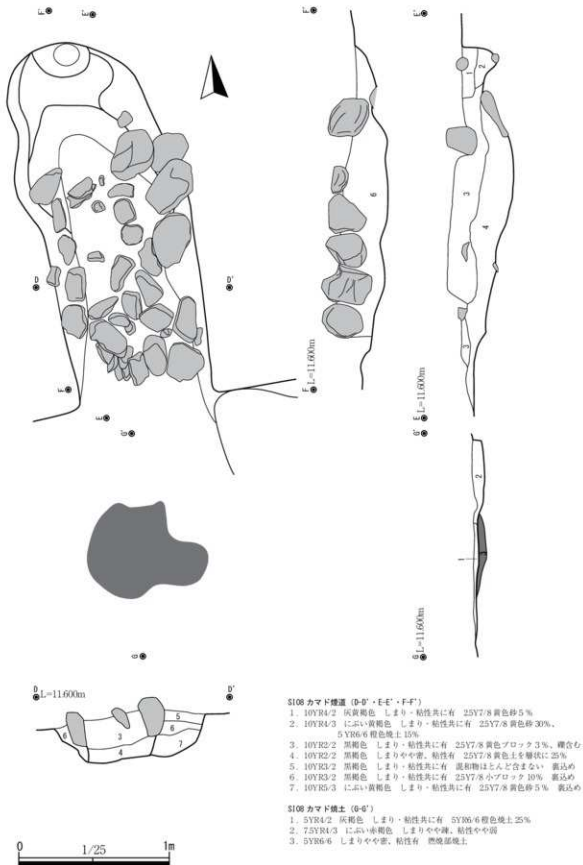


S108



第 21 図 S 1 0 8

## S108 カマド



第22図 S108 カマド

煙出しは S I 01 堆積土を掘削して構築されており、堆積土の判別ができていなかった為同時に進行していた S I 01 掘り下げの際に一部を壊してしまった。袖部と燃焼部の遺存状況は比較的良好である。袖部は礫と黒色土・黄色土の混合土を使用して構築されている。袖部の構築に使用されている礫はいずれも花崗岩であり、燃焼部付近のものは被熱して脆くなっている。燃焼部は南北に長い楕円形をしており、焼土の範囲は 0.65 × 0.45 m、被熱深度は 6 cm 程度である。燃焼部の遺存状況をみると、袖部は検出したものよりも南に長いものであった可能性もある。なお、燃焼部焼土の上面で検出された礫は天井部を構築していたものの可能性もあるが、元位置を留めていないため詳細は不明である。煙道部は削り貫き式で、燃焼部南端から煙出しに向かって緩やかに下っていく。煙出しは直径 0.5 m、深さは 0.35 m で、煙道部より一段低く掘削されておりピット状となっている。

<付属施設> 東壁及び南壁際で周溝を検出している。上面幅は 0.15 ~ 0.25 m、深さは 0.1 m 程度である。床面と異なる黒褐色土が堆積していたため、検出は比較的容易であった。

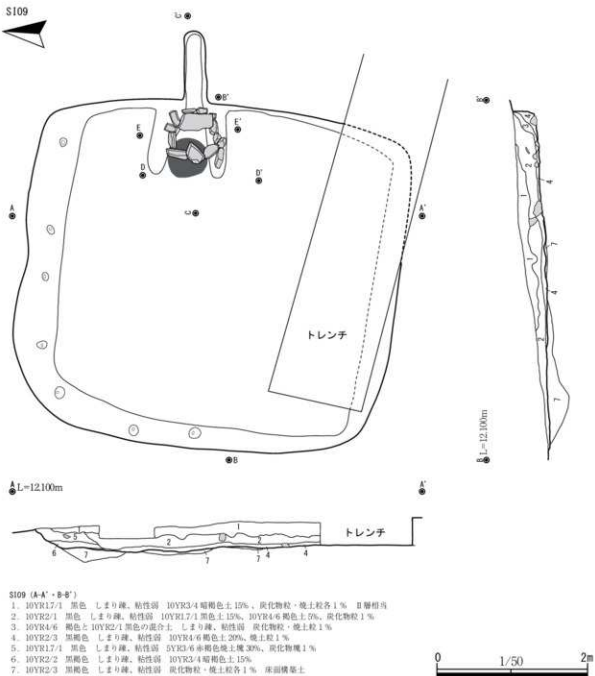
<出土遺物> 1・3 層とカマド周辺から出土している (第 139 ~ 141・174・183・195 図)。土器は 13488.9 g 出土しているが、S I 06 同様、縄文土器が大半を占める。このうち、本遺構に伴うと考えられる古代の土器 15 点と形状・文様が特徴的な縄文土器 10 点を掲載した (173 ~ 197)。土器器の坏はいずれも轆轤成形で、173・174 は内面黒色処理の I 類、175 は非黒色処理の II 類である。また、174 は断片的であるが外面に墨書が確認できる。甕 (176 ~ 187) はいずれも非轆轤成形で、口縁部が「く」の字状に屈曲する I 類である。181 は小型の甕である。石器は、本遺構に伴うものとして金床石 1 点 (S136) を掲載した。また、縄文時代に属するものであるが土器片円盤 1 点 (683)、剥片石器・石核各 1 点 (S100・101)、礫石器 5 点 (S135 ~ 140)、珠状耳飾 1 点 (S245) を掲載した。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は他の堅穴建物と比べても豊富であり、カマド付近から出土した土器の年代観から、平安時代 (9 世紀中～後葉) に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 08 (第 21・22 図、写真図版 14)

<検出状況> I A 9 I グリッドに位置する。調査区の制約上、煙道部と堅穴部は分けて検出している。煙道部は V 層上面で方形に礫が分布する範囲として検出されたことから、当初は小石室など小型の埋葬施設である可能性が考えられた。ただし、掘り方と考えられる黒色土の範囲が南側に延びており、この部分も後日調査予定であったことから、調査区を南側に拡張した段階で再度確認を行った。その結果、掘り方のプランが南側の堅穴部と考えられる方形プランと連続している状況が確認されたことから、この時点で本遺構を石組の煙道を有する堅穴建物であると判断した。なお、堅穴部は IV 層上面で検出しているが、後世の造成により大部分が削平されているため堆積土はほとんど残存していない。また、S K 21 ~ 24 と重複関係にあるが、堆積土が残存していないためこれらとの新旧関係は不明である。

<形状・堆積土> 平面形は方形であるが、斜面下方にあたる西側と南側は削平されており残存していない。残存する部分の上面規模は、6.6 × 1.5 m である。カマドを基準とした主軸方位は N - 8° - W である。床面は V 層を掘り込んで構築されており、残存部分の観察では平坦に整えられていたと考えられるが、貼床と考えられる堆積は確認できなかった。壁面の状況については遺存状況の良い東壁をみると、壁面は壁際から丸みをもって立ち上がっており、深さは 0.3 m 以上あったと考えられる。堆積土は宅地として利用される段階で大幅に攪拌されており、当初本遺構に伴う堆積土と考えていた黒色土はほぼ全域で近現代の器物が出土した。したがって、本遺構に伴う堆積土は北東コーナー付近

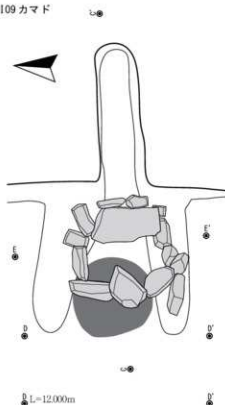


第23図 S109

にわずかに残存していたのみである。

＜カマド＞ 前述の通り石組の煙道をもつカマドであり、北壁に設置されていた。燃焼部と煙道部のみ残存している。燃焼部は北東側が樹木の浸食により壊されているが、 $0.8 \times 0.5$  mの範囲で被熱の痕跡を確認した。硬く焼け締まった現地性の焼土であり、被熱深度は6cmである。燃焼部焼土の周辺のみ地山をさらに掘り窪めて黒褐色土を充填して床面を構築している。煙道部は礫を用いて構築されており、北壁際から煙出し北端までの長さは約2.4m、幅は石組の内寸で約0.4mである。ただし、全部が石組で構築されているわけではなく、幅1m前後の掘り方を掘った後に黒褐色土やにぶい黄褐色土で壁を作り、その内側に長さ20～30cmのやや扁平な礫を直線的に6～7個立て並べている。天井部も石組と考えられるが、既に削平されているため構築方法は不明である。煙道は北壁際からわず

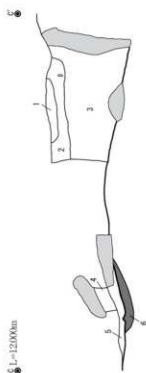
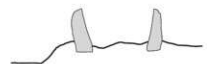
S109 カマド



L=12000mm



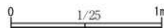
L=12000mm



L=12000mm

S109 カマド (C-C'・D-D')

1. 10YR3/4 暗褐色 しまり練、粘性弱 1層粘土
2. 10YR2/3 黒褐色 しまり練、粘性弱 10YR4/4 褐色土 10%、10YR2/1 黒色土 20%
3. 10YR4/4 褐色土 10YR2/3 黒褐色の混合土、しまり練、粘性弱
4. 10YR3/4 暗褐色 しまり練、粘性弱 焼土粒 10%
5. 7.5YR4/6 褐色焼土、しまり練、粘性弱 10YR1.7/1 黒色土 10%、炭化物粒 1%
6. 5YR3/6 暗褐色焼土、しまりやや練、粘性無 焼土部焼土



第24図 S109 カマド

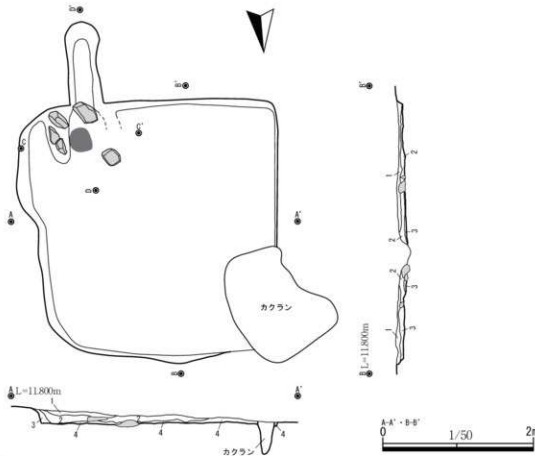
かに傾斜しながら煙出しへと向かうが、壁際から 1.8m 付近で緩やかに立ち上がりながら煙出しへと至る。煙出しは素掘りであり、煙道部底面よりも若干深く掘りこまれている。

〈付属施設〉 土坑 1 基と柱穴 2 個を検出している。堆積土との新旧関係は不明であるが、位置関係から本遺構に伴うものと判断している。SK 01 はカマド脇に設置されており、土師器の破片が出土していることから貯蔵穴として使用されたものと考えられる。P 01・02 はいずれも直径約 50cm、深さ 30cm 前後であり、カマドの中心軸を基準にすると対称な配置をとることから本遺構に伴う柱穴であると考えられる。

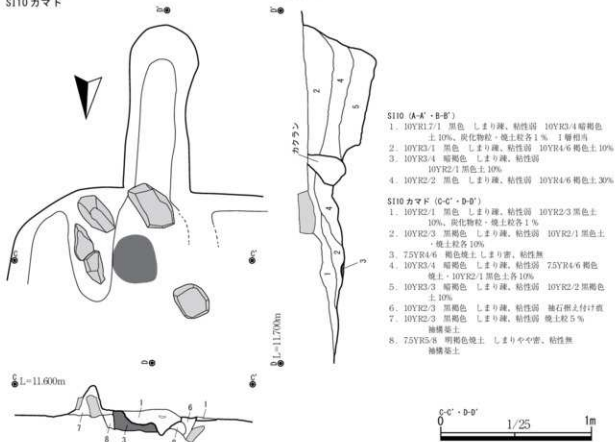
〈出土遺物〉 堆積土は無いが、燃焼部周辺と SK 01 堆積土から土器類が出土している (第 141 図)。土器 566.6 g が出土しているが破片が小さく接合率は低い。その為、土器はカマド袖部から出土した土師器 1 点 (198) のみ掲載した。轆轤成形で、内面に黒色処理が施される IA 類である。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。今回の調査では後述する S I 38 と同じく石組の煙道を有するものであるが、S I 38 よりも礫の使用方法は簡易

S110



S110 カマド



## S110 (A-A'・B-B')

1. 10YR1.7/1 黒色 しまり疎、粘性弱 10YR3.4 暗褐色土 10%、炭化物粒・焼土粒各 1% 1層相当
2. 10YR3.1 黒色 しまり疎、粘性弱 10YR4.6 褐色土 10%
3. 10YR3.4 暗褐色 しまり疎、粘性弱 10YR2.1 黒色土 10%
4. 10YR2.2 黒色 しまり疎、粘性弱 10YR4.6 褐色土 30%

## S110 カマド (C-C'・D-D')

1. 10YR2.1 黒色 しまり疎、粘性弱 10YR2.3 黒色土 10%、炭化物粒・焼土粒各 1%
2. 10YR2.3 黒褐色 しまり疎、粘性弱 10YR2.1 黒色土・焼土粒各 10%
3. 7.5YR4.6 褐色 焼土 しまり密、粘性無
4. 10YR3.4 暗褐色 しまり疎、粘性弱 7.5YR4.6 褐色 焼土・10YR2.1 黒色土各 10%
5. 10YR3.3 暗褐色 しまり疎、粘性弱 10YR2.2 黒褐色土 10%
6. 10YR2.3 黒褐色 しまり疎、粘性弱 礫石粗土付け煮
7. 10YR2.3 黒褐色 しまり疎、粘性弱 焼土粒 5% 焼燻塞土
8. 7.5YR5.8 明褐色 焼土 しまりやや密、粘性無 焼燻塞土

的である。出土遺物は乏しいが、SK 01 出土の土師器杯の年代観から平安時代（9世紀後半以降）に構築・使用されたものと考えられる。

(村田)

#### SI 09 (第23・24図、写真図版15)

〈検出状況〉 IA 7・81・mグリッドに位置する。検出面はV層である。トレンチによる遺構確認時に黒色土中の複数箇所ですまりのない焼土塊を検出したため、遺構が存在する可能性を考えた。トレンチ範囲を拡張した結果、方形の黒色土範囲を確認したため、これを竪穴建物と判断し検出を行った。他遺構との重複関係は無い。

〈形状・堆積土〉 遺構南壁を試掘トレンチによって破壊されているため、形状の全容は不明である。残存部分から推測される遺構の平面形状は隅丸方形で、上面規模は5.0×4.4mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-93°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。遺構南部はV層中の礫集中範囲内であり、建物床面に礫頂部が突出している。検出面からの深さは一番深い遺構東壁で40cm、削平により上端を欠損している西壁で2cm程度である。残存している北壁及び西壁は緩やかに外に広がるように立ち上がる。カマドの位置する東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は6層に細分した。7層が貼床となるため、遺構床面は7層上面である。貼床は斜面下方の遺構西側が厚く、上方の東側が薄い。貼床の厚さは遺構西側で18cm、東側で5cm程度である。堆積土の主体は黒色土及び黒褐色土である。全層で炭化物粒・焼土塊・焼土粒が検出されているが、特にカマド付近の堆積土中層に焼土塊が多い。堆積の様相は人為堆積である。

〈カマド〉 東壁中央やや北寄りの位置に1基設置されていた。燃焼部焼土・左右袖構築土下部・袖芯材の礫・煙道が残存していた。また、カマド天井石の可能性が高い板状礫を、燃焼部焼土直上で検出した。燃焼部焼土径は65×62cm、被熱深度は5cm程度である。煙道は東壁際から長さ90cmで、幅は27cmである。煙道底面は外端に向け緩やかに下る形状であった。煙道部分の堆積状況から考えると、列り抜き式の煙道であったと考えられる。

〈付属施設〉 床面に主柱穴は確認されなかったが、緩やかに外に広がるように立ち上がる北壁と西壁の壁面中ほどに直径10cm、深さ25～30cm程度の小柱穴が60～120cm程度の間隔で造られていた。小柱穴は遺構上端から下端まで垂直に掘り込まれていた。検出状況から腰板を留めた胴縁を納める柱穴と想定ができる。

〈出土遺物〉 堆積土中から土師器片が469.4g出土しているが、細片のため図示していない。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、建物の形態と出土遺物に土師器が含まれることから古代に構築・使用されたものと考えられる。

#### SI 10 (第25図、写真図版16)

〈検出状況〉 IA 5・61・mグリッドに位置する。検出面はV層で、方形の黒色土の広がりを確認したため、竪穴建物と判断し検出を行った。他遺構との重複は無い。

〈形状・堆積土〉 遺構の平面形状は隅丸方形である。カマドが建物南壁東側に設置されているが、カマド直近の建物東南隅のみが他所に比べてわずかに外に広がる。上面規模は3.6×3.2mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-174°-Wである。床面はV層を平坦にすることで構築されておりほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い東壁付近で20cm、一番浅い西壁付近で5

cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直だが、カマド直近の東南隅部分のみ緩やかに外に広がるように立ち上がる。堆積土は6層に細分した。7層が貼床となるため、遺構床面は7層上面である。堆積土の主体は黒色土および黒褐色土である。全層で炭化粒及び焼土塊・焼土粒が検出されるが、特にカマド付近の堆積土中層に焼土塊が多くみられる。堆積の様相は人為堆積である。

<カマド> 南壁東隅の位置に1基設置されていた。燃焼部焼土・左右袖下端構築土・左袖芯材である礫・煙道が残存していた。燃焼部焼土直上では右袖芯材と考えられる礫を検出した。燃焼部焼土径は直径75cm、被熱深度は4cm程度である。煙道は東壁際から長さ1.4m、幅は40cmである。煙道底面は床面より一段低く造られており、外端に向け緩やかに下る形状だった。煙道の堆積状況から考えると、掘り込み式の煙道であったと考えられる。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土中から出土している(第141図)。土器は252.2g出土しており、土師器坏1点を掲載した(199)。轆轤成形で、内面に黒色処理が施されるIA類である。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、土師器坏の形態から平安時代(9世紀後半)に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)

#### S I 11 (第26・27図、写真図版17)

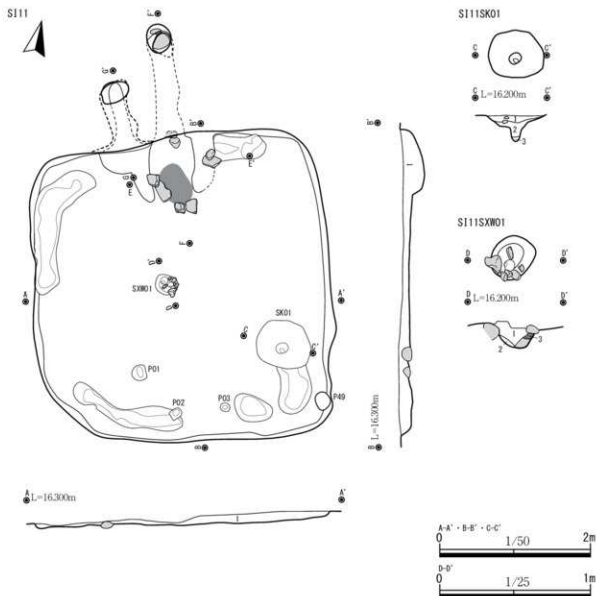
<検出状況> IA 17 n～IA 19 p グリッドにかけて位置する。V層上面で検出した。SK 58～62と重複関係にあり、いずれも本遺構より古い。

<形状・堆積土> 平面形は方形で、上面規模は4.2×3.9mである。1号カマドを基準とした主軸方位はN-14°-Wである。検出面から床面までの深さは0.15mである。上端が削平されており西側の壁の残りは良くない。壁は床面から緩やかに上がりはじめ、垂直に立ち上がる。1層の黒褐色土に明黄褐色土のブロックが僅かに混ざる範囲及びV層上面を床面とした。ブロックの混ざった土は、斜面下にあたる西側では確認できなかった。また、床面は全体的に硬化が確認できなかった。北辺西側には堅くしまった暗褐色土の塊があった。これは1号カマドの袖から伸びており、それぞれ構築土は区別ができないため、袖を作った際に盛られたと考えられる。本遺構の堆積土は全体が黒褐色土の単層で、混和物、他の土色は見られなかった。基本層序のII層と同じ土質で、自然堆積したものと考えられる。

<カマド> 建物の北辺中央部に2基設置されている。燃焼部が残るカマドを1号カマド、燃焼部の残っていないものを2号カマドとした。1号カマド本体の遺存状況は悪く、袖の下端の輪郭と燃焼部以外残っていない。構築の際に袖の芯材として使用されたと考えられる礫がいくつかあったが、被熱した面がカマドの外面向いているものや、重なるように内側に倒れ込んだ状態であり、元位置を保っていたものは残存していなかった。このことから、1号カマドは住居廃絶の際に意図的に壊されたものと考えられる。燃焼部は0.4×0.6m程の範囲で、しまりは悪く、厚さは10cm程度である。被熱面は貼床より少し掘り窪めている。煙道の幅は約0.4m、長さは1.5mである。V層の天井部が残存していたことから、削り貫き式と考えられる。また、煙出しには住居廃絶の際に入れられたと考えられる礫が検出されている。

2号カマドは、地山の天井が崩れた煙道と、煙出し以外残っていない。煙道の堆積土は暗褐色土である。幅は0.3m、長さは1mほどである。煙出しに礫は詰まっていなかった。煙出しを貫通していることから、削り貫き式で煙道から先に掘削したものと考えられる。煙道は1号カマドから伸びている暗褐色土に建物側を塞がれている。このことから、この土は2号カマドの煙道から土や雨水が流れ





## S111 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト しまりやや密、粘性強

## S111SK01 (C-C')

1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性強  $\phi 10 \sim 20$ mmの礫5%
2. 10YR4/6 褐色シルト しまりやや疎、粘性やや弱 10YR6-6明黄褐色土が塊状に混入
3. 10YR6-6 明黄褐色シルト しまりやや疎、粘性強

## S111SKW01 (D-D')

1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりやや疎、粘性強  $\phi 1 \sim 10$ mmの炭化物10%、 $\phi 5 \sim 10$ mmの10YR4-6褐色土ブロック15%
2. 10YR2/2 黒褐色砂 しまりやや疎、粘性強  $\phi 2 \sim 3$ mmの礫25%
3. 10YR4-6 褐色シルト しまり密、粘性弱 焼土

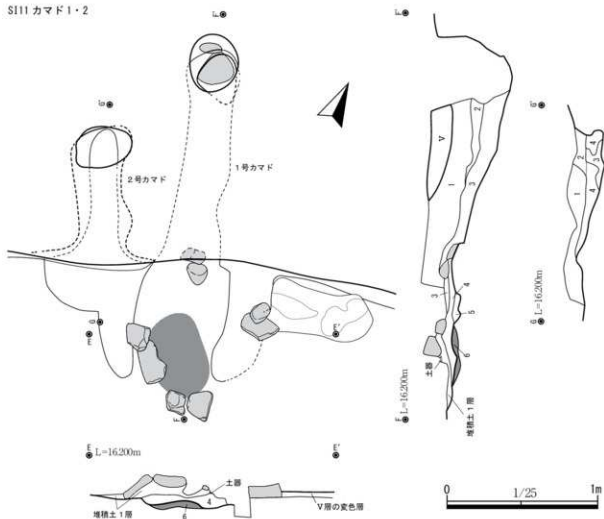
## 1号カマド (E-E'・F-F')

1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト しまりやや疎、粘性強  $\phi 1 \sim 5$ mmの礫25%
2. 10YR6-8 黄褐色砂質シルト しまり密、粘性やや強、 $\phi 1 \sim 3$ mmの礫10% 天井崩落土
3. 10YR4/4 褐色真砂土 しまり密、粘性強  $\phi 2$ mmの炭化物5%、 $\phi 3 \sim 4$ mmの礫30%
4. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり疎、粘性強  $\phi 1 \sim 5$ mmの炭化物45%
5. 10YR3/3 暗褐色粘土 しまりやや密、粘性やや強 黒土と1層の混合土
6. 10YR5-8 黄褐色シルト しまり密、粘性弱 現地性焼土

## 2号カマド (D-D')

1. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり密、粘性弱  $\phi 50$ mmの10YR4-6褐色土ブロック5% 煙道天井部崩落土
2. 10YR2/2 暗褐色シルト しまりやや密、粘性やや弱
3. 10YR3/3 暗褐色砂 しまり疎、粘性やや弱 炭化物含む
4. 10YR2/3 黒褐色シルト しまりやや疎、粘性やや弱  $\phi 2 \sim 5$ mmの10YR4-6褐色土粒30%

## SI11 カマド 1・2



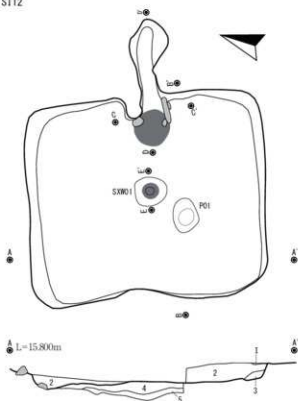
第27図 SI11カマド

込むのを防ぐために盛られたと考えられる。

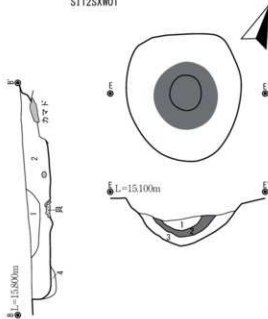
＜付属施設＞ 炉1基（SXW01）、土坑1基（SK01）、柱穴3個（P01～03）、周溝を検出した。SXW01は床面中央からやや西寄りに設置されている。掘り込み周囲の土質はV層である。規模は上端 $0.3 \times 0.3$  mであり、深さは0.15 m程、炉の縁辺部には掘りこぶし大の礫があった。断面の形状は半円形で、炉内の礫と底面は被熱して赤色化していた。炉内の堆積は、1層中に崩れた焼土及び鉄滓を含んだ黒褐色土である。出土した鉄滓の種類と炉の規模から鍛冶炉と考えられる。炉中央に抜き取り穴の可能性のある穴が1つある。支脚と考えられる被熱した石製品が、建物内のベルトを除去する際に、堆積土下位から見つかっている。炉中央の穴の径が石製品の直径と一致することから、石製品を挿していた痕跡だと考えている。SK01は、床面から暗褐色土の円形プランで検出した。底が浅く、幅広である。柱穴は、床面中央南寄りに1個（P01）、南壁付近に2個（P02・03）を検出した。上面規模は0.1～0.2 m、深さは5～20 cmである。堆積土は全て黒褐色土である。周溝は、建物内西辺と南辺、北辺の1号カマドの東側で検出した。床面と類似した土が1層堆積しており、深さ10～20 cm程で、プランは不整形である。

＜出土遺物＞ カマド周辺及び堆積土中から出土している（第141・178・184・196・200図）。土器は1131.2 g出土しているが、小破片が多く接合率は低い。このうち古代の土器5点を掲載した（200

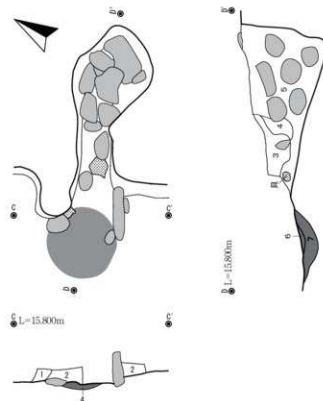
S112



S112SXW01



S112 カマド



S112 (A-A'・B-B')

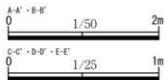
1. 10YR3-2 暗褐色 しまり跡、粘性弱
2. 10YR2-1 黒色 しまり・粘性共に  $\phi 30$ mm程度の礫 10%、白色粒 (貝片) 10%
3. 10YR3-3 暗褐色 しまり跡、粘性弱 25YR6-8明黄褐色焼土ブロック含む
4. 10YR5-4 にぶい黄褐色 しまりやや密、粘性有 床面構築土
5. 10YR2-1 黒色 しまりやや密、粘性やや弱 S03直下の遺構の増成土

S112 カマド (C-C'・D-D')

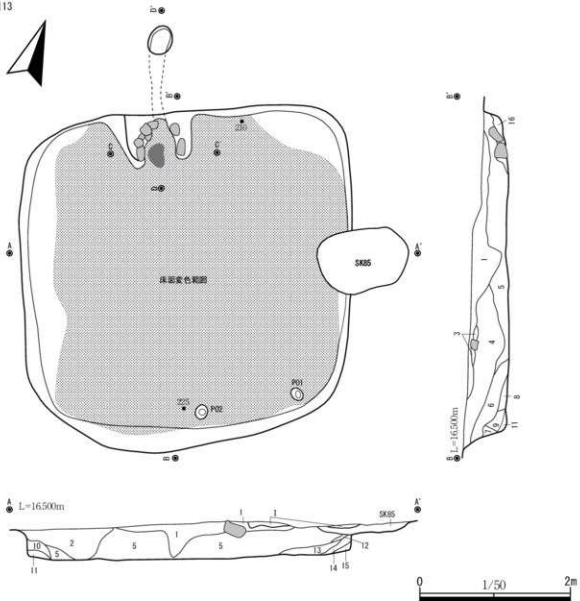
1. 10YR2-1 黒色 しまり・粘性共に  $\phi 30$ mm程度の礫 10% 焼土と同一層
2. 10YR3-3 にぶい黄褐色と 10YR2-1 黒色の混合土
3. 10YR3-2 黒褐色 しまり・粘性共に 10YR5-4 にぶい黄褐色土 25%、礫含む
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色 しまりやや疎、粘性弱 天井崩落土か
5. 10YR3-2 しまり・粘性共に 中位以下に礫を多量に含む
6. 10YR5-3 にぶい黄褐色 しまりやや疎、粘性やや有 燃焼部直土の上層  $\phi 1 \sim 10$ mmの白色粒 (貝片?) 15%
7. 2.5YR6-8 褐色 しまりやや疎、粘性弱 燃焼部直土 高砂土の燃焼層のむしり跡

S112SXW01 (E-E')

1. 10YR5-2 灰黄褐色 しまり・粘性共に 有 西側に白色灰漬く入る 高砂含む
2. 10YR17/1 黒色 しまり・粘性共に 有 炭層
3. 5YR4/6 赤褐色 しまりやや密、粘性弱 焼土・炭層



S113



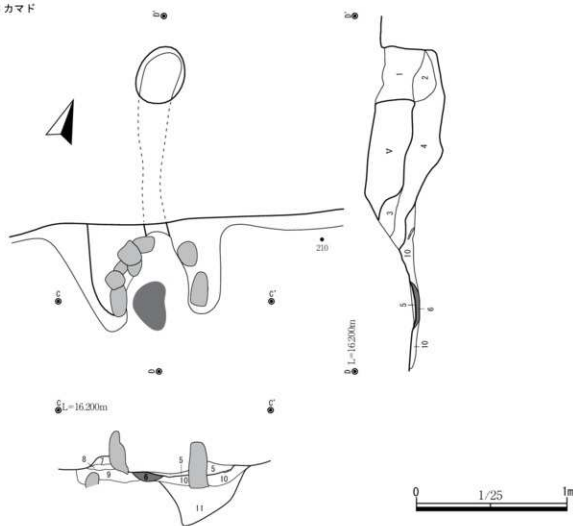
S113 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや密、粘性有 10YR4/4 褐色土を上面に15%
2. 10YR2/2-3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1-2mmの黄色粒3%
3. 25Y7/8 黄色砂 しまりやや密、粘性弱
4. 10YR3/2-4/2 黒褐色-灰黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1-3mmの25Y7/8黄色土10%
6. 25Y7/8 黄色粘土 しまり密、粘性強 礫面附着土
7. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 5mmの炭3%、 $\phi$ 10mmの黄色土10%
8. 10YR2/1 黒色 しまりやや疎、粘性やや有
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に有 黄色土10%
10. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性やや有 10YR4/4 褐色土5%
11. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 10-30mmの25Y7/8黄色ブロック30%
12. 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に有 炭10%
13. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 5mmの炭3%、25Y7/8黄色土10%
14. 10YR7/8 黄褐色と10YR3/2黒褐色の混合土 しまり・粘性共に有 礫面附着土と黄土の混合
15. 10YR17/1 黒色 しまりやや疎、粘性弱  $\phi$ 1-3mmの黄色土10%
16. 10YR17/1 黒色 しまりやや疎、粘性弱  $\phi$ 1-3mmの黄色土10%
16. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性有 礫多量 柱上部の厚積土

～204)。200は非轆轤成形の土師器甕、201・202は内面黒色処理が施された土師器杯I類、203は須恵器瓶、204は須恵器大甕の破片である。その他、支脚として使用された可能性のある礫石器1点(S141)、刀子・釘・不明鉄製品を各1点(M4～6)、羽口3点(M73～75)を掲載した。その他、南東側の床面直上から種別は不明ながら獣骨の破片が出土している(第VI章第1節参照)。なお、本遺構に直接関わるものではないが、縄文時代の遺物として剥片石器1点(S37)も掲載した。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。カマドは、上述の通り1号カマドから2号カマドへと造り替えが行われているが、それに伴った建物の掘り方や床面拡張の痕跡は認められないため、カマドのみ造り替えが行われたと考えられる。S X W 01は、1号カマドの正面を避けるような位置にあることから、1号カマドと同時期のものと考えられる。出土土器は乏しいが、土師器杯の中に轆轤成形のものが含まれていることから平安時代(9世紀後半か)

## S113 カマド



## S113 カマド (C-C'・D-D')

1. 10YR2/2～3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色ブロッカ、概造壁面(壁と縁辺が焼けた地山上)の崩落土含む 人為堆積
2. 10YR5/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有 概造壁面の崩落土50%含む 人為堆積
3. 10YR2/2 黒褐色と 10YR2/8 黄褐色の混合土 しまり・粘性共に有 住居側からの流入土
4. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 炭・焼土を25%上位に多く含む 下段に25Y7/8 黄色土15%
5. 10YR1.7/1～2/1 黒色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 2～10mmの炭30%
6. 5YR5/3 にふい赤褐色 しまり・粘性共に有 概造壁面上たが変性は弱い 上面には5YR6/6 褐色の部分あり
7. 10YR5/4 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色粒5%含む 凝積粘土
8. 25Y7/8 黄色 しまりや中密、粘性やや強 地山上を利用した凝積粘土
9. 10YR5/4 にふい黄褐色 しまりや中密、粘性やや強 25Y7/8 黄色ブロッカ35% 床面凝積土
10. 10YR4/3 にふい黄褐色～6/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有 床面凝積土
11. 7.5YR5/4 にふい褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 2～10mmの炭5%、5YR6/6 褐色焼土ブロッカ5% 床面凝積土

第30図 S113 カマド

に構築・使用されたものと考えられる。

(村田・中島)

#### SI 12 (第28図、写真図版18)

<検出状況> IA 20mグリッドに位置する。SI 02～04の堆積土である暗褐色土の上面で検出した。SI 02～04と重複関係にあるが、いずれの堅穴建物も完全に埋没した後に構築されたものであり、直接的な重複関係には無い。

<形状・堆積土> 平面形は方形で、上面規模は3.1×2.6mである。カマドを基準とした主軸方位はN-67°-Eである。検出面からの深さは0.3～0.4mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はV層を整地することで形成されており、ほぼ平坦である。

堆積土は3層に細分した。ほとんどが暗褐色の2層であり、堆積状況から自然堆積と考えられる。なお、2層最下層の床面中央では小片となった貝類がまとまって出土している。

<カマド> 東壁中央に設置されている。袖部・燃焼部・煙道部が残存している。袖は、右側には板状の石が芯材として使われているが、左側は粘質土のみを用いて構築されている。燃焼部は被熱範囲が直径0.48m程度の円形で、被熱深度は10cmである。非常に良く焼け締まっており、上面には貝類の破片と思われる白色の細片が散布していた。煙道は列り貫き式で、東壁面から約1.15m外方に延びている。上面は削平されており、天井部は残っていない。煙道部は、壁面際から約20°の角度で直線的に下り煙出しへと至るが、煙出しとの明瞭な境界は無い。煙道内堆積土は3層に細分した。大半が黒色土の3層であり、廃絶時に意図的に入れたと考えられる大型の礫を多量に含んでいる。

<付属施設> 柱穴1個(P01)と鉄生産関連炉1基(SXW01)を検出した。P01は床面中央やや南寄り検出されている。断面形から柱穴と判断できるものであるが、1個のみであり対応するものは確認できなかった。SXW01は床面のほぼ中央に位置している。0.45×0.4mの円形プランで、床面を掘り窪めて構築されている。燃焼部(3層)の被熱深度は3cm程度であるが、非常に良く焼け締まっており、その上面には炭の集中する層が認められる。後述する通り、炉内堆積土からは鉄滓が出土しているが、鍛造剥片が出土していないことから鍛錬鍛冶ではなく精錬鍛冶炉と考えられる。

<出土遺物> カマド周辺と床面中央付近の堆積土中から主に出土している(第141・196図)。土器は4041.8g出土しており、5点掲載した(205～209)。205～207は轆轤成形の土師器坏で、205・206は内面に黒色処理が施されるI類、207は非黒色処理のII類である。209は非轆轤成形の土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。その他、紡錘車1点(M7)と釘1点(M8)を掲載した。また、SXW01内堆積土と周辺からは鉄滓が1687.7g出土している。磁着無しの流状滓が主体であり、炉の断ち割りの際に炉底滓の破片が出土している。その他、床面中央付近からウバガイ・オオノガイ・アサリ・コタマガイと煙道堆積土下位からシカまたはオオカミの四肢骨の破片が出土している(第VI章第1節参照)。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。また、鍛冶炉が検出されていることから工房としても使用されていたと考えられる。カマド燃焼部直上から出土した土師器の年代観から、平安時代(9世紀後半)に構築・使用されたものと考えられる。

#### SI 13 (第29・30図、写真図版19)

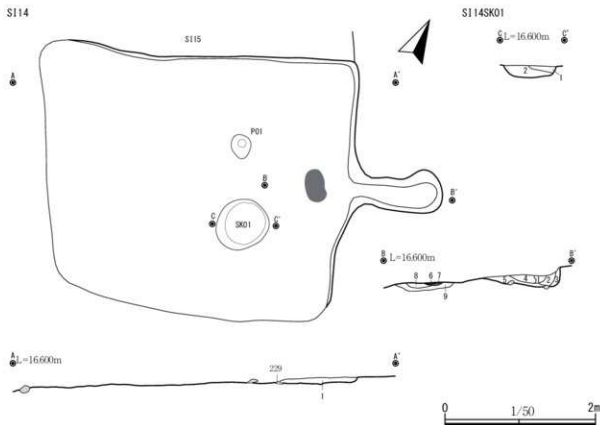
<検出状況> IA 16qグリッドに位置する。V層上面で黒褐色の方形プランとして検出した。SK81、SD01と重複関係にあり、SK81より古く、SD01より新しい。

<形状・堆積土> 平面形は方形で、上面規模は4.5×4.4mである。カマドを基準とした主軸方位は、

N-20°-Wである。壁面は、カマド周辺を除いて四壁ともほぼ垂直に立ち上がるが、崩落のため上部は若干外方に開く。深さは、最も深い南壁付近で0.55 mである。床面は、V層を掘り込んでその部分にふい黄褐色土を充填して水平に整えることで構築している。床面の全域で確認でき、上面は固く硬化している。なお、この掘り込みには規則性は無く、層厚は3~14cmとばらつきがある。

<カマド> 北壁のほぼ中央に1基設置されている。本体部と煙道部が残存しており、遺存状況は良好である。袖部は礫を芯材としてその周囲に地山土等を貼って構築されている。燃焼部焼土の範囲は0.33×0.23 mの楕円形で、被熱深度は4 cmである。煙道部は列り貫き式で、北壁際から約10°の角度で傾斜しながら煙出しへと至る。壁際から煙出し端部までの長さは1.25 m、幅は0.2~0.25 mである。煙道内堆積土は黒褐色土が主体で、11層は竪穴側から流れ込んだもの、8・9層は本遺構の周囲から流れ込んだものであり、いずれも自然堆積と考えられる。

<付属施設> 南壁際で柱穴を2個検出している (P 01・02)。いずれも直径0.2 m以下の小型のもので、壁際に寄った位置にあるが、性格については不明である。また、カマド左袖部の直下で土坑を1基検出している。カマド部分の断ち割り断面の観察から、袖部構築以前に埋没している土坑と判断できる。したがって本遺構と異なる古い時期の遺構の可能性も考えられるが、堆積土が他の竪穴建物の直下にある土坑類と異なっており、むしろ床面構築土に類似することから床面掘り方の一部の可能



## S114 (A-A')

1. 10YR3/2 黒褐色 しまりやや密、粘性強 礫と遺物を含む

## S114SK01 (C-C')

1. 10YR3/4 褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色土 35%
2. 10YR2/2 黒褐色と4/4 褐色の混合土 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色土 20%

## S114カマド (B-B')

1. 10YR5/3 にふい黄褐色 しまりやや疎、粘性有
2. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 φ1mmの焼土粒1%、25Y7/8 黄色土  
ブロック3%
3. 10YR4/2 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色砂3%
4. 25Y7/8 黄色と10YR3/2 黒褐色の混合土 しまり・粘性共に有 横溝瓦片崩落土
5. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色土 10%
6. 7.5YR5/4 にふい橙色 しまり密、粘性有 φ1~3mmの白色粒2%、焼土粒15%
7. 2.5Y6/8 褐色 しまり密、粘性有 焼土層
8. 10YR3/2 黒褐色~5/4 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有 焼土20%
9. 10YR4/4 褐色 しまり・粘性共に有 西側に焼土5% 燃焼底面構築基土

第31図 S114

性を考慮して本遺構に付属する土坑と判断した。平面形は楕円形で、上面規模は0.75×0.6mである。断面形は逆三角形状で、深さは0.36mである。

<出土遺物> 堆積土中とカマド周辺から出土している（第141～143・196図）。土器は76142g出土しており、古代の土器19点（土師器15点・須恵器4点）を掲載した（210～228）。212は土師器坏で、内面に黒色処理が施される。213・214は土師器高台坏の破片で、内面に黒色処理が施されるI類に属するものである。210・211・215～224は非轆轤成形の土師器甕で、いずれも口縁部が「く」の字状に屈曲するI類と考えられる。225は須恵器大甕、226～228は須恵器甕類の体部破片である。この他、堆積土中から鉄鏃・刀子・小刀が各1点出土している（M9～11）。また、東側堆積土中からマガキの貝片が1点出土している（第VI章第1節参照）。また、本遺構に直接帰属するものではないが、礫石器2点（S227・228）を掲載した。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。カマド周辺や床面直上から出土した土器の年代観から、平安時代（9世紀後葉）の構築・使用と考えられる。

#### S I 14（第31図、写真図版20）

<検出状況> I A 17 p グリッドに位置する。Ⅲ～V層上面で、後述するS I 15と一連の黒褐色の方形プランとして検出した。当初はS I 15までを含めて一棟の堅穴建物と考えていたが、精査開始の際にサブトレンチを入れて断面観察を行ったところ、両者は別遺構であり、本遺構のほうが新しいことが確認されたため、精査は本遺構から先に開始した。S I 15、S Z 01と重複関係にあり、いずれの遺構よりも本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> 平面形は東西方向に長い長方形プランと考えられるが、西壁と南壁は削平により消失している為全形は不明である。カマドを基準とした主軸方位は、N-67°-Eである。西壁と南壁の明確な立ち上がりは無いが、床面と考えられるV層の変色範囲を根拠とすると、残存規模は4.1×3.6mとなる。壁面は北壁と東壁がわずかに残存するのみであり、最も深い東壁のカマド付近で0.1m程度である。床面は基本的にはV層を掘り込んで水平に整えることで構築されているが、カマドの燃焼部周辺のみ周囲の床面より10cm程度掘り窪めてその部分に黄色粘土を充填している。なお、硬化面は認められないが、前述の通り遺構外のV層より色調が暗く変色する範囲が方形に確認されたことからこの範囲と本遺構の床面とみなしている。

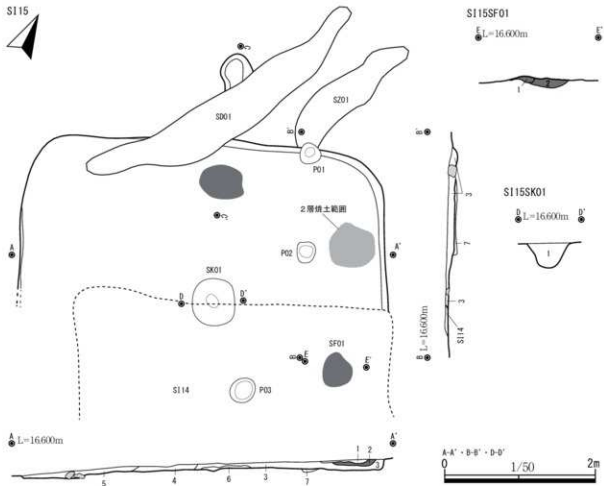
堆積土は暗褐色土の単層である。堆積が薄いため自然堆積か人為堆積かの判断はできなかった。

<カマド> 東壁中央付近に1基設置されている。燃焼部と煙道部のみ残存している。燃焼部焼土の範囲は0.44×0.26mの楕円形で、被熱深度は約4cmである。橙色の焼土で、混和物が認められないことから現地性と考えられる。煙道部は、長さ1.25m、幅0.45mで、底面は壁際から約5°の角度で緩やかに傾斜しながら煙出しへと至るが、煙出しとの境界は明瞭ではない。なお、天井部は削平されている為構築方法については不明であるが、堆積土上位に天井崩落土と考えられる黄褐色土が確認されていることから、削り貫き式の可能性がある。

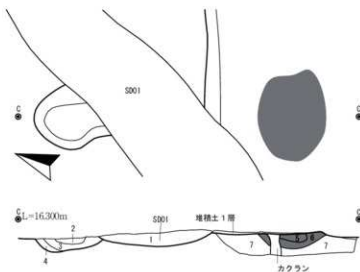
煙道部の堆積土は、にぶい黄褐色土と黒褐色土で構成されているが、各層とも混和物が少ないことから自然堆積によるものと考えられる。

<付属施設> 土坑1基と柱穴1個を検出している。S K 01は床面中央やや東寄りの位置にあり、上面規模は0.7×0.65mである。断面形は箱形で、深さは0.15mである。形状的には貯蔵穴の可能性はあるが、遺物の出土が無いため不明である。P 01は床面中央やや北寄りの位置にあり、規模は直径0.3m、深さ0.25mである。柱穴の可能性もあるが、周囲に対応するものが検出されていない





S115 カマド



S115 カマド・SK01 (C-C')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 φ1-10mmの炭化物15%、焼土2% SK01堆積土
2. 7.5YR4/2 灰褐色 しまりやや密、粘性有 縁辺に5YR6/8焼土20%、φ2-10mmの2.5Y7/8黄色土10%
3. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや密、粘性有 φ1-5mmの10YR4/4褐色土5%
4. 10YR4/4 褐色 しまり・粘性共に有
5. 7.5YR6/6 褐色 しまり密、粘性やや強 φ1-2mmの焼土10%・白色粒3% 燃焼部焼土
6. 2.5YR5/8 明赤褐色 しまりやや密、粘性有 燃焼部焼土
7. 10YR4/4 褐色 しまり・粘性共に有 10YR2/1黒色土15%

S115 (A-A'・B-B')

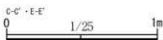
1. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 5YR5/8明赤褐色焼土10%
2. 5YR5/8 明赤褐色 しまり密、粘性有 10YR2/2黒褐色土15% 二次層積焼土
3. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 φ1-3mmの黄色土5%
4. 10YR6/4 にふい黄褐色 しまり密、粘性強 10YR2/2黒褐色土20%
5. 2.5Y7/8黄色と10YR2/2黒褐色の混合土 しまり・粘性共に有 草屑に埋含む
6. 10YR4/4 褐色 しまり・粘性共に有 下層遺構 (SK26)の堆積土が変性したもの
7. 10YR2/2 黒褐色と10YR5/3にふい黄褐色の混合土 しまり密、粘性有 φ2-5mmの黄色土10% 床面積層土

S115SK01 (D-D')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり密、粘性有 φ5-100mmの焼土塊含む

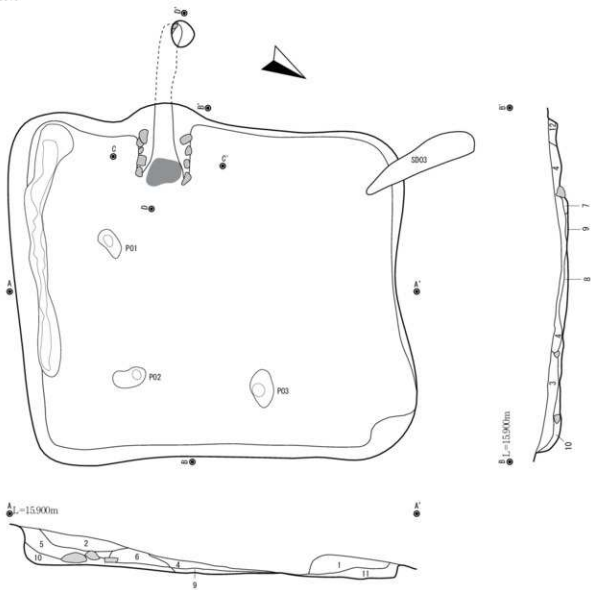
S115SF01 (E-E')

1. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有 焼土30%
2. 5YR6/8 褐色 しまりやや密、粘性有 凝地性焼土



第32図 S115

S116

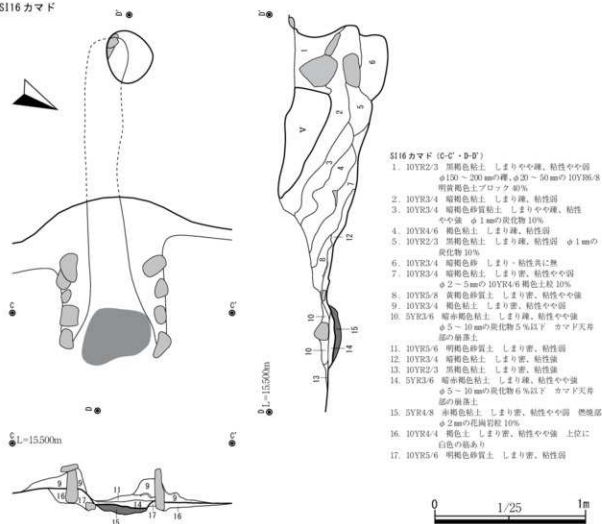


S116 (A-A'・B-B')

1. 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 しまり疎、粘性やや弱  $\phi 1\sim 3$ mmの10YR5/8黄褐色粘土粒10%
2. 10YR4/6 褐色粘土 しまりやや密、粘性やや強
3. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり疎、粘性やや弱  $\phi 1\sim 3$ mmの10YR5/8黄褐色粘土粒5%
4. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり疎、粘性やや弱  $\phi 1\sim 3$ mmの10YR5/8黄褐色粘土粒5%以下
5. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性強  $\phi 1\sim 10$ mmの炭5%以下
6. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 10\sim 20$ mmの10YR4/6褐色プロック10%
7. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 1\sim 2$ mmの炭化物5%
8. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 10\sim 50$ mmの10YR5/8黄褐色プロック10%
9. 10YR3/3暗褐色と10YR4/6褐色の混合土 しまり疎、粘性やや強 砂質土
10. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性強 層上面に $\phi 15$ mmの炭含む
11. 10YR4/6 褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 10$ mmの10YR5/8黄褐色プロック10%
12. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり疎、粘性やや弱

0 1/50 2m

## SI16 カマド



第34図 SI16カマド

め性格は不明である。また、床面北東隅で焼土を検出している。上面規模0.5×0.4m、被熱深度6cmで、混和物を含まない橙色焼土であることから、現地性と考えられる。

〈出土遺物〉 床面直上を中心に出土している（第143・196図）。土器は408.1gのみの出土であるが、接合率は比較的高い。古代の土器3点を掲載した(229～231)。229は土師器高台付の底部破片で、内面に黒色処理が施される。230は非轆轤成形の土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。231は須恵器壺の頭部付近の破片である。この他、刀子と考えられる鉄製品の破片を1点掲載した(M12)。

〈性格と年代〉 カマドを有することから、住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、床面直上から出土した土師器高台杯の形態から平安時代（9世紀後葉）に構築・使用されたものと考えられる。

## SI15（第32図、写真図版21）

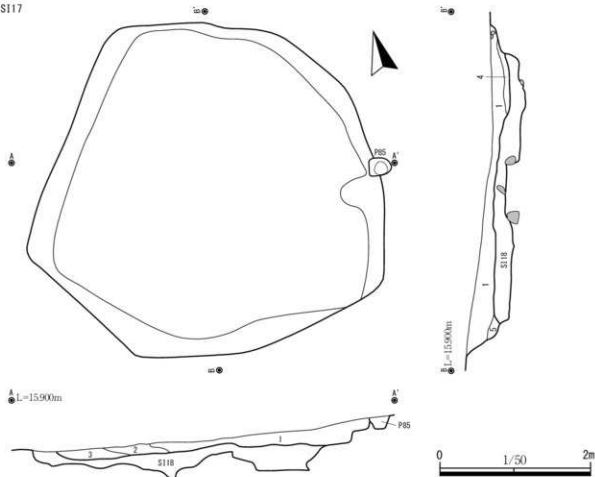
〈検出状況〉 IA 17a グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅴ層上面で、SI14と一連の黒褐色の方形プランとして検出した。先述の通り、本遺構の一部をSI14が壊していることが確認されている。この他にはSK72・73、SD01、SZ01と重複関係にある。煙道部付近を壊されていることからSD

01は本遺構より新しいものと考えられるが、その他については本遺構が上面あるいは一部を壊していることから古いと考えられる。

〈形状・堆積土〉 平面形は方形プランと考えられるが、西壁及び南壁はほとんど削平されている為全形は不明である。残存する範囲の規模は、 $4.85 \times 2.0$  mである。カマドを基準とした主軸方位は、 $N-20^{\circ}-W$ である。壁面は北東コーナー部付近でのみ確認されており、最も残りの良い東壁では検出面からの深さ0.15 mである。床面はV層を掘り込んだ後に黒褐色土とにぶい黄褐色土を充填することで構築されており、特にカマド周辺は10～14cmと厚く充填されている。

堆積土は6層に細分した。黒褐色土とにぶい黄褐色土が主体であり、堆積は薄いか斜面上方である東側から流れ込んでいる状況が確認できることから自然堆積と考えられる。東壁付近の堆積土上位には橙色焼土の堆積が確認されているが、黒褐色土がブロック状に混入していることから二次堆積の焼

S117



S117 (第35図A-A'・B-B')・S118 (第36図A-A'・B-B')

1. 10YR17/1 黒色 しまりやや硬、粘性弱  $\phi 1-10$  mmの炭化物 10%
2. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性強  $\phi 5-10$  mmの炭化物 5%
3. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりやや硬、粘性強  $\phi 5$  mmの炭化物 5%
4. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや密、粘性弱
5. 10YR2/3 黒褐色シロト しまりやや硬、粘性やや強
6. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性強
7. 7.5YR5/8 明褐色粘土 しまり密、粘性やや強 焼土含む
8. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり硬、粘性強  $\phi 1-5$  mmの炭化物・ $\phi 5$  mmの焼土粒各5%
9. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性強  $\phi 2$  mmの炭化物 10%
10. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまりやや硬、粘性強  $\phi 1$  mmの炭化物・ $\phi 5$  mmの焼土各5%
11. 10YR2/1 黒褐色 しまりやや密、粘性弱  $\phi 2$  mmの炭化物 5%未満
12. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりやや硬、粘性強  $\phi 1-2$  mmの炭化物 10%
13. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり硬、粘性強  $\phi 1-2$  mmの炭化物 10%、 $\phi 1$  mmの焼土 5%
14. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり硬、粘性やや強  $\phi 1$  mmの炭化物 5%
15. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強
16. 10YR3/3-3/4 暗褐色 しまり硬、粘性強
17. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり密、粘性強 上位に $\phi 20-50$  mmの砂鉄の聚中層を含む
18. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性やや強  $\phi 20-50$  mmの10YR5-6黄褐色ブロック 50%
19. 10YR5-6 黄褐色砂質土 しまり密、粘性弱  $\phi 1-5$  mmの炭化物 5% 10YR3にぶい黄褐色土層状に含む
20. 10YR3/3 暗褐色シロト しまり密、粘性強
21. 10YR3/3 暗褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 5$  mmの炭化物 5%
22. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性やや強  $\phi 5$  mmの炭化物 5%
23. 10YR5-6 黄褐色砂質土 しまり密、粘性弱

※1-5層がS117、6-18層がS118原積土、19-23層がS118床面構築土

土と判断している。

＜カマド＞ 北壁中央付近に1基設置されている。燃焼部と煙出しのみ残存している。燃焼部焼土の範囲は0.55×0.45mの楕円形で、被熱深度は0.1mである。非常によく焼けており、燃焼部中央（カマド断面第5層）は上面が硬化している。煙道部は北壁際からわずかに傾斜しながら煙出しへと至るようであるが、大部分をSD 01によって壊されている為全形は不明である。なお、北壁際から煙出し先端までの長さは1.2m、煙出しの深さは0.1mである。上面が大幅に削平されている為、構築方法については不明である。

＜付属施設＞ 土坑1基（SK 01）と柱穴3個（P 01～03）を検出した。SK 01は、床面のほぼ中央に位置する。上面規模は0.6×0.55m、断面形は逆三角形状で、深さは0.36mである。堆積土中位に廃棄されたと考えられる二次堆積焼土は確認されているが、遺物は出土していないため性格については不明である。柱穴は、北壁東寄り1個（P 01）、床面中央東側で1個（P 02）、南側で1個（P 03）検出した。柱穴直径は、P 01・02が27cm、P 03が35cm、深さはP 01が29cm、P 02が8cm、P 03が29cmである。

＜出土遺物＞ 堆積土及び床面直上から出土している（第143図）。土器は8618g出土しており、須恵器瓶1点を掲載した（232）。

＜性格と年代＞ カマドを有することから、住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、須恵器の出土とSI 14との重複関係から平安時代（9世紀後葉以前）に構築・使用されたものと考えられる。

#### SI 16（第33・34図、写真図版22）

＜検出状況＞ IA 13n～IA 14pグリッドにかけて位置する。本遺構の北西は、調査区中央の緩やかな傾斜地の端で、北側が斜面にかかり南側が斜面上方になっている。V層上面で検出した。北西にあるSD 04と重複しており、本遺構のほうが古い。

＜形状・堆積土＞ 平面形は方形で、上面規模は5.4×4.7mである。カマドを基準とした主軸方位は、N-113°-Wである。北壁の上端は床面から高さ5～10cmで、南壁の上端は高さ0.5m程ある。立ち上がり確認できる南壁では、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。サブレンチを入れた際に、黒褐色粘土に黄褐色土のブロックが混じる層（6・7層）があり、ほぼ水平であることから床面とした。厚さは0.2～0.3mである。床面の下は、斜面にあたる北側より南側を深く掘り込んでおり、掘り込みの段階で平らな状態に近づけようとしたと考えられる。堆積土は5層に細分した。斜面上方にあたる南壁側から流れ込んだ土が堆積しており、北壁側に行くにつれて層が薄くなる。断面の三角堆積の様子から、自然堆積土と考えられる。

＜カマド＞ 本遺構西壁の中央からやや南寄りに1基設置されている。本体部の残存状況は、袖上部と天井は崩落しており、袖石と考えられる礫が7個残っていた。カマドの袖土は、粘性が弱く、残っている箇所は袖石の周囲と、煙道との結合部である。袖石を据えている掘り方は地山まで届いていない。カマドに付随する煙道は、幅は約0.4m、長さは約1.1mで、結合部から煙出しに向かって緩やかに下っている。煙道の構築は地山天井が残っていることから、刳り貫き式である。煙道の堆積土は、燃焼部側から流れ込んだ本体部の天井や、袖土の崩壊した土に加え、同じく燃焼部側から流れ込んだ本遺構周辺の土であると考えられる。煙出しは、煙出し周辺の土と燃焼部側から流れ込んだ土の堆積土で埋まったと考えられる。

＜付属施設＞ 柱穴3個（P 01～P 03）と周溝を検出した。柱穴は床面精査時には確認できなかつ

たが、床面構築土除去中に床面中央南西寄りでは1個（P 01）、南東側で1個（P 02）、北東側で1個（P 03）検出した。褐色土のブロックが混じった床面に類似した堆積土で、深さは10～15cm程度である。周溝は南壁付近で検出した。プランは壁に沿った長楕円に近い形状である。周溝は、柱穴と同じ堆積土で、深さは約0.3mである。

<出土遺物> カマド周辺から出土している（第143・144・196図）。土器は4795.7g出土しており、6点掲載した（233～238）。この他、環状の鉄製品が1点出土している（M15）。また、東西トレンチ西側の2層中からサケ属の一種と考えられる尾椎が1点出土している（第VI章第1節参照）。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器の年代観から、平安時代（9世紀後葉）に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 17（第35図、写真図版23）

<検出状況> I A 12 p グリッドに位置する。本遺構の周囲は沢跡で、V層をⅢ層である暗褐色土が覆っており、その上面で検出した。重複している遺構は、同位置にあるS I 18・S X W 01と、東端にあるS B 02（P 85）である。S I 18の堆積土の上に本遺構の床面があり、さらに本遺構の堆積土をP 85が掘り込んでいることから、S I 18・S X W 01より新しく、S B 02より古いといえる。

<形状・堆積土> 平面形は不整な円形で、上面規模は4.5×4.3mである。上端から床面までの高さは0.1～0.6m程で、立ち上がりはどの壁も床面から約50°の角度で立ち上がる。床面は、S I 18の堆積土を掘り込んで形成されており、黒褐色土で硬化面はなく、全体が西に向い僅かに傾斜している。床面を整えるために充填した土は確認できなかった。堆積土は5層に細分した。黒～黒褐色土が主体であり、混和物の多寡で分層している。床面中央では焼土が1基確認されたが、ブロック状で黒褐色土が混入していることから二次堆積と考えられる。堆積土は、斜面上方になる東側から流れ込んだ土が自然堆積したものと考えられる。

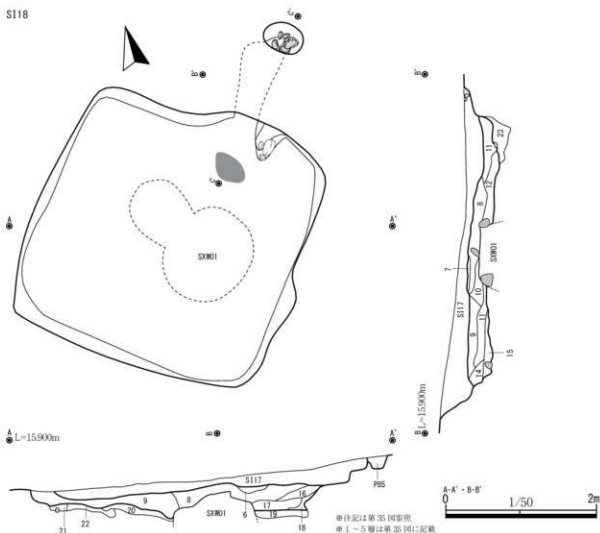
<カマド> 検出されていない。

<付属施設> 検出されていない。

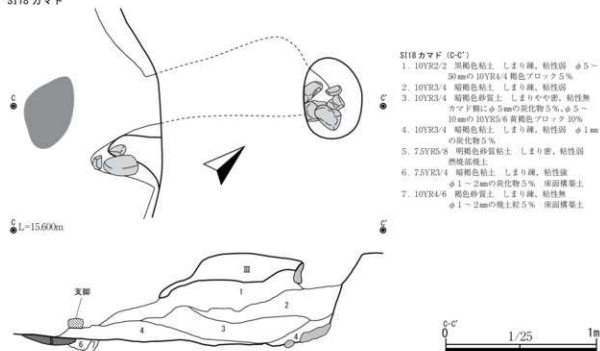
<出土遺物> 本遺構の下位に位置するS I 18、S X W 01と同時に掘り下げを行っており、遺物の取り上げはそれらの遺構堆積土も含めている。遺物は堆積土全域から出土している（第144・175・176・185・196・201図）。土器は9792.0g出土しているが、大半が製塩土器の破片である。古代の土器は土師器2点と須恵器2点を掲載した（239～242）。製塩土器は南東区トレンチから多量に出土しており、S I 18堆積土のものを含めて23点掲載した。（688～710）。なお、本遺構2～3層出土のものほとんどはS I 18床面直上出土の破片と接合関係にあることから、特徴についてはS I 18の項目で記載している。本遺構の堆積土中からのみ出土したものは3点掲載した（698～700）。いずれも口縁部の破片で横ナア調整が認められる。また、本遺構の直下にあるS X W 01に帰属する可能性もあるが、堆積土中から出土した金床石1点（S146）、製塩土器と同じ層中から出土した鉄鎌1点（M16）と羽口3点（M78～80）を掲載した。この他、周辺からの流れ込みと考えられる縄文土器を1点（243）、剥片石器3点（S41・43・44）、礫石器3点（S147・149・150）を掲載した。

<性格と年代> 堆積土の状況などから堅穴建物であると想定して精査を行ったが、カマドや炉が検出されなかったため明らかにはできなかった。古代の堅穴建物であるS I 18との重複関係から、古代に属すると考えられる。

S118



S118 カマド



第36図 S118

## S I 18 (第36図、写真図版23)

＜検出状況＞ I A 12 p グリッドに位置する。S I 17と同じくⅢ層の上面で検出した。本遺構の直上にあるS I 17と壁が重複しており、S I 17が本遺構の堆積土中に床面を構築していたことから本遺構のほうが古いと判断した。なお、本遺構のカマドの主軸に対し、S I 17の南北辺に垂直な主軸は約11°東側に傾いている。また床面中央付近ではS X W 01を検出しているが、S X W 01は本遺構の黒褐色の堆積土上にあるため、S X W 01のほうが新しいと考えられる。

＜形状・堆積土＞ 平面形は方形で、上面規模は3.5×3.5mである。カマドを基準とした主軸方位は、N-14°-Eである。検出面からの深さは0.2～0.3mで、壁面は垂直に立ち上がっている。床面は、V層まで掘り込んだ後にV層を平坦に整える部分と構築土で整地する部分とがあるが、凹凸があり平坦ではない。床面構築土は、5～20cmの厚さで上面が硬化していた。

堆積土は17層に細分した。斜面上方の西側から流れ込みで、自然堆積と考えられる。南東区の8層下位と12層から大量の製塩土器片が出土した。なお、本遺構は埋没の途中で窪地状になっており、後述するS X W 01はこの窪地を利用して構築されている。断面観察では11・12層が堆積した時点でS X W 01の構築が行われていたものと判断できることから、10層より上位は厳密にはS X W 01廃絶後の堆積といえるが、本遺構の堅穴の範囲内に堆積したものとしてここで提示した。

＜カマド＞ 北東壁の中央より東側に位置している。本体部で残存しているのは東側の袖部の一部と、燃焼部である。被熱範囲は0.3×0.4m、深さ7cm程で被熱範囲北側に支脚が残っていた。袖部は、燃焼部の中心が残存している袖の先から0.4m程離れていることから、現状より長かったと考えられる。煙道はほぼ水平であり、幅は約0.5m、長さ約1mである。煙出しには礫が詰められていることから、本遺構を廃絶する際に人為的に詰められたと考えられる。また煙出しには東側に段上になっている箇所があり、中心から西にずれたところに煙道が通っている。このことから、煙道を先に列り貫き、その後煙出しを掘る際に、煙道の中心からずれた位置で掘削したため煙道外にぶつかり、煙出しの途中で段ができたと考えられる。煙道は地山天井が残っていることから、列り貫き式である。堆積土は7層に細分した。堆積土のうち3層は地山天井の一部が崩落したもので、他の層は煙出し上部から流れ込んだものである。

＜付属施設＞ 検出されていない。

＜出土遺物＞ 床面直上及びカマド周辺、堆積土中から出土している（第144・145・175・176・178図）。土器は11295.2g出土しているが、大半は製塩土器の破片であり、その他は周辺から流れ込んだと考えられる縄文土器である。製塩土器は23点掲載しており、そのうち本遺構に帰属するものは20点である（688～697・701～710）。非常に器壁が厚く、色調が橙色であることから土師器・縄文土器とは大きく雰囲気異なる。口縁部付近まで復元できた688をみると、平底で体部は直立するように立ち上がる円筒形の器形であったと考えられる。また、煙道内堆積土から出土した砥石1点（S151）、カマド脇等から出土した羽口4点を掲載した（M81～84）。このうちM83は燃焼部直上から出土しており、支脚に転用されていた可能性がある。その他、本遺構に帰属するものでは無いが文様が特徴的な縄文土器10点（244～253）、剥片石器2点（S42・45）、礫石器1点（S148）を掲載した。

＜性格と年代＞ カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器に土師器は含まれないが、形態から平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の構築・使用と考えられる。なお、本遺構からは多量の製塩土器が出土していることから遺構内に土器製塩の痕跡があるか否かを精査したが、明確にそれを示すような施設または出土状況を確認することはできなかった。

(村田・中島)



## S I 19 (第37・38図、写真図版25)

<検出状況> I A 14 r グリッドに位置する。検出面はV層上面で、黒褐色の方形プランとして検出した。東壁付近の堆積土中にSK 82が掘削されているが、本遺構のほうが古い。

<形状・堆積土> 平面形は方形で、上面規模は4.65×3.8mである。カマドを基準とした主軸方位はN-46°-Eである。壁面は東壁が外方に開くが、その他はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは0.35mである。床面は、中央部はV層を平坦に整えることで構築されているが、壁面付近は若干掘り込まれており、にぶい黄褐色土を充填している。上面は使用によって硬化している。堆積土は8層に分層した。黒褐色土とにぶい黄褐色土が主体であり、自然堆積と考えられる。

<カマド> 北壁中央やや東寄りに1基設置されており、袖部・燃焼部・煙道部が残存していた。袖部は礫を芯材としているが、被覆粘土は確認されなかった。燃焼部焼土は上面規模が0.35×0.3m、被熱深度は8cm程度である。煙道部は壁面際からの長さ1.4mで、緩やかに下りながら煙出しへ至る。煙出しの深さは0.45mである。なお、上部が削平されている為構築方法は不明である。

<付属施設> 柱穴5個と周溝1条、焼土1基を検出した。柱穴は床面中央東寄りに1個(P 01)、西寄りに1個(P 02)、南壁際に3個(P 03~05)検出した。直径はP 01が25cm、P 02が24cm、P 03が28cm、P 04が30cm、P 05が66cm、深さはP 01が8cm、P 02が8cm、P 03が55cm、P 04が25cm、P 05が29cmである。位置と規模の類似性からP 01・02が屋根中央を支える主柱穴になる考えられる。柱穴の堆積土は、黒褐色土または灰褐色土である。周溝は西壁面と南壁西端付近に沿って掘削されており、堆積土は8層と類似した黒褐色土である。焼土(S F 01)は床面中央で検出した。平面形は不整な楕円形で、上面規模は0.9×0.38m、被熱深度は3cm程度である。

<出土遺物> カマド周辺と堆積土中から出土している(第145・196図)。土器は24296g出土しているが、接合率は低い。このうち土師器4点を掲載した(254~257)。254は内面黒色処理の坏、255は非黒色処理の坏である。その他、堆積土中から刀子が1点(M17)出土している。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土師器坏の形態から平安時代(10世紀初頭頃)に構築・使用されたものと考えられる。なお、本遺構の周辺で検出された柱穴のうち、P 87・89・91・121・122・124・125は、壁面からの距離が類似することから、本遺構の上屋を支える外柱穴になる可能性もある。

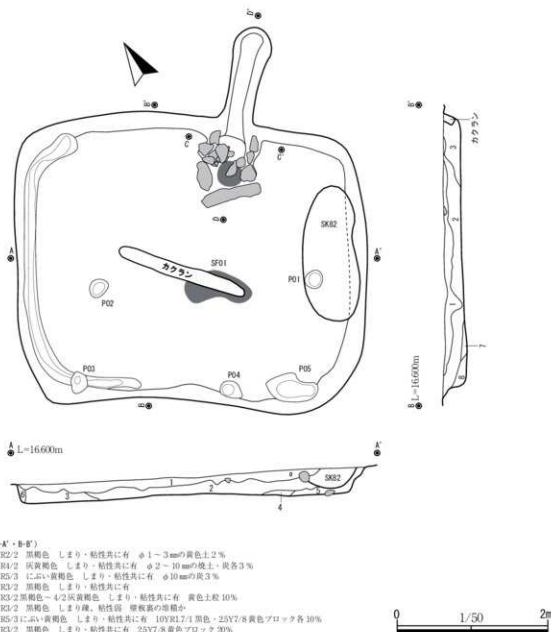
(村田)

## S I 20 (第39図、写真図版26・27)

<検出状況> I A 11・12 s・t グリッドに位置する。検出面はV層で、方形の黒色土の広がりを確認したため堅穴建物と判断し精査を行った。S I 21・24、S D 02と重複するが、いずれよりも本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> 残存部分から推測される平面形状は隅丸方形である。緩斜面下方の遺構西側では壁を確認することはできなかったが、残存する遺構上端のより西方に2個の柱穴を検出した。これらの柱穴と遺構北東隅及び南東隅に位置する柱穴2個が方形のプランになることから、これらも本遺構に伴うものと考えた。残存する東壁から、前述の遺構西方に位置する柱穴外端までの範囲を遺構範囲とすると、上面規模は4.9×4.3mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-29°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されているが、遺構中央から東側の範囲で5cm程度の貼床を検出している。検出面からの深さは一番深い東壁付近で25cm程度である。残存している北・西・南壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は6層に細分した。堆積土の主体は黒色土で、埋土上層に炭化物粒及び焼土粒が少量混入している。堆積の様相は自然堆積である。

S119



S119 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1~3mmの黄色土2%
2. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 2~10mmの炭土・炭屑3%
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 10mmの炭3%
4. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有
5. 10YR3/2 黒褐色 4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有 黄色土粒10%
6. 10YR3/2 黒褐色 しまり疎、粘性弱 壁紙裏の塗粉小
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に有 10YR1.7/1 黒色・25Y7/8 黄色ブロック各10%
8. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色ブロック30%

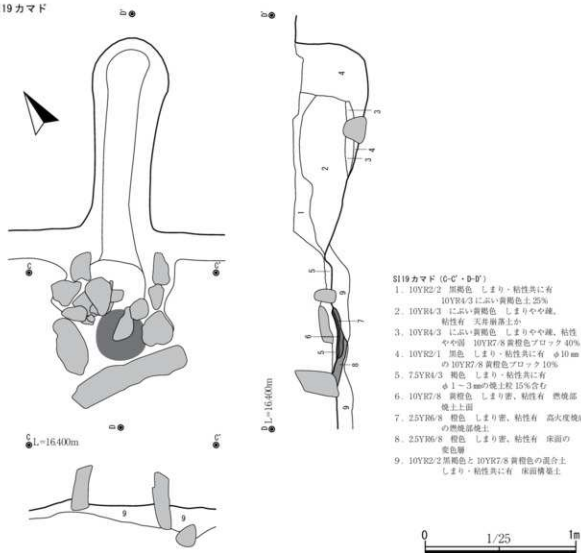
第37図 S119

〈カマド〉 北壁中央の位置に1基設置されていた。燃焼部焼土・右袖構築土下部・右袖芯材である礫・煙道が残存していた。燃焼部焼土径は50×40cm、被熱深度は5cm程度である。煙道は北壁際から長さ1.4mで、幅は40cmである。煙道底面は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、外端に向け緩やかに下る形状である。煙道の堆積状況から考えると、掘り込み式の煙道であったと考えられる。

〈付属施設〉 柱穴7個と土坑2基を検出した。柱穴は遺構北東隅で2個(P01・02)、南東隅で1個(P03)、南側中央で2個(P04・05)、北西隅で1個(P06)、南西隅で1個(P07)検出した。柱穴の直径はP01が26cm、P02が22cm、P03が15cm、P04が19cm、P05が30cm、P06が27cm、P07が41cm、深さはP01が26cm、P02が23cm、P03が12cm、P04が13cm、P05が36cm、P06が27cm、P07が41cmである。

土坑は床面東側中央で1基(SK01)、床面中央南側で1基(SK02)検出した。SK01の直径

S119カマド



## S119カマド (C-C'・D-D')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有  
10YR4/3 に近い黄褐色土 25%
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 しまりやや硬、粘性  
粘性有 土層崩壊土少
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 しまりやや硬、粘性  
やや弱 10YR7/8 黄褐色ブロック 40%
4. 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に有 φ10mm  
の10YR7/8黄褐色ブロック 10%
5. 7.5YR4/3 褐色 しまり・粘性共に有  
φ1-3mmの焼土粒 15%含む
6. 10YR7/8 黄褐色 しまり密、粘性有 燃焼部  
焼土上面
7. 2.5YR6/8 橙色 しまり密、粘性有 高火度焼成  
の燃焼部焼土
8. 2.5YR6/8 橙色 しまり密、粘性有 床面の  
変色層
9. 10YR2/2 黒褐色と10YR7/8黄褐色の混合土  
しまり・粘性共に有 床面構築土

第38図 S119カマド

は0.57m、深さは0.66mである。SK 02は、本遺構に関連するものとして精査を行ったが、用途については不明である。建物床面と同じ高さで現地性焼土を検出したが、これを断ち割ったところ焼土下面に褐色粘土と炭化物を多く含む黒色土を主体とした土坑があることが分かった。現地性焼土は直径66cm、被熱深度8cm程度、長楕円形の焼成土坑は径1.3×0.75m、深さは43cmであった。土坑床面及び壁面にはまばらに粘土が分布しており、貼床及び貼壁が構築されていた。土坑は住居貼床を切って構築されているため、建物構築最初期段階に同土坑と現地性焼土は形成されていなかったと考えられる。なお、精査段階では土坑と現地性焼土を一連の遺構であると考えたが、それぞれが単独の遺構である可能性も考えられる。

＜出土遺物＞ 床面直上から土器がまとまって出土しており、接合率が高い（第145・146・178・186・196図）。総量で2868.1g出土しており、5点掲載した（258～262）。258～261は非臈輪成形の土師器甕で、258・260・261は長胴形で口縁部が「く」の字状に屈曲する1類である。262は須恵器甕で、焼き影れが著しく器面には凹凸が多くみられる。この他、床面直上から出土した台石と砥石を各1点（S152・153）、堆積土中から出土した刀子1点（M18）と床面直上から出土した紡錘車1点

(M19) を掲載した。また、本遺構に帰属するものではないが、剥片石器 1 点 (S46) も掲載した。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器に坏類は含まれていないが、須恵器瓶の体部形態を根拠とすると平安時代 (9 世紀後葉～10 世紀初頭) に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 21 (第 39 図、写真図版 26・27)

<検出状況> I A 11・12 r・s グリッドに位置する。検出面は S I 20 貼床下面である。S I 20 貼床掘削時に短い溝状の黒色土を確認したため、これを断ち割った。断面観察の結果、堅穴建物のカマド煙道下部のみが残存し、それ以外の部位は S I 20 構築時に失われたものと判断した。S I 20 と重複するが、本遺構のほうが古い。

<形状・堆積土> 煙道下部のみが残存する為、堅穴建物平面の詳細は不明である。煙道外端の方向から考えると、カマドの主体部は緩斜面上方である遺構東側に存在したと考えられる。

<カマド> 煙道部分のみが残るため詳細は不明である。煙道部分の残存長は長さ 1.2 m、幅は 47 cm である。煙道底面の形状は外端に向け緩やかに下る形状だった。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土中から少量出土している (第 146 図)。土器は 30.9 g 出土しており、須恵器瓶 1 点を掲載した (263)。

<性格と年代> 住居として使用された堅穴建物の痕跡と考えられるが、全形は不明である。重複する S I 20 との関係から平安時代 (9 世紀後葉以前) に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 22 (第 40 図、写真図版 28)

<検出状況> I A 9・10r・s グリッドに位置する。検出面は V 層で、方形の黒色土の広がりを確認したため堅穴建物と判断し検出を行った。S K 87～89 と重複するが、S K 87 のみ本遺構より古い。

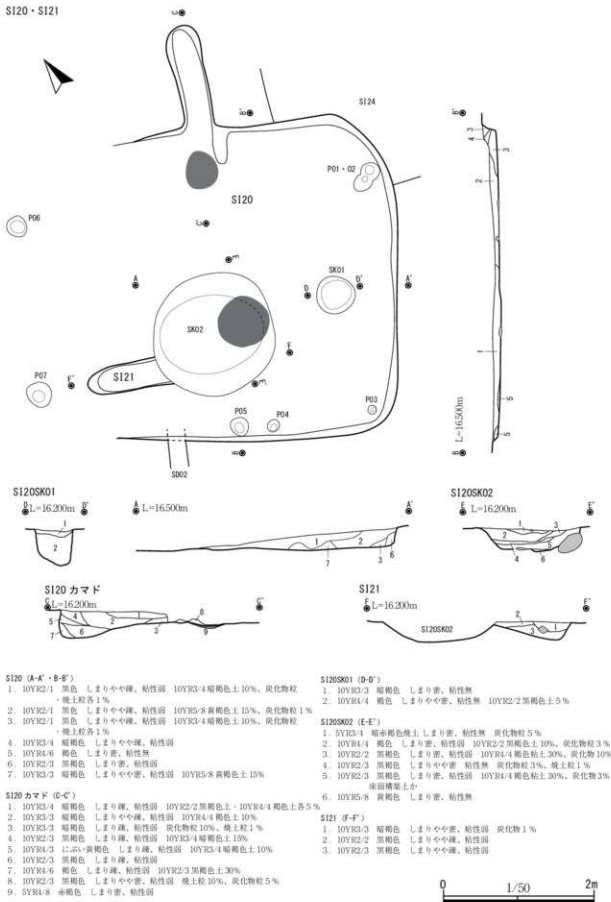
<形状・堆積土> 平面形状は隅丸方形である。上面規模は 4.7 × 4.6 m である。カマド煙道方向を基準とした主軸方位は N - 52° - E である。床面は V 層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い北壁付近で 25 cm 程度である。壁は四方ともほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は 6 層に細分した。堆積土の主体は黒色土及び暗褐色土で、全層に地山と同系色の黄褐色土を少量含む。堆積の様相は人為堆積である。

<カマド> 北壁中央の位置に 1 基設置されていた。燃焼部焼土、左袖構築土下部、煙道が残存していた。燃焼部焼土径は 62 × 50 cm、被熱深度は 8 cm 程度である。煙道は北壁際から長さ 1.7 m で、幅は 30 cm である。煙道底面は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、煙道下端もほぼ水平である。煙り出し部分の埋土に複数の礫が混入していた。

<付属施設> 柱穴 1 個、土坑 2 基を検出した。柱穴は北隅で 1 個 (P 01) 検出した。柱穴の直径は 40 cm、深さは 25 cm である。土坑は東隅で 1 個 (S K 01)、中央で 1 基 (S K 02) 検出した。土坑径は S K 01 が 57 cm、S K 02 が 79 cm、深さは S K 01 が 16 cm、S K 02 が 26 cm である。柱穴・土坑ともに埋土上層に微量の炭化粒及び焼土粒が混入している。

<出土遺物> カマド内及び堆積土中から出土している (第 146・201 図)。土器は 703.7 g 出土しており、2 点を掲載した (264・265)。264 の土師器坏は、轆轤成形で内面に黒色処理が施される I 類である。265 は非轆轤成形の土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲する I 類である。その他、床面直上から出土した刀子 2 点 (M20・21) と堆積土中から出土した羽口 1 点 (M85) を掲載した。ま

S120・S121



た、本遺構に帰属するものではないが、剥片石器1点(S47)を掲載した。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器は乏しいが、轆轤成形の土師器坏が含まれることから平安時代(9世紀後葉)に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)

#### S I 23 (第41図、写真図版29)

〈検出状況〉 I A 8 r グリッドに位置する。V層上面で検出した。本遺構周辺は、V層上・中とも0.1～1.0m程の礫が散在する。重複関係は無く、単独で存在する。

〈形状・堆積土〉 平面形は礫を避けている箇所や、地山が真砂土を多く含んでいるため崩れやすい箇所があるため不整形な方形である。カマドを基準とした主軸方位は、N-153°-Wである。規模は、3.7×3.5mである。北側は、集中している上端付近の礫を除去せずに、避けて掘り込んでおり、南側半分に比べて壁の立ち上がり不明瞭である。床面は東から西へ緩やかに傾斜しており、北西隅は後世の改変により削平されていた。床面を整地した構築土はなかった。堆積土は8層に細分した。主に褐色土・暗褐色土であり、東側斜面から流れ込んだ土の自然堆積と考えられる。

〈カマド〉 南壁の東寄りに設置されている。本体部は燃焼部以外残っていない。燃焼部の被熱範囲は0.3×0.3mで、しまりは悪く、深さ5cm程度である。袖石の抜き取り穴や、袖石自体も周囲にはなかった。煙道は、長さ約1.1m、幅約0.3mである。地山天井が残っているため、割り貫き式である。堆積土は12層に細分した。燃焼部から流れ込んだ土が1・3～6層にあたり、8～12層は煙出しから流れ込こんだ土による自然堆積と考えられる。

〈付属施設〉 柱穴2個と焼土2基を検出した。本遺構内の東西に1個ずつあり(P 01・02)、堆積土は褐色土の単層である。深さはどちらも4cm程度である。焼土は東壁南寄りの位置と燃焼部焼土西側で各1基確認している(S F 01・02)。いずれも現地性で、S F 01は平面規模が0.41×0.38m、被熱深度は4cm程度である。S F 02は平面規模が0.36×0.31m、被熱深度は1～2cmと非常に浅く図示できなかった。

〈出土遺物〉 カマド周辺から出土している(第146図)。土器は330.1gのみの出土であり、破片数は少ないが接合率が高い。このうち古代の土器5点を掲載した(266～270)。いずれも非轆轤成形の土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。この他、本遺構に直接帰属するものではないが、5層から出土した礫石器1点(S229)を掲載した。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器の中に坏が含まれていないため詳細な年代は不明であるが、平安時代(9世紀後半)に構築・使用されたものと考えられる。

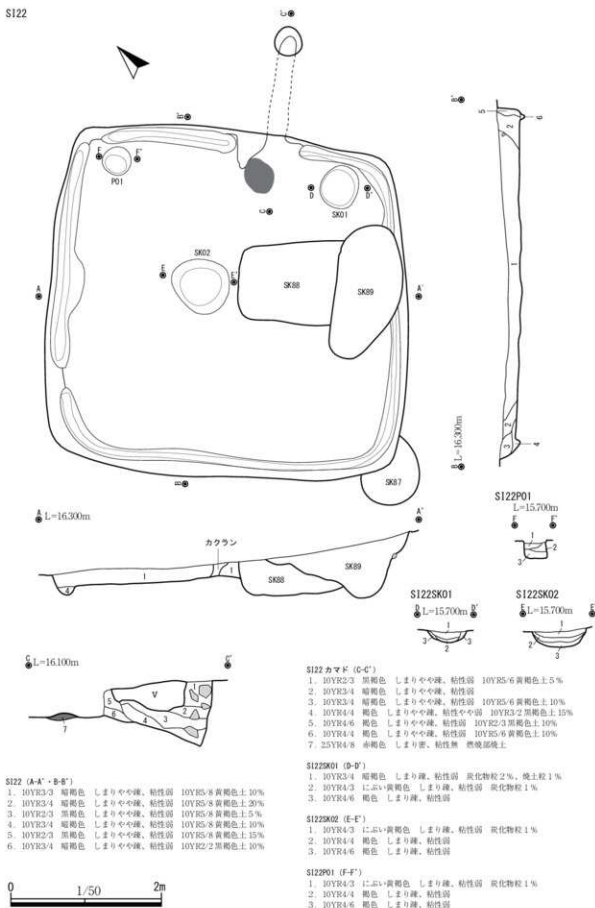
(村田・中島)

#### S I 24 (第42図、写真図版30)

〈検出状況〉 I A 10・11t・u グリッドに位置する。検出面はV層で、方形の黒色土の広がりを確認したため、堅穴建物と判断して精査を行った。S I 20、S K 86と重複するが、いずれも本遺構より新しい。

〈形状・堆積土〉 遺構北壁をS K 86、遺構南西隅をS I 20によって破壊されているため全容は不明だが、残存部分から推測される遺構の平面形状は隅丸方形である。上面規模は5.2×5.0mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-23°-Eである。床面はIV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い東壁付近で40cm程度である。残存してい

S122



第40図 S122

る壁はほぼ垂直に立ち上がるが、遺構東壁中央付近のみ緩やかに斜めに立ち上がる。堆積土は12層に細分した。堆積土下層の主体は黒色土で、堆積土上層の主体は暗褐色土である。堆積土全般に地山と同系色の黄褐色土塊が混入している。また堆積土中層から上層にかけては微量の炭化物粒が混入している。堆積の様相は自然堆積である。10cm程度の貼床が検出された。

＜カマド＞ 遺構北壁中央に1基設置されていた。燃焼部焼土・左右袖構築土下部・左袖芯材である礫・煙出しが残存していた。カマド煙道は遺構北壁で重複するSK86によって破壊されているため、形状は不明である。燃焼部焼土径は直径45cm、被熱深度は5cm程度である。煙道は北壁際から長さ1.5m程度である。前述のように煙道主体部が欠けているため、煙道幅及び煙道底面形状は不明である。煙出し底面は煙道底面より低い。

＜付属施設＞ 周溝1条、柱穴5個を検出した。周溝は東壁及び南壁際で検出した。深さは10cm程度である。柱穴は遺構南西で1個（P01）、南東隅で1個（P02）、東中央で1個（P03）、北西で1個（P04）、北東隅で1個（P05）検出した。柱穴の直径はP01が45cm、P02が38cm、P03が26cm、P04が31cm、P05が60cm、深さはP01が20cm、P02が55cm、P03が26cm、P04が62cm、P05が26cmである。

＜出土遺物＞ 床面直上及び堆積土中から出土している（第146・147図）。土器は34052g出土しており、5点を掲載した（271～275）。このうち、275は本遺構の煙道部を壊しているSK86から出土した破片と接合関係にある。271は小型の土師器甕、272は須恵器大甕、273は須恵器壺、274・275は非輪軸成形の土師器甕である。その他、本遺構に直接帰属するものではないが堆積土中位から出土した剥片石器1点（S102）と礫石器1点（S230）を掲載した。

＜性格と年代＞ カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器と他遺構との重複関係から平安時代（9世紀後葉以前）に構築・使用されたものと考えられる。

## S I 25（第43図、写真図版31）

＜検出状況＞ I A 11・12u・vグリッドに位置する。検出面はV層で、方形の黒色土の広がりを確認したため、堅穴建物と判断し検出を行った。他遺構との重複は無い。

＜形状・堆積土＞ 遺構の平面形状は隅丸方形である。緩斜面下方の西壁では壁の立ち上がりを確認することができなかったが、貼床が残存しており、床面形状を特定することができた。上面規模は5.0×4.6mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-70°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い東壁で15cm程度である。残存している北・南・東壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は5層に細分した。堆積土の主体は褐色土で、埋土全体に炭化粒が少量混入している。堆積の様相は自然堆積である。3cm程度の貼床が検出された。

＜カマド＞ 緩斜面上方の遺構東壁中央やや南寄りの位置に1基設置されていた。燃焼部焼土・右袖構築土下部・右袖芯材である礫・煙道が残存していた。燃焼部焼土径は直径50cm、被熱深度は5cm程度である。煙道は東壁際から長さ1.7mで、幅は36cmである。煙道は床面より6cm程度上面の位置から掘り込まれていた。煙道底面はほぼ平坦で、煙出し外端部は内反する形状であった。煙道堆積土主体は黒色土だが、多くの黄褐色土地山塊が混入していた。煙道の堆積状況から考えると、掘り込み式の煙道であったと考えられる。

＜付属施設＞ 柱穴7個を検出した。柱穴は遺構南壁東寄り1個（P01）、南壁西寄り1個（P02）、北西で1個（P03）、北東で1個（P04）、南西隅で1個（P05）、南東隅で1個（P06）、南



壁中央で1個(P 07)検出した。柱穴の直径はP 01が28cm、P 02が30cm、P 03が37cm、P 04が40cm、P 05が40cm、P 06が38cm、P 07が27cm、深さはP 01が56cm、P 02が64cm、P 03が42cm、P 04が59cm、P 05が17cm、P 06が13cm、P 07が10cmである。

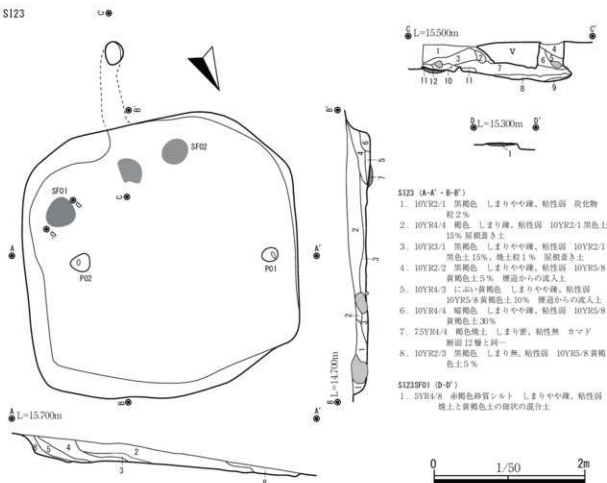
〈出土遺物〉 床面直上及び堆積土中から出土している(第147図)。土器は1532.0g出土しており、4点を掲載した(276~279)。276は土師器坏で、轆轤成形で内面に黒色処理が施されるI類である。277~279は高台坏で、いずれも轆轤成形で内面に黒色処理が施されるI類であるが、体部形状は皿形(277-278)と碗形(279)の2種類がある。その他、堆積土中位から出土した羽口1点を掲載した(M86)。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器の年代観から平安時代(9世紀後葉)に構築・使用されたものと考えられる。

### S I 26 (第44図、写真図版32)

〈検出状況〉 I A 8・9 u v グリッドに位置する。検出面はV層で、直径40cm程度の現地性焼土を確認した。焼土周辺を精査した結果、焼土北側に煙道下端と考えられる溝状の黒色土を検出した。

S123



#### S123 カマド (C-C')

1. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり礫、粘性強 10YR4/6 褐色土がブロック状に混入
2. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり礫、粘性強  $\phi$ 100mmの礫混入、 $\phi$ 50mmの10YR4/6 褐色ブロック5%
3. 10YR3/4 暗褐色粘質粘土 しまりやや礫、粘性やや強 10YR4/6 褐色土が混ざり、砂の割合が多い
4. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまりやや礫、粘性強  $\phi$ 2mmの炭化物5%未満
5. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまりやや礫、粘性やや強
6. 7.5YR4/6 暗褐色シルト しまりやや礫、粘性やや強 焼土。
7. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性やや弱  $\phi$ 10mmの10YR5-8 黄褐色土山ブロック5%未満

#### S123 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/1 黒褐色 しまりやや礫、粘性弱 炭化物 粒2%
2. 10YR4/4 褐色 しまり礫、粘性弱 10YR2/1 黒色土 15% 層状置き上
3. 10YR3/1 黒褐色 しまりやや礫、粘性弱 10YR2/1 黒色土15%、焼土粒1% 層状置き上
4. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや礫、粘性弱 10YR5-8 黄褐色土5% 煙道からの流入土
5. 10YR4/3 に近い黄褐色 しまりやや礫、粘性弱 10YR5-8 黄褐色土10% 煙道からの流入土
6. 10YR4/4 褐色 しまりやや礫、粘性弱 10YR5-8 黄褐色土30%
7. 7.5YR4/4 褐色焼土 しまり密、粘性無 カマド 断面 12層と同一
8. 10YR2/3 黒褐色 しまり無、粘性弱 10YR5-8 黄褐色土5%

#### S123SF01 (D-D')

1. 5YR4/8 赤褐色粘質シルト しまりやや礫、粘性弱 焼土と黄褐色土の混在の混合土

8. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり礫、粘性強
9. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR4/4 褐色粘土の混合土 しまりやや礫、粘性強  $\phi$ 1mmの炭化物30%
10. 10YR3/4 暗褐色粘質土 しまり礫、粘性強 標出し層からの流入土
11. 10YR5-6 黄褐色粘土 しまり密、粘性やや弱 崩落土
12. 7.5YR4/4 褐色焼土 しまり密、粘性無

さらに周辺の精査を進めたところ、焼土周辺に貼床の痕跡と考えられる方形の褐色粘土を確認したため、これを堅穴建物と判断し検出を行った。他遺構との重複は無い。

〈形状・堆積土〉 遺構の平面形状は隅丸方形である。残存する貼床面の規模は3.3×3.2mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-8°-Eである。床面はV層上層を平坦に構築されており、ほぼ平坦である。削平の影響から四方の壁面は確認できなかった。貼床と考えられるしまりの強い褐色粘土には黒褐色土が混入しており汚損していた。貼床厚さは遺構北側で5cm程度、南側で15cm程度である。

〈カマド〉 北壁中央に1基設置されていた。燃焼部焼土・煙道下端が残存していた。燃焼部焼土径は直径45cmである。被熱深度は8cm程度だが、検出状況から考えると焼土上部は削平により失われている可能性が高い。煙道は北壁際から長さ1.3mで、幅は40cmである。煙道底面は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、外端に向け緩やかに下る形状だった。

〈付属施設〉 検出されていない。

〈出土遺物〉 堆積土中から土器が30.9g出土しているが、細片のため図示していない。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、建物の形態から古代に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 27 (第45・46図、写真図版33)

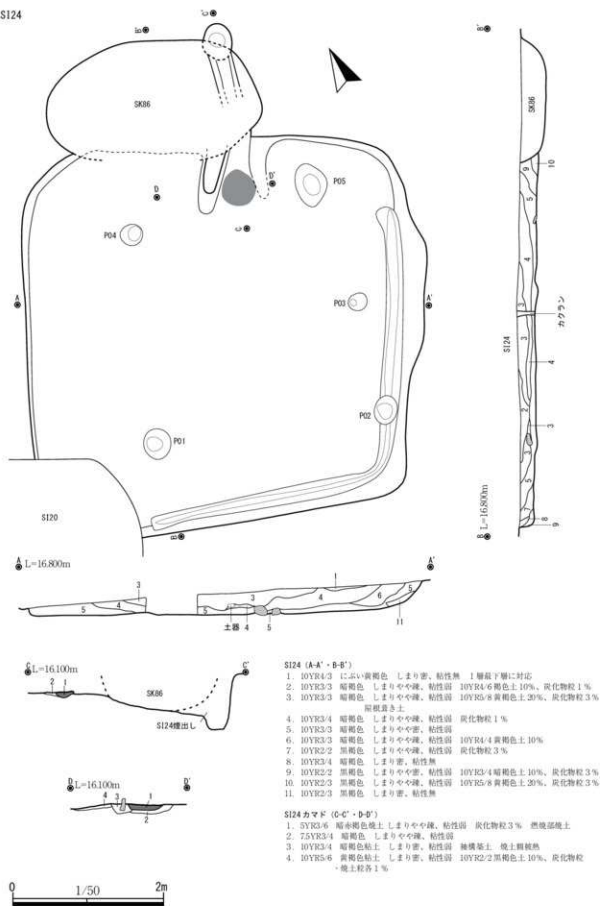
〈検出状況〉 I A 20・21o・p グリッドに位置する。検出面はV層で、不整形な黒色土プランを確認した。プランが不鮮明であったため黒色土全体を一段下げたところ、方形の堅穴建物1棟と円形土坑2基が重複していることを判断できたためプランを把握した後に精査を行った。SK 52～54と重複するが、いずれも本遺構より古い。

〈形状・堆積土〉 遺構の平面形状は隅丸方形である。上面規模は3.8×3.7mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-0°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い東壁で40cm程度である。残存する壁は全てほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は6層に細分した。埋土上層で黒褐色土、下層で暗褐色土を主体とする。東壁側の堆積土下層に炭化物粒及び焼土粒が少量混入している。堆積の様相は自然堆積である。遺構北側で5cm、南側で10cm程度の貼床が検出された。

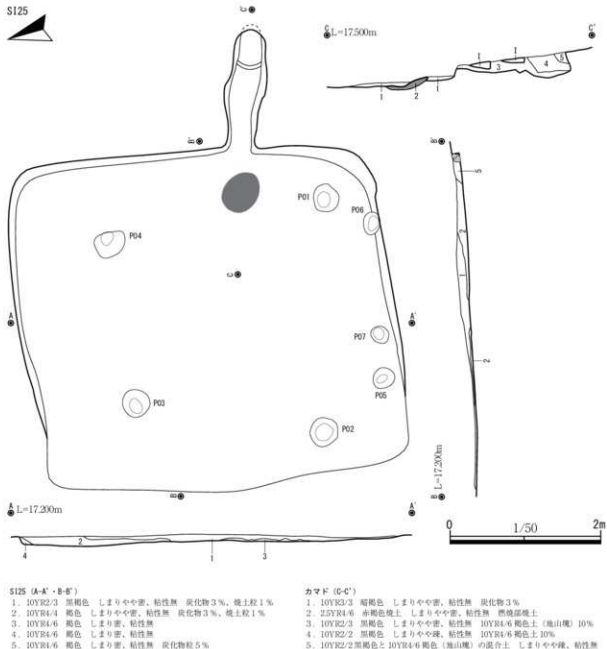
〈カマド〉 北壁中央やや西寄りの位置に1基設置されていた。燃焼部焼土・左右袖構築土下部・左右袖芯材の礫・煙道が残存していた。左右袖は黒褐色粘土と黄褐色粘土で構成されており、芯材に板状礫を用いていた。しかし、これとは別に左右袖の内側中央に垂直方向に自立する板状礫を検出した。検出当初はカマド天井石が崩落し検出位置に取まった可能性を考えたが、礫外端が左右それぞれの袖構築土である粘土に刺さっていたため、その可能性を打ち消した。板状礫下端は燃焼部焼土上端から5cm程度浮いた高さに位置していた。燃焼部焼土直上の礫下端は弱く被熱していたことから礫が現地性を保っている可能性を考え、右袖を長軸方向に断ち割った。断ち割り結果、用途は不明であるが板状礫がカマド袖内側に意識的に垂直に立てられていたことが明らかになった。燃焼部焼土径は46×28cm、被熱深度は10cm程度である。煙道は北壁際から長さ1.1m、幅35cmである。煙道底面は床面より20cm程度高い位置から掘り込まれていた。煙道下端はほぼ平坦である。煙道の堆積状況から考えると、掘り込み式の煙道であったと考えられる。

〈付属施設〉 周溝2条、柱穴4個を検出した。周溝は東壁南端と南壁西端で検出された。幅はそれぞれ14cm、20cm、深さはそれぞれ13cm、14cmである。柱穴は南壁中央で3個(P 01・02・04)、南

S124



第42図 S124

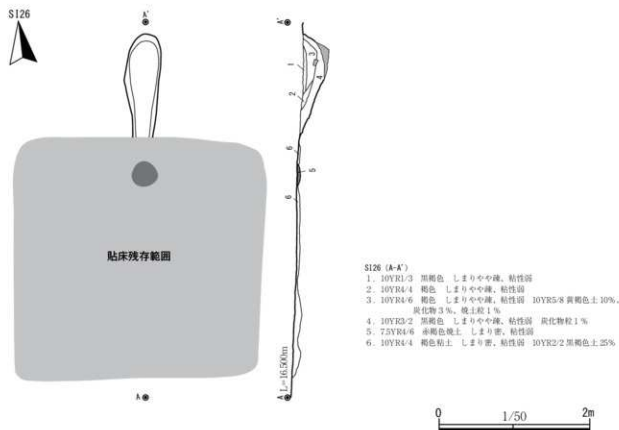


第43図 S125

壁西端で1個(P03)、南壁東端で1個(P05)検出した。柱穴の直径はP01が36cm、P02が33cm、P03が26cm、P04が24cm、P05が30cm、深さはP01が18cm、P02が15cm、P03が10cm、P04が13cm、P05が10cmである。

＜出土遺物＞ カマド周辺及び堆積土中から出土している(第147・148図)。土器は13494g出土しており、4点を掲載した(280～283)。このうち282・283はS I 33・34から出土した破片と接合関係にある。いずれも非輪軸成形の甕であるが、280は口縁部が内湾しながら立ち上がるⅡ類、281は「く」の字状に屈曲するⅠ類である。

＜性格と年代＞ カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器の中に坏が含まれていないため詳細な年代は不明であるが、平安時代(9世紀後葉か)に構築・使用さ



第44図 S126

れたものと考えられる。

(中村)

#### S I 28 (第47図、写真図版34)

〈検出状況〉 I A 22 s グリッドに位置する。V層上面で黒褐色の不整形な方形プランとして検出した。他遺構との重複関係は無く、単独で存在する。

〈形状・堆積土〉 平面形は方形と考えられるが、後世の削平によって東壁と南壁の一部が残るのみである。残存している部分の規模は、3.6×3.0mである。遺存状況の良い東壁を基準とした主軸方位は、N-2°-Eである。壁面は残存する部分では垂直に立ち上がっており、東壁付近の検出面からの深さは0.2m前後である。床面は一度V層まで掘り込み、その部分にぶい黄褐色土を充填して水平に整えている。このぶい黄褐色土は全面に充填されていたものと考えられるが、北側及び西側は削平によって確認できなかった。

堆積土は黒褐色土の単層で、斜面上方にあたる東側から流れ込んだ自然堆積土と考えられる。

〈カマド〉 床面北端に薄い現地性焼土 (S F 01) があり、これが燃焼部焼土であると考えられることから、これより北側に煙道等が存在していた可能性がある。S F 01の平面形は不整形で、平面規模は0.34×0.24m、被熱深度は3cm程度である。

〈付属施設〉 土坑を1基 (S K 01) 検出した。S K 01は方形プランの土坑で、上面規模は0.9×0.7m、深さは0.25mである。床面構築土を除去した段階で検出したものであり、床面構築の段階で周辺より深く掘り込んだ掘り方の一部の可能性もある。

〈出土遺物〉 床面構築土中から土器が174.8g出土しているが、細片のため図示していない。

〈性格と年代〉 燃焼部の可能性がある現地性焼土が検出されていることから住居として使用された

堅穴建物の可能性があるが、出土遺物も乏しいため性格や詳細な年代については不明である。

#### S I 29 (第48図、写真図版35)

〈検出状況〉 I A 22 t グリッドに位置する。検出面はⅢ～Ⅴ層上面で、黒褐色の方形プランとして検出した。S K 93・94と重複関係にあり、S K 94に南東壁の大部分を壊されている。

〈形状・堆積土〉 平面形は方形プランと考えられるが、前述の通り南東壁の大部分をS K 94に壊されていることと南東コーナー付近が調査区外にあることから全形は不明である。検出した範囲での上面規模は、3.2 × 2.4 mである。壁面の立ち上がりは明確ではなく、床面から明瞭な傾斜の変化をもたずに外方に開きながら立ち上がる。検出面からの深さは、最も深い南端付近で0.35 m前後である。床面は、Ⅴ層まで掘り込み、その部分に黒褐色粘土を充填して平坦に整えることで形成されている。ただし、充填が薄く礫が露出する部分も多いため床面には細かい凹凸がみられる。

堆積土は5層に細分した。黒褐色土が主体であり、斜面上方である東側からの流れ込みによる自然堆積と考えられる。

〈カマド〉 北東壁のやや北寄りに1基設置されている。煙道部のみ残存している。煙道部は壁際からの長さ1.1 m、幅0.55 mで、堆積土上面及び内部には構築の際に使用されたと考えられる礫が認められた。堆積土は6層に細分したが、いずれも遺構内堆積土と同じく黒褐色土が主体の自然堆積土である。

〈付属施設〉 床面中央よりやや南側で柱穴を1個(P 01)検出した。P 01は、直径40cm、深さ20cm弱と小型のもので、堆積土は黒褐色土の単層である。

〈出土遺物〉 堆積土中から土器が6226 g出土しているが、細片のため図示していない。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、形態から古代に構築・使用されたものと考えられる。

(村田)

#### S I 30 (第49図、写真図版36)

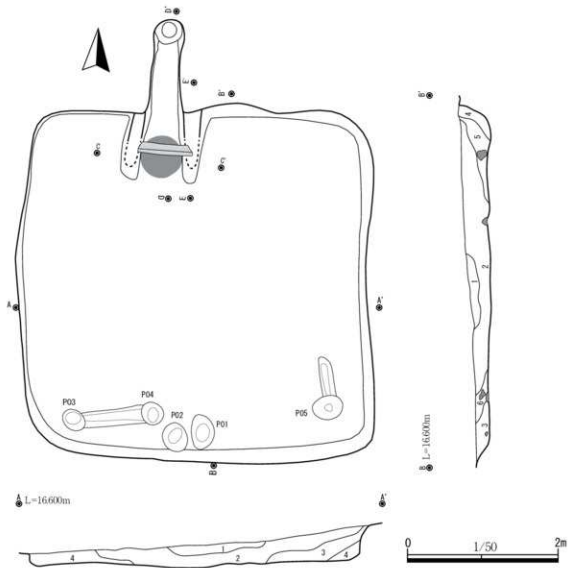
〈検出状況〉 I A 12・13 x・y グリッドに位置する。検出面はⅤ層で、緩斜面中腹で土器片を含む不整形な黒色土プランを確認した。トレンチ掘削の結果、遺構床面と考えられる平坦面・現地性焼土・遺物集中を確認したため堅穴建物と判断し精査を行った。他遺構との重複は無い。

〈形状・堆積土〉 緩斜面下方である西面及び南面西隅で壁面を確認することはできなかったため全容は不明である。焼土付近の黄褐色地山面には少量の黒色土が混入し、汚損及び硬化していた。この硬化面範囲が方形であることから平面形状は方形であると考えられる。硬化面範囲は4.6 × 4.3 mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN - 118° - Eである。床面全体に凹凸がみられ、緩斜面下方である遺構西側が低い。検出面からの深さは一番深い東壁で25cm程度である。残存する壁面はいずれも緩やかに外に広がるように立ち上がる。堆積土は4層に細分した。堆積土の主体は黒色土である。堆積の様相は自然堆積である。

〈カマド〉 東壁中央やや南寄りの位置に1基設置されていた。燃焼部焼土・煙道が残存していた。燃焼部焼土の直上でカマド芯材の可能性を持つ板状礫を複数検出した。燃焼部焼土径は60 × 44cm、被燃深度は5cm程度である。煙道は東壁際から長さ78cm、幅40cmである。煙道底面は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、外端に向け緩やかに下がる形状だった。煙道の堆積状況から考えると、掘り込み式の煙道であったと考えられる。

〈付属施設〉 検出されていない。

S127



## S127 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり疎、粘性弱 10YR3/3 暗褐色土10%
2. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱
3. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱
4. 10YR4/4 褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR2/2 黒褐色土5%
5. 10YR3/4 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱 炭化物粒1%、焼土5%
6. 10YR3/3 暗褐色 しまり疎、粘性弱 10YR3/4 暗褐色土15%

## S127 カマド (C-C'・D-D'・E-E')

1. 10YR3/4 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR4/4 褐色土10%
2. 10YR4/3 濃い黄褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR4/4 褐色土10%
3. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR4/4 褐色土10%
4. 7.5YR4/6 褐色土 しまり密、粘性無 焼成灰土
5. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり密、粘性無 焼成灰土
6. 10YR2/3 黒褐色粘土と10YR5/8 黄褐色粘土の混合土 しまり密、粘性無 焼成灰土
7. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性無 焼成灰土

第45図 S127

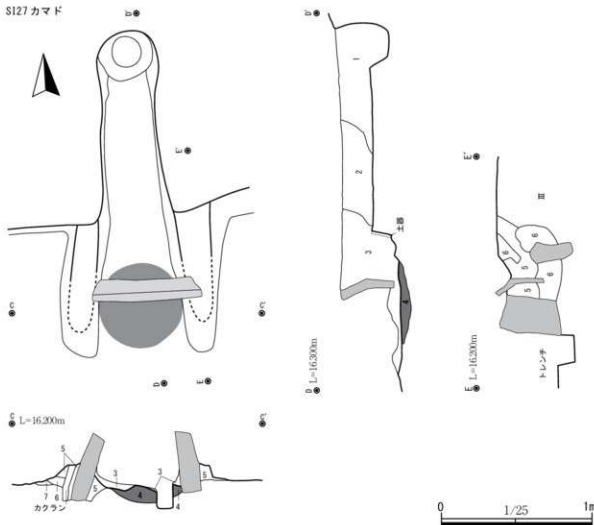
〈出土遺物〉 床面直上及び堆積土中から出土している(第148図)。土器は24320g出土しており、3点を掲載した(284～286)。いずれも非轆轤成形の土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。

〈性格と年代〉 カマドを有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土した土器は土師器甕のみであり年代決定の根拠に乏しいが、遺構の形態と放射性炭素年代測定の結果から(第VI章第2節参照)、平安時代に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)

## S131 (第50・51図、写真版37)

〈検出状況〉 IB 17a グリッドに位置する。検出面がV層の露出範囲であり、周辺は植林により



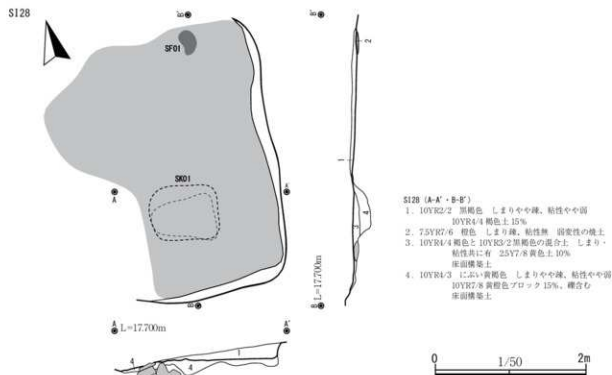
第46図 S127カマド

切り株が多く存在したためプランの把握は困難であった。しかし、切り株の周辺から須恵器大甕を主体とした土器類が多量に出土し、かつ焼土の分布もみられたことから、確認できた黒褐色の不整形なプランを遺構とみなして精査を行った。その結果、大部分を根の浸食や削平によって壊されていたものの、方形プランを有する竪穴建物であることを確認した。なお、SK 97と重複関係にあるが、本遺構のほうが新しい。

〈形状・堆積土〉 平面形は方形であるが、西側の壁面は削平によって残存していない。残存している部分の上面規模は $4.0 \times 3.8$  mである。壁面は、V層の礫層を掘り込んでいる為凹凸が著しい。最も深いカマド周辺での深さは0.4 mである。床面は、V層を掘り込んで水平に整地することで構築されているが、礫の露出が多く平坦ではない。部分的に粘土の分布範囲は認められるが、貼床と考えられるほどの厚さの堆積は確認できないことから、使用当時にも礫は露出しており、それらを被覆するような貼床は敷設されていなかったと考えられる。

なお、本竪穴建物は焼失住居と考えられ、床面には数箇所焼土の集中範囲が確認されている。これら焼土については平面位置を記録した後に断ち割りを行ったが、カマド燃焼部焼土以外は全て燃焼部になるものではなく、焼失した際に形成された焼土と判断した。大型の炭化材は検出されていないが、焼土の周辺では小型の炭が散布していることもこの点を補強するものと考えられる。





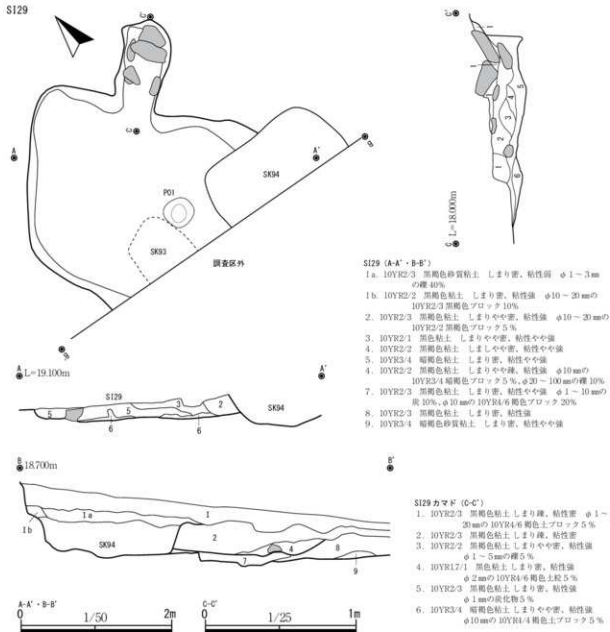
第47図 S128

<カマド> 東壁の中央やや南寄りに1基設置されている。遺存状況は良くないが、本体部と煙道部が残存している。本体部は袖部の一部と燃焼部が残存している。袖部は礫を芯材として構築されたものと考えられるが、大部分が壊されている為詳細な構築方法については不明である。燃焼部焼土の範囲は $0.5 \times 0.5$  mの円形で、被熱深度は8 cmである。なお、燃焼部焼土の東端には支脚として使用されたと考えられる土師器甕の底部が出土している。煙道部は割り貫き式で、底面はほぼ水平に煙出しへと至る。東壁際から煙出し端部までの長さは1.5 m、幅0.35 mである。堆積土は黒褐色土の単層であるが、煙出し部には意図的に埋めたと考えられる礫が確認できる。

<付属施設> 土坑1基(SK01)と柱穴2個(P01・02)、周溝を検出した。SK01は床面北西隅に位置し、木の根の浸食によって北側が壊されているが、直径約0.6 mの円形プランのものと考えられる。堆積土中及び周辺からは須恵器大甕の破片が多量に出土している。これらは1個体に復原できることから、SK01内に設置されていたものが攪乱によって上部が壊されたものと考えられる。柱穴は床面北東隅で1個(P01)、南壁中央で1個(P02)検出した。柱穴の直径は、P01が29 cm、P02が32 cm、深さはP01が17 cm、P02が23 cmである。周溝は東壁の北端からカマド袖付近までの範囲で検出した。上面幅は22 cm、深さは17 cmで、黒褐色土の単層である。

<出土遺物> カマド周辺とSK01、堆積土中から出土している(第148・149・197・201図)。土器は21060.1 g出土しているが、ほとんどがSK01から出土した須恵器大甕(289)の破片である。この須恵器大甕を含めて8点を掲載した(287～294)。287は土師器坏で、轆轤成形で内面に黒色処理が施されるIA類である。288・290～294は非轆轤成形の土師器甕で、290・291・293は口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。なお、293は頸部付近に補修孔の可能性がある穿孔が確認できる。その他、堆積土中から出土した鉄鏃1点と刀子2点(M22～24)、羽口2点(M87・88)を掲載した。また、堆積土中から鉄滓が444 g出土している。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。前述の通り



第 48 図 S I 29

焼失住居であり、今回の調査では唯一の事例である。また、須臾器大甕を設置した貯蔵穴を有するものとしても唯一のものである。なお、炉は検出されていないが、羽口や鉄滓が出土していることから内部で鉄生産活動が行われていた可能性がある。カマド及びSK01出土の土器類の年代観から平安時代（9世紀後葉以降）に構築・使用されたものと考えられる。

(村田)

## S I 32 (第 52 図、写真図版 38)

〈検出状況〉 II A 9・10a・b グリッドに位置する。検出面はV層で、表土除去時に黒色土及び黒褐色土による不整形なプランを確認した。周辺の検出を続けたところカマド煙道の可能性を持つ褐色土の溝状プランと丸みを帯びた方形プランが連続していることが分かったことから古代の堅穴建物跡であると判断し精査を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 遺構東半が調査区外へと続くほか遺構南端が攪乱の影響を受けているため、平面形状は不明である。残存する平面形状は隅丸方形だが、調査区内の方形プランの堅穴建物中もっとも丸みを帯びている。残存する上面規模は3.3×1.6mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-52°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されている。精査時に床面を掘りすぎてしまったため、図版写真の床面は地山の黄褐色土となっているが、断面観察の結果、床面に5cm程度の暗褐色粘土質土の貼床が存在した可能性が高い。同様の理由で検出面からの深さきも不明だが、断面観察によると遺構の深さは18cm程度であるが遺構上部は後年の削平のために失われている。残存している壁面中、北壁と南壁はほぼ垂直に立ち上がるが、カマド側の西壁では外に広がるように緩やかに立ち上がる。堆積土は5層に分層した。6層が貼床となるため、床面は6層上面である。堆積土上層の主体が褐色土、下層の主体が黒褐色土である。遺構直上は元来畑作地であり、上部の褐色土(1~3層)は畑耕作に伴い移入した表土と堆積土の混合土である可能性が高い。遺構の純粋な堆積は下層の壁際に残存する黒色土・黒褐色土のみである。堆積の様相は自然堆積である。

<カマド> 南西壁に1基設置されていた。燃焼部焼土と煙道が残存していた。燃焼部焼土は35×20cm、被熱深度は3cm程度である。煙道は西壁際から長さ55cm、幅35cmである。煙道底面は床面とほぼ平坦に掘り込まれていた。煙道下端は床面よりも3cm程度低く、煙道部分の堆積状況から考えると、掘り込み式の煙道であったと考えられる。同カマドは燃焼部焼土芯から直近の西壁までの距離が55cm、同じく焼土芯から煙道外端までの距離が120cm程度と離れている。貼壁があった可能性や、同一掘り方内での遺構の改変があった可能性も想定できるが、同様の様相を読み取ることはできなかった。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土中から土器が41.7g出土しているが、細片のため図示していない。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、形態から古代に構築・使用されたものと考えられる。

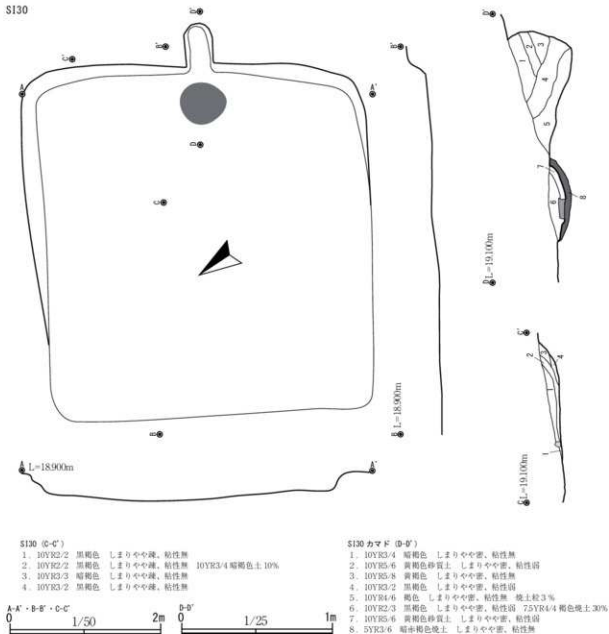
### S I 33 (第53図、写真図版39・40)

<検出状況> I A 21・22 q・r グリッドに位置する。検出面はV層で、炭化物粒及び焼土粒が混入した不整形な黒色土の広がりを確認した。黒色土周辺は礫が多く、この礫周辺には大量の土器片及び鉄滓が含まれていた。この黒色土が遺構である可能性を考えたが、プランが不明瞭であったため、ベルトを残し、黒色土全体を一段下げた。結果、黄褐色土と黒褐色土の混合土による硬化面を検出した。この硬化面直上で2基のカマドと1基の地床炉を確認したことから、これを堅穴建物床面と判断し精査を行った。S I 34と重複するが本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> 北壁は攪乱によって失われている。西壁を含む西側の床面は後年の削平によって失われている。また、南側が調査区外へと続くため、平面形状は不明である。残存する上面規模は5.0×3.6mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-67°-Eである。床面はS I 34床面上に10~15cm程度の炭化物粒及び焼土粒が混入した黄褐色土と黒褐色土の混合土による貼床を造ることで構築されている。貼床上面は平坦ではなく、各所に5cm程度のくぼみや凹凸が確認できた。表土直下が貼床であったため、堆積土は確認できなかった。

<カマド> 東壁に2基設置されていた。東壁北側に位置する1号カマドは燃焼部焼土と煙道が残存していた。燃焼部焼土は65×60cm、被熱深度は12cm程度である。煙道部は東壁際から長さ1.20m、幅40cmである。煙道底面は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、煙道外端に向け緩やかに下

S130



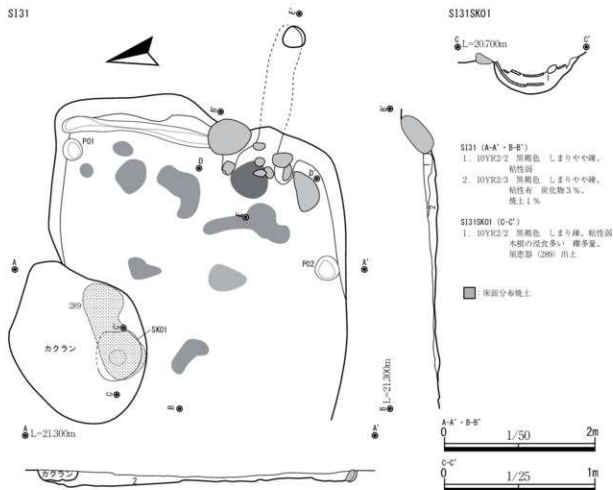
第49図 S130

る形状だった。煙道の構築方法は不明である。東壁南側に位置する2号カマドは燃焼部焼土・煙道・煙出しが残存していた。燃焼部焼土径は直径60cm、被熱深度は15cm程度であるが検出状況から考えると上部は後年の削平によって失われている可能性が高い。煙道は東壁際から長さ1.6m、幅30cmである。煙道底面は床面とほぼ同じ高さから掘り込まれており、煙道外端に向け緩やかに上がる形状だった。煙道の構築方法は不明である。2基のカマドの新旧関係は不明である。

<炉> 地床炉2基を検出した(SF 01・02)。燃焼部焼土径はSF 01が33cm、SF 02が30cm程度、被熱深度はSF 01が3cm、SF 02が6cm程度である。ともに酸化還元し黒色化していた。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> S I 34と重複関係にあり、同時に掘り下げを行ったためここでS I 34のものも含めて記載する。床面直上とS I 33床面構築土、堆積土中と攪乱の中から出土している(第149・150・

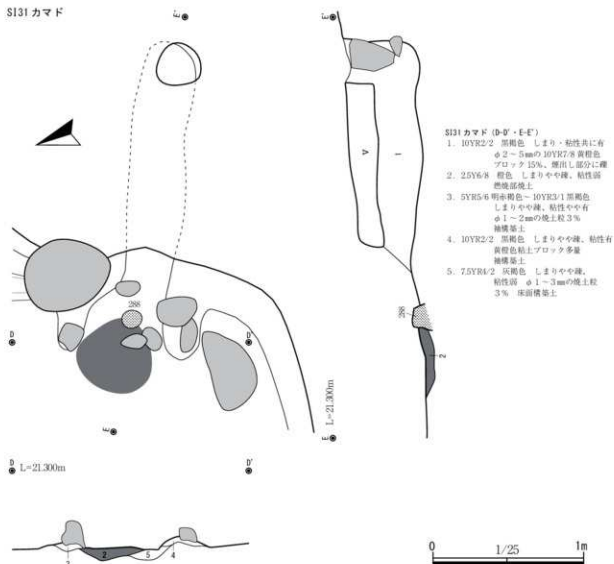


第50図 S131

186・197・199・201・202・204図)。このうちS I 33床面構築土にはS I 34堆積土と同一の部分も含まれていると思われる、厳密にはその土中から出土した遺物はS I 34にのみ帰属する可能性は高いが、ここで報告する。土器は9241.4 g出土しているが、このうち4774 gは攪乱からの出土である。攪乱内には近世の遺物も含まれている為、本遺構に伴うか否かは検討を要するが、ここでは遺構内にあったものが攪拌された状態であったと仮定して記載する。土器は21点掲載した(295～315)。295～304は土師器坏である。このうち、295・296は轆轤成形で内面に黒色処理が施されるⅠ類、297～301は轆轤成形で黒色処理が施されないⅡ類、302は内外面に黒色処理が施されるⅢ類である。303・304は非轆轤成形で、内面に黒色処理が施される。305～309は非轆轤成形の土師器甕で、306は口縁部が「く」の字状に屈曲するⅠ類、309は口縁部が受け口状になるⅢ類である。310～312は須恵器大甕、313～315は須恵器瓶類の破片である。その他、S I 33床面構築土や堆積土から出土した刀子1点(M25)と羽口7点(M89～95)を掲載した。

なお、攪乱内からは近世に属する遺物も多量に出土しており、本遺構には直接関わりは無いが、特徴的なものとして寛永通宝1点(M66)と陶磁器3点(P9・34・36)を掲載した。また、縄文時代の遺物として礫石器3点(S154～S156)を掲載した。

<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器の中には奈良時代の可能性がある土師器坏Ⅰ類や甕Ⅲ類があるが、轆轤成形の製品が主体であることから平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)に構築・使用されたものと考えられる。

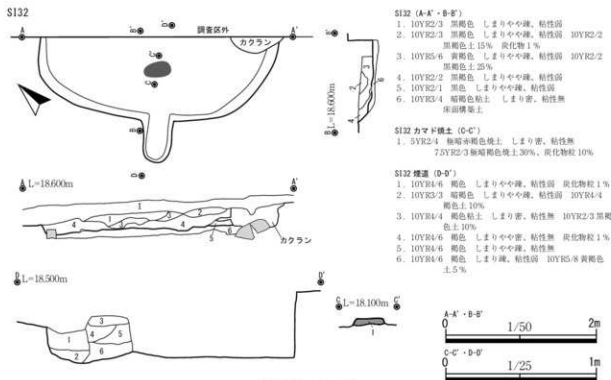


## S I 34 (第53図、写真図版39・40)

〈検出状況〉 I A 21・22 q・r グリッドに位置する。S I 33 貼床の精査段階時、貼床上端が平坦ではなく、遺構の東西で段差が確認された。建物使用時の段階で貼床高さに段差があった可能性や、貼床の一部が欠損している可能性を考慮し、ベルトを残したうえで、一段高い部分の貼床を下げた。その結果、S I 33 貼床の10cm程度下面で、ほぼ平坦な黒褐色土と褐色の混合土による硬質面を確認した。また、この硬質面上で3基の地床炉と鉄滓の集中を確認したことからS I 33に先行する竈穴建物があったと判断し精査を行った。S I 33と重複するが本遺構のほうが古い。

〈形状・堆積土〉 遺構上面はS I 33によって失われており、北壁は攪乱によって失われている。また、南側が調査区外へと続いたため、平面形状は不明である。残存する上面規模は5.0×3.6m程度である。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦で5~10cm程度の貼床が存在する部分もある。東側では貼床直上にS I 33床面構築土が載っているほか、西側の貼床直上が表土であるため、堆積土は確認できなかった。

〈炉〉 鉄生産関連炉を3基検出した(S X W 01~03)。炉同士の重複関係は無く、新旧関係は不



明である。燃焼部焼土径は S X W 01 が直径 45cm、S X W 02 が直径 40cm、S X W 03 が 60 × 45cm である。被熱深度は S X W 01 が 5cm、S X W 02 が 4cm、S X W 03 が 5cm であるが、検出状況から考えるといずれも上部は S I 33 構築時に失われている可能性が高い。最も被熱が激しい S X W 01 焼土中央部は酸化還元により黒色化していた。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> S I 33 の項目で記載している。なお、炉の周辺及び斜面下方である床面西側を中心に磁着しない流状滓が 29074.1g 出土している。

<性格と年代> 鍛冶炉を有することから工房として使用された竪穴建物と考えられる。S I 33 との重複関係から平安時代（9世紀後葉以前）に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)

### S I 35 (第 54 図、写真図版 41)

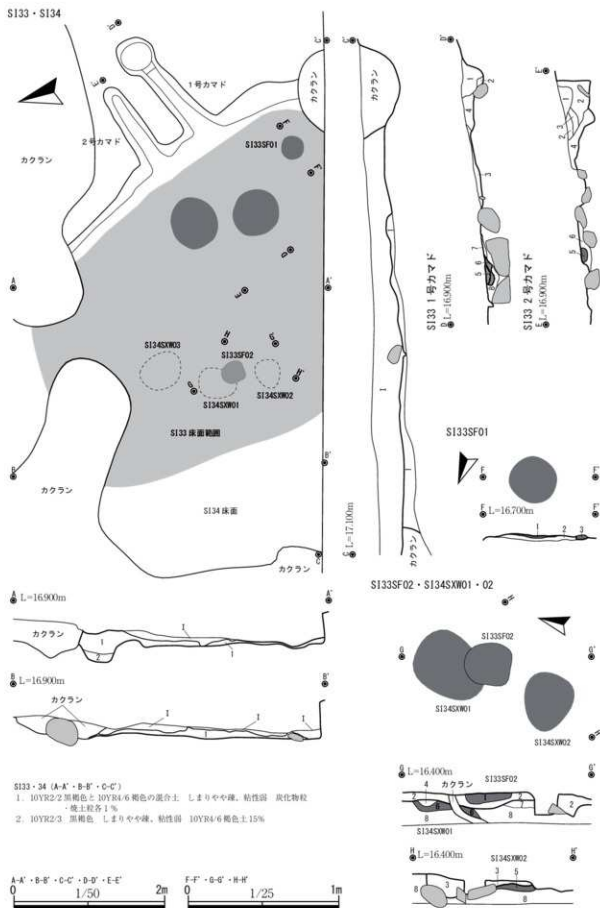
<検出状況> I A 18 n グリッドに位置する。検出面は V 層上面で、黒褐色の方形プランとして検出した。S I 36、S K 62・68 と重複関係にあり、そのいずれよりも本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> 平面形は方形であるが、遺存状況は悪く北壁と東壁は残存していない。残存する上面規模は 5.2 × 4.3 m である。壁面は北西隅付近で 10cm ほど残存しているが、V 層を掘り込んでいるため壁面には礫が露出しており直線的ではない。床面は V 層を平坦に整えることで形成されているが、床面中央及び西壁付近の一部では暗褐色土を充填して床面を構築している状況も確認している。

堆積土は 5 層に細分した。黒色土及び暗褐色土が主体であるが、堆積が薄いため自然堆積か人為堆積かの判断はできなかった。

<カマド> 検出されていない。

<炉> 鉄生産関連炉を 4 基 (S X W 01 ~ 04) 検出した。S X W 01 ~ 03 は床面のほぼ中央、S X W 04 は床面中央からやや北側の位置に構築されている。いずれも床面を円形に掘り込んで構築しよ



第53図 S133・34



## S133 1号カマド (0-F)

1. 10YR2/1 黒色 しまりやや疎、粘性弱 焼土焼5%
2. 10YR4/6 褐色 しまりやや疎、粘性弱
3. 10YR3/1 黒褐色 しまりやや密、粘性弱 炭化物粒1%
4. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱
5. 10YK3/4 黒褐色焼土 しまりや疎、粘性無
6. 2.5YR4/6 赤褐色焼土 しまりやや密、粘性無 燃焼部焼土
7. 10YR4/6 褐色 しまりやや密、粘性弱 炭化物粒3%、焼土粒1%
8. 5YR4/6 赤褐色 しまりやや密、粘性弱

## S133 2号カマド (F-F)

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱
2. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR5-8黄褐色土5%
3. 10YK3/4 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR5-8黄褐色土15%
4. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱
5. 5YR4/6 赤褐色焼土 しまりやや疎、粘性弱 燃焼部焼土
6. 10YR2/3 黒褐色焼土 しまりやや疎、粘性弱 炭化物5%

## S133F01 (F-F)

1. 7.5YR2/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱 炭化物粒・焼土粒各1%  
燃焼部焼土
2. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性無 炭化物粒・焼土粒各5%  
床面構築土
3. 5YR4/6 暗褐色焼土塊 しまりやや疎、粘性無

## S133F02・S134S0001・02 (0-F・F-F)

1. 7.5YR 褐色焼土 しまりやや疎、粘性弱 SC33SF02燃焼部焼土
2. 10YR2/1 黒褐色 しまりやや密、粘性弱 炭化物・焼土各1%  
S133床面構築土
3. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱 炭化物粒1%、焼土粒5%  
S133床面構築土
4. 10YR4/4 褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR4/6褐色土10% 6層の被熱層
5. 2.5YR2/4 極暗赤褐色焼土 しまりやや密、粘性無 S134SXW02燃焼部焼土
6. 2.5YR4/3 オリーブ褐色 しまりやや密、粘性無 S134SXW01燃焼部焼土  
腐化還元
7. 10YR2/3 暗褐色 しまりやや密、粘性無 鉄滓集中層 S134床面構築土
8. 10YR2/3 暗褐色と10YR5/6黄褐色の混合土 しまりやや疎、粘性弱  
焼土粒1% S134床面構築土

うとしたものと考えられるが、床面に礫を多く含んでいるため凹凸が著しい。平面形は不整な円形で、平面規模はS X W 01が $0.33 \times 0.24$  m、S X W 02が $0.22 \times 0.22$  m、S X W 03が $0.2 \times 0.14$  m、S X W 04が $0.33 \times 0.27$  m、底面までの深さがS X W 01が3cm程度、S X W 02～04が0.13 mである。なお、後述するようにわずかではあるが炉の周辺から粒状滓が検出されていることから鍛冶炉として使用されたものと考えられる。

<付属施設> 柱穴は、床面北西側で1個 (P 01)、南西隅で1個 (P 02)、北東側で1個 (P 03)、南東隅で1個 (P 04)の計4個検出した。柱穴の直径は0.25～0.35 m、深さは0.2 m前後と小規模であるが、位置関係からいづれも本遺構の上屋を支える柱穴と考えられる。

<出土遺物> 鉄生産関連炉周辺及び堆積土中から出土している (第150・151図)。土器は1979.3 g出土しており、流れ込みと考えられる縄文土器を含めて7点を掲載した (316～322)。316は土師器坏で、轆轤成形で内面に黒色処理が施されるI類である。317～321は非轆轤成形の土師器甕で、320・321は口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。その他、S X W 02～04周辺から鉄滓が693.5 g出土している。ほとんどが磁着しない流状滓であるが、極微量粒状滓も含まれている。なお、本遺構に直接帰属するものではないが、堆積土中から出土した剥片石器1点 (S103)を掲載した。

<性格と年代> 鍛冶炉を有することから工房として使用された堅穴建物と考えられる。本遺構の構築直前に存在していたと考えられるS I 36のカマド部分を壊して壁面を形成していることから、S I 36の住居としての使用を終了させた後に工房へと用途を変えて新たに造り替えたものと考えられる。出土した土器の年代観と、後述するS I 36との重複関係から平安時代 (9世紀後半以降)に構築・使用されたものと考えられる。

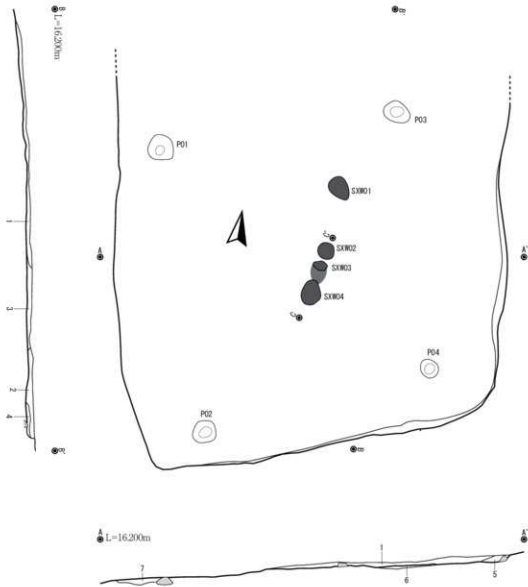
## S I 36 (第55図、写真図版42)

<検出状況> I A 18 nグリッドに位置する。S I 35の床面精査中に燃焼部と考えられる現地性焼土と煙道状の黒色土プランを検出したため、S I 35構築直前に存在していた堅穴建物のカマド周辺が残存しているものと判断して精査を行った。S I 35、S K 62と重複関係にあり、S I 35より古く、S K 62よりも新しい。

<形状・堆積土> S I 35構築時に壊されているため平面形・規模・壁面の状況は不明である。なお、残存する煙道部と燃焼部の中軸線の方はN-152°-Eである。床面は、燃焼部の周辺でのみ確認されており、IV層を掘り込んで黄褐色土を充填している。

<カマド> 燃焼部と煙道部が残存している。燃焼部は、 $0.35 \times 0.2$  mの範囲で被熱の痕跡を確認している。被熱深度は約6 cmで、上面は若干硬化している。煙道部は長さ1.1 m、幅は燃焼部個が0.15

S135



S135SXW02・03・04

L=16,000m



S135 (A-A'・B-B')

- 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に有 下段に25Y7/8黄色ブロッカ15%
- 10YR3/1 黒褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 1-3mmの焼土粒・炭化物各2%
- 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に有 25Y7/8黄色土ブロッカを40%
- 10YR5/3 にぶい・黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 25Y7/6明黄褐色土15%
- 10YR3/3 暗褐色と10YR3/2 黒褐色の混合土 しまり・粘性共に有
- 10YR3/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性有 25Y7/8黄色土10%含む 床面構築土
- 10YR3/2 黒褐色と10YR4/2 灰黄褐色の混合土 しまり・粘性共に有 25Y7/8黄色土ブロッカ25% 床面構築土

S135SXW02・03・04 (C-C')

- 10YR1.7/1 黒色 しまりやや疎、粘性弱 炭化物層
- 10YR2/1 黒色 しまり密、粘性やや弱
- 25Y5/3 黄褐色と25Y7/8黄色の混合土 しまり密、粘性やや強 上面に $\phi$ 1-5mmの炭を15%
- 10YR2/1 黒色 しまり密、粘性強
- 10YR1.7/1 黒色 しまりやや疎、粘性弱 炭化物層
- 25Y6/8 褐色 しまり密、粘性やや弱 幾土層 5層との境界は覆元されて非常に硬くしめる

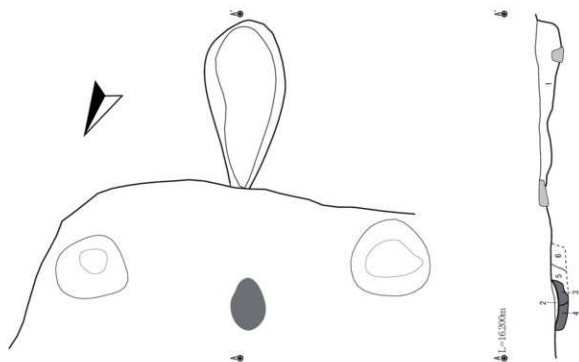
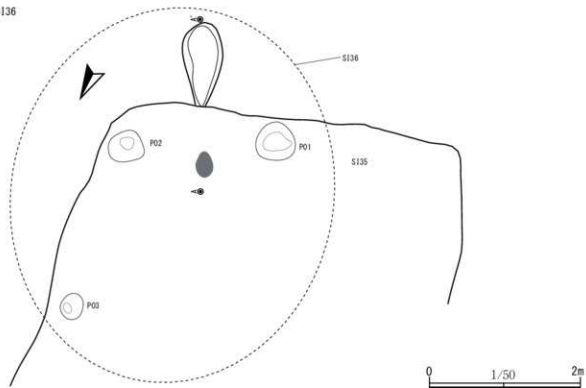
植穴

- P01 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 5-10mmの炭10%含む  
 P02 10YR2/1 黒色・10YR3/2 黒褐色・25Y7/8黄色の混合土 しまり・粘性共に有  
 P03 10YR3/2 黒褐色と10YR2/1 黒色の混合土 しまり・粘性共に有  $\phi$ 50mm以下の種多量  
 P04 10YR3/1 黒褐色-3/3 暗褐色 しまり・粘性共に有 硬土層構築



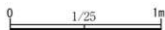
第54図 S135

S136



## S136 カマド (A-A')

1. 10YR2.1 黒～4.4 褐色 しまり・粘性土に有 25Y7.8 黄褐色土アロックス 25%、下に礫
2. 5YR4.3 に赤い赤褐色 しまりややぶ、粘性土  $\phi$  1-3mmの塊土粒と白色粒(貝片?) 各 10%
3. 5YR5.8 明赤褐色 しまり・粘性土に有 現地性塊土(炭燻部?)
4. 10YR4.2 灰黄褐色 しまり・粘性土に有 5YR5.8 明赤褐色塊土 30%
5. 10YR4.2 灰黄褐色 しまりややぶ、粘性ややぶ 床面構築土
6. 10YR3.2 黒褐色 しまり・粘性土に有 25Y7.8 黄褐色土アロックス 30% 床面構築土



## P01

1. 10YR4.2 灰黄褐色 しまりややぶ、粘性ややぶ  $\phi$  1-3mmの 25Y7.8 黄褐色土 15%、塵多量
2. 10YR4.2 灰黄褐色 しまりややぶ、粘性土 25Y7.8 黄褐色土 35%

## P02・03

1. 10YR5.3 に赤い赤褐色 しまりややぶ、粘性土  $\phi$  1-3mmの 10YR7.8 黄褐色土 15%

mと狭いが、煙出し付近は0.55mと幅狭くなっている。底面は煙出しに向かって緩やかに傾斜しており、煙出しとの境界は不明瞭である。堆積土は単層で、下位に礫を含む黒～褐色土であった。

<付属施設> 柱穴3個を検出した(P01～03)。いずれもS I 35の範囲内で検出しているが、S I 35の床面除去後に検出されていることと位置関係から本遺構に伴うものと判断している。上面規模は0.3～0.5m、深さは0.25m前後である。P01と02は、カマド中軸線を基準に対になる位置にあることから本遺構の上屋を支えるための柱穴であったと考えられる。

<出土遺物> 煙道堆積土から土器が190.5g出土しているが、細片のため図示していない。

<性格と年代> 遺存状況は悪いがカマドを有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。前述の通りS I 35構築時にほとんど壊されており遺物も乏しいが、S I 35との重複関係から平安時代(9世紀後葉以前)に構築・使用されたものと考えられる。

### S I 37 (第56・57、写真図版43・44)

<検出状況> I A 9～11 p・qグリッドに位置する。検出面はV層上面で、黒褐色の方形プランとして認識した。S I 38・39、S K 85、P 65と重複関係にあるが、P 65のみ本遺構より新しい。S I 38・39は後述する通り本遺構が工房として構築・使用される以前に存在した竪穴建物のカマド周辺が残存したものである。本遺構は規模が大きく、検出当初は東壁のラインがくの字状に内側に屈曲していたことから、複数の竪穴建物が重複している可能性を考慮して南北1本、東西3本のベルトを設定し、南東隅の区画を1区、その西隣を2区、北側を3区と名称をつけ、北西隅の区画が8区となるようベルトを境にして8つの区画に区切り掘り下げを行った。

<形状・堆積土> 平面形は方形であるが、西側は後世の造成の際に削られており残存していない。残存する範囲での上面規模は、7.9×6.9mである。長軸となる東壁を基準とした主軸方位はN-11°-Wである。壁面は、北東隅付近はほぼ垂直に立ち上がるが、それ以外の壁面は崩落のため外方に開きながら立ち上がる。深さは、最も深い南東隅付近で0.7mである。床面はV層を平坦に整えることで構築されており、断ち割りを行ったが床面構築土は確認できなかった。

堆積土は21層に細分した。15・18層など壁面の崩落土の他、周辺から流れ込んだと考えられるII層起源の自然堆積土で構成され、上～中位は黒褐色、中位以下はにぶい黄褐色土が主体となる。なお、底面中央部に堆積する19層からは鉄滓や羽口の破片が大量に出土している。

<カマド> 検出されていない。

<炉> 鉄生産関連炉を床面中央やや北寄りで1基(S X W 01)、床面南西側で1基(S X W 02)、東壁北寄りで1基(S X W 03)検出した。S X W 01は、ドーム状に土を盛った上部構造を有し、排滓場となる前庭部を持つ炉である。被覆土は廃絶後の崩落で流れ出しているが、遺存状況は良好である。炉体の平面形は不整な円形で、平面規模は0.8×0.7m、床面からの高さは6cm程度である。構築方法は、まず建物床面から掘り方を深さ0.3m程度掘り込み、掘り方の側面付近に0.25m程の板状の花崗岩を前庭部側を除く北・南・東壁に方形に並べる。その後、裏込めとなる8層の花崗岩の外側と掘り方の隙間に充填して固定し、それより上部に土を盛り上げてドーム状の炉体を構築している。したがって、床面より高い部分は6cm程度であるが、炉体全体では0.4m近くの高さとなる。炉体の断面形は半円形で、底面は丸く窪んでおり、その中央部に燃焼部が確認できる。内部には鉄滓を多量に含む2層が厚く堆積していた。なお、前庭部付近は建物床面から10cm弱程低く下がっているが、これは炉内から鉄滓を掻き出すという工程に合わせた意図的な造作と考えられる。前庭部は炉体の西側に掘削されている。平面形は円形で、上面規模は1.2×0.95mである。鉄滓等を掻き出す際に部分

的に掘削されたと思われる、断面形は不整形である。深さは12cm程度で、堆積土である6層には炭化物・炉壁・鉄滓の小破片が多量に含まれていた。炉体及び前庭部からは羽口・鉄滓・炉壁片が3361g出土しているが、このうち1346gが炉内からの出土である。いずれも磁着しない流状滓で、赤く錆びついたものである。鉄滓の形態から、S X W 01は精錬炉であったと考えられる。

S X W 02は、底面を土坑状に掘り窪めたもので、平面形は楕円形である。平面規模は0.45×0.38m、掘り方の深さは5cmである。充填土は無くV層直上で燃焼を行っており、被熱深度は3cm程度である。2層からは炭化物と細片となった磁着しない流状滓が出土している。なお、上部構造は不明であるが、炉壁の可能性のある橙色土ブロックが西端付近に残存していた。S X W 03は、S X W 02と同じく土坑状の炉であるが、土坑内には充填土が確認されている。平面規模は0.3×0.26m、掘り方の深さは7cmである。炉の内部表面は橙色に変色しているが、断面観察によると下部まで被熱しているのは北側部分が主であることから、この部分が燃焼部の中心であったと考えられる。被熱深度は3cm程度である。

<付属施設> 柱穴を床面南西側に1個(P 03)、南東側に3個(P 02・04・05)、S X W 01の直下で1個(P 01)の計5個検出した。このうち、重複するP 02・04・05に関しては、P 02が最も新しい。なお、S X W 01との重複関係等からP 01と05はS I 38に帰属するものと考えられるため、この2個は後述する。柱穴の直径は、P 02が43cm、P 03・04が36cm、深さはP 02が37cm、P 03が30cm、P 04が27cmである。

<出土遺物> 床面直上とS X W 01、堆積土中から出土している(第151・152・179・186・197・202・203図)。土器は6742.3g出土しており、古代の土器13点、縄文土器1点の計14点を掲載した(323～336)。このうち、336は南西側に10m程離れた位置にあるS K 80の堆積土から出土した破片と接合したものである。323～326はいずれも内面に黒色処理が施されるI類の土器器坏で、323は非轆轤成形、324～326は轆轤成形のものである。327～331は非轆轤成形の土器器坏で、331を除き口縁部が「く」の字状に屈曲するI類である。332～334は須恵器瓶類である。335は手づくね成形で土器の高台と思われるものであるが、性格は不明である。その他、床面直上から出土した金床石(S158)、堆積土～床面直上から出土した鋤先・鉄鎌・刀子(M26～28)、床面直上でまとめて出土した羽口(M96～102)を掲載した。羽口・鉄滓・炉壁の破片は、S X W 01炉内と前庭部を中心に36292.7g出土している。一部磁着するものもあるが、基本的には赤褐色で磁着しない流状滓である。また、北東隅(7区)の床面直上からイガイとコタマガイの貝片が出土している(第VI章第1節参照)。この他、本遺構に直接帰属するものではないが、剥片石器3点(S48～50)と礫石器1点(S157)を掲載した。

<性格と年代> 床面に鉄生産関連炉を有することから工房として使用された竪穴建物と考えられる。S I 38・39を壊しており、これらを利用して規模を拡張して構築されたものと考えられる。放射性炭素年代測定では1220±yrBPという年代が出ているが(第VI章第2節参照)、出土した土器の年代観から平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)に構築・使用されたものと考えられる。なお、今回検出したS X W 01は板状の花崗岩を使用して炉体を構築しており、このような事例は宮古市域では現在のところ確認されていない。

#### S I 38 (第58・59、写真図版45)

<検出状況> I A 10 r グリッドに位置し、S I 37・39と重複関係にある。S I 37構築直前に使用されていた竪穴建物であり、煙道部と燃焼部焼土を除いて壊されている。S I 37は本遺構を利用

して構築されたものであり、拡張して用途を工房に変えたものと考えられる。

<形状・堆積土> 竪穴部は残存していないことから全体形と規模については不明である。

<カマド> 袖部と煙道部の燃焼部付近はS I 37構築時に壊されており、燃焼部と煙道部のみが残存している。燃焼部焼土はやや不整な円形で、平面規模は0.6×0.55m、被熱深度は11cm程度である。燃焼部焼土東端から煙出し端部までの距離は2.8m、煙道部の残存は2.2mである。掘り込み式の煙道で、方形に掘り方を掘削した後、煙出しを除く側壁に長さ0.3～0.4mの花崗岩を立て並べ、その上に同じく花崗岩を天井石として使用し、さらにその上を地山を由来とした黄褐色土で被覆している。ただし、廃絶後の土砂の流れ込みや沈み込みによって側壁と天井石は動いているものもある。掘り方はV層を垂直に掘り込み、底面も平坦に整えることで形成されている。底面は燃焼部からほぼ水平であるが、煙道部中央や煙出し付近にはわずかに凹凸がある。なお、天井部には被覆土は確認できるが、側壁は掘り方の壁面に沿うように設置されており、裏込めは確認できなかった。煙出しは煙道底面より一段深く掘り込まれピット状となっている。また、東側の側壁は底面から0.25mまでの部分が袋状に掘り込まれ、そこからは垂直に立ち上がっている。検出面からの深さは0.55mである。

<付属施設> S I 37精査中に検出した柱穴のうち、カマドとの位置関係からSXW01直下に位置するP 01、P 02に切られるP 05が本遺構に伴うものと考えられる。柱穴の直径は、P 01が20cm、P 05が44cm、深さはP 01が43cm、P 05が45cmである。

<出土遺物> 煙道堆積土から土器が329g出土しており、土師器坏1点を掲載した(第152図)。337は轆轤成形で内面に黒色処理が施されるI類であり、外面には「大」の墨書が確認できる。

<性格と年代> 全体形は不明であるが、カマドが残存していることから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土遺物は乏しいが、轆轤成形の土師器坏が出土していることとS I 37との重複関係から平安時代(9世紀後半)に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 39 (第60、写真図版46)

<検出状況> IA 10 r グリッドに位置し、S I 37・38と重複関係にあり、S I 37構築時に大部分が削平されている。なお、残存部分ではS I 38と直接的な重複関係には無いが、S I 38の袖部の推定部分との関係から本遺構のほうが古いと考えられる。

<形状・堆積土> 竪穴部は残存していないことから全体形と規模については不明である。

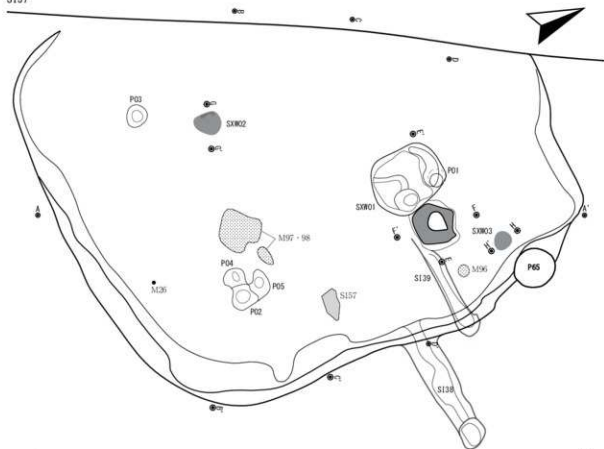
<カマド> 袖部はS I 37構築時に壊されているが、燃焼部焼土と煙道部が残存している。燃焼部焼土は不整形で、平面規模は0.5×0.3m、被熱深度は7cm程度である。煙道部は燃焼部付近がS I 37SXW01に壊されているが、煙出し端部まで1.8m程度残存していた。堆積土残存部分から3～8°の角度で緩やかに下りながら煙出しへ至る。堆積土はS I 37堆積土に類似する黒褐色土がわずかに残存していたのみである。煙出しは底面から15cm程の位置で段を作り、若干外側に広がった後に垂直に立ち上がる。検出面からの深さは1.1mである。S I 37精査中に堆積土の大部分を掘削してしまっただが、写真記録によると底面付近にふい黄褐色土(2層)と黒褐色土(3層)が堆積していたことが確認できる。なお、2層付近は壁面が被熱していた。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 全体形は不明であるが、カマドを有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土遺物が皆無であり年代決定の根拠に乏しいが、S I 37との重複関係から平安時代(9世紀後半)に構築・使用されたものと考えられる。

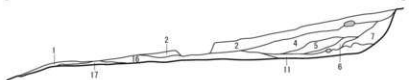
S137



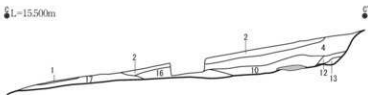
L=15.500m



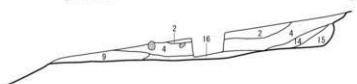
L=15.500m



L=15.500m



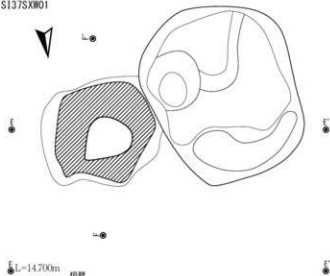
L=15.500m



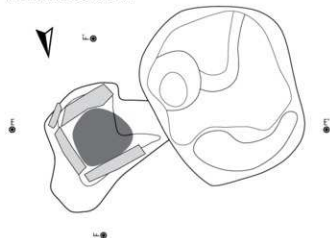
0 1/60 2m

第56図 S137(1)

## SI37SXW01



伊壁掘り方及び構築礎検出状況



## SI37 (A-A'・B-B'・C-C'・D-D')

1. 10YR2/1 黒色 しまりやや灰、粘性有 1層の残存部分
2. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に 有 礫少量
3. 10YR3/2 黒褐色 しまりやや灰、粘性有 1層と同じだが混和物無し
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 有  $\phi 2 \sim 5$ mmの焼山粒2%、遺物包含
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまりやや灰、粘性有 10YR2/1黒土10%、25Y7/8黄色土15%含みやや黄色が少
6. 10YR1/1 黒色 しまり・粘性共に 有 25Y7/8黄色土3% 炭化物層
7. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや灰、粘性有 25Y7/8黄色土3%
8. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや灰、粘性やや面 10YR2/1黒色・25Y7/8黄色土各10%
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 有 10YR3/2黒褐色ブロック5%
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 有  $\phi 2 \sim 10$ mmの炭2%、25Y7/8黄色ブロック5%
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 有 25Y7/8黄色ブロック15%
12. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや灰、粘性有 25Y7/8黄色土3% 8層と同じ
13. 10YR7/8 黄褐色 しまり・粘性共に 有 礫を含む 塚面崩落土
14. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 有 25Y7/8黄色ブロック5% 由来は10層と同じ
15. 10YR7/8 黄褐色 しまりやや灰、粘性やや面 塚面崩落土
16. 25YR3/3 暗褐色 しまりやや灰、粘性有 灰浮・焼土・礫少量
17. 10YR1/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に 有 焼土3%
18. 10YR6/4 にぶい黄褐色 しまりやや灰、粘性やや面 伊壁ブロック

## SXW02



## SXW03



## SI37SXW01 (E-E'・F-F')

1. 7.5YR4/2 灰褐色 しまりやや灰、粘性有  $\phi 2 \sim 5$ mmの伊壁ブロック20%、炭10% 塚面崩落土
2. 10YR1/1 黒色 しまり礫、粘性弱 炭浮多量
3. 7.5YR4/2 灰褐色 しまり・粘性共に 有  $\phi 1 \sim 3$ mmの焼土3%、10YR7/8黄褐色土を層状に20%
4. 10YR4/4 褐色 伊壁構築上だが焼熱により硬まり弱い
5. 2.5YR7/8 黄褐色焼土 しまり面、粘性強 塚面崩落土
6. 10YR2/1 黒色 しまりやや灰、粘性やや面 焼土粒・炭・灰浮・伊壁・洞け片多量 掘地塚面崩落土
7. 10YR5/2 灰黄褐色 しまりやや灰、粘性有  $\phi 2 \sim 5$ mmの焼土・炭各5%、礫 塚面の焼土
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 有 塚面構築土

## SI37SXW02 (B-B')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや灰、粘性やや面  $\phi 30$ mm程度の炭化物
2. 10YR1/1 黒色 しまり・粘性共に無 炭と炭浮で構成
3. 5YR6/6 褐色 しまりやや灰、粘性有 焼炭層焼土

## SI37SXW03 (H-H')

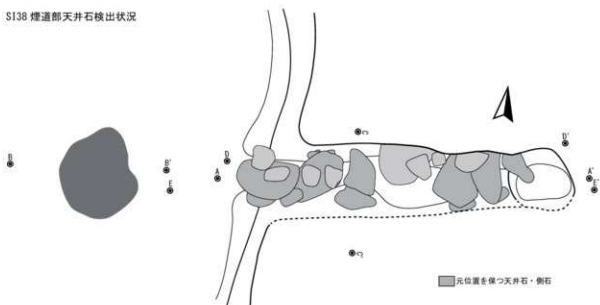
1. 5YR6/8 褐色 しまりやや灰、粘性有
2. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に 有 塚面構築土





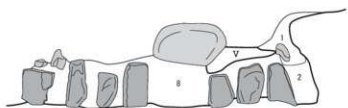


## S138 煙道部天井石検出状況



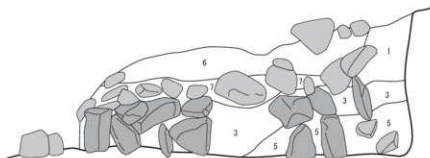
北側壁側面図(内側)

L=15.400m



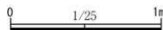
南側壁・天井石側面図(外側)

L=15.800m

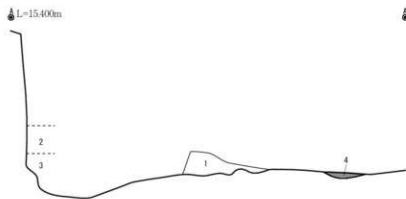
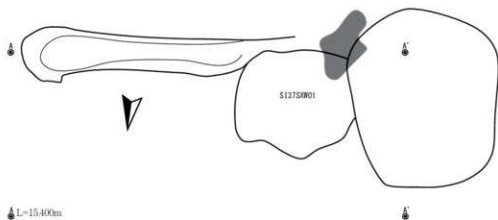
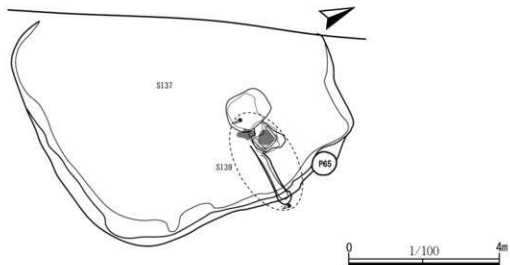


## S138 (A-A'・B-B'・D-D'・E-E')

1. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり疎、粘性やや弱 10YR7/8 黄褐色小ブロック3%
2. 10YR4/2 灰黄褐色と2.5YR7/8 黄褐色の混合土 しまりやや疎、粘性やや弱 礫付面に焼土と炭化物
3. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまり疎、粘性やや弱
4. 10YR7/8 黄褐色と10YR5/3 にふい黄褐色の混合土 しまり疎、粘性弱
5. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまり疎、粘性弱
6. 10YR7/8 黄褐色 しまり密、粘性強 黒色土を含む 天井被覆土
7. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 礫多量に含む 天井被覆土
8. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR7/8 黄褐色ブロック15%
9. 5YR5/3 にふい黄褐色 しまり、粘性共に有 2.5Y7/8 黄色砂2%
10. 5YR7/8 橙色 しまり疎、粘性無 現地性焼土



S139



S139 カマド・煙道

1. 10YR5/2 黒褐色と 2.5Y7/8 黄褐色の混合土、しまりやや疎、粘性有、黒色土 15% SE37 床面構築土と類似
2. 10YR5/3 に近い黄褐色、しまりやや疎、粘性やや弱、礫を含む、壁面がわずかに雑熟
3. 10YR3/2 黒褐色、しまりやや疎、粘性やや弱、7.5YR/6 褐色ブロッカ 3%
4. 5YR6/6 褐色、珪酸性焼土



## S I 40 (第61図、写真図版47)

＜検出状況＞ II B 10グリッド周辺に位置する。検出面はIV層中で、調査開始時に層序確認のために設定したトレンチ内で火山灰を層状に含む堆積を確認したため、周辺を面的に掘ってプラン確認を行った。その結果、南側の一部をトレンチで壊してしまったものの、火山灰ブロックを含む楕円形のプランを確認した。S B 03を構成する柱穴と重複関係にあるが、本遺構のほうが古い。

＜形状・堆積土＞ 平面形は楕円形で、北東-南西方向に長軸をとる。トレンチ掘削時に南側の一部を壊してしまったために全形は不明であるが、上面規模は3.8×4.1m以上、検出面からの深さは0.28mである。床面はIV層を水平に掘削することで平坦に整えており、壁面は床面から緩やかに外方に開きながら立ち上がる。

堆積土は4層に細分した。いずれも自然堆積であり1・2層に含まれる火山灰は分析により十和田中振テフラ(To-Cu)または十和田南部テフラ(To-Nb)という結果が出ている(第VI章第5節参照)。

＜炉＞ 検出されていない。

＜付属施設＞ 検出されていない。

＜出土遺物＞ 堆積土中から縄文土器の破片が160g出土しているが、細片のため図示していない。また、石器など他の遺物は出土していない。

＜性格と年代＞ 炉や付属施設を持たないが、他の堅穴建物と平面形態が類似することから、縄文時代の堅穴建物と判断した。出土遺物も乏しいが、2層中に含まれる火山灰がTo-Cuの可能性あることから縄文時代中期に属するものと考えられる。

## S I 41 (第62図、写真図版48)

＜検出状況＞ II B 10wグリッドに位置する。検出面はIV層上面で、検出作業中に後述する石囲炉(S H 01)が露出したことから、この周辺が堅穴建物になる可能性を考えてトレンチを設定して掘り下げを行った。その結果、非常に薄いながらもS H 01を中心に周囲より変色した円形プランの堅穴建物が確認された。南東側の一部をS D 07によって壊されている。また、木の根の攪乱も多く遺存状況は良くない。

＜形状・堆積土＞ 壁面はほとんど残っていないが、周辺の検出面よりも変色した範囲の平面形は円形である。この変色範囲を床面ととらえると、残存規模は4.7×4.35mである。壁面は南壁の一部が残存しているのみであり、深さは不明である。

堆積土は2層確認できるが、いずれも薄い堆積の由来については不明である。なお、東壁付近では床面構築土と考えられるにぶい黄褐色土の堆積を確認している。

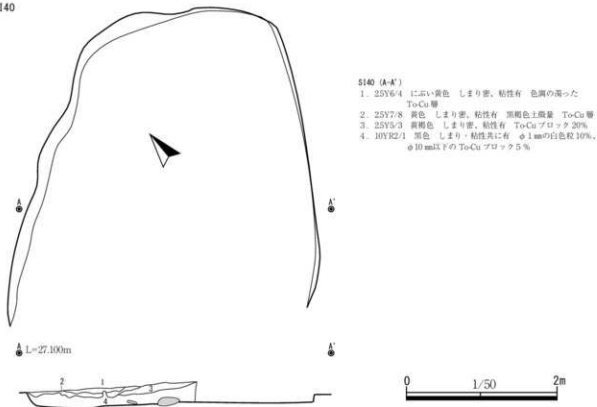
＜炉＞ 床面推定範囲の中央部で石囲炉を1基検出した。円形の石囲炉であるが、石組は北東側のみ残存している。掘り方を含めた平面形は円形で、規模は0.66×0.6mである。燃焼部焼土は非常によく焼けており、明るい橙色である。焼土の規模は0.44×0.42mで、被熱深度は6cmである。なお、土器は残存していないが、中央部には土器を埋設したと考えられる小穴が確認されている(カマド堆積土3層)。

＜付属施設＞ 検出されていない。

＜出土遺物＞ 堆積土が薄い為、床面直上と炉の堆積土内からの出土に留まる(第152・192図)。土器は922.1g出土しており、図示可能な土器2点を掲載した(338・339)。いずれも第V群に属する縄文土器である。石器も少なく、礫石器1点のみ掲載した(S 159)。

＜性格と年代＞ 遺存状況は良くないが、石囲炉を有することから住居として使用された堅穴建物と

S140



第 61 図 S 1 4 0

考えられる。出土遺物は乏しいが、第 V 群に属する縄文土器が出土していることから、縄文時代中期中葉頃（大木 8 式期）に構築・使用されたものと考えられる。

#### S 1 4 2 (第 63 図、写真図版 49)

<検出状況> II B 12 y グリッドに位置する。検出面は V 層上面で土器や礫を含む黒褐色の円形プランとして認識した。重複する遺構は無い。

<形状・堆積土> 平面形は南北に若干長い楕円形で、上面規模は  $4.8 \times 3.8$  m、検出面からの深さは最も深い南壁付近で 0.22 m である。床面は V 層を平坦に整えることで形成しているが、礫が多く凹凸がみられる。壁面は床面から外方に開くように立ち上がる状況が確認できるが、床面と同じく巨礫が多いため凹凸がみられる。

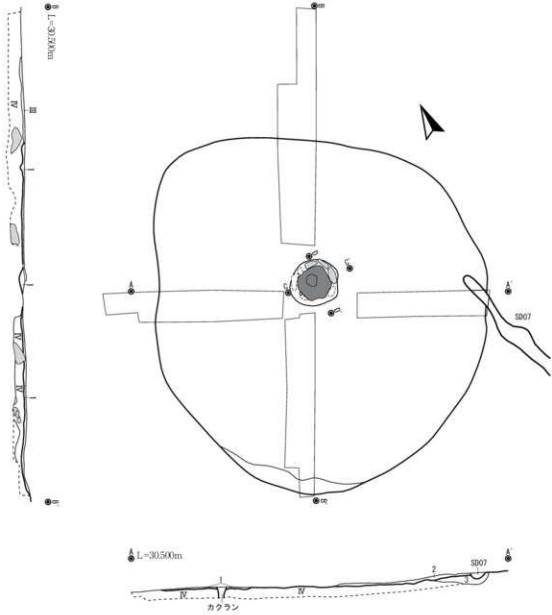
堆積土は 3 層に細分した。いずれも自然堆積と考えられる。

<炉> 南西壁付近で焼土を 1 基 (S F 01) 検出している。平面規模は  $0.3 \times 0.24$  m、被熱深度も 4 cm 程度と浅いが、硬く締まっており、本遺構に伴う地床炉と考えられる。

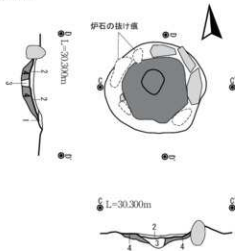
<付属施設> 床面中央部に土坑 1 基 (S K 01) と柱穴 4 個 (P 01 ~ 04) を検出した。S K 01 は平面形が瓢箪形で、上面規模は  $1.1 \times 0.8$  m である。断面形は浅い皿形で、深さは 11 cm 程度である。床面中央部が若干被熱していることから床面を掘り窪めて形成した地床炉の掘り方の可能性がある。なお、この被熱面は深度が 2 cm 弱であり、固化することはできなかった。

柱穴は東壁寄りで 2 個 (P 01・03)、北西壁寄りで 1 個 (P 02)、南壁寄りで 1 個 (P 04) 検出した。柱穴の直径は P 01 が 35cm、P 02 が 38cm、P 03 が 42cm、P 04 が 65cm、深さは P 01 が 48cm、P 02 が 57cm、P 03 が 11cm、P 04 が 11cm である。位置関係と深さから P 01・02 が本遺構の上屋を支え

S141



S141SH01

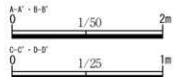


S141 (A-A'・B-B')

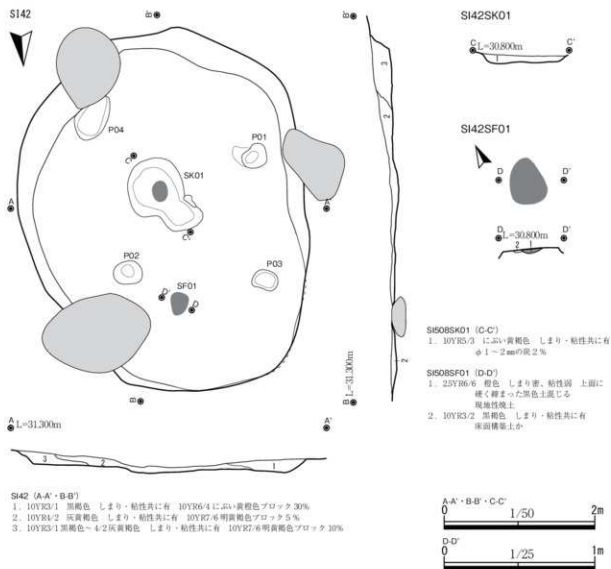
- 10YR5/3 にぶい・黄褐色 しまり有、粘性やや弱 礫層底
- 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 10YR2/1 黒色ブロック 15% 遺物包含
- 10YR4/3 にぶい・黄褐色 しまり・粘性共に有 床面構造上か  
※かの高さと床面の色調 (にぶい・黄橙～黄褐色) で範囲を定記、立ち上がりは不明

SH01 (C-C'・D-D')

- 5YR6/8 橙色 しまりやや弱、粘性やや弱 二次埋戻焼土
- 5YR4/2 灰褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$  1-5mmの焼土ブロック 5%
- 7.5YR5/3 にぶい・褐色 しまり・粘性共に有 土器埋設部の埋戻土か
- 2.5YR6/8 橙色 しまり有、粘性やや弱 焼土部焼土



第 62 図 S 1 41



の主柱穴であったと考えられる。

＜出土遺物＞ 堆積土の中位から多く出土している（第 152・179・187 図）。土器は 2552 g 出土しており、4 点を掲載した（340～343）。いずれも第 V 群に属する縄文土器である。この他、剥片石器 1 点（S51）と礫石器 1 点（S160）を掲載した。

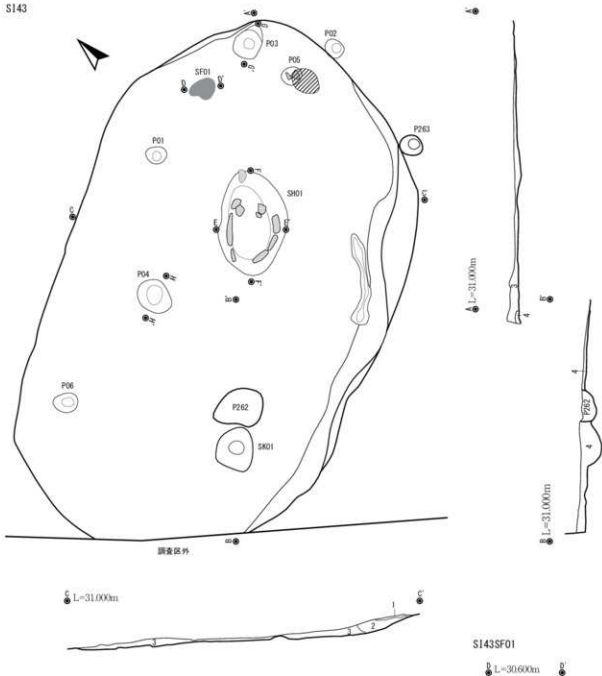
＜性格と年代＞ 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器が第 V 群に属することから、縄文時代中期中葉（大木 8 式期）に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 43（第 64・65 図、写真図版 50）

＜検出状況＞ II B 12 v～x グリッドに位置する。本遺構は当初北半部（P 04 より北側の範囲）のみ精査を行っていたが、調査区の拡張に伴って南半部を追加で精査した。南半部の精査段階では既に北半部は床面除去まで終了していたため、断面図については北半部と南半部の両方で作成し、図面整理の段階で両者を対応させている。検出面は V 層上面で、北半部の検出段階では黄褐色の円形プランとして認識していた。P 262 と重複関係にあり、本遺構のほうが古い。

＜形状・堆積土＞ 平面形は北東-南西方向に長軸をとる長楕円形で、南側の一部は調査区外へと延

S143



S143SF01

$\ominus$  L=30.600m  $\ominus$



S143 (A-A'・B-B'・C-C')

1. 基本層序E層
2. 10YR6/8 明黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 堆山崩落土
3. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$  2~5mmの炭3% 10YR6/8~7/8黄褐色地山ブロックを塚状に含む
4. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 黒土土15%含む 土部包含

SF01 (D-D')

1. 10YR5/3 にふい黄褐色 しまりやや疎、粘性弱  $\phi$  1~3mmの炭2%
2. 2.5YR6/8 褐色 しまり有、粘性弱 現地性境上

A-A'・B-B'・C-C'

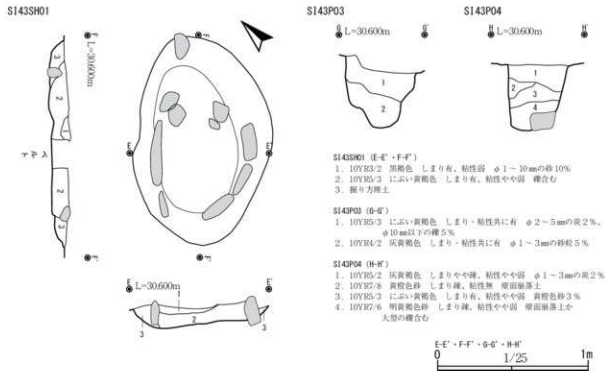


D-D'



第64図 S143 (1)





第65図 S I 43 (2)

びている為全形は不明であるが、検出された範囲での平面規模は、 $7.1 \times 4.9$  mである。主軸方位は  $N-54^{\circ}-E$  である。壁面は南東壁側のみ残存しているが、遺存状況は悪い。壁面は緩やかに立ち上がっていく状況で、最も残りの良い南壁周溝付近で0.28 mである。

堆積土は4層に細分した。床面付近にはにぶい黄褐色土、上位には黒褐色土が堆積するが、堆積が薄く、由来については不明である。

<炬> 床面中央部で石囲炉1基(SH01)、北壁付近で地床炉1基(SF01)を検出した。SH01は $1.35 \times 0.9$  mの土坑状の掘り込みの中に石を設置することで構築されているが、遺存状況が悪く土坑長辺の石のみ元位置を保っている。使用されている石材は全て花崗岩である。堆積土は掘り方内堆積土を含めて3層に細分した。1層は堅穴内堆積土と同じ黒褐色土、2・3層は炬の構築土である。なお、2層の上面がわずかに変色していたが、明確な被熱範囲は確認できなかった。SF01は、不正な円形をしており、平面規模は $0.38 \times 0.28$  m、被熱深度は5 cm程度である。中央部に根の浸食によって動いてきたにぶい黄褐色土が堆積している。

<付属施設> 土坑1基(SK01)と柱穴6個(P01~04)、周溝を検出した。SK01は南壁付近に位置し、上面規模は $0.6 \times 0.49$  m、深さは0.18 mである。柱穴は、床面中央北側で1個(P01)、東壁より若干外側で1個(P02)、北東壁隅で2個(P03・05)、床面中央で1個(P04)、北西隅で1個(P06)を検出している。柱穴の直径はP01が25 cm、P02が27 cm、P03が46 cm、P04が40 cm、P05が28 cm、P06が34 cm、深さはP01が22 cm、P02が34 cm、P03が48 cm、P04が45 cm、P05が30 cm、P06が32 cmである。周溝は南壁中央付近で1.3 m程検出した。上面幅は0.2 m前後で、深さは10 cm程度である。

<出土遺物> 床面直上及び堆積土中から出土している(第152・179・187図)。土器は6608.7 g出土しているが、小破片が多く接合率は低い。このうち縄文土器5点を掲載した(344~348)。いずれも第V群に属する土器である。その他、堆積土や根攪乱から出土した剥片石器2点(S52・53)、床

面直上から出土した礫石器2点(S161・162)を掲載した。なお、0.04 gと微細片のため掲載していないが、北西区の堆積土中から黒曜石の剥片が1点出土している。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。長楕円形であり、規模は大型住居であるS I 01に次いで大きい。出土した土器が第V群に属することから縄文時代中期中葉(大木8式期)に構築・使用されたものと考えられる。

(村田)

#### S I 44 (第66図、写真図版51)

<検出状況> II C 8 j～9 kグリッドに位置する。検出面はV層上面で、土器が散布する暗褐色土の楕円形の拡がりを確認したため、遺構を想定して掘り下げを行った。その結果、検出面から深さ20cmほどで床面に達し、石囲炉も確認したため、堅穴建物跡であると認識して精査を進めた。重複する遺構は無い。

<形状・堆積土> 平面形は南西側を木根の攪乱によって欠いているが、南側が少し窄まるような楕円形である。平面規模は4.52×3.15 mである。検出面からの深さは15～26cmである。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。堆積土は、暗褐色土が主体で3層に細分した。堆積状況から、色調・土質ともに均質であることから自然堆積と考えられる。

<炉> 床面中央より南東および北西側で石囲炉2基(SH 01・02)を検出した。SH 01は円形の石組で、花崗岩を用いて構築され、南西側に少し窪んだ楕円形の前庭部をもつ。石組の平面規模は0.61×0.58 mで、燃焼部焼土の被熱深度は3 cm程度である。石組の外側にも被熱範囲が広がる。前庭部の平面規模は0.78×0.64 mの楕円形である。SH 02は石組の一部が残存する状態で検出された。石組の外側から廃棄されたと考えられる焼土混じりの土を検出したが、燃焼部焼土は検出されなかった。SH 02は石が抜き取られ、燃焼部焼土も検出されなかったことから、SH 01より以前に使用されていたものと考えられる。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 床面直上及び堆積土中から出土している(第153・187・188図)。土器は48345 g出土しており、8点を掲載した(349～356)。いずれも第VI群に属する縄文土器である。この他、床面直上から出土した礫石器5点を掲載した(S163～167)。

<性格・年代> 炉を有することから、住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器は第VI群に属するものであり、縄文時代中期後葉(大木9式期)に構築・使用されたものと考えられる。

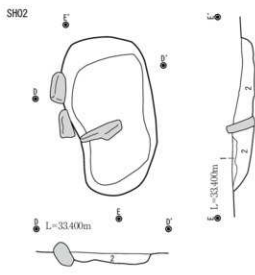
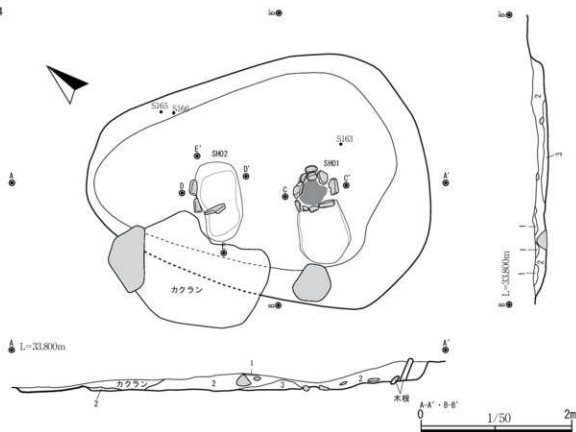
#### S I 45 (第67図、写真図版52)

<検出状況> II C 8 mグリッドに位置する。調査区壁際のV層上面で土器が集中して散布するところがあり、遺構を想定してトレンチを入れ確認したところ、焼土を検出し、断面の南側で壁の立ち上がりを確認したため堅穴建物跡を想定して精査を進めた。重複する遺構は無い。

<形状・堆積土> 遺構の東側半分が調査区外に広がり、北西側も木根により攪乱されており規模は不明確であるが、平面形はおおよそ円形を呈するとみられる。調査区内での検出規模は3.63×1.58 mである。検出面からの深さは5～6 cmである。壁は南壁のみ検出され、緩やかに外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、礫が散在する。堆積土は、暗褐色土が主体で6層に細分した。色調・土質ともに均質であることから自然堆積と考えられる。

<炉> 調査区壁際で地床炉を1基検出した。範囲の半分は調査区外に広がる。調査区内での検出規模は0.4×0.43 m、被熱深度は8 cm程度である。

S144



## S144 (A-A'・B-B')

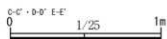
1. 10YR2/1 褐色 しまりやや密、粘性有
2. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒2%
3. 10YR4/6 褐色 しまり密、粘性弱、10YR3/4暗褐色土10%

## S144SH01 (C-C')

1. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱、焼土5%、炭化粒3%
2. 5YR5/8 明赤褐色焼土 しまり密、粘性無、炭化粒2%

## S144SH02 (D-D'・E-E')

1. 5YR4/8 赤褐色 しまり無、粘性無、炭化粒1%
2. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒2%



<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土中からの出土が多く、大きく3箇所に集中して出土しているが全て土器類である。土器は2694.9 g出土しており、このうち3点を掲載した(357～359)。いずれも第VI群に属する縄文土器である。

<性格・年代> 炉を有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土土器が第VI群に属することから、縄文時代中期後葉(大木9式期)に構築・使用されたものと考えられる。

(高橋)

#### S I 46 (第67図・写真図版53)

<検出状況> II B 7・8 k・1グリッドに位置する。検出面はV層で、炭化物を含むにぶい黄褐色土の円形プランとして検出した。他遺構との重複関係は無い。

<形状・堆積土> 平面形は円形で、上面規模は3.9×3.6 mである。円形であり、炉が検出されていないため主軸方位は不明である。壁面は外方に開きながら立ち上がり、最も残りの良い床面中央付近で0.22 mである。床面はV層を平坦にすることで形成されており、最終的に断ち割りを行ったが構築土は確認されなかった。ただし、礫層が露出している為床面は凹凸が著しい。

堆積土は3層に細分した。にぶい黄褐色～明黄褐色土でV層と類似するが、炭化物を含むことからこれを判断基準とした。ただし、南側では炭化物が含まれない部分もあり、一部壁面を掘り過ぎた範囲がある。堆積は浅いが、自然堆積によるものと判断した。

<炉> 検出されていない。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土中から出土しているが、全て土器片のみである(第154図)。土器は724.8 g出土しており、2点掲載した。360は第VI群、361は第I群の可能性ある縄文土器である。

<性格・年代> 炉は検出されていないが、周辺の竪穴建物と類似した平面形態であることから、住居として使用された竪穴建物の可能性がある。出土遺物は乏しいが、第VI群の土器が出土していることから縄文時代中期後葉(大木9～10式期)に構築・使用されたものと考えられる。

(村田)

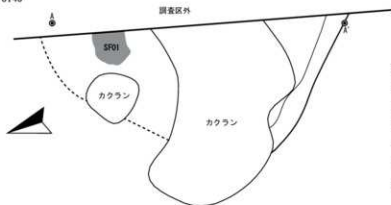
#### S I 47 (第68図、写真図版54・55)

<検出状況> II C 5 l～6 mグリッドに位置する。検出面はV層上面で、S X W 03を精査時に土器が散布し、炭化物と焼土粒を含む暗褐色土の楕円形の拡がりを検出した。遺構範囲の検出はS X W 03に起因する熱変成の影響から判別し難く、当初1つの遺構または2つの遺構が横並びに重複していることを想定して精査を行った。しかし、「キ」の字状にベルトを設定してトレンチを入れて確認したところ、壁の立ち上がりにズレがあり、2棟の竪穴建物が上下に重なっていることを確認した。1層底面より地床炉(S F 01)を検出したため、上位の新しい建物跡をS I 47とし、下位の古い建物跡をS I 48とした。重複関係はS X W 03、S I 48とあり、本遺構はS I 48より新しく、S X W 03より古い。

<形状・堆積土> 所々に大きな礫が散在しているが、ほぼ楕円形を呈する。上面規模は5.08×3.8 mで、検出面からの深さは20～30 cmである。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。堆積土は、暗褐色土が主体で3層に細分した。堆積状況を見ると斜面上方の東側から斜面下方の西側への流れ込んだ状況が確認できることから自然堆積と考えられる。

<炉> 床面と考えられる1層底面で焼土範囲を2箇所検出した(S F 01・02)。S F 01は平面規模0.44×0.39 mの不整形で、被熱深度は6 cm程度である。地床炉と考えられる。S F 02は平面規模0.90

S145



● L=34.400m

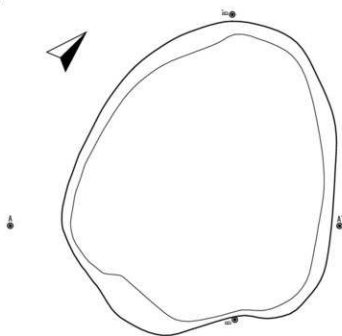


S145 (A-A')

1. 10YR3/3 暗褐色 しまり硬、粘性弱 表土
2. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや密、粘性弱、炭化物粒3%  
褐色土5%、炭化物粒2%
3. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱、炭化物粒2%
4. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱、10YR3/3暗褐色  
土3%
5. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや密、粘性弱、5YR4/8赤  
褐色土2%、炭化物粒1%
6. 5YR4/8 赤褐色硬土 しまりやや密、粘性弱、炭化物  
粒2% 焼成硬土
7. 10YR4/4 褐色 しまりやや密、粘性弱、5YR4/8赤褐  
色土3%、炭化物粒1%



S146



● L=33.800m



● L=33.800m

S146 (A-A')

1. 10YR5/3 に近い黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 2~5mmの炭5%、砂粒15%
2. 10YR6/4 に近い黄褐色 しまりやや硬、粘性有
3. 10YR6/6 明黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$ 2~5mmの炭3%



× 0.15 の楕円形で、被熱深度は 6 cm 程度である。遺構の壁際に位置することから、後述する焼失堅穴建物跡と考えられる下位の S I 48 に起因する焼土の可能性も考えられる。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 同位置で重複する S I 48 と合わせて遺物の取り上げを行っており、詳細については S I 48 の項目で記載している（第 154・179・188・189 図）。なお、層位的に本遺構にのみに伴うと考えられる縄文土器は 2 点（362・363）、礫石器は 4 点掲載した（S168～171）。

<性格・年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物であり、S I 48 が埋没してできた窪地を利用して構築されたと考えられる。S I 48 と同時進行で精査を行っていたため帰属が混乱している部分もあるが、本遺構より古い S I 48 の堆積土中で第 VI 群の縄文土器が出土していることから、縄文時代中期末（大木 10 式期）に構築・使用されたものと考えられる。

### S I 48（第 69・70 図、写真図版 54・55）

<検出状況> II C 5 1～6 m グリッドに位置する。S I 47 と共に検出した。S I 47 と重複関係にあり、本遺構のほうが古い。

<形状・堆積土> S I 47 と同様所に大きな礫が散在しているが、ほぼ楕円形を呈する。上面規模は 4.34 × 3.36 m で、検出面からの深さは 28～46 cm である。石囲炉長軸方向を基準とした主軸方位は N-145°-W である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。堆積土は、暗褐色土が主体で 4 層に細分した。堆積土には焼土粒と多量の炭化物が含まれ、床面直上層および床面から炭化材と朽ちた炭化材の痕跡を確認していることから、焼失した建物跡と考えられる。堆積土上位は S I 47 により壊されており、堆積状況は明確ではないが、堆積土の色調が同じであるため自然堆積と考えられる。

<炉> 石囲炉 1 基（S H 01）と地床炉 1 基（S F 01）を検出した。S H 01 は前庭部をもつ石囲炉で、石組は方形で、石材は主に花崗岩が用いられており、大礫の隙間に小礫が挿し込まれるようにして構築されていた。石組部の平面規模は 0.77 × 0.70 m で、燃焼部焼土の被熱深度は 5 cm 程度である。前庭部は平面規模 0.77 × 0.53～0.92 m の不整形である。S F 01 は平面規模 0.30 × 0.32 m のほぼ円形で、被熱深度 4 cm 程度である。

<付属施設> 土坑 1 基（S K 01）を検出した。南東側を攪乱されているが平面形は円形と考えられ、規模はおおよそ 0.97 × 0.80 m で断面形は逆三角形で、底部から炭化材の痕跡が検出された。堆積土は住居内堆積土とは同じである。

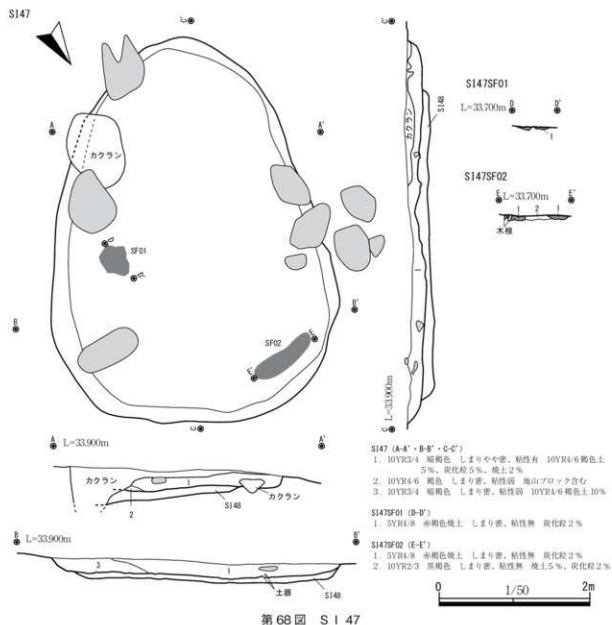
<出土遺物> 床面直上や堆積土中、加えて S I 47 堆積土から出土している。前述の通り同時進行で精査を行っており、帰属の判断が難しいものもあるが、ここで両者を含めて記載する（第 154・179・188・189 図）。土器は 6517.4 g 出土しているが、小破片が多く接合率は低い。このうち 21 点掲載した（364～384）。いずれも第 VI 群に属する縄文土器であり、このうち本遺構に確実に伴うと考えられるものは 384 である。その他、堆積土中から出土した剥片石器 2 点（S54・55）と床面直上から出土した礫石器 2 点（S171・172）を掲載した。

<性格・年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。放射性炭素年代測定では 4150 ± 30yrBP と 4180 ± 30yrBP と出ているが（第 VI 章第 2 節参照）、出土した土器が第 VI 群に属することから縄文時代中期末（大木 10 式期）に構築・使用されたものと考えられる。

（高橋）

### S I 49（第 72 図、写真図版 58）

<検出状況> II C 4・5 m グリッドに位置する。検出面は V 層上面で、人力で I 層を掘削していた



第 68 図 S I 47

ところ石囲炉が検出されたため、その周辺で検出作業を行ったところ、石囲炉を中心にV層が変色した範囲として認識した。S K 129・130と重複関係にあり、本遺構のほうが古い。

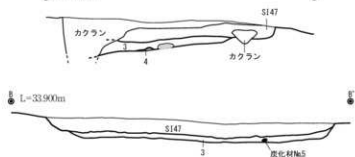
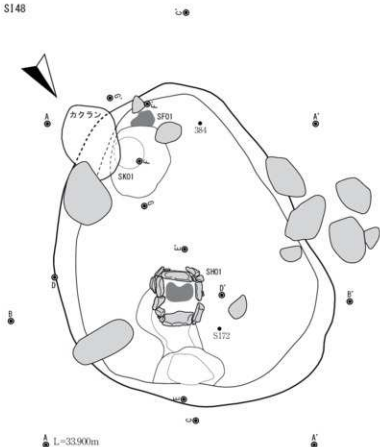
<形状・堆積土> 1層直下で石囲炉が検出される状況であり、堆積土は東側の調査区壁面付近に若干残存しているのみである。堆積土の残存が悪く、東側は調査区外へ延びる為全形も不明である。

<炉> 床面中央で石囲炉1基(SH 01)と地床炉1基(SF 01)を検出した。SH 01は、0.75×0.43mの土坑状の掘り込みの鋼縁に石を並べることで構築されている。北西隅の1個が失われていたが、それ以外は元位置を保っていた。使用されていた石材は全て花崗岩である。炉内の燃焼部焼土は平面規模が0.28×0.24m、被熱深度は4cm程度である。SF 01は、円形の現地性焼土で、平面規模は0.2×0.2m、被熱深度は5cm程度である。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 炉の周辺から出土している(第155図)。土器は8769g出土しており、2点を掲載した(385・386)。いずれも地文のみの破片であり、どのグループに属するかは不明である。

S148



S148 (A-A'・B-B'・C-C')

1. 75YR4/6 褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒3%、10YR3/4暗褐色2%
2. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒5%、焼土2%
3. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性有、炭化粒20%、炭化材10%、焼土3%
4. SF01

S148SH01 (D-D'・E-E')

1. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒10%、地山ブロック5%
2. 10YR2/2 黒褐色 しまり密、粘性強、炭化粒20%
3. 75YR3/3 暗褐色焼土 しまりやや密、粘性弱、炭化粒2%
4. 75YR4/6 褐色焼土 しまり密、粘性有
5. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱、焼土3%
6. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや密、粘性強、炭化粒30%
7. 5YR4/8 赤褐色 しまり密、粘性無、炭化粒50% 大穴時に柱材等の上に落ちた土が燃焼したもの
8. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒10%
9. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性強、炭化粒20%
10. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性強、炭化粒10%
11. 10YR4/6 褐色 しまり密、粘性強、炭化粒1%

S148SF01 (F-F')

1. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱、焼土2% 炭化粒1% SK01-2層と類似
2. 5YR4/8 赤褐色焼土 しまり密、粘性無、炭化粒1%

S148SK01 (G-G')

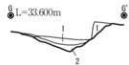
1. 10YR2/3 黒褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒15%
2. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱、炭化粒1%、焼土2%



S148SF01

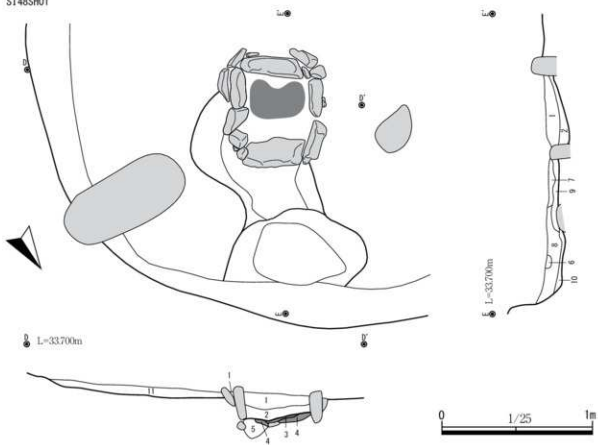


S148SK01

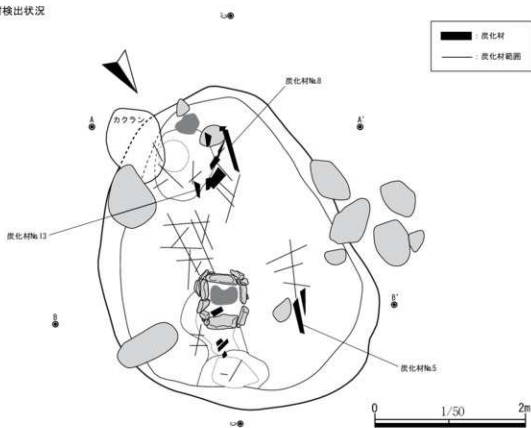




S148SH01



S148 炭化材検出状況



第70図 S148(2)

<性格・年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられるが、遺存状況が悪く形状・規模は不明である。また、出土した土器が地文のみの破片であることから縄文時代のいつ頃のものかも不明である。

(村田)

#### S I 50 (第72図、写真図版58)

<検出状況> II C 3・4 m・n グリッドに位置する。検出面はV層で重機による表土除去時に板状の自然礫と、石製品によって構成されるL字型の石組列を検出した。石組の構築方法を知るためにこれを断ち割ったところ、石組内部に燃焼部焼土、石組外部に埋設土器を検出したため、石囲炉と土器埋設炉による複式炉であると判断し精査を行った。精査を進めたところ複式炉周辺の一定範囲で住居埋土と考えられる暗褐色土を検出したため、遺構上部が削平され、複式炉周辺のみが残存する堅穴建物跡と判断した。S K 131と重複するが、本遺構のほうが古い。

<形状・堆積土> 前述のとおり、複式炉周辺に薄く残された住居堆積土以外が削平されているため、形状は不明である。堆積土は7層に分層したが、S I 50堆積土は暗褐色土の1・4層のみである。2・3層は土器埋設炉掘り方内の堆積土、5・6層は土器埋設炉内の堆積土である。

<炉> 石囲炉と土器埋設炉によって構成される複式炉を1基検出した(S H 01)。建物形状が不明なため、建物内での設置位置は不明である。残存する石囲炉の石組はL字型で、燃焼部焼土の東と南にのみ石組が周る。なお、前述したとおり遺構西側はS K 131に切られているため、炉使用段階では石組が一周していた可能性も考えられる。構築方法は、石囲炉の石組と後述する土器埋設炉を含めた範囲よりも一回り大きい長方形の掘り方を作り、この掘り方内面に炉石を張り付ける方法であった。掘り方深さは20cm程度であり、充填土を入れず掘り方床面を焼土面としていた。炉石は二重ないしは三重に立てられており、燃焼部焼土側に位置する石組列一重目は板状の花崗岩が立てられていた。二重目及び三重目の石組には花崗岩の他に礫石器が使用されていた。焼土範囲は楕円形であり、石組東半で限定的に確認された。燃焼部焼土は43×33cm、被熱深度は5cmである。石囲炉の東側に位置する土器埋設炉は土器上半のみを埋設したもので、底部を含む下半は検出されなかった。埋設土器埋土に微量の炭化粒が含まれていたが、現地性焼土は確認できなかった。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 炉内及び堆積土から出土している(第155・189図)。土器は1598.3g出土しているが、接合率は低い。このうち縄文土器2点を掲載した(387・388)。いずれも地文のみの個体であり、どのグループに属するかは不明である。この他、三重目の炉石として転用されていた礫石器1点(S I 74)を掲載した。

<性格と年代> 土器埋設複式炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器は地文のものばかりであり、詳細な年代は不明であるが、周辺の遺構との関係から縄文時代中期に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)

#### S I 51 (第73図、写真図版59)

<検出状況> II C 2 j ~ 3 j グリッドに位置する。検出面はV層上面で、土器が散布する暗褐色土の円形プランを検出した。重複する遺構は無い。

<形状・堆積土> 平面形はやや方形に近い円形である。上面規模は3.72×3.78mで、検出面からの深さは8~20cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、南側に土器片と礫石器が出土した。堆積土は、暗褐色土が主体の単層である。断面図には反映されていないが、南側

の堆積土には大きめの礫が混じっており、斜面上方から土砂が流れ込んでいることを確認したため、自然堆積と考えられる。

<炉> 検出されていない。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土及び床面直上から出土している(第155・189図)。土器は4286.6g出土しており、同一個体片が多く接合率が高い。このうち縄文土器4点を掲載した(389～392)。ただし、地文のみの個体のみしか出土しておらず、どのグループに属するかは不明である。その他、床面直上から出土した台石を含む礫石器2点(S175・176)を掲載した。

<性格・年代> 炉は検出されなかったが、遺構の形状と床面から遺物が出土したことから住居として使用された竪穴建物と判断した。縄文時代に構築・使用されたものと考えられるが、出土した土器は地文のみの個体ばかりであり、詳細な年代は不明である。

(高橋)

#### S I 52 (第74図、写真図版60)

<検出状況> II C 1・2i・j グリッドに位置する。検出面はV層で、大量の縄文土器片と暗褐色焼土塊を含む黒褐色土の円形プランを確認した。このプランが遺構であることを想定し、プランを一段下げたところ、埋設土器上端と想定できる一周する土器口縁部を検出した(SH 01)ことから、竪穴建物と判断し検出を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は円形で、上面規模は直径2.9mである。床面はV層をレンズ状に浅く掘り窪め造られており、平坦面は殆ど無い。残存する壁面が存在しないため壁面形状は不明だが、遺構平面規模と検出状況から考えると、壁が存在しなかった可能性が高い。堆積土は3層に分層した。堆積土の主体は暗褐色土である。全層に炭化物粒が混入していたほか、遺構上部の2層には大量の暗褐色土焼土塊が混入していた。堆積の様相は自然堆積である。

<炉> 床面ほぼ中央に土器埋設炉1基(SH 01)と地床炉1基が設置されていた(SF 01)。SH 01は土器の上半部のみを埋設したもので、土器下部と底部は検出されなかった。埋設された土器の下部は床面よりも一段低いため、土器径に合わせた掘り方を作り設置した可能性が高いが、根の浸食によって土が動いており、明確な構築方法を特定することはできなかった。また、土器内部で完結する現地性焼土なども確認できなかった。SF 01の検出面は前述の土器埋設下面に相当し、燃焼部焼土上には土器埋設炉掘り方埋土と考えられる黒褐色土が載っていた。根攪乱の影響を受けており全容は不明だが、焼土範囲は円形である。燃焼部焼土径は直径26cm、被熱深度は3cm程度である。燃焼部範囲が埋設土器下面に相当し、土器径の内外にわたる。検出状況から考えると埋設土器に先行する地床炉であった可能性が高い。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 炉内と堆積土中から出土している(第155・156図)。土器は2108.6g出土しており、炉埋埋設土器を含めて縄文土器4点を掲載した(393～396)。394・396は第V群に属すると考えられるが、その他は地文のみの個体であり、どのグループに属するかは不明である。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。地文のみの個体が多いが、少量ながら第V群に属すると考えられる破片が出土していることから縄文時代中期中葉(大木8式期)に構築・使用されたものと考えられる。

## S I 53 (第75図、写真図版61)

〈検出状況〉 IC 24・25 i・j グリッドに位置する。検出面はV層で、重機による表土除去時に焼土塊・炭化物粒・大量の縄文土器片が一か所に集中して検出される箇所があった。遺物集中範囲を特定するために周辺を一段下げたところ、石囲炉石組(SH 01)と炭化物粒・焼土塊が広がる平坦面を検出した。ほぼ表土直下に堅穴建物跡の床面が存在すると想定し精査を行った。SK 140と重複するが本遺構のほうが古い。

〈形状・堆積土〉 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は長楕円形で、上面規模は6.6×5.0mである。建物長軸方向を基準とした主軸方位はN-40°-Eである。石囲炉が2基設置されているが(SH 01・02)、それぞれの主軸方位はN-59°-WとN-42°-Wであり、ともに遺構長軸方向と異なる。床面はV層を削り造られており、遺構中央はほぼ平坦である。遺構縁辺部に向かうにつれ、緩やかにレンズ状に立ち上がる形状となる。緩斜面下方である遺構北西部は削平を受け、壁が残されていない。残存する明瞭な壁面が存在しないため壁面形状は不明だが、検出状況から考えると、壁が存在しなかった可能性も想定できる。遺構南隅は礫集中範囲内で、地山から頂部をのぞかせた自然礫が多く確認された。堆積土は3層に分層した。堆積土中の黒褐色土・暗褐色土・褐色土の比率がほぼ同等である。SH 01周辺では石囲炉石組からこぼれた大量の焼土塊を検出したが、同所以外では焼土・炭化物の堆積を確認できなかった。堆積の様相は自然堆積である。

〈炉〉 床面中央東寄りと南寄りで石囲炉を2基(SH 01・02)、床面北西とSH 02 炉石下面で地床炉を各1基検出した(SF 01・02)。床面中央東寄りの位置で検出したSH 01は北東-南西方向を長軸とするC字型の石組で、南西側は開口していた。石組南西側で炉石据え付け痕跡を確認できなかったため、遺構使用段階で同所は開口していた可能性が高い。石組内径は80×40cm程度である。構築方法は、炉の石組よりも一回り大きい範囲を掘り窪め、掘り方内面に炉石を張り付けていた。根拠乱の影響を受けており、一部の炉石は原位置と考えられる場所から動いており、石組には空隙が生じている。焼土範囲は円形で、石組ほぼ中央で検出した。燃焼部焼土径は直径38cm、被熱深度は4cmである。燃焼部焼土上面の高さは床面より5cm程度低い。遺構検出時には炉石組内外の直上で遺物の集中がみられたほか、石組の外側には大量の焼土塊が分布していた。

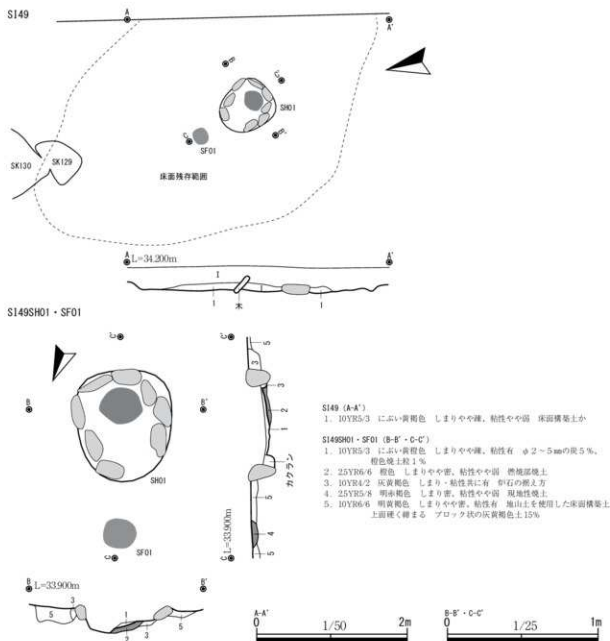
床面南側で検出したSH 02は北東-南西方向を長軸とする六角形の石組を持つ。石組内径は40×28cm程度である。炉の構築方法は炉石設置部分に据え付け穴を掘り、板状礫の炉石を立て、内部に黒褐色土を3cm程度充填していた。石組北西部では地山から頂部をのぞかせた自然礫を利用し石組に取り込んでいた。燃焼部焼土の残存状態は不良である。

SF 01は北西-南東方向を長軸とする楕円形で燃焼部焼土径は53×43cm、被熱深度は5cm程度である。SF 02の焼土範囲はほぼ円形で、燃焼部焼土径は直径26cm、被熱深度は4cm程度である。燃焼部の検出面がSH 02 炉石下面に相当し、焼土分布範囲が石組の内外にわたる状況から考えると、本遺構はSH 02に先行する地床炉であった可能性が高い。

〈付属施設〉 検出されていない。

〈出土遺物〉 堆積土中から出土している(第156・190図)。土器は4235.9g出土しているが、破片が小さく接合率は低い。このうち縄文土器1点を掲載した(397)が、地文のみの個体でありどのグループに属するかは不明である。その他、堆積土中から出土した礫石器3点(SI77~179)を掲載した。

〈性格と年代〉 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器は

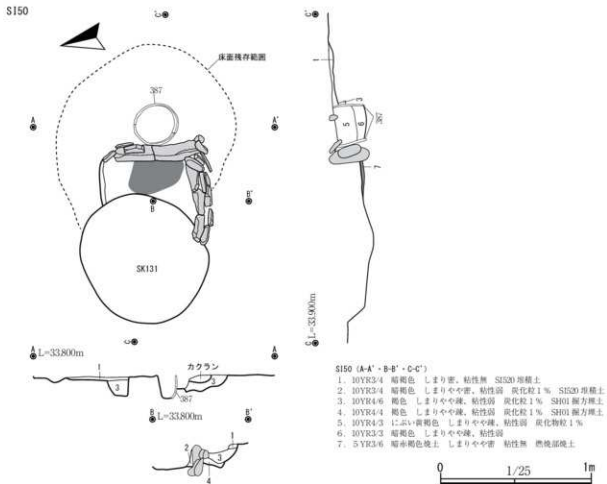


第71図 S149

地文のものばかりであり詳細な年代は不明であるが、周辺の遺構との関係から縄文時代中期に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 54 (第76・77図、写真図版62)

〈検出状況〉 II C 1・20・p グリッドに位置する。検出面はV層で、縄文土器片を少量含む炭化粒・焼土粒混じりの不整形な黒褐色土のプランを検出した。黒褐色土中には木根が多く、さらに後年の削平を受けている可能性の高い場所であったため、適宜ベルトを残し、黒褐色土を下げた。結果、床面と考えられる黄褐色土面に遺物の集中がみられたほか、石囲炉を検出したことから竪穴建物であると判断し精査を行った。S I 55と重複するが、切り合い部分が根掘乱により破壊されており、新旧関係は不明である。なお本遺構とS I 55の床面に高低差は存在しない。



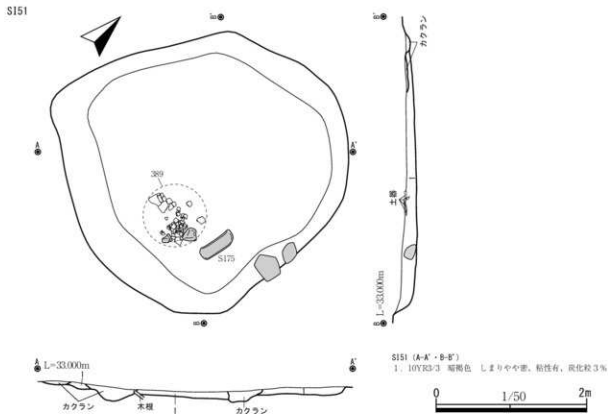
第72図 S150

<形状・堆積土> 西壁が後年の削平によって失われているほか、各所に根掘乱が入り込んでいるため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は円形で、上面規模は3.5×3.5m程度である。石囲炉の長軸方向を基準とした主軸方向はN-19°-Wである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い東壁で10cm程度である。残存する壁は限定されるが、全面で外に広がるように緩やかに立ち上がる。斜面下方・平場尻である遺構西側で壁を確認することはできなかった。堆積土は3層に分層した。堆積土の主体は黒褐色土である。堆積土全体に炭化粒・焼土粒が混入していた。堆積の様相は自然堆積である。

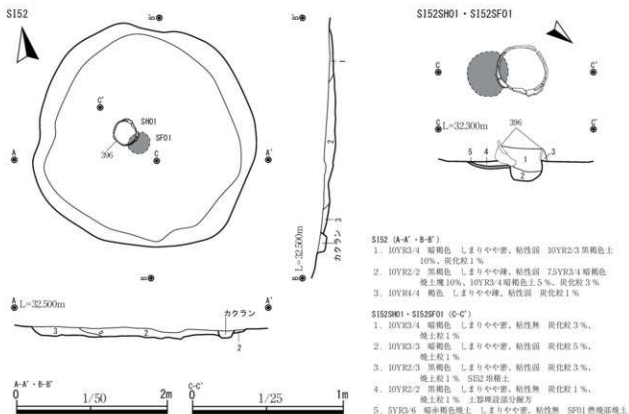
<炉> 遺構中央に石囲炉が1基設置されていた(SH01)。東西方向を長辺とする六角形の石組で、石材は全て板状の花崗岩であった。石組内径は40×35cm程度である。炉の構築順序は炉の石組よりも一回り広い範囲を15cm程度掘り窪め、石材を配置したのち、黒褐色土を充填し、石材を立たせていた。石組内の被熱状況は不良であった。

<付属施設> 検出されていない。

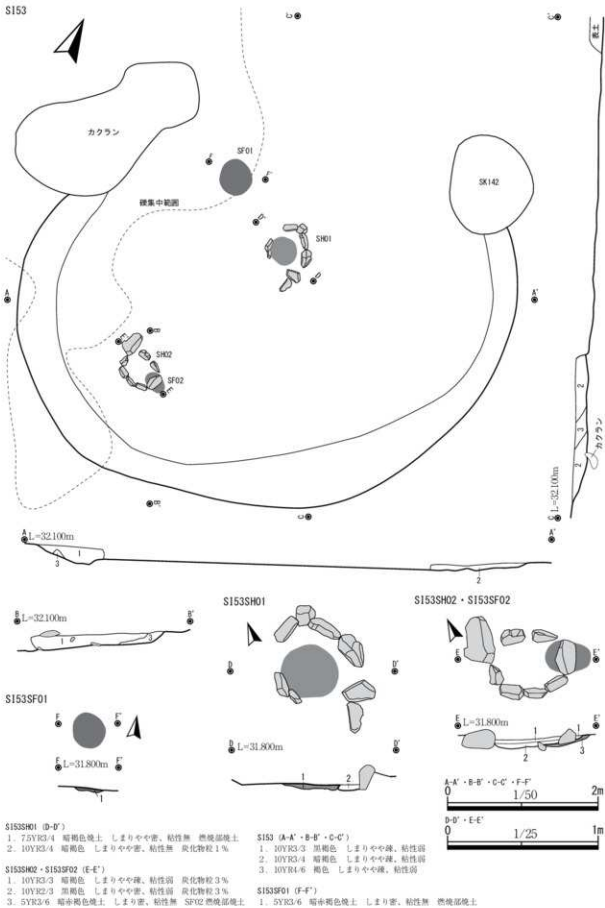
<出土遺物> 床面直上と堆積土下位を中心に出土している(第156・図)。後述するS155と同時進行で精査をしており、両者にまたがる堆積土から出土したものについては「S154・55」として取り上げを行っている。土器は本遺構に伴うものとして4673.0g、S155との重複部分で239.5g出土している。S155出土の破片とも接合関係にあり、本遺構に伴う縄文土器は5点(398～402)、S155との重複部分のものは縄文土器1点(403)を掲載した。401は第VI群に属するものであるが、



第 73 図 S151



第 74 図 S152



第75図 S153



この他はいずれも地文のみの個体であり、どのグループに属するかは不明である。この他、S I 55 重複部分の床面直上から出土した礫石器3点(S180・181・183)を掲載した。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土した土器に第VI群の縄文土器が含まれていることと重複するS I 55との関係から、縄文時代中期末葉(大木10式期)に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 55 (第76・77図、写真図版62)

<検出状況> II C 1・2 p・qグリッドに位置する。検出面はV層で、縄文土器片を少量含む炭化粒・焼土粒混じりの不整形な黒褐色土のプランを検出した。黒褐色土中には木根が多く、さらに後年の削平を受けている可能性の高い場所であったため、適宜ベルトを残し、黒褐色土の掘り下げを行った。結果、床面と考えられる黄褐色土の地山を切って作られた平坦面に遺物の集中がみられたほか、石囲炉を検出したことから竪穴建物であると判断し精査を行った。S I 54と重複するが、切り合い部分が根攪乱により破壊されており、新旧関係は不明である。なお本遺構とS I 54の床面に高低差は存在しない。

<形状・堆積土> 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は円形で、上面規模は2.8×2.6m程度である。石囲炉長軸方向を基準とした主軸方位はN-22°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。残存する壁面は全て緩やかに立ち上がるが、遺構北壁は比較的傾斜がきつい。検出面からの深さは一番深い遺構中央付近で5m程度である。堆積土は2層に分層した。堆積土の主体は褐色土である。堆積土全体に炭化粒・焼土粒が混入していた。堆積土層が薄く、人為堆積か自然堆積かの特定は不可能であった。

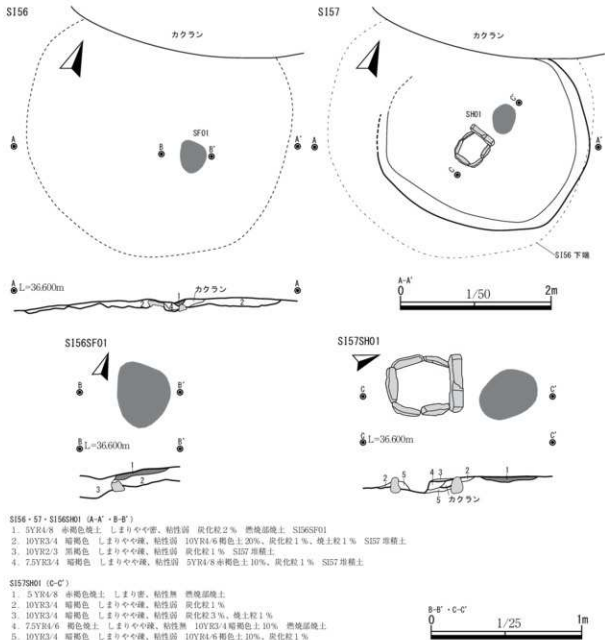
<炉> 遺構中央に石囲炉が1基設置されていた(SH 01)。東西方向を長辺とするC字型の石組で、石組南西部は開口していた。同所で炉石の抜き取り痕跡は確認されなかったことや、付近に板状礫が確認されなかったことから考えると、遺構が使用されていた当初段階で炉石組はC字であった可能性が高い。石組の石材は全て花崗岩を主体とするが、部分によっては礫石器を転用していた。また、地山から頂部をのぞかせた自然礫を石組の一部に取り込み石組を構築していた。石組内径は72×65cm程度である。炉の構築方法は炉石据え付け部分に据え付け穴を掘り、板状礫の炉石を立てる方法で、石組内部は床面とはほぼ変わらない高さであった。石組内の被熱状況は良好で、燃焼部焼土径は78×42cm程度、被熱深度は3cm程度である。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 床面直上と堆積土中から出土している(第156・190図)。S I 54との重複部分から出土した遺物は既述している為、ここでは本遺構に伴うもののみ記載する。土器は141.9gのみの出土であるが、S I 54重複部分出土の破片と接合して復元した第VI群に属する縄文土器1点を掲載した(404)。石器はSH 01付近から出土した礫石器4点(S182・184～186)と床面直上から出土した剥片石器1点(S104)を掲載した。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。本遺構に直接帰属する遺物は乏しいが、出土した土器が第VI群に属するものであることから、縄文時代中期末葉(大木10式期)に構築・使用されたものと考えられる。





第77図 SI 56・57

を掘り込んで形成されており、ほぼ平坦である。堆積土は1層のみである。床面直上で検出された現地性焼土のみが本遺構の構築土であり、この下面の層はSI 57の堆積土と考えた。

<炉> 床面ほぼ中央で地床炉を1基検出した(SF 01)。燃焼部範囲はほぼ円形で焼土径は40×35cm、被熱深度は5cm程度である。後述するSI 57SH 01の炉石上に造られていた。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 床面直上で堆積土から出土しているが全て土器類である(第156図)。土器は2391.4g出土しているが、小破片が多く接合率は低い。このうち縄文土器2点(405・406)を掲載した。いずれも地文のみの個体であり、どのグループに属するかは不明である。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器は地文のものばかりであり詳細な年代は不明であるが、周辺の遺構との関係から縄文時代中期に構築・

使用されたものと考えられる。

#### S I 57 (第77図、写真図版64)

<検出状況> II C 1・2 r+s グリッドに位置する。S I 57直上に位置するS I 56 S F 01を断ち割った際に、同遺構下面に被熱した板状の礫を複数確認した。S I 56 S F 01が地床炉ではなく石囲炉であり、炉石倒壊後に地床炉が形成された可能性を想定し検出を行った。結果S I 56 S F 01下面5cm程度の深さでV層を掘り込んで形成された平坦面と複式炉(S I 57 S H 01)を検出したため、これを1棟の堅穴建物であると判断し検出を行った。S I 56と重複するが本遺構のほうが古い。

<形状・堆積土> 遺構上部を後年の遺構であるS I 56に破壊されているため全容は不明だが、残存部分から推測される遺構の平面形状は円形で、上面規模は28×25m程度である。複式炉の長軸方向はN-18°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。ただし、石囲炉南側の一部で5cm程度の浅い皿状のくぼみが確認された。残存する壁は極めて浅く、検出面からの深さは一番深い遺構南壁付近で5cm程度である。堆積土は3層に分層した。堆積土の主体は暗褐色土である。堆積土全体に炭化粒・焼土粒が混入していた。堆積層が薄く人為堆積か自然堆積かの特定は困難であった。石囲炉直上に石組材とは別の礫が廃棄されていたことと、石囲炉石組外に焼土が厚く流れ出ていることから崖錐性の自然堆積と考えられる。

<炉> 石囲炉と地床炉によって構成される複式炉を床面中央で1基検出した(S H 01)。石組の形状は南北を主軸方向とする長方形で内径は44×38cm程度である。構築方法は、炉の石組よりも一回り大きい範囲を10cm程度長方形に掘り窪め、この掘り方内面に炉石を張り付けていた。石組内の被熱状況は不良であった。石囲炉の北側に位置する地床炉の燃焼部焼土径は40×32cm、被熱深度は4cmである。炉の石組内にあったと考えられる焼土塊が石組外北西側に流れ出ている。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 床面直上と堆積土中から出土している(第156図)。土器は403.1g出土しており、1点を掲載した(407)。ただし、地文のみの個体であり、どのグループに属するかは不明である。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器は地文のものばかりであり詳細な年代は不明であるが、周辺の遺構との関係から縄文時代中期に構築・使用されたものと考えられる。

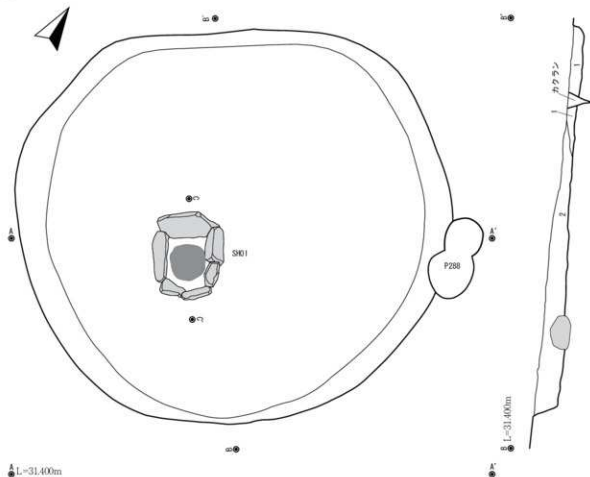
#### S I 58 (第78図、写真図版65)

<検出状況> I C 21・22 1・mグリッドに位置する。検出面はV層で、少量の炭化微粒を含む暗褐色土の円形プランを確認した。このプランが遺構であると想定し、適宜トレンチを入れた。結果、床面と考えられる硬化面と、石囲炉石組(S I 58 S H 01)と考えられる複数の板状の花崗岩礫を検出したことから、堅穴建物と判断し検出を行った。P 289と重複するが本遺構のほうが古い。

<形状・堆積土> 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は円形で、上面規模は28×26mである。石囲炉長軸方向を基準とした主軸方位はN-34°-Wである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。残存する壁面は全て緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは一番深い遺構南壁付近で16cm程度である。堆積土は3層に分層した。堆積土の主体は暗褐色土である。全層に少量の炭化微粒が混入している。堆積の様相は自然堆積である。

<炉> 床面中央やや南寄りの位置で石囲炉を1基検出した(S H 01)。石組の形状は東西方向を主

S158

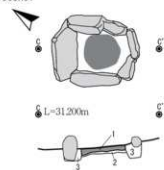


L=31.400m

L=31.400m



S158SH01



L=31.200m

S158 (A-A' · B-B')

1. 10YR3/4 暗褐色 Lよりやや中硬、粘性弱 炭化粒1%
2. 10YR2/3 黒褐色 Lよりやや中硬、粘性弱 炭化粒2%
3. 10YR3/4 暗褐色 Lよりやや中硬、粘性無 炭化粒1%

S158SH01 (G-G')

1. 10YR3/3 暗褐色 Lより密、粘性無 炭化粒3%、焼土粒1%
2. 7.5YR3/4 暗褐色焼土 Lより密、粘性無 炭化粒3% 炭焼部焼土
3. 10YR3/2 黒褐色 Lより密、粘性無 炭化粒1%

A-A' · B-B' · C-C'  
0 1 2m  
1/50

第78図 S158

軸とする長方形である。炉石はほぼ垂直に据えつけられているが、緩斜面下方に相当する西側の炉石のみ垂直に立てられておらず、上部が外側に倒れるように傾斜している。石組内径は70×50cm程度である。構築方法は、炉の石組よりも一回り大きい範囲を長方形に掘り窪め、この掘り方内面に炉石を張り付けていた。焼土範囲は円形で、石組はほぼ中央に位置していた。燃焼部焼土径は52×50cm、被熱深度径は6cmである。焼土面は床面より3cm程度低い。石囲炉近辺の床面は若干硬化していた。

<付属施設> 検出されていない。

<出土遺物> 堆積土中から出土している（第156・191図）。土器は2702g出土しており、縄文土器1点を掲載した（408）。小破片であるが、第VI群に属すると考えられる。その他、堆積土中位から出土した礫石器1点（S187）を掲載した。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器は乏しいが、第VI群に属する縄文土器が出土していることから縄文時代中期後葉～末（大木9～10式期）に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 59（第79図、写真図版66）

<検出状況> IC 18・19n・oグリッドに位置する。検出面はV層で、少量の縄文土器片と炭化物粒を含む暗褐色土の楕円形プランを確認し、十字トレンチを設定して掘り下げたところ、地山を切って作られた平坦面を確認したことから堅穴建物跡と判断し精査を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は南北を長軸方向とする楕円形で、上面規模は4.4×3.8mである。建物長軸方向を基準とした主軸方位はN-3°-Eである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。残存する壁面は全て緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは一番深い遺構北壁付近で13cm程度である。堆積土は2層に分層した。堆積土の主体は暗褐色土である。堆積土全体に少量の炭化粒が混入していた。堆積土層が薄く、人為堆積か自然堆積かの特定は不可能であった。

<付属施設> 柱穴を3個検出した（P 01～P 03）。床面北中央（P 01）・東（P 02）・南西（P 03）でそれぞれ1個検出した。柱穴の直径はP 01が17cm、P 02が29cm、P 03が48cm、深さはP 01が20cm、P 02が13cm、P 03が16cmである。

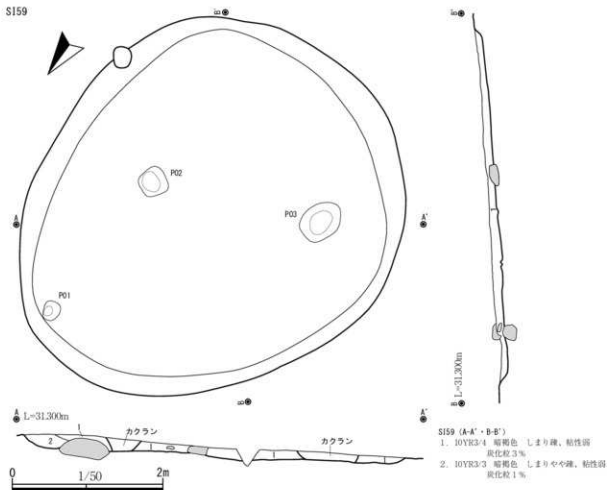
<出土遺物> 堆積土中から出土している（第157図）。土器は1274.3g出土しているが、小破片で地文のみの破片が多い為接合率は低い。このうち、第V群に属する縄文土器2点掲載した（409・410）。その他、堆積土から出土した礫石器1点（S231）を掲載した。

<性格と年代> 炉跡は検出されなかったが、遺構の形状から住居として使用された堅穴建物と判断した。出土した土器は乏しいが、第V群に属する縄文土器が出土していることから縄文時代中期中葉（大木8式期）に構築・使用されたものと考えられる。

#### S I 60（第80図、写真図版67）

<検出状況> IC 17・18n・oグリッドに位置する。検出面はV層で、重機による表土除去時に石囲炉石組と考えられる垂直に立てられた板状の花崗岩を検出した（SH 01）。この礫が遺構であると想定し、周辺を精査した結果、石組の周囲に暗褐色土の円形プランを確認したことから、堅穴建物跡と判断し精査を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は円形で、上面規模は3.4×3.3mである。石囲炉長軸方向を基準とし



第79図 S159

た主軸方位はN-19°-Wである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。石囲炉南東側から南東壁までの部分の一部で5cm程度の浅いレンズ状のくぼみが確認された。壁面はほぼ残存しないため壁面形状は不明である。堆積土は2層に分層した。堆積土の主体は暗褐色土である。堆積土層が薄く、人為堆積か自然堆積かの特定は不可能であった。

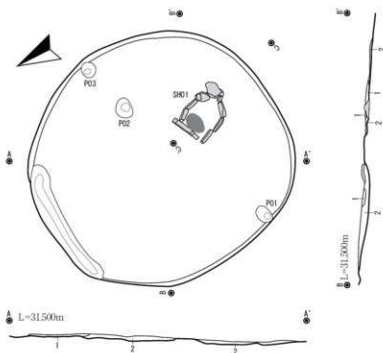
<炉> 遺構中央やや南寄りに石囲炉が1基設置されていた(SH 01)。石組の形状は南北方向を主軸とする長方形で、より低い南東側の石組は直線ではなく、へ字型に外側にやや広がる。石組内径は50×35cm程度である。炉の構築方法は炉石設置部分に据え付け穴を掘り、板状礫の炉石を立てる方法だった。石組内部は床面より5cm程度低く、浅く掘り込まれていた。焼土範囲は楕円形で燃焼部焼土径は38×20cm、被熱深度は5cmである。燃焼部焼土は石組の北半で限定的に確認された。

<付属施設> 柱穴3個と周溝1条を検出した。床面西(P 01)・中央東寄り(P 02)・東(P 03)でそれぞれ1個検出した。柱穴の直径はP 01が24cm、P 02が26cm、P 03が24cm、深さはP 01が27cm、P 02が35cm、P 03が12cmである。周溝は遺構北側の一部で検出した。上面幅は28cm、深さは22cm程度である。

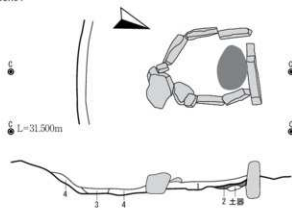
<出土遺物> 炉内と堆積土から出土しているが全て土器類である(第157図)。土器は670.3g出土しており、炉内から出土した第VI群に属する縄文土器1点を掲載した(411)。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。炉内から出土した土器が第VI群に属する縄文土器であることから、縄文時代中期後葉～末(大木9～10式期)に構築・

S160



S160SH01

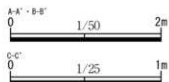


S160 (A-A'・B-B')

1. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性弱 表土層下層
2. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱

S160SH01 (C-C')

1. 10YR3/3 暗褐色土 しまり密、粘性弱
2. 7.5YR3/6 褐色 しまり密、粘性弱 燃焼部焼土
3. 10YR3/2 黒褐色土 しまり密、粘性無
4. 10YR2/1 黒色土 しまり密、粘性無



第 80 図 S I 60

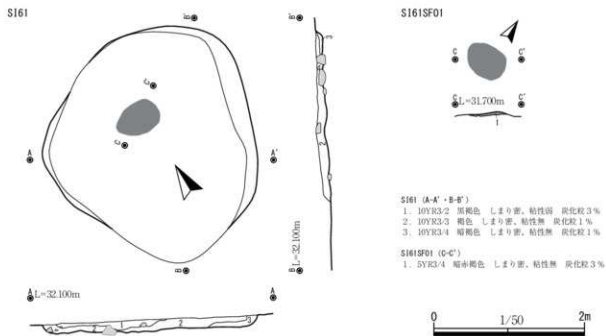
使用されたものと考えられる。

### S I 61 (第 81 図、写真図版 68)

<検出状況> IC 19・20p・q グリッドに位置する。検出面はV層で、重機による表土除去時に現地性焼土頂部を検出した (S I 61 S F 01)。単独の屋外地床炉の可能性を想定し検出を行ったが、現地性焼土を中心として、少量の炭化物粒が混入した円形の褐色土の広がりを確認したことから、堅穴建物と判断し精査を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 残存部分から推測される平面形状は不整形な楕円形で、上面規模は 3.1 × 2.8 m 程度である。建物長辺方向を基準とした主軸方位は N - 4° - E である。床面は V 層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦であるが、後述する地床炉 (S F 01) 付近のみ床面が 5 cm 程度高い。地山から頂部をのぞかせた自然礫が各所で確認され、純粋な平坦面は少ない。地山を削平し造られた平坦面は限定的で地床炉南西部にわずかに残る程度である。残存する壁面は緩やかに立ち上がるが、





第81図 S161

南壁は削平により失われている。検出面からの深さは一番深い遺構東壁付近で10cm程度である。堆積土は3層に分層した。堆積土の主体は褐色土である。堆積土層が薄く、人為堆積か自然堆積かの特定は不可能であった。

〈炉〉 遺構中央に地床炉が1基設置されていた(SF01)。燃燒部焼土径は60×44cm、被熱深度は5cm程度である。

〈付属施設〉 検出されていない。

〈出土遺物〉 堆積土から出土している(第157図)。土器は484.1g出土しており、縄文土器1点を掲載した(412)。地文のみの個体であり、どのグループに属するかは不明である。その他、床面直上から出土した礫石器1点(S188)を掲載した。

〈性格と年代〉 炉を有することから住居として使用された竪穴建物と考えられる。出土した土器は地文のものばかりであり詳細な年代は不明であるが、周辺の遺構との関係から縄文時代中期に構築・使用されたものと考えられる。

### S162 (第82図、写真図版69)

〈検出状況〉 II C 22・23s・tグリッドに位置する。検出面はV層下層で縄文土器片及び炭化粒を多く含む円形の暗褐色土のプランを検出した。このプランの中央部に十字にトレンチを入れた結果、堆積土上層から中層に遺物集中層があることを確認した。また建物床面と考えられる平坦な地山面で石囲炉を検出したため、竪穴建物跡と判断し精査を行った。他遺構との重複は無い。

〈形状・堆積土〉 遺構上部が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明である。残存部分から推測される平面形状は円形で、上面規模は直径3.8mである。石囲炉長軸方向を基準とした主軸方位はN-64°-Wである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。残存する壁面は全て緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは一番深い遺構中央付近で28cm程度である。堆積土は7層に分層した。堆積土の主体は黒褐色土及び暗褐色土である。堆積土全体に炭化粒・焼土粒が混入していたほか、堆積土中層である3層には縄文土器片が多く混入していた。堆積の様相

は人為堆積である。

<炉> 床面中央で石囲炉1基検出した(SH 01)。石組の形状は東西方向を主軸とする長方形だが、炉壁東側には炉石が無く開口していた。同所で炉石の抜き取り痕跡は確認されなかったことや、付近に板状礫が確認されなかったことから考えると、遺構が使用されていた当初段階で炉石組はコの字であった可能性が高い。石組内径は45×26cm程度である。構築方法は、炉の石組よりも一回り大きい範囲を7cm程度長方形に掘り窪め、この掘り方内面に炉石を張り付けていた。燃焼部焼土径は28×22cm、被熱深度は6cmである。燃焼部焼土は石組の南半で限定的に確認された。

<付属施設> 柱穴4個を検出した(P 01～P 04)。柱穴はほぼ方形に配置されており、石囲炉を囲むように北(P 01)・西(P 02)・南(P 03)・東(P 04)の四方でそれぞれ1個検出した。柱穴の直径はP 01が22cm、P 02が26cm、P 03が20cm、P 04が24cm、深さはP 01が33cm、P 02が34cm、P 03が17cm、P 04が24cmである。

<出土遺物> 3層を中心に遺物の集中地点が数箇所あり、そこから多く出土している(第157図)。土器は5295.2g出土しているが、流れ込みによるもので摩滅が激しい為接合率は低い。このうち縄文土器3点を掲載した(413～415)。414・415は第VI群に属するものである。礫も多量に出土していたが、いずれも使用痕の無い自然礫であり、今回は掲載していない。

<性格と年代> 炉を有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土土器が第VI群に属することから、縄文時代中期後葉(大木9式期)に構築・使用されたものと考えられる。

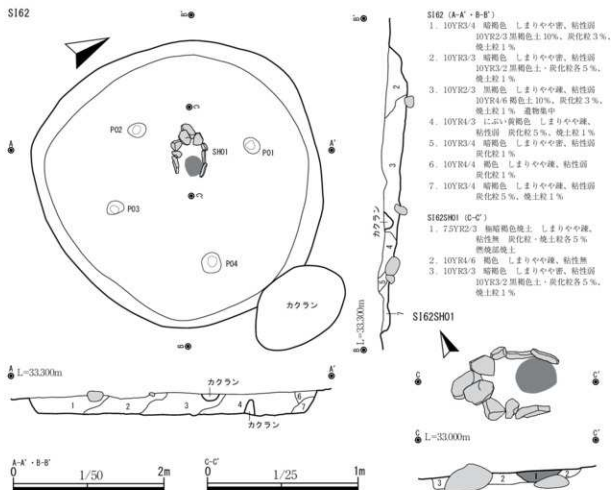
### S I 63 (第83図、写真図版70)

<検出状況> I B 22・23k・1グリッドに位置する。検出面はV層で礫が多く混じる方形の黒色土のプランを確認した。検出を進めた結果、黒色土中に炭化粒・焼土粒、少量の遺物片が含まれていたこと、カマド煙道と推論できる溝状の黒色土のプランを確認したため、堅穴建物跡であると判断し検出を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 北西側の壁が後年の削平によって失われているため形状の全容は不明だが、残存部分から推測される平面形状は台形である。東・南・西の三面の壁はほぼ直交し、この三辺は隅丸方形の様相を示す。ただし平行する東壁と西壁のうち西壁北側が東壁に比べ短いことから、北壁は南壁に対して平行せず、台形状の平面となる。平面形状と上層の堆積状況から考えると、本遺構は後述するS I 64と同時期に建築・使用され廃絶した可能性が高い。上面規模は6.7×6.3m程度と調査区内の古代の堅穴建物としてはS I 37に次いで大きい。一辺ごとの長さは東壁で6.1m、西壁で5.3m、南壁で5.9m、北壁で5.9mである。カマド煙道方向を基準とした主軸方位はN-87°-Wである。床面はV層を平坦にすることで構築されており、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い南壁で64cm程度である。削平により上端を欠損している可能性の高い北西壁で立ち上がりは確認できない。残存している部分の壁は全てほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は7層に分層した。堆積土の主体は黒色土である。遺構南東で厚く堆積する最上層の1層には大量の礫が混入し、堆積土全体に炭化粒・焼土粒が混入していた。堆積の様相は自然堆積である。貼床は無い。

<カマド> 西壁中央に1基設置されていた。燃焼部焼土・煙道が残されていた。燃焼部焼土径は50×48cm、被熱深度は5cm程度である。煙道は西壁際から長さ1.8mで、幅は50cmである。煙道底面は外端に向け緩やかに下る形状であった。煙道上部は削平により失われており残存状況が悪い。煙道の構築方法は不明である。

<付属施設> 検出されていない。



第 82 図 S I 62

<出土遺物> 床面直上と堆積土中、柱穴内堆積土から出土している (第 157・158・191・197 図)。土器は縄文土器と古代の土器を合わせて 4499.5 g 出土しており、このうち古代の土器 12 点を掲載した (416～427)。416 は土師器坏で、轆轤成形で内面に黒色処理が施される I B 類である。417～421・423～427 は非轆轤成形の土師器瓶で、417～419・423・425 は口縁部が「く」の字状に屈曲する I 類である。422 は須恵器瓶である。また、床面直上から出土した刀子と銚を各 1 点 (M30・31) 掲載した。この他、本遺構に直接帰属するものではないが、堆積土上位から出土した礫石器 (S189) 1 点を掲載した。

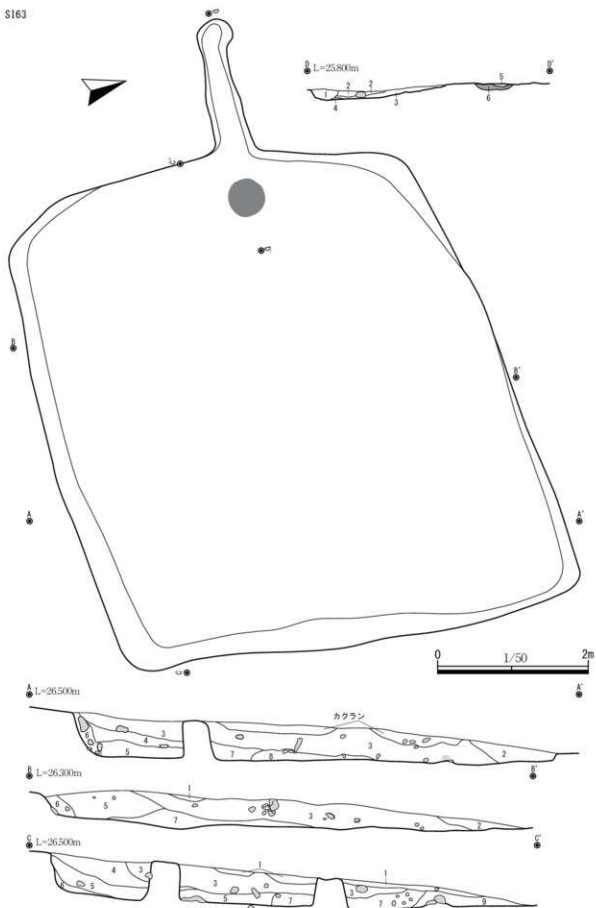
<性格と年代> カマドを有することから住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器に轆轤成形の土師器坏 I 類が含まれていることから、平安時代 (9 世紀後葉) に構築・使用されたものと考えられる。

### S I 64 (第 84 図、写真図版 71)

<検出状況> I B 20・21j・k グリッドに位置する。検出面は V 層で、礫が多く混じる長方形の黒褐色土のプランを確認したため、堅穴建物跡であると判断し検出を行った。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> 緩斜面下方の西側と北壁西半が削平によって失われているため形状の全容は不明だが、残存部分から推測される平面形状は方形である。上面規模は 5.8 × 5.7 m 程度である。建物長軸方向を基準とした主軸方位は N - 10° - E である。床面は V 層を平坦にすることで構築されてお

S163



第83図 S163

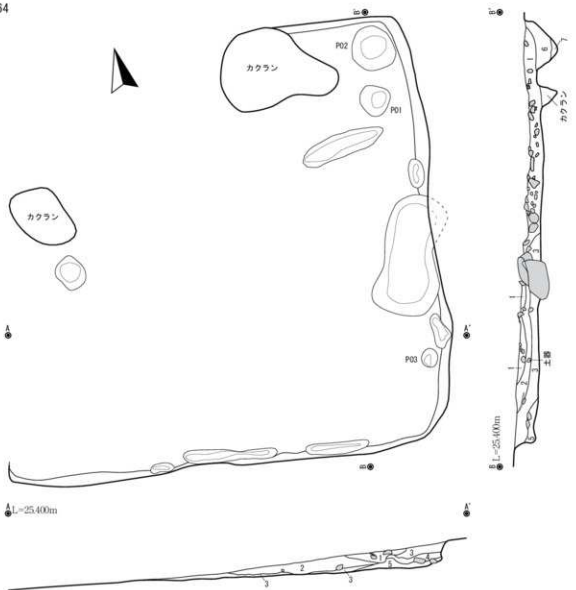
S163 (A-A'・B-B'・C-C')

1. 10YR5/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に  $\phi$ 30mm の礫少量
2. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性やや弱
3. 10YR2/1 黒色 しまりやや強、粘性やや弱  $\phi$ 5-50mm の礫多量
4. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に  $\phi$ 100mm 前後の礫少量
5. 10YR4/2 にふい黄褐色 しまり・粘性共に 礫・遺物含む
6. 10YR4/3 にふい黄褐色と 2.5Y7/8 黄色砂の混合土 しまり強、粘性無  
礫多量
7. 10YR4/2 灰黄褐色 しまりやや強、粘性やや弱 10YR2/1 黒色土と  
2.5Y7/8 黄色砂を各 30% 混在含む
8. 10YR2/1 黒色 しまりやや強、粘性やや弱 2.5YR7/8 黄色砂 30%
9. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に 礫・遺物含む

S163 カマド (D-D')

1. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや強、粘性弱 炭化粒 1%、焼土粒 1% 礫量中
2. 7.5YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱 炭化物 3%
3. 10YR2/2 黒褐色 炭化粒 3%、しまり密、粘性弱
4. 7.5YR3/4 暗褐色 しまりやや強、粘性弱 炭化粒 3%、焼土粒 1%
5. 10YR1/1 黒色 しまりやや強、粘性弱
6. 7.5YR4/6 褐色焼土 しまりやや密、粘性弱 焼土部焼土

S164



S164 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/3 黒褐色 しまりやや強、粘性弱 炭化粒 1% 礫量中
2. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや強、粘性弱 10YR4/6 褐色土 10%、炭化粒 3%、焼土粒 3% 炭化材及び土層間礫多量
3. 10YR1/3 にふい黄褐色 しまりやや強、粘性弱 炭化粒 1%
4. 10YR4/4 褐色粘土 しまり密、粘性弱 炭化粒 5%、焼土粒 3%
5. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや密、粘性弱 炭化粒 3%、焼土粒 1%
6. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや強、粘性弱
7. 10YR3/4 暗褐色 しまりやや強、粘性弱



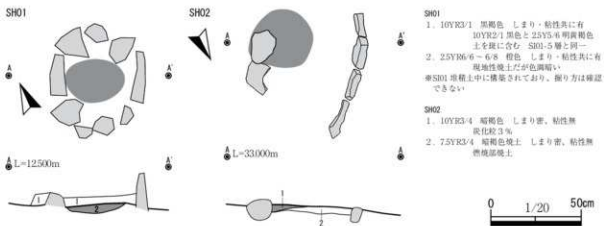
り、ほぼ平坦である。検出面からの深さは一番深い北壁で34cm程度である。削平により上端を欠損している可能性の高い西壁では立ち上がりは確認できない。残存している部分の壁は全てほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は6層に分層した。堆積土の主体は黒褐色土である。遺構南東に厚く堆積する最上層の1層には大量の礫が混入していた。検出状況及び遺構の配置関係から考えると同層と前述のS I 63の1層は同一のもので、緩斜面上方である南東側から流入した崖錐性の自然堆積であると考えられる。堆積土全体に炭化粒・焼土粒が混入していた。堆積土上層に位置する2層は黒色土を主体とするが、地山と同系色の褐色土が多く混入しており、炭化材も多く検出された。同層は焼失崩壊した土屋根構築土ないしは周堤構築土と堅穴建物の小屋組材と考えられる。堆積の様相は自然堆積である。東壁・南壁の一部と、床面北側に断続しながら廻る周溝が検出されている。周溝の廻る範囲は検出された掘り方よりは一回り小さく、この範囲内の床面直上の堆積土からのみ炭化物粒及び焼土粒が検出された。以上の検出状況から、本建物は一度掘った掘り方を縮小し、段階的に利用していた可能性も考慮したが、土層断面の観察などから、これらの様相をうかがうことはできなかった。なお、床面北側の周溝の内外で床面高さに変化はみられないほか、現地性焼土も確認されていない。

<付属施設> 柱穴3個、周溝1条を検出した。柱穴は北壁寄りで2個(P 01・02)、南東隅で1個(P 03)検出した。柱穴の直径はP 01が55cm、P 02が37cm、P 03が42cm、深さはP 01が28cm、P 02が44cm、P 03が21cmである。周溝は東壁・南壁の一部と、床面北側に断続しながら廻る。上面幅は18cm程度、深さは5cm程度である。

<出土遺物> 床面直上と堆積土中から出土しているが全て土器類である(第158・159図)。土器は4017.8g出土しており、古代の土器11点を掲載した(428～438)。428は轆轤成形の土師器環で、両面に黒色処理が施されるⅢ類である。429～433・436～438は非轆轤成形の土師器甕で、430・431・436は口縁部が「く」の字状に屈曲するⅠ類である。434・435は須恵器甕で、色調と胎土の類似性から同一個体の可能性があるが接合しなかった。偽高台風の低い高台を持ち、9世紀後半～10世紀初頭の製作と考えられる。なお、堆積土中からは礫が多量に出土しているが、いずれも使用痕は無く自然礫であった。

<性格と年代> カマドは検出されていないが、遺構の形態と出土遺物から住居として使用された堅穴建物と考えられる。出土した土器に坏類は少ないが、轆轤成形の土師器坏Ⅲ類と須恵器甕類の形態から、平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)に構築・使用されたものと考えられる。

(中村)



第85図 SH 01・02

## 3 炉

縄文時代に属するものであり、2基検出した。

## SH 01 (第85図、写真図版73)

<検出状況> I A 21 h グリッドに位置する。S I 01の堆積土中位で検出した。検出時にはS I 01堆積土中に構築された堅穴建物の炉の可能性を考えたが、S I 01堆積土の断面観察でも明確な壁の立ち上がりを確認できなかったことから単独の石囲炉として精査を行った。

<形状・堆積土> 南北方向に長い長方形プランの石囲炉で、磔の内側の規模は0.47×0.37mである。長軸方向を基準とした主軸方位はN-30°-Eである。9個の石材が使用されており、南北壁には横長のものが使用されている。磔は全て花崗岩であり、内面は被熱によって脆くなっている。燃焼部焼土は炉の中央やや北寄りで検出している。平面規模は0.32×0.23m、被熱深度は6cmである。

<出土遺物> 炉の内部からの出土は無い。

<性格と年代> S I 01との重複関係から、縄文時代中期初頭以降に構築されたものと考えられる。今回は単独の石囲炉と判断した。

(村田)

## SH 02 (第85図、写真図版73)

<検出状況> II B 25・II C 1 m・n グリッドに位置する。重機による表土除去時に現地性焼土頂部と、この周囲に配置された石囲炉石組と考えられる磔列を検出した。住居内の石囲炉である可能性を想定し検出を行ったが、本遺構周辺に帰属を想定できる住居跡を検出することができなかった。遺構周辺は後年の削平及び造成の影響からか、地山が硬く締まっており、住居床面の可能性を持つ硬化面や貼床痕跡の検出も困難であった。このためここでは本遺構を単独の屋外石囲炉とし提示した。他遺構との重複はない。

<形状・堆積土> 現地性焼土を挟み、北東-南西方向を軸方向とする二本の石組列を検出した。石組北部及び南部は開口していたが、同所で炉石据え付け痕跡を確認することはできなかった。遺構使用時の石組形状は不明である。石組内径は65×40cm程度である。構築方法は、炉石設置部分に据え付け穴を掘り、板状磔の炉石を立てる方法だった。攪乱及び削平の影響により一部炉石は倒壊及び散逸していた。焼土範囲は円形で、石組東寄りで限定的に確認できた。燃焼部焼土径は直径35cm、被熱深度は3cmである。燃焼部焼土上面の高さは床面と遺構外の平坦面とはほぼ同じ高さである。燃焼部焼土直上が表土である。検出状況から、焼土及びその周辺の平坦面も削平の影響を受けている可能性が高い。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 屋外の単独石囲炉である。遺構の年代は不明である。

(中村)

## 4 焼土

現地性・二次堆積と成因は多様であるが、単独の遺構として考えられるものを29基検出した(第86～89図、写真図版75～81)。形状・規模は第5表の通りであり、以下では特徴的なものについて記載する。

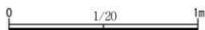
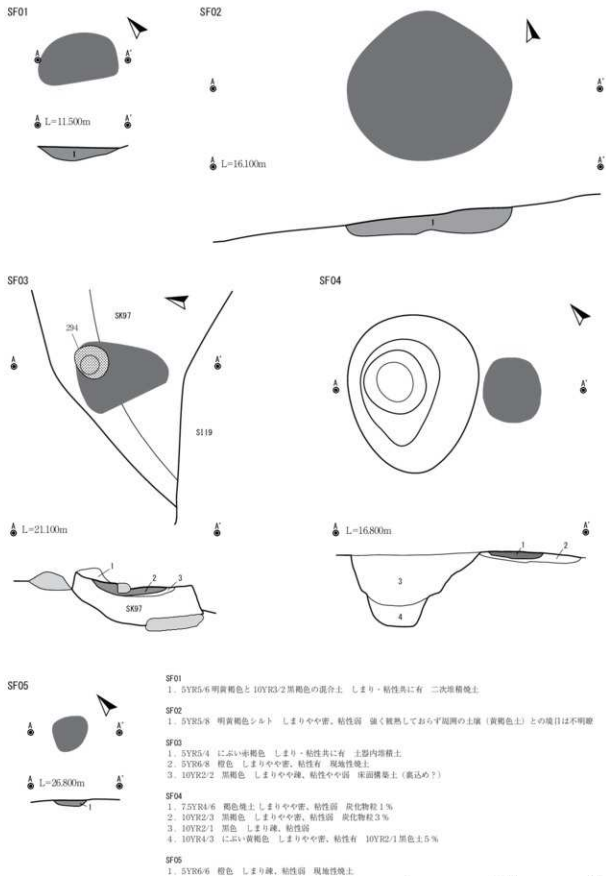
第5表 焼土計測表

遺構名	グリッド	平面形	規模 (cm)		性質	出土遺物 ( )は掲載番号	備考 (新旧:右側が新しい)
			上面	被熱深度			
SF01	I A 16 h	楕円形	44 × 26	80	二次堆積	土器 241.2 g	
SF02	I A 14 q	円形	88 × 80	140	現地性?		
SF03	I B 17 a	不整形	50 × 39	80	現地性	土器 209.5 g (294)	SK38→○。直上に土器
SF04	I A 14 t	円形+土坑	焼土 41 × 40 土坑 84 × 70	焼土 50 土坑 37.0	カマド状遺構	土器 166 g	現地性焼土に隣接して土坑状の掘り込み
SF05	I B 25 n	円形	19 × 19	40	現地性		
SF06	I B 22 q	楕円形	40 × 32	30	二次堆積?		
SF07	I B 24 p	円形	47 × 46	170	焼成土坑	土器 159.8 g (633)	土坑状に掘り留めて土を充填し、その直上で焼成
SF08	I B 25 q	楕円形	60 × 34	80	焼成土坑?	土器 261.6 g (634)	周囲を掘り留めてその内部で焼成
SF09	I B 24 q	不整形円形	49 × 47	100	現地性		
SF10	II B 7 y	不整形	110 × 50	(150)	現地性		現地性焼土だが、根掘れにより焼土が覆作されている。本表の燃焼部焼土は被熱深度4cm程度か
SF11	II C 12 e	円形	31 × 24	40	現地性		
SF12	II C 8 e	円形	32 × 25	50	現地性	土器 770.4 g (439 ~ 441)	弥生時代?
SF13	II C 13 i	不整形	37 × 27	100	現地性		
SF14	II C 12 i	楕円形	60 × 45	190	現地性	土器 276.9 g	
SF15	II C 9 i	円形	18 × 16	40	現地性		
SF16	II C 8 k	不整形	72 × 48	50	現地性	土器 7.0 g	
SF17	II C 5 k	楕円形	55 × 35	50	現地性	土器 267.2 g (635)	
SF18	II C 2 j	不整形	30 × 18	30	現地性	土器 191.7 g	
SF19	II C 1 i	楕円形	41 × (20)	60	現地性		東側が確により不明
SF20	II C 1 i	楕円形	66 × 50	150	現地性		根掘れの影響で断面不整形
SF21	II C 1 n	円形	61 × 60	80	現地性		
SF22	I C 24 r	不整形	31 × 18	70	現地性	土器 191 g	
SF23	I C 23 l	円形	100 × (70)	100	現地性	土器 27.8 g (442)	弥生時代?、○→SK138
SF24	I C 23 l	楕円形	91 × 61	140	現地性	土器 30.7 g	
SF25	I C 21 n	楕円形	50 × 36	60	現地性		
SF26	I C 20 p	円形	29 × 28	80	現地性		SK153→○
SF27	I C 19 m	不整形円形	61 × 52	150	現地性		SK152→○
SF28	I C 19 r	円形	50 × 45	60	現地性		
SF29	I C 18 r	円形	48 × 41	30	現地性		

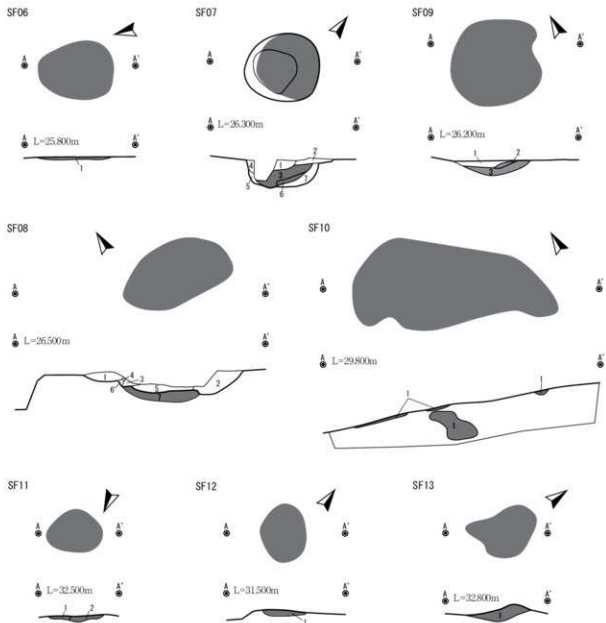
S F 04 (第86図) I A 14 f グリッドに位置する。検出面はV層で、黒褐色土の分布範囲の中に焼土とそれに接するように黒色の円形ブランが検出された。重複する遺構は無い。当初はこれら焼土と土坑は偶然隣接した位置にある別の遺構と捉えていたが、両者を縦断する形でトレンチを設定して掘り下げを行ったところ、焼土形成の際に充填されたと考えられる2層を土坑が切るように掘削されている状況が確認されたことから一連の遺構であると判断した。カマド状遺構の可能性があり、焼土と土坑が対になって使用されたものと考えられる。焼土に隣接する土坑については廃棄土坑の可能性を考慮したが、堆積土中からそれを示す状況は確認できなかった。また、カマド状遺構であれば上屋構造があった可能性もあるが、その痕跡となるような施設・堆積も確認できなかった。なお、年代については出土遺物が乏しく重複関係も無いことから不明である。



4 焼土



第 86 図 SF 01 ~ 05



SF06  
1. 5YR6/6 棕色 しまりやや密、粘性やや弱 5YR4/3に多い赤褐色土を含む二次埋戻堆土か

SF07  
1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり密、粘性強  
2. 10YR3/3 暗褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 20 \sim 30$  mmの焼土ブロック10%  
3. 7.5YR5/8 明褐色粘土 しまり密、粘性強 高った焼土  
4. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強 焼土ブロック  
5. 10YR1/1 黒色粘土 しまり密、粘性強  
6. 7.5YR5/8 明褐色粘土 しまり密、粘性強 焼土  
7. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり密、粘性強

SF08  
1. 10YR2/1 黒色粘土 しまり密、粘性強  
2. 10YR2/1 黒色粘土と10YR3/3暗褐色粘土の混合土 しまり密、粘性強  
3. 10YR1/1 黒色粘土 しまり密、粘性強  
4. 10YR3/3 暗褐色粘土 しまり密、粘性強 焼土粒主体の黒色粘土との混合土  
5. 10YR3/3 暗褐色粘土 しまり密、粘性強 焼土粒主体の黒色粘土との混合土  
6. 10YR3/4暗褐色粘土と10YR3/3暗褐色粘土との混合土 しまりやや密、粘性やや弱  
7. 10YR5/8 明褐色粘土 しまり密、粘性やや弱 焼土

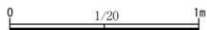
SF09  
1. 10YR2/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強  $\phi 10$  mmの焼土ブロック5%  
2. 7.5YR5/8 暗褐色粘土 しまり密、粘性強  
3. 7.5YR5/8 明褐色粘土 しまりやや密、粘性強

SF10  
1. 5YR6/6 棕色 しまり・粘性共に有 10YR2/1黒色土25% 現地性焼土だが根拠点のための不整形

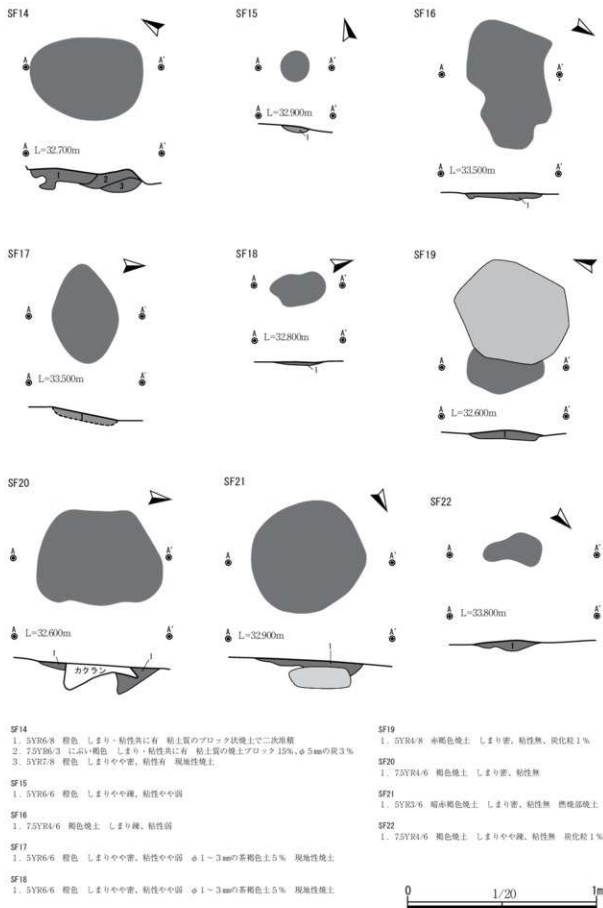
SF11  
1. 2.5YR6/6 棕色 しまり・粘性共に有 現地性焼土  
2. 10YR2/2 黒褐色 黄褐色土多い

SF12  
1. 5YR6/6 棕色 しまり・粘性共に有 10YR2/1黒色土小ブロック5% 現地性焼土

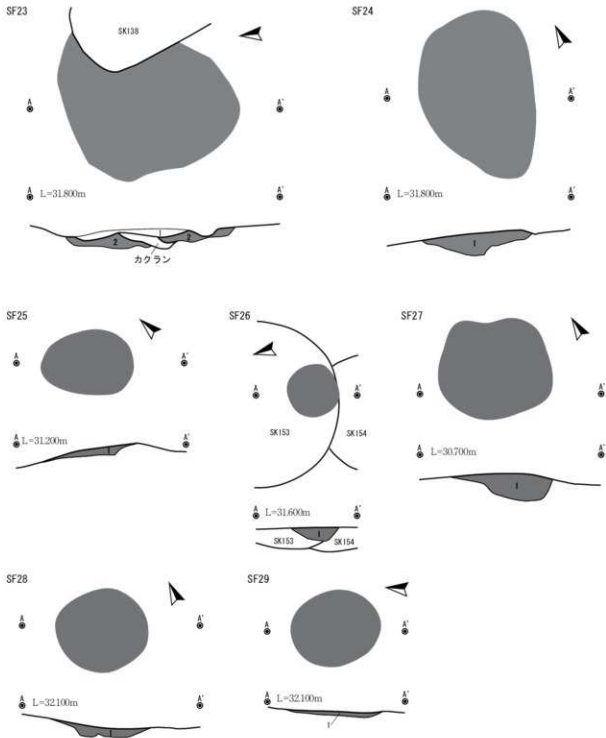
SF13  
1. 5YR6/8 棕色 しまりやや密、粘性有 現地性焼土だが細灰土混入



第87図 SF06～13



第88図 SF14~22



SF23  
 1. 7SYR5/6 明褐色 しまりやや密、粘性無 10YR3/4 暗褐色土10%, 炭化粒・焼土粒各3%  
 2. 5YR3/4 暗赤褐色 しまりやや密、粘性無 凝結性焼土

SF24  
 1. 5YR3/6 暗赤褐色焼土 しまりやや密、粘性無

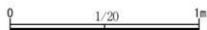
SF25  
 1. 5YR4/8 赤褐色焼土 しまり密、粘性無

SF26  
 1. 5YR4/8 赤褐色焼土 しまり密、粘性無

SF27  
 1. 5YR6/6 褐色 しまりやや疎、粘性やや弱

SF28  
 1. 5YR2/4 暗暗赤褐色 しまり密、粘性無 炭化粒3%

SF29  
 1. 7SYR3/4 暗褐色 しまり密、粘性無 炭化粒3%



第89図 SF23～29

**S F 07** (第 87 図) I B 24 p グリッドに位置する。検出面はⅡ層で、焼土を含む土坑状のプランとして検出した。他遺構との重複関係は無い。焼成のためにⅡ層を土坑状に掘り込み、土を充填して形成された焼成土坑と考えられるものである。3・6層が焼土層であるが、3層は色調の濁った二次堆積の焼土であり、6層が現地性の焼土である。土坑の掘り方部分にまで被熱が及んでいないことから、焼成時には既に5・7層が充填されていたものと考えられる。堆積土上位から第Ⅴ群に属する縄文土器(633)が出土していることから、縄文時代中期に掘削・使用されたものと考えられる。

**S F 08** (第 87 図) I B 25 q グリッドに位置する。検出面はⅡ層で、焼土粒を含む黒褐色土の楕円形プランとして検出した。他遺構との重複関係は無い。S F 07 と同じく焼成のために土坑状に掘り込んだ焼成土坑である。ただし、S F 07 と異なり浅く皿状に掘り窪めただけであり、充填土は確認されなかった。遺物は上位の黒色土から須恵器(634)が出土している。出土遺物は乏しいが、須恵器が出土していることから平安時代に掘削・使用された可能性がある。

**S F 12** (第 87 図) II C 8 e グリッドに位置する。検出面はⅡ層で、周辺の検出及び木根の除去中に焼土と土器が散布する範囲を検出した。当初は竪穴建物の焼土の可能性を想定して周辺を精査したが、明確なプランが確認できなかった為、単独の焼土として記録した。焼土内からの出土は無いが、直上及び周辺から弥生土器が出土している(第 159 図)。770.4 g 出土しており、3点掲載した(439~441)。地文のみであるが、器壁の薄さと縄文の大きさから中期後半に属する壺の破片と考えられる。これらの土器が本遺構に伴うものとするれば、本遺構は弥生時代中期後半に形成された焼土であり、今回の調査では S F 23 と合わせて数少ない弥生時代の遺構となる。なお、本遺構の周辺からオオカミの犬歯が出土している(第Ⅵ章第1節参照)。

(村田)

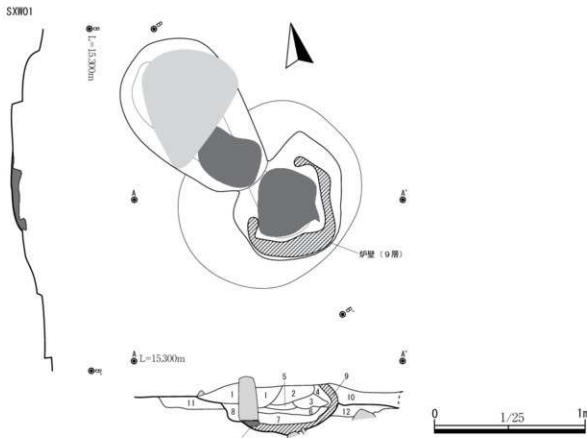
## 5 鉄生産関連炉

### S X W 01 (第 90 図、写真図版 72)

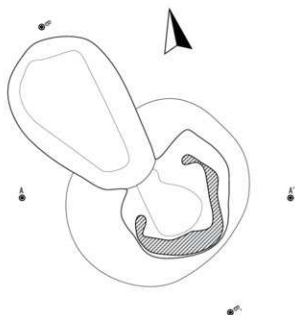
〈検出状況〉 I A 13 p グリッドに位置する。S I 17・18 の精査中に黒褐色土中で内部に C 字状の赤色変化した範囲を含む褐色土の円形プランとして検出した。当初は S I 18 に伴う炉跡と考えていたが、S I 18 の堆積土を掘り込んで構築されている状況が確認できたことから、S I 18 埋設途中にその窪地を利用して構築された単独の炉跡であると判断した。

〈形状・堆積土〉 炉底と中位付近までの炉体が残存していた。炉体部分は平面形が北西側が開口する馬蹄形で、直径は 0.82 m である。S I 18 堆積土と床面を掘り込んでおり、断面形は半円形である。底面から頂部までの高さは 0.25 m である。炉体は粘土質土を固めることで構築されており、先述した S I 37 S X W 01 のような罫の使用は認められなかった。なお、開口部南西側では炉体の側壁と思われる大型の花崗岩が検出されたが、直下で炉底滓が形成されていることから流れ込みによるものと判断した。堆積土は 12 層に細分した。1~3・5・6・8 層は周辺からの流土であり、焼土・炉壁が混入する。7 層は炉底に堆積する炭や細かな鉄滓を含む黒褐色土である。9 層は炉壁の被熱層で、内側から外側に向けて黒・赤・黄と変色している。10 層は炉体の被覆土で硬く締まっている。

また、開口部側には楕円形の掘り込み(前庭部)が確認されている。上面規模は 1.1 × 0.7 m である。堆積土は細かな鉄滓を含む黒褐色土で、底面直上では大型の流状滓が出土している。



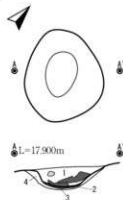
## SXW01 鉄滓除去状況



## SXW01

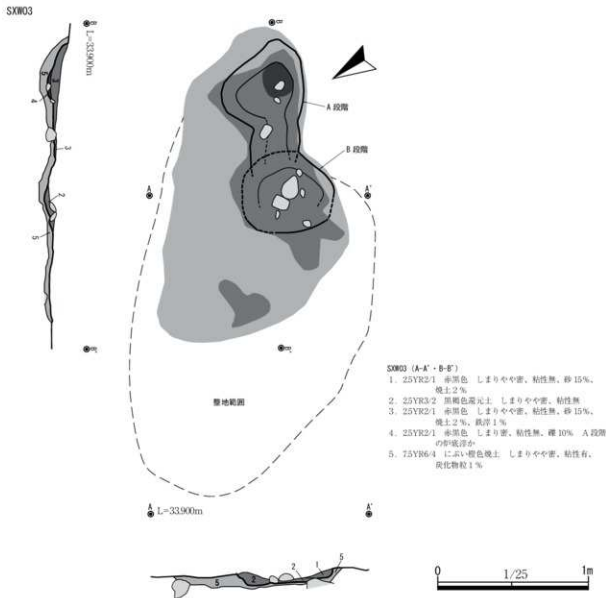
- 10YR4-6 黒褐色シルト しまりやや疎、粘性弱  $\phi$ 10mmの炭化物5%以下、 $\phi$ 2mmの焼土粒5%
- 10YR3-4 黒褐色砂質粘土 しまりやや疎、粘性やや強  $\phi$ 10~20mmの焼土ブロック上層に5%、 $\phi$ 1~5mmの焼土粒10%
- 10YR4-6 黒褐色砂質粘土 しまりやや疎、粘性やや強  $\phi$ 1~5mmの炭化物・焼土粒を各5%、 $\phi$ 100mm以下の焼土ブロック下位を含む
- 7.5YR5-8 暗褐色砂質土 しまり密、粘性弱 砂礫層土
- 10YR4-6 黒褐色砂質粘土 しまり密、粘性強  $\phi$ 1~2mmの焼土粒5%
- 10YR2-3 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性強  $\phi$ 1mm以下の炭で構成  $\phi$ 10~30mmの焼土ブロック  $\phi$ 1~5mmの焼土粒各5%
- 10YR2-3 黒褐色粘土 しまり非常に密、粘性やや弱  $\phi$ 2~3mmの炭化物10%、 $\phi$ 2~10mmの硬い焼土粒40%
- 10YR2-3 黒褐色シルト しまり疎、粘性弱  $\phi$ 1~2mmの粒5%、 $\phi$ 20mm以下の鉄滓3%以下
- 10YR2-3 黒褐色粘土 しまりやや密、粘性密 砂礫 炉内から外に向かって黒色から赤色に淡く変化
- 10YR4-4 黒褐色砂質粘土 しまりやや密、粘性強
- 10YR2-3 黒褐色砂質土 しまりやや疎、粘性強 SI18相粘土
- 10YR3-4 黒褐色粘土 しまり密、粘性やや強  $\phi$ 1mmの炭化物5% SI18相粘土

## SXW02



## SXW02

- 10YR2-1 黒色粘土 しまりやや疎、粘性強  $\phi$ 1mmの炭化物30%含む 炭塵じりの凝結層
- 10YR2-3 黒褐色粘土 しまり疎、粘性強  $\phi$ 1~2mmの炭化物・ $\phi$ 1mmの焼土粒各10%
- 5YR3-6 暗赤褐色粘土 しまりやや密、粘性強 凝結性粘土
- 10YR5-8 黄褐色粘土 しまり密、粘性やや弱  $\phi$ 1~2mmの粒10%



第91図 SXW03

<出土遺物> 炉内及び前庭部から出土している(第201図)。土器は215.8g出土しているが、細片のため図示していない。1層中から出土した羽口(M103)のみ掲載した。その他、鉄滓が680.2g出土しているが、ほとんどが磁着しない流状滓と炉内滓である。

<性格と年代> 炉の形状と出土した鉄滓の種別から、精錬炉と考えられるものである。出土遺物は乏しいが、S I 17・18との重複関係から古代に構築・使用されたものと考えられる。

(村田・中島)

## SXW02 (第90図、写真図版73)

<検出状況> I A 20 s グリッドに位置する。検出面はV層で、鉄滓の集中する円形の黒色プランとして検出した。重複する遺構は無く、単独で存在する。

<形状・堆積土> 平面形は円形で、上面規模は直径約0.5mである。底面付近のみ残存しており、上部構造は不明である。V層を掘り窪めることで構築されており、断面形は半円形で深さは0.15mである。堆積土は鉄滓と炭を含む黒色土の単層で、底面直上には操業時に形成された炉底層が残存し

ていた。

〈出土遺物〉 堆積土中から出土しているが、全て鉄滓である。鉄滓は3490.7g出土している。底面直上から出土した磁着無しの炉底滓が3340gと重量のほとんどを占め、その他堆積土中から磁着無しの流状滓と粒状滓が少量出土している。

〈性格と年代〉 出土した鉄滓の中に粒状滓が含まれることから精錬鍛冶炉として使用された可能性が高い。なお、本遺構は古代に構築・使用された可能性は高いが、土器類の出土が無いことと他遺構との重複関係が無いことから年代については不明である。

(村田)

#### SXW 03 (第91図、写真図版74)

〈検出状況〉 II C 5 1～6mグリッドに位置する。検出面はV層上面で、楕円形に拡がる焼土範囲を検出した。一部は強い熱変成を受けており青黒く還元していた。焼土範囲に十字にトレンチを入れて確認したところ、鉄生産関連炉の底部構造と考えられる痕跡を確認した。遺構の上部は後世の土地利用のため削平されていた。炉底とみられる部分を2カ所確認し、それらは共に還元範囲と対応していた。そこで3・4層に相当する古い炉跡をAとし、1・2層に相当する新しい炉跡をBとした。2基に時期差はほとんどないと考えられる。S I 47と重複関係にあり、S I 47より新しい。

〈形状・堆積土〉 炉跡Aの平面形は円形で、斜面下方に還元した窪みが延びる。規模は0.59×0.55mほどで、斜面下方に延びる窪み部分の規模は長さ0.30m、幅0.33mである。炉跡Bは円形を呈し、規模は0.60×0.55mである。炉跡Aと同様に斜面下方に還元範囲が延びる。炉跡A・Bの周囲には地面を整地したような少し硬化した範囲が拡がる。堆積土は5層に細分した。強い熱変成を受けて還元している1～4層には5～15cm大の礫や砂が含まれていた。防湿のための痕跡と考えられる。5層は上部からの熱変成を受けていぶい橙色に変色していた。

〈出土遺物〉 堆積土中から土器が10332g出土しているが、いずれも周辺からの流れ込みか直下にあるS I 47・48からの混入と考えられる。したがって2点のみ写真掲載した(631・632)。鉄滓類は極少量であり、いずれも磁着しない流状滓である。

〈性格と年代〉 出土遺物は乏しいが、遺構の構造から古代以降に構築・使用された鉄生産関連炉と考えられる。また、鉄滓も少なく炉の性格についても不明である。

(高橋)

## 6 土 坑 (第92～107図、第6表、写真図版82～117)

154基検出した。形状・堆積土は第6表の通りである。分布状況を見ると、調査区全域で検出されているが、縄文時代に属するものについては特に平成25年度調査区の南壁付近にあたるI A 17m～21pグリッドでまとまって検出されている。性格がわかるものとしては陥し穴・貯蔵穴(フラスコ状土坑)・墓坑等があるが、ここでは特徴的なものについてのみ個別に記載する。

S K 03 (第92図) I A 21 iグリッドに位置し、S I 07貼床の除去中に検出した。堆積土の上位はS I 07の床面構築土とほとんど変わらず、当初は土坑状の掘り方部分の堆積であると判断して断面を残さず掘り下げを行っていた。しかし、中位付近まで掘り下げたところで堆積土が黒褐色土に変化し、さらに壁面が外方に抉れていく状況が確認されたことから、この時点で土坑に変更して断面図の作成を行った。結果としては小型のフラスコ状土坑であることが判明し、堆積土中から第IV群の縄文土器(450)が出土した。この深鉢は円筒上層a式に比定され、时期的には大木7式に併行するも

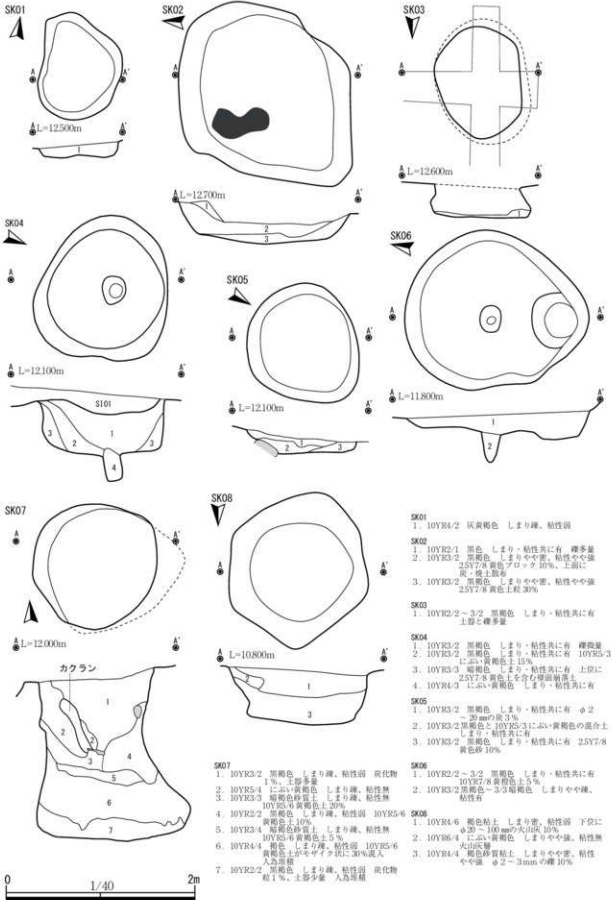


第6表 土坑計測表

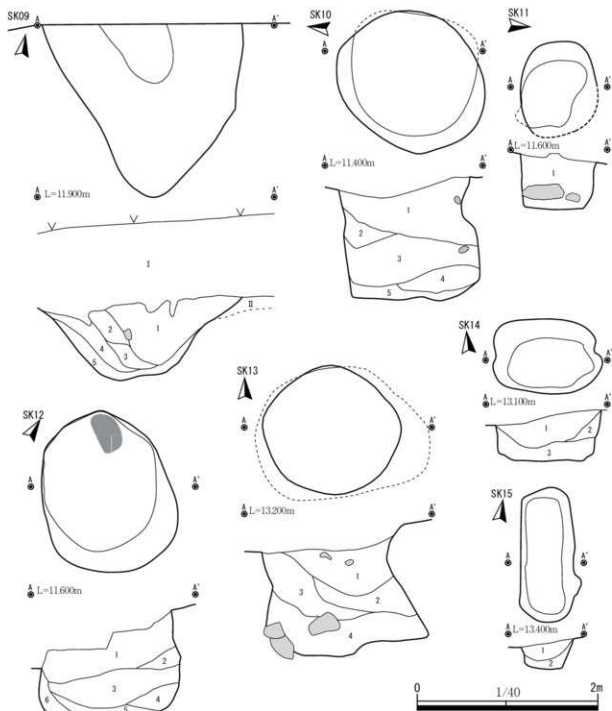
遺構名	グリッド	性格	形状		規模 (cm)		堆積土	出土遺物 ( )内は発掘番号	備考 (新旧)右側が新しい)
			平面	断面	上面	深さ			
SK01	1 A 20 f	不明	不整形	楕形	114 × 86	150	1層	土器 43.8 g (446)	SK01 → O
SK02	1 A 16 g	不明	不整形	流合形	182 × 182	45.0	3層	土器 3226.0 g (447 ~ 449)	SK01 → O → SK07
SK03	1 A 21 i	貯蔵穴	円形	フラスコ形	118 × 92	33.0	1層	土器 8918.8 g (450)	O → SK07
SK04	1 A 20 f	陥し穴	円形	楕形	152 × 140	67.0	4層		陥穴 O → SK01
SK05	1 A 21 h	不明	円形	楕形	115 × 108	23.0	3層		O → SK01
SK06	1 A 22 f	陥し穴	円形	楕形	194 × 168	28.0	2層	土器 3127 g	陥穴 O → SK01
SK07	1 A 20 g	貯蔵穴	円形	フラスコ形	134 × 130	183.0	6層	土器 8209.3 g (451 ~ 459)、石器 (S56 ~ 63)、590)、金属 (M32)	
SK08	1 A 19 d	不明	円形	流合形	160 × 145	54.0	3層	土器 69.1 g (460 ~ 462)	
SK09	1 A 22 g	不明	長楕円形	流合形	212 × 184	83.0	5層	土器 474.2 g	一部調査区外
SK10	1 A 16 h	貯蔵穴	円形	フラスコ形	155 × 150	130.0	5層	土器 1406 g、石器 (S64 ~ 65)	
SK11	1 A 18 h	不明	円形	楕形	100 × 80	58.0	1層	土器 1436 g	
SK12	1 A 21 h	貯蔵穴	円形	楕形	171 × 140	109.0	6層	土器 1277.5 g (463-464)、石器 (S66)	
SK13	1 A 16 j	貯蔵穴	円形	フラスコ形	148 × 137	140.0	4層	土器 6172 g (465、466)	
SK14	1 A 17 j	不明	長楕円形	楕形	116 × 80	53.0	3層	土器 2106 g	
SK15	1 A 16 k	不明	長方形	楕形	143 × 56	30.0	2層	土器 56.6 g	
SK16	1 A 16 j	貯蔵穴	円形	フラスコ形	163 × 162	150.0	8層	土器 492 g (467 ~ 469)	
SK17	1 A 16 k	不明	円形	楕形	80 × 70	23.0	2層	土器 30.2 g	P.05 → O
SK18	1 A 16 i	陥し穴	円形	流合形	113 × 113	53.0	6層		陥穴
SK19	1 A 13 m	不明	円形	流合形	270 × 268	80.0	8層	土器 563.9 g (470、471)	
SK20	1 A 9 m	不明	長楕円形	流合形	130 × 62	47.0	3層	土器 75.6 g	
SK21	1 A 9 i	不明	不整形	流合形	95 × 80	55.0	2層	土器 227 g、301 (M104)	O → SK08
SK22	1 A 9 m	不明	円形	流合形	54 × 46	13.0	1層	土器 5.3 g	
SK23	1 A 9 m	不明	不整形	流合形	70 × 70	28.0	1層		
SK24	1 A 10 m	不明	円形	流合形	70 × 68	28.0	1層	土器 54.9 g	
SK25	1 A 21 m	不明	長方形	流合形	175 × 90	88.0	3層		一部調査区外 SK26 → O → SK02
SK26	1 A 21 m	不明	楕円形	楕形	(142) × 88	50.0	4層		一部調査区外 O → SK25 → SK02
SK27	1 A 22 m	不明	円形	楕形	68 × 59	86.0	4層		
SK28	1 A 21 i	不明	不整形	楕形	130 × 70	18.0	4層	土器 58.2 g	O → SK02
SK29	1 A 21 m	不明	円形	不整形	125 × 103	46.0	3層	土器 369 g (472)	SK30 → O → SK02
SK30	1 A 21 m	不明	不整形	不整形	116 × 69	53.0	1層		O → SK29 → SK02
SK31	1 A 20 m	不明	長楕円形	楕形	70 × 50	88.0	2層	土器 101.1 g (473)、石器 (S191)	O → SK02
SK32	1 A 20 m	不明	円形	流合形	820 × 684	58.2	4層		SK34 → O → SK02、SK04
SK33	1 A 21 m	不明	楕円形	流合形	1421 × 1243	28.0	2層		陥穴 SK34 → O → SK04
SK34	1 A 20 m	不明	円形	流合形	1186 × 1180	168.8	5層	土器 313 g	O → SK04、SK32
SK35	1 A 21 n	貯蔵穴	楕円形	フラスコ形	138.2 × 121.0	68.0	4層		SK36 → O → SK04
SK36	1 A 21 n	貯蔵穴	楕円形	フラスコ形	138.2 × 121.0	105.2	2層		O → SK04、SK35
SK37	1 A 21 n	不明	楕円形	流合形	135.8 × 128	62.0	3層		SK38 → O
SK38	1 A 21 n	不明	円形	流合形	150.4 × 88.8	38.8	2層	土器 76.7 g	陥穴 O → SK37
SK39	1 A 21 o	不明	円形	流合形	166.1 × 96.1	45.5	5層		SK40、SK41 → O
SK40	1 A 21 o	不明	円形	楕形	137.8 × 118.2	20.0	1層	土器 105.7 g、石器 (S19)	SK41 → O → SK39
SK41	1 A 21 n	不明	円形	流合形	182.6 × 100.4	46.5	3層	土器 175 g (474)	陥穴 O → SK39、SK40
SK42	1 A 21 n	不明	円形	流合形	138.0 × 134.5	61.4	3層	土器 2012.3 g (475)、石器 (S193)	陥穴 SK03 → O
SK43	1 A 21 n	不明	円形	流合形	117.4 × 109.4	63.6	5層		
SK44	1 A 21 o	不明	円形	流合形	155.5 × 143.6	37.8	2層	土器 6.0 g	陥穴
SK45	1 A 20 n	不明	円形	流合形	124.4 × 120.0	64.6	3層		陥穴 SK46 → O → SK03
SK46	1 A 20 n	不明	円形	流合形	128.4 × 120.8	48.5	1層	土器 1224 g	陥穴 O → SK03、SK45
SK47	1 A 20 n	不明	円形	流合形	196.4 × 194.1	98.4	1層	土器 1796 g	SK03 → O
SK48	1 A 20 n	不明	楕円形	楕形	157.7 × 129.4	33.0	1層	土器 27.5 g	陥穴 SK49 → O → SK03
SK49	1 A 20 n	不明	楕円形	流合形	110.4 × 102.0	72.2	3層	土器 1671 g	
SK50	1 A 19 m	不明	円形	流合形	156.3 × 155.3	108.8	2層	土器 347 g (476)	O → SK03、SK05
SK51	1 A 20 o	貯蔵穴	円形	フラスコ形	142.7 × 133.3	147.4	4層	土器 17.7 g	SK52 → O
SK52	1 A 20 o	不明	楕円形	楕形	150.0 × 109.3	20.8	1層	石器 (S67、68)	O → SK21、SK51
SK53	1 A 20 p	陥し穴?	円形	フラスコ形	135.8 × 125.2	91.0	4層	土器 20.4 g	陥穴 O → SK27
SK54	1 A 21 o	貯蔵穴	円形	フラスコ形	91.2 × 90.0	82.2	4層	石器 (S69)	O → SK27

遺構名	グリッド	性格	形状		規模 (cm)		堆積土	出土遺物 ( ) 内は図録番号	備考 (新掘:右側が新しい)
			平面	断面	上面	深さ			
SK55	1 A 19 m	不明	円形	逆台形	57 × 55	300	1層	土器 90.5 g	
SK56	1 A 18 m	不明	楕円形	逆台形	156.7 × 141.6	44.4	3層	土器 15.5 g	
SK57	1 A 19 m	陥し穴	円形	逆台形	180 × 170	1000	3層	土器 341.5 g	副穴
SK58	1 A 19 n	陥し穴?	円形	楕形	130 × 116	550	3層	土器 412.3 g	副穴 ○→S11
SK59	1 A 19 o	陥し穴?	円形	楕形	120 × 108	670	3層		床面に小穴3個 ○→S11
SK60	1 A 19 o	不明	円形	楕形	57 × 57	130	2層		床面に小穴1個 ○→S11
SK61	1 A 18 o	不明	円形	逆台形	206 × 196	430	4層		S11→○
SK62	1 A 18 n	不明	円形	楕形	208 × 204	180	2層		○→S11・S35
SK63	1 A 19 n	不明	楕円形	逆台形	180 × 127	770	5層		
SK64	1 A 18 o	不明	不整形円形	楕形	106.1 × 103.2	31.2	1層		
SK65	1 A 19 o	不明	楕円形	楕形	92.6 × 83.3	194	2層	土器 8.2 g	
SK66	1 A 19 o	不明	楕円形	逆台形	103.5 × 120.3	47.8	3層		
SK67	1 A 19 o	不明	長楕円形	楕形	204 × 88	760	7層	土器 1177.5 g (S77 ~ S80)、石器 (S194)	○→SK66
SK68	1 A 17 m	不明	円形	逆台形	165 × 163	560	4層	土器 192.6 g (S61)	
SK69	1 A 17 o	不明	長方形	楕形	86 × 42	850	2層	土器 100.2 g (S62)	SK70→○
SK70	1 A 17 n	貯蔵穴?	円形	楕形	252 × 252	1330	10層	土器 1203.8 g (S63・S64)、石器 (S70・S95・196)	○→SK69
SK71	1 A 17 o	不明	楕円形	楕形	148 × 120	450	2層		
SK72	1 A 17 o	陥し穴	円形	楕形	177 × 162	1280	18層	土器 226.5 g (S65)、石器 (S71)	SK73→○→S115
SK73	1 A 17 o	陥し穴	円形	楕形	200 × (S89)	1330	11層	土器 2207.7 g (S66)、石器 (S72)	○→SK72
SK74	1 A 16 n	不明	円形	楕形	94 × 76	260	2層	土器 126.8 g	
SK75	1 A 16 o	不明	円形	楕形	55 × 52	110	1層	土器 8.9 g	
SK76	1 A 16 m	不明	円形	逆台形	124 × 115	650	2層	土器 155.8 g (S67・S68)	
SK77	1 A 15 m	陥し穴	円形	逆台形	198 × 188	740	4層	土器 161.3 g	副穴、溝 SK78→○→S306
SK78	1 A 16 n	不明	不整形	逆台形	(127) × 92	300	1層	土器 60.9 g	○→SK77
SK79	1 A 15 m	不明	円形	逆台形	70 × 68	300	1層	土器 85.4 g	S105→○
SK80	1 A 14 n	不明	円形	逆台形	216 × 187	900	6層	土器 496.3 g、石器 (S197)、金属 (MS3・34)	
SK81	1 A 15 q	不明	楕円形	楕形	120 × 88	150	2層	土器 31.3 g	表面に焼土 S113→○
SK82	1 A 15 r	不明	長楕円形	楕形	180 × 72	270	3層	土器 88.7 g、石器 (S198)	S119→○
SK83	1 A 15 t	不明	円形	逆台形	82.4 × 75.8	32.2	1層		
SK84	1 A 12 v	不明	円形	逆台形	65.8 × 59.0	41.6	2層	土器 14.8 g	
SK85	1 A 11 g	貯蔵穴?	円形	フラスコ形	85 × 70	500	1層		○→SK28
SK86	1 A 10 t	埋戻土上?	長楕円	U字形	284.7 × 144.4	37.8	5層	土器 47.5 g	内面粘土張り S21→○
SK87	1 A 10 s	不明	円形	楕形	81.2 × 76.4	16.4	3層		○→S22
SK88	1 A 10 s	埋戻土上?	隅丸長方形	逆台形	124.9 × 104.9	69.8	7層		S22→○→SK89
SK89	1 A 10 s	埋戻土上?	長楕円形	U字形	182.0 × 86.0	72.0	4層		S22・SK88→○
SK90	1 A 11 v	不明	円形	楕形	116.2 × 104.4	18.6	4層		
SK91	1 A 10 v	不明	楕円形	フラスコ形	156.4 × 126.2	52.6	3層		
SK92	1 A 18 s	不明	不整形	逆三角形	190 × 61	500	不明		ストレーションのみ
SK93	1 A 23 t	不明	楕円形	楕形	72.8 × 72	210	1層		○→S29
SK94	1 A 23 u	不明	長方形	逆台形	(190) × 88	62.0	4層		S29→○
SK95	1 A 22 v	不明	不整形円形	逆台形	190.6 × 188.8	38.2	2層	土器 15.5 g	
SK96	1 A 22 y	不明	不整形円形	逆台形	188.9 × 95.4	27.0	3層		
SK97	1 B 17 a	不明	楕円形	楕形	207 × (109)	300	4層	土器 100.5 g	
SK98	1 A 12 b	不明	円形	楕形	92.2 × 88.2	29.2	3層		
SK99	1 A 16 l	近郊墓坑	円形	楕形	98 × 90	570	5層	金属 (MS5)、銭貨 (M61 ~ 63)	人骨出土
SK100	1 A 16 l	近郊墓坑	円形	逆台形	100 × 88	570	1層		人骨出土
SK101	1 A 17 l	近郊墓坑	円形	逆台形	103 × 103	1020	8層	銭貨 (M64・65)	人骨出土 S X 01→○
SK102	1 A 16 l	近郊墓坑	不整形	逆台形	107 × 84	350	1層	土器 54.3 g、金属 (MS6 ~ 41)	
SK103	1 A 17 l	近郊墓坑	円形	不整形	70 × 55	400	2層	土器 32.2 g	
SK104	1 B 23 p	不明	楕円形	逆台形	90.6 × 80.3	22.2	1層		
SK105	1 B 24 p	不明	隅丸方形	楕形	29.1 × 26.4	36.7	1層		
SK106	1 B 5 v	不明	長楕円形	逆台形	55.4 × 30.9	15.6	1層		
SK107	1 B 4 v	不明	楕円形	逆台形	67.4 × 52.3	11.5	1層	土器 22.7 g (S69)	

遺構名	グリッド	性格	形状		規模 (cm)		基礎土	出土遺物 ( )内は図録番号	備考 (新旧・右側が新しい)
			平面	断面	上面	深さ			
SK108	B C 4 w	不明	円形	流台形	53.1 × 52.1	21.9	1層		
SK109	B B 10 v	不明	隅丸方形	流台形	307.2 × 688	23.0	2層	土器 42 g	
SK110	B B 9 x	不明	不整形	楕形	242.5 × 175.0	28.0	3層	土器 1632 g (489)	
SK111	B B 12 w	不明	長楕円形	楕形	121.5 × 65.0	12.0	2層	土器 13.8 g	○→SK3
SK112	B B 12 x	不明	円形	流三角形	76.0 × 57.0	59.0	3層	土器 47.8 g	○→SK3
SK113	B B 13 w	不明	円形	U字形	65.3 × 63.1	43.1	2層		
SK114	B C 13 c	不明	円形	楕形	205.0 × 185.0	23.5	4層	土器 187 g	
SK115	B C 14 c	不明	円形	流台形	167.0 × 153.0	46.0	7層	土器 591.4 g (490)、金属 (M42)	
SK116	B C 14 d	不明	不整形	楕形	186.0 × 166.0	71.0	1層	土器 10.2 g	角礫多量、SK07等と同じものか
SK117	B C 13 e	不明	不整形	不整形	138.1 × 129.3	25.0	1層	土器 2444.2 g、石器 (S190)	
SK118	B C 12 h	不明	不整形	隅平伏	152.4 × 108.0	74.1	2層	土器 10341 g (491)	二段階掘り込み
SK119	B C 13 h	不明	円形	楕形	58.3 × 47.8	42.3	1層	土器 3635 g (637)	○→SP18
SK120	B C 12 i	不明	円形	流台形	130.0 × 110.0	90.0	6層	土器 1212.2 g (492)、石器 (S200)	二段階掘り込み
SK121	B C 12 i	不明	円形	楕形	(280.0) × 225.0	45.0	2層	土器 2467 g	一部調査区外
SK122	B C 12 h	不明	円形	流台形	217.3 × 195.9	31.0	1層	土器 3551.5 g (493～495)	○→SP14
SK123	B C 10 i	不明	長楕円形	不整形	(124.3) × 73.9	28.0	2層	土器 25.6 g	
SK124	B C 10 h	不明	円形	楕形	81.9 × 73.0	9.2	1層	土器 164.2 g	SK125→○
SK125	B C 10 h	不明	不整形	楕形	147.2 × 104.1	22.0	1層	土器 22.39 g	○→SK124
SK126	B C 9 g	不明	長楕円形	流台形	182.8 × 133.7	61.1	4層	土器 205.2 g (496)	
SK127	B C 9 i	不明	不整形	楕形	190.1 × 150.0	23.0	2層	土器 900.9 g (497・498)	
SK128	B C 6 k	不明	長楕円形	流台形	72.9 × 55.8	28.4	2層	土器 211.1 g (499・500)	
SK129	B C 4 m	不明	不整形	半円形	63.4 × 46.7	11.4	1層		SK130→○
SK130	B C 4 m	不明	不整形	楕形	128.4 × 101.8	13.8	1層	土器 2.4 g	○→SK129
SK131	B C 3 m	不明	円形	流台形	81.4 × 80.8	17.3	2層		SI50→○
SK132	B C 4 l	不明	円形	半円形	63.7 × 62.3	16.7	1層		
SK133	B C 2 k	不明	円形	流台形	59.7 × 52.7	28.6	1層	土器 39 g	
SK134	B C 3 k	不明	円形	U字形	82.6 × 76.6	37.8	2層	土器 30.4 g	
SK135	B C 4 j	不明	長楕円形	流台形	97.4 × 73.0	29.4	3層		
SK136	1 C 25 o	不明	円形	流台形	79.9 × 79.0	26.0	1層		
SK137	1 C 23 i	不明	不整形	楕形	154.5 × 126.5	58.2	2層	土器 101.1 g	
SK138	1 C 23 i	不明	長楕円形	U字形	130.4 × 59.8	35.6	1層	土器 58.6 g	SP23→○
SK139	1 C 23 k	不明	長楕円形	楕形	118.0 × 76.3	21.0	2層	土器 47.4 g	
SK140	1 C 24 j	不明	楕円形	楕形	130.0 × 110.9	40.0	1層		SI53→○
SK141	1 C 23 j	不明	不整形	流三角形	94.3 × 73.7	44.3	3層		
SK142	1 C 22 j	不明	円形	拱伏	47.4 × 42.5.9	17.6	1層	砂噴出点	○→SK144
SK143	1 C 23 j	不明	不明	楕形	96.4 × 70.0	9.0	1層	土器 (501～503)、石器 (S27)	○→SK144
SK144	1 C 22 j	不明	隅丸方形	流台形	286.2 × 100.2	39.8	1層	土器 (504・630)、SK143と 同 1632.5 g	SK143→○→SK145
SK145	1 C 22 j	不明	長楕円形	楕形	95.7 × 51.3	20.2	1層	土器 39 g	SK144→○
SK146	1 C 21 p	不明	不整形	楕形	146.0 × 138.5	34.8	2層		SX08→○
SK147	1 C 21 p	不明	不整形	楕形	140.7 × 135.5	43.4	1層	土器 58.7 g	
SK148	1 C 21 o	不明	円形	流台形	94.2 × 93.6	25.0	2層		
SK149	1 C 20 m	不明	円形	U字形	69.8 × 66.0	40.6	1層		
SK150	1 C 19 o	不明	円形	半円形	94.2 × 91.0	34.2	2層		内面粘土張り
SK151	1 C 18 m	不明	長楕円形	U字形	72.5 × 52.0	26.4	1層		
SK152	B C 19 m	陥し穴?	長楕円形	流三角形	267.2 × 121.3	52.4	2層	土器 339.3 g (505・506)	
SK153	1 C 20 p	不明	円形	楕形	85.8 × 81.0	10.8	1層		SK154→○→SP26
SK154	1 C 21 p	不明	楕円形	楕形	55.2 × 49.5	7.2	1層		○→SK153・SP26



第92図 SK01~08



## SK09

1. 101K1/1 黒色 しまり・粘性共に  $\phi 10 \sim 50$  mmの礫少量
2. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に
3. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に To-Cu ワズロック多い
4. 101K1/4 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に
5. 101K1/6 黄褐色 しまり・粘性共に

## SK10

1. 101K1/2 黒褐色 しまり・粘性共に 101K5/3 にぶい黄褐色・2.5T/8 黄色土 15%、 $\phi 10$  mmの炭化物 3%
2. 101K1/3 にぶい黄褐色と 2.5T/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に 壱波面落土
3. 101K1/2 黒褐色 しまり・粘性共に  $\phi 10$  mm前後の礫少量
4. 101K1/3 にぶい黄褐色と 2.5T/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に 層状に礫塊 礫少量
5. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまりや砂、粘性有 101K1/2 黒褐色

## SK11

1. 101K1/1 黒褐色 しまり・粘性共に 礫少量

## SK12

1. 101K1/2 黒褐色 しまり・粘性共に 遺物・礫少量
2. 101K1/3 にぶい黄褐色と 2.5T/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に 層状に礫塊 壱波面落土と腐土
3. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまりや砂、粘性有 やや砂質で両面に 2.5T/8 黄色 地山土少量
4. 101K1/3 にぶい黄褐色と 2.5T/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に 層状に礫塊 礫少量 壱波面落土と腐土
5. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまりや砂、粘性有 底面付近に 2.5T/8 黄色土
6. 地山落土層

## SK13

1. 101K1/2 黒褐色 しまり・粘性共に 2.5T/8 黄色土小ブロック 15%、 $\phi 30$  mm以上の礫がむ
2. 101K1/1 黒褐色と 101K5/3 にぶい黄褐色の混合土 しまり・粘性共に
3. 2.5T/8 黄色 しまり・粘性共に 101K1/1 黒褐色～101K1/3 暗褐色土 40%
4. 2.5T/8 黄色 しまりや砂、粘性有 101K1/1 黒褐色土 15% 地山落土

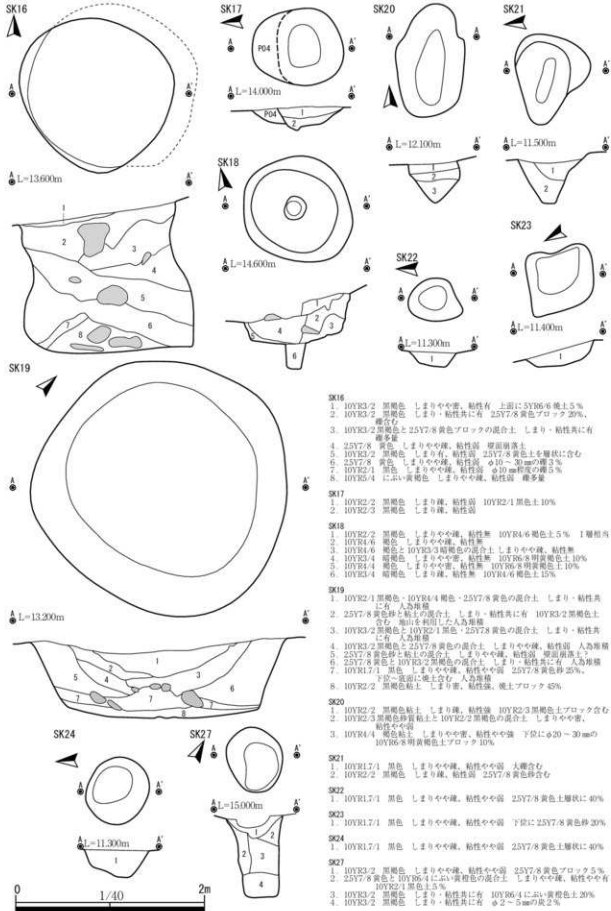
## SK14

1. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性共に 2.5T/8 黄色地山土 20%、礫少量
2. 101K1/8 黄褐色 しまりや砂、粘性やや強 壱波面落土
3. 2.5T/8 黄色 しまりや砂、粘性有 地山落土

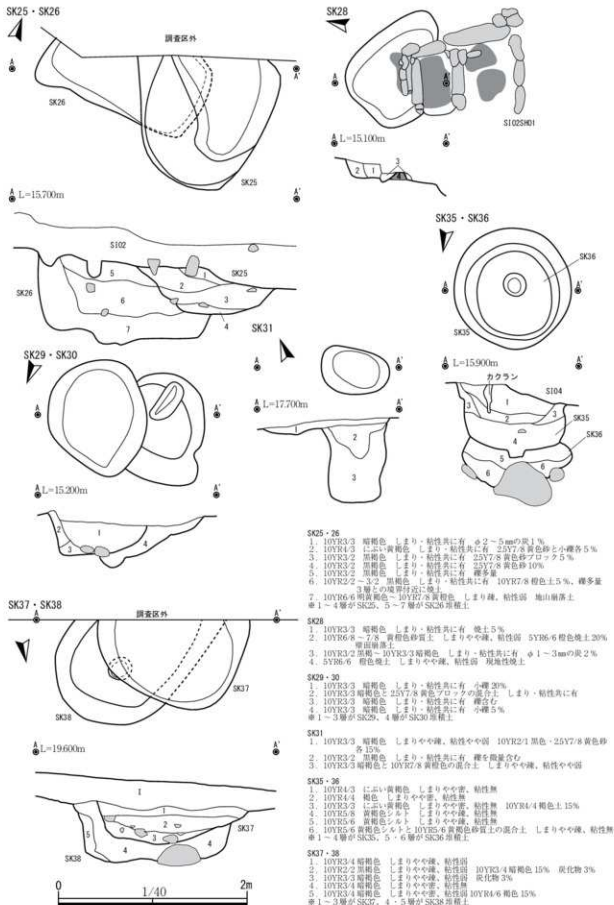
## SK15

1. 101K1/1 黒色 しまり・粘性共に
2. 101K1/3 にぶい黄褐色 しまり砂、粘性弱  $\phi 30$  mmの礫少量

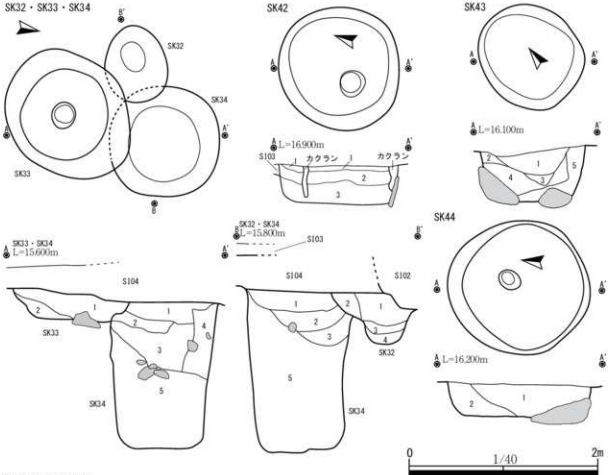
第93図 SK 09～15



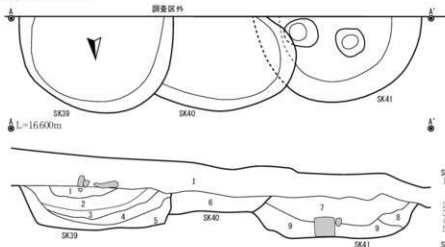
第94図 SK16~24・27



第95図 SK25・26・28~31・35~38



SK39・SK40・SK41



SK32

1. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中硬、粘性弱 炭化物粒1%
2. 10YR4/3 紅赤・黄褐色 しまりや中密、粘性無 10YR5・8黄褐色土5%
3. 10YR5/6 黄褐色砂質土 しまりや中硬、粘性弱 10YR2/3黒褐色土30%
4. 10YR6/6 黄褐色砂質土 しまり硬、粘性無 10YR2/3黒褐色土30%

SK33

1. 10YR4/4 褐色 しまりや中密、粘性弱
2. 10YR3/3 暗褐色 しまりや中密、粘性弱

SK34

1. 10YR4/4 褐色 しまりや中密、粘性無 焼土1%
2. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり密、粘性無 10YR5・8黄褐色土5%
3. 10YR5/6 黄褐色 しまり硬、粘性弱 10YR2/3黒褐色土30%
4. 10YR5/8 黄褐色 しまり硬、粘性無
5. 10YR6/8 黄褐色砂質土 しまり硬、粘性弱

SK39・40・41

1. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中硬、粘性弱
  2. 10YR2/3 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱
  3. 10YR3/3 暗褐色 しまりや中密、粘性弱
  4. 10YR4/6 褐色 しまりや中密、粘性弱 焼土粒1%
  5. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中密、粘性弱
  6. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中密、粘性弱 10YR2/2黒褐色土30%
  7. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中密、粘性弱 10YR2/2黒褐色土30%
  8. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱
  9. 10YR4/3 紅赤・黄褐色 しまり密、粘性弱
- 1～5層がSK39、6層がSK40、7～9層がSK41層積土

SK42

1. 10YR4/3 紅赤・黄褐色 しまりや中密、粘性弱 焼土粒1% 上層に遺物集中
2. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中硬、粘性弱
3. 10YR4/4 褐色 しまりや中密、粘性弱

SK43

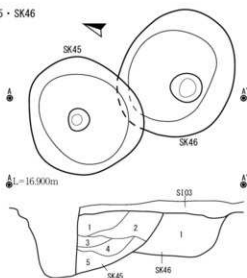
1. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性無 10YR4/6褐色粘土質土30% 炭化物粒2%
2. 10YR2/4 暗褐色 しまり密、粘性無
3. 10YR4/6 褐色 しまり密、粘性弱
4. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性無
5. 10YR4/4 褐色 しまり密、粘性弱

SK44

1. 10YR2/4 暗褐色 しまりや中密、粘性弱
2. 10YR4/4 褐色 しまりや中密、粘性弱

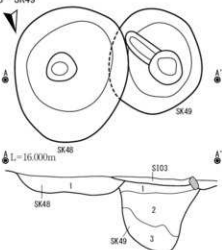


SK45・SK46



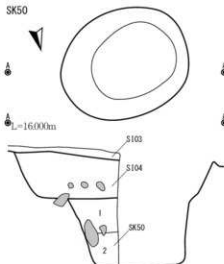
L=16.900m

SK48・SK49



L=16.600m

SK50



L=16.600m

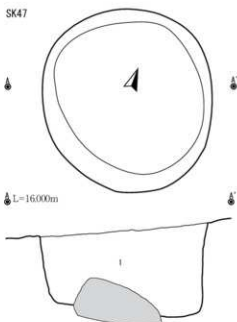
SK49

1. 10YR4/4 暗褐色 しまり密、粘性弱
2. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性弱 10YR5-8 黄褐色土5%
3. 10YR4/3 紅土黄褐色 しまり密、粘性弱

SK50

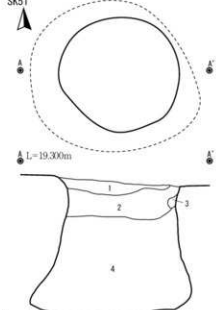
1. 10YR5-8 黄褐色 しまり密、粘性弱 10YR2-4 暗褐色土20% 下部に礫集中
2. 10YR3/4 暗褐色 しまりやや中密、粘性弱 10YR2-3 暗褐色土15%

SK47



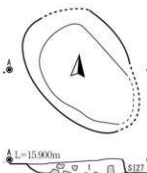
L=16.600m

SK51



L=19.300m

SK52



L=15.900m

SK45

1. 10YR2-3 暗褐色 しまりやや中密、粘性弱
2. 10YR4/6 褐色 しまりやや中疎、粘性弱
3. 10YR3/4 暗褐色 しまりやや中疎、粘性弱
4. 10YR2/4 暗褐色 しまりやや中疎、粘性弱
5. 10YR4/4 褐色 しまりやや中疎、粘性無

SK48

1. 10YR4/4 褐色 しまりやや中密、粘性弱

SK47

1. 10YR3/4 暗褐色 しまり密、粘性弱

SK48

1. 10YR2/4 暗褐色 しまり密、粘性弱

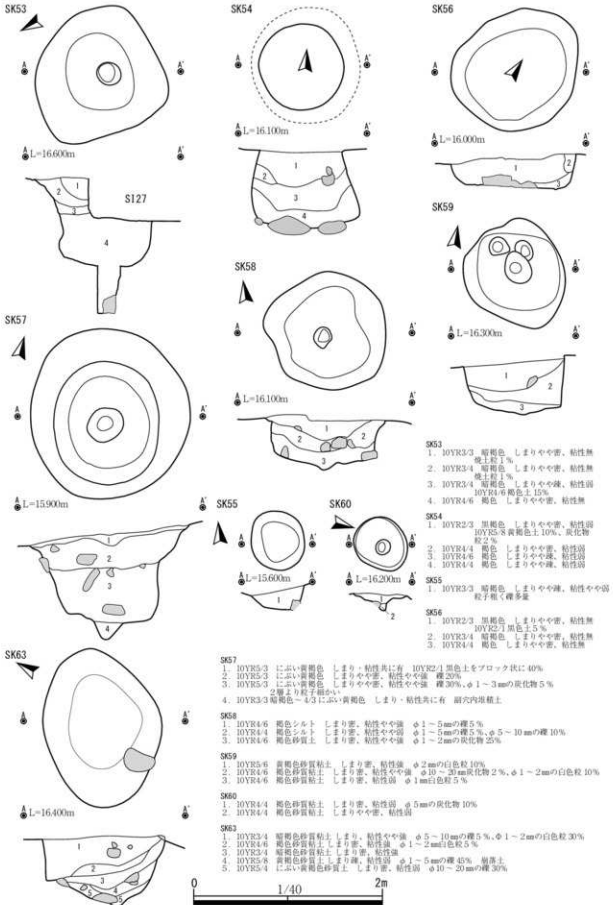
SK51

1. 10YR4/4 褐色 しまりやや中密、粘性弱
2. 10YR3-3 暗褐色 しまりやや中密、粘性弱
3. 10YR5-8 褐色 しまり密、粘性弱 海山礫
4. 10YR6/4 紅土黄褐色砂質土 しまりやや中疎、粘性無

SK52

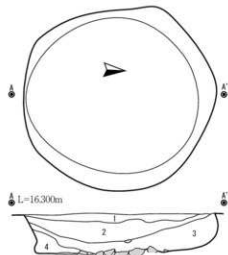
1. 10YR2-3 暗褐色 しまりやや中密、粘性弱

0 1/40 2m

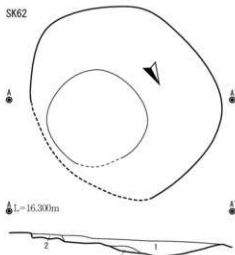


第98図 SK 53 ~ 60・63

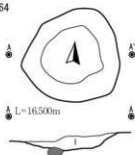
SK61



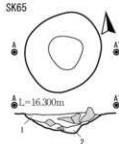
SK62



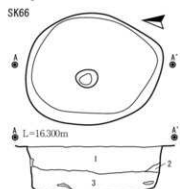
SK64



SK65



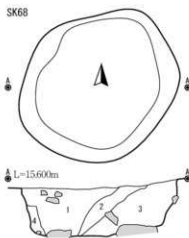
SK66



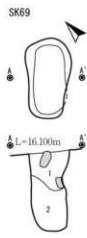
SK67



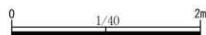
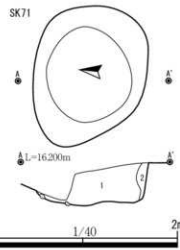
SK68



SK69



SK71



SK61

1. 10YR4/6 暗褐色砂質粘土、しまりやや密、粘性やや強、 $\phi$ 1~20mmの白色粒含む
2. 10YR4/6 暗褐色粘土、しまり密、粘性やや強、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土がツラツラに層積
3. 10YR4/6 暗褐色砂質シルト、しまり密、粘性強、 $\phi$ 1~3mmの礫25%
4. 10YR4/6 暗褐色質シルト、しまり密、粘性強、 $\phi$ 1mmの礫5%

SK62

1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまり密、粘性強、 $\phi$ 1mmの炭化物5%、 $\phi$ 1~5mmの白色粒25%
2. 10YR4/6 暗褐色粘土、しまり密、粘性やや弱、 $\phi$ 1~5mmの白色粒5%

SK64

1. 10YR3/4 暗褐色、しまりやや密、粘性無、10YR2/1 黒色土10%

SK65

1. 10YR3/4 暗褐色、しまりやや密、粘性弱、10YR5/8 黄褐色地山土15%
2. 10YR3/3 暗褐色、しまりやや密、粘性弱、10YR5/8 黄褐色地山土5%

SK66

1. 10YR4/6 暗色、しまり疎、粘性無
2. 10YR6/8 明黄褐色、しまり疎、粘性無
3. 10YR5/8 黄褐色砂質土、しまりやや疎、粘性無

SK67

1. 10YR2/1 黒色、しまり・粘性共に有、 $\phi$ 1~3mmの礫5%、晩土・砂各2%
2. 10YR1/1 暗灰色、しまり密、粘性有、 $\phi$ 1~3mmの砂15%
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色、しまり密、粘性有、 $\phi$ 1~3mmの礫15%、10YR7/8 黄褐色コロコロ25%
4. 10YR7/8 黄褐色、しまり有、粘性やや弱、礫面崩壊上
5. 10YR7/6 明黄褐色、しまり・粘性共に有、 $\phi$ 2~10mmの砂10%
6. 25YR/3 淡黄色、しまり・粘性共に無、礫30%、礫面崩壊上
7. 25YR/3 淡黄色、しまり・粘性共に無、 $\phi$ 1~3mmの炭1%

SK68

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色、しまりやや疎、粘性やや弱、礫と砂を層状に30%
2. 10YR2/2 暗褐色、しまり・粘性共に有、 $\phi$ 3mmの炭3%
3. 10YR3/3 暗褐色、しまり・粘性共に有、25Y7/8 黄褐色砂15%
4. 10YR7/8 黄褐色粘土土、しまりやや密、粘性やや強、礫面崩壊上

SK69

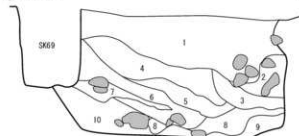
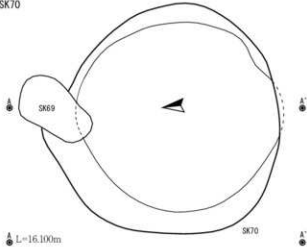
1. 10YR2/1 黒色、しまり・粘性共に有、10YR4/4 暗色土5%、礫含む
2. 10YR2/1 黒色、しまりやや疎、粘性弱、 $\phi$ 1~3mmの炭2%

SK71

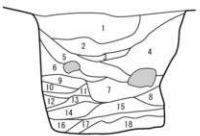
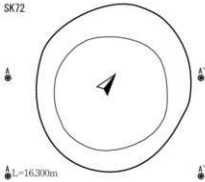
1. 10YR4/4 暗色、しまりやや密、粘性やや有、上面に10YR3/2 黒褐色土10%
2. 10YR7/8 黄褐色、しまり密、粘性有、礫面崩壊上

第99図 SK61・62・64~69・71

SK70



SK72

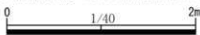


SK73

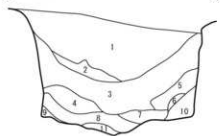
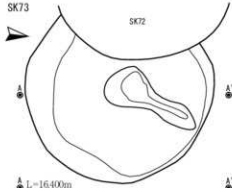
1. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 10YR7/8黄褐色砂 10%、礫少量 上-中位に遺物
2. 10YR8/8 明黄褐色 しまりやや中疎、粘性有 腐葉が風化した花崗岩片多量
3. 10YR5/3 に近い黄褐色 しまりやや中疎、粘性やや弱 a 1-3mmの炭2%
4. 25Y7/8 黄褐色 しまりやや中疎、粘性弱 礫を含む 地山の流土
5. 10YR5/2 に近い黄褐色 しまりやや中疎、粘性やや弱 φ2-5mmの炭3%、25Y7/8黄褐色砂 25%
6. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 10YR7/8黄褐色土5%
7. 10YR7/8-8/8 黄褐色 しまり・粘性共に有 地山崩落土
8. 10YR5/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 10YR7/8黄褐色土15%、25Y7/8黄褐色砂 20%
9. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質土 しまり・粘性共に無 上位に炭含む 白砂多量
10. 10YR7/8-8/8 黄褐色 しまり・粘性共に有 地山崩落土

SK75

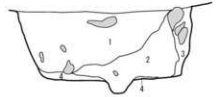
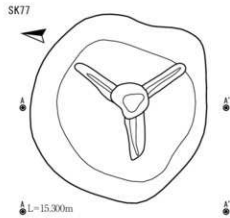
1. 10YR17/1 黒色 しまりやや中疎、粘性有 細小片の炭化物 50%、10YR4/4 褐色土 20%



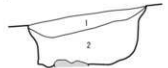
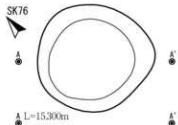
SK73



SK77



SK76



第 100 図 SK 70・72~77

## SK72

1. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色砂 5%
2. 10YR3/4 に近い黄褐色砂質 しまりやや疎、粘性やや弱
3. 10YR3/4 に近い黄褐色土と黄土を中心
4. 10YR3/3～5/4 に近い黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 炭 2%
5. 10YR3/2 互層堆積
6. 10YR4/2 灰黄褐色と 25Y7/8 黄色の混合土 しまりやや疎、粘性やや弱 礫を多く含む
7. 10YR4/2 灰黄褐色と 25Y7/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に有
8. 2.5Y8/4 淡黄色砂 しまり・粘性共に無 礫面積多量
9. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に無 礫を多く含む
10. 2.5Y8/4 淡黄色砂 しまり・粘性共に無 礫面積多量
11. 10YR7/8 黄褐色と 10YR4/2 灰黄褐色の混合土 しまり・粘性共に有
12. 2.5Y8/4 淡黄色砂 しまり・粘性共に無 礫面積多量
13. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に有
14. 10YR2/8 黄褐色と 25Y7/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に有 礫面積多量
15. 10YR3/2 黒褐色と 25Y7/8 黄色の混合土 しまり・粘性共に有 人為堆積
16. 2.5Y8/4 淡黄色砂 しまり・粘性共に無 礫面積多量
17. 10YR3/3 に近い黄褐色 しまり・粘性共に有 やや疎
18. 10YR2/6 明黄褐色 しまり・粘性共に有 黒色土 15%

## SK76

1. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 礫を含む
2. 10YR3/3 暗褐色 しまり・粘性共に有 下部に礫多量

## SK73

1. 10YR3/3 に近い黄褐色 しまり密、粘性やや弱 φ10mm 程度の炭 2%、25Y7/8 黄色土ブロック層状に 3%、礫 5%
2. 10YR3/4 に近い黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 φ2～5mm の炭 1%
3. 10YR3/3 に近い黄褐色 しまりやや密、粘性やや弱 礫 5%
4. 10YR3/3 に近い黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱 φ1～3mm の砂 3%
5. 10YR3/6 明黄褐色 しまり・粘性共に有 φ1～5mm の炭 2%
6. 10YR7/6 明黄褐色 しまり・粘性共に有
7. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有
8. 10YR3/3 に近い黄褐色 しまり・粘性共に有 φ1～3mm の砂 2%
9. 10YR5/6 黄褐色 しまり・粘性共に有 礫少量 礫面積多量
10. 25Y7/8 黄色砂 しまり・粘性共に無 礫面積多量
11. 10YR7/8 黄褐色 しまり・粘性共に有 礫面積多量

## SK74

1. 10YR3/1 黒褐色～4/4 褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色土ブロック 30%
2. 10YR4/4 褐色 しまり・粘性共に有 礫面積多量

## SK77

1. 10YR3/2 黒褐色 しまり有、粘性やや弱 上部に流れ込み後土、全体に礫を含む
2. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 小礫を含む 1層より粒子細かい
3. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性やや弱
4. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に有 25Y7/8 黄色土層状に含む

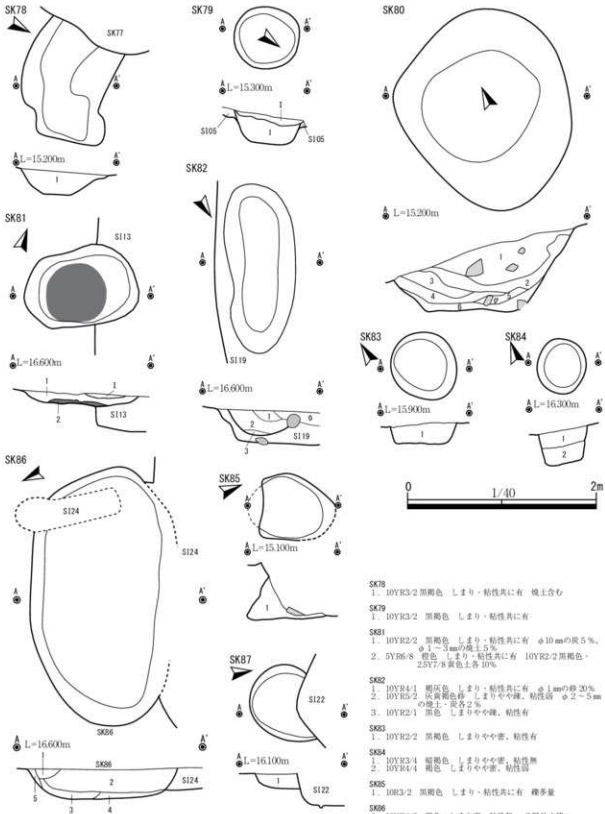
のであることから、本遺構は縄文時代中期初頭に掘削された土坑と考えられる。

SK 07 (第 92 図) I A 20 g グリッドに位置する。検出面は V 層で、黒褐色の円形プランとして検出した。当初は黒褐色土が広範囲に分布していたため、堅穴建物の可能性を想定して精査を開始したが、本遺構の上面がわずかに窪んでおり、II 層に相当する黒褐色土はその部分に流れ込んでいたのみであった。したがって、その II 層を除去したところ、本遺構の上面プランを確認することができた。断面形は底面付近が大きく外方に広がるフラスコ形で、東側が大きく広がる。人為堆積と考えられる黒褐色土が主体であり、1 層から遺物が多量に出土している (第 160・161・179・191・197 図)。土器は 8209.3 g 出土しており、縄文土器 9 点を掲載した (451～459)。456 のように第 II 群に属するものもあるが、ほとんどが第 IV 群に属するものである。この他、剥片石器 8 点 (S56～59) と礫石器 1 点 (S190)、検出面から出土した釘 1 点 (M32) を掲載した。形状から貯蔵穴として使用されたフラスコ状土坑であり、第 IV 群土器が主体となることから、縄文時代中期初頭 (大木 7 式) の頃に埋められていたと考えられる。

(村田)

SK 19 (第 94 図) I A 13 m グリッドに位置する。検出面は V 層で、黒褐色の円形プランとして検出した。V 層を掘り込んでおり、底面は V 層を平坦に整えることで形成されている。堆積土は 8 層に細分した。1・3・7 層は、黒褐色・黒色土に褐色のブロックが混じった人為堆積土で、2・4・5・6 層は自然堆積土と考えられる。8 層は、底面に堆積している焼土ブロックの混ざった黒褐色土で、粘性は強い。焼土が混じるのはこの層のみで、周囲の地山にも被熱による赤色変化はない。以上から、焼土は現地性ではなく、二次堆積と考えられる。遺物は 8 層より上位で出土している (第 161 図)。土器は 5639 g 出土しており、2 点を掲載した (470・471)。いずれも轆轤成形の土器で、470 は I A a 類に属する高台坏、471 は I A 類に属する坏である。廃棄土坑としての性格が考えられるもので、出土遺物から平安時代に掘削・廃棄されたものと考えられる。

SK 80 (第 101 図) I A 14n グリッドに位置する。平面形は楕円形で、III 層上面で検出した。本来は円形の土坑だったと考えられるが、西側の先端が斜面に面し、後世の改変により削平されているため楕円形となっている。底面は V 層を平坦に整えることで形成されている。堆積土は 6 層に細分した。堆積土のうち 2・4 層は黄褐色土と暗褐色土のブロックが混ざっており人為堆積土と考えられる。遺物は堆積土中から出土している (第 192・197 図)。土器は 496.3 g 出土しているが、細片のため図

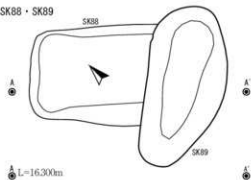


- SK80**
1. 10YR2/2 暗褐色シロト しまり漆、粘性や中硬 φ50～150mmの礎3%
  2. 10YR2/3 暗褐色粘土 しまり漆、粘性や中硬 φ10～150mmの10YR5/6黄褐色土ブロック30%
  3. 10YR2/2 暗褐色粘土 しまり漆、粘性油
  4. 10YR2/3 暗褐色粘土 しまりや中硬、粘性や中硬 φ50～100mmの10YR3/4暗褐色土ブロック20%
  5. 10YR2/3 暗褐色粘土 しまり漆、粘性油
  6. 10YR2/2 暗褐色粘土 しまり漆、粘性油 φ50～200mmの10YR3/4暗褐色土ブロック40%

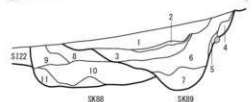
- SK78**  
1. 10YR2/2 暗褐色 しまり・粘性共に有 焼土含む
- SK79**  
1. 10YR2/2 暗褐色 しまり・粘性共に有
- SK81**  
1. 10YR2/2 暗褐色 しまり・粘性共に有 φ10mmの礎5%、  
2. 5YR6/8 褐色 しまり・粘性共に有 10YR2/2 暗褐色・2.5Y7/6黄褐色土各10%
- SK82**  
1. 10YR4/1 暗灰色 しまり・粘性共に有、φ1mmの砂20%  
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂 しまりや中硬、粘性弱 φ2～5mmの焼土・灰存2%  
3. 10YR2/1 黒色 しまりや中硬、粘性有
- SK83**  
1. 10YR2/2 暗褐色 しまりや中硬、粘性有
- SK84**  
1. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中硬、粘性無  
2. 10YR4/4 褐色 しまりや中硬、粘性弱
- SK85**  
1. 10R3/2 暗褐色 しまり・粘性共に有 漆多量
- SK86**  
1. 10YR4/6 褐色 しまり漆、粘性無 厚層地山塊  
2. 10YR3/4 暗褐色 しまりや中硬、粘性無 10YR17/1黒色土20%  
3. 10YR17/1 黒色 しまりや中硬、粘性無 炭化物粒30%  
4. 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりや中硬、粘性無 炭灰下  
5. 10YR4/6 褐色 しまり漆、粘性無 10YR17/1黒色土30% 粘厚か
- SK87**  
1. 10YR3/4 暗褐色 しまり漆、粘性弱 炭化物粒2%、焼土粒1%

第101図 SK 78～87

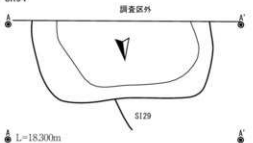
SK88・SK89



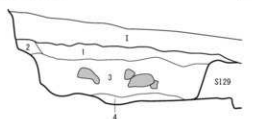
L=16,300m



SK94



L=18,300m



SK88・89

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりや中硬、粘性中
  2. 10YR4/6 褐色砂質土 しまり硬、粘性無
  3. 10YR2/1 黒色 しまり硬、粘性弱
  4. 10YR2/2 黒褐色 しまり硬、粘性弱 10YR3/8 黄褐色土 20%
  5. 10YR2/2 黒褐色 しまり硬、粘性弱 10YR5/8 黄褐色土 20%
  6. 10YR2/2 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱 10YR3/2 黒褐色土 10%、炭化物粒 1%
  7. 10YR3/1 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱 10YR5/8 黄褐色土 30%、炭化物粒 1%
  8. 10YR2/3 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱 10YR2/2 黒褐色 30%
  9. 10YR2/3 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱
  10. 10YR4/4 褐色 しまりや中硬、粘性弱 10YR3/4 暗褐色 30% 焼土粒 3% 炭化物粒 1%
  11. 10YR2/3 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱 10YR5/8 黄褐色 5%
- ※1-7層がSK88、8-11層がSK89埋積土

SK90

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱 10YR4/6 褐色土 30%
2. 10YR3/4 暗褐色 しまり中硬、粘性弱 炭化物粒 1%
3. 10YR2/1 黒色 しまり硬、粘性無
4. 10YR2/3 黒褐色 しまり硬、粘性弱

SK91

1. 10YR3/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強 10YR4/4 褐色土含む
2. 10YR3/3 暗褐色 しまり密、粘性強 炭化物粒 1%
3. 10YR4/6 褐色 しまり密、粘性弱
4. 10YR4/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強
5. 10YR5/6 褐色 しまり密、粘性無
6. 10YR4/4 暗褐色粘土 しまり密、粘性強 炭化物粒 1%

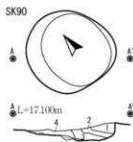
SK92

1. 10YR6/4 におい黄褐色 しまり・粘性共に有

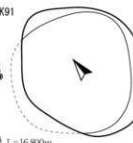
SK94

1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり密、粘性強 φ10-100mmの黒褐色ブロック 10%
2. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまり密、粘性強 φ1-3mmの炭化物 5%、φ10-150mmの礫 15%
3. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりや中硬、粘性強 φ30-50mmの10YR2/3 黒褐色ブロック φ10-30mmの10YR4/6褐色ブロック各5%

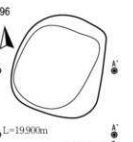
SK90



SK91



SK96



SK95

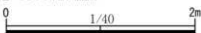


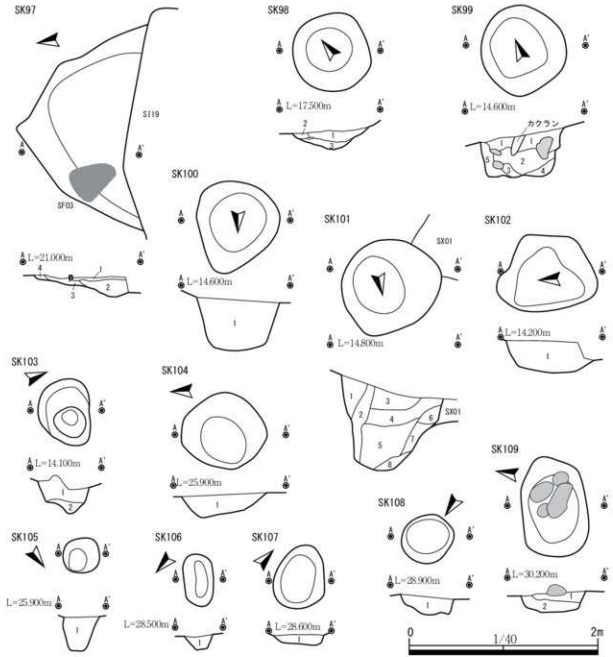
SK95

1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり密、粘性や中強 φ5-10mmの10YR3/3 暗褐色土ブロック 10%
2. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりや中硬、粘性強

SK96

1. 10YR2/3 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱 礫集中
2. 10YR4/6 褐色 しまりや中硬、粘性 10YR2/3 黒褐色土 10%
3. 10YR3/2 黒褐色 しまりや中硬、粘性弱





SK97

1. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
2. 10YR5/4 にふい黄褐色と 10YR3/2 黒褐色の混合土 しまり・粘性共に有
3. 10YR4/3 にふい黄褐色 しまりや中硬、粘性有  $\phi$  3mmの 25Y7/8 黄色ブロック 5%
4. 10YR4/2 灰黄褐色

SK98

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱
2. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
3. 10YR4/4 暗褐色 しまり跡、粘性弱

SK99

1. 10YR3/3 暗褐色 しまり跡、粘性弱
2. 10YR4/4 暗褐色 しまり跡、粘性弱
3. 10YR4/6 暗褐色 しまり跡、粘性弱
4. 10YR5/8 黄褐色 しまり跡、粘性弱
5. 10YR4/4 暗褐色 しまり跡、粘性弱

SK100

1. 10YR3/1 黒褐色 しまり跡、粘性弱

SK108

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりや中硬、粘性有 下段に 10YR7/8 黄褐色土を層状に含む

SK109

1. 10YR4/2 灰黄褐色 しまりや中硬、粘性弱 大塊含む
2. 10YR2/1 黒色と 6/4 にふい黄褐色の混合土 しまりや中硬、粘性有

SK101

1. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
2. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
3. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
4. 10YR2/2 黒褐色 しまり跡、粘性弱
5. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
6. 10YR3/4 暗褐色 しまり跡、粘性弱
7. 10YR2/3 黒褐色 しまり跡、粘性弱
8. 10YR3/4 暗褐色 しまり跡、粘性弱

SK102

1. 10YR3/1 黒褐色 しまり跡、粘性弱 上面に層多量

SK103

1. 10YR2/1 黒色 しまり跡、粘性弱 25Y7/6 明黄褐色砂 40%
2. 25Y6/3 にふい黄褐色 しまり跡、粘性弱 塊土内多量

SK104

1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり跡、粘性弱

SK105

1. 10YR2/1 黒色 しまりや中硬、粘性有

SK106

1. 10YR2/2 黒褐色 ~ 4/3 にふい黄褐色 しまり・粘性共に有  $\phi$  1 ~ 3mmの砂 2%

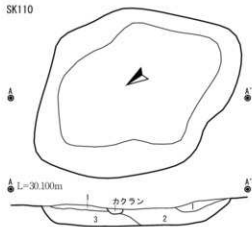
SK107

1. 10YR2/1 黒色と 4/2 灰黄褐色の混合土 しまり・粘性共に有

第 103 図 SK 97 ~ 109



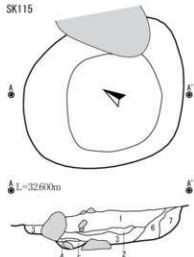
SK110



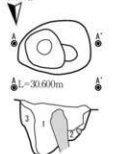
SK111



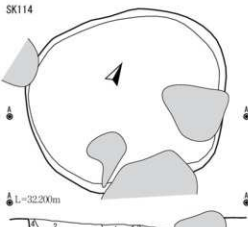
SK115



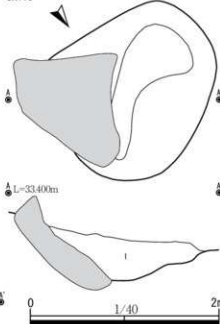
SK112



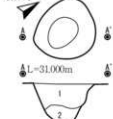
SK114



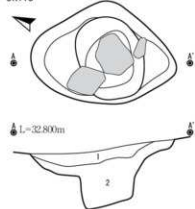
SK116



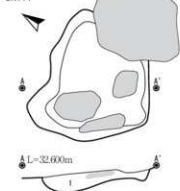
SK113



SK118



SK117



SK110

1. 10YR6/2 灰黄褐色 しまりやや疎、粘性有 ToCuブロック30%
2. 10YR5/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に  $\phi$ 1~3mmの土砂3%
3. 10YR5/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に 2層より疏和物少ない

SK111

1. 7.5YR4/4 褐色 しまり有、粘性やや弱  $\phi$ 30mmの礫・ $\phi$ 1~3mmの炭各3%
2. 2.5Y/6 褐色 しまり疎、粘性弱 現地性粘土
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 しまり有、粘性やや弱 礫多量

SK112

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性共に  $\phi$ 1~5mmの炭5%、礫25%
  2. 10YR6/6 明黄褐色 しまりやや疎、粘性有  $\phi$ 2~10mmの炭15%
- 湖山前遺土
3. 10YR3/2 黒褐色と10YR7/4 に近い黄褐色の混合土 しまり密、粘性有 礫5% 両者が球状に崩壊

SK115

1. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に  $\phi$ 2~10mmの炭15%、礫多量 遺物包含
  2. 10YR5/4 に近い黄褐色 しまり・粘性共に  $\phi$ 2~10mmの炭15%、礫含む
  3. 10YR5/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性有  $\phi$ 2~10mmの炭5%、礫含む
- 部分的に、にに近い黄褐色ブロック含む
4. 10YR7/8 黄褐色 しまりやや疎、粘性やや弱
  5. 10YR5/3 暗褐色 しまりやや疎、粘性有 黄褐色土15%
  6. 10YR6/4 に近い黄褐色 しまりやや疎、粘性有 10YR7/8黄褐色ブロック20%、 $\phi$ 1~5mmの炭3%
  7. 10YR2/6 明黄褐色 しまり・粘性共に有

SK116

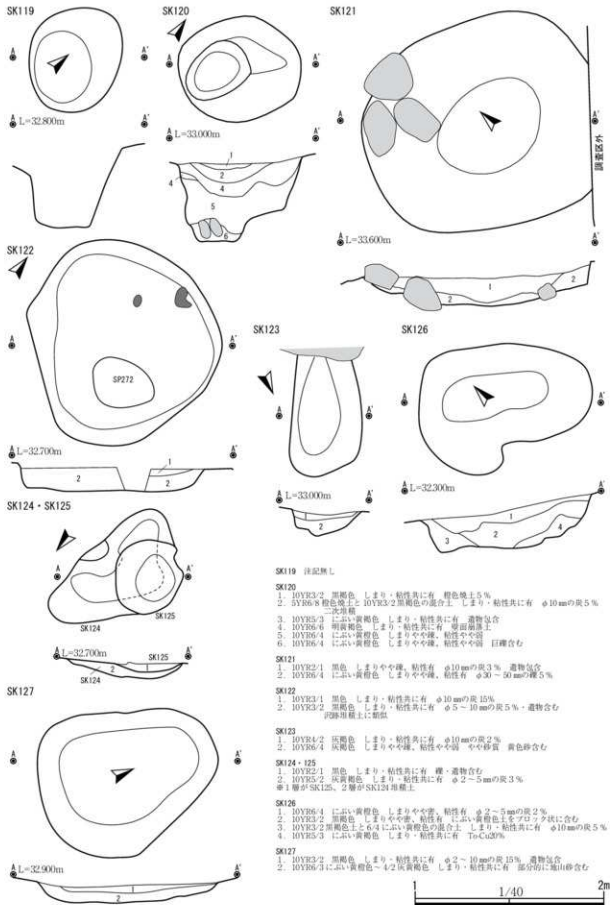
1. 10YR4/3 に近い黄褐色 しまり疎、粘性弱 角礫60%

SK117

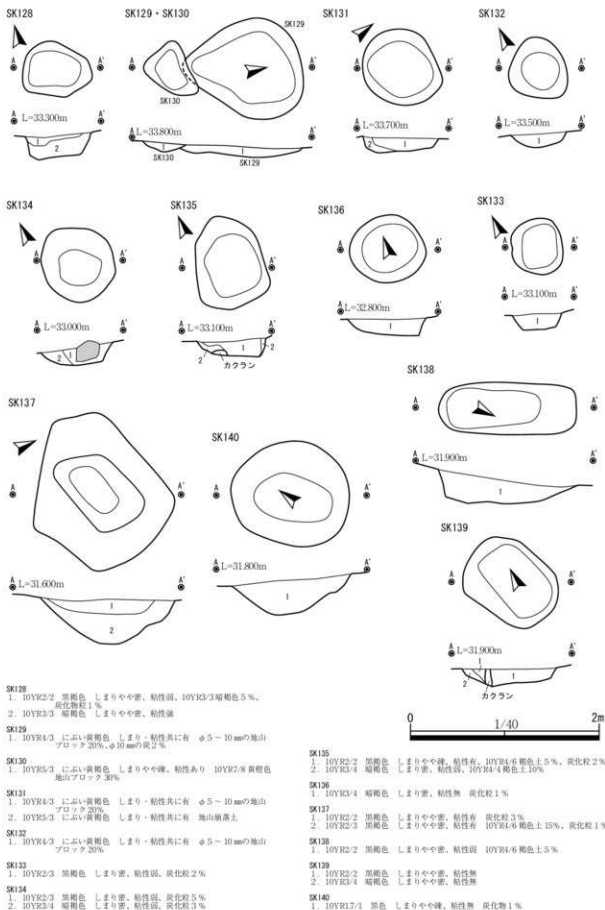
1. 10YR2/2 黒褐色~5/3 に近い黄褐色 しまり・粘性共に有

SK118

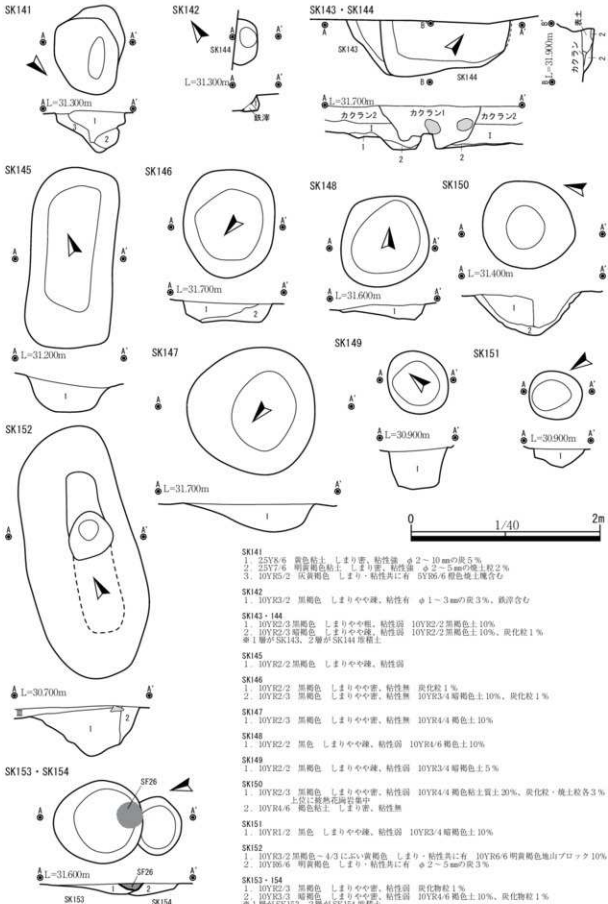
1. 10YR2/1 黒色 しまり・粘性共に  $\phi$ 150mmの礫含む 遺物包含
2. 10YR6/4 灰褐色 しまり・粘性共に 礫多量



第105図 SK119~127



第106図 SK128~140



SK141  
1. 25YR 8/6 黒色粘土・しまり密、粘性弱 φ2~10mmの炭5%  
2. 25Y7/6 明黄褐色粘土・しまり密、粘性弱 φ2~5mmの焼土粒2%  
3. 10YR5/2 灰黄褐色・しまり・粘性共に有 6YR6/6 橙色焼土塊含む

SK142  
1. 10YR3/2 黒褐色・しまりやや疎、粘性有 φ1~3mmの炭3%、鉄滓含む

SK143・144  
1. 10YR2/3 黒褐色・しまりやや粗、粘性弱 10YR2/2 黒褐色土10%  
2. 10YR2/3 黒褐色・しまりやや疎、粘性弱 10YR2/2 黒褐色土10%、炭化粒1%  
※1層がSK143、2層がSK144 瓦葺土

SK145  
1. 10YR2/2 黒褐色・しまりやや疎、粘性弱

SK146  
1. 10YR2/2 黒褐色・しまりやや密、粘性無 炭化粒1%  
2. 10YR2/3 黒褐色・しまりやや密、粘性無 10YR3/4 暗褐色土10%、炭化粒1%

SK147  
1. 10YR2/3 黒褐色・しまりやや密、粘性無 10YR4/4 褐色土10%

SK148  
1. 10YR2/2 黒色・しまりやや疎、粘性弱 10YR4/6 褐色土10%

SK149  
1. 10YR2/2 黒褐色・しまりやや疎、粘性弱 10YR3/4 暗褐色土5%

SK150  
1. 10YR2/3 黒褐色・しまりやや密、粘性弱 10YR4/4 褐色粘土質土20%、炭化粒・焼土粒各3%  
上位に焼土花崗岩碎中

2. 10YR4/6 褐色粘土・しまり密、粘性無

SK151  
1. 10YR1/2 黒色・しまりやや疎、粘性弱 10YR3/4 暗褐色土10%

SK152  
1. 10YR2/3 黒褐色・4/3に濃い黄褐色・しまり・粘性共に有 10YR6/6 明黄褐色地山ブロック10%  
2. 10YR6/6 明黄褐色・しまり・粘性共に有 φ2~5mmの炭3%

SK153・154  
1. 10YR2/3 黒褐色・しまりやや密、粘性弱 炭化物粒1%  
2. 10YR3/3 暗褐色・しまりやや密、粘性弱 10YR4/6 褐色土10%、炭化物粒1%  
※1層がSK153、2層がSK154 埋積土

第107図 SK141~154

示できなかった。その為、2層出土の鉄製紡錘車と釘?を各1点(M33・34)と砥石1点(S197)を掲載した。廃棄土坑としての性格が考えられるもので、出土遺物から平安時代に掘削・廃棄されたものと考えられる。

(村田・中島)

**SK 86** (第101図) I A 9・10 t・u グリッドに位置する。S I 24 と重複するが本遺構のほうが新しい。東西方向を長軸とする長楕円形の土坑である。上面規模は2.85 × 1.4m、深さ38cm程度である。堆積土の様相は人為堆積で、遺構近辺の地山に由来する褐色土と黒色土の混合土が堆積していた。遺構壁面及び床面には疎らに黄褐色粘土が分布していた。残存した粘土の最大厚さは3cm程度である。

(中村)

**SK 99～103** (第103図) I A 16・17 l グリッドに位置する墓坑群である。いずれも平面形は円形で、断面形は箱形または逆台形である。このうち人骨が出土したものはSK 99～101である。人骨は細片であったため、年齢や性別を判別することはできなかった。出土遺物は、SK 99から銅製の小柄1点(M35)、SK 102から鉄釘6点(M35～41)、SK99・101から寛永通宝(M61～65)が出土している。なお、小破片のため図示していないがSK 99から刀子1点、SK 102からは煙管の火皿が1点出土している。遺物と人骨の出土から近世墓と判断したものであり、遺物に寛永通宝が含まれていることから江戸時代後期(18世紀以降)のものと考えられる。

(村田)

**SK 150** (第107図) II C 19・20 n・o グリッドに位置する。極めて規格性の高い整形な半球形の掘り方内面に5～10cm程度の褐色粘土を貼る土坑である。褐色粘土の内面は少量の焼土粒と炭化粒を含む黒褐色が堆積していた。堆積土上層には花崗岩が集中していたが、これは被熱していなかった。遺構の性質・年代ともに不明である。なお、検出位置がSB 05の身舎内部に位置することから同掘立柱建物内に造られた遺構である可能性がある。

(中村)

## 7 円形周溝

### SZ 01 (第108図、写真図版118)

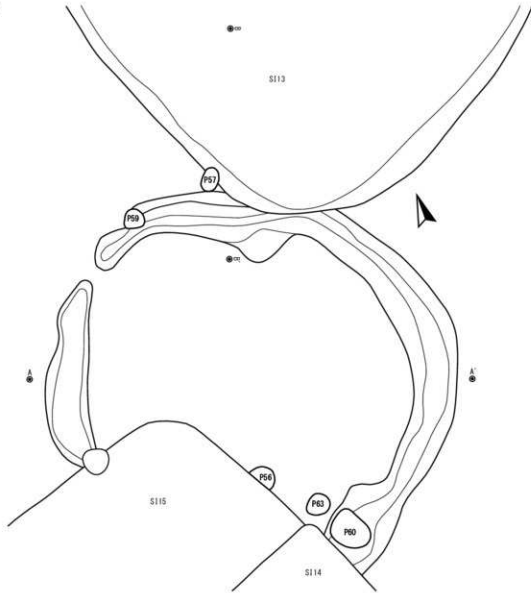
<検出状況> I A 16・17 p グリッドに位置する。基本層序V層の上面で円形に巡る黒褐色のプランとして検出した。S I 13～15、P59・60と重複関係にあり、堅穴建物はいずれも本遺構の周溝を壊していることから新しいと考えられる。柱穴はいずれも周溝底面で検出されたものであることから、本遺構より古いと考えられる。

<形状・堆積土> 北西隅の一部が切れる「C」字状の周溝を有するものと考えられるが、南側の大部分をS I 14・15に壊されているため全形は不明である。溝の内径は、東西約3.4mである。後世の削平によって西側に向かってわずかに傾斜している。溝の幅は0.3～0.55mで、溝の断面形は東側では箱形、西側では皿形で、深さは東側で0.45m、西側で0.1mである。遺存状況にもよると思われるが、東側の周溝のほうが底面も平坦に整えられる傾向がある。堆積土は黒褐色土主体で3層に細分しているが、堆積が薄いため人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

<出土遺物> 土師器が19.8g出土しているが、細片のため図示していない。

<性格と年代> 周溝の内側にマウンドを有する古墳や塚状の遺構であったと考えられるが、マウンド部分が残存していないため性格は不明である。また、平安時代の堅穴建物であるS I 13～15に壊

SZ01



▲ I = 16.600m

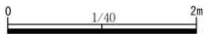


● B L = 16.500m



## SZ01 (A-A'・B-B')

1. 10YR3/2 黒褐色 しまり・粘性共に  $\phi$  1~2mmの黄色・白色砂各2%  
確含む
2. 10YR4/4 褐色 しまりやや疎、粘性有  $\phi$  2~10mmの10YR7/8黄褐色土5%  
10YR2/2~3/2 黒褐色土大ブロック30%
3. 10YR2/2~3/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性有  $\phi$  1~3mmの地山崩落土  
ブロック35%
4. 10YR3/2 黒褐色と17/1 黒色灰の混合土 しまり・粘性共に  $\phi$  2~10mm  
の25Y7/8黄色土ブロック15%
5. 10YR2/2 黒褐色と25Y7/8黄色の混合土 しまり・粘性共に 下位に $\phi$ 10mm  
以上の黄色土ブロック多く含む



第108図 SZ01

されていることからこれより古い遺構といえるが、出土遺物が乏しいため詳細な年代についても不明である。

## 8 溝

### SD 01 (第 109 図、写真図版 119)

<検出状況> I A 16・17 o グリッドに位置する。検出面は V 層で、黒褐色の溝状プランとして検出した。S I 15、S K 72 と重複関係にあり、それよりも本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> わずかに弧を描きながらほぼ南北方向に走る溝で、検出規模は、長さ 4.0 m、幅 0.2 ~ 0.6 m である。断面形は皿形で、深さは最大で 10cm である。堆積土は黒褐色土の単層である。

<出土遺物> 土師器が 69.3 g 出土しているが、細片のため図示していない。

<性格と年代> 平安時代の竪穴建物である S I 15 より新しい時期の遺構といえるが、出土遺物が乏しいため性格と年代については不明である。

### SD 02 (第 109 図、写真図版 119)

<検出状況> I A 12 r グリッドに位置する。検出面は V 層上面で、直線的に延びる溝状プランとして検出した。S I 20 と重複関係にあり、S I 20 の堆積土の一部を掘削していることから本遺構のほうが新しいと判断できる。なお、本来は S I 20 堆積土中まで延びていたものであるが、堆積土が類似していたため判断ができず、S I 20 内の範囲については記録を作成していない。

<形状・堆積土> 北東-南西方向に走る直線的な溝で、長さ 4.5 m 以上、幅 0.35 m である。断面形は箱形で、深さは 10cm である。堆積土は黒褐色土の単層で、堆積が薄いため由来については判断できなかった。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 平安時代の竪穴建物である S I 20 より新しい遺構といえるが、出土遺物が無いため性格や年代については不明である。

### SD 03 (第 109 図、写真図版 119)

<検出状況> I A 14 n グリッドに位置する。検出面は V 層上面で、暗褐色の溝状プランとして検出した。S I 16 と重複関係にあり、S I 16 の北西コーナー部付近を壊している。

<形状・堆積土> 北西-南東方向に走る短小な溝で、長さ 1.4 m、幅 0.4 m である。断面形は皿形で、深さは 5 cm 程度である。堆積土は褐色土の単層で、堆積が薄いため由来については判断できなかった。

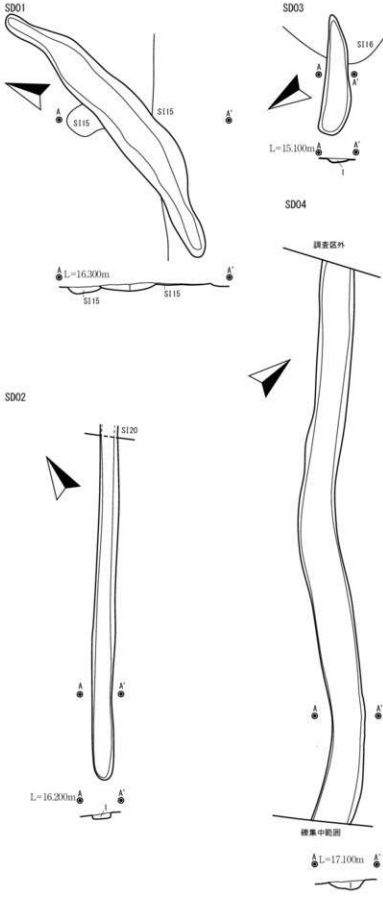
<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 平安時代の竪穴建物である S I 16 より新しい遺構といえるが、出土遺物が無いため性格や年代については不明である。

### SD 04 (第 109 図、写真図版 119)

<検出状況> I A 8 w グリッドに位置する。検出面は V 層上面で、直線的な溝状プランとして検出した。重複する遺構は無く、単独で存在する。

<形状・焼土> 北西-南東方向にほぼ直線的に走る溝で、長さ 6.9 m、幅 0.5 m 前後である。断面形は箱形または皿形で、深さは 10cm 前後である。堆積土は黒褐色土の単層で、堆積が薄いため由来



SD01  
1. 10YR2/2 黒褐色 しまり-粘性共に有  
φ 1~10mmの炭化物 15%、焼土粒 2%

SD02  
1. 10YR3/3 暗褐色 しまりやや密、粘性弱  
10YR3/4 暗褐色 土 5%

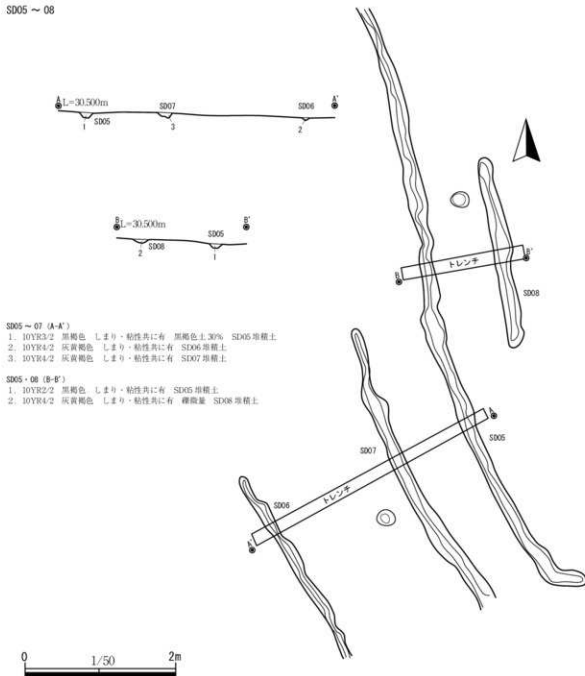
SD03  
1. 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりやや疎、粘性強

SD04  
1. 10YR3/4 暗褐色 しまりやや疎、粘性弱  
10YR3/8 黄褐色 土 30%

第 109 図 SD 01 ~ 04



SD05 ~ 08



第110図 SD 05 ~ 08

については判断できなかった

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 出土遺物が無く、重複する遺構も無いため性格や年代については不明である。

#### SD 05 (第110図、写真図版120)

<検出状況> II B 10 ~ 12 x グリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色の溝状プランとして検出した。後述するSD 06 ~ 08と併行して検出されていることから、一連の遺構(大型堅穴建物の周溝等)の可能性を考慮して精査を行った。結果として堆積土の類似性は指摘できるものの、直接的な関係を明らかにすることはできなかった。他遺構との重複関係は無い。

<形状・堆積土> わずかにS字状を描きながらほぼ南北方向に走る溝で、北端部は地形の傾斜に沿って徐々に消失する。主軸方位は、N-13°-Wである。検出規模は、長さ8.3m、幅18～30cmである。断面形は逆三角形で、深さは最大で10cmである。堆積土は黒褐色土の単層である。

<出土遺物> 土器が69.3g出土しているが、細片のため図示していない。

<性格と年代> 出土遺物が乏しく、他遺構との重複関係も無い為詳細な年代と性格については不明である。

#### SD 06 (第110図、写真図版120)

<検出状況> II B 11・12 w・x グリッドに位置する。検出面はIV層で、灰黄褐色の溝状プランとして検出した。南端部がS I 43と重複するが、本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> 北西-南東方向に走る短小な溝で、南端部はS I 43堆積土と重なり徐々に消失する。主軸方位は、N-31°-Wである。検出規模は、長さ2.8m、幅9～20cmである。断面形は逆三角形で、深さは5cm程度である。堆積土は灰黄褐色土の単層である。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 縄文時代の堅穴建物であるS I 43より新しい遺構といえるが、出土遺物が無く、詳細な年代は不明である。また、性格についても不明である。

#### SD 07 (第110図、写真図版120)

<検出状況> II B 11 w・x グリッドに位置する。検出面はIV層で、灰褐色で直線的に延びる溝状プランとして検出した。北端部がS I 41と重複しているが、本遺構のほうが新しい。

<形状・堆積土> 北西-南東方向に走る直線的な溝で、南端部は徐々に浅くなって消失する。主軸方位は、N-31°-Wである。検出規模は、長さ4.1m、幅10～25cmである。断面形は逆台形で、深さは10cmである。堆積土は灰黄褐色土の単層である。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 縄文時代の堅穴建物であるS I 43より新しい遺構といえるが、出土遺物が無く、詳細な年代は不明である。また、性格についても不明である。ただし、前述のSD 06と併行して掘削されていることから両者は同一の性格を有する可能性がある。

#### SD 08 (第110図、写真図版120)

<検出状況> II B 10・11 x グリッドに位置する。検出面はIV層で、灰黄褐色の直線的な溝状プランとして検出した。他遺構との重複遺構は無い。

<形状・焼土> 南北方向に直線的に走る溝で、端部は緩やかに立ち上がって終息する。主軸方位は、N-10°-Wである。検出規模は、長さ2.55m、幅18～27cmである。断面形は箱形または皿形で、深さは10cm前後である。堆積土は灰黄褐色土の単層である。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 出土遺物が乏しく、他遺構との重複関係も無い為詳細な年代と性格については不明である。

(村田)

## 9 掘立柱建物・櫛列・柱穴

柱穴は、掘立柱建物・櫛列を構成するものを含めて380個検出しており、形状・規模については第7表に掲載した。この中で規則的な配置を取るものを抽出し、掘立柱建物6棟と櫛列4条を認定した。ここでは掘立柱建物と櫛列についての検出状況や特徴を記載する。なお、掘立柱建物の規模については梁行・桁行とも柱穴の中心間で計測している。

## SB 01 (第112図、写真図版121)

<検出状況> I A 3・4n・oグリッドに位置する。検出面はV層で黒色土ないし黒褐色土の堆積土を持つ柱穴を確認した。調査段階で一連の柱穴群の規則的な配置を認識し、掘立柱建物跡であると想定し精査を進めた。他遺構との重複は無い。

<形状・堆積土> P 14～16・18・21・22・31で構成される。建物が調査区外に伸びる可能性が高いが全容は不明だが、N-28°-Wを棟方向とする身舎梁間一間×桁行一間以上の建物で各柱間に床東が入る。残存する身舎規模は梁間3,060mm(10.1尺)×桁行3,242mm(10.7尺)で梁間寸法は一間1,454～1,606mm(4.8～5.3尺)である。庇や下屋は無い。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 遺構の性格は不明である。遺構年代も未詳だが、床東が入る建物であることから近世以降の構築・使用が考えられる。

## SB 02 (第112図、写真図版121)

<検出状況> I A 12・13q・rグリッドに位置する。検出面はV層で黒褐色土の堆積土を持つ柱穴を確認した。調査段階で一連の柱穴群の規則的な配置を認識し、掘立柱建物跡であると想定し精査を進めた。S I 17と重複するが本遺構が新しい。

<形状・堆積土> P 71・73・74・76・77・85で構成される。斜面下方である遺構西側の柱穴が削平されている可能性が高いため、全容は不明だがN-81°-Eを棟方向とする身舎梁間一間×桁行二間以上の建物である。残存する身舎規模は梁間2,909mm(9.6尺)×桁行3,182mm(10.5尺)で梁間寸法は一間2,909mm(9.6尺)である。庇や下屋は無い。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 遺構の性格は不明である。遺構年代も未詳だが、柱穴の直径の細さと施工精度の低さから中世前期の構築・使用が考えられる。

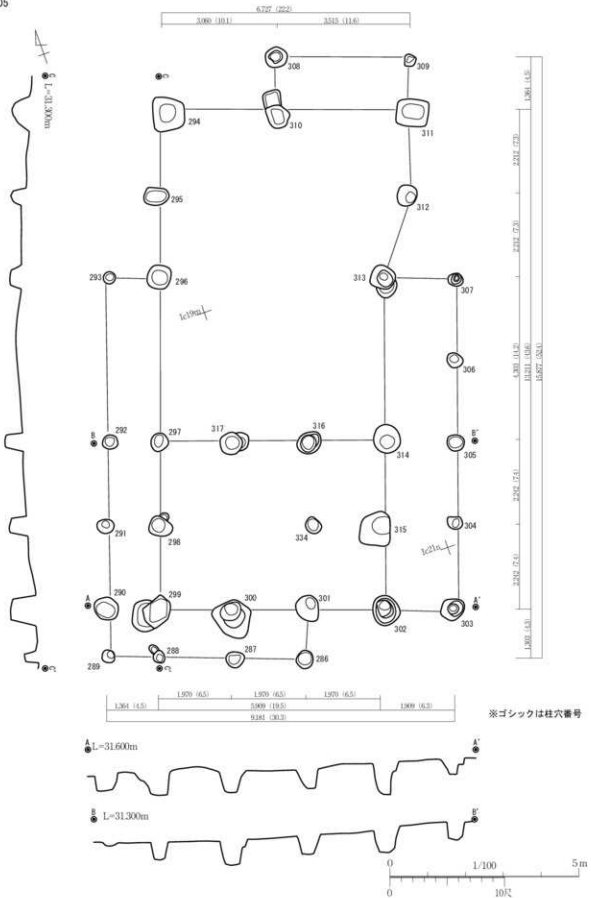
## SB 03 (第112図、写真図版121)

<検出状況> II B 1・2q・rグリッドに位置する。検出面はIII層で、黒色土ないし黒褐色土の堆積土を持つ柱穴を確認した。調査段階で一連の柱穴群の規則的な配置を認識し、掘立柱建物跡であると想定し精査を進めた。他遺構との重複は無い。

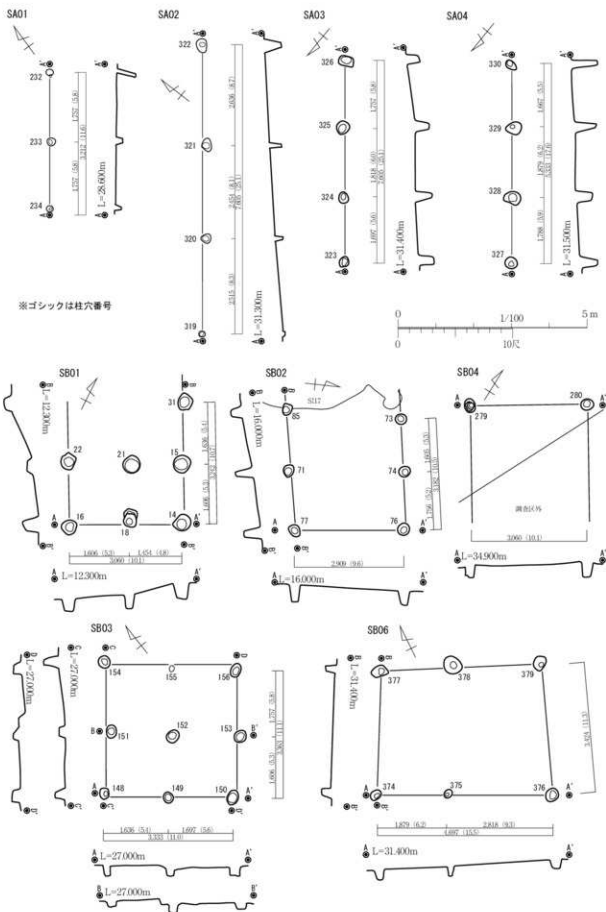
<規模・構造> P 148～156で構成される。N-38°-Eを棟方向とする身舎梁間二間×桁行二間の建物である。身舎規模は梁間3,333mm(11.0尺)×桁行3,363mm(11.1尺)で、梁間寸法は一間1,636～1,697mm(5.4～5.8尺)である。庇や下屋はない。

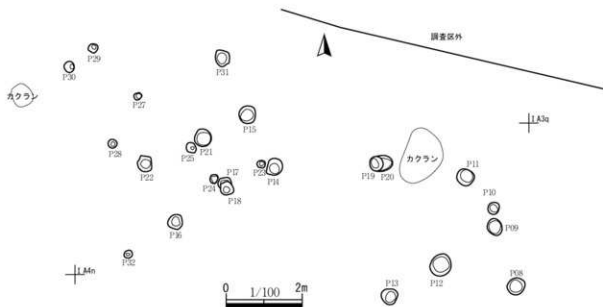
<出土遺物> 出土していない。

SB05



第111図 SB05





第113図 柱穴配置図(1)

<性格と年代> 遺構の性格は不明である。遺構年代も未詳だが、柱間寸法の狭さから近世後期以降の構築・使用が考えられる。

#### SB 04 (第112図、写真図版121)

<検出状況> IC 1・2s・tグリッドに位置する。検出面はV層上面で、黒褐色土の埋土を持つピットを2個検出した。柱穴完掘後、二個の柱穴の形状が極めて類似し、検出面及び下端高さが揃ったことから両遺構は一連の遺構であり、掘立柱建物跡ないしは柵列跡であると解釈した。

<規模・構造> P 279・280の2個のみ検出している。建物が調査区外に伸びるため全容は不明である。残存する柱穴間の柱間寸法は3,060mm(10.1尺)である。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 柱穴が2個しか検出されておらず、遺物の出土も無いため性格や年代については不明である。

#### SB 05 (第111図、写真図版121)

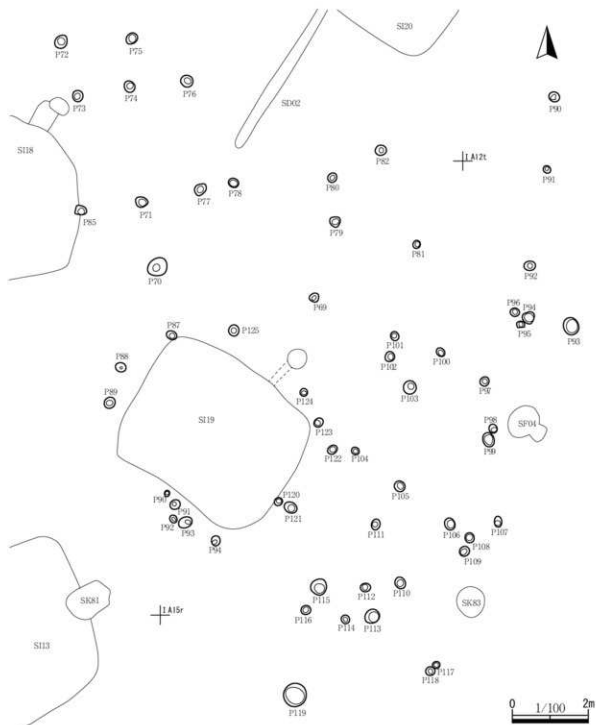
<検出状況> IC 20・21 m・nグリッドに位置する。検出面はV層上面で、黒褐色土中に褐色土塊が混入した特徴的な堆積土を持つ柱穴列を複数検出した。同様の埋土状況の遺構を抽出したところ、一連の遺構群に規則的な配置が認められたため、掘立柱建物跡であると想定し精査を進めた。SI 58、SK 152、SX 04・06と重複するがいずれも本遺構のほうが新しい。

<規模・構造> P 286～317・336・345で構成される。N-19°-Eを棟方向とする身舎梁間三間×桁行六間の建物である。身舎が矩形ではなく、北妻と南妻の寸法が異なる。南妻は5,909mm(19.5尺)を三間に等分割しており、梁間寸法は一間1,970mm(6.5尺)である。北妻は6,727mm(22.2尺)を二間に割っている。身舎桁行は総長13,211mm(43.6尺)である。身舎各所に下屋を付設させている。身舎筋の柱穴は掘り方が大きく深い。対して下屋柱は掘り方が小さく浅い傾向がみられた。柱穴堆積土は全て褐色土塊が混入した黒褐色土の単層で、柱痕やあたりは確認できなかった。P 313・315の堆積土上層には15cm程度の自然礫(川原石)が多く含まれていた。これらの礫は屋根石や縁石など、

本遺構に伴うものであった可能性が高い。

<出土遺物> 柱穴堆積土から出土している（第164・193・204図）。出土遺物はほとんどが縄文時代のものであるが、中世の遺物としてP 312の堆積土中から青磁蓮弁文碗（P1）が1点出土している。この他、P 304から出土した礫石器1点（S202）、P310から出土した縄文土器1点（509）、P 312から出土した礫石器2点（S203・204）を掲載した。

<性格と年代> 出土した青磁碗は14～15世紀に属するものであるが、基調となる梁間寸法が一間六尺五寸であり、かつ身舎筋の柱を抜く身舎梁間三間の直屋であることから、近世の遺構と考えられる。建物の間取りと規模の特徴から、住宅の主屋としての利用が考えられる。堆積土の様相から、柱



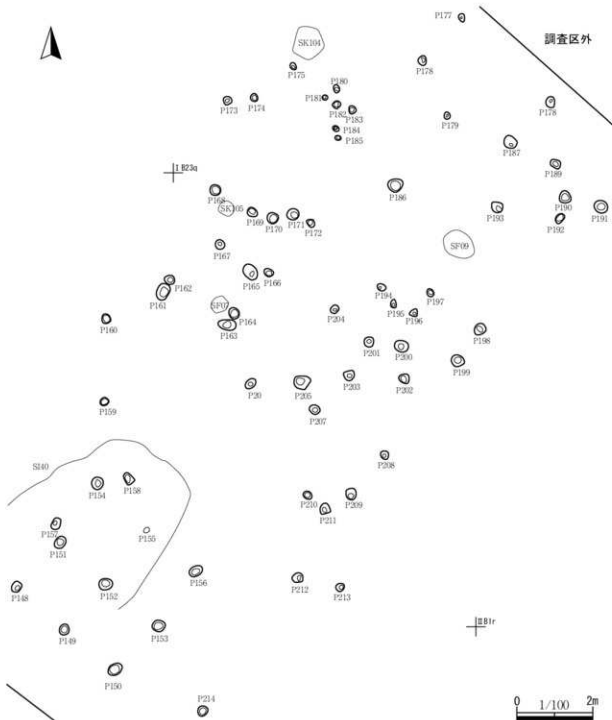
第114図 柱穴配置図（2）

抜き取り後に全柱穴を一度に埋戻し、遺構を廃絶したと様相がうかがえる。

### SB 06 (第 112 図、写真図版 121)

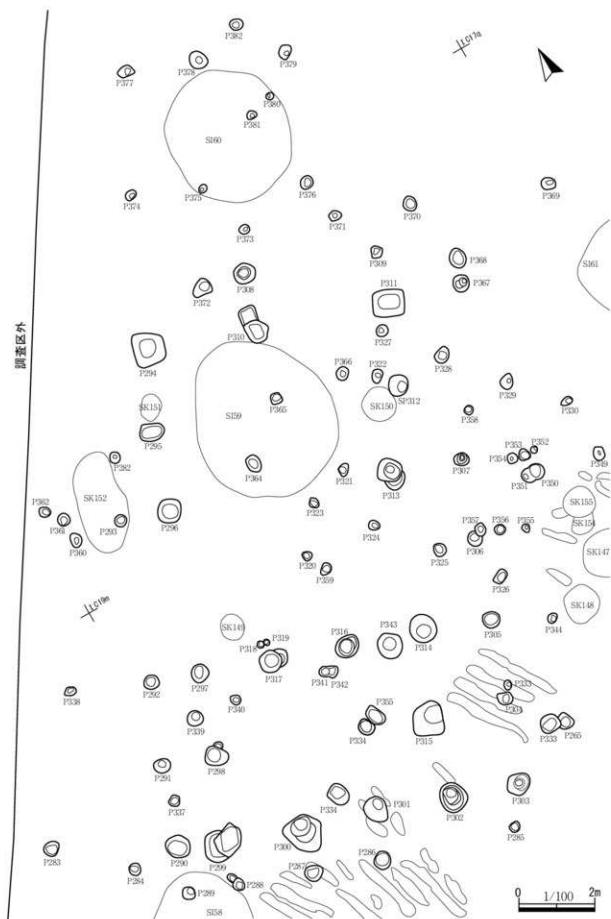
〈検出状況〉 IC 17・18n・o グリッドに位置する。現場調査時に本遺構の存在を認識することはできなかった。本遺構は整理作業中の遺構検討作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。SI 60 と重複するが本遺構のほうが新しい。

〈規模・構造〉 P 374 ~ 379 で構成される。N - 67° - W を棟方向とする身舎梁間一間 × 桁行二間の建物である。身舎規模は梁間 3,424mm (11.3 尺) × 桁行 4,697mm (15.5 尺) で、梁間寸法は一間 3,182



第 115 図 柱穴配置図 (3)





第116図 柱穴配置図(4)

第7表 柱穴計測表

遺構名	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混和物など	備考 (新旧関係、掲載遺物など)	目 No
P01	38 × 50	25	10YR5/3 灰黄褐色	疎	弱	黄色砂 10%		2 区 SP01
P02	40 × 50	16	10YR2/1 黒色	有	有	礫多量に含む		2 区 SP03
P03	35 × 50	41	10YR3/1 黒褐色	やや疎	やや弱			2 区 SP04
P04	49 × 68	85	10YR3/2 黒褐色	有	有	下部に黄褐色土		2 区 SP05
P05	74 × (44)	37	1. 10YR2/3 黒褐色 2. 10YR3/4 暗褐色	疎 疎	弱 弱	10YR5/6 黄褐色土 10%	○→SK17	2 区 SP06
P06	31 × 27	22	注記無し					5 区 SP03
P07	25 × 22	23	注記無し					5 区 SP04
P08	46 × 44	25	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%		1 区 SP01
P09	49 × 40	26	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%		1 区 SP02
P10	32 × 29	28	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%		1 区 SP03
P11	46 × 43	18	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 10%		1 区 SP04
P12	61 × 52	33	1. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%、 10YR5/6 黄褐色土 5%		1 区 SP05
			2. 10YR2/2 黒褐色	疎	弱	10YR5/6 黄褐色土 15%		
			3. 10YR3/4 暗褐色	疎	弱	10YR2/1 黒色土 15%		
P13	45 × 42	19	1. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 10%		1 区 SP06
			2. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 5%、 10YR5/6 黄褐色土 15%		
P14	47 × 41	47	1. 10YR2/1 黒色	疎	無	10YR3/4 暗褐色土 10%	SD01 全構成	1 区 SP07
			2. 10YR2/2 黒褐色	疎	無	10YR5/6 黄褐色土 10%		
			3. 10YR5/6 黄褐色	疎	無			
P15	49 × 47	30	10YR2/2 黒褐色	疎	弱	10YR5/6 黄褐色土 20%	SD01 全構成	1 区 SP08
P16	41 × 39	38	1. 10YR2/2 黒褐色	疎	弱		SD01 全構成	1 区 SP09
			2. 10YR3/4 暗褐色	疎	弱			
			3. 10YR3/4 暗褐色	疎	弱			
P17	25 × (17)	15	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%	○→P18	1 区 SP10
P18	37 × 35	44	1. 10YR2/2 黒褐色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%	SD01 全構成、P17→○	1 区 SP11
			2. 10YR2/2 黒褐色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 30%		
			3. 10YR2/2 黒褐色	疎	弱	10YR4/4 褐色土 5%		
			4. 10YR2/3 黒褐色	疎	弱			
P19	40 × 38	19	1. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR3/3 暗褐色土 15%	P20→○	1 区 SP12
			2. 10YR2/3 黒褐色	疎	弱			
P20	41 × (41)	13	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%	○→P19	1 区 SP13
P21	45 × 44	42	1. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR4/6 褐色土 5%	SD01 全構成	1 区 SP14
			2. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 3%		
			3. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR2/3 黒褐色土 15%、 10YR4/6 褐色土 5%		
P22	43 × 43	43	10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR4/6 褐色土 10%	SD01 全構成	1 区 SP15
P23	21 × 21	76	注記無し					1 区 SP17
P24	26 × 22	17	注記無し					1 区 SP18
P25	29 × 27	55	注記無し					1 区 SP19
P26	×	×	×	×	×	×	注記	1 区 SP20
P27	22 × 19	26	注記無し					1 区 SP21
P28	23 × 23	33	注記無し					1 区 SP22
P29	25 × 22	20	注記無し					1 区 SP23
P30	29 × 26	23	注記無し					1 区 SP24
P31	43 × 40	26	1. 10YR2/1 黒色	疎	弱	10YR4/6 褐色土 15%	SD01 全構成	1 区 SP25
			2. 10YR4/6 褐色	疎	弱			
P32	23 × 22	48	注記無し					1 区 SP26
P33	27 × 24	28	注記無し					1 区 SP27
P34	24 × 21	20	注記無し					1 区 SP28
P35	31 × 30	29	注記無し					1 区 SP29
P36	27 × 25	44	注記無し					1 区 SP30
P37	29 × 26	28	注記無し					1 区 SP31
P38	34 × 33	42	10YR2/3 黒褐色	疎	弱	10YR5/6 黄褐色土 15%		1 区 SP32
P39	58 × 55	49	10YR2/3 黒褐色	疎	弱	10YR5/6 黄褐色土 10%、 10YR4/6 褐色土 5%		1 区 SP33
P40	58 × 57	39	10YR2/2 黒褐色	疎	弱	10YR5/6 黄褐色土 15%		1 区 SP34
P41	50 × 44	33	10YR2/3 黒褐色	疎	弱	10YR5/6 黄褐色土 15%		1 区 SP35
P42	74 × 65	28	10YR2/3 黒褐色	疎	弱	10YR4/6 褐色土		1 区 SP36
P43	49 × 66	39	10YR2/3 黒褐色	疎	弱	10YR4/6 褐色土 5%	土器 28197 g (S07)	1 区 SP37
P44	25 × 220	14	注記無し					3 区 SP01

遺構名	上面幅横 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混雑物など	備考 (新旧関係、掘削遺物など)	目 No.
F45	22 × 19	37	洋記無し					3 区 SP02
F46	24 × 22	30	洋記無し					3 区 SP03
F47	23 × 22	27	洋記無し				SK07 →○	3 区 SP04
F48	22 × 22	23	洋記無し					3 区 SP05
F49	23 × 20	34	洋記無し				SK09 →○	3 区 SP06
F50	33 × 27	24	30YR3-2 黒褐色	有	有	礫含む		3 区 SP07
F51	40 × 39	34	30YR3-1 黒褐色	有	有		SI11 →○	3 区 SP08
F52	-	-	洋記無し				土層作成崩れ	3 区 SP09
F53	23 × 23	24	洋記無し					3 区 SP10
F54	35 × 22	35	洋記無し				石器 (S20), SK63 →○	3 区 SP11
F55	53 × 49	58	洋記無し					3 区 SP12
F56	28 × (17)	7	30YR2-2 黒褐色	有	有	2.5V7/8 黄色粘土 15%	SI15 →○	3 区 SP13
F57	24 × 17	16	30YR2-1 黒色	有	有	2.5V7/8 黄色 ブロック 20%、礫含む	SI13 →○	3 区 SP15
F58	34 × 28	35	30YR2-2 黒褐色	有	有	2.5V7/8 黄色粘土 15%		3 区 SP16
F59	22 × 22	25	30YR3-2 黒褐色	有	有	φ1~5mmの粒土 30%	○→S201	3 区 SP17
F60	47 × 33	26	30YR4-3 にぶい黄褐色	有	有	2.5V7/8 黄色ブロック 25%	○→S201	3 区 SP18
F61	34 × 26	24	洋記無し				SK05 →○	3 区 SP19
F62	×	×	×	×	×	×	採掘	3 区 SP20
F63	26 × 23	9	洋記無し					3 区 SP21
F64	27 × 24	23	洋記無し					3 区 SP23
F65	68 × 65	53	30YR5-3 にぶい黄褐色	有	有	大型の礫多く含む	SK37 →○	3 区 SP24
F66	30 × 28	16	30YR3-2 黒褐色	有	有			3 区 SP25
F67	39 × 28	36	30YR2-1 黒色	やや疎	有	10YR7/8 黄褐色ブロック 3%		3 区 SP26
F68	27 × 29	35	30YR3-2 黒褐色	有	有	下部に 2.5V7/8 黄色		3 区 SP27
F69	27 × 25	23	洋記無し					3 区 SP30
F70	56 × 46	38	洋記無し					3 区 SP31
F71	31 × 28	50	洋記無し				SK02 を構成	3 区 SP32
F72	38 × 31	22	洋記無し					3 区 SP33
F73	28 × 26	16	洋記無し				SK02 を構成	3 区 SP34
F74	31 × 28	45	洋記無し				SK02 を構成	3 区 SP35
F75	32 × 28	23	洋記無し					3 区 SP36
F76	35 × 31	40	洋記無し				SK02 を構成	3 区 SP37
F77	34 × 27	47	洋記無し				SK02 を構成	3 区 SP38
F78	28 × 25	33	洋記無し					3 区 SP39
F79	30 × 29	30	洋記無し					3 区 SP40
F80	28 × 23	29	洋記無し					3 区 SP41
F81	22 × 20	13	洋記無し					3 区 SP42
F82	29 × 27	12	洋記無し					3 区 SP43
F83	28 × 26	27	洋記無し					3 区 SP44
F84	34 × 30	41	洋記無し					3 区 SP45
F85	31 × 24	32	洋記無し				SK02 を構成、SI17 →○	3 区 SP46
F86	28 × 25	29	洋記無し					3 区 SP47
F87	22 × 20	19	洋記無し					3 区 SP48
F88	62 × 40	38	洋記無し					3 区 SP49
F89	28 × 28	13	洋記無し					3 区 SP50
F90	28 × 25	31	洋記無し					3 区 SP51
F91	21 × 18	22	洋記無し					3 区 SP52
F92	31 × 25	25	洋記無し					3 区 SP53
F93	45 × 40	17	洋記無し					3 区 SP54
F94	33 × 29	16	洋記無し					3 区 SP55
F95	21 × 19	23	洋記無し					3 区 SP56
F96	24 × 24	25	洋記無し					3 区 SP57
F97	26 × 24	21	洋記無し					3 区 SP58
F98	25 × 21	25	洋記無し					3 区 SP59
F99	38 × 29	13	洋記無し					3 区 SP60
F100	26 × 21	23	洋記無し					3 区 SP61
F101	26 × 21	29	洋記無し					3 区 SP62
F102	28 × 25	25	洋記無し					3 区 SP63
F103	36 × 34	32	洋記無し					3 区 SP64

遺構名	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混雑物など	備考 (新旧関係、埋蔵遺物など)	目 No.
P104	22 × 19	13	浮記無し					3 区 SP85
P105	29 × 29	35	浮記無し					3 区 SP86
P106	33 × 24	30	浮記無し					3 区 SP87
P107	28 × 20	35	浮記無し					3 区 SP88
P108	28 × 24	18	浮記無し					3 区 SP89
P109	36 × 26	27	浮記無し					3 区 SP70
P110	33 × 26	42	浮記無し					3 区 SP71
P111	28 × 21	29	浮記無し					3 区 SP72
P112	27 × 22	21	浮記無し					3 区 SP73
P113	39 × 35	30	浮記無し					3 区 SP74
P114	23 × 20	22	浮記無し					3 区 SP75
P115	43 × 42	25	浮記無し					3 区 SP76
P116	35 × 24	39	浮記無し					3 区 SP77
P117	21 × 30	23	浮記無し					3 区 SP78
P118	24 × 24	22	浮記無し					3 区 SP79
P119	43 × 59	24	浮記無し					3 区 SP80
P120	25 × 20	35	浮記無し					3 区 SP81
P121	35 × 28	11	浮記無し					3 区 SP82
P122	27 × 22	17	浮記無し					3 区 SP83
P123	28 × 22	64	浮記無し					3 区 SP84
P124	22 × 30	17	浮記無し					3 区 SP85
P125	31 × 28	35	浮記無し					3 区 SP86
P126	28 × 23	11	浮記無し					3 区 SP87
P127	28 × 25	32	浮記無し					3 区 SP88
P128	34 × 28	41	浮記無し					3 区 SP89
P129	16 × 15	11	浮記無し					3 区 SP90
P130	29 × 24	31	浮記無し					3 区 SP91
P131	20 × 18	17	浮記無し					3 区 SP92
P132	36 × 39	41	浮記無し					3 区 SP93
P133	28 × 24	43	浮記無し					3 区 SP94
P134	32 × 32	15	浮記無し					3 区 SP96
P135	○39 × ○39	15	浮記無し					3 区 SP97
P136	×	×	×	×	×	×	床洞	3 区 SP101
P137	20 × 52	32	浮記無し					3 区 SP103
P138	28 × 113	21	浮記無し					3 区 SP113
P139	55 × 45	22	浮記無し			P142 →○		3 区 SP115
P140	29 × 27	32	浮記無し					3 区 SP116
P141	24 × 23	17	浮記無し					3 区 SP117
P142	32 × ○34	17	浮記無し			○→ P139、馬骨出土		3 区 SP118
P143	45 × 44	19	浮記無し					3 区 SP119
P144	43 × 28	19	30YR2/1 黒色	やや疎	やや固	2.5V7/6 黄色ブロック15%		3 区 SP120
P145	40 × 29	28	30YR1.7/1 黒色	やや疎	やや固		SZ29 →○	3 区 SP121
P146	30 × 24	13	30YR1.7/1 黒色	やや疎	やや固		○→ SZ29	3 区 SP122
P147	43 × 32	36	30YR3/3 暗褐色	やや疎	有	炭化物 1%、にぶい橙色土15%	○→ SZ02	3 区 SP123
P148	30 × 25	29	30YR2/2 黒褐色	やや密	強		SD03 を構成	SP901
P149	31 × 26	30	30YR2/2 黒褐色	やや密	強		SD03 を構成	SP902
P150	41 × 32	24	30YR2/2 黒褐色	やや密	強		SD03 を構成	SP903
P151	36 × 28	16	30YR2/2 黒褐色	やや密	強		SD03 を構成	SP904
P152	36 × 34	24	30YR1.7/1 黒色	やや疎	強		SD03 を構成	SP905
P153	32 × 32	16	30YR1.7/1 黒色	やや疎	強		SD03 を構成	SP906
P154	33 × 32	40	30YR2/2 黒褐色	やや疎	強	上部に 30YR4/6 褐色粘土を混入: 20%	SD03 を構成	SP907
P155	-	-	30YR2/2 黒褐色	やや疎	強		SD03 を構成	SP908
P156	37 × 28	24	浮記無し				SD03 を構成	SP909
P157	34 × 21	43	30YR2/2 黒褐色	密	強			SP938
P158	32 × 21	15	30YR1.7/1 黒色	やや疎	やや固			SP968
P159	23 × 22	9	30YR2/2 黒褐色	やや密	強			SP910
P160	35 × 24	7	30YR2/2 黒褐色	やや密	強			SP912
P161	44 × 32	28	30YR1.7/1 黒色	やや密	強			SP914
P162	24 × 24	38	30YR2/2 黒褐色	疎	やや固			SP915

## 9 掘立柱建物・横列・柱穴

遺構名	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混和物など	備考 (断面関係・掘削遺物など)	目 No.
F163	48 × 27	45	30YR2-2 黒褐色	やや密	強	φ 2mmの機土粒 5%		SP545
F164	31 × 27	19	浮記無し					SP544
F165	46 × 31	37	30YR2-2 黒褐色	やや密	強	下にφ 20mmの 10YR2-3 黒褐色ブロック 10%		SP521
F166	26 × 20	14	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP520
F167	28 × 26	11	30YR2-1 黒色	有	有	火山灰ブロック 30%		SP575
F168	31 × 29	28	1. 10YR2-2 黒褐色 2. 10YR2-3 黒褐色	疎	強			SP525
F169	30 × 24	32	30YR2-1 黒色	やや疎	強			SP526
F170	31 × 29	21	30YR2-2 黒褐色	疎	強	φ 10mmの 10YR6-8 明黄褐色 ブロック 10%		SP537-1
F171	32 × 32	32	浮記無し				石器 (S175)	SP543
F172	25 × 17	10	浮記無し					SP542
F173	25 × 24	10	30YR17-1 黒色	有	有			SP573
F174	22 × 20	21	30YR2-2 黒褐色	疎	密			SP530
F175	20 × 16	24	30YR2-2 黒褐色	密	強			SP560
F176	24 × 19	24	浮記無し					SP537-2
F177	-	30	30YR2-2 黒褐色	やや疎	強			SP536
F178	26 × 23	31	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP533
F179	20 × 17	20	浮記無し					SP552
F180	21 × 17	16	浮記無し					SP561
F181	15 × 15	19	浮記無し					SP549
F182	22 × 20	21	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP531
F183	20 × 19	26	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP532
F184	18 × 15	12	浮記無し					SP562
F185	16 × 15	11	浮記無し					SP563
F186	20 × 26	21	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP529
F187	27 × 30	33	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP534
F188	29 × 24	25	30YR2-1 黒色	疎	強			SP535
F189	27 × 19	10	30YR3-2 黒褐色	有	有	褐色土 10%		SP564
F190	33 × 32	15	30YR3-2 黒褐色と 2/2 黒色の混合	有	有			SP558
F191	28 × 33	20	30YR2-1 黒色	有	有	10YR4-4 暗褐色土 20%		SP533
F192	26 × 20	20	30YR3-2 黒褐色	有	有			SP557
F193	24 × 20	21	30YR17-1 黒色	疎	弱	上面に礫含む		SP551
F194	26 × 17	17	30YR2-1 黒色	有	有			SP556
F195	22 × 16	20	30YR2-1 黒色	有	有			SP555
F196	21 × 20	13	30YR2-1 黒色	有	有			SP554
F197	23 × 16	14	30YR2-1 黒色	有	有			SP572
F198	24 × 21	42	30YR2-1 黒色	有	有	褐色土 20%		SP559
F199	27 × 32	23	30YR2-1 黒色	やや疎	有	褐色土 20%		SP560
F200	26 × 20	19	30YR2-1 黒色	有	有			SP571
F201	28 × 15	32	30YR2-2 黒褐色	密	強			SP558
F202	28 × 27	23	30YR2-1 黒色	有	有			SP570
F203	32 × 28	29	浮記無し					SP577
F204	24 × 20	17	30YR2-2 黒褐色	密	強			SP519
F205	40 × 28	47	30YR2-2 黒褐色	疎	弱			SP541
F206	32 × (16)	44	浮記無し				金属 (M43)	SP574
F207	26 × 24	22	30YR17-1 黒色	密	強			SP529
F208	23 × 23	28	浮記無し					SP516
F209	33 × 28	28	30YR2-2 黒褐色	疎	強			SP513
F210	26 × 20	9	30YR2-1 黒色	やや疎	有			SP569
F211	32 × 27	18	30YR2-3 黒褐色	疎	強			SP511
F212	29 × 28	28	30YR3-2 黒褐色	やや疎	有	褐色土 20%		SP567
F213	24 × 17	21	30YR3-2 黒褐色	やや疎	有			SP566
F214	26 × 25	11	30YR3-2 黒褐色	やや疎	有			SP565
F215	15 × 14	26	30YR2-1 黒色					SP616
F216	16 × 15	29	30YR2-1 黒色					SP617
F217	27 × 24	22	30YR2-2 黒色					SP618
F218	27 × 20	23	30YR2-2 黒褐色	やや疎				SP619
F219	28 × 25	25	浮記無し					SP622
F220	18 × 14	18	浮記無し					SP621

遺構名	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混杂物など	備考 (新旧関係、埋蔵遺物など)	目 No.
F221	28 × 24	24	30YR2-1 黒色	有	有			SP820
F222	27 × 25	26	30YR3-2 黒褐色			にぶい黄褐色土		SP823
F223	25 × 24	12	30YR4/3 にぶい黄褐色	有	有			SP564
F224	29 × 20	19	30YR3-2 黒褐色	やや疎	有	φ2～5mmの黄色土3%		SP565
F225	18 × 12	24	注記無し					SP566
F226	16 × 15	56	30YR2-1 黒色	有	有			SP565
F227	21 × 14	12	30YR3-2 黒褐色			にぶい黄褐色土		SP824
F228	20 × 19	34	30YR2-1 黒色	有	有			SP566
F229	20 × 19	31	30YR2-1 黒色	有	有			SP567
F230	41 × 21	30	30YR3-2 黒褐色	有	有	φ1～3mmの砂3%	粒子やや粗い	SP560
F231	19 × 13	43	30YR2-1 黒色	有	有	中～下位に灰褐色の砂	土器(308)	SP576
F232	20 × 18	55	30YR2-1 黒色	有	有	中～下位に灰褐色の砂	SA01を構成	SP577
F233	24 × 20	19	30YR2-1 黒色	有	有	中～下位に灰褐色の砂	SA01を構成	SP578
F234	18 × 16	20	30YR2-1 黒色	有	有	中～下位に灰褐色の砂	SA01を構成	SP579
F235	24 × 17	12	30YR2-1 黒色	有	有	中～下位に灰褐色の砂		SP580
F236	22 × 19	13	30YR2-1 黒色	有	有	中～下位に灰褐色の砂		SP581
F237	21 × 12	20	30YR2-1 黒色	有	有			SP589
F238	23 × 22	13	30YR2-1 黒色	有	有			SP588
F239	34 × 23	19	30YR2-2 黒褐色	有	有			SP591
F240	33 × 24	20	30YR3-2 黒褐色	有	有			SP592
F241	15 × 10	17	注記無し					SP593
F242	23 × 17	20	注記無し					SP594
F243	22 × 22	18	30YR3-2 黒褐色	有	有	黄褐色ブロック5%		SP604
F244	25 × 21	12	注記無し					SP608
F245	27 × 26	24	30YR2-1 黒色	やや疎	有	埋藏量		SP605
F246	23 × 19	37	注記無し					SP607
F247	20 × 19	27	注記無し					SP606
F248	27 × 20	22	30YR2-1 黒色	有	有			SP597
F249	18 × 15	15	30YR2-1～3-1 黒色	有	有			SP598
F250	15 × 14	17	注記無し					SP602
F251	18 × 16	15	注記無し					SP601
F252	19 × 15	37	注記無し					SP600
F253	23 × 18	16	30YR2-1 黒色	有	有			SP599
F254	25 × 21	15	注記無し					SP676
F255	19 × 15	21	暗褐色					SP609
F256	25 × 20	26	30YR2-2 黒褐色	有	有	10YR7/8 黄褐色ブロック 20%		SP611
F257	25 × 23	26	30YR2-2 黒褐色	有	有			SP610
F258	21 × 20	29	1. 10YR2-1 黒色 2. 10YR5/4 にぶい黄 褐色	やや疎 有	有 有	φ1～3mmの黄色粒5%		SP614
F259	26 × 28	56	注記無し					SP733
F260	24 × 17	11	注記無し					SP732
F261	16 × 17	56	注記無し					SP731
F262	69 × 50	27	30YR2-1 黒色	やや疎	やや固	10YR7/8 黄褐色砂5%		SP730
F263	28 × 28	21	30YR3-2 黒褐色	有	有	10YR7/6 明黄褐色土15%		SP612
F264	52 × 45	31	30YR2-1 黒色	やや疎	やや固	10YR7/8 黄褐色砂5%		SP729
F265	15 × 15	14	注記無し					SP613
F266	16 × 14	12	30YR2-1 黒色					SP625
F267	21 × 20	15	30YR2-2 黒褐色	有	有	にぶい黄橙～黄褐色地山 ブロック30%		SP626
F268	25 × 17	12	30YR2-2 黒褐色	有	有			SP627
F269	26 × 22	17	30YR2-2 黒褐色	有	有	10YR7/8 黄 褐色 地 山 ブロック10%		SP628
F270	26 × 25	40	30YR2-1 黒色	有	有	φ10mm前後の黄褐色地山 ブロック30%		SP629
F271	49 × 44	18	1. 10YR3/2 黒褐色 2. 10YR6/3 にぶい黄 褐色～4/2 灰黄褐色	有 有	有 有	φ2～5mmの灰15%、遺 物集中 部分的に地山砂		SP726
F272	66 × 53	25	注記無し					SP727
F273	26 × 27	20	注記無し					SP728
F274	27 × 26	24	30YR2-1 黒色	有	有	火山灰ブロック		SP734
F275	24 × 20	16	30YR2-1 黒色	有	有	火山灰ブロック		SP735

## 9 掘立柱建物・横列・柱穴

遺構名	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混雑物など	備考 (断面図係、掲載遺物など)	目 No.
F276	31 × 27	53	30YR2/2 黒褐色	有	有	火山灰ブロック		SP729
F277	42 × 22	24	浮き無し					SP678
F278	24 × 25	31	浮き無し					SP677
F279	38 × 29	37	30YR2/2 黒褐色	やや疎	弱		SD04 全構成、土器 (639)	SP582
F280	-	-	30YR2/2 黒褐色	やや疎	弱			SP583
F281	28 × 25	23	30YR2/2 黒褐色	やや疎	弱			SP655
F282	30 × 29	40	浮き無し					SP744
F283	45 × 38	19	浮き無し					SP743
F284	33 × 31	18	浮き無し					SP753
F285	29 × 27	19	浮き無し					SP700
F286	49 × 47	30	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP716
F287	47 × 46	46	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP705
F288	31 × 30	39	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP682
F289	36 × 33	47	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP683
F290	65 × 59	50	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 15%	SD05 全構成	SP664
F291	46 × 37	43	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP660
F292	41 × 38	15	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP672
F293	32 × 30	18	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP688
F294	85 × 84	57	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SK330
F295	65 × 47	40	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SK311
F296	43 × 63	41	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SK312
F297	46 × 44	56	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP659
F298	63 × 52	55	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP665
F299	84 × 66	44	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP679
F300	104 × 85	77	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SK314
F301	73 × 62	60	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP674
F302	80 × 71	87	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP708
F303	60 × 57	45	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 20%	SD05 全構成	SP715
F304	43 × 33	58	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成、石器 (S282)	SP633
F305	45 × 43	55	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 15%	SD05 全構成	SP649
F306	44 × 39	61	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP710
F307	42 × 34	39	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP707
F308	58 × 54	43	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP725
F309	35 × 34	36	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP724
F310	63 × 59	55	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR3/4 暗褐色土 5%	SD05 全構成、土器 (509)	SP640
F311	86 × 72	55	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP675
F312	59 × 54	84	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%、 灰化物粒 1%	SD05 全構成、石器 (S283- 284)、陶磁器 (P1)	SP657
F313	70 × 66	77	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%、 土層花崗岩集中	SD05 全構成	SP655
F314	76 × 71	79	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP650
F315	93 × 78	65	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%、 土層花崗岩集中	SD05 全構成	SP651
F316	67 × 57	57	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP604
F317	61 × 58	79	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SD05 全構成	SP667
F318	22 × 21	13	浮き無し					SP685
F319	30 × 15	7	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA02 全構成	SP606
F320	28 × 26	36	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA02 全構成	SP642
F321	37 × 27	34	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA02 全構成	SP639
F322	27 × 29	47	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA02 全構成	SP669
F323	29 × 24	45	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA03 全構成	SP641
F324	31 × 23	46	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA03 全構成	SP638
F325	37 × 34	41	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA03 全構成	SP706
F326	40 × 27	42	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SA03 全構成	SP648
F327	34 × 31	50	30YR4/4 褐色	やや密	弱		SA03 全構成	SP600
F328	44 × 34	48	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱		SA04 全構成	SP636
F329	43 × 34	66	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱	10YR3/4 暗褐色土 10%	SA04 全構成	SP637
F330	48 × 33	15	30YR4/4 黄褐色	やや密	弱			SP632
F331	34 × 22	74	30YR2/1 黒色	やや密	弱		SA04 全構成	SP709
F332	44 × (35)	19	30YR2/2 黒褐色	やや疎	弱			SP633
F333	25 × 30	17	浮き無し					SP652
F334	60 × 49	45	30YR2/2 黒褐色	やや密	弱		金属 (M44)	SP635

遺構名	上面規模 (cm)	深さ (cm)	色調・土質	しまり	粘性	混和物など	備考 (断面図様、掲載遺物など)	目 No.
F335	43 × 39	32	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB05 全構成	SP704
F336	57 × 37	29	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱			SP703
F337	31 × 29	15	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	炭化物粒 1%		SP662
F338	30 × 22	13	注記無し					SP752
F339	42 × 41	63	注記無し					SP673
F340	28 × 27	19	注記無し					SP697
F341	34 × 16	26	注記無し					SP712
F342	31 × (25)	25	注記無し					SP713
F343	72 × 36	45	30YR2-1 黒色	やや疎	弱			SP693
F344	30 × 23	25	注記無し					SP699
F345	31 × 25	24	注記無し					SP685
F346	23 × 19	26	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB05 全構成	SP686
F347	27 × 34	57	30YR2-2 黒褐色	有	有	10YR6/4 にぶい黄褐色ブ ロック 30%		SP630
F348	36 × 23	19	注記無し					SP684
F349	37 × 28	69	注記無し				石器 (SB26)	SP714
F350	43 × 33	21	30YR2-1 黒色	やや密	弱			SP701
F351	29 × 30	56	注記無し					SP698
F352	19 × 18	46	30YR3-1 黒褐色	やや密	弱			SP702
F353	31 × 29	32	30YR3-1 黒褐色	やや疎	弱			SP692
F354	28 × 27	49	注記無し					SP691
F355	23 × 20	47	注記無し					SP634
F356	28 × 27	26	30YR3-1 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%		SP693
F357	30 × 28	33	30YR2-1 黒色	やや疎	弱			SP647
F358	25 × 23	26	注記無し					SP654
F359	35 × 25	13	注記無し					SP643
F360	34 × 30	24	30YR3-1 黒褐色	やや疎	弱			SP742
F361	33 × 31	15	30YR3-1 黒褐色	やや疎	弱			SP741
F362	32 × 30	40	30YR3-1 黒褐色	やや疎	弱	10YR4/6 褐色土 15%		SP740
F363	29 × 25	55	注記無し					SP7442
F364	48 × 39	16	30YR3-3 暗褐色	やや疎	弱			SP645
F365	31 × 28	14	30YR2-2 黒褐色	やや疎	弱			SP646
F366	37 × 32	18	30YR4/4 褐色	やや疎	弱			SP670
F367	46 × 44	41	注記無し					SP721
F368	54 × 43	23	注記無し					SP720
F369	39 × 30	19	注記無し					SP723
F370	40 × 47	39	注記無し					SP722
F371	27 × 23	23	注記無し					SP718
F372	52 × 40	42	注記無し					SP726
F373	23 × 22	25	注記無し					SP717
F374	32 × 24	32	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB06 全構成	SP748
F375	24 × 21	27	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB06 全構成	SP750
F376	36 × 35	29	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%、 上層花崗岩集中	SB06 全構成	SP631
F377	47 × 29	29	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB06 全構成	SP745
F378	49 × 45	31	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB06 全構成	SP728
F379	40 × 32	28	30YR2-2 黒褐色	やや密	弱	10YR4/4 暗褐色土 10%	SB06 全構成	SP737
F380	22 × 20	12	注記無し					SP751
F381	25 × 22	35	注記無し					SP749
F382	37 × 30	19	注記無し					SP746
F383	25 × 23	31	注記無し					SP747



～3242mm (105～107尺)である。庇や下屋は無い。柱穴堆積土の傾向は、全てSB 05と同様のものだった。柱穴堆積土は褐色土塊が混入した黒褐色土の単層であり、柱痕やあたりは確認できなかった。P 376の堆積土上層には15cm程度の自然礫(川原石)が多く含まれていた。本遺構とSB 05の廃絶は同時だったと考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 遺構の性格は未詳だが、検出位置と堆積土の様相から考えるとSB 05の付属屋であった可能性が高い。遺構年代も未詳だが、SB 05と同時代の遺構と考えるならば、近世の遺構と考えることができる。

#### SA 01～04 (第112図)

<検出状況> SA 01はII B 5・6 t・u、SA 02はII C 19・20 n・o、SA 03はII C 20・21 n・o、SA 04はII C 19・20 o・p グリッドに位置する。

<規模・構造> SA 01はP 232～234、SA 02はP 319～322、SA 03はP 323～326、SA 04はP 327～329・331で構成される。

<性格と年代> いずれも未詳である。ただし、検出状況から考えるとSA 02～04はSX 04～06に関わる遺構の可能性はある。

(中村)

#### 柱 穴 (第113～116図、写真図版122)

先述の通り、柱穴は2ヶ年の調査で380個検出した。掘立柱建物や横列が検出された周辺を中心に6箇所程度のまとまりがあり、そのうちの4箇所について拡大図を提示した。今回は明確にすることができなかったが、SI 19の周辺など古代の堅穴建物の外周で検出されているものもあり、中央に位置する堅穴建物の外柱穴になる可能性があるものもある(P 87～94・102～125等)。

## 10 性格不明遺構

炭窯や竈間状遺構、特殊な堆積をする土坑等を一括した。いずれも近世～現代に属するものと考えられる。

#### SX 01・02 (第117図、写真図版122・123)

<検出状況> IA 17・18 k グリッドに位置する。V層上面でSX 01は黒色の不整形円形プラン、SX 02は暗褐色の不整形円形プランとして検出した。両者は一連のものである可能性があることから、あわせて記載を行う。SX 01はSK 103と重複関係にあり、本遺構のほうが新しい。SX 02はSX 01と北端部分で接しており、断面観察によりSX 02のほうがSX 01より新しいことを確認している。

<形状・堆積土> SX 01の平面形は不整形で、上面規模は3.3×3.2mである。壁面は、斜面上方にあたる東側の壁面のみ残存している。断面形は浅い皿形で、深さは最も深い東壁付近で0.2mである。底面は、V層を掘り込んでいる為凹凸が著しく、全城で礫が露出している。ただし、東壁では礫が整然と並ぶ状況が確認されている。石材を確認したところ全てV層中に含まれる花崗岩であり、壁面構築の際に偶然このような層が露出した可能性もある。堆積土は8層に細分したが、基本的には黒色土と黄色砂との互層堆積である。

SX 02の平面形は柱穴2個と皿形の浅い土坑が連結したような不整形のプランで、上面規模は1.2×1.1mである。断面形も不整形で、浅い皿状になる部分と逆台形状になる部分があるが、いずれも

V層を掘り込んでいる為凹凸が著しい。深さは、最も深い北西側の柱穴部分で0.25 mである。堆積土はS X 01と同じく黒褐色土が主体である。

<出土遺物> S X 01では縄文土器が96.7 g、S X 02では縄文土器が518.5 g出土しており、このうちS X 02から出土した土師器甕を1点掲載した(510)。なお、S X 02は堆積土中から釘が2点出土している(M45・46)。

<性格と年代> 直接的に本遺構に伴うと考えられる遺物は出土していないが、18世紀代と考えられる墓であるS K 103を壊していることから、18世紀以降に属するものと考えられる。性格については不明であるが、近世以降に属する使用されていない状態の炭窯の可能性も考えられる。

#### S X 03 (第118図、写真図版123)

<検出状況> I A 19 k グリッドに位置する。V層上面で黒色の不整形プランとして検出した。前述のS X 01と検出状況が類似していたため、同種の遺構の可能性を想定して精査を行った。他遺構との重複関係は無く、単独で存在する。

<形状・堆積土> 平面形は不整形で、上面規模は2.5 × 1.75 mである。北側に柱穴があり、黒色土が本体部から柱穴に向かって煙道状に直線的に延びる。V層を掘り込んでいることから、遺構内部にはV層中に含まれる巨礫が露出している。断面形は半円形で、壁面は不明瞭である。遺構上部は削平されており、検出面からの深さは0.27 mある。堆積土は壁面崩落土である黄褐～褐色土を主体に3層に細分され、その堆積状況からいずれも自然堆積と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<性格と年代> 出土遺物が無い為性格・年代ともに特定する根拠が無い。S X 01と同じく未使用の炭窯の可能性もあるが、詳細は不明である。

(村田)

#### S X 04～06 (第118図、写真図版123・124)

<検出状況> S X 04はII C 21・22 m・n、S X 05はII C 21・22 n・o、S X 06はII C 20・21 o・p グリッドに位置する。

<形状・堆積土> いずれも北西-南東方向を軸方向とし、3遺構合計で25本程度の畝間を形成している。畝間の上面幅は10cm、深さは5cm程度である。畝間の堆積土もほぼ同様の性質であるが、いずれの堆積も浅い為、堆積要因(畝の土の流れ込みあるいは人為的な埋め戻し)については不明である。

<出土遺物> S X 04から縄文土器が79.7 g出土しており、1点写真掲載した(640)。

<性格と年代> 検出面から近世以降と考えられる畝間状遺構である。

(中村)

#### S X 07～20 (第119・120図、写真図版124)

堆積土に人為的に割られたと思われる角礫を多量に含む不整形の土坑であり、性格は不明である。形状と規模も様々であり、全てが同じ性格のものであるかは検討を要するが、前述のように堆積土に角礫を多量に含むものについては一括して報告した。角礫が既に露出していた浅いものについては精査を行っていないが、それらを含めると調査区中央西側のI A γラインから東側で主に検出されている。なかでもII C 2 h～5 i グリッドに集中して分布している。

平面形は円形・楕円形のものもあるが、多くが壁面の出入りが大きい不整形なものである。上面規模は、最も大きいS X 16が4.2 × 2.53 m、最も小さいS X 11が0.56 × 0.47 m、深さは最も深いS

X 16 が 0.42 m、最も浅い S X 10 で 0.15 m である。堆積土は締まりの無い黒色土の単層で、堆積土中に角礫と流れ込みと考えられる花崗岩が多量に含まれている。なお、この角礫は床面直上まで確認できるが、意図的に設置したと考えられるものは確認されていない。

出土遺物は、S X 08 で土器 63.1 g、S X 09 で土器 55.3 g が出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。この他には図示していないが、S X 07 等で近現代の陶磁器が出土している。

年代については、近現代の陶磁器が出土していることから多くのものがこの時期の属すると思われる。構築時期を考えれば近世以前の遺構に対しては攪乱と同じ扱いになるものであるが、調査区内で一定量が検出されたため、今回は代表的なものについては記録を取って提示した。なお、今回は土坑として報告しているが、調査区南東隅に位置する S K 116 (第 104 図) についてもこれと同種の遺構の可能性がある。

## 11 遺物包含層 (第 120 図、写真図版 125)

<検出状況> 調査区西端部の I A 17 c ~ 16 g グリッド内で検出した。II 層の堆積する沢状地形の上部に形成されたものである。調査区内での検出規模は東西約 20 m、南北約 4.2 m である。調査では西壁から 3 ~ 4 m 間隔で 5 つの区画を設定し、西から 1 ~ 5 区と呼称した。

<堆積状況> 層厚は、最も深い調査区西端 (I A 17 d グリッド付近) で 0.9 m ある。堆積土は 4 層に分けられ、上位は灰褐色 ~ 黒色土、中位は褐灰色土が主体となる。4 層はにぶい黄褐色の粗砂層であり、遺物も出土していないことから地山である V 層の漸移層と考えられる。

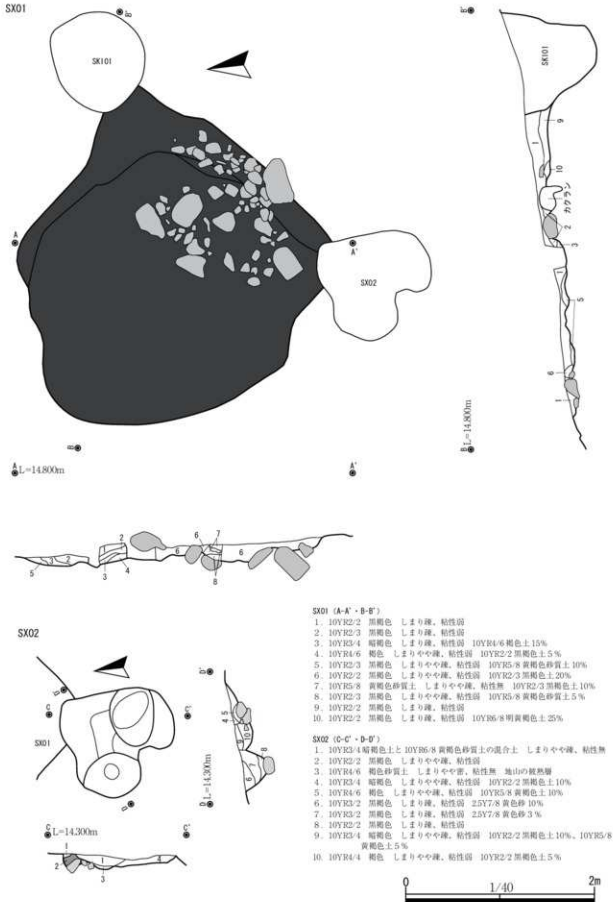
<出土遺物> 土器は 97691.9 g 出土しており、これは今回の調査全体の 1 割 5 分にあたる。ただし、S I 01 と比べて接合率は低く、50 点を掲載したのみである (511 ~ 560)。1 層からは土師器片や鉄滓も出土しているが、大半が第 IV 群に属する縄文土器である。その他、礫石器 6 点 (S206 ~ 211)、石製品 1 点を掲載した。

<性格と年代> 出土土器がおおむね第 IV 群 (大木 6 ~ 7 式) に属することから、縄文時代前期末葉 ~ 中期初頭頃に形成されたものと考えられる。前述の大型堅穴建物である S I 01 と同時期であることから、この堅穴建物に伴う捨て場であった可能性が考えられる。

## 12 遺構外出土遺物

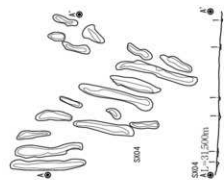
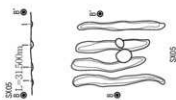
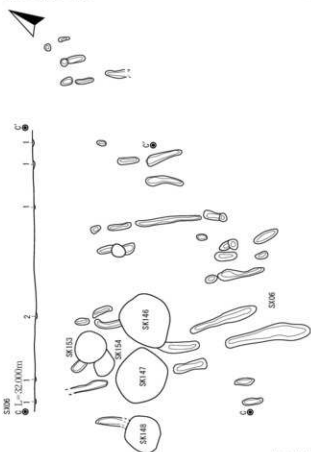
今回の調査では遺構外からも多量の遺物が出土している (第 165 ~ 170・174・181・194・195・198・199・204 図)。平成 25 年度調査区では遺構直上に堆積する表土層から、平成 26 年度調査区では遺構の有無に関係なく調査区全域から出土する状況であった。いずれも直接遺構内から出土したものではないが、直下あるいは周辺に存在する遺構に関連する可能性を考慮し、出土量を勘案しながら、土器は 107 点 (561 ~ 628・679)、土製品は土器片円盤 1 点 (685)・紡錘車 1 点 (686)・粘土塊 1 点 (687)、剥片石器は 25 点 (S90 ~ 99・105 ~ 119)、礫石器は 21 点 (S212 ~ 225・237 ~ 243)、鉄製品は鎌 2 点 (M51・52)・刀子 2 点 (M53・54)・釘・舟釘 (M55 ~ 58)、鏝 (M59)・環状鉄製品 (M60)、銭貨 6 点 (M67 ~ 72)、陶磁器 37 点 (P 2 ~ 38) を掲載した。傾向としては、土器は平成 26 年度調査区では縄文土器第 V・VI 群のものが多く、金属製品は平成 25 年度調査区の古代の堅穴建物が集積する範囲で多く出土している。

(村田)

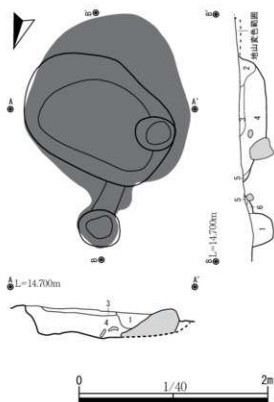


第117図 SX01・02

SX04・SX05・SX06



SX03



SX03 (A-A'・B-B')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまり疎、粘性弱  $\phi$ 30mm程度の礫15%
2. 10YR5/2 灰黄褐色～10YR5/3にふい黄褐色 しまり、粘性共に有
3. 10YR2/2 黒褐色と10YR5/3にふい黒褐色の混合物 しまり、粘性共に有
4. 10YR5/4にふい黄褐色～10YR6/6明黄褐色 しまり、粘性共に有 下層に大型の礫30%
5. 10YR2/2 黒褐色 しまり、粘性共に有
6. 7.5YR5/4 にふい褐色 しまり疎、粘性弱 表砂土の灰色層(被熱か)

SX04 (A-A')

1. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱

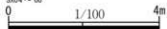
SX05 (B-B')

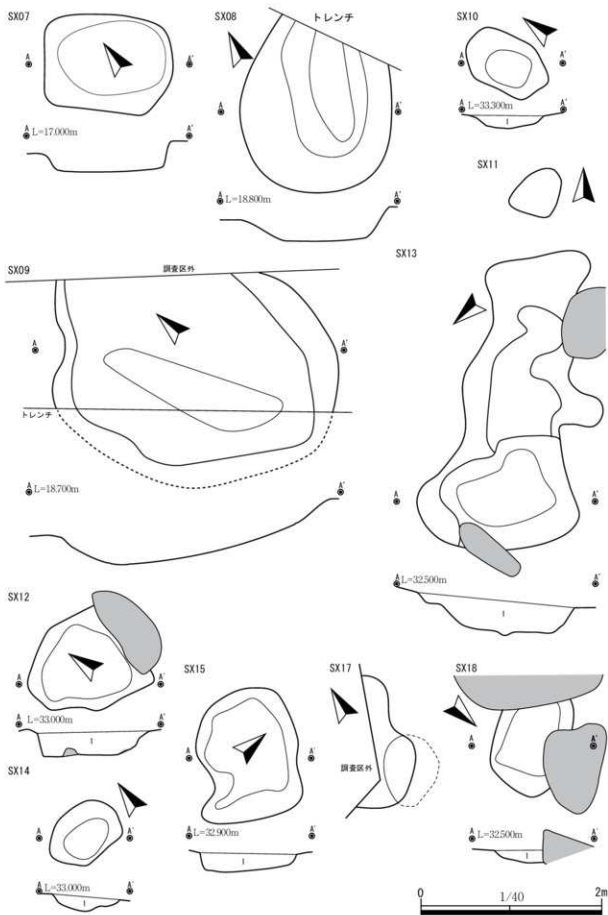
1. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや疎、粘性弱 10YR4/4褐色土10%

SX06 (C-C')

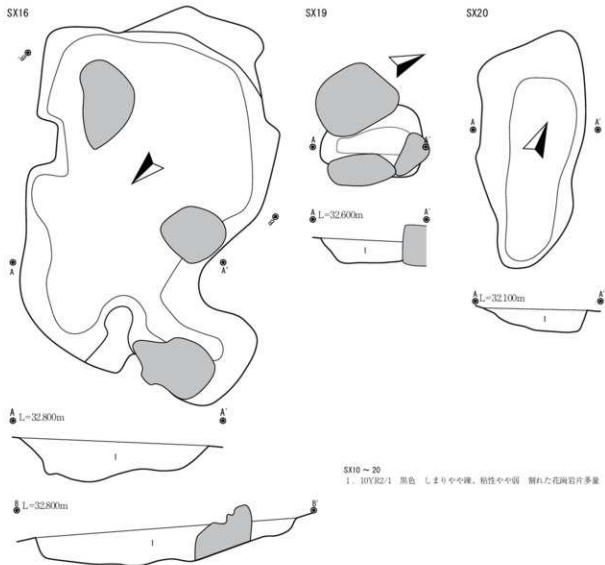
1. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや密、粘性無
2. 10YR2/2 黒褐色 しまりやや密、粘性無 10YR3/4暗褐色土15%

SX04～06





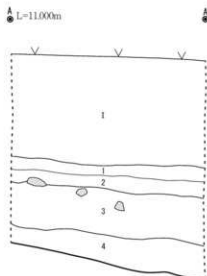
第119図 SX 07 ~ 15・17・18



SX10 ~ 20

1. 10YR2/1 黒色 しまりやや硬、粘性やや弱 割れた花崗岩片多量

遺物包含層 (調査区南端壁面 (I A17d グリッド内))



遺物包含層

1. 表土

2. 10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性共に有 縄文~古代遺物包含

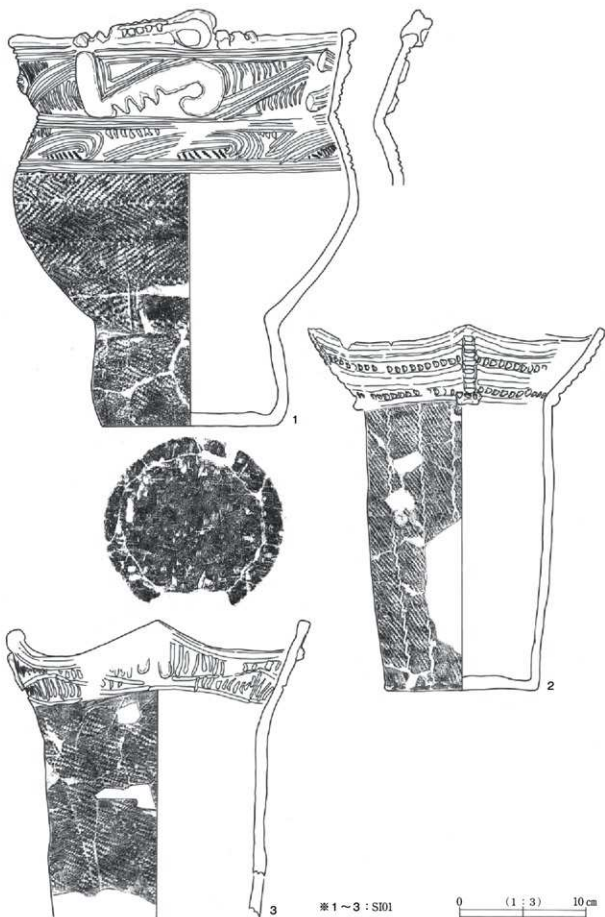
3. 10YR3/1 黒色 しまり・粘性共に有 確かな縄文遺物包含

4. 10YR4/1 褐色 しまり・粘性共に有 確多量 縄文遺物包含

4. 10YR5/3~5/4 に近い黄褐色 しまり硬、粘性弱 粗砂 遺物含まない

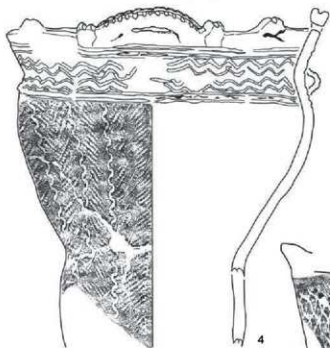


第 120 図 S X 16・19・20、遺物包含層

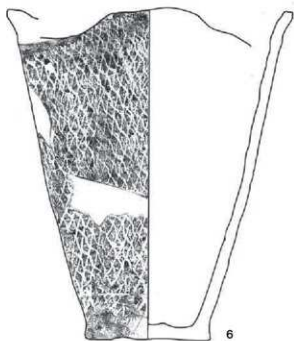


第121図 土器(1)

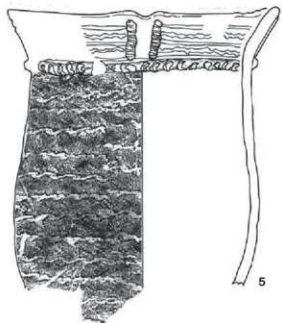




4



6



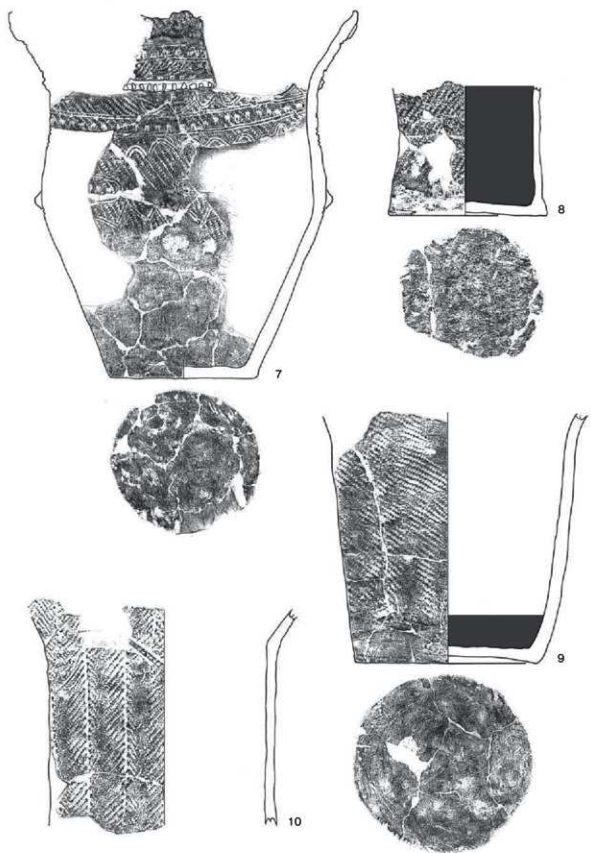
5



※ 4~6 : SI01

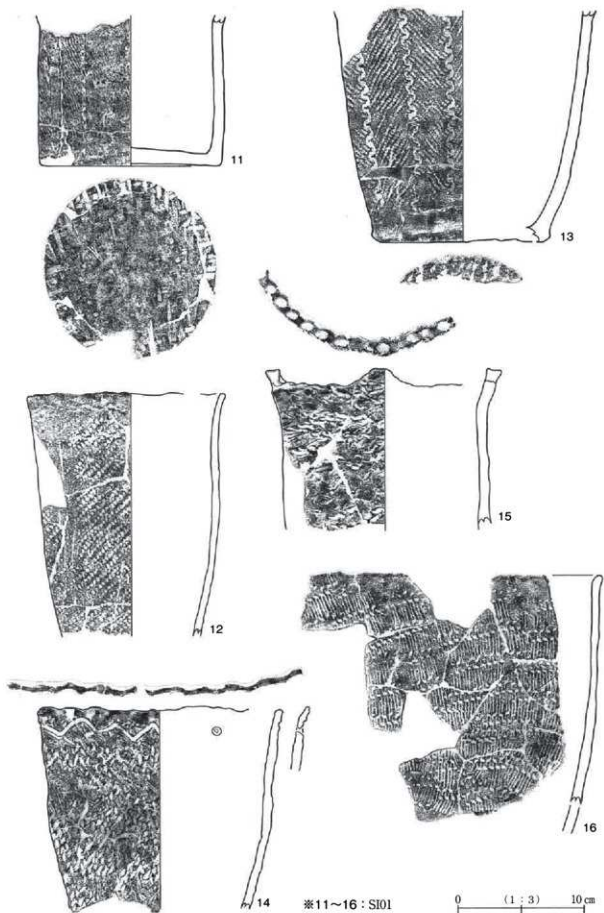
0 (1 : 3) 10 cm

第122図 土器(2)

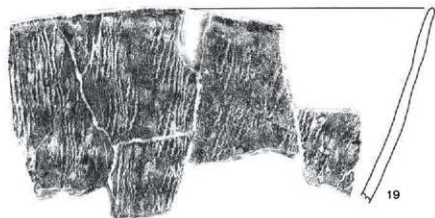
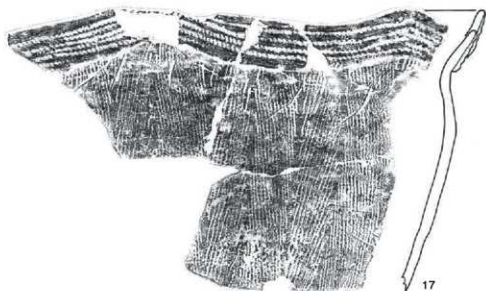


※ 7~10 : SI01

第123図 土器(3)

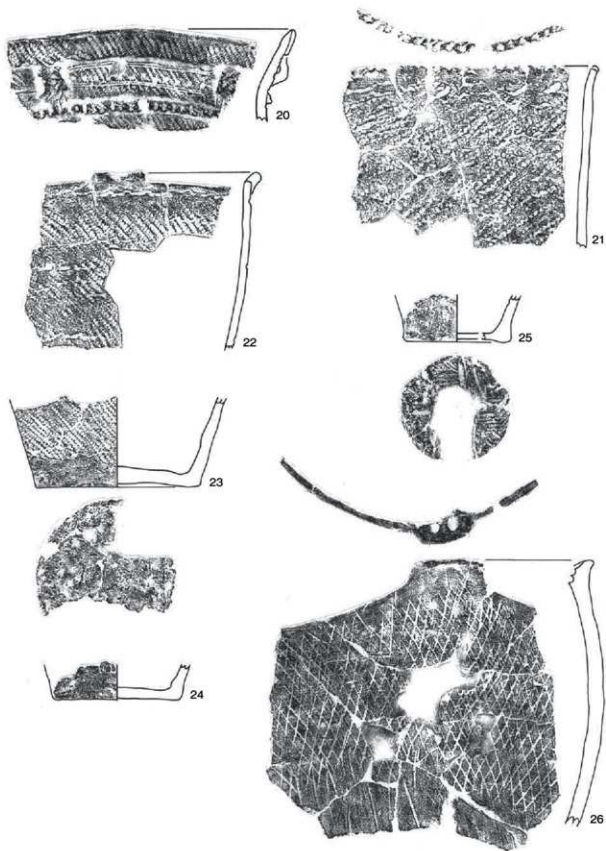


第124図 土器(4)



※17~19: SI01

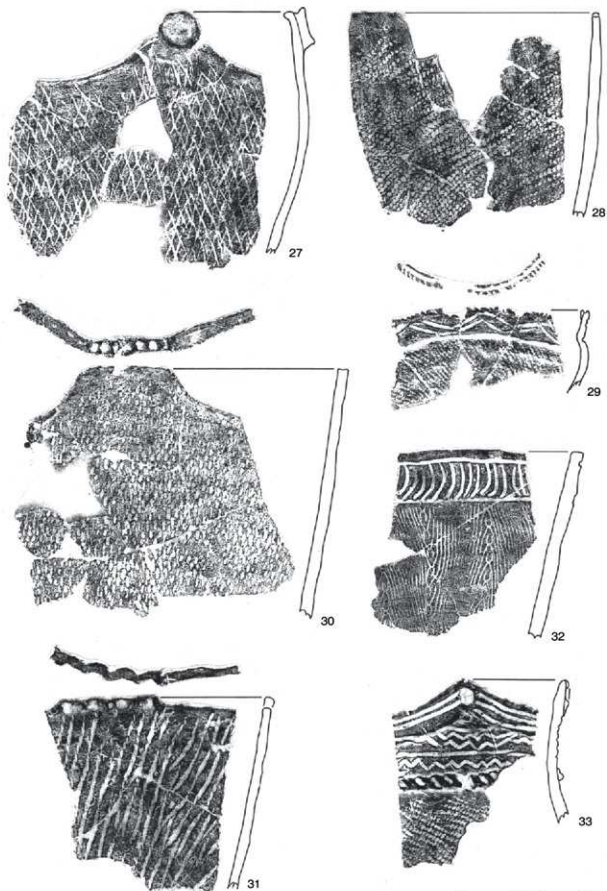
0 (1:3) 10cm



※20~26 : SI01

0 (1:3) 10cm

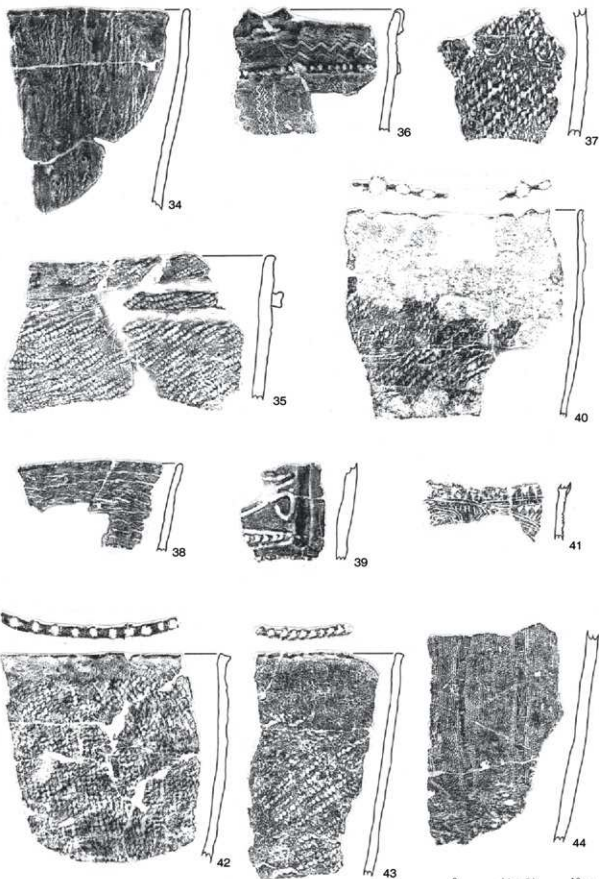
第126図 土器(6)



\*27~33: SI01

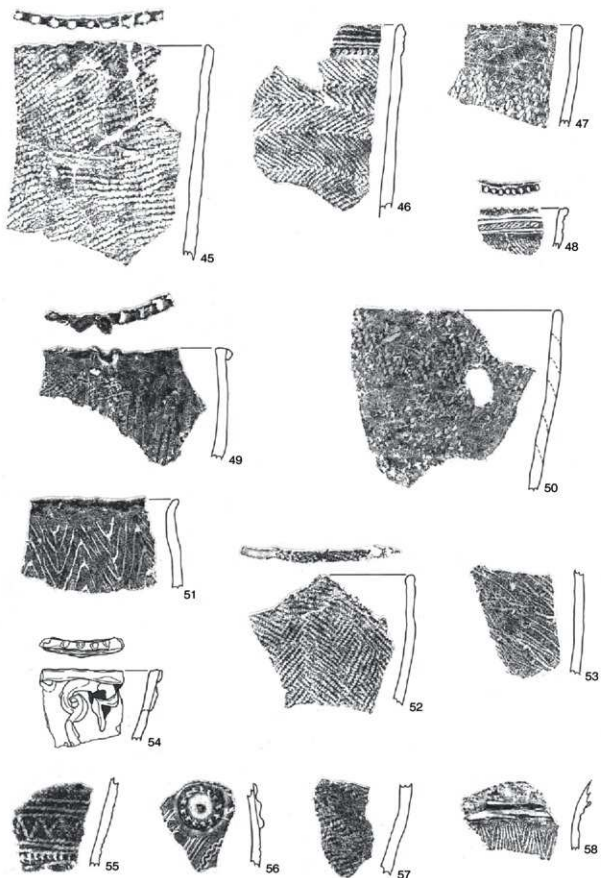
0 (1:3) 10cm

第127図 土器(7)



※34~44 : S101

第128図 土器(8)

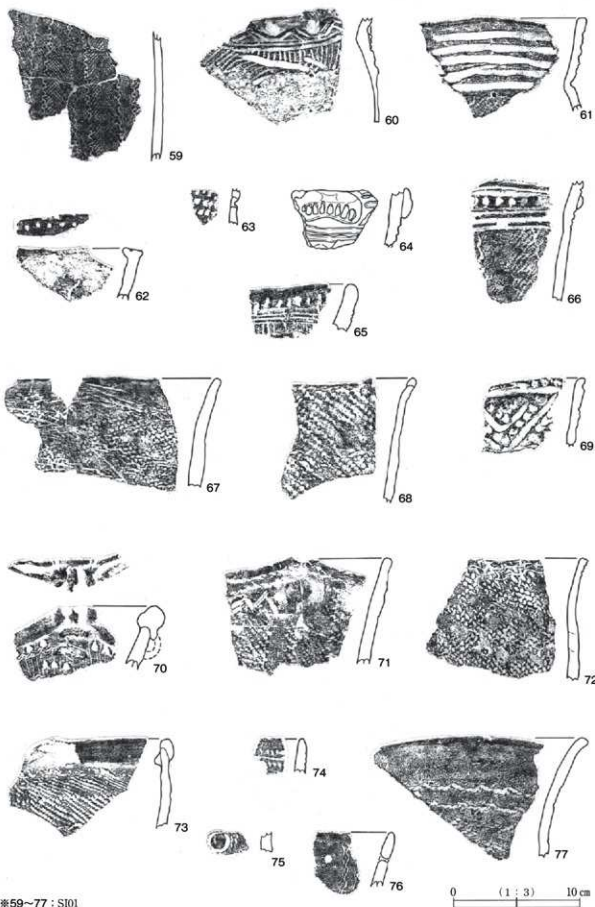


\*45~58 : S101

0 (1 : 3) 10 cm

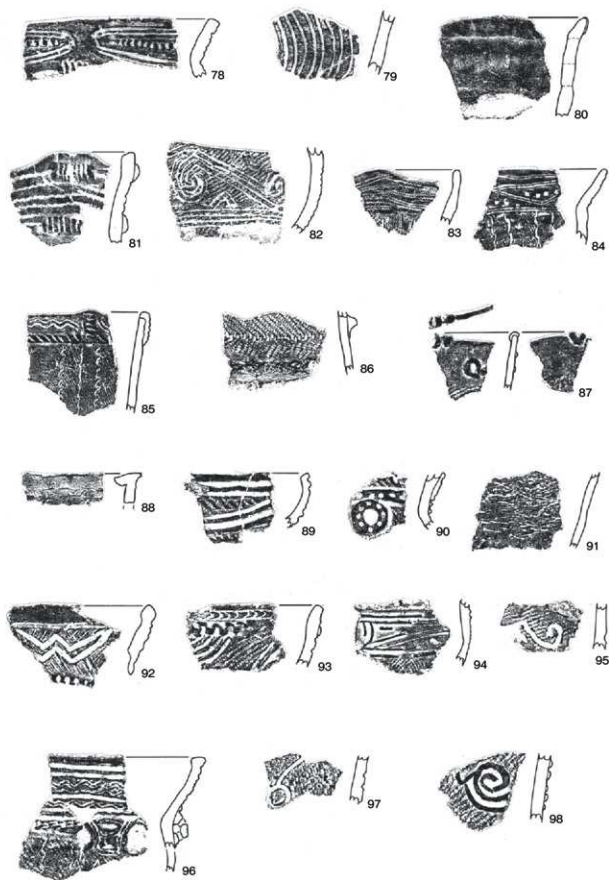
第129図 土器(9)





\*59~77: SI01

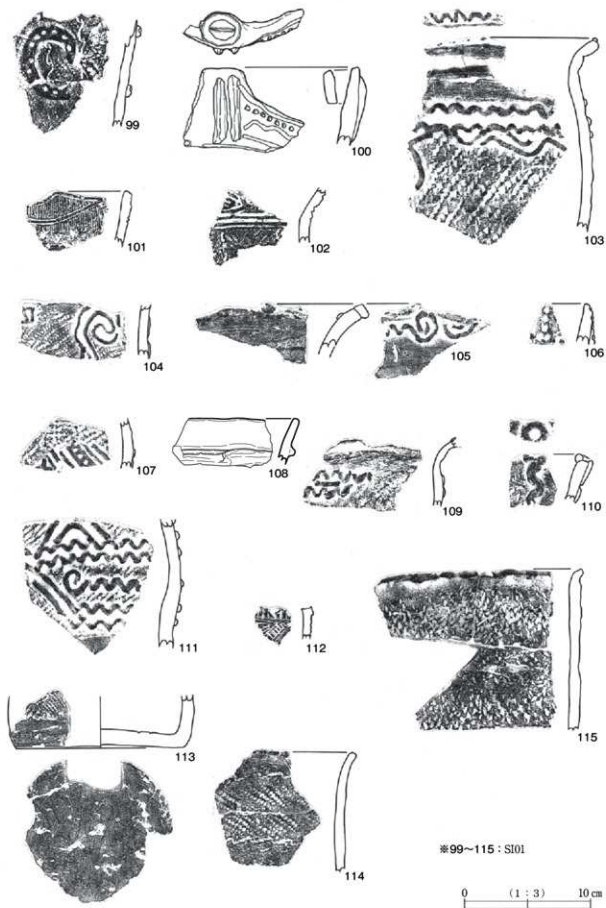
第130图 土器(10)



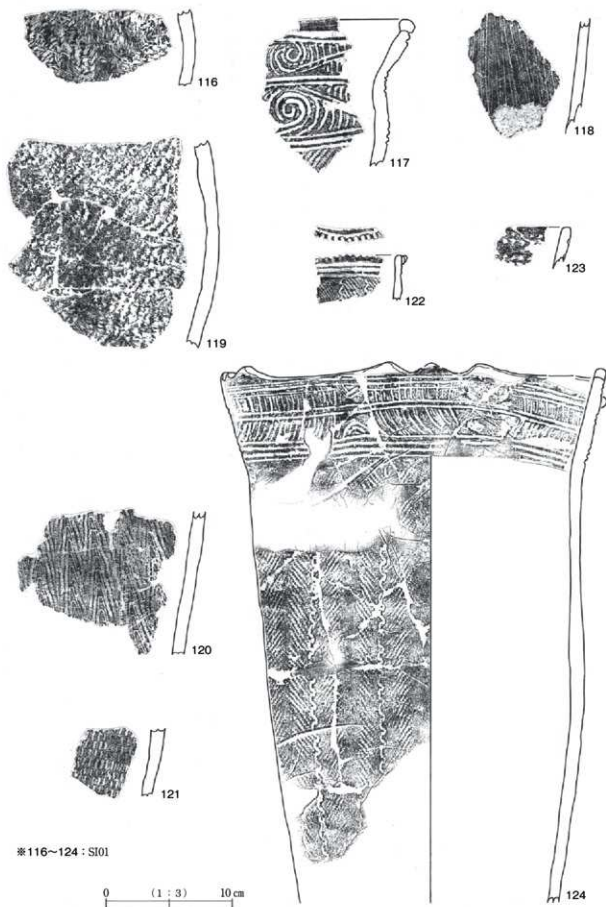
※78~98 : SI01

0 (1:3) 10cm

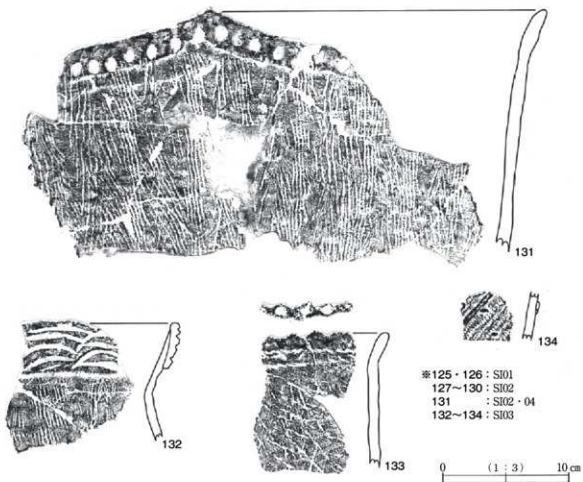
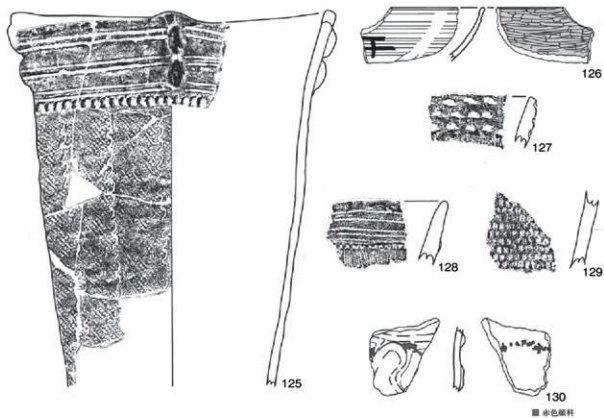
第131図 土器(11)



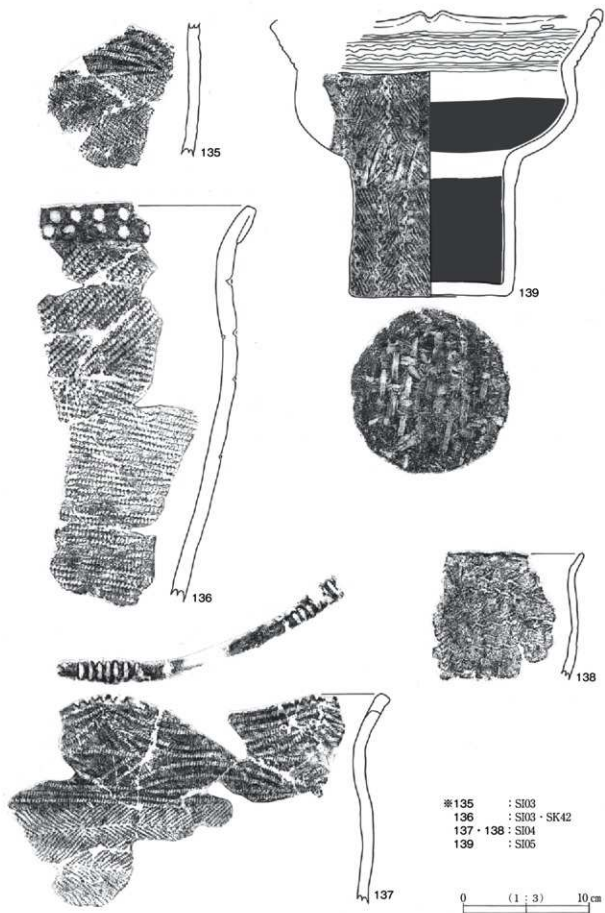
第132図 土器 (12)



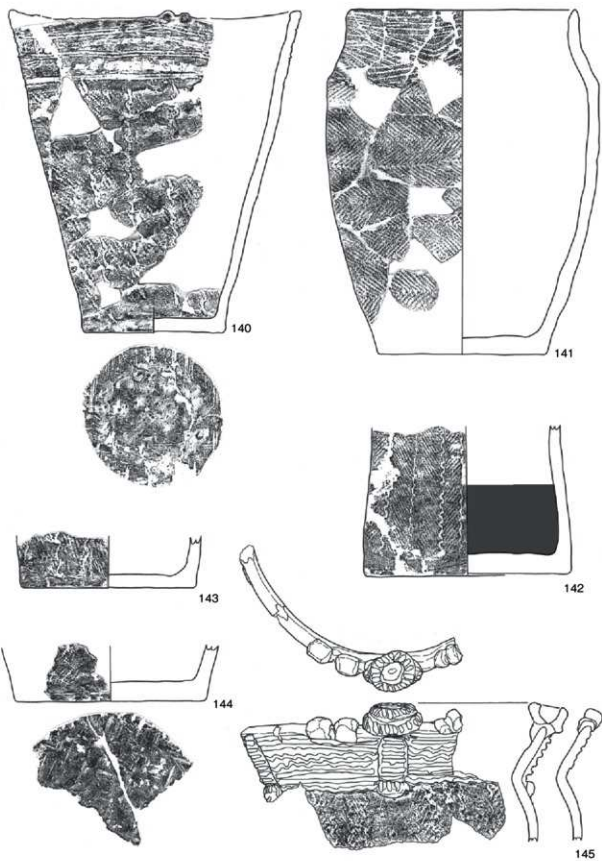
第133図 土器 (13)



第134图 土器(14)



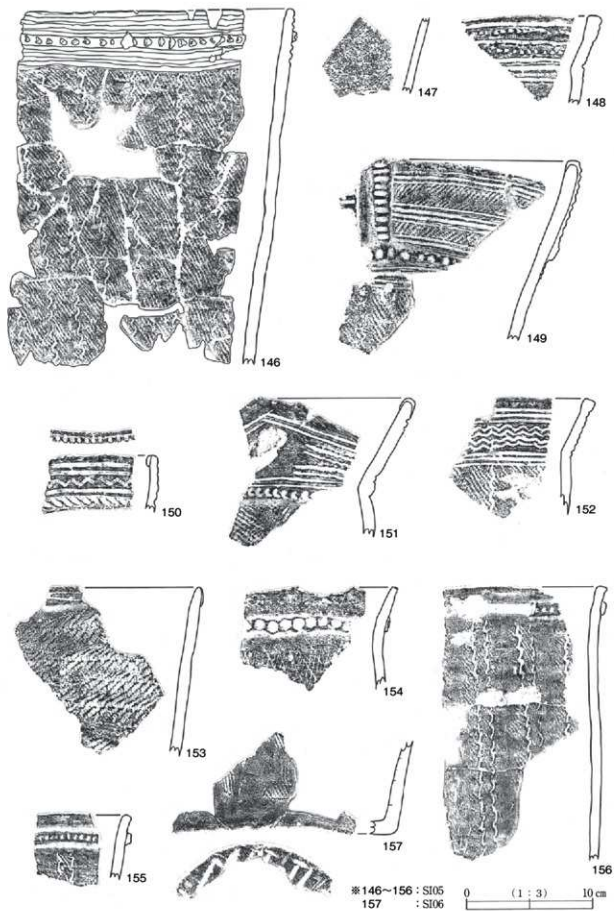
第135図 土器 (15)



※140~145: SI05

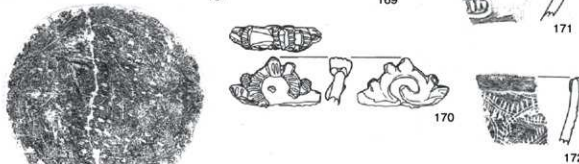
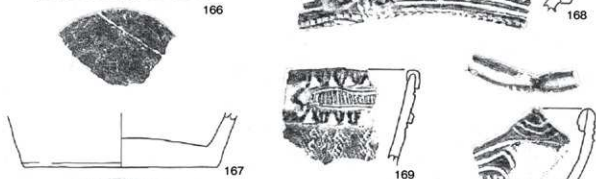
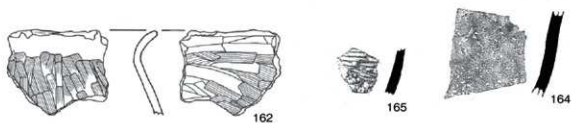
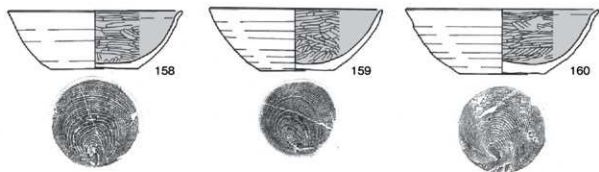
0 (1:3) 10 cm

第136図 土器(16)



第137図 土器 (17)

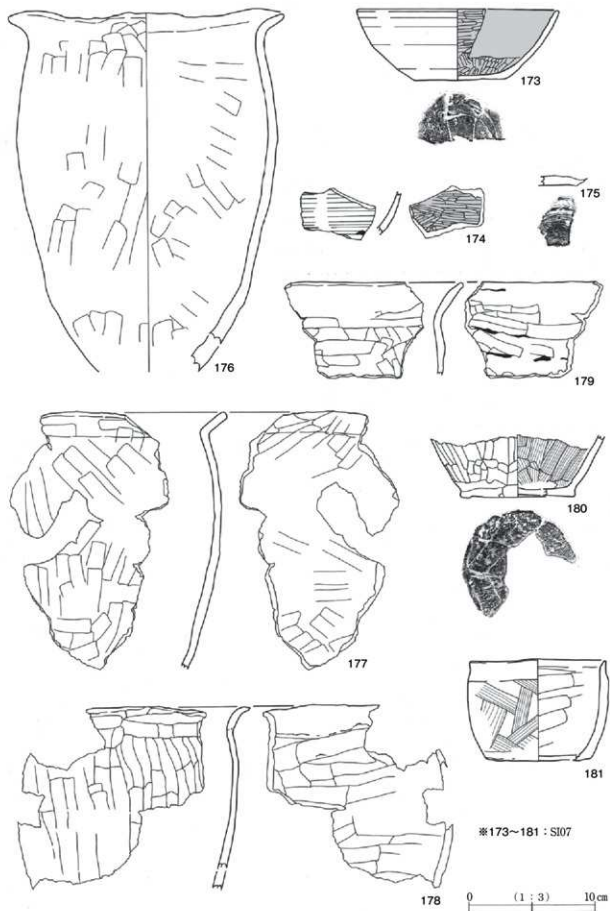




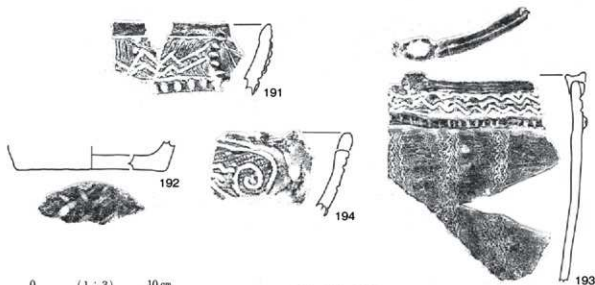
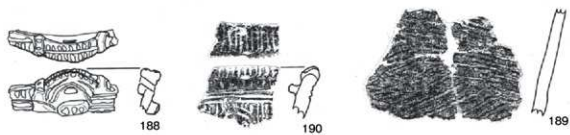
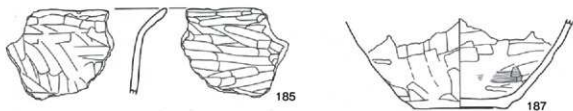
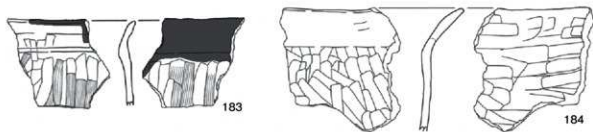
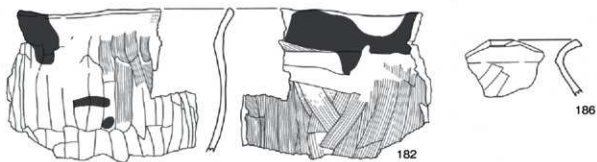
\*158~172 : S106

0 (1 : 3) 10 cm

第138图 土器 (18)



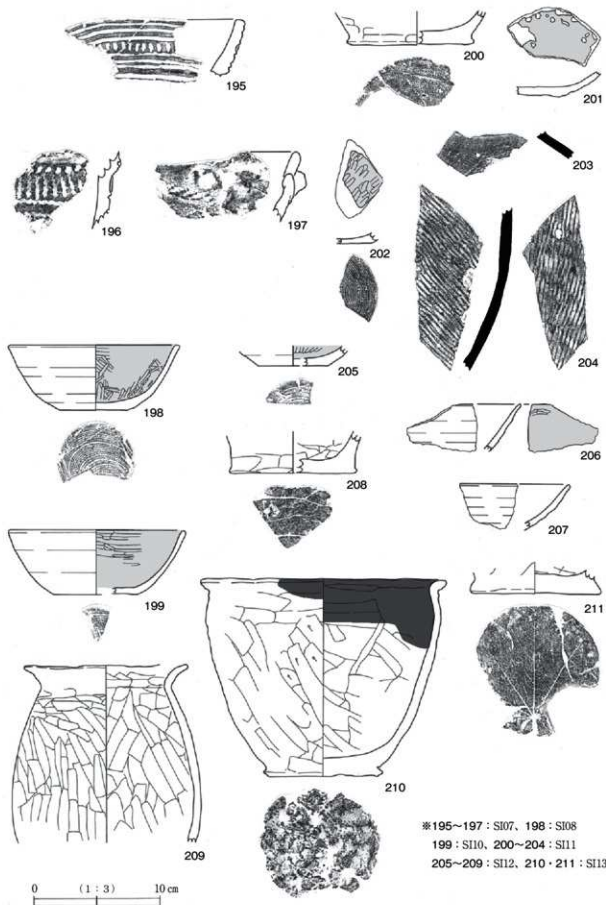
第139図 土器 (19)



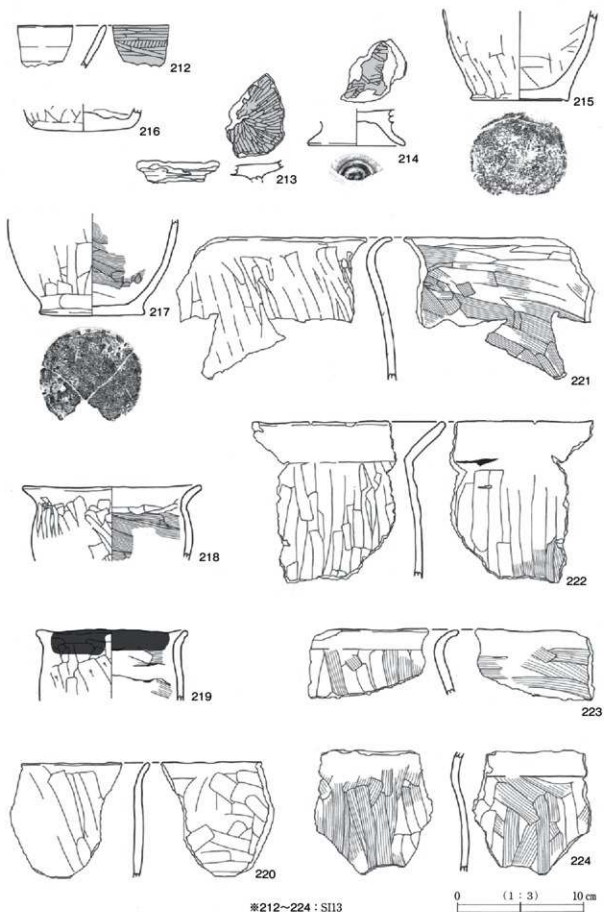
0 (1 : 3) 10 cm

※182~194 : SI07

第140图 土器 (20)



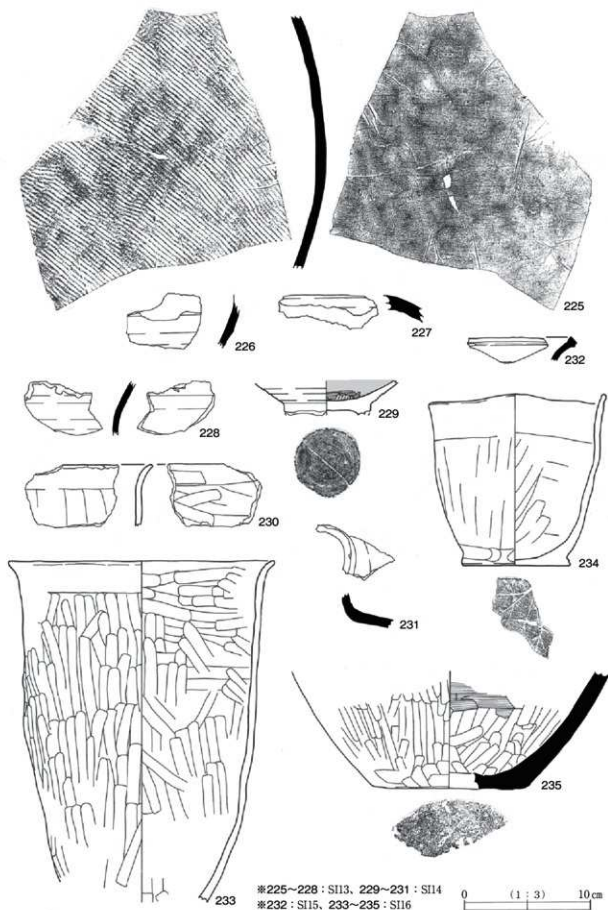
第141図 土器(21)



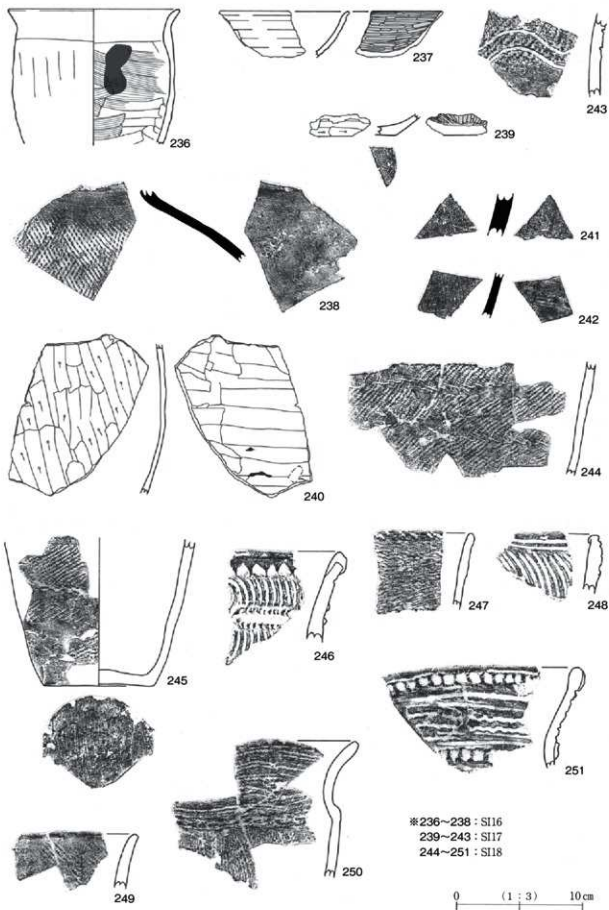
\*212~224 : SI13

0 (1:3) 10 cm

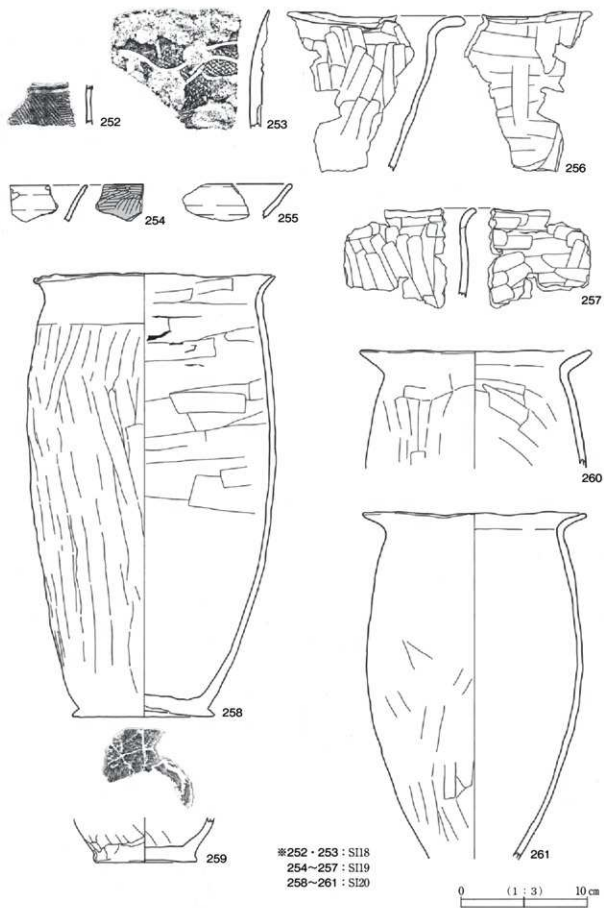
第142图 土器 (22)



第143図 土器 (23)

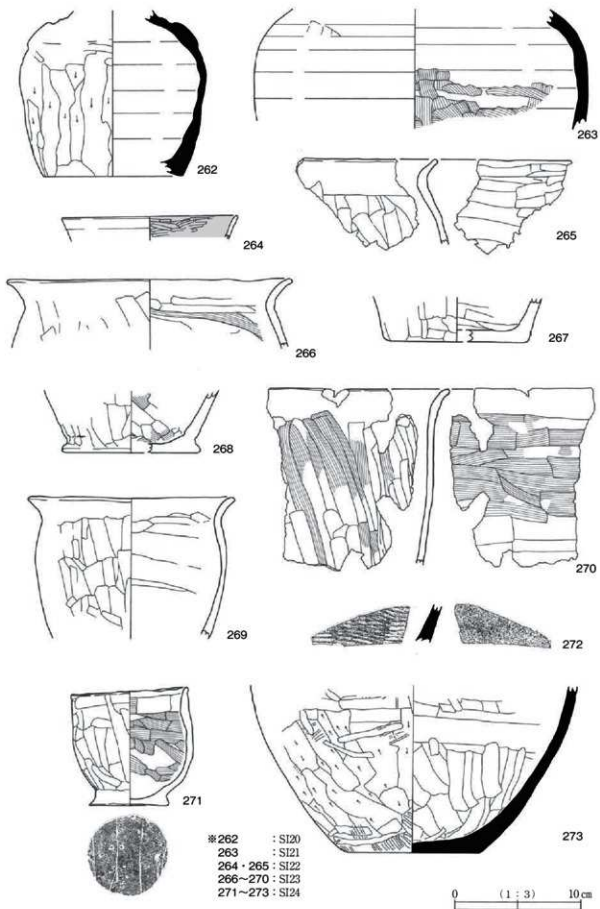


第144图 土器 (24)

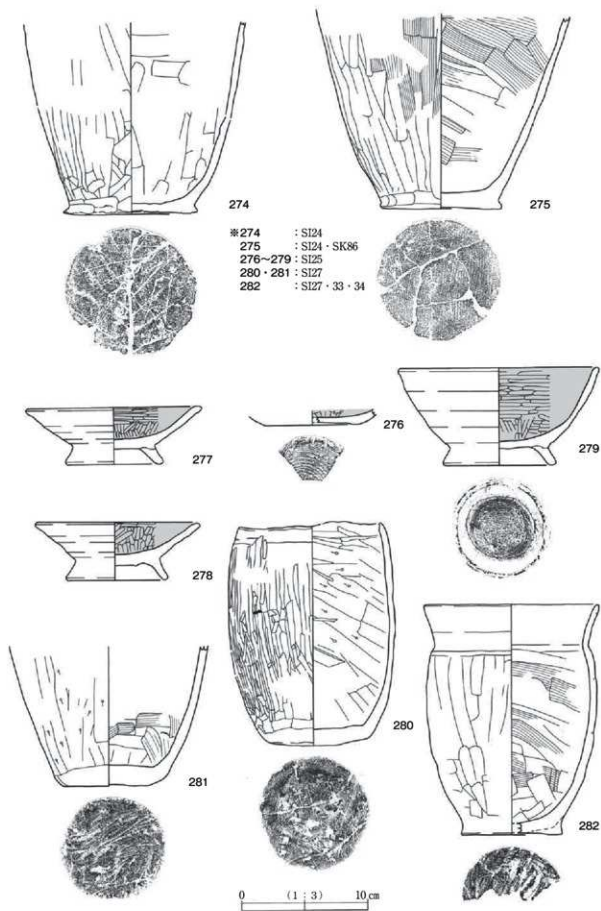


第145図 土器 (25)



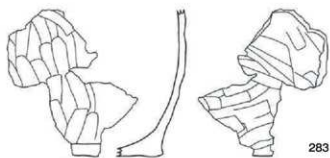


第146図 土器(26)



※274 : SI24  
 275 : SI24・SK86  
 276~279 : SI25  
 280・281 : SI27  
 282 : SI27・33・34

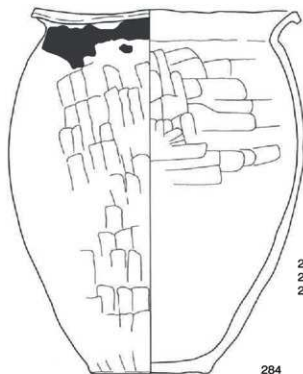
第147図 土器 (27)



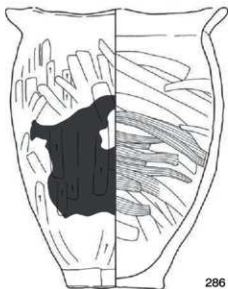
283



285



284



286

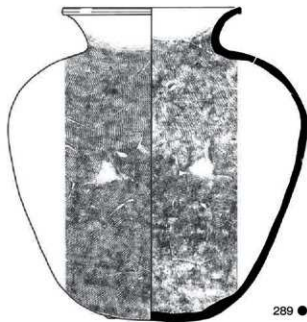
283 : SI27・33・34  
284~286 : SI30  
287~289 : SI31



287



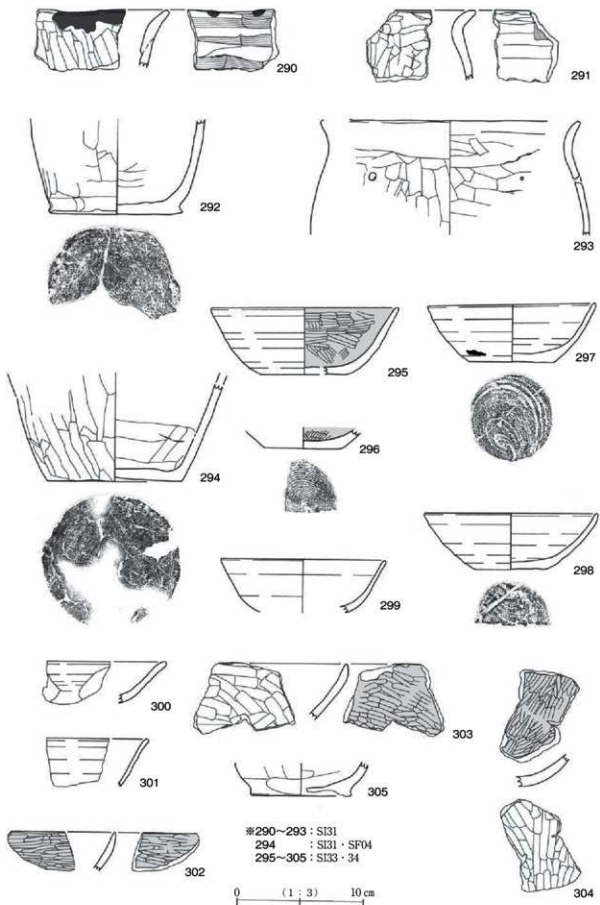
288



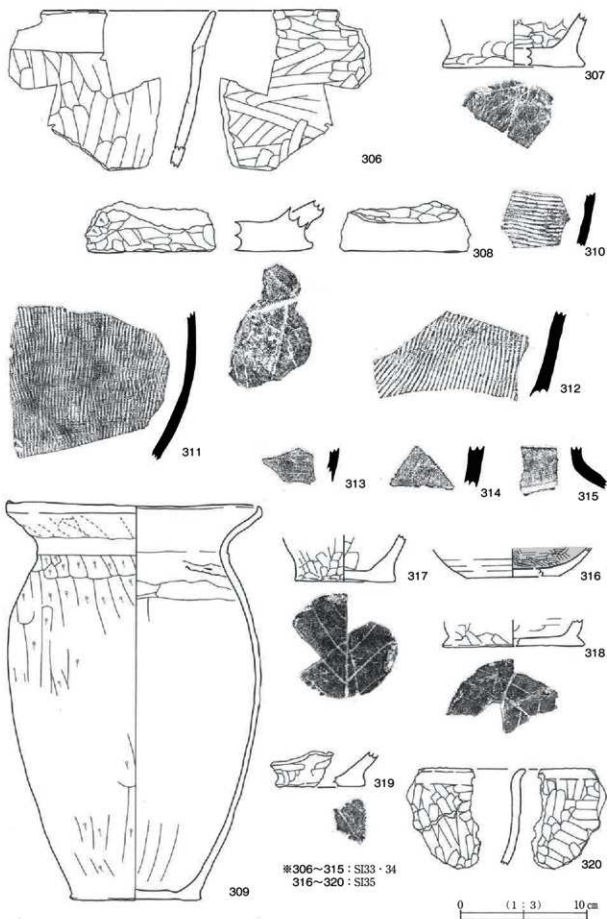
289 ●

0 (1 : 3) 10 cm 0 (1 : 8) 40 cm

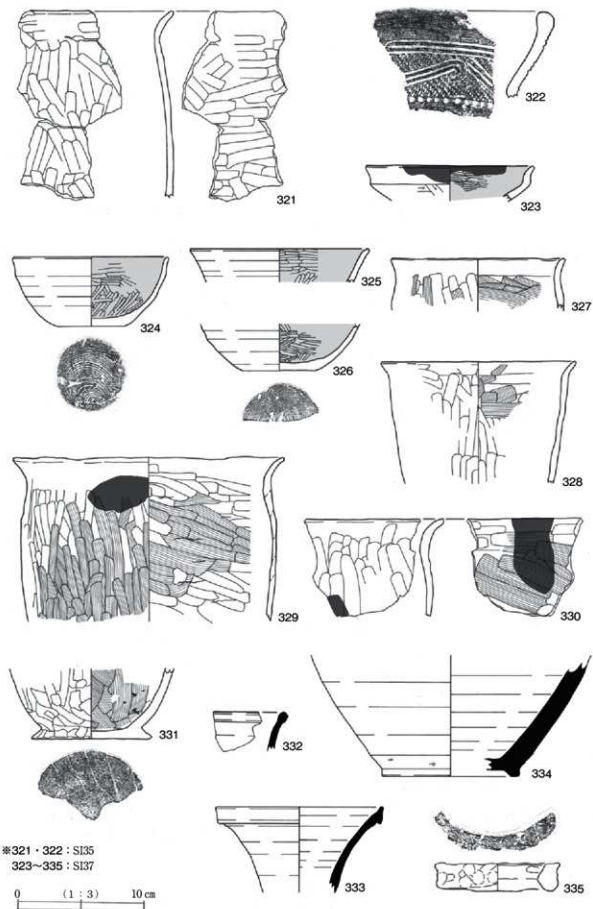
第148図 土器(28)



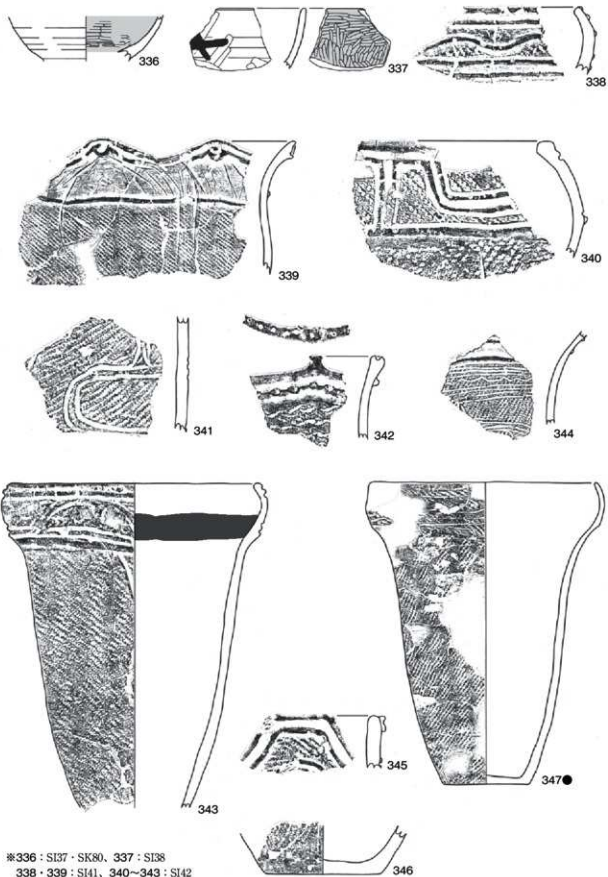
第149図 土器(29)



第150図 土器 (30)



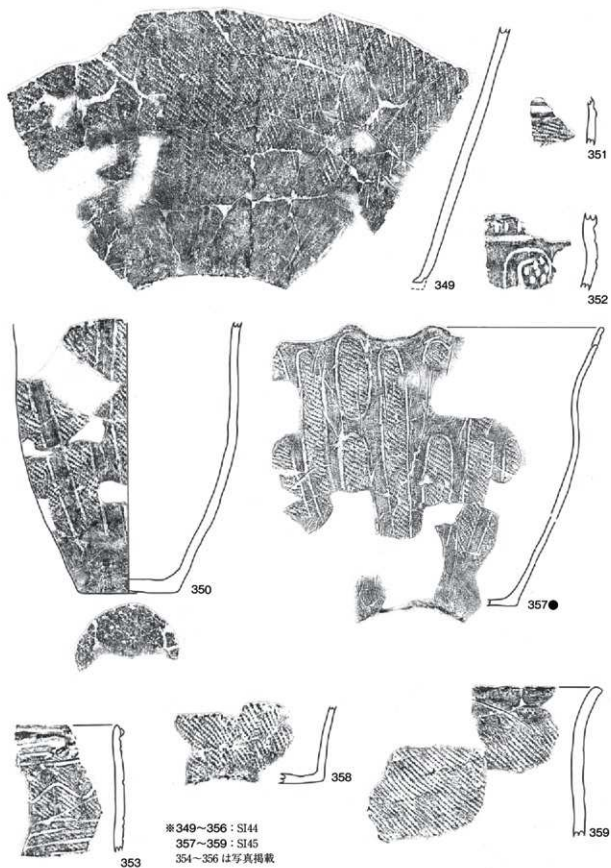
第151図 土器 (31)



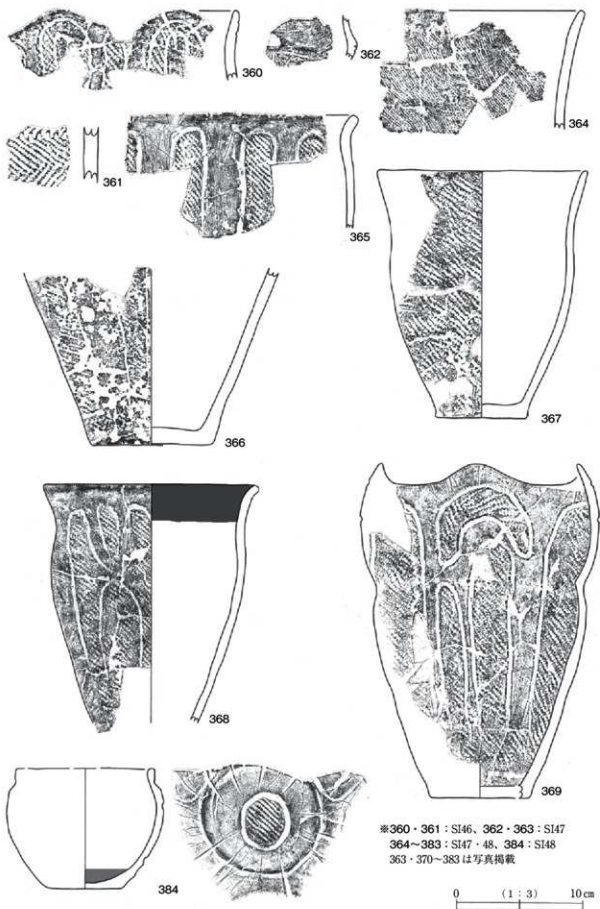
※336 : SI37・SK80、337 : SI38  
 338・339 : SI41、340~343 : SI42  
 344~348 : SI43  
 348 は写真掲載

0 (1 : 3) 10 cm 0 (1 : 4) 20 cm

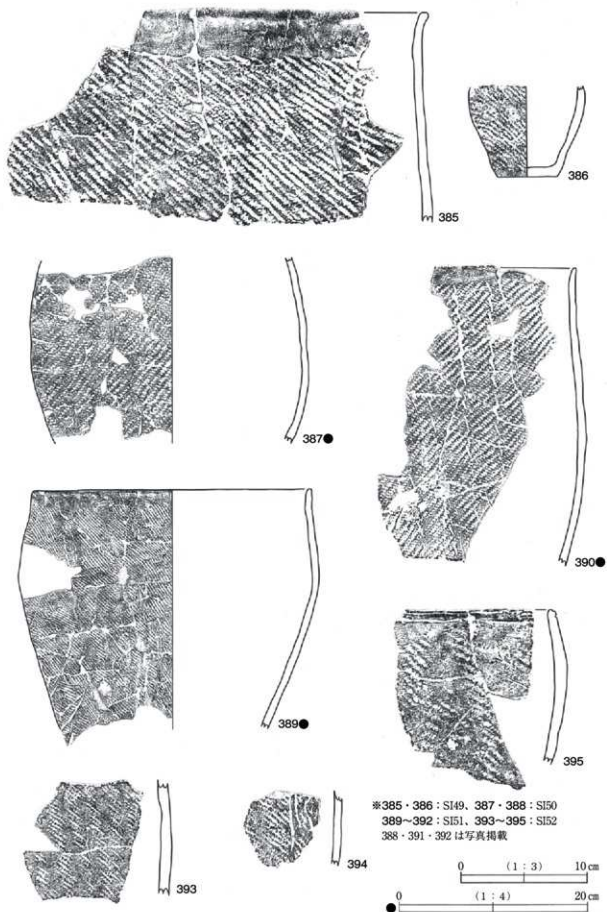
第152図 土器 (32)



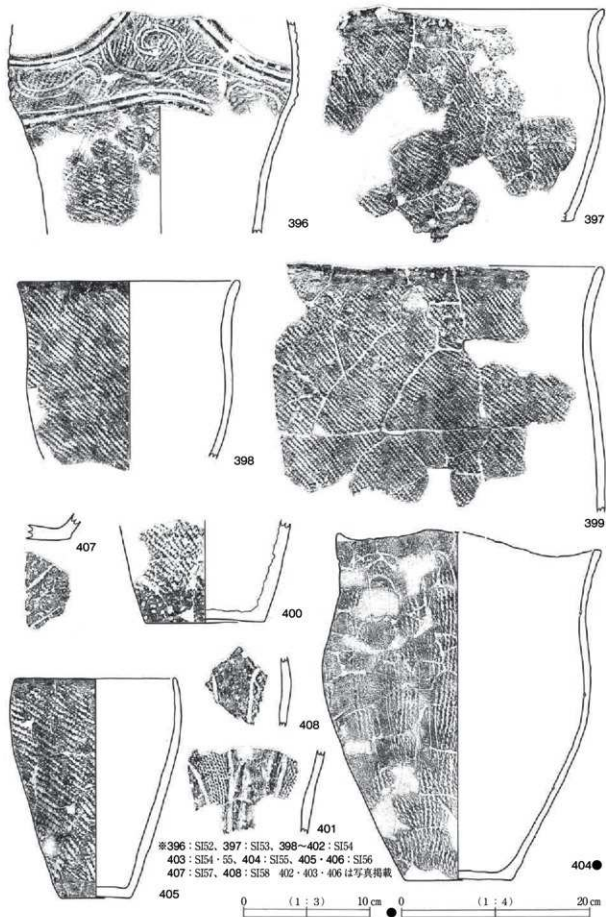




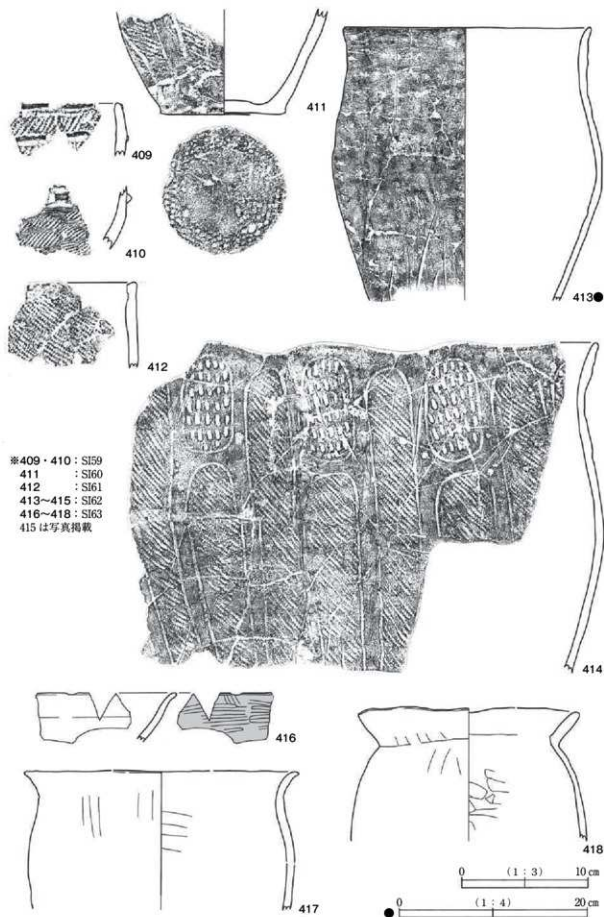
第154図 土器 (34)



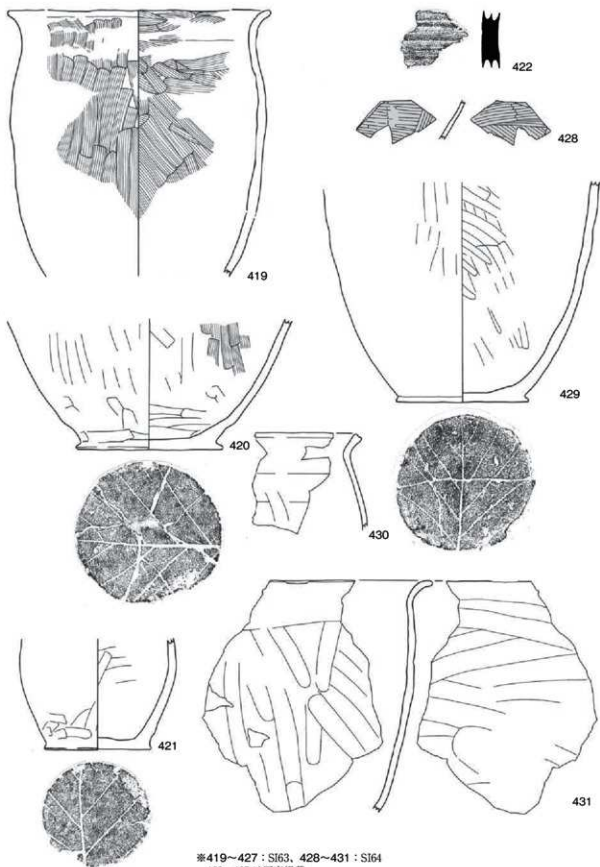
第155図 土器 (35)



第156図 土器 (36)

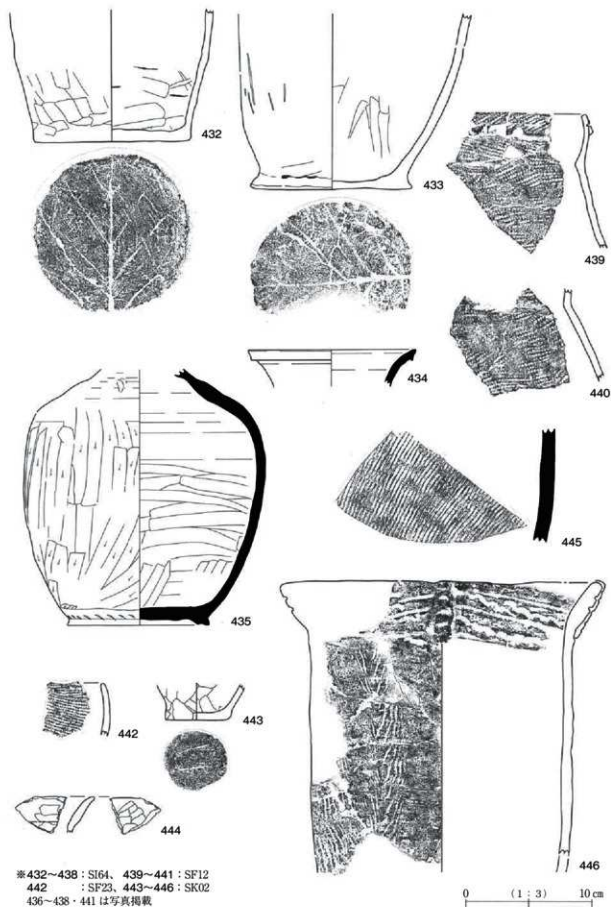


第157図 土器(37)



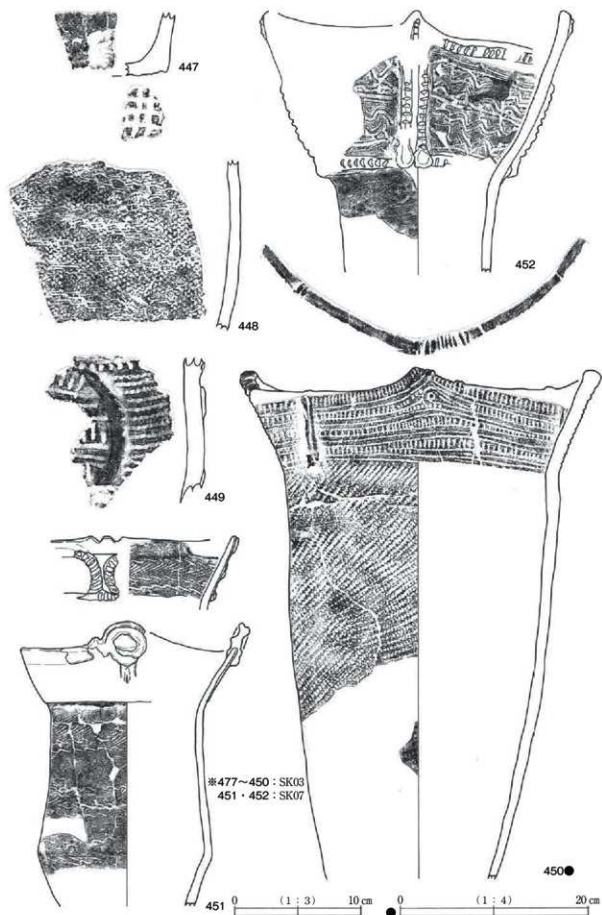
※419～427 : SI63, 428～431 : SI64  
 423～427 は写真掲載

0 (1 : 3) 10 cm

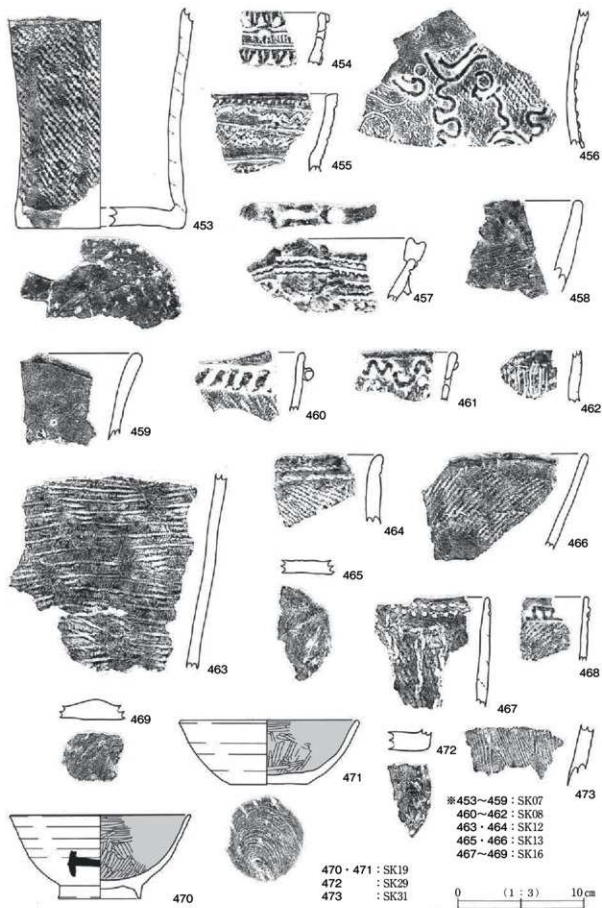


※432~438 : SI64、439~441 : SF12  
 442 : SF23、443~446 : SK02  
 436~438・441は写真掲載

第159図 土器 (39)

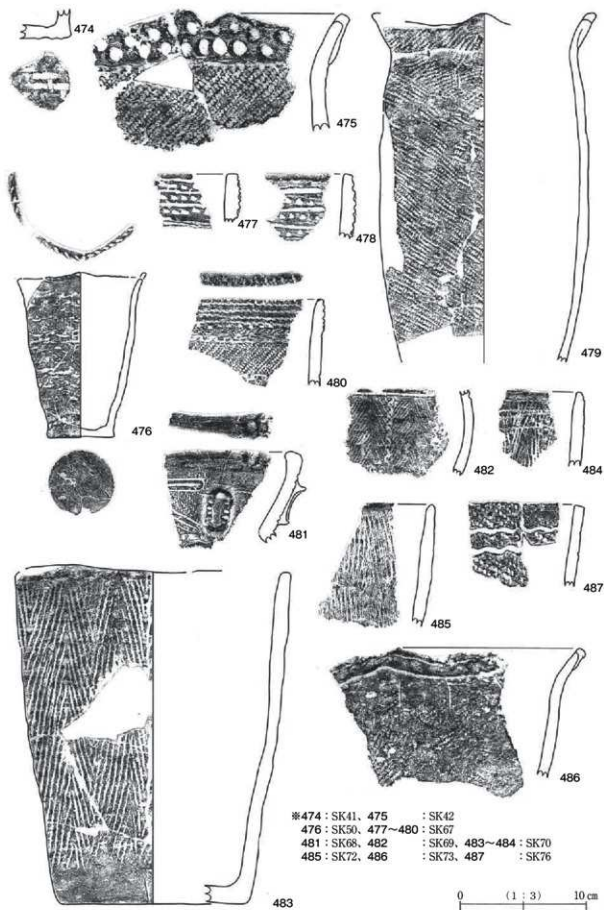


第160図 土器 (40)

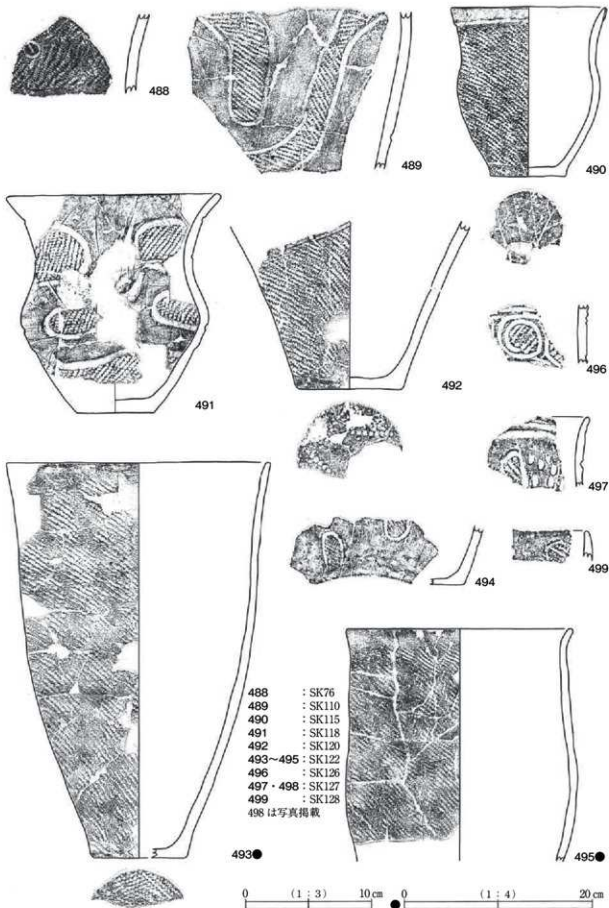


第161図 土器(41)

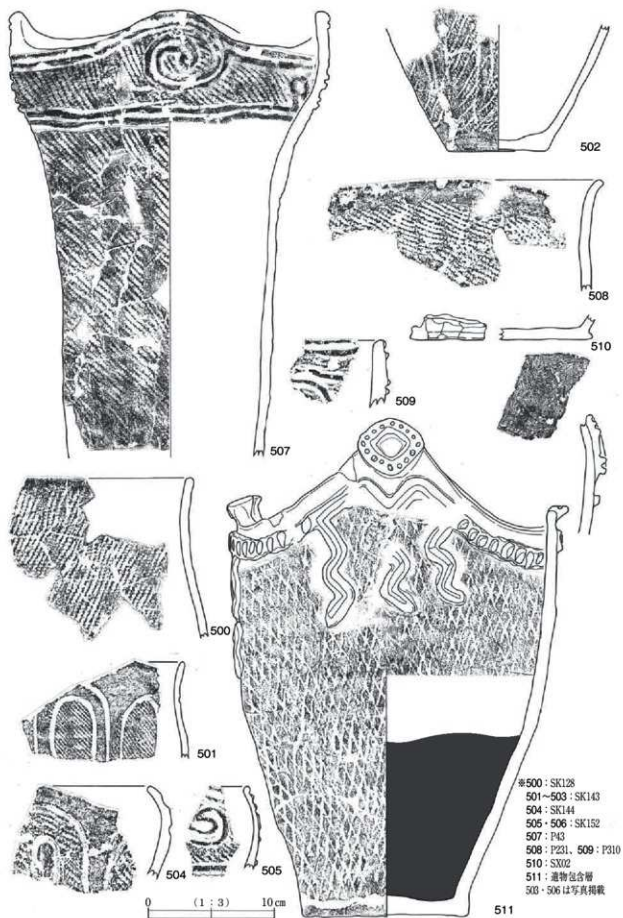




第162图 土器 (42)

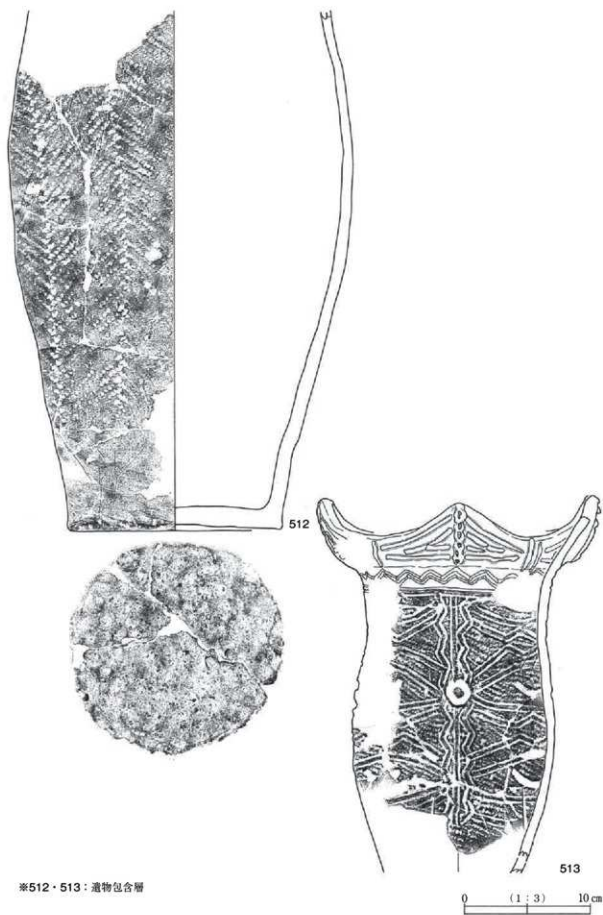


第163図 土器(43)

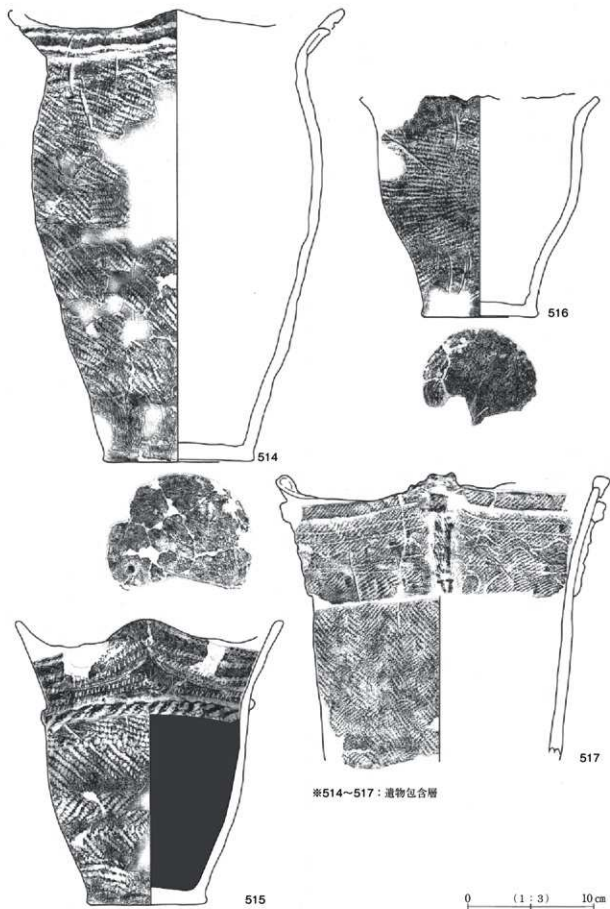


- #500 : SK128
- 501~503 : SK143
- 504 : SK144
- 505・506 : SK152
- 507 : P43
- 508 : P231, 509 : P310
- 510 : SX02
- 511 : 遺物包含層
- 503・506 は写真掲載

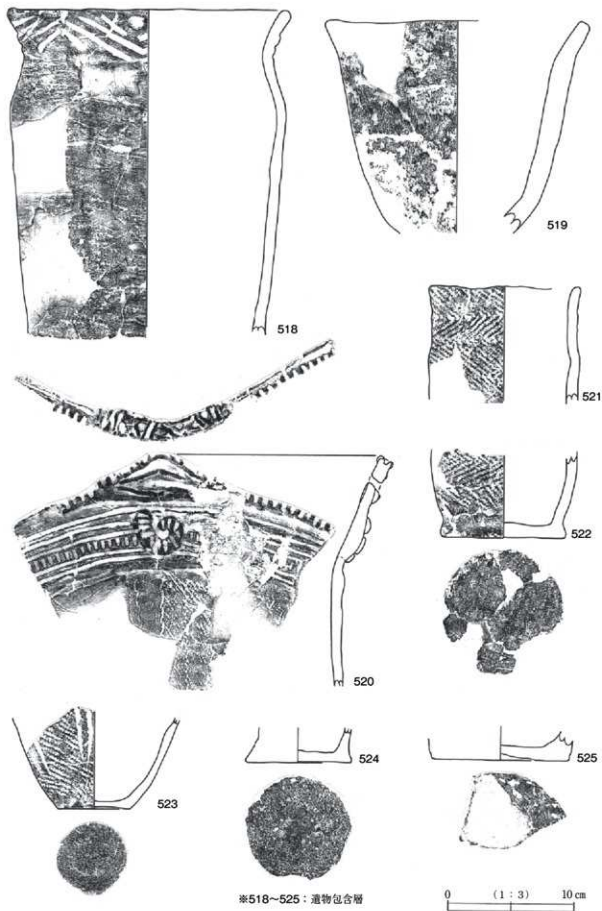
第164図 土器 (44)



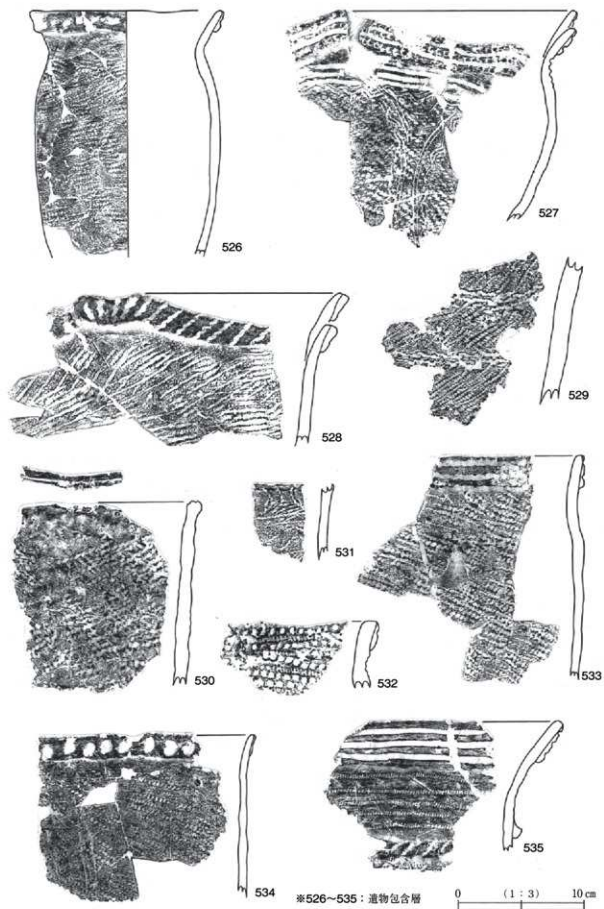
第165図 土器(45)



第166図 土器 (46)



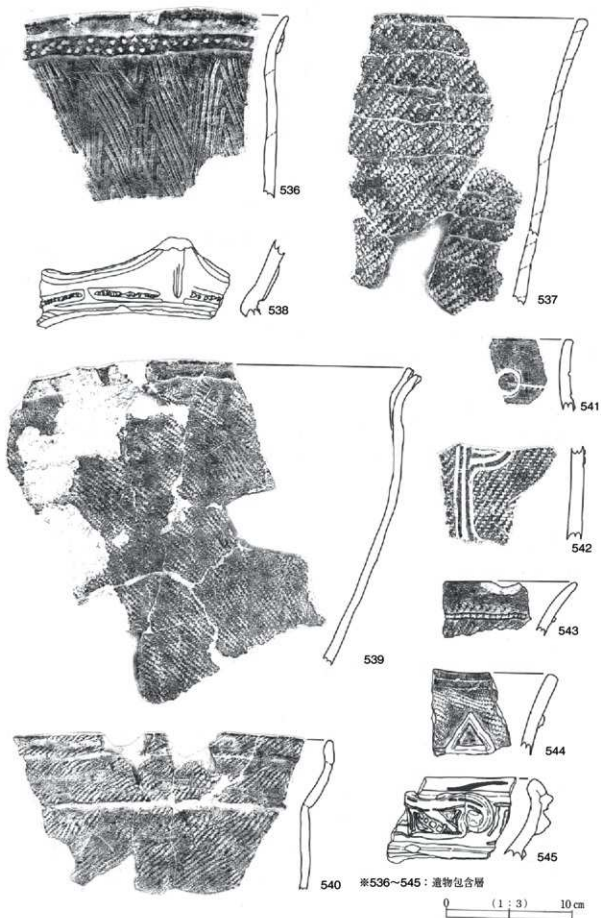
第167図 土器(47)



※526~535: 遺物包含層

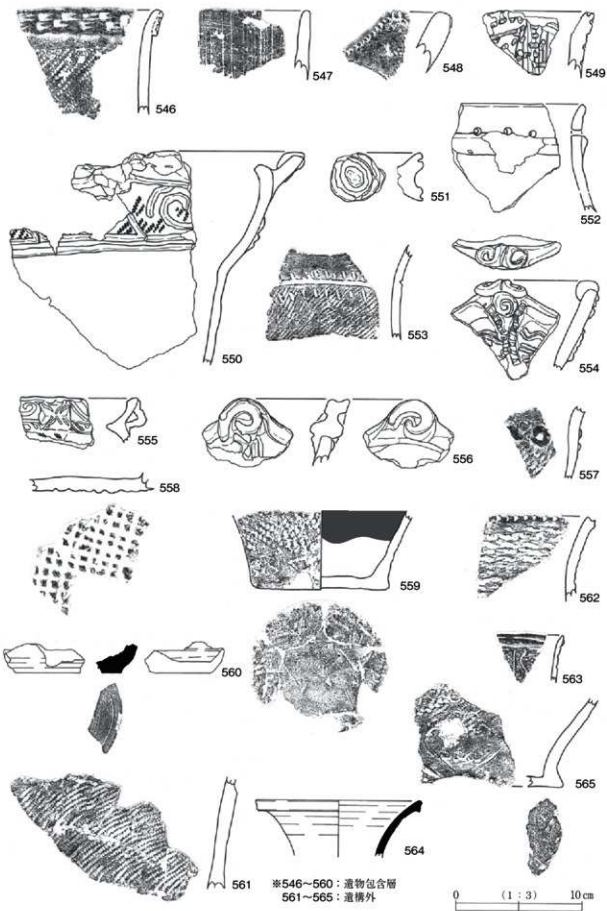
0 (1:3) 10cm

第168図 土器(48)

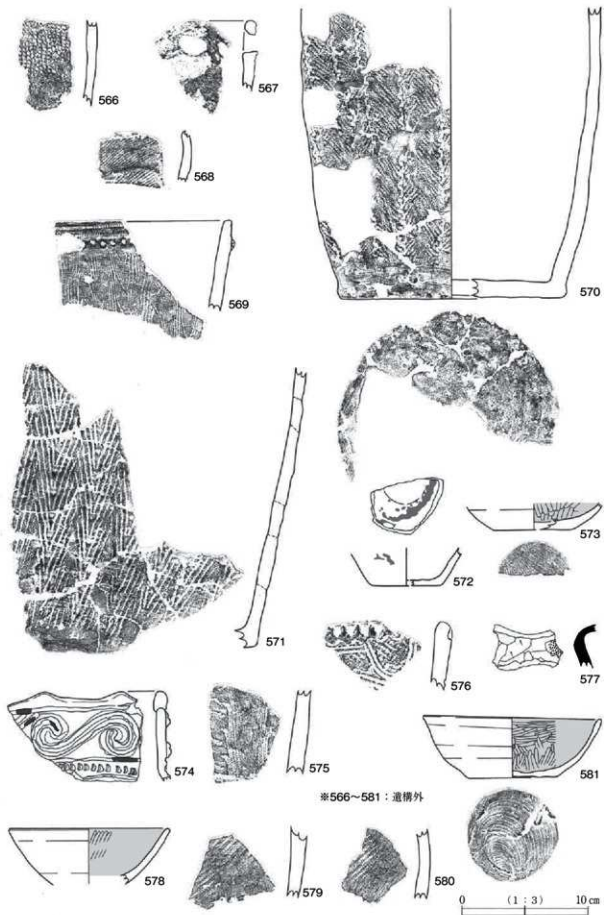


第169図 土器(49)

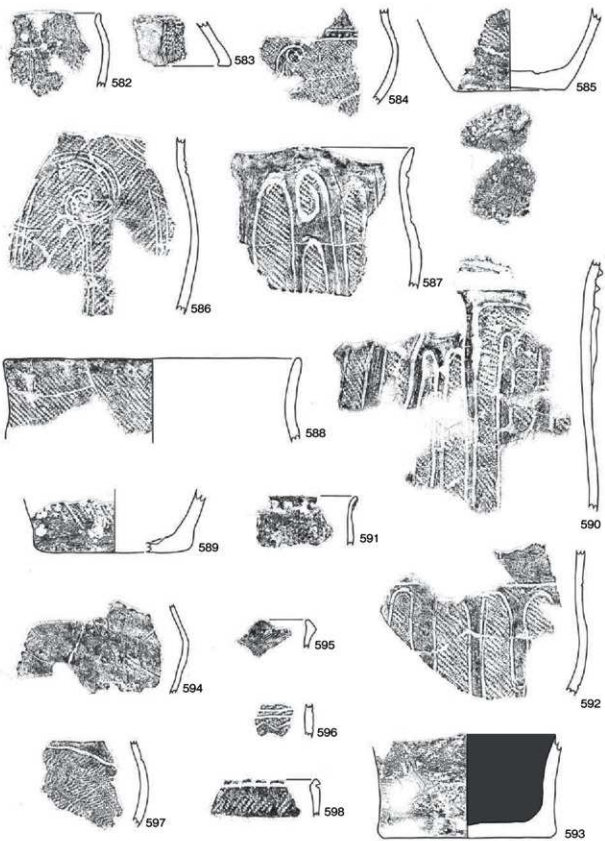




第170図 土器 (50)



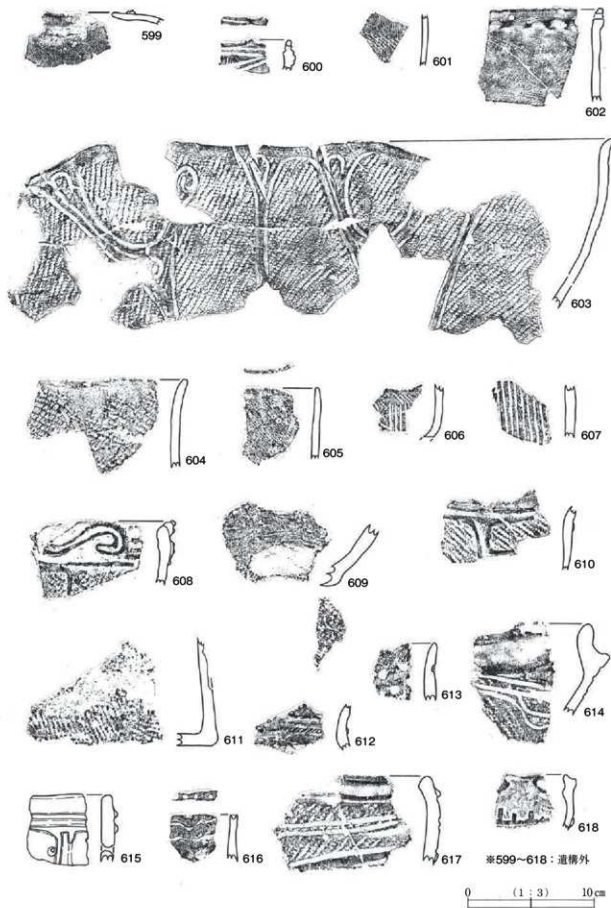
第171図 土器(51)



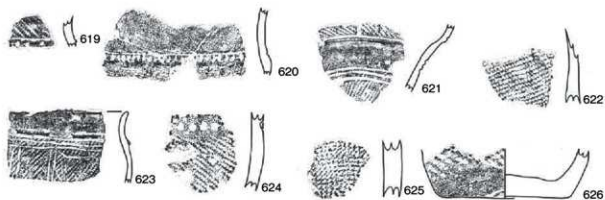
※582～598：遺構外

0 (1:3) 10 cm

第172図 土器(52)



第173図 土器(53)



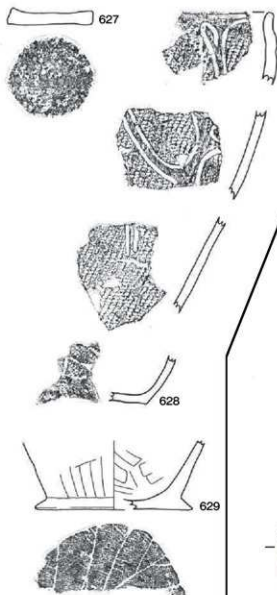
※以下写真掲載

630 : SI03, 631・632 : SXW03, 633 : SF07

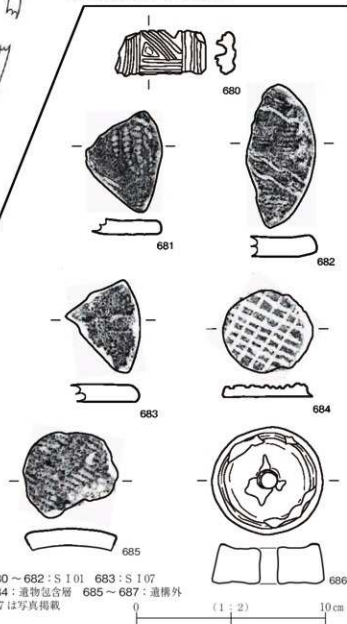
634 : SF08, 635 : SF17, 636 : SK107

637 : SK119, 638 : SK141・144, 639 : P279

640 : SX04, 641~679 : 遺構外



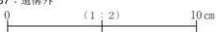
※619～629：遺構外



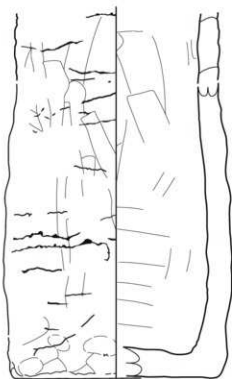
※680～682 : S I 01 683 : S I 07

684 : 遺物包含層 685～687 : 遺構外

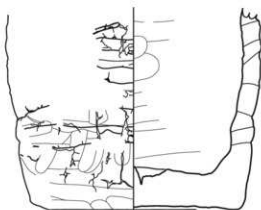
687 は写真掲載



第174図 土器 (54)・土製品



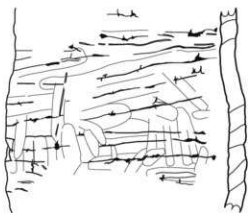
688



689



690

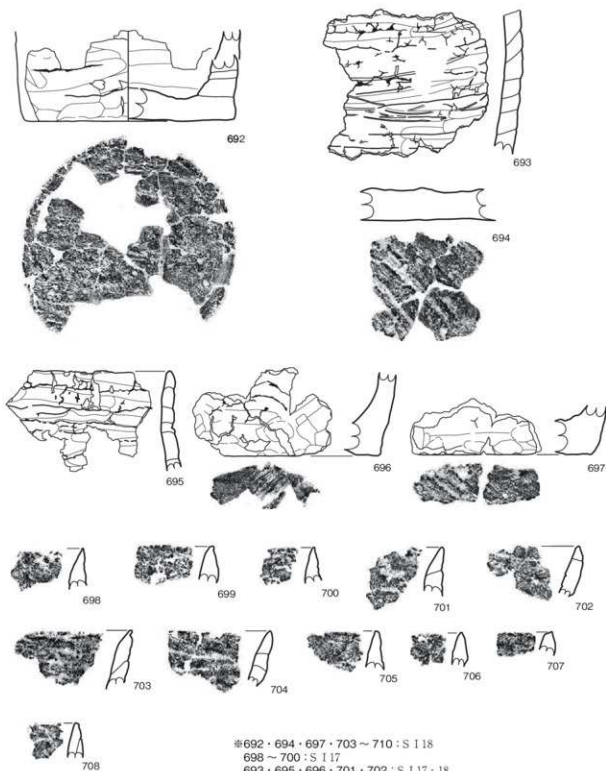


691

\*688 ~ 691 : S 117・18

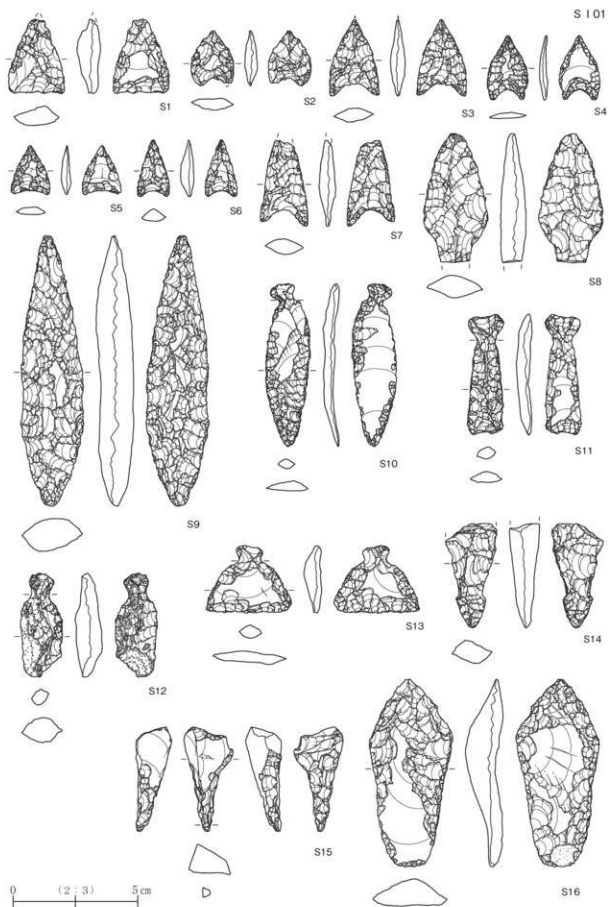


第175図 製塩土器(1)



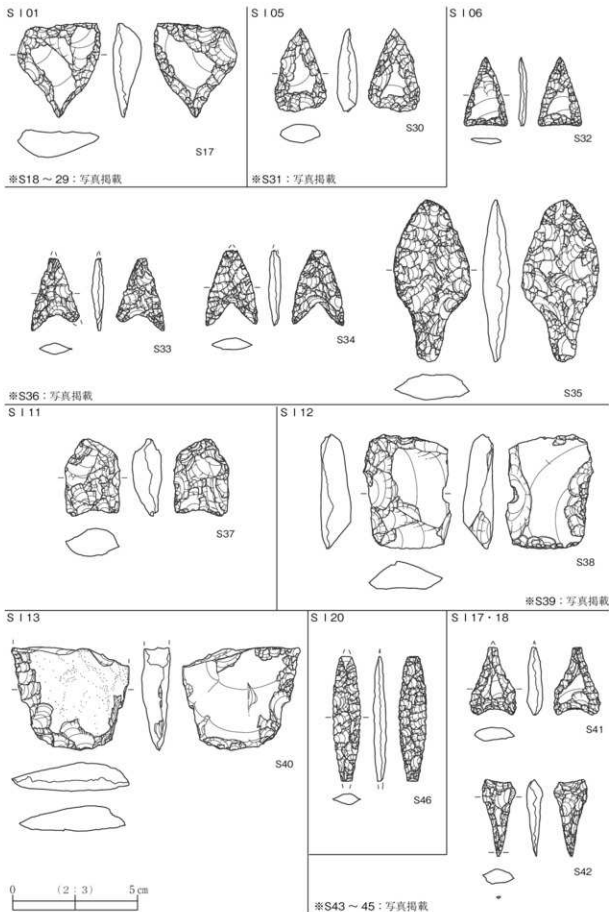
0 (1:3) 10 cm

第176図 製塩土器(2)



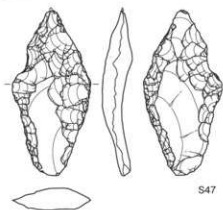
第 177 図 剥片石器 (1)



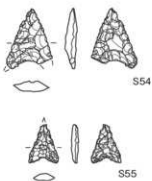


第178図 剥片石器(2)

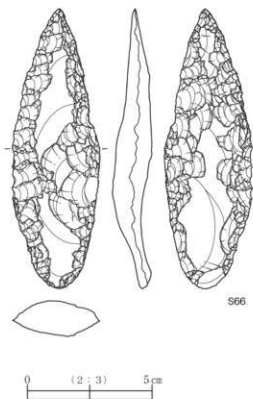
S I 22



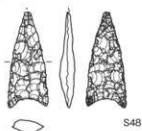
S I 47・48



S K 12



S I 37

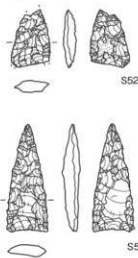


※S49・50：写真掲載

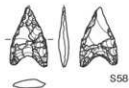
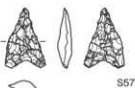
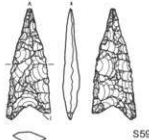
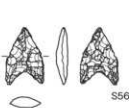
S I 42



S I 43

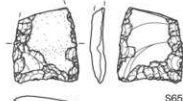
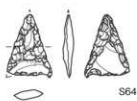


S K 07



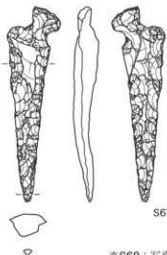
※S61～63：写真掲載

S K 10

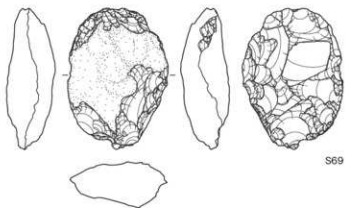


第179図 剥片石器(3)

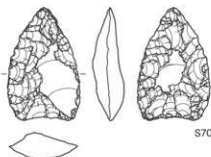
S K 52



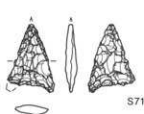
S K 54



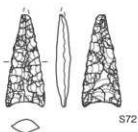
S K 70



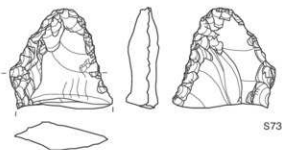
S K 72



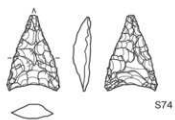
S K 73



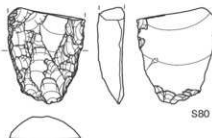
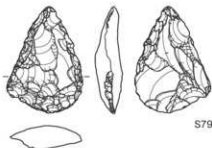
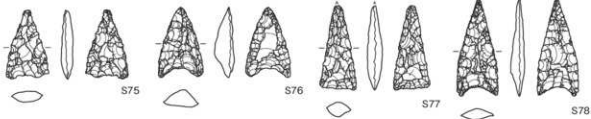
S K 143



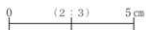
P 171



遺物包含層

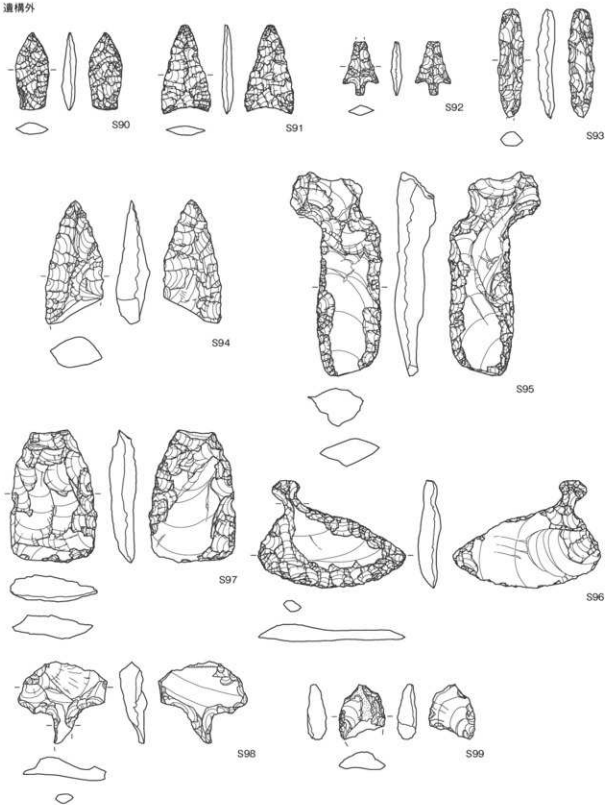


※S81～89: 写真掲載



第 180 図 剥片石器 (4)

遺構外



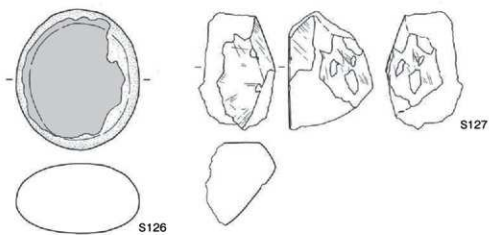
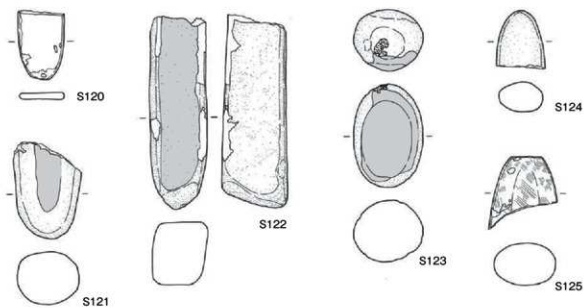
※写真掲載

S100・101:S I 07 S102:S I 24 S103:S I 35 S104:S I 55

S105~119:遺構外

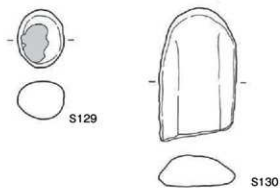
0 (2:3) 5cm

第181図 剥片石器(5)



S101  
S102

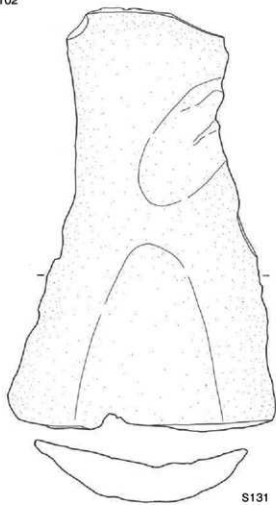
※S128: 写真掲載



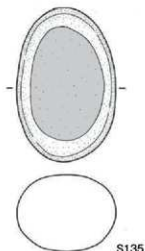
0 (1:3) 10cm

第182図 礫石器・石製品(1)

SI02



SI07

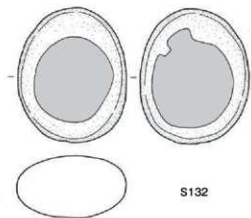


S135

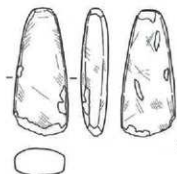


S136

SI06

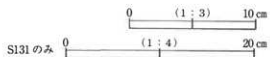


S132



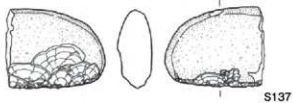
S133

\*S134 : 写真掲載



第 183 図 礫石器・石製品 (2)

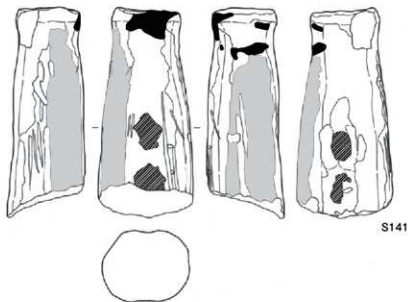
SI07



S137

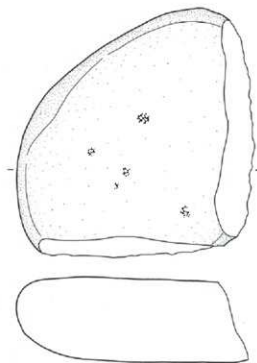
※138~140: 写真掲載

SI11



S141

SI12



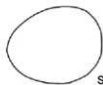
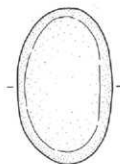
S142

SI15

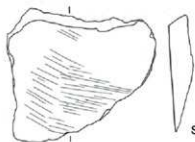


S143

SI16



S144

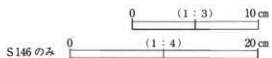
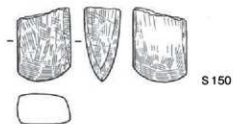
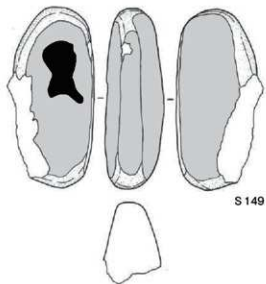
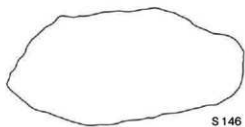
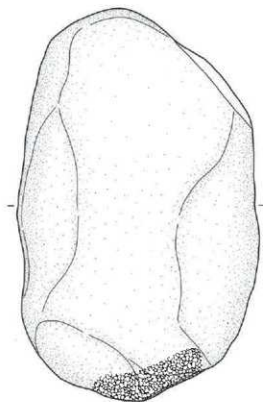
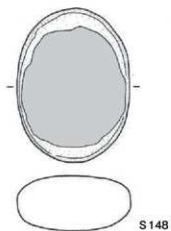
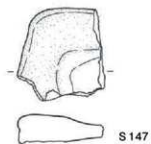


S145

0 (1:3) 10cm

第184図 礫石器・石製品(3)

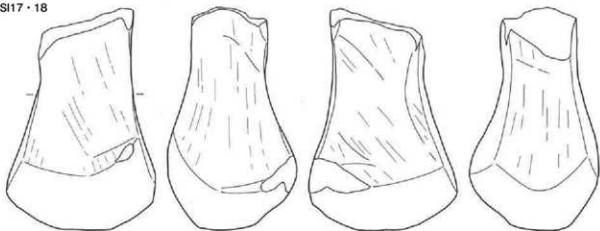
SI17・18



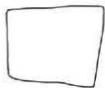
第185図 礫石器・石製品(4)



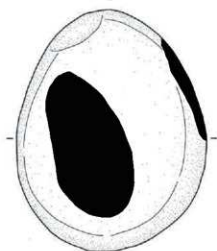
SI17・18



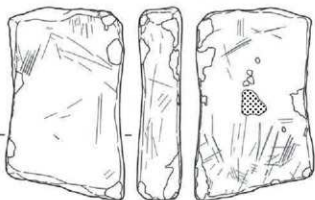
S151



SI20



S152



S153

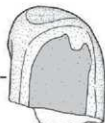


SI33・34



S154

SI37



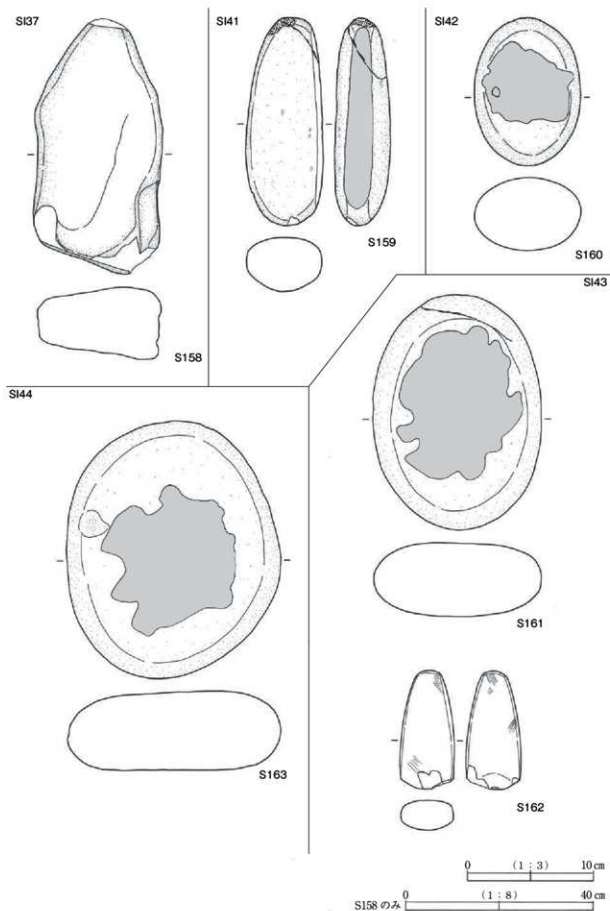
S157

※S155・156：写真掲載

0 (1:3) 10 cm

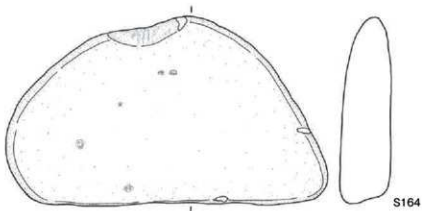
SI22のみ 0 (1:4) 20 cm

第186図 礫石器・石製品(5)

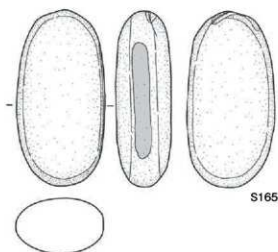


第187図 礫石器・石製品(6)

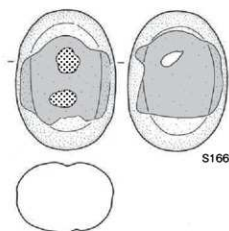
S144



S164



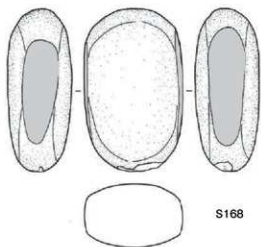
S165



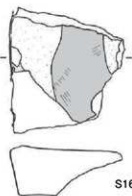
S166

※S167: 写真掲載

S147



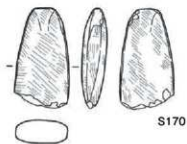
S168



S169



S171

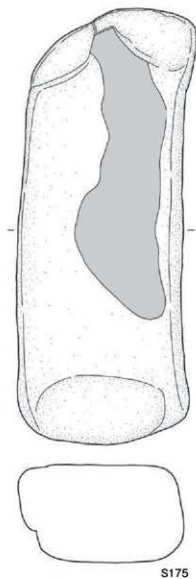


S170

0 (1:3) 10 cm

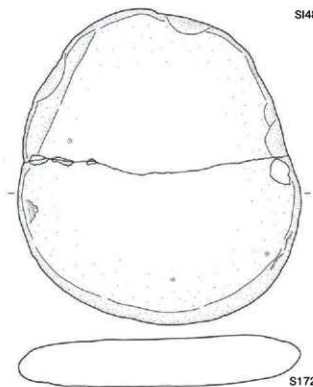
第188図 礫石器・石製品(7)

SI51



SI75

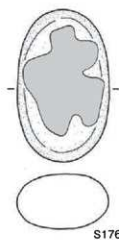
SI48



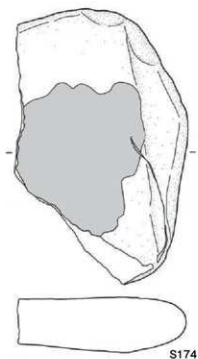
SI72

※SI73：写真掲載

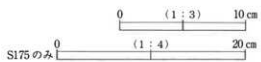
SI50



SI76

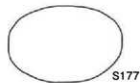
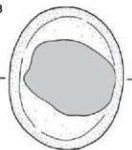


SI74

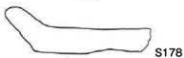


第189図 礫石器・石製品(8)

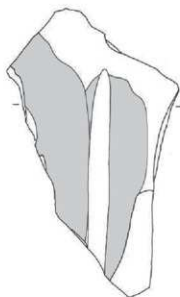
S153



S177



S178

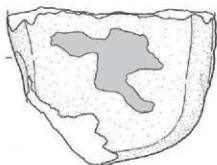


S181

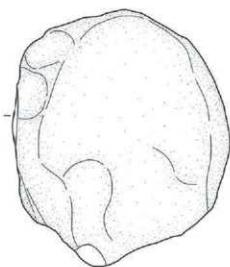
S154・55



S180



S182



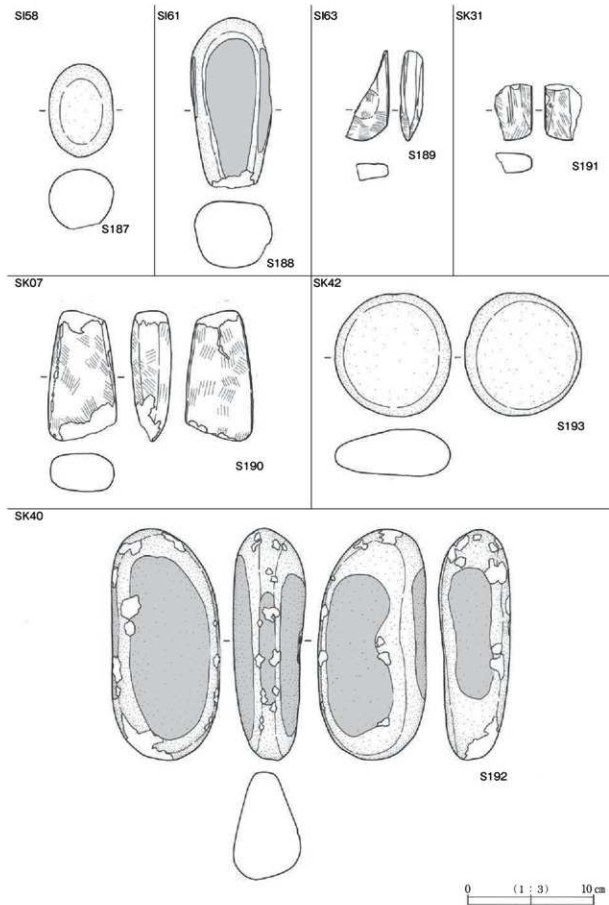
S183

※S179・184~186:写真掲載

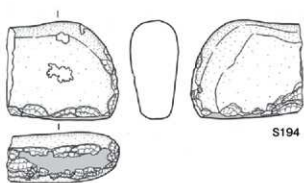
0 (1:3) 10cm

S181・183 0 (1:4) 20cm

第190図 礫石器・石製品(9)

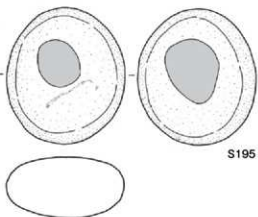


第191図 礫石器・石製品 (10)

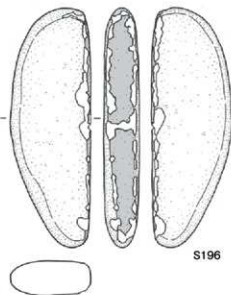


S194

SK67  
SK70

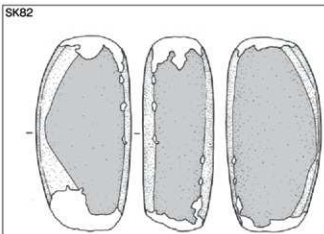


S195



S196

SK80



SK82

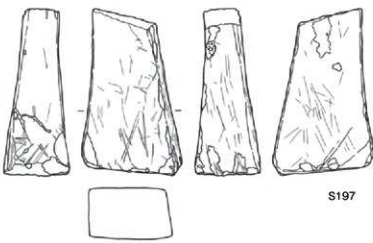
S198



S199

SK117

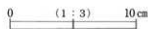
SK120



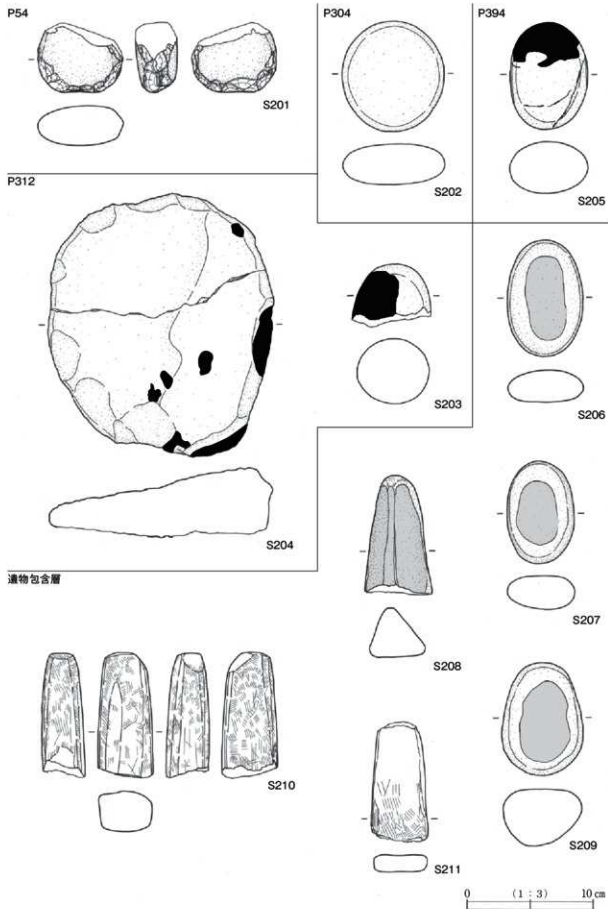
S197



S200



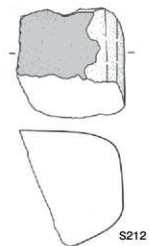
第 192 図 礫石器・石製品 (11)



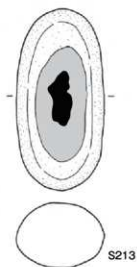
遺物包含層

第 193 図 礫石器・石製品 (12)

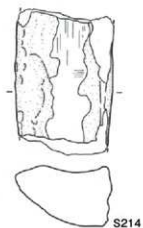




S212



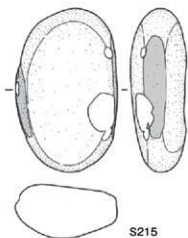
S213



S214



S217



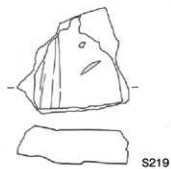
S215



S218

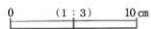


S216



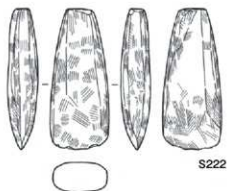
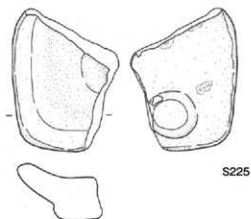
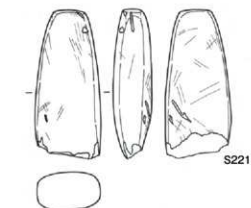
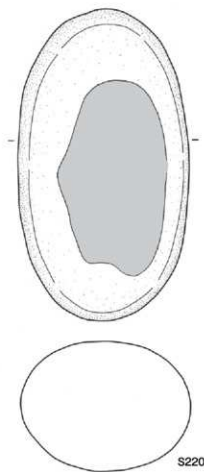
S219

遺構外



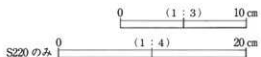
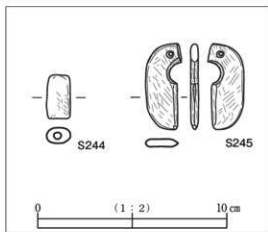
第 194 図 礫石器・石製品 (13)

遺構外

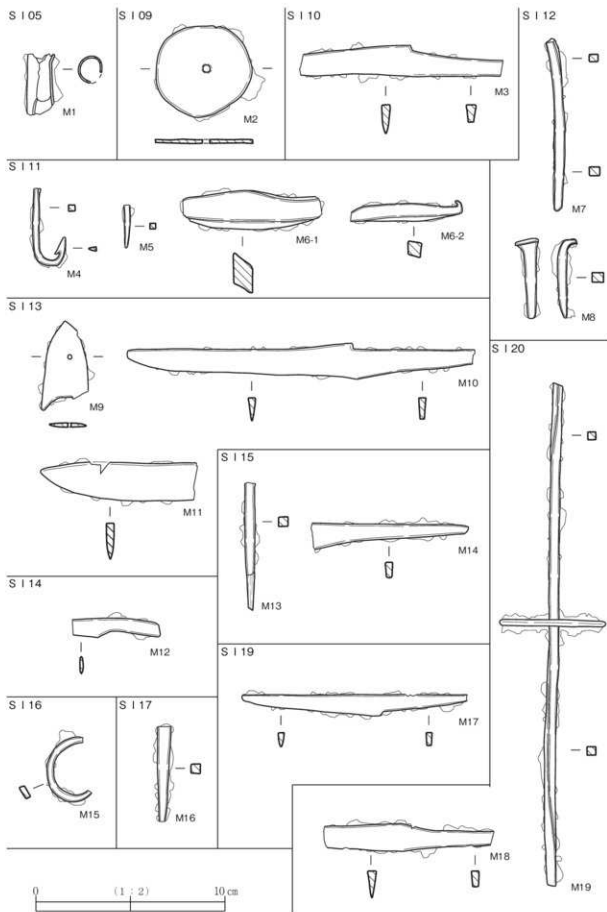


写真掲載

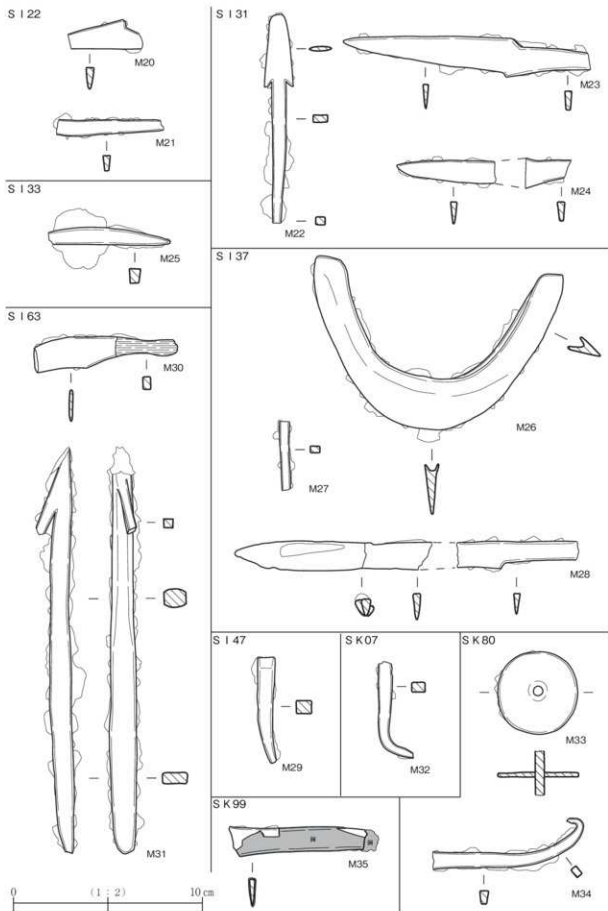
S226 : SI05, S227・S228 : SI13, S229 : SI23  
 S230 : SI24, S231 : SI59, S232 : SK21  
 S233 : SK86, S234 : SK122, S235 : SK125  
 S236 : P314, S237~243 : 遺構外



第 195 図 礫石器・石製品 (14)

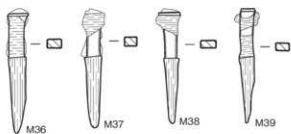


第 196 図 金属製品 (1)



第 197 図 金属製品 (2)

S K 102

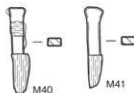


M36

M37

M38

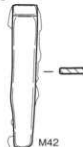
M39



M40

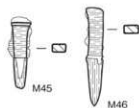
M41

S K 115



M42

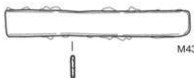
S X 02



M45

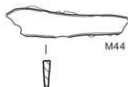
M46

P 206



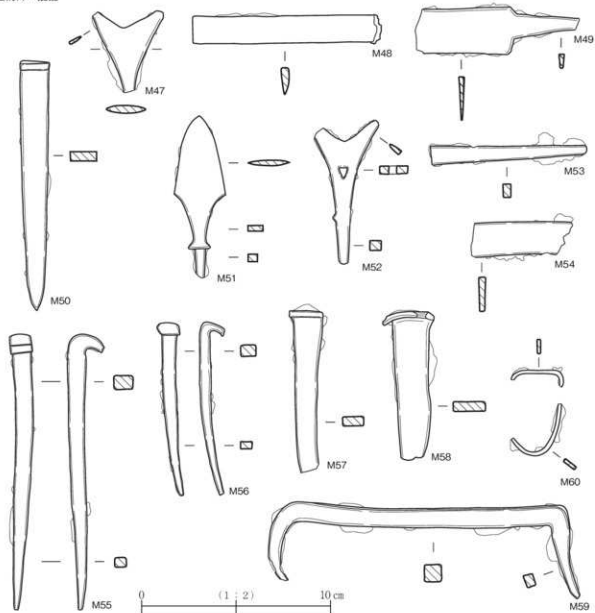
M43

P 334



M44

遺構外・攷査



第 198 図 金属製品 (3)

SK99



SI301



SI33・34



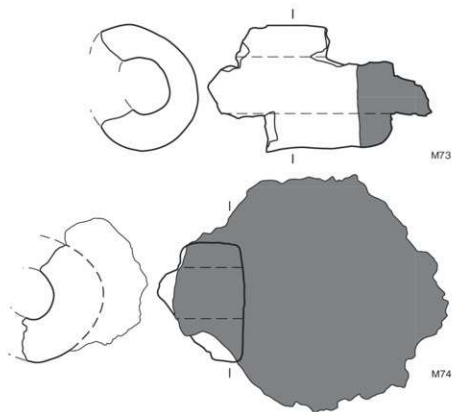
遺構外



※M69～71：写真掲載  
※M72：表掲載

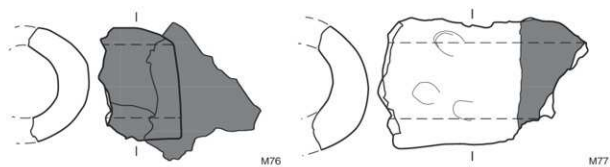
第199回 銭貨

S 111

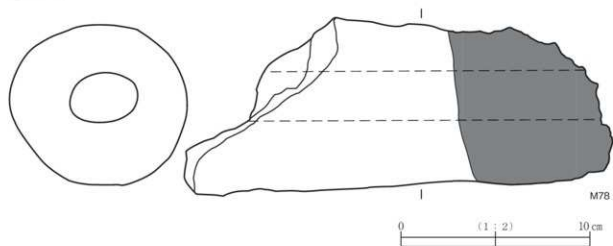


※M75：写真掲載

S 112

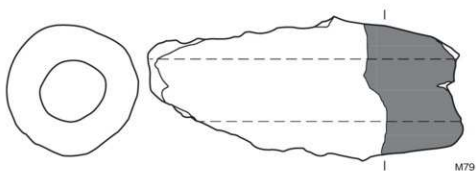


S 117・18



第 200 図 羽口 (1)

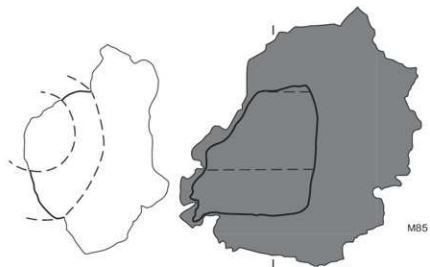
S I 17・18



M79

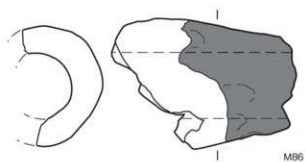
※M80～84：写真掲載

S I 22



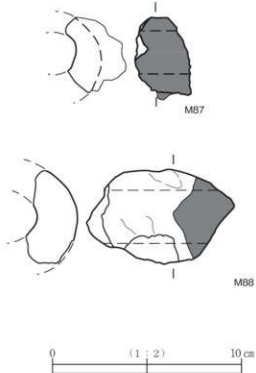
M85

S I 25



M86

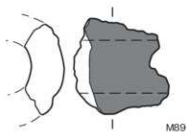
S I 31



M87

M88

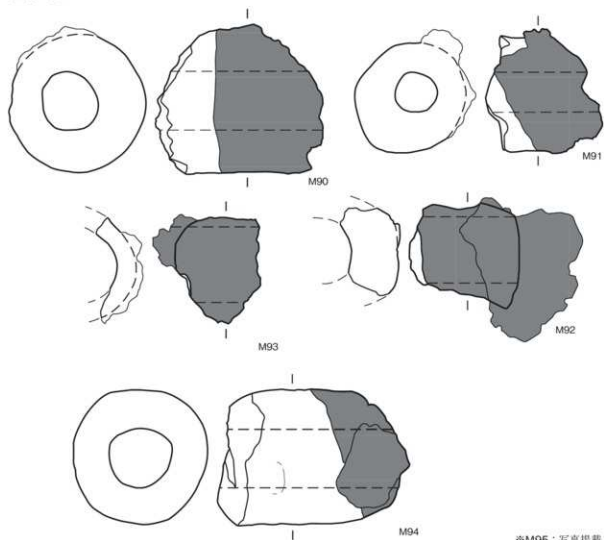
S I 33・34



M89

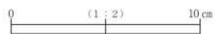
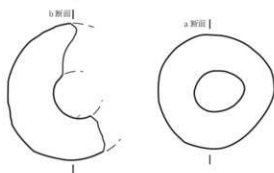
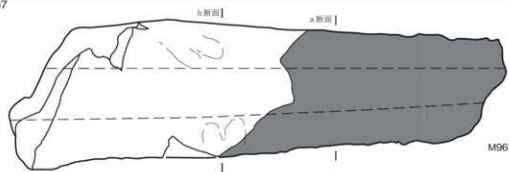
第 201 図 羽口 (2)



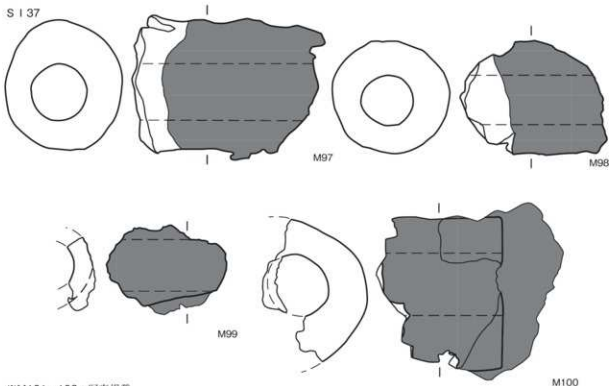


※M95：写真掲載

S | 37



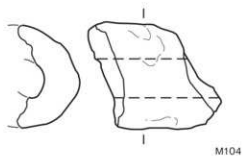
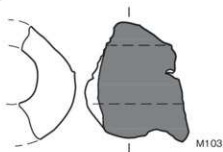
第202図 羽口(3)



※M101・102：写真掲載

S X W01

S K 21



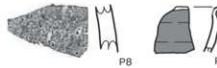
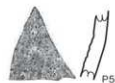
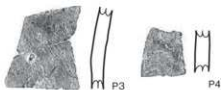
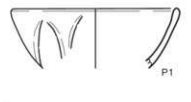
※写真掲載 M105：S104

第203図 羽口(4)

0 (1:2) 10 cm

P312 (S B05)

遺構外・攪乱



※P10～38：写真掲載

0 (1:3) 10 cm

第204図 陶磁器

第8表 土器観察表

相模 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調整・支様 (外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No.
1	縄文土器	埴輪形深鉢	IV群	S01 南東区	埴輪土上・上位	27.3	32.9	13.9	口～底部	埴輪土上→底帯→花威→北風	コゲ	121	136
2	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南東区北ベルト	埴輪土上～下位	22.6	28.7	11.8	口～底部	結東・埴輪土上→底帯→花威・竹筒刺突		121	136
3	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南東区・北西区隅	埴輪土上～下位	24.7	[26.8]	-	口～胴部	結東・埴輪土上→底帯→花威 (平・山)		121	136
4	縄文土器	埴輪形深鉢	IV群	S01 北西区隅	埴輪土上・一括	[22.0]	[22.0]	-	口～胴部	結東 L.R.→底帯→花威 (平・山)		122	136
5	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北西区隅	S06 直下埴輪土	[22.0]	25.9	9.8	口～底部	木目状刺突文		122	136
6	縄文土器	深鉢	II群	S01 南西区	埴輪土上～下位	24.1	[30.2]	-	口～胴部	L.R.→底帯→底付		122	127
7	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南西区北ベルト	埴輪土上～下位	[27.7]	29.0	11.7	口～底部	R.L.・R.・車輪跡全体→花威・底帯・突起		123	127
8	縄文土器	埴輪形深鉢	IV群	S01 南西区	埴輪土・黒色土	-	[10.5]	12.0	胴～底部	埴輪土上? / L.R. /		123	127
9	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南西区	埴輪土上～下位	-	[19.7]	14.4	胴～底部	L.R. /	コゲ	123	127
10	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南西区	埴輪土上～下位	-	[17.1]	-	胴部	埴輪 R.L. /		123	127
11	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北ベルト	埴輪土上～下位	-	[11.9]	13.9	胴～底部	埴輪 R.L. /		124	127
12	縄文土器	深鉢	I群?	S01 北西区	S06 直下埴輪土	(15.7)	[19.3]	-	口～胴部	R.L.→底帯? /		124	127
13	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北ベルト	埴輪土上～下位	-	[18.3]	(14.1)	胴～底部	結東引捺 /		124	127
14	縄文土器	深鉢	II群	S01 北面晩土	直上	19.4	16.1	-	口～胴部	ケズリ→粗紐 /		124	128
15	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北面晩土	直上	(8.7)	[12.7]	-	口～胴部	渡状口縁・非結東 R? /		124	128
16	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北面隅	埴輪土上・黒色土	-	-	-	口～胴部	埴輪土上? /		124	128
17	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南西区北ベルト	埴輪土上～下位	-	-	-	口～胴部	車輪跡全体 1 A 順→渡状口縁・聖体押止 /		125	128
18	縄文土器	深鉢	IV群	S01 中央ベルト・北西区	埴輪土上～下位	-	-	-	胴部	粗紐? /		125	128
19	縄文土器	深鉢	IV群	S01 中央ベルト	埴輪土上	-	-	-	口～胴部	粗紐? /		125	128
20	縄文土器	深鉢	IV群	S01 南西区	埴輪土上	-	-	-	口縁部	L.R.→底帯・把手→キヤミ・R.L. /		126	128
21	縄文土器	深鉢	I群	S01 北西区北側付石・北面晩土	埴輪土上	-	-	-	口～胴部	粗紐? /		126	128
22	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北西区	埴輪土下位	-	-	-	口～胴部	埴輪 R.L. /	コゲ	126	128
23	縄文土器	深鉢	-	S01 中央ベルト中央・北西区	埴輪土下位 (S06 直下里堀)	-	[7.0]	(13.0)	胴～底部	L.R. /	コゲ	126	128
24	縄文土器	深鉢	-	S01 中央ベルト	S06 直下・埴輪土	-	[2.8]	(10.3)	底部	ナマ /		126	128
25	縄文土器	深鉢	-	S01 北西区	埴輪土上～下位	-	[3.7]	8.6	底部	L.R.? /		126	128
26	縄文土器	深鉢	II群	S01 北西区	S06 直下・黒色土	-	-	-	口～胴部	木目状刺突文 /		126	129
27	縄文土器	深鉢	IV群	S01 北西区	埴輪土	-	-	-	口～胴部	木目状刺突文 /	コゲ	127	129
28	縄文土器	深鉢	I群	S01 東ベルト	埴輪土最下位	-	-	-	口～胴部	L.R. /		127	129
29	縄文土器	埴輪形深鉢	IV群	S01 北ベルト	埴輪土上～下位	-	-	-	口～胴部	L.R.?・花威 /	コゲ	127	129
30	縄文土器	深鉢	I群	S01 北西区	埴輪土上	-	-	-	口～胴部	L.R.L. /		127	129

※引線箇所の「?」は推定値を示す

相模 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外周/内面)	備考	図版 No.	写真 No.
31	縄文土器	深鉢	I群	S01中央ベルト	S06直下 黒褐色土	-	-	-	口~胴部	単輪飾全体1A類/		127	129
32	縄文土器	深鉢	IV群	S01北東区	黒褐色土	-	-	-	口~胴部	木目紋赤文・沈線/		127	129
33	縄文土器	深鉢	IV群	S01南西区	黒褐色土・中位一括	-	-	-	口~胴部	L R→器底→沈線(平・山)/		127	129
34	縄文土器	深鉢	I群	S01北西区	S06直下 黒褐色土	-	-	-	口~胴部	赤糸文/		128	129
35	縄文土器	深鉢	IV群	S01北東区	黒褐色土下位 茶褐色	-	-	-	口~胴部	R L・條帶/		128	129
36	縄文土器	深鉢	IV群	S01南西区	黒褐色土下位	-	-	-	口~胴部	赤糸文・沈線(山)/		128	129
37	縄文土器	深鉢	I群?	S01北ベルト	黒褐色土	-	-	-	胴部	組紐/	ススコゾク	128	130
38	縄文土器	深鉢	IV群	S01南東区	黒褐色土	-	-	-	口縁部	原形押圧/		128	130
39	縄文土器	深鉢	IV群	S01北東区	黒褐色土下位 茶褐色	-	-	-	胴部	沈線・彫影刺突/		128	130
40	縄文土器	深鉢	-	S01北西区	黒褐色土下位一括・S06直下 黒褐色土	-	-	-	口~胴部	組紐?/	大部分剥落	128	130
41	縄文土器	深鉢	III群	S01北西区	黒褐色土上位 黒褐色土	-	-	-	胴部	沈線→刺突/		128	130
42	縄文土器	深鉢	I群	S01北西区・北層付寄・ 床面焼土	黒褐色土・直上	-	-	-	口~胴部	組紐?/		128	130
43	縄文土器	深鉢	I群	S01北東区	床面焼土	-	-	-	口~胴部	R L/	スス	128	130
44	縄文土器	深鉢	-	S01南東区	黒褐色土上位・黒褐色土下位 茶 褐色土	-	-	-	胴部	単輪飾全体1A類/		128	130
45	縄文土器	深鉢	I群	S01床面焼土	直上	-	-	-	口~胴部	履帯・口縁部押圧/		129	130
46	縄文土器	深鉢	I群	S01ベルト中央部	黒褐色土	-	-	-	口~胴部	非結束羽状・原形押圧/		129	130
47	縄文土器	深鉢	-	S01中央	床面焼土	-	-	-	口縁部	履帯?/		129	130
48	縄文土器 透 彫 影 深 鉢?	深鉢	IV群	S01北ベルト	黒褐色土上位	-	-	-	口縁部	縄文・口縁端部沈線/		129	130
49	縄文土器	深鉢	IV群	S01北東区	黒褐色土下位 茶褐色土	-	-	-	口縁部	流状口縁・組紐?→ケズリ/	スス	129	130
50	縄文土器	深鉢	-	S01北西区	黒褐色土上~中位	-	-	-	口~胴部	R L?/		129	130
51	縄文土器	深鉢	I群	S01北西区	S06直下 黒褐色土	-	-	-	口縁部	木目紋赤文/		129	130
52	縄文土器	深鉢	I群	S01北東区	床面付寄	-	-	-	口~胴部	大波状口縁・羽状縄文R L/		129	130
53	縄文土器	深鉢	IV群	S01北東区	床面付寄	-	-	-	胴部	単輪飾全体R/	スス	129	130
54	縄文土器	深鉢	IV群	S01南東区	黒褐色土	-	-	-	口縁部	條帶・ケズリ/		129	130
55	縄文土器	深鉢	IV群	S01南東区	黒褐色土	-	-	-	胴部	原形押圧/		129	130
56	縄文土器	深鉢	III群	S01南東区	黒褐色土	-	-	-	胴部	半波状口縁・貼付文/		129	130
57	縄文土器	深鉢	-	S01-P02	黒褐色土	-	-	-	胴部	R L/		129	130
58	縄文土器	深鉢	-	S01-P03	黒褐色土	-	-	-	胴部	木目紋赤文/		129	130
59	縄文土器	深鉢	-	S01南東区	黒褐色土上部	-	-	-	胴部	羽状縄文R L/		130	131
60	縄文土器	母刷付深鉢	IV群	S01北東区	黒褐色土	-	-	-	胴部	単輪飾全体L→沈線・折部押圧/		130	131

掲載 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外側/内側)	備考	図版 No.
61	縄文土器	深鉢	IV群 S03 北西区	地積土上位 黒褐色土	-	-	-	-	口縁部	沈線・L・R? /		130
62	縄文土器	深鉢	S03 北西区	S06 直下 黒褐色土	-	-	-	-	口縁部	単純結末体?・刺突 /		130
63	縄文土器	深鉢	- S03 南西区	地積土中位	-	-	-	-	口縁部	刺突 /		130
64	縄文土器	深鉢	IV群 S01	黒色土	-	-	-	-	胴部	貼付文→沈線→指頭圧痕 /		130
65	縄文土器	深鉢	IV群 S01	黒色土	-	-	-	-	口縁部	沈線・爪形刺突 /		130
66	縄文土器	深鉢	I群 S03 北西区	S03 直下 黒褐色土	-	-	-	-	胴部	結頭 R.L.→珠部→爪形刺突・沈線 /		130
67	縄文土器	深鉢	- S03 北西区	S06 直下 褐色土	-	-	-	-	口縁部	組紐? /	スス	130
68	縄文土器	深鉢	- S03 北西区	S06 直下 褐色土	-	-	-	-	口縁部	沈線・半散竹管刺突 /		130
69	縄文土器	深鉢	IV群 S01 北西区	S06 直下 褐色土	-	-	-	-	口縁部	貼付→沈線 (平・山)・刺突 /	把手欠落	130
70	縄文土器	深鉢	IV群 S01	I層	-	-	-	-	口縁部	L・R・沈線 (山)・原始押圧 /	円形貼付文残部	130
71	縄文土器	深鉢	II群 S01	地積土中位	-	-	-	-	口縁部	組紐? /	スス	130
72	縄文土器	深鉢	I群 S03 東ベルト	地積土上位	-	-	-	-	口縁部	組紐? /		130
73	縄文土器	深鉢	IV群 S01 北ベルト	地積土	-	-	-	-	口縁部	R.L.・R /		130
74	縄文土器	深鉢	- S03 北ベルト	地積土	-	-	-	-	口縁部	沈線・刺突 /		130
75	縄文土器	深鉢	II群 S03 東ベルト	地積土中位	-	-	-	-	胴部	L?・円形文 /		130
76	縄文土器	深鉢	- S01	黒色土	-	-	-	-	口縁部	刺突文 /	継ぎ孔・コブ	130
77	縄文土器	深鉢	II群 S03 北西区	地積土上位 黒褐色土	-	-	-	-	口縁部	非結末体・原始押圧 /		130
78	縄文土器	深鉢	IV群 S01 北西区	地積土	-	-	-	-	口縁部	沈線 (平)・爪形刺突 /		131
79	縄文土器	深鉢	IV群 S03 南西区	S06 直上 褐色土	-	-	-	-	胴部	沈線 (弧状) /		131
80	縄文土器	深鉢	- S01	黒色土	-	-	-	-	口縁部	ナブ /		131
81	縄文土器	深鉢	IV群 S03 北ベルト	地積土中位	-	-	-	-	口縁部	R.L.→沈線 /		131
82	縄文土器	深鉢	S01 北ベルト	地積土中位	-	-	-	-	口縁部	R.L.→貼付文→刺突 /		131
83	縄文土器	深鉢	IV群 S03 南西区	地積土中位	-	-	-	-	口縁部	無文 /		131
84	縄文土器	深鉢	IV群 S03 中央区	地積土上位	-	-	-	-	口縁部	沈線 (平)・押し引き /		131
85	縄文土器	深鉢	IV群 S01 中央区	地積土上位	-	-	-	-	口縁部	口縁部貼付→押圧 /		131
86	縄文土器	深鉢	I群? S01 中央区	地積土上位	-	-	-	-	胴部	羽状線文 R.L. /		131
87	縄文土器	深鉢	II群 S03 南西区	地積土上位	-	-	-	-	口縁部	無文 /		131
88	縄文土器	深鉢	- S01 中央ベルト	地積土下位	-	-	-	-	口縁部	貼付文 /		131
89	縄文土器	深鉢	IV群 S01 南西区	地積土上位	-	-	-	-	口縁部	隆沈線 /		131
90	縄文土器	深鉢	II群 S03 南西区	9層以下	-	-	-	-	胴部	貼付文 /		131
91	縄文土器	深鉢	I群 S03 南西区	地積土中位	-	-	-	-	胴部	無筋? /		131
92	縄文土器	深鉢	II群 S01	黒色土	-	-	-	-	口縁部	沈線 (平)・押し引き・貼付文 /		131
93	縄文土器	深鉢	IV群 S01	黒色土	-	-	-	-	口縁部	沈線 (平)・押し引き・貼付文 /		131
94	縄文土器	深鉢	IV群 S03 北西区	地積土	-	-	-	-	胴部	羽状線文 R.L.・隆沈線 /		131

相続 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外周/内面)	備考	図版 No.	写真 No
95	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 北西区	地積土	-	-	-	胴部	無銘・沈泥		131	132
96	縄文土器	豆柄形深鉢	Ⅳ群	S101 南東区・北東区	地積土上部	-	-	-	口縁部	沈泥・貼付文		131	132
97	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 南東区	地積土下位 茶褐色土	-	-	-	胴部	無銘→沈泥		131	132
98	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 南東区	地積土下位 茶褐色土	-	-	-	胴部	無銘→貼付文		131	132
99	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 北西区	S106 直下 黒褐色土	-	-	-	胴部	無銘→貼付・削突	中空突起	132	132
100	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 北西区	S106 直下 黒褐色土	-	-	-	口縁部	縄文→沈泥・削突		132	132
101	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 ベルト中央部	地積土	-	-	-	口縁部	沈泥 (黒)		132	132
102	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 北ベルト	地積土中位	-	-	-	胴部	無銘・沈泥		132	132
103	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 中央ベルト	S106 直下 地積土	-	-	-	口～胴部	縄文→貼付文		132	132
104	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 東ベルト	地積土中位	-	-	-	胴部	縄文→貼付文		132	132
105	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101	黒色土	-	-	-	口縁部	無文		132	132
106	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101	黒色土	-	-	-	口縁部	竹管文		132	132
107	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 北西区	地積土上～中位	-	-	-	胴部	縄文→貼付文		132	132
108	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101-P20	地積土上～中位	-	-	-	口縁部	貼付文		132	132
109	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 ベルト中央部	地積土	-	-	-	胴部	無銘?→貼付		132	132
110	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 ベルト中央部	地積土	-	-	-	口縁部	貼付文		132	132
111	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 床部焼土	直上	-	-	-	胴部	無銘→貼付文		132	132
112	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 東ベルト	地積土上位	-	-	-	胴部	削突・沈泥		132	132
113	縄文土器	深鉢	-	S106 東ベルト	地積土	[4.2]	(4.48)	-	底部	L.R.		132	132
114	縄文土器	深鉢	I群	S101	地積土 黒色土	-	-	-	口～胴部	結晶土層		132	132
115	縄文土器	深鉢	I群	S101 南区	地積土下位	-	-	-	口～胴部	無銘?		132	132
116	縄文土器	深鉢	-	S101 南区	地積土下位	-	-	-	胴部	無銘		133	132
117	縄文土器	豆柄形深鉢	Ⅳ群	S101 南区	地積土	-	-	-	口～胴部	L.R・沈泥		133	132
118	縄文土器	深鉢	-	S101 北西区	地積土	-	-	-	胴部	竹ひこ棒の工具使用?	コブ	133	132
119	縄文土器	深鉢	-	S101 北西区	地積土	-	-	-	胴部	結晶 L.R?		133	132
120	縄文土器	深鉢	-	S101 北区	地積土上位 黒褐色土	-	-	-	胴部	単輪輪全体		133	132
121	縄文土器	深鉢	-	S101 南区	地積土上位 黒褐色土	-	-	-	胴部	単輪輪全体?		133	132
122	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 南区	地積土	-	-	-	口縁部	結晶 L.R・沈泥		133	132
123	縄文土器	深鉢	I群? S101	地積土	地積土	-	-	-	口縁部	ナマ→竹管文		133	132
124	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 北西区	地積土中位 一柱土器	60.5	[42.6]	-	口～胴部	結束羽根縄文→貼付→沈泥		133	133
125	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S101 ベルト	地積土上位	24.7	[29.5]	-	口～胴部	付加糸巻 L + R → 貼付→沈泥 (平)		134	133
126	土師器	坏	坏 I A	S101 南東区	地積土上位	-	-	-	口～胴部	同輪ナマ/ミガサキ・黒色沈泥	黒書「」?	134	133
127	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S102 北区	地積土	-	-	-	口縁部	押し引糸		134	133
128	縄文土器	深鉢	I群	S102 北区	地積土	-	-	-	口縁部	本目状断糸文→断糸押圧		134	133

掲載 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.
129	縄文土器	深鉢	Ⅲ群	S102北区	埴積土	-	-	-	胴部	縹色? /	ススコヤ	134
130	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S102北区	埴積土	-	-	-	胴部	縹色 /	ススコヤ	133
131	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S102ベルト-S104	1層・埴積土	-	-	-	口~胴部	液状口縁・車輪状突起1A類・指頭押圧 /	赤色顔料	134
132	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S103H101	埴積土	-	-	-	口縁部	車輪状突起1A類→船付→北縁 /		134
133	縄文土器	深鉢	Ⅰ群? S103	埴積土	-	-	-	-	口縁部	木目状飾糸文・胴体押圧 /		134
134	縄文土器	深鉢	Ⅲ群	S103	埴積土	-	-	-	胴部	L.R→棒子状船付文		134
135	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S103	埴積土	-	-	-	胴部	非船束羽状 /		135
136	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S103・SK42	埴積土	-	-	-	口~胴部	R.L→指頭押圧 /		135
137	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S104	埴積土	-	-	-	口~胴部	非船束羽状・胴体押圧 /		135
138	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	S104	埴積土	-	-	-	口~胴部	船付船付文 /	ススコヤ	135
139	縄文土器	埴形深鉢	Ⅳ群	S105	埴面直上 土器 No. 1	68.2 (22.8)	22.5	12.6	口~底部	船頭L.R→北縁(平・山)	ススコヤ	135
140	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105中央区	埴積土	62.8	25.3	11.0	口~底部	半車輪状押引引き・船頭R.L /		134
141	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105中央区	埴積土	(17.8)	27.5	(13.0)	口~底部	胴体押圧・非船束羽状L.R /		136
142	縄文土器	埴形深鉢	Ⅳ群	S105	埴面直上 土器 No. 2	-	[11.7]	16.0	胴~底部	船束L.R /	コヤ	136
143	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105	埴面直上 土器 No. 3	-	[4.1]	13.4	底部	船頭L. /		136
144	縄文土器	深鉢	-	S105中央区	埴積土	-	[4.4]	[4.8]	底部	L.R /		136
145	縄文土器	埴形深鉢	Ⅳ群	S105	黒色土	-	-	-	口縁部	船頭L.R?→隆帯・内縁突起→キザミ→北縁(平・山) /	ススコヤ	136
146	縄文土器	深鉢	Ⅳ群? S105中央区	埴積土	-	[27.0]	-	-	口~胴部	船頭R.L→隆帯→キザミ→北縁(平) /		137
147	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	S105	黒色土	-	-	-	胴部	ナデ? /	縹色帯付	137
148	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105	埴積土	-	-	-	口縁部	沈線(平)・刺突 /		137
149	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105	埴積土	-	-	-	口~胴部	L.R→北縁(平)→隆帯 /		137
150	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105	埴積土	-	-	-	口縁部	沈線(平・山・短) /		137
151	縄文土器	埴形深鉢	Ⅳ群	S105南区	埴積土	-	-	-	口~胴部	羽状L.R・沈線(平)・半車輪状押突 /	船付文帯	137
152	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105南区	埴積土	-	-	-	口~胴部	船頭R.L・沈線(平・山) /		137
153	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	S105西ベルト	埴積土	-	-	-	口~胴部	木目状飾糸文・隆帯 /		137
154	縄文土器	深鉢	Ⅲ群	S105中央区	埴面直上	-	-	-	口~胴部	船頭L.R?→隆帯・刺突 /	スス	137
155	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	S105西ベルト	埴積土	-	-	-	口縁部	船頭L.R?→ナデ? /		137
156	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	S105西ベルト	埴積土	-	-	-	口~胴部	船頭L.R?→ナデ? /		137
157	縄文土器	深鉢	-	S105南西区	埴積土	-	-	-	底部	木目状飾糸文 /		137
158	土師器	坏	坏I B	S106北東区	黒色土	13.9	4.6	6.8	口~底部	同輪カザノミガサ・黒色処理	底部の輪カザノミ	138
159	土師器	坏	坏I A	S106北東区	黒色土	13.7	5.0	5.9	口~底部	同輪カザノミガサ・黒色処理	底部の輪カザノミ	138
160	土師器	坏	坏I B	S106北西区	埴積土上位 黒色土	(15.2)	5.1	6.8	口~底部	同輪カザノミガサ・黒色処理	底部の輪カザノミ	138
161	土師器	罌	罌I	S106カマド	1層	-	-	-	口縁部	ナデ / ナデ		138
162	土師器	罌	罌I	S106カマド付流	埴積土下位	-	-	-	口縁部	ハケ / ハケ		138

相模 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.
163	土師器	甕	Ⅲ群 S106	地積土		-	-	-	口縁部	ナゲ/ナゲ		138 136
164	須恵器	瓶	- S106 カマド	1層		-	-	-	胴部	ワズリ/同転ナゲ		138 136
165	須恵器	甕	- S106	1層		-	-	-	胴部	タタキ/		138 136
166	縄文土器	深鉢	- S106 南西区	地積土		-	13.61	13.4	底部	木目状彫糸文/		138 136
167	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	床面直上		-	14.2	15.4	底部	ナゲ/		138 136
168	縄文土器	埴輪形深鉢	Ⅳ群 S106-北東区	地積土		-	-	-	口縁部	隆帯→沈没/		138 136
169	縄文土器	深鉢	Ⅲ群 S106	黒色土		-	-	-	口縁部	結節R上→隆帯→沈没/	55号同一層位 だが集合せず	138 136
170	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S106			-	-	-	口縁部	彫付・隆帯→キワミ/		138 136
171	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S106-北東区	地積土		-	-	-	口縁部	沈没・彫付押圧/		138 136
172	縄文土器	深鉢	Ⅲ群 S106-北東区	地積土		-	-	-	口縁部	沈没→削突(竹筒状)/		138 136
173	土師器	坏	坏Ⅰ A S107	地積土上部		16.0	5.6	6.8	口→底部	同転ナゲ/ミガキ・黒色処理	底部同転糸切 り	139 136
174	土師器	坏	坏Ⅰ S107 カマド	焼物臺土直上		-	-	-	胴部	同転ナゲ/ミガキ・黒色処理	彫書(不明)	139 136
175	土師器	坏	坏Ⅱ S107	地積土		-	-	-	底部	ナゲ/		139 136
176	土師器	甕	Ⅲ群 S107 南東区	地積土上位 黒褐色土		21.9	28.5	-	口→胴部	ナゲ/ナゲ		139 136
177	土師器	甕	Ⅲ群 S107 南東区	地積土上位 黒褐色土		-	-	-	口→胴部	ナゲ/ナゲ		139 136
178	土師器	甕	Ⅲ群 S107 南東区	地積土上位 黒褐色土		-	-	-	口→胴部	ナゲ/ナゲ		139 136
179	土師器	甕	Ⅲ群 S107 カマド	焼物臺直上		-	-	-	口縁部	ナゲ/ナゲ		139 136
180	土師器	甕	- S107 カマド	1層		-	14.9	6.9	底部	ナゲ/ハケ		139 136
181	土師器	小型甕	- S107 カマド	焼物臺土直上		10.8	7.9	6.4	口→底部	ハケ/ナゲ	内面コゲ	139 136
182	土師器	甕	Ⅲ群 S107 カマド	焼物臺土直上		-	-	-	口→胴部	ナゲ/ハケ・ナゲ	ススコケ	140 136
183	土師器	甕	Ⅲ群 S107 南区	地積土		-	-	-	口縁部	ハケ/ハケ	ススコケ	140 137
184	土師器	甕	Ⅲ群 S107 北東区	地積土		-	-	-	口→胴部	ナゲ/ナゲ		140 137
185	土師器	甕	Ⅲ群 S107 北東区	地積土		-	-	-	口→胴部	ナゲ/ナゲ		140 137
186	土師器	甕	Ⅲ群 S107 南東区	地積土上位 黒褐色土		-	-	-	口縁部	ナゲ/ナゲ		140 137
187	土師器	甕	- S107 カマド	焼物臺直上		-	17.1	7.3	胴→底部	ナゲ/ナゲ		140 137
188	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S107	検出中		-	-	-	口縁部	彫付文→彫突/		140 137
189	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S107 北西区	地積土		-	-	-	胴部	L R/		140 137
190	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S107 南北パレット	地積土下位		-	-	-	口縁部	単輪輪本体→沈没/隆帯		140 137
191	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S107 北東区	地積土		-	-	-	口縁部	沈没・彫付文/		140 137
192	縄文土器	深鉢	- S107 北東区	地積土		-	12.4	11.6	底部	ナゲ/	底部ス/コ皿	140 137
193	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S107 北東区	地積土		-	-	-	口→胴部	縁線文・沈没・彫付→削突/		140 137
194	縄文土器	深鉢	Ⅳ群 S107 北東区	地積土		-	-	-	口縁部	縁文→沈没/		140 137



目録 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No
195	縄文土器	深鉢	IV群 S07北東区	埴積土		-	-	-	口縁部	花線/ 縹色押止し		141	137
196	縄文土器	深鉢	IV群 S07北東区	埴積土		-	-	-	口縁部	縹色押止し/ 複合口縁		141	137
197	縄文土器	深鉢	IV群 S07北東区	埴積土		-	-	-	口縁部	複合口縁/ 縹色押止し		141	137
198	土師器	坏	坏I A S08コマド	袖部		13.0	5.2	5.5	口~底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理	底部縁赤塗り	141	137
199	土師器	坏	坏I A S10	黒色土		14.0	5.1	6.6	口~底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		141	137
200	土師器	変	- S11北東区	1層		12.7	6.0	6.0	底部	ナズ/ナズ	縹色	141	137
201	土師器	坏	坏I S11北東区	1層		-	-	-	底部	同転ナズ/黒色処理	埴積土	141	137
202	土師器	坏	坏I S11南東区	床面直上		-	-	-	底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		141	137
203	土師器	変	- S11南東区	1層		-	-	-	底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		141	137
204	土師器	変	- S11南東区	床面直上		-	-	-	底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		141	137
205	土師器	坏	坏I S12	1層		11.6	6.6	6.6	底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		141	-
206	土師器	坏	坏I A S12	1層		-	-	-	口縁部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		141	137
207	土師器	坏	坏I A S12南東区	埴積土		-	-	-	口縁部	同転ナズ/同転ナズ		141	137
208	土師器	変	- S12	1層		13.4	11.0	11.0	底部	ナズ/ナズ		141	-
209	土師器	変	変I S12	埴積土		12.8	14.0	14.0	口縁部	ナズ (ハケ?) / ナズ		141	137
210	土師器	変	変I S13北東区	床面直上・埴積土下位		19.5	15.7	9.4	口~底部	ケズリ/ナズ/ナズ	底部木重敷	141	137
211	土師器	変	- S13北東区	埴積土		-	11.9	10.4	胴部	ナズ/ナズ	ナズ	141	137
212	土師器	坏	坏I A S13北東区	埴積土		-	-	-	口縁部	同転ナズ/同転ナズ		142	137
213	土師器	高台坏	坏I S13	埴積土		-	-	-	口縁部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		142	137
214	土師器	高台坏	坏I Ab S13	埴積土		-	12.9	7.8	胴~底部	同転ナズ/ミガキ、黒色処理		142	137
215	土師器	変	- S13北東区	埴積土		17.4	7.8	7.8	胴~底部	ケズリ/ナズ	網磨	142	137
216	土師器	変	- S13南東区	埴積土		-	12.1	8.1	底部	ナズ/ナズ		142	138
217	土師器	変	- S13北東区	埴積土下位		17.6	8.4	8.4	胴~底部	ナズ/ハケ	底部ケズリ?	142	138
218	土師器	変	変I S13北東区	埴積土下位		14.0	15.9	15.9	口~胴部	ケズリ/ハケ		142	138
219	土師器	変	変I S13北東区	床面直上・埴積土		12.1	15.7	15.7	口~胴部	ケズリ/ハケ	ススコケ	142	138
220	土師器	変	変I S13コマド	右袖部		-	-	-	口~胴部	ナズ/ナズ		142	138
221	土師器	変	変I S13コマド	右袖部		-	-	-	口~胴部	ナズ/ハケ		142	138
222	土師器	変	変I S13コマド	右袖部		-	-	-	口~胴部	ナズ/ナズ、ハケ		142	138
223	土師器	変	変I S13コマド	右袖部		-	-	-	口縁部	ハケ/ハケ		142	138
224	土師器	変	変I S13北東区	埴積土下位		-	-	-	口~胴部	ハケ/ハケ		142	138
225	土師器	変	- S13北東区	埴積土下位、コマド周辺		-	-	-	胴部	ケズリ/ナズ		143	138
226	土師器	変	- S13北東区	埴積土		-	-	-	胴部	同転ナズ/同転ナズ		143	138
227	土師器	変	- S13南東区	埴積土		-	-	-	胴部	同転ナズ/同転ナズ		143	138
228	土師器	変	- S13北東区	埴積土下位		-	-	-	胴部	同転ナズ/同転ナズ		143	138

相続 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外周/内面)	備考	図例 No.	写真 No.
229	土師器	高台杯	環 I	S14	床面直上	-	[27.5]	-	胴-底部	回転ナデ/ミガキ、黒色処理	高台穴損	143	138
230	土師器	甕	環 I	S14 南東区	床面陶葺土	-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ		143	138
231	須恵器	甕	環 I	S14SK01	埴積土	-	-	-	胴部	回転ナデ/回転ナデ		143	138
232	須恵器	瓶	-	S15 南東区	埴積土	-	-	-	口縁部	回転ナデ/回転ナデ		143	138
233	土師器	瓶	環 I	S16 カマド	焼成直上・南墓土	21.1	[26.5]	-	口-胴部	ナデ/ナデ		143	138
234	土師器	小皿	環 I	S16 南北東	床面直上・西積土	14.0	13.6	(8.4)	口-底部	ナデ/ナデ	器部摩耗	143	139
235	須恵器	瓶	-	S15 カマド石造	右袖部、焼土灰化物層下	-	[9.3]	[12.0]	胴-底部	ケズリ/ナデ (縦) / ハケ、ナデ (縦)		143	139
236	土師器	甕	環 I	S16 カマド	焼成直上・南墓土	(13.6)	[10.6]	-	口-胴部	ナデ/ハケ	器面磨耗	144	139
237	土師器	杯	環 I B	S16 北西区	床面直上	-	-	-	口縁部	回転ナデ/ミガキ、黒色処理		144	139
238	須恵器	甕	-	S16 カマド	右袖部 1 層	-	-	-	胴部	タタキ		144	139
239	土師器	杯	環 I	S17 南西区	1 層	-	-	-	胴部	回転ナデ/ケズリ/ミガキ、黒色処理		144	139
240	土師器	甕	-	S17	床面直上	-	-	-	胴部	ケズリ/ナデ		144	139
241	須恵器	瓶	-	S17 南東区	1 層	-	-	-	胴部	回転ナデ/		144	139
242	須恵器	瓶	-	S17 北東区	1 層	-	-	-	胴部	回転ナデ/ケズリ/		144	139
243	縄文土器	深鉢	V 群	S17 南北ベクト	埴積土	-	-	-	胴部	L R→沈線/		144	139
244	縄文土器	深鉢	-	S18 東西ベクト	床面陶葺土	-	-	-	胴部	結節 R L/	245 と同一體	144	139
245	縄文土器	深鉢	-	S18 東西ベクト・北東区 トレンチ	埴積土	-	[11.6]	(6.8)	胴-底部	結節 R L/	244 と同一體	144	139
246	縄文土器	深鉢	IV 群	S18	床面直上	-	-	-	口縁部	沈線→沈線・キガミ/		144	139
247	縄文土器	深鉢	I 群	S18 普通	埴積土	-	-	-	口縁部	粗線・口縁部キガミ/		144	139
248	縄文土器	深鉢	IV 群	S18 北東区	1 層	-	-	-	口縁部	沈線/		144	139
249	縄文土器	深鉢	-	S18 カマド	埴積土	-	-	-	口縁部	結節 L R/		144	139
250	縄文土器	深鉢	IV 群	S18 カマド	埴積土	-	-	-	口-胴部	車輪状体 1 A 層・刺突・取付押圧/	縦線多い	144	139
251	縄文土器	深鉢	IV 群	S18	床面陶葺土	-	-	-	口縁部	沈線 (平・山)・沈線・取付文→キガミ/		144	139
252	縄文土器	深鉢	IV 群?	S18 南西区	床面直上 埴積土	-	-	-	胴部	L R→沈線/		145	139
253	縄文土器	深鉢	V 群	S18 南西区	床面直上 埴積土	-	-	-	胴部	L R→沈線/		145	139
254	土師器	杯	環 I A	S19 南東区	埴積土	-	-	-	口縁部	回転ナデ/ミガキ、黒色処理		145	139
255	土師器	杯	環 I A	S19 北東区	埴積土	-	-	-	口縁部	回転ナデ/回転ナデ		145	139
256	土師器	甕	環 I	S19 北東区	埴積土	-	-	-	口-胴部	ナデ/ナデ		145	139
257	土師器	甕	環 I	S19 北東区	埴積土	-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ		145	139
258	土師器	甕	環 I	S20	床面直上 遺物点 No. 1	(19.1)	35.1	(11.3)	口-底部	ナデ/ナデ	器面磨耗	145	139
259	土師器	甕	-	S20	床面陶葺土	-	[3.6]	8.2	底部	ナデ/ナデ		145	140
260	土師器	甕	環 I	S20	床面直上 遺物点 No. 2	(18.0)	19.3	-	口-胴部	ナデ/ナデ	261 と同一體	145	140
261	土師器	甕	環 I	S20	床面直上 遺物点 No. 2	(17.6)	[27.5]	-	口-胴部	ナデ/ナデ?	260 と同一體	145	140

目録 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No.
262	須恵器 瓶		Ⅱ S20	出土遺構	埴積土	-	[13.1]	[11.0]	胴~底部	回転ナデ→ケズリ/	粘土櫃い	146	140
263	須恵器 瓶		S21		遺物点 No. 2	-	[9.3]	-	胴底	回転ナデ/回転ナデ→ハケ		146	140
264	土師器 灰	灰	環 I A S22		埴積土	[3.8]	[1.9]	-	口縁部	回転ナデ/ミガキ・黒色処理		146	140
265	土師器 甕	甕	Ⅱ S22 カマド			-	[6.7]	-	口縁部	ナデ/ナデ		146	140
266	土師器 甕	甕	Ⅱ S22 カマド		惣焼地蔵土	[2.0]	[5.5]	-	口縁部	ナデ/ナデ・ハケ		146	140
267	土師器 甕	甕	S23		埴積土	-	[3.5]	-	底部	ナデ/ナデ		146	140
268	土師器 甕	甕	S23		埴積土	-	[5.0]	-	底部	ナデ/ハケ		146	140
269	土師器 甕	甕	Ⅱ S23		埴積土	[6.5]	[11.2]	-	口~胴部	ナデ/ナデ		146	140
270	土師器 甕	甕	Ⅱ S23		埴積土	-	-	-	口~胴部	ハケ/ハケ		146	140
271	土師器 小型甕	小型甕	S24		遺物点 No. 1	9.4	9.3	6.3	完整	ナデ/ハケ	底部木葉痕	146	140
272	須恵器 甕	甕	S24		埴積土	-	[2.8]	-	胴底	ナデ/ナデ		146	140
273	須恵器 甕	甕	S24		埴積土	-	[13.3]	-	胴~底部	タタキ→ケズリ→ナデ/ナデ	363 と複合	146	140
274	土師器 甕	甕	S24 南東部		埴積土中位	-	[15.1]	9.6	胴~底部	ナデ/ナデ	底部木葉痕	147	140
275	土師器 甕	甕	S24・SK86		遺物点 No. 3・埴積土	-	[15.6]	9.6	胴~底部	ハケ/ハケ	器面摩耗	147	141
276	土師器 杯	杯	S25		埴積土	-	[1.2]	[7.0]	底部	回転ナデ/ミガキ・黒色処理		147	141
277	土師器 高台杯	高台杯	環 I Ab S25		深面直土	[3.9]	4.5	7.2	口~底部	回転ナデ/ミガキ・黒色処理		147	141
278	土師器 高台杯	高台杯	環 I Ab S25		埴積土	[3.1]	4.6	7.7	口~底部	回転ナデ/ミガキ・黒色処理		147	141
279	土師器 高台杯	高台杯	環 I Ab S25		深面直土・埴積土中位	[5.9]	7.8	8.2	口~底部	回転ナデ/ミガキ・黒色処理	口縁部に油煙?	147	141
280	土師器 甕	甕	Ⅱ S27 カマド		埴積土	[1.3]	17.7	7.1	口~底部	ミガキに近いナデ/ケズリ	ススコケ	147	141
281	土師器 甕	甕	Ⅱ S27 カマド		埴積土	-	[11.0]	7.7	胴~底部	ケズリ/ハケ・ナデ	底部ケズリ?	147	141
282	土師器 甕	甕	S27・33・34		埴積土	[3.6]	[18.1]	[7.8]	口~底部	ナデ/ハケ		147	141
283	土師器 甕	甕	S27・P01・33・34		埴積土	-	-	-	胴底	ナデ/ハケ		148	141
284	土師器 甕	甕	S30		遺物点 No. 1	[20.5]	28.8	9.2	口~底部	ケズリ?/ナデ	スス、器面摩耗	148	141
285	土師器 甕	甕	S30		埴積土	-	[10.0]	6.8	胴~底部	ケズリ/ナデ	底部ケズリ?	148	141
286	土師器 甕	甕	S30		遺物点 No. 1	[17.4]	22.2	7.1	口~底部	ケズリ・ナデ/ハケ	スス	148	142
287	土師器 杯	杯	環 I A S33SK01		埴積土	[4.0]	6.0	6.2	口~底部	回転ナデ/ミガキ・黒色処理	二次焼跡によ り剥落	148	141
288	土師器 甕	甕	S33 カマド		土器 No. 1	-	[4.3]	8.5	底部	ナデ/ナデ	ケズリ	148	141
289	須恵器 大甕	大甕	S33SK01		埴積土	[67.2]	65.9	-	口~底部	タタキ/タタキ	丸底、ボロ付着	148	142
290	土師器 甕	甕	S33		深面陶器土	-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ・ハケ		149	142
291	土師器 甕	甕	S33SK01		埴積土	-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ		149	142
292	土師器 甕	甕	S33 北西区		埴積土	-	[7.5]	(10.6)	底部	ナデ/ナデ	底部木葉痕	149	142
293	土師器 甕	甕	S33 北西区		埴積土	[20.2]	[9.0]	-	口縁部	ナデ/ナデ	補修孔	149	142
294	土師器 甕	甕	S33 カマド・SF03		埴積土	-	[87.5]	10.6	底部	ナデ(ケズリ)/ナデ	ケズリ	149	142

図版 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.
295	土師器 坏	坏 I A	SI33・34	地積土		14.8	6.4	5.2	胴~底部	同転ナデ/ミガキ・黒色処理		149 143
296	土師器 坏	坏 I	SI33・34			-	11.6	6.0	底部	同転ナデ/ミガキ・黒色処理		149 143
297	土師器 坏	坏 I A	SI33・24S/F02	遺物点 No. 1		13.3	6.6	4.7	口~底部	同転ナデ/同転ナデ	黒書?	149 143
298	土師器 坏	坏 I A	SI33・34			13.8	14.4	6.2	口~底部	同転ナデ/同転ナデ		149 143
299	土師器 坏	坏 I B	SI33・34			13.0	14.1	-	口~胴部	同転ナデ/同転ナデ		149 143
300	土師器 坏	坏 I B	SI33・34			-	-	-	口~胴部	同転ナデ/同転ナデ		149 143
301	土師器 坏	坏 I B	SI33・34			-	-	-	口~胴部	同転ナデ/同転ナデ		149 143
302	土師器 坏	坏 I A	SI33・34	地積土		-	-	-	口縁部	ミガキ・黒色処理/ミガキ・黒色処理		149 143
303	土師器 坏	坏 I A	SI33・34			-	-	-	口~胴部?	ケズリ/ミガキ・黒色処理	非繼續成形	149 143
304	土師器 坏	坏 I	SI33・34			-	-	-	胴部	ケズリ/ミガキ・黒色処理	非繼續成形	149 143
305	土師器 甕	-	SI33・34			-	12.7	6.0	底部	ナデ/ナデ		149 143
306	土師器 甕	甕 II	SI33・34			-	-	-	口~胴部	ナデ/ナデ	底部外面剥落	150 143
307	土師器 甕	-	SI33・34			-	14.2	11.0	胴~底部	ナデ/ナデ		150 143
308	土師器 甕	-	SI33・34			-	13.6	-	底部	ナデ・ケズリ/ナデ	厚手で不整形	150 143
309	土師器 甕	甕 III	SI33・34・37	床面直上・地積土		20.2	31.5	10.4	口~底部	ケズリ→ナデ/ナデ	口縁部にて 具痕残る。器 底磨耗	150 143
310	土師器 大甕	-	SI33・34			-	-	-	胴部	タタキ/		150 143
311	土師器 大甕	-	SI33・34	地積土		-	-	-	胴部	タタキ/		150 143
312	土師器 大甕	-	SI33・34			-	-	-	胴部	タタキ/		150 143
313	土師器 甕	-	SI33・34	地積土		-	-	-	胴部	同転ナデ/		150 143
314	土師器 甕	-	SI33・34			-	-	-	胴部	ケズリ/		150 143
315	土師器 甕	-	SI33・34			-	-	-	胴部	同転ナデ/同転ナデ		150 143
316	土師器 坏	坏 I	SI35			-	12.2	7.4	底部	同転ナデ/ミガキ・黒色処理		150 143
317	土師器 甕	-	SI35	黒色土		-	13.75	8.0	底部	ナデ/ナデ		150 143
318	土師器 甕	-	SI35	黒色土		-	12.1	11.4	底部	ナデ/ナデ		150 143
319	土師器 甕	-	SI35	黒色土		-	-	-	底部	ナデ/		150 143
320	土師器 甕	甕 I	SI35	黒色土		-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ		150 143
321	土師器 甕	甕 I	SI35	黒色土		-	-	-	口~胴部	ナデ/ナデ		151 143
322	縄文土器 深鉢	深鉢?	SI35	床面直上		-	-	-	口縁部	R.L.→左縁→押し引き/	スズ	151 143
323	土師器 坏	坏 I B	SI37 2区	地積土		13.0	12.8	-	口~胴部	ナデ・ケズリ/ミガキ・黒色処理	非繼續成形、 スズコテ	151 144
324	土師器 坏	坏 I B	SI37	床面直上	土器 No. 1	12.3	5.5	-	口~底部	同転ナデ/ミガキ・黒色処理		151 144
325	土師器 坏	坏 I B	SI35XW01 前室部	1層		14.2	12.7	-	口縁部	同転ナデ/ミガキ・黒色処理		151 144

旧称 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No
326	土師器	坏	坏I	S37	床面直上・土器No.1	-	50	-	胴~底部	同脈ナデ/ミガサ、黒色地埋	底部刻糸切 り→ナデ	151	144
327	土師器	姜	姜I	S37 5区	埴積土、埴土直上	139	42	-	口縁部	ハテ/ハテ		151	144
328	土師器	姜	姜I	S37 A新南ベルトル中央・ SXW01 姜体	埴積土下位・砂体埴積土?	155	97	-	口~胴部	ナデ/ナデ・ハテ	彫影強い	151	144
329	土師器	姜	姜I	S37 1区南側付近	埴積土下位	215	130	-	口~胴部	ハテ/ハテ	スス	151	144
330	土師器	姜	姜I	S37 5区	埴積土	-	-	-	口縁部	ハテ/ハテ	ススコデ	151	144
331	土師器	姜	姜I	S37 C新南ベルトル	埴積土中~下位	-	56	-	口縁部	ハテ/ハテ	底部本重直	151	144
332	須恵器	瓶	-	S37 B新南ベルトル	埴積土中~下位	-	-	-	口縁部	同脈ナデ/同脈ナデ		151	144
333	須恵器	瓶	-	S37 4区	埴積土下位	130	67	-	口縁部	同脈ナデ/同脈ナデ		151	144
334	須恵器	瓶	-	S37 A新南ベルトル	埴積土下位	-	96	-	胴~底部	同脈ナデ→ナゲスリ/		151	144
335	土師器?	不明	-	S37 A新南ベルトル	床面直上・埴積土下位	-	23	86	底部	指頭圧痕/ナデ	高台付土器の 高台?	151	144
336	土師器	高台坏	坏I	S37SXW01 前庭部・SK00	埴積土1・2層、黒色土	-	30	-	胴部	同脈ナデ/ミガサ、黒色地埋		152	144
337	土師器	坏	坏I A	S38 カマド庫	埴積土上位	-	-	-	口縁部	同脈ナデ/ミガサ、黒色地埋	垂書「水」?	152	144
338	縄文土器	深鉢	V群	S43SH01	埴積土上位	-	-	-	口縁部	L.R?→隆帯/		152	144
339	縄文土器	深鉢	V群	S43SH01 北東側	埴積土上位	-	-	-	口縁部	L.R→隆帯/		152	144
340	縄文土器	深鉢	V群	S42 西ベルトル	埴積土中位	-	-	-	口縁部	L.R.R?→隆帯/		152	144
341	縄文土器	深鉢	V群	S42 西ベルトル	埴積土中位	-	-	-	胴部	R.L→隆帯/		152	144
342	縄文土器	深鉢	V群	S42 南東区	埴積土	-	-	-	口縁部	押注・管貫刺突/		152	144
343	縄文土器	深鉢	V群	S42 南東区	埴積土中位	19.0	25.5	-	口~胴部	L.R→隆帯/	コゲ	152	144
344	縄文土器	深鉢	V群	S43	埴積土	-	-	-	胴部	R.L→隆帯 (山・平)・隆帯/		152	145
345	縄文土器	深鉢	V群	S43	埴積土	-	-	-	口縁部	R.L→隆帯/		152	145
346	縄文土器	深鉢	-	S43	埴積土	-	38	90	底部	L.R?→磨り消し・沈没/		152	145
347	縄文土器	深鉢	V群	S43	埴積土	23.5	31.8	90	口~底部	R.L→隆帯/		152	145
348	縄文土器	深鉢	V群	S43	床面直上	-	-	-	口~胴部	R.L→隆帯/		-	145
349	縄文土器	深鉢	V群	S44 南東区	埴積土	-	-	-	胴部	L.R/		153	145
350	縄文土器	深鉢	V群	S44 南東区	埴積土	-	21.2	G高	胴~底部	L.R→磨り消し・沈没/		153	145
351	縄文土器	深鉢	-	S44	埴積土	-	-	-	胴部	R.L/	赤影	153	145
352	縄文土器	深鉢	V群	S44	埴積土	-	-	-	胴部	磨り消し・沈没・削突/	コゲ	153	145
353	縄文土器	深鉢	V群	S44 南東区	埴積土	-	-	-	口~胴部	L.R→隆帯/		153	145
354	縄文土器	深鉢	-	S44 南東区	埴積土	-	-	-	口~胴部	L.R/		-	145
355	縄文土器	深鉢	-	S44 東ベルトル	2層・2層 埴積	-	-	-	胴部	L.R? (胴脈直い)/		-	145
356	縄文土器	深鉢	-	S44 東西サクレンチ	黒色土・覆瓦	-	-	-	口縁部	指頭L.R/		-	146

相模 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外形/内面)	備考	図号 No.
352	縄文土器	深鉢	V群	S145	2層	-	-	-	口~底部	L.R→磨り消し・沈蝕	-	153
358	縄文土器	深鉢	-	S145	2層	-	-	-	底部	L.R	-	153
359	縄文土器	深鉢	-	S145	2層	-	-	-	口縁部	L	-	153
360	縄文土器	深鉢	V群	S146北西側	To~Cu包含層	-	-	-	口縁部	L.R→磨り消し・沈蝕	-	154
361	縄文土器	深鉢	I群	S146トレンチ	埋積土	-	-	-	胴部	磨削・凹状縄文	継ぎ目多い	154
362	縄文土器	深鉢	-	S147東区	埋積土	-	-	-	胴部	磨削・沈蝕	-	154
363	縄文土器	深鉢	-	S147東区	埋積土	-	[33]	6.0	底部	不明	底部断代値	-
364	縄文土器	深鉢	-	S147・48東区	埋積土	-	-	-	口縁部	L.R	-	154
365	縄文土器	深鉢	V群	S147・48西区	埋積土	-	-	-	口縁部	L.R→磨り消し・沈蝕	-	154
366	縄文土器	深鉢	V群	S147・48東区	埋積土	-	[13.8]	9.4	胴~底部	L.R?→磨り消し・沈蝕	二次焼熱による割傷	154
367	縄文土器	深鉢	V群	S147・48北西区C新面東 西サブトレンチ	埋積土下位	16.2	19.4	7.1	口~底部	L.R	-	154
368	縄文土器	深鉢	V群	S147・48東区	埋積土上位	16.7	18.7	-	口~胴部	L.R→磨り消し・沈蝕	ススコケ	154
369	縄文土器	深鉢	V群	S147・48東区	埋積土	15.4	25.2	7.0	口~底部	L.R→磨り消し・沈蝕	底状口縁	154
370	縄文土器	深鉢	-	S147・48南北トレンチ	埋積土上位	-	[16.3]	6.0	口~底部	L.R	-	147
371	縄文土器	深鉢	-	S147・48南北トレンチ	埋積土中~下位	-	[7.8]	6.5	胴~底部	L.R	底状口縁。コケ	-
372	縄文土器	深鉢	-	S147・48西区	埋積土下位	-	-	-	口縁部	L.R?	底部断代値	-
373	縄文土器	深鉢	-	S147・48東区	埋積土下位	-	-	-	口~胴部	L	-	147
374	縄文土器	深鉢	V群	S147・48	埋積土	-	-	-	口縁部	隆帯→割欠	-	147
375	縄文土器	深鉢	-	S147・48北トレンチ	埋積土	-	-	-	胴部	L.R	-	147
376	縄文土器	深鉢	V群	S147・48西区	埋積土上位	-	-	-	口縁部	沈蝕	-	147
377	縄文土器	深鉢	V群	S147・48	埋積土	-	-	-	口縁部	L.R→磨り消し	赤彩	-
378	縄文土器	深鉢	V群	S147・48東区	埋積土	-	-	-	胴部	R.L→磨り消し	330と同型存在	-
379	縄文土器	深鉢	V群	S147・48西区	埋積土	-	-	-	胴部	R.L→磨り消し・沈蝕	337と同型存在	-
380	縄文土器	深鉢	V群	S147・48西区	埋積土	-	-	-	口~胴部	L.R→磨り消し・沈蝕	-	147
381	縄文土器	深鉢	-	S147・48西区	埋積土	-	-	-	胴部	R.L→隆沈蝕	-	147
382	縄文土器	深鉢	-	S147・48西区	埋積土上位	-	-	-	胴部	R.L	土師器小	-
383	縄文土器	深鉢	-	S147・48東区	埋積土中~下位	-	-	-	胴部	L.R	スス	-
384	縄文土器	深鉢	V群	S148	床面直上No.1	10.6	9.4	5.6	口~底部	L.R→磨り消し・沈蝕	赤彩	154
385	縄文土器	深鉢	-	S148S101	土器No.1	-	-	-	口~胴部	L.R	スス、内面消傷	155
386	縄文土器	深鉢	-	S148S101	土器No.1	-	[8.1]	4.6	胴~底部	L.R	スス	155
387	縄文土器	深鉢	-	S150	埋設土器	-	[19.5]	-	胴部	L.R	-	148
388	縄文土器	深鉢	-	S150	埋積土下位	-	-	-	口縁部	L?	-	148

目録 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外側/内面)	備考	図版 No.	写真 No
389	縄文土器	深鉢	-	S151	床面直上	φ29.0	125.3	-	口~胴部	筋線L/		155	148
390	縄文土器	深鉢	-	S151	2層 土器集中	-	-	-	口~胴部	R.L/		155	148
391	縄文土器	深鉢	-	S151	2層 土器集中	-	-	-	口~胴部	R.L/		-	148
392	縄文土器	深鉢	-	S153	黄銅色土	-	-	-	口縁部	R.L~赤道/	スス	-	148
393	縄文土器	深鉢	-	S152	埴積土中~下位	-	-	-	胴部	L.R/		155	148
394	縄文土器	深鉢	V~VI群	S152	埴積土中~下位	-	-	-	胴部	L.R~底縁/	コケ	155	148
395	縄文土器	深鉢	I群	S152	検出層	-	-	-	口~胴部	L?~底縁/	継ぎ多い	155	148
396	縄文土器	深鉢	V群	S152SH101	埋設土器	-	122.1	-	胴部	L.R~赤道/		156	148
397	縄文土器	深鉢	-	S152SH101付近	埴積土下位~床面直上	-	-	-	口~底部	L.R/		156	149
398	縄文土器	深鉢	-	S154	埴積土下位	17.2	14.0	-	口~胴部	L/		156	149
399	縄文土器	深鉢	-	S154	埴積土下位	-	17.0	φ.4	口~胴部	L.R/		156	149
400	縄文土器	深鉢	-	S154	埴積土上位	-	-	-	胴~底部	L.R/	二次焼跡によ り剥落	156	149
401	縄文土器	深鉢	VI群	S154	埴積土下位	-	-	-	胴部	L.R~磨り消し・底縁/		156	149
402	縄文土器	深鉢	-	S154	埴積土下位	-	-	-	口~胴部	L.R/	スス	-	149
403	縄文土器	深鉢	-	S154・55	埴積土下位	-	-	-	口~胴部	L.R/		-	149
404	縄文土器	深鉢	VI群	S155	埴積土下位	28.1	30.9	10.4	口~底部	L.R~磨り消し・底縁/		156	149
405	縄文土器	深鉢	-	S156	床面直上	12.4	17.3	5.5	口~底部	L.R/	補修孔	156	149
406	縄文土器	深鉢	-	S156	埴積土	-	-	-	胴部	L.R/		-	150
407	縄文土器	深鉢	-	S157	床面直上	-	-	-	底部	L.R~磨り消し・底縁/		156	149
408	縄文土器	深鉢	VI群	S158	埴積土	-	-	-	胴部	L.R~磨り消し・底縁/		156	149
409	縄文土器	深鉢	V群	S159	埴積土	-	-	-	口縁部	L.R~赤道/		158	150
410	縄文土器	深鉢	V群	S159	埴積土	-	-	-	胴部	L.R~赤道/		158	150
411	縄文土器	深鉢	VI群	S160SH101	焼成段土直上	-	18.2	9.4	胴~底部	L.R~磨り消し・底縁/		158	150
412	縄文土器	深鉢	-	S161	埴積土	-	-	-	口縁部	L.R/		158	150
413	縄文土器	深鉢	-	S162	埴積土下層遺物集中4	25.9	28.6	-	口~胴部	ナデ/		158	150
414	縄文土器	深鉢	VI群	S162	埴積土上層遺物集中3	-	-	-	口~胴部	R.L~磨り消し・底縁・筋欠/		158	150
415	縄文土器	深鉢	VI群	S162	埴積土上層遺物集中1	-	-	-	口~胴部	L.R~磨り消し・底縁/		-	150
416	土師器	埴	灰I B	S163	床面直上	-	-	-	口~胴部	同底ナデ/ミガサ・黒色処理		158	151
417	土師器	埴	要I	S163	北西区	21.6	11.1	-	口~胴部	ナデ/ナデ		158	151
418	土師器	埴	要I	S163	カマド付近	17.4	10.5	-	口~胴部	ナデ/ナデ		158	151
419	土師器	埴	要I	S163	カマド付近	20.8	20.9	-	口~胴部	ハケ/ハケ		158	151
420	土師器	埴	-	S163	カマド付近	-	10.1	11.6	胴~底部	ナデ/ハケ・ナデ		158	151
421	土師器	埴	-	S163	カマド付近	-	18.7	8.4	胴~底部	ナデ/ナデ		158	151

図版 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外面/内面)	備考	図版 No.
422	須恵器	瓶	-	S63	埴積土	-	-	-	胴部	回転ナデ/回転ナデ	自然蝕	151
423	土師器	甕	Ⅰ	S63	埴積土下位~灰面直上	-	-	-	口~胴部	ハケ/ナデ	-	151
424	土師器	甕	-	S63	灰面直上	-	-	-	胴~底部	ナデ/ナデ	底部本重痕	151
425	土師器	甕	Ⅰ	S63北西~北東区	埴積土下位~灰面直上	-	-	-	口縁部	ハケ/ナデ	-	151
426	土師器	甕	-	S63	灰面直上	-	-	-	底部	不明	底部本重痕	151
427	土師器	甕	-	S63	灰面直上	-	-	-	底部	不明	底部本重痕	151
428	土師器	坏	Ⅰ	S64	埴積土下位~灰面直上	-	-	-	胴部	ミガキ・黒色処理/ミガキ・黒色処理	156	151
429	土師器	甕	-	S64	灰面直上土器No.2・埴積土下位~灰面直上・PO.埴積土	-	[17.3]	10.4	胴~底部	ナデ/ナデ	158	151
430	土師器	甕	Ⅰ	S64	埴積土下位~灰面直上	-	-	-	口縁部	回転ナデ→ハタナデ?/ナデ	158	152
431	土師器	甕	Ⅰ	S64	灰面直上	-	-	-	口~胴部	ナデ/ナデ	158	152
432	土師器	甕	-	S64	埴積土土器No.2・埴積土下位~灰面直上	-	[10.2]	12.4	胴~底部	ナデ/ナデ	159	152
433	土師器	甕	-	S64	灰面直上土器No.1・埴積土下位~灰面直上	-	[13.8]	12.8	胴~底部	ナデ/ナデ	159	152
434	須恵器	瓶	-	S64	灰面直上・轆轤中下位	[13.0]	[2.9]	-	口縁部	回転ナデ/回転ナデ	159	152
435	須恵器	瓶	-	S64	灰面直上土器No.2・灰面直上・轆轤中下位	-	[20.1]	11.2	胴~底部	ケズリ/ナデ	159	152
436	土師器	甕	Ⅰ	S64	埴積土下位~灰面直上	-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ	-	152
437	土師器	甕	-	S64	灰面直上	-	[5.1]	7.2	底部	ナデ/ナデ	底部本重痕→ケズリ	152
438	土師器	甕	-	S64	灰面直上土器No.2	-	[4.4]	[5.8]	底部	ナデ/ナデ	底部本重痕	152
439	弥生土器	壺	中期後半	SF12周辺	黒色土	-	-	-	口~胴部	L.R./	159	152
440	弥生土器	壺	中期後半	SF12周辺	黒色土	-	-	-	胴部	L.R./	159	152
441	弥生土器	壺	中期後半	SF12周辺	黒色土	-	-	-	胴部	L.R./	-	152
442	弥生土器	壺?	-	SF23	埴積土上位	-	-	-	口縁部	L.R./	159	152
443	土師器	小型甕	-	SK02	埴積土	-	[2.9]	4.7	底部	ナデ/ナデ	159	152
444	土師器	甕	Ⅰ	SK02南東区	埴積土	-	-	-	口縁部	ナデ/ナデ	159	152
445	須恵器	甕	-	SK02南東区	埴積土	-	-	-	胴部	タナキ/ナデ	159	152
446	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	SK02	2層上層	(25.6)	[22.9]	-	口~胴部	単輪跡本体1A類→貼付→辻線(平・山)/	159	153
447	縄文土器	深鉢	Ⅰ群?	SK03	1層	-	-	-	底部	単輪跡本体1A類?→ナデ/	160	153
448	縄文土器	深鉢	Ⅰ群?	SK03	1層	-	-	-	胴部	継接?/	160	153
449	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	SK03	1層	-	-	-	胴部	原形押圧→貼付文・半表背管文/	160	153
450	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	SK03	埴積土中位	36.8	[53.8]	-	口~胴部	L.R.-條帯→原形押圧による辻線/	160	153



目録 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No
451	縄文土器	深鉢	IV群 SK07	黒色土	黒色土	18.3	[21.4]	-	口~胴部	縄輪跡 R L → 隆帯 → キギマノ	口縁部非対称	160	153
452	縄文土器	深鉢	IV群 SK07	黒色土	黒色土	23.2	[20.7]	-	口~胴部	ナマ・隆帯 → 口縁 (平・山・キギマノ・原形押圧)		160	153
453	縄文土器	深鉢	IV群 SK07	1~4層	黒色土	-	[17.3]	(13.0)	胴~底部	L R /		161	154
454	縄文土器	深鉢	II群 SK07	黒色土	黒色土	-	-	-	口縁部	隆帯 → 口縁	400以上一胴体 だが接合せず	161	154
455	縄文土器	深鉢	II群 SK07	輪出層	黒色土	-	-	-	口縁部	沈線・刺突		161	154
456	縄文土器	深鉢	II群 SK07	埴輪土上部	埴輪土上部	-	-	-	胴部	単輪跡系体 1 A 型 → 取付 → 円形文・爪形刺突	459 と同一胴体 だが接合せず	161	154
457	縄文土器	深鉢	IV群 SK07	埴輪土上部	埴輪土上部	-	-	-	口縁部	隆帯・底縁 → 刺突		161	154
458	縄文土器	深鉢	- SK07	1~4層	1~4層	-	-	-	口縁部	ナマ /	スコヤ	161	154
459	縄文土器	深鉢	- SK07	5~7層	5~7層	-	-	-	口縁部	爪形文 /	456 と同一胴体 だが接合せず	161	154
460	縄文土器	深鉢	- SK08	1層	1層	-	-	-	口縁部	R L → 取付文 → 刺突 /	形状工具で下 からの刺突	161	154
461	縄文土器	深鉢	II群 SK08	1層	1層	-	-	-	口縁部	隆帯 → 取付文 /		161	154
462	縄文土器	深鉢	- SK08	1層	1層	-	-	-	胴部	ケズリノ /	形状工具	161	154
463	縄文土器	深鉢	- SK12	埴輪土	埴輪土	-	-	-	胴部	単輪跡系体 L / ハケ状のナマ		161	154
464	縄文土器	深鉢	- SK12	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口縁部	L R・原形押圧 /		161	154
465	縄文土器	深鉢	- SK13	埴輪土	埴輪土	-	-	-	底部	-	底部木重直	161	154
466	縄文土器	深鉢	- SK13	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口縁部	L R /		161	154
467	縄文土器	深鉢	I群 SK16	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口~胴部	組紐?・竹管文 /		161	154
468	縄文土器	深鉢	I群 SK16	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口縁部	L R?・取付文 /		161	154
469	縄文土器	深鉢	- SK16	埴輪土	埴輪土	-	-	-	底部	-	底部ナマ	161	154
470	土師器	深鉢	環 I A 土師器	埴輪土	埴輪土	0.43	6.6	6.5	口~底部	同輪ナマ / ミガサ・黒色風理	墨書不明	161	154
471	土師器	深鉢	環 I A 土師器	埴輪土	埴輪土	0.43	5.1	6.0	口~底部	同輪ナマ / ミガサ・黒色風理	底部跡赤塗り	161	154
472	縄文土器	深鉢	- SK29	埴輪土	埴輪土	-	-	-	底部	-	底部ナマ	161	-
473	縄文土器	深鉢	- SK31	埴輪土	埴輪土	-	-	-	胴部	単輪跡系体 1 A 型 /		161	154
474	縄文土器	深鉢	- SK41	埴輪土	埴輪土	-	-	-	底部	スコヤ		162	154
475	縄文土器	深鉢	IV群 SK62	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口~胴部	指環押圧・L R /	底部スコヤ	162	154
476	縄文土器	深鉢	I群 SK30	埴輪土中位	埴輪土中位	9.9	13.0	5.2	口~底部	L R 押圧?・口縁部キギマノ		162	154
477	縄文土器	深鉢	IV群 SK07	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口縁部	沈線・押し引き /	478 と同一胴体 だが接合せず	162	154
478	縄文土器	深鉢	IV群 SK67	埴輪土上位	埴輪土上位	-	-	-	口縁部	沈線・押し引き /	477 と同一胴体 だが接合せず	162	154
479	縄文土器	深鉢	IV群 SK07	埴輪土	埴輪土	[17.4]	[27.3]	-	口~胴部	L R・流状口縁 /		162	154
480	縄文土器	深鉢	I群 SK07	埴輪土	埴輪土	-	-	-	口縁部	輪跡 L R → 原形押圧 /		162	155

相模 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外周/内面)	備考	図版 No.	写真 No
483	縄文土器	深鉢	IV群	SK68	1層下位	-	-	-	口縁部	貼付→沈没		162	155
482	縄文土器	浅鉢 透影彩深鉢?	IV群	SK69	埋積土	-	-	-	胴部	船形羽根LR?・沈没		162	155
483	縄文土器	深鉢	I群	SK70	埋積土	21.0	[26.1]	(14.4)	口~底部	車輪跡赤文1A型		162	155
484	縄文土器	深鉢	I群	SK70	埋積土	-	-	-	口縁部	木目状赤文→器体押印		162	155
485	縄文土器	深鉢	I群	SK72	埋積土	-	-	-	口縁部	車輪跡赤文1A型		162	155
486	縄文土器	深鉢	IV群	SK73	埋積土	-	-	-	口~胴部	LR?		162	155
487	縄文土器	深鉢	I群	SK76	埋積土	-	-	-	口縁部	RL→沈没		162	155
488	縄文土器	深鉢	II群	SK76	埋積土	-	-	-	胴部	LR→凹彩文		163	155
489	縄文土器	深鉢	VI群	SK110	黒→茶褐色土	-	-	-	胴部	LR→磨り消し・沈没		163	155
490	縄文土器	深鉢	VI群	SK115	埋積土中位	12.0	13.3	5.8	口~底部	LR	底部木重痕	163	155
491	縄文土器	深鉢	VI群	SK118	埋積土	(16.2)	38.2	(6.0)	口~底部	RL→磨り消し・沈没		163	155
492	縄文土器	深鉢	VI群	SK120	埋積土	-	[13.2]	(8.0)	胴~底部	LR→沈没・磨り消し?/		163	156
493	縄文土器	深鉢	-	SK122	底部土器No.1	(27.8)	41.7	(9.8)	口~底部	L/		163	155
494	縄文土器	深鉢	VI群	SK122	底部土器No.1	-	-	-	底部	LR→磨り消し・沈没		163	156
495	縄文土器	深鉢	-	SK122	埋積土	23.4	[34.4]	-	口~胴部	LR/		163	156
496	縄文土器	深鉢	V群	SK126 北側	黒色土	-	-	-	胴部	RL→隆沈没	ヌスコガ、重み大きい	163	156
497	縄文土器	深鉢	VI群	SK127	-	-	-	-	口縁部	LR→磨り消し・沈没・刺突		163	156
498	縄文土器	深鉢	-	SK127	-	-	-	-	底部	不明		-	156
499	縄文土器	深鉢	VI群	SK128	埋積土	-	-	-	口縁部	LR→磨り消し・沈没		163	156
500	縄文土器	深鉢	-	SK128	埋積土	-	-	-	口~胴部	RL/		164	156
501	縄文土器	深鉢	VI群	SK143 南側	茶褐色土	-	-	-	口縁部	RL→磨り消し・沈没		164	156
502	縄文土器	深鉢	VI群	SK143 南側	茶褐色土	-	[9.9]	7.6	胴~底部	RL→磨り消し・沈没		164	156
503	縄文土器	深鉢	-	SK143 南側	茶褐色土	-	[5.7]	(4.5)	底部	LR?	器面剥落	-	156
504	縄文土器	深鉢	VI群	SK144 東側	茶褐色土	-	-	-	口縁部	LR→磨り消し・沈没		164	156
505	縄文土器	深鉢	V群	SK152	埋積土下位	-	-	-	口縁部	RL?→隆帯		164	156
506	縄文土器	深鉢	-	SK152	埋積土中~下位	24.0	[33.15]	-	胴部	LR/	赤彩?	-	156
507	縄文土器	深鉢	V群	P43	埋積土中~下位	-	-	-	口~胴部	LR→隆沈没		164	156
508	縄文土器	深鉢	-	P231	埋積土	-	-	-	口縁部	LR/		164	157
509	縄文土器	深鉢	V群	P310	埋積土	-	-	-	口縁部	隆帯・沈没		164	157
510	縄文土器	浅鉢	-	SK02	1層	-	-	-	底部	ナデ/ナデ	底部ナデ	164	157
511	縄文土器	深鉢	III群	遺物包含層 1区東側	埋積土上層	27.0	39.4	13.3	口~底部	木目状赤文→隆帯・貼付文→沈没・刺突/コケ		164	157
512	縄文土器	深鉢	-	遺物包含層 1区東側	埋積土上層	-	[40.9]	16.4	胴~底部	船形RL/		165	157

掲載 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No
513	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区	3層	21.6	29.7	-	口~胴部	残部→刺突・北縁・L.R.→明部文・北縁(平・山)ノ		165	157
514	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区	1~3層	26.2	35.6	11.6	口~底部	L.R.→原形押圧ノ		166	158
515	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1~2区ベ ルト	1層	(20.0)	22.6	(8.5)	口~底部	非粘束羽状・ラシムス施文→残部→原形押圧	甲部土器	166	158
516	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 3区	1層下位	18.4	17.6	9.0	口~底部	滑状口縁・L.R.ノ		166	158
517	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区壁面	1層最下位	25.0	22.6	-	口~胴部	非粘束羽状→船付→L.R.→原形押圧ノ		166	158
518	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1~2区ベ ルト	1層	(21.0)	(25.0)	-	口~胴部	ナデ→北縁(山)・船頭押圧ノ		167	158
519	縄文土器	深鉢	早期?	遺物包含層 1区	1層	(20.0)	(16.7)	-	口~胴部	ナデノ	実底?	167	159
520	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区ベ ルト	1層	-	-	-	口~胴部	船頭L.R.→船付文→北縁(平・船)ノ		167	159
521	縄文土器	深鉢	I群	遺物包含層 1~2区ベ ルト	1層	11.6	19.2	-	口~胴部	非粘束羽状ノ		167	159
522	縄文土器	深鉢	I群	遺物包含層 1~2区ベ ルト	1層	-	16.9	9.8	胴~底部	非粘束羽状ノ		167	159
523	縄文土器	深鉢	VI群	遺物包含層 1区	1層	-	7.3	5.6	胴~底部	L.R.→北縁ノ		167	159
524	縄文土器	深鉢?	-	遺物包含層 1区	1層	-	(2.8)	8.4	底部	ナデノ		167	159
525	縄文土器	深鉢	-	遺物包含層 1区	1層	-	(2.3)	(11.0)	底部	ナデノ	底部スノコ儀	167	159
526	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区	1層	(14.6)	(19.5)	-	口~胴部	L.R.→刺突ノ	ススコヤ	168	159
527	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区	1層	-	-	-	口~胴部	L.R.→北縁(平・山)・半底背管刺突ノ		168	159
528	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 5区	1層	-	-	-	口~胴部	車輪筋条体L.→原形押圧ノ		168	159
529	縄文土器	深鉢	I群?	遺物包含層 1区	1層	-	-	-	胴部	L.R.ノ		168	159
530	縄文土器	深鉢	I群	遺物包含層 1区	1層	-	-	-	口~胴部	粗紐?・北縁ノ		168	159
531	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区	3層	-	-	-	胴部	原形押圧ノ		168	159
532	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区	3層	-	-	-	口縁部	刺突ノ		168	160
533	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 2区	1層	-	-	-	口~胴部	L.R.→原形押圧ノ		168	160
534	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 2区	1層	-	-	-	口~胴部	L.R.→船頭押圧ノ		168	160
535	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 2区	1層	-	-	-	口~胴部	原形押圧ノ		168	160
536	縄文土器	深鉢	I群	遺物包含層 1区	1層下位	-	-	-	口~胴部	木目状筋条文→船付→円形刺突ノ		169	160
537	縄文土器	深鉢	I群	遺物包含層 1区ベ ルト	2層	-	-	-	口~胴部	L.R.ノ		169	160
538	縄文土器	深鉢	IV群	遺物包含層 1区壁面	1層	-	-	-	口縁部	残部→北縁・刺突ノ		169	160
539	縄文土器	深鉢	-	遺物包含層 2区	1~3層	-	-	-	口~胴部	L.R.ノ	指押えにより 口縁部彫影	169	160
540	縄文土器	深鉢	-	遺物包含層 1~2区ベ ルト	1層	-	-	-	口~胴部	L.R.ノ		169	160
541	縄文土器	深鉢	II群	遺物包含層 1区	1層	-	-	-	口縁部	北縁ノ		169	160
542	縄文土器	深鉢	V群	遺物包含層 1区	1~3層	-	-	-	胴部	R.L.R.→残北縁ノ		169	160

図版 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.
543	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	遺物包含層 1区北壁	1層	-	-	-	口縁部	縹い残部→キヤミ		169
544	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1区	3層	-	-	-	口縁部	単輪筋条体→貼付文・原形押圧		169
545	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 3～4区ベルト・SK10	1層・埋積土	-	-	-	口縁部	貼付(櫛子状)・沈積		169
546	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1区ベルト階壁部	2層	-	-	-	口縁部	L.R・半截竹管押し引き		170
547	縄文土器	深鉢	1群?	遺物包含層 1～2区 ベルト	1層	-	-	-	口縁部	赤砥文?	縹面多い	170
548	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 4・5区ベルト・SK06	1層・埋積土	-	-	-	口縁部	彫文		170
549	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 4・5区ベルト・SK06	1層・埋積土	-	-	-	口縁部	縹部→沈積→刺突		170
550	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1区	1層	-	-	-	口→胴部	L.R→縹部		170
551	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1区	1層	-	-	-	口縁部	沈積	口縁部の突起	170
552	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1区北東壁	1層	-	-	-	口縁部	縹部→穿孔	赤色顔料	170
553	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	遺物包含層 1区北東壁	1層	-	-	-	胴部	L→沈積→彫文		170
554	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1層	1層	-	-	-	口縁部	縹部→沈積・キヤミ		170
555	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1層	1層	-	-	-	胴部	貼付文→沈積		170
556	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	遺物包含層 1層	1層	-	-	-	口縁部	縹部/縹部		170
557	縄文土器	深鉢	Ⅲ群	遺物包含層 1層	1層	-	-	-	胴部	彫文		170
558	縄文土器	深鉢	-	遺物包含層 1層	1層	-	-	-	底面	彫文	底面スノコ痕	170
559	縄文土器	深鉢	-	遺物包含層 2区	1層	-	6.2	9.8	底面	R.L.		170
560	須恵器	甕	-	遺物包含層 1層	1層	-	-	-	底面	同脈ナリ		170
561	縄文土器	深鉢	-	溝谷区北西隅	1層	-	-	-	胴部	L.R.		170
562	縄文土器	深鉢	I群	溝谷区北西隅	1層	-	-	-	口縁部	キヤミ・結節彫文		170
563	縄文土器	深鉢	-	溝谷区北西隅	1層	-	-	-	口縁部	縹文(不明)→沈積		170
564	須恵器	甕	-	溝谷区北西隅	1層	(128)	(44)	-	口縁部	同脈ナリ/同脈ナリ		170
565	縄文土器	深鉢	-	1 A 20・21 g-j	1層	-	-	-	底面	結節 R.L.?		170
566	縄文土器	深鉢	-	1 A 14・15 q-r	1層 (H3区 SP98)	-	-	-	胴部	L.R.	コナ	171
567	縄文土器	深鉢	-	1 A 17・18b～q (SI14・15層辺)	1層	-	-	-	口縁部	凹形突起		171
568	縄文土器	深鉢	-	1 A 17・18b～q (SI14・15層辺)	1層	-	-	-	胴部	L.R.		171
569	縄文土器	深鉢	I群	1 A 24 m～o	1層	-	-	-	口縁部	単輪筋条体・縹部→刺突・取体押圧		171
570	縄文土器	深鉢	-	1 A 16・17g (SI15北端)	1層	-	[228]	(17.4)	胴→底面	単輪筋条? R.L.		171
571	縄文土器	深鉢	-	1 A 17・18b (SI15東端)	1層	-	-	-	胴→底面	単輪筋条体 1 A 層		171

国庫 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外部/内部)	備考	図面 No.
572	縄文土器	深鉢 (小)	Ⅰ群	I A 20・21 g-1	I層	-	130	65	底部	ナデ/	赤色顔料	171
573	土師器	坏	Ⅰ群	I A 20・21 g-1	I層	-	121	60	底部	回転ナデ/ミガキ・黒色瓦葺	底部ケスリ	171
574	縄文土器	埴輪形深鉢	Ⅰ群	I A 20・21 (S02西側)	I層	-	-	-	口縁部	隆帯→底縁、爪形突起/	スス	171
575	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	I A 15 k-n	Ⅱ層	-	-	-	胴部	単軸結帯?		171
576	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	I A 20・o (S11南側)	I層	-	-	-	胴部	RL→底縁、圓筒文/		171
577	須恵器	瓶	Ⅰ群	I A 12-14 r-s	I層	-	-	-	胴部	ケスリ/ナデ/		171
578	土師器	坏	Ⅰ群	Ⅰ A 1 a20・21 g-1	I層	(125)	45	-	口→胴部	回転ナデ/ミガキ		171
579	須恵器	壺	Ⅰ群	I A 20・21 r-1	I層	-	-	-	胴部	タタキ→タタキ/		171
580	須恵器	壺	Ⅰ群	I A 20・21 g-1	I層	-	-	-	胴部	タタキ/タタキ		171
581	土師器	坏	Ⅱ群	Ⅰ A 1 a21・13 p-q	Ⅱ層	(141)	50	70	口→底部	回転ナデ/ミガキ・黒色瓦葺	底部縁結帯切り	171
582	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	Ⅱ 渚原区北東隅 (S305南辺)	I層	-	-	-	口縁部	軸目文/		172
583	縄文土器	器台?	Ⅱ群	Ⅱ 渚原区北東隅 (S305北側)	Ⅱ層	-	-	-	底部	LR/		172
584	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	I C 19・20 1・m	Ⅱ層	-	-	-	胴部	LR→底縁、斜突/		172
585	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	Ⅱ 渚原区北東隅 (S305南側)	I層	-	63	66	胴→底部	LR?/		172
586	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	Ⅱ 渚原区北東隅 (S305北側)	I層	-	-	-	胴部	RL→底縁/		172
587	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	I C 24・25 q-s・II C 1・2 q-s (S164・55北東隅)	I層	-	-	-	口縁部	LR→器り消し・沈線/		172
588	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	Ⅱ 渚原区北東隅 (S305南側)	I層	(230)	67	-	口縁部	RL/	赤み大きい	172
589	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	Ⅱ 渚原区北東隅	I層	-	59	(114)	底部	LR?/	器面剥落	172
590	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	I C 24・25 q-s・II C 1・2 q-s (S164・55北東隅)	I層	-	-	-	胴部	LR→器り消し・沈線/		172
591	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	Ⅱ B 7-9 u-w	Ⅳ層	-	-	-	口縁部	LR→器り消し・沈線/	スス	172
592	縄文土器	深鉢	Ⅰ群	I A 23-25 p-r	Ⅰ層	-	-	-	胴部	LR→器り消し・沈線/		172
593	縄文土器	深鉢	Ⅲ-Ⅳ層	I A 23-25 p-r	Ⅲ-Ⅳ層	-	82	(130)	胴→底部	ナデ/	コケ	172
594	弥生土器	深鉢	Ⅳ層	Ⅱ B 7-9 u-w	Ⅳ層	-	-	-	胴部	ナデ/		172
595	弥生土器	深鉢	Ⅳ層	Ⅱ B 7-9 u-w	Ⅳ層	-	-	-	口縁部	LR/		172
596	弥生土器	深鉢	Ⅳ層	Ⅱ B 7-9 u-w	Ⅳ層	-	-	-	胴部	LR→底縁 (山・平) /		172
597	弥生土器	深鉢	Ⅳ層	Ⅱ B 7-9 u-w	Ⅳ層	-	-	-	胴部	LR→底縁 (山・平) /		172
598	弥生土器	深鉢	Ⅳ層	Ⅱ B 7-9 u-w	Ⅳ層	-	-	-	口縁部	LR→沈線/	スス	172
599	弥生土器	壺?	Ⅰ群	Ⅱ C 8-10 b-d	I層	-	-	-	口縁部	隆帯/		173
600	弥生土器	壺	Ⅳ層	Ⅱ B 9・10 y・II C 9・10a	Ⅳ層	-	-	-	口縁部	沈線/		173
601	弥生土器	壺	Ⅲ層	Ⅱ C 8 y・10 y・II C 9・10a	Ⅲ層	-	-	-	胴部	RL→器り消し・沈線/		173
602	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	Ⅱ C 8 y・10 y・II C 9・10a	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	RL→器り消し・沈線/	補修孔	174
603	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	Ⅱ C 3 j (SX16南西側)	Ⅱ層	-	-	-	口→胴部	RL→器り消し・沈線/		173

出展 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外周/内面)	備考	図版 No.	写真 No
604	縄文土器	深鉢	I群	ⅡC 8 m (SK19周壁)	I層	-	-	-	口縁部	L R L 1 /		173	163
605	縄文土器	深鉢	-	溝敷区南東側 (SK2南側)		-	-	-	口縁部	L R /		173	163
606	縄文土器	深鉢	-	溝敷区南東側 (SK2南側)		-	-	-	胴部	L R → 沈龍 /		173	163
607	縄文土器	深鉢	-	ⅡC 8 - 10 b - d	I層	-	-	-	胴部	単輪結帯1類 /		173	163
608	縄文土器	深鉢	V群	溝敷区南東側	覆瓦	-	-	-	口縁部	L R → 隆帯 /		173	163
609	縄文土器	深鉢	-	ⅠA 23 - 25 p - r	Ⅱ層	-	-	-	底部	ナデ /	底部部代痕?	173	163
610	縄文土器	深鉢	V群	ⅠA 23 - 25 p - r	Ⅲ層	-	-	-	胴部	L R → 隆帯 /		173	163
611	縄文土器	深鉢	-	ⅠA 23 - 25 p - r	Ⅱ層	-	-	-	胴 - 底部	L R /		173	163
612	縄文土器	深鉢	I群	ⅡB 7 - 9 u - w	灰土	-	-	-	胴部	隆帯 → 平ミ /		173	163
613	縄文土器	深鉢	I群	ⅡB 7 - 9 u - w		-	-	-	口縁部	円形押圧 /		173	163
614	縄文土器	深鉢	V群	ⅡB 7 - 9 u - w	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	沈龍 /		173	163
615	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	ⅡB 7 - 9 u - w	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	隆帯 /		173	163
616	縄文土器	深鉢	I群	ⅡB 7 - 9 u - w	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	結束縄文?・刺突 /		173	163
617	縄文土器	深鉢	V群	ⅡC 8 - 10 b - d	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	L R → 隆沈龍 /		173	163
618	縄文土器	深鉢	Ⅲ群	ⅡB 8 - 9 w (SK110西側)	I層	-	-	-	口縁部	縞子状隆帯 /		173	163
619	弥生土器	甕	赤穴式	溝敷区北東側	I層	-	-	-	胴部	交互刺突 /		173	164
620	縄文土器	深鉢	Ⅱ群	溝敷区南東側	I層	-	-	-	胴部	沈龍・刺突 /	コゲ	174	164
621	縄文土器	深鉢	Ⅳ群	ⅡC 10 j (G 6西側)	I層	-	-	-	胴部	L R・R L → 沈龍 /		174	164
622	縄文土器	深鉢	I群	ⅡC 10 j・k (G 6東側)	I層	-	-	-	胴部	R L /	継ぎ多い	174	164
623	縄文土器	深鉢	V群?	ⅡC 8 - 10 b - d	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	R L → 隆沈龍 /		174	164
624	縄文土器	深鉢	-	ⅡB 5 - 6 u - v (SA01 周壁)	Ⅱ層	-	-	-	胴部	L R → 刺突 /		174	164
625	縄文土器	深鉢	-	ⅡB 7 - 9 u - w	Ⅱ層	-	-	-	胴部	単輪結帯1類 /		174	164
626	縄文土器	深鉢	-	ⅡC 5 m (SXW03付込)	I層	-	[3.9]	(10.0)	底部	L R /		174	164
627	縄文土器	深鉢	-	ⅡC 12 j (SK122南東側)	I - Ⅱ層	-	-	-	底部	ナデ /		174	164
628	縄文土器	深鉢	V群	ⅡC 3 j (SK16南西側)	I層	-	-	-	胴 - 底部	L R → 磨り消し・沈龍 /	破片4点	174	164
629	土加砂器	壺	-	SI01 掘内	I層	-	[5.5]	(12.2)	底部	ナデ / ナデ	底部本番痕	174	164
630	須恵器	大甕	-	SI03	埋積土	-	-	-	胴部	タタキ /		135	164
631	縄文土器	深鉢	V群	SXW03 北東サフトレンチ	埋積土	-	-	-	口縁部	L R ? → 磨り消し・沈龍 /		-	164
632	縄文土器	深鉢	-	SXW03 西区	黒色土	-	-	-	胴部	L R → 磨り消し・沈龍 /		-	164
633	縄文土器	深鉢	-	SF07 北側	2層上側	-	-	-	口縁部	L R → 隆帯 /		-	164
634	須恵器	甕?	-	SF08南側	黒色土	-	-	-	胴部	ナデ? /	焼成不良	-	164
635	縄文土器	深鉢	-	SF17南側	埋積土	-	-	-	胴部	ミガサ / ミガサ	赤粉・土加砂か	-	164
636	縄文土器	深鉢	-	SK07	埋積土	-	-	-	口縁部	沈龍 /		-	164

出帆 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様 (外面/内面)	備考	図版 No.	写真 No
652	縄文土器	深鉢	V群	SK119 南側	茶褐色土	-	-	-	胴部	不明	赤彩	-	164
658	縄文土器	深鉢	V群	SK141・144 西側	黒褐色土	-	-	-	口縁部	RL→橙沈澱/	-	-	164
659	縄文土器	深鉢	-	P279	黒褐色土・中位	-	-	-	口縁部	ナテ? /	-	-	164
660	縄文土器	深鉢	-	SX04	地積土	-	-	-	口縁部	LR? /	-	-	164
641	縄文土器	深鉢	V群	調査区北東隅 (S305 周辺)	I層	-	-	-	口縁部	RL→橙帯 /	-	-	164
642	縄文土器	深鉢	V群	調査区北東隅 (S305 周辺)	I層	-	-	-	口縁部	LR→磨り消し・沈澱 /	-	-	164
643	縄文土器	深鉢	-	HC1n (SH12 付近)	I層	-	-	-	胴部	LR /	灰土土器小	-	164
644	縄文土器	深鉢	V群	IC19・20 1・m	I層	-	-	-	口縁部	磨り消し・沈澱→軽沈 /	-	-	164
645	縄文土器	深鉢	V群	IC19・20 1・m	II層	-	-	-	口縁部	RL→橙沈澱 /	-	-	164
646	縄文土器	深鉢	V群	IC19・20 1・m	I層	-	-	-	口縁部	L? /	器面磨耗	-	164
647	縄文土器	深鉢	-	調査区北東隅	I層	-	-	-	口縁部	LR /	-	-	164
648	縄文土器	深鉢	-	調査区北東隅 (SK62 周辺)	I層	-	-	-	胴部	RL /	-	-	164
649	縄文土器	深鉢	I群	IC8m (S149 周辺)	I層	-	-	-	胴部	LR→磨り消し・沈澱	-	-	165
650	縄文土器	深鉢	-	IC7m (S149 北側)	I層	-	-	-	口縁部	ナテ? /	-	-	165
651	縄文土器	深鉢	-	IC5n (S149 周辺)	I層	-	-	-	口縁部	沈澱・器体押圧 /	-	-	165
652	縄文土器	深鉢	-	IC5n (S149 周辺)	I層	-	-	-	口縁部	LR /	-	-	165
653	縄文土器	深鉢	-	IC5n (S149 周辺)	I層	-	-	-	底部	不明	器面剥落	-	165
654	縄文土器	深鉢	-	IC8-10 b-d	II層	-	-	-	底部	単軸筋条体? /	底部剥代痕	-	165
655	縄文土器	深鉢	V群	IC9・10 y・IC9・10a	II層	-	-	-	胴部	LR→磨り消し・沈澱・磨し引き /	-	-	165
656	縄文土器	深鉢	-	IC9・10 y・IC9・10a	II層	-	-	-	底部	LR /	-	-	165
657	縄文土器	深鉢	V群	IC7-9 u-w	I層	-	-	-	口縁部	LR?→橙沈澱 /	-	-	166
658	縄文土器	深鉢	I群?	IC7-9 u-w	II層	-	-	-	口縁部	器体押圧 /	器面剥代痕	-	166
659	縄文土器	深鉢	V群	IC8・9 w (SK110 西側)	I層	-	-	-	口縁部	LR→橙帯 /	-	-	165
660	縄文土器	深鉢	V群	IC5・6 u・v (SA01 周辺)	II層	-	-	-	口縁部	RL→沈澱 /	-	-	165
661	縄文土器	深鉢	V群	IC7-9 u-w	II層	-	-	-	口縁部	RL→橙沈澱 /	-	-	165
662	縄文土器	深鉢	-	IC2j (S152 南側)	I層	14.0	17.0	17.0	底部	LR /	底部剥代痕	-	165
663	縄文土器	深鉢	-	調査区北東隅 (SK62 北側)	I層	-	-	-	口→胴部	LR /	-	-	165
664	縄文土器	深鉢	-	IC8-10 b-d	II層	-	[28]	6.5	底部	ナテ /	底部剥代痕	-	165
665	縄文土器	深鉢	-	IC5・6 l (S147・48 西側)	I層	-	[30]	6.0	底部	ナテ /	-	-	165
666	縄文土器	深鉢	-	IC7・8 l	I層	-	-	-	胴部	LR /	-	-	165
667	縄文土器	深鉢	V群	調査区南東隅	II→II層	-	-	-	口縁部?	沈澱 /	赤彩	-	165
668	縄文土器	深鉢	-	調査区南東隅 (調査中掘 掘 SK117 周辺)	I層	-	-	-	口縁部	LR /	-	-	165

相模 No.	種別	器種名	分類	出土遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	調査・文様(外周/内周)	備考	図版 No.	写真 No
668	縄文土器	深鉢	Ⅴ群	ⅡC 8 ~ 10 b ~ d	Ⅱ層	-	-	-	口縁部	縞り柄シ・沈線→刺突/ 隆帯ノ	-	-	165
670	縄文土器	深鉢	Ⅴ群	ⅡC 7 j (南16北側)	Ⅰ層	-	-	-	口縁部	隆帯ノ	-	-	165
671	縄文土器	深鉢	Ⅴ群	調査区北東隅	Ⅰ層	-	-	-	胴底	L R→隆帯ノ	底部刺突痕	-	165
672	縄文土器	深鉢	-	調査区北東隅 (S62北側)	Ⅰ層	-	[24]	(90)	底部	不明	底部刺突痕	-	165
673	縄文土器	深鉢	-	ⅡC 22 k (SK143・144 付近)	埋孔	-	-	-	底部	不明	底部刺突痕	-	165
674	縄文土器	深鉢	-	ⅡC 2・3 j・k (SI51 周辺)	表土	-	-	-	口~胴部	ナデノ	-	-	165
675	弥生土器	深鉢	中期後半	ⅡB 7 ~ 9 u ~ w	Ⅳ層	-	-	-	胴底	L Rノ	-	-	165
676	弥生土器	深鉢	中期後半	ⅡB 7 ~ 9 u ~ w	Ⅳ層	-	-	-	胴底	L Rノ	-	-	165
677	弥生土器	深鉢	砂坑式	ⅡB 7 ~ 9 u ~ w	Ⅳ層	-	-	-	口縁部	沈線ノ	-	-	165
678	弥生土器	深鉢	中期後半	ⅡB 7 ~ 9 u ~ w	Ⅳ層	-	-	-	胴底	L R→沈線ノ	-	-	166
679	土師器	壺	-	調査区北東隅 (SD06 周辺)	Ⅰ層	-	-	-	胴底	ハケノハヤ	-	-	166



第9表 土製品観察表

図号 No.	図名	出土地点	部位	寸法 (cm)			重量 (g)	備考	図版 No.	写真 No.
				長さ	幅	厚さ				
680	不明	SI01 南西区	陶器土中穴	62.0	4.8	1.1	15.8		174	166
681	土器片/片断	SI01 北西区	灰褐色土	65.0	14.1	0.8	14.6		174	166
682	土器片/片断	SI01	灰褐色土	66.7	15.7	1.1	32.4		174	166
683	土器片/片断	SI07 南東区	灰褐色土	65.0	11.0	1.0	17.9		174	166
684	土器片/片断	2層跡下穴	2層跡下穴	4.4	4.8	0.7	12.3		174	166
685	土器片/片断	II C 3 J	灰褐色土	4.9	4.4	0.9	20.46		174	166
686	粘土塊	I A 36 ~ 18 t ~ u	1層	5.7	5.9	2.1	80.7		174	166
687	粘土塊	I C 19 ~ 20 t ~ m	1層	-	-	-	27.94		-	166

※寸法欄の「」は残存寸法を示す

第10表 製造土器観察表

図号 No.	出土地点	部位	残存部位	寸法 (cm)		重量 (g)	調製1外面/内面	外面色調	図版 No.	写真 No.
				器高	器径					
688	SI17 南東区トロンチ	2-3層 底部直上	胴-底部	62.0	64.5	20	胴子・胴肩入/ナナ	腹~にふい非褐色	175	166
689	SI17 南東区トロンチ	2-3層 底部直上	胴-底部	16.3	64.5	14	ナナ/ナナ	腹~にふい非褐色	175	166
690	SI17 南東区トロンチ	2-3層 底部直上	底部	61.2	66.9	19	ナナ/ナナ	にふい非褐色	175	166
691	SI17 南東区トロンチ	2層 底部直上	胴部	16.4	-	14	ナナ/ナナ	胴底~にふい腹	175	166
692	SI18	底部直上	底部	17.3	66.7	17	ナナ/ナナ	腹~にふい非褐色	176	167
693	SI17 南東区トロンチ	3層 底部直上	胴部	111.0	-	15	ナナ/ナナ	にふい非褐色	176	167
694	SI18	底部直上	底部	62.0	-	26	ナナ/	褐色	176	167
695	SI18	2層 底部直上	口縁部	84.0	-	11	ナナ/ナナ	褐色	176	167
696	SI17 南東区トロンチ	2層 底部直上	胴-底部	66.2	-	13	ナナ・胴肩入/ナナ	褐色	176	167
697	SI18 南東区	底部直上	底部	14.0	-	16	ナナ・胴肩入/	褐色	176	167
698	SI17 南東区トロンチ	2層 底部直上	口縁部	33.1	-	13	ナナ/ナナ	褐色	176	167
699	SI17 南東区トロンチ	2層 底部直上	口縁部	53.0	-	15	ナナ/ナナ	褐色	176	167
700	SI17 南東区トロンチ	腹上	口縁部	62.8	-	12	ナナ/ナナ	褐色	176	167
701	SI17 南東区トロンチ	3層 底部直上	口縁部	14.0	-	14	ナナ/ナナ	褐色	176	167
702	SI17 南東区トロンチ	腹上	口縁部	14.0	-	12	ナナ/ナナ	にふい非褐色	176	167
703	SI18	底部直上	口縁部	14.8	-	13	ナナ/ナナ	にふい非褐色	176	167
704	SI18	底部直上	口縁部	14.3	-	12	ナナ/ナナ	褐色	176	167
705	SI18	底部直上	口縁部	32.1	-	13	ナナ/ナナ	褐色	176	167
706	SI18	底部直上	口縁部	17.1	-	11	ナナ/ナナ	褐色	176	167
707	SI18	底部直上	口縁部	17.1	-	12	ナナ/ナナ	褐色	176	167
708	SI18	底部直上	口縁部	22.7	-	12	ナナ/ナナ	にふい非褐色	176	167
709	SI18	底部直上	口縁部	22.6	-	10	ナナ/ナナ	褐色	176	167
710	SI18	底部直上	口縁部	22.1	-	10	ナナ/ナナ	褐色	-	167

※寸法欄の「」は残存寸法を示す

第 11 表 剥片石器観察表

掲載 No.	器種	分類	出土地点	層位	計測値 (cm)		重量 (g)	石材	備考	図版 No.	写真 No.	
					長さ	厚さ						
S1	石鏃	銀Ⅰ	S01	1層	2.80	2.10	4.50	頁岩		177	168	
S2	石鏃	銀Ⅱ	S01 西区	埋積土上位 黒褐色土	2.00	1.60	0.45	1.00	頁岩	177	168	
S3	石鏃	銀Ⅱ	S01 西区	埋積土上位 黒褐色土	3.00	1.90	0.55	2.40	柱状頁岩	177	168	
S4	石鏃	銀Ⅳ	S01 南西区	埋積土	2.50	1.60	0.25	0.90	頁岩	177	168	
S5	石鏃	銀Ⅱ	S01 南東区	埋積土下位 茶褐色土	1.85	1.50	0.35	0.90	頁岩	177	168	
S6	石鏃	銀Ⅱ	S01 中央・北中央部	埋積土中位	2.10	1.25	0.50	1.10	頁岩	177	168	
S7	石鏃	銀Ⅱ	S01 南東区	埋積土下位 茶褐色土	3.30	1.85	0.60	3.00	頁岩	177	168	
S8	石鏃		S01	黒色土	10.65	2.30	1.40	11.00	頁岩	177	168	
S9	石鏃		S01 西端	埋積土中位 黒色土	5.05	2.55	0.95	36.70	頁岩	177	168	
S10	石鏃	泥Ⅰ	S01	1層	6.35	1.70	0.40	4.70	頁岩	177	168	
S11	石鏃	泥Ⅰ	S01 南西区	9層以下	4.70	1.35	0.50	4.10	頁岩	177	168	
S12	石鏃	泥Ⅰ	S01 南西区	埋積土中位	4.00	1.55	0.65	5.40	頁岩	177	168	
S13	石鏃	泥Ⅱ	S01 南西区	埋積土	2.90	3.40	0.55	4.00	頁岩	177	168	
S14	石鏃		S01 南西区	9層以下	4.10	2.10	1.20	7.20	頁岩	177	168	
S15	石鏃		S01 南東区	埋積土	4.25	1.65	1.25	6.10	頁岩	177	168	
S16	石鏃		S01-P43	埋積土	7.40	3.20	1.10	24.50	頁岩	177	168	
S17	削器		S01	埋積土上位	3.05	4.00	1.00	10.90	頁岩	178	168	
S18	石鏃	銀Ⅱ	S01	黒色土	2.90	1.50	0.45	2.10	頁岩	-	168	
S19	石鏃	銀Ⅱ	S01 ベルト中央部	埋積土	3.95	1.40	0.45	2.90	頁岩	-	168	
S20	石鏃	銀Ⅱ	S01 ベルト中央部	埋積土上位	3.35	2.85	0.50	2.80	頁岩	-	168	
S21	石鏃	銀Ⅱ	S01 ベルト中央部	埋積土中位	3.60	1.60	0.45	2.20	頁岩	-	168	
S22	石鏃	銀Ⅱ	S01 ベルト中央部	埋積土中位	2.40	1.45	0.45	2.10	頁岩	-	168	
S23	石鏃	泥Ⅰ	S01	黒色土	3.15	4.00	0.55	7.50	頁岩	-	168	
S24	石鏃	泥Ⅰ	S01 南東区	埋積土	4.20	2.10	0.35	3.40	頁岩	-	168	
S25	石鏃	泥Ⅰ	S01 南西区	埋積土中位	3.00	2.90	0.85	8.50	頁岩	-	168	
S26	石鏃	泥Ⅰ	S01 南西区	9層以下	4.00	2.05	0.40	3.10	頁岩	未成品	-	169
S27	石鏃	泥Ⅰ	S01 南西区	埋積土	4.30	1.85	0.60	4.50	頁岩	未成品	-	169
S28	削器		S01 南西区	9層以下	2.25	2.75	0.95	9.40	頁岩	-	169	
S29	不明		S01 西区	上位埋積土	6.60	2.80	1.15	26.90	頁岩	-	169	

根拠 No.	岩種	分期	出土地点	層位	計測値 (cm)		重量 kg	石種	備考	図版 No.	写真 No.
					長さ	厚さ					
S20	石炭	Ⅱ-1	SH05 中央区	塊積土	3.30	1.90	4.70	頁岩		178	169
S31	石炭	記1	SH05	1層	0.79	2.40	0.75	7.20	頁岩	-	169
S32	石炭	Ⅱ-1	SH06	黑色土	2.65	1.65	0.20	1.00	頁岩	178	169
S33	石炭	Ⅱ-2	SH06 北区	塊積土	3.25	2.40	0.45	1.40	頁岩	178	169
S34	石炭	Ⅱ-2	SH06 西<4>ト	塊積土	0.50	2.00	0.45	2.20	頁岩	178	169
S35	石炭	Ⅱ-2	SH06 南西区	塊積土+中位	6.30	3.00	0.90	16.50	頁岩	178	169
S36	石炭	Ⅱ-2	SH06	黑色土	2.70	1.65	0.40	1.50	頁岩	-	169
S37	石炭	Ⅱ-2	SH11 北<4>ト	塊積土+中位	3.00	2.05	1.05	7.50	頁岩	178	169
S38	附砂	Ⅱ-2	SH12 北<4>ト	塊積土	4.00	3.30	1.15	19.20	頁岩	178	169
S39	附砂	Ⅱ-2	SH12	塊積土	4.60	2.80	1.00	15.20	頁岩	-	169
S40	芥?	Ⅱ-2	SH13 北・南東区	塊積土	4.00	4.70	1.00	22.20	頁岩	178	169
S41	石炭	Ⅱ-2	SH17 北東区	1層	0.60	2.35	0.50	2.30	頁岩	178	169
S42	石炭	Ⅱ-2	SH18	床面層積土	3.50	1.30	0.55	1.40	頁岩	178	169
S43	石炭	Ⅱ-2	SH17 北東区	1層	2.40	2.30	0.60	2.20	頁岩	-	169
S44	石炭	Ⅱ-1	SH17・18 北東区トロンチ	塊積土	2.90	2.50	1.20	7.30	頁岩	-	169
S45	石炭	記1	SH18 カマド付瓦	床面直上	4.00	1.55	0.85	6.40	頁岩	-	169
S46	石炭	Ⅱ-2	SH20	塊積土	4.90	1.05	0.45	2.30	頁岩	178	169
S47	石炭	Ⅱ-2	SH22	塊積土	6.50	3.05	0.95	15.90	頁岩	179	170
S48	石炭	Ⅱ-2	SH27 1区	塊積土	3.80	1.55	0.55	2.30	頁岩	179	170
S49	石炭	Ⅱ-2	SH27 2区	塊積土	3.05	2.40	0.45	1.90	頁岩	-	170
S50	石炭	Ⅱ-2	SH27 7区	塊積土	2.30	1.70	0.40	1.70	頁岩	-	170
S51	石炭	Ⅱ-1	SH42 南<4>ト	3層	1.45	1.30	0.50	0.69		179	170
S52	石炭	Ⅱ-2	SH43 南側	根埋瓦	2.30	1.50	0.50	1.53		179	170
S53	石炭	Ⅱ-1	SH43 南長弥部	塊積土	4.25	1.65	0.70	3.55		179	170
S54	石炭	Ⅱ-2	SH47・48 西区	塊積土+中位	2.35	1.75	0.50	1.32		179	170
S55	石炭	Ⅱ-2	SH47・48 西区 沢跡	黑色土	41.50	1.15	0.30	0.37		179	170
S56	石炭	Ⅱ-2	SH07	黑色土	2.25	1.50	0.40	1.20	頁岩	179	170
S57	石炭	Ⅱ-2	SH07	黑色土	2.30	1.60	0.50	1.20	頁岩	179	170
S58	石炭	Ⅱ-2	SH07	塊積土+中位	2.40	1.40	0.40	1.10	頁岩	179	170
S59	石炭	Ⅱ-2	SH07	黑色土	4.25	1.80	0.55	3.30	頁岩	179	170

根拠 No.	器種	分期	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	石様	備考	図版 No.	写真 No.
					長さ	幅	厚さ					
S60	石鏃		SK07 北西隅	埋没乱	6.8/8	2.15	1.05	15.40	頁岩		179	170
S61	石鏃	銀Ⅱ	SK07	黒色土	3.4/0	1.50	0.45	2.80	頁岩		-	170
S62	石鏃	銀Ⅰ	SK07	埋積土上層	2.5/0	1.50	0.40	1.50	頁岩		-	170
S63	不明		SK07	1~4層	3.25	4.25	2.00	33.30	頁岩		-	170
S64	石鏃	銀Ⅰ	SK10	1層	2.5/0	1.70	0.30	1.30	頁岩		179	170
S65	石鏃	銀Ⅰ	SK10	埋積土上位	2.9/0	2.60	0.50	4.50	頁岩		179	170
S66	石鏃		SK12	埋積土上位	11.0/0	3.40	1.35	42.30	頁岩		179	170
S67	石鏃		SK52	埋積土中位	7.45	1.60	0.80	7.90	頁岩		180	170
S68	石鏃	銀Ⅱ?	SK52	埋積土中位	3.70	2.30	0.55	4.40	頁岩	未成品	-	170
S69	附設		SK54	埋積土	5.50	3.95	1.65	37.80	頁岩		180	170
S70	石鏃	銀Ⅰ	SK70	埋積土	4.40	2.90	1.05	12.40	頁岩		180	170
S71	石鏃	銀Ⅱ	SK72	埋積土	2.50	1.85	0.35	1.40	頁岩		180	170
S72	石鏃	銀Ⅱ	SK73	埋積土	3.6/0	1.50	0.50	2.40	頁岩		180	170
S73	石鏃		SK143 南側	茶褐色土	3.95/0	4.10	1.30	16.62			180	171
S74	石鏃	銀Ⅱ	P171	黒色土	2.95/0	2.10	0.70	2.78			180	171
S75	石鏃	銀Ⅱ	遺物区倉庫 1区	1層	2.70	1.65	0.45	1.80	頁岩		180	171
S76	石鏃	銀Ⅱ	遺物区倉庫 1区	1層	2.75	1.70	0.75	2.20	頁岩		180	171
S77	石鏃	銀Ⅰ	遺物区倉庫 1区	1層	3.30	1.45	0.55	2.40	頁岩		180	171
S78	石鏃	銀Ⅱ	遺物区倉庫 1区	1層	3.85	1.60	0.55	2.20	頁岩		180	171
S79	附設		遺物区倉庫 1区	1層	4.20	3.40	0.95	10.50	頁岩		180	171
S80	石鏃		遺物区倉庫 4区	1層	3.6/0	2.95	0.56	12.90	頁岩		180	171
S81	石鏃	銀Ⅰ	遺物区倉庫 2区	1層	2.40	1.80	0.35	1.60	頁岩		-	171
S82	石鏃	銀Ⅱ	遺物区倉庫 4区	1層	3.3/0	1.60	0.55	3.20	頁岩		-	171
S83	石鏃	銀Ⅰ	遺物区倉庫 1区	1層	2.90	1.50	0.60	1.80	頁岩		-	171
S84	石鏃	銀Ⅰ	遺物区倉庫 3区<ε>εト	1層	3.90	2.40	0.40	2.90	頁岩		-	171
S85	石鏃	此耳	遺物区倉庫 1区北壁	1層	4.6/0	3.70	0.80	8.40	頁岩	未成品	-	171
S86	附設		遺物区倉庫 2区	1層	2.70	1.90	0.85	3.70	頁岩		-	171
S87	附設		遺物区倉庫 1~2層<ε>εト	1層	5.60	3.10	1.00	19.30	頁岩		-	171
S88	二次加工		遺物区倉庫 1区	1層	3.6/0	1.90	0.60	5.70	頁岩		-	171
S89	不明		遺物区倉庫 1~2区<ε>εト	2層	4.50	2.70	1.10	18.10	頁岩		-	171

編號 No.	岩種	分期	出土地點	層位	計測值 (cm)		重量 (g)	石樣	備考	圖版 No.	頁碼 No.	
					長さ	厚さ						
S90	石塊	銀I	IA 12-14 r+s (SD9-20期)	I層	3.05	1.25	1.80	頁岩		181	171	
S91	石塊	銀II	調査区北西隅 (S09・10 附近)	I層	3.40	1.90	0.40	2.30	頁岩		181	171
S92	石塊	銀III	II B 7-9 u-x	IV層	0.210	1.40	0.45	0.67			181	171
S93	石塊	銀IV	II B 7-9 u-w	IV層	0.429	1.00	0.70	3.01			181	171
S94	石塊	銀V	II C 6 m (SXW03 東側)	I層	0.485	2.25	1.30	10.05			181	171
S95	石芯	銀VI	IA 15-17 o-q	I層	8.20	2.35	0.95	27.20	頁岩		181	171
S96	石芯	銀VII	IA 12-14 r+s (SD9-20期)	I層	4.70	5.80	0.70	12.80	頁岩		181	172
S97	石塊	銀VIII	IA 18 c-e	I層	5.20	3.40	0.70	19.40	頁岩		181	172
S98	石塊	銀IX	II C 8 j-k	擾乱	0.320	3.45	1.10	5.74			181	172
S99	石塊	銀X	II C 2-4 j-l (SE3 附近)	I層	0.215	1.80	0.75	2.79	珪瑯		181	172
S100	石塊	銀XI	SD97	床面礫粘土	3.70	1.65	0.60	2.80	頁岩		-	172
S101	不明		SD97 南区	塊積土	6.00	4.50	2.10	31.60	頁岩		-	172
S102	石塊	銀XII	SE24	塊積土中位	0.240	1.90	0.50	2.10	頁岩		-	172
S103	石塊	銀XIII	SE35	黑色土	2.75	1.70	0.45	1.80	頁岩		-	172
S104	石塊	銀I	SE55H01 付近	床面直上	0.230	0.155	0.50	1.53	頁岩		-	172
S105	石塊	銀II	調査区南西隅 (S01 西側)	I層	3.30	1.90	0.40	1.70	頁岩		-	172
S106	石塊	銀III	IA 19 g (F04 東側)	I層	3.85	1.85	0.45	1.50	頁岩		-	172
S107	石塊	銀IV	IA 14-15 l-m	I層	2.95	2.00	0.50	2.80	頁岩		-	172
S108	石塊	銀V	調査区北東隅 (SE05 東辺)	I層	0.155	1.20	0.30	0.27	珪瑯?		-	172
S109	石塊	銀VI	II B 7-9 u-w	IV層	1.95	1.00	0.20	0.38	頁岩		-	172
S110	石塊	銀VII	II C 8-10 b-d	IV層	2.55	1.20	0.30	0.68	頁岩		-	172
S111	石塊	銀VIII	II B 7-9 u-x	IV層	2.80	0.95	0.65	1.38	頁岩		-	172
S112	石塊	銀IX	II B 8-9 t-u	I層	3.30	1.75	0.60	4.04	頁岩		-	172
S113	石芯	銀X	II C 5-9 l	I層	0.380	2.00	0.50	6.72	頁岩		-	172
S114	石塊	銀XI	調査区北東隅 (SE2 北側)	I層	0.470	3.30	0.90	14.42	頁岩		-	172
S115	附砂	銀XII	IA 12-14 r+s (SD9-20期)	I層	4.00	1.90	0.55	4.20	頁岩		-	172
S116	附砂	銀XIII	IA 12-14 r+s (SD9-20期)	I層	5.70	1.30	0.50	3.10	頁岩		-	172
S117	石塊	銀XIV	II B 9 w	IV層	3.30	0.85	0.55	1.58	頁岩		-	172
S118	二次加工	不明	SD1 範圍内	I層	3.00	2.50	0.80	6.10	頁岩		-	172
S119	不明		調査区西隅 (SE80 附近)	I層	6.10	4.30	3.65	121.00	1/50倍厚さ中位		-	172

第12表 碑石路観察表

掲載 No.	器械	分類	出土地点	方位	計測値 (cm)		重量 (g)	石材	備考	図版 No.	写真 No.	
					全長	厚さ						
S120	不明		S01 南区	塙積土上位	6549	365	184	凝灰岩 北上山塊(八木沢・浄土ヶ浜)		182	173	
S121	磨石		S01 中央ヶ丘ト	1層	7608	420	2408	花崗岩		182	173	
S122	磨石		S01 南西区	1層	15255	515	485	頁岩		182	173	
S123	砥石		S01 南西区	1層	815	550	490	花崗岩		182	173	
S124	磨製石斧	磨斧Ⅱ	S01 南東区	塙積土	6500	390	240	砂岩		182	173	
S125	磨製石斧	磨斧Ⅰ	S01 北西区	塙積土下位	6500	540	350	石炭灰岩 北上山塊		182	173	
S126	磨石		S01 南東区御存堂	塙積土	1110	985	355	712	花崗岩 北上山塊	182	173	
S127	砥石		S01 南西区	塙積土中位	6935	670	650	4402	石炭灰岩 北上山塊	182	173	
S128	石鐔		S01 南区	塙積土	640	520	300	1886	花崗岩	-	173	
S129	石鐔		S02 ベルト	1層	470	370	400	712	花崗岩	182	173	
S130	磨製石斧	磨斧Ⅱ?	S02 西端	塙積土	11065	610	255	2746	砂岩 北上山塊	182	173	
S131	台石		S02	床面直上	4470	2840	650	62800	石炭灰岩	183	173	
S132	磨石		S06 北ヶ丘ト	塙積土	1070	865	490	6741	花崗岩	183	173	
S133	磨製石斧	磨斧Ⅰ	S06 北ヶ丘ト	1層	10100	425	210	1975	乾灰岩 早進峰山周辺	183	173	
S134	浮子		S06 北ヶ丘ト	塙積土	1100	920	830	2544	輝石 奥羽山塊	-	173	
S135	金床石		S07	黒色土	1210	780	600	8340	石炭灰岩	183	173	
S136	金床石		S07	黒色土	1775	1190	320	11288	花崗岩	183	173	
S137	平甲区扁平打製石器		S07	黒色土	7700	620	270	1972	砂岩	184	173	
S138	磨石		S07 南東区	3層	1150	870	470	7409	石炭灰岩 北上山塊	-	173	
S139	磨石		S07	床面磚築土	630	570	420	2223	石炭灰岩	-	173	
S140	不明		S07	黒色土	11900	330	310	1993	頁岩	-	174	
S141	最勝磔		S11 南ヶ丘ト	1層	16600	755	560	9109	砂岩 北上山塊	支脚板用	184	174
S142	台石		S12	床面直上 No. 1	19960	18880	670	43183	輝石 北上山塊	184	174	
S143	金床石		S15 南端	2層上位	780	750	165	1199	凝灰岩 北上山塊(八木沢・浄土ヶ浜)	184	174	
S144	磨石		S16	2層上位	1240	755	610	8282	石炭灰岩	184	174	
S145	砥石		S16 南東区	床面直上	11853	10653	1195	2008	凝灰岩 北上山塊(八木沢・浄土ヶ浜)	184	174	
S146	金床石		S17 SXW01 周辺	塙積土	4140	2510	1240	185000	花崗岩 北上山塊	185	174	
S147	四石		S17	1層	6700	6700	6210	1651	砂岩	185	174	
S148	磨石		S18	床面直上	1215	900	440	7609	石炭灰岩	185	174	
S149	磨石		S17	1層	1430	690	650	5642	石炭灰岩 北上山塊	185	174	
S150	磨製石斧	磨斧Ⅰ	S17	床面直上	6580	430	240	1148	乾灰岩 早進峰山周辺	185	174	
S151	砥石		S18 南端	底面付置	11750	1180	1075	22637	砂岩 北上山塊	186	175	

掲載 No.	器種	分類	出土地点	部位	計測値 (cm)		重量 (g)	石材	備考	写真 No.
					全長	口径				
S152	台石	SE20	床面直上	床面直上 No. 5	25.60	20.10	6.30	3081.1	伊岩 北上山塊	186
S153	砥石	SE20	床面直上	床面直上	15.30	9.40	3.20	759.5	渡坂岩 北上山塊(八束沢・浄土・沢)	186
S154	砥石	SE33・34	埋石	埋石	11.10	8.40	4.45	597.9	アグライト	186
S155	磨製石斧	SE33・34	埋石	埋石	6.30	4.30	2.60	137.7	伊岩 北上山塊	-
S156	磨石	SE33・34	埋石	埋石	7.40	5.80	2.90	176.5	石炭炭石	186
S157	磨石	SE37 1区	床面直上	床面直上	19.40	7.75	6.45	633.2	アグライト 北上山塊	186
S158	金床石	SE37	床面直上	床面直上	53.80	27.40	15.00	3070.0	花崗岩	187
S159	磨器	SE41	床面直上	床面直上	17.60	6.60	4.70	862.57	凹石	187
S160	磨石	SE42 南東区	床面直上	床面直上	12.45	9.05	6.20	1004.92		187
S161	磨石	SE43	床面直上 No. 1	床面直上 No. 1	19.95	14.30	6.30	2825.76		187
S162	磨製石斧	SE43	床面直上 No. 2	床面直上 No. 2	10.05	4.65	2.50	192.63		187
S163	磨石	SE44	床面直上 No. 3	床面直上 No. 3	21.75	18.20	6.80	4470.0		187
S164	磨石	SE44	床面直上 No. 4	床面直上 No. 4	27.30	16.10	4.30	3009.91		188
S165	磨石	SE44	床面直上 No. 1	床面直上 No. 1	14.90	7.45	4.80	862.46	使用痕	188
S166	凹石	SE44	床面直上 No. 2	床面直上 No. 2	11.90	8.50	5.00	1021.51		188
S167	磨製石斧	SE44 北東区	埋石	埋石	15.71	4.30	2.70	106.8		186
S168	砥石	SE47	埋石	埋石	13.80	8.35	5.40	1065.16	花崗岩	188
S169	砥石	SE47 西側	埋石	埋石	10.71	9.983	4.25	433.02		188
S170	磨製石斧	SE47 東区	埋石	埋石	8.51	4.60	2.15	123.45		188
S171	磨製石斧	SE47 東区 東側部(オアハレン)	埋石	埋石	13.50	1.55	0.85	8.21		188
S172	台石	SE48	床面直上 No. 2	床面直上 No. 2	26.70	24.10	4.30	4547.71		189
S173	台石?	SE48	床面直上 No. 4	床面直上 No. 4	35.00	115.71	3.70	3270.0	花崗岩	189
S174	磨石	SE55H01	砂石	砂石	23.30	14.48	4.70	2883.42		189
S175	台石	SE51	床面直上	床面直上	46.30	19.10	10.50	16000.0		189
S176	磨石	SE51 南東区	埋石	埋石	12.95	7.85	4.65	750.17		189
S177	磨石	SE53	埋石	埋石	12.10	9.10	6.50	1087.07		190
S178	石皿	SE53	埋石	埋石	14.05	14.31	3.90	486.9		190
S179	台石?	SE53	床面直上	床面直上	26.50	18.60	3.90	37.30		177
S180	磨石	SE54・55	床面直上	床面直上	19.91	6.45	5.15	527.91	使用痕	190
S181	砥石	SE54・55	床面直上	床面直上	30.40	19.20	3.31	183.664	埋石	190
S182	磨石	SE55H01	砂石	砂石	13.44	17.70	4.70	1800.68	伊石:転用	190
S183	台石?	SE54・55	床面直上	床面直上	26.10	23.10	11.40	6740.0	花崗岩	190
S184	磨石	SE55H01	直上	直上	15.10	16.71	3.20	564.75		177
S185	磨石	SE55H01 付差	床面直上	床面直上	12.20	7.00	4.10	572.37		-

根拠 No.	器種	分類	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 g	石材	備考	図版 No.	写真 No.
					全長	幅	厚さ					
S186	磨石		SE553H01 付着	床面直上	10.3	12.80	3.00	6.69			-	177
S187	石鏝?		SE58	埋積土中位	7.85	5.45	0.51	282.66			191	177
S188	磨石		SE61	床面直上	14.3	6.85	5.70	883.38	花崗岩		191	177
S189	磨製石斧	磨斧 I	SE63 南西隅	埋積土上位	17.65	13.61	1.90	48.94			191	177
S190	磨製石斧	磨斧 I	SK07	黒色土	10.30	5.30	3.00	282.6	細粒閃緑岩 北上山塊		191	177
S191	磨製石斧	磨斧 I	SK31	埋積土	14.40	12.90	1.50	31.8	細粒閃緑岩 北上山塊		191	177
S192	磨石		SK40	埋積土	18.30	8.60	8.50	1247.9	花崗岩		191	177
S193	石鏝?		SK42	埋積土上位	9.70	9.20	3.70	486.1	ブライサイト 北上山塊 聖徳山層(十二神山組辺)		191	178
S194	平片状扁平打製石器		SK67	埋積土上位	17.70	8.75	3.75	421.5	凝灰岩		192	178
S195	磨石		SK70	埋積土上位	10.80	9.40	4.30	720.2	石灰質岩		192	178
S196	磨石		SK70	埋積土	19.00	6.40	2.75	566.5	砂岩 北上山塊		192	178
S197	砥石		SK80	2層	13.30	7.90	4.05	625.9	凝灰岩 北上山塊		192	178
S198	石鏝?		SK82	1層	15.20	7.40	7.40	1033.0	花崗岩 北上山塊 (八木沢・浄土ヶ沢)		192	178
S199	石鏝?		SK117	埋積土	14.25	14.01	1.00	19.62		磨石か	192	178
S200	磨石		SK120	1層	12.35	7.80	7.10	1086.16			192	178
S201	磨製石斧	磨斧 I?	P54	埋積土上位	6.50	6.80	3.10	175.9	花崗岩	未成品、刃部付 刃の△残存	193	178
S202	石鏝?		P904	埋積土	9.30	8.65	3.50	412.6			193	178
S203	磨石		P312	埋積土	15.31	6.75	5.45	278.48			193	178
S204	台石?		P312	埋積土	22.25	19.20	5.85	3094.5			193	178
S205	磨石		P349	埋積土上位	9.00	6.60	4.45	388.95		炭化物? 片着	193	178
S206	磨石		遺物区倉庫 1区	1層	9.20	5.90	2.50	222.4	石灰質岩		193	178
S207	磨石		遺物区倉庫 3区南側	1層	8.00	5.30	2.60	177.1	花崗岩		193	178
S208	磨石		遺物区倉庫 5区	1層	6.00	5.30	3.90	229.8	花崗岩		193	178
S209	磨石		遺物区倉庫 1区	3層	8.90	6.40	4.50	381.2	ブライサイト		193	178
S210	磨製石斧	磨斧 I	遺物区倉庫 2区	1層	6.85	4.40	3.15	394.6	凝灰岩 早池峰山組辺	砥石に利用	193	178
S211	磨製石斧	磨斧 I	遺物区倉庫 5区南側	3層	9.45	4.50	1.30	89.5	頁岩 北上山塊		193	178
S212	台石		調査区北西隅(S200-10周辺)	I層	6.70	8.50	9.70	736.9	花崗岩		194	179
S213	砥石?		I A 14 - 15 1 - m	II層	14.30	7.00	5.20	788.0	石灰質岩		194	179
S214	砥石		II B 8 - 9 1 - u	I層	12.3	8.30	5.10	696.79			194	179
S215	磨石		調査区北東隅(S205周辺)	I層	13.85	8.65	4.70	772.13			194	179
S216	磨石		II C 8 - 10 b - d	II層	18.65	10.40	6.00	1843.39			194	179
S217	磨石		II C 8e (SF12 西側)	II層	7.50	3.35	0.85	32.66	燧石		194	179
S218	砥石		II B 7 - 9 u - w	I層	17.4	13.81	1.15	31.12			194	179



根拠 No.	器種	分類	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 g	石材	備考	図版 No.	写真 No.
					全長	幅	厚さ					
S219	磁石		II B 7-9 u-w	IV層	8.9	9.45	3.30	299.83			194	179
S220	磨製石斧		II B 13 x (表 G5 東側)	I層	32.80	18.00	13.80	1250.00			195	179
S221	磨製石斧	磨斧 I	調査区北西側	II層	11.70	5.15	3.00	31.30			195	179
S222	磨製石斧	磨斧 I	I A 16 i (榑12 南東側)	I層	11.15	4.60	2.30	159.1			195	179
S223	磨製石斧	磨斧 I	II C 3 m (榑17 西側)	I層	5.30	2.95	1.10	33.08			195	179
S224	磁石		II C 12 i (SK121 西側)	I層	4.65	1.43	1.35	41.28			195	179
S225	石皿		II C 3 m (榑17 北側)	I層	12.1	9.01	4.80	337.27			195	179
S226	磨石		床面直上		7.10	6.60	3.90	21.4				179
S227	磨石		SK13 南東区	埋積土	11.60	2.50	2.30	112.7				179
S228	磨石		SK13 南東区	埋積土	7.30	7.20	5.00	63.8				179
S229	磨石		SK23 南東区西側	5層	11.40	8.00	6.10	82.4				179
S230	磨石		SK24	埋積土中位	14.90	7.60	5.00	906.4				179
S231	磨石		SE9	埋積土	17.75	16.51	3.70	222.38				179
S232	磨石		SK21	埋積土上面	6.80	8.20	3.50	221.6				180
S243	石鏝?		SK86	埋積土	6.10	7.60	6.10	576.9				180
S234	磨石		SK122	埋積土	10.40	8.60	5.00	738.79				180
S235	磨石		SK125	埋積土	11.00	9.20	5.70	843.72				180
S236	不明		P34	埋積土	11.2	12.0	2.3	315.75				180
S237	石鏝?		II B 5 n (SI09 周辺)	I層	7.40	2.80	2.50	80.72				180
S238	磨製石斧	磨斧 II	II C 5-9 i	I層	6.9	3.80	2.35	119.81				180
S239	磨製石斧	磨斧 II	調査区北東隅 (SE05 南側)	I層	6.3	3.90	2.65	118.05				180
S240	磁石		II C 10 j (表 G6 西側)	II層	13.0	11.5	12.8	538.14				180
S241	磨石		II C 3 j (榑19 北側) トレン?	I層	27.40	20.00	3.60	2884.16				180
S242	磨石		II C 10 j (表 G6 西側)	I層	13.5	17.6	2.20	263.77				180
S243	石皿		調査区北西隅	I層	16.3	16.3	1.80	64.87				180

第 13 表 石製品観察表

根拠 No.	器種	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	備考	図版 No.	写真 No.
				全長	幅	厚さ					
S244	玉	SK06 南東区	埋積色土	2.3	1.3	1.8	3.8	滑石		195	180
S245	灰化耳飾	SK07 北東区	埋積土下位	4.5	11.9	0.4	6.9	頁岩		195	180

計測値欄の「?」は残存額を表す

第14表 金属製品観察表

掲載 No.	形態	材質	出土地点	部位	計測値 (cm)		備考	図版 No.	写真 No.	
					長さ	厚さ				
M1	筒状	鉄	S105北区	埴積土上位	[8.2]	1.3	0.15	鉄筒?	196	181
M2	紡錘車	鉄	S106	床面直上	5.2	4.8	0.2	円盤のみ	196	181
M3	刀子	鉄	S110	黒色土	[10.7]	1.5	0.45		196	181
M4	鈔針	鉄	S113SK03	埴積土上位	[4.0]	1.8	0.35		196	181
M5	釘?	鉄	S111南北ベルト南側	床面直上	[2.2]	0.3	0.3		196	181
M6-1	不明	鉄	S111南西区	黒褐色土	[7.6]	1.6	1.0		196	181
M6-2	不明	鉄	S111南西区	黒褐色土	[6.0]	1.0	0.7		196	181
M7	紡錘車	鉄	S12カマド付近	埴積土	[8.9]	0.55	0.45	軸部	196	181
M8	釘	鉄	S112北東区	埴積土	[4.2]	0.6	0.5		196	181
M9	鏃	鉄	S113カマド	埴土職ら瀝り	[4.7]	2.5	0.2	無蓋三角形形	196	181
M10	刀子	鉄	S13南東区	埴積土中位	[18.4]	1.2	0.4		196	181
M11	小刀	鉄	S13東ベルト	埴積土	[8.2]	1.4	0.4		196	181
M12	刀子?	鉄	S14北東区	埴積土	[4.7]	0.9	0.2		196	181
M13	鏃	鉄	S15北東区	埴積土 焼土層	[6.8]	0.5	0.5	基部	196	181
M14	刀子?	鉄	S15北東区	埴積土	[8.3]	1.4	0.4		196	181
M15	鏃状	鉄	S16南東トレンチ		3.4	[2.4]	0.4	足釜具?	196	181
M16	鏃	鉄	S17東西カワトレンチ	黒色土	[5.1]	0.7	0.5	基部	196	181
M17	刀子	鉄	S119	埴積土	[11.9]	1.1	0.3		196	181
M18	刀子	鉄	S120	埴積土	[9.0]	1.4	0.45		196	181
M19	紡錘車	鉄	S120	床面直上 No. 3	[27.3]	5.6	0.4	3点接合	196	181
M20	刀子	鉄	S122		[4.0]	1.5	0.4		197	182
M21	刀子	鉄	S122	床面直上 No. 3	[5.7]	0.85	0.4		197	182
M22	鏃	鉄	S131	埴積土	[11.0]	1.5	0.4	長細筒状	197	182
M23	刀子	鉄	S131	埴積土	[13.0]	1.3	0.3		197	182
M24	刀子	鉄	S131	埴積土	[7.6]	1.2	0.4		197	182
M25	刀子	鉄	S133	床面直上 No. 1	[6.5]	0.8	0.75		197	182
M26	鏃先	鉄	S137 1区	床面直上 No. 1	[2.2]	13.2	0.7		197	182
M27	鏃	鉄	S137 4区		[3.7]	0.5	0.35	基部	197	182
M28-1	刀子	鉄	S137 2区西端	埴積土 下位-床面直上	[11.4]	1.6	1.0	刃部	197	182
M28-2	刀子	鉄	S137 2区西端	埴積土 下位-床面直上	[6.5]	1.4	0.35	同一基部	197	182
M29	釘	鉄	S147北西区	埴積土	[5.7]	0.8	0.7		197	182
M30	刀子	鉄	S163	床面直上 I-2	[7.5]	1.6	0.2	先端部変形	197	182

※計測値欄の「」は現存額を表す

編號 No.	名稱	材質	出土地點	部位	計測值 (cm)			圖章	編號 No.
					長さ	幅	厚さ		
M31 柄	鉄	SK3		床面直上	21.5	1.3	1.0		197 182
M32 釘	鉄	SK07		輪出部	[51]	0.7	0.5		197 183
M33 柄部作	鉄	SK30		2 層	[24]	4.2	0.25		197 183
M34 釘?	鉄	SK30		2 層上段	[80]	1.0	0.45		197 183
M35 小柄	鉄・銅	SK99		埋積土	[79]	1.4	0.3		197 183
M36 釘	鉄	SK102		埋積土	6.0	0.7	0.4		198 183
M37 釘	鉄	SK102		埋積土	6.6	0.75	0.45		198 183
M38 釘	鉄	SK102		埋積土	6.3	0.65	0.45		198 183
M39 釘	鉄	SK102		埋積土	6.1	0.7	0.4		198 183
M40 釘	鉄	SK102		埋積土	[45]	0.7	0.4		198 183
M41 釘	鉄	SK102		埋積土	[43]	0.7	0.4		198 183
M42 母釘	鉄	SK115		埋積土上面	7.5	1.3	0.3		198 183
M43 板状	鉄	P206		埋積土	[97]	1.2	0.2		198 183
M44 刀子	鉄	P334		埋積土	[65]	1.4	0.35		198 183
M45 釘	鉄	SX02		埋積土	[38]	0.7	0.4		198 183
M46 釘	鉄	SX02		埋積土	5.2	0.75	0.4		198 183
M47 鏃	鉄	SI33・34		埋孔	[43]	3.9	0.4		198 183
M48 小柄	鉄・銅	SI33・34		埋孔	[100]	1.4	0.4		198 183
M49 小刀	鉄	SI33・34		埋孔	[86]	2.3	0.3		198 183
M50 母釘	鉄	SI33・34		埋孔	13.2	1.5	0.5		198 183
M51 鏃	鉄	I A 9 m		I 層	[85]	2.6	0.5		198 183
M52 鏃	鉄	I A 13 p		I 層下位	[76]	3.5	0.8		198 183
M53 刀子	鉄	I A 20・21 g - i		I 層	[82]	0.7	0.4		198 184
M54 刀子	鉄	II A 7 - 9 v・w		I 層	[54]	1.8	0.4		198 184
M55 釘	鉄	I A 20・21 g - i		I 層	14.5	1.0	0.7		198 184
M56 釘	鉄	I A 15 - 17a - q		I 層	9.2	0.8	0.6		198 184
M57 母釘	鉄	I A 19・20 b - k		I 層	[89]	1.5	0.4		198 184
M58 母釘	鉄	I C 19 - 22 m - p		I 層	[78]	1.7	0.5		198 184
M59 鏃	鉄	I A 20・21 g - i		I 層	16.4	0.9	0.9		198 184
M60 鏃状	鉄	II C 5 - 6 l・m		I 層	[36]	[26]	[22]		198 184

第15表 羽口観察表

掲載 No.	形種	出土地点	層位	計測値 (cm)		備考	図版 No.	写真 No.
				長さ	内径			
M73	羽口	SH1SKW01	1層	[11.90]	6.70	3.00	200	185
M74	羽口	SH1南西区	床面直上	[4.60]	6.70	6.70	200	185
M75	羽口	SH1SKW01	1層上	[6.70]	-	-	-	185
M76	羽口	SH12南東区	塀積土	[4.30]	6.20	(3.90)	200	185
M77	羽口	SH12南東区	1層	[11.20]	7.20	(4.00)	200	185
M78	羽口	SH17東西ベルト東側	2層上面	[22.90]	8.40	2.60	201	185
M79	羽口	SH17南西区	1層下位	[16.70]	6.90	3.30	201	185
M80	羽口	SH17南土庫中地点	2層	[9.60]	7.60	-	-	186
M81	羽口	SH18キヤット盤	土製品?	[14.10]	6.00	(3.00)	-	186
M82	羽口	SH18キヤット盤	土製品1	[10.50]	6.00	(3.00)	-	186
M83	羽口	SH18	支脚?	[7.70]	6.00	(3.00)	-	186
M84	羽口	SH18	支脚?	[7.20]	6.70	(3.10)	-	186
M85	羽口	SH22	塀積土	[6.40]	6.00	(4.10)	201	186
M86	羽口	SH25	塀積土中位	[9.80]	6.30	3.50	201	187
M87	羽口	SH31	塀積土	[2.90]	6.00	(2.30)	201	187
M88	羽口	SH31	塀積土	[7.90]	6.70	(2.80)	201	187
M89	羽口	SH33-34	塀積土	[5.00]	6.00	(2.80)	201	187
M90	羽口	SH33-34	遺物No.2	[8.80]	7.80	3.10	202	187
M91	羽口	SH33	床面積層土	[6.20]	5.60	2.10	202	187
M92	羽口	SH33-34	覆瓦	[5.80]	6.00	(3.50)	202	187
M93	羽口	SH33-34	覆瓦	[5.70]	6.20	(4.00)	202	187
M94	羽口	SH33-34	覆瓦	[10.20]	7.10	3.10	202	187
M95	羽口	SH33-34	覆瓦	[9.40]	7.00	-	202	187
M96	羽口	SH37	床面直上No.1-3	[26.30]	6.20	2.70	202	187
M97	羽口	SH37	床面直上	[10.20]	6.80	3.00	203	188
M98	羽口	SH37	床面直上	[7.80]	5.90	2.60	203	188
M99	羽口	SH37 A断面	塀積土下位	[6.40]	6.40	(2.70)	203	188
M100	羽口	SH37 A断面南ベルト	塀積土中~下位	[6.70]	6.20	(3.30)	203	188
M101	羽口	SH37 8区	塀積土下位	[7.60]	-	-	-	188
M102	羽口	SH37	塀積土下位	[7.00]	6.40	-	-	188
M103	羽口	SHXW01	1層	[5.50]	6.70	(3.10)	203	188
M104	羽口	SH21	塀積土上面	[7.00]	6.40	(2.05)	203	188
M105	羽口	SH04	塀積土	[3.80]	-	-	-	188

計測個数の「」は検存数、( )は復元数を示す

第 16 表 銭貨観察表

掲載 No.	器種	出土地点	層位	計測値 (cm)			備考	図版 No.	写真 No.
				長さ	幅	厚さ			
M61	寛永通宝	SK99	堆積土	25	2.45	0.35	3枚磨着	199	184
M62	寛永通宝	SK99	堆積土	2.35	2.35	0.1		199	184
M63	寛永通宝	SK99	堆積土	23	23	0.1		199	184
M64	寛永通宝	SK101	1層	2.55	2.55	0.35	4枚磨着	199	184
M65	寛永通宝	SK101	1層	25	25	0.25	2枚磨着	199	184
M66	寛永通宝	SI33・34	複風	27	26	0.35	3枚磨着	199	184
M67	寛永通宝	I A 14・15 l・m	1層	2.45	2.45	0.15		199	184
M68	銅銭	II B 7~9 v~x	1層	22	22	0.1	銭模不明	199	184
M69	鉄銭	II C 3~5 l・m	1層	25	25	0.2		-	184
M70	鉄銭	I C 20 t・u	1層	2.45	2.45	0.15		-	184
M71	鉄銭	I A 14・15 l・m	1層	2.35	2.35	0.2		-	184
M72	鉄銭	I A 15 q	1層	-	-	-	細片で接合不能、表掲載	-	-

第 17 表 陶磁器観察表

掲載 No.	器種	残存部位	出土地点	層位	装飾		産地・年代	備考	図版 No.	写真 No.
					模	文				
P1	磁器・甕	口縁	P312 (SB65)	堆積土	青磁	彫弁文	龍泉・14~15世紀代		204	189
P2	陶器・大甕	口縁	I A 8 l~n	1層			常滑・3~4型式	3・4と同一個体	204	189
P3	陶器・大甕	胴部	I A 8 l~n	1層			常滑・3~4型式	2・4と同一個体	204	189
P4	陶器・大甕	胴部	I A 8 l~n	1層			常滑・3~4型式	2・3と同一個体	204	189
P5	陶器・大甕	胴部	I A 8 l~n	1層			常滑・3~4型式	2~4と同一個体か	204	189
P6	陶器・大甕	胴部	調査区北西隅	1層			常滑	2~4と同一個体か	204	189
P7	陶器・甕	胴部	II B 10~12 w~y	1層			常滑	常滑	204	189
P8	陶器・甕	胴部	II B 12 w	表土		自然釉	常滑	常滑	204	189
P9	陶器・天目茶碗	口縁	S 1 33・34	複風		鉄	瀬戸		204	189
P10	陶器・甕	底部	I A 20 g	1層		窯灰	大湊相馬		-	189
P11	陶器・甕	胴部	II B 7~9 v~x	表土		刷毛目	在地		-	189
P12	陶器・甕	底部	II C 1・2 p~s	1層		青磁	産地不明		-	189

掲載 No.	器種	残存部位	出土地点	層位	表		産地・年代	備考	図版 No.	写真 No.
					植・録	絵付・文様				
P13	陶器・碗	胴部	II C 10 j	黒色土	灰・緑		瀬戸		-	189
P14	陶器・腰筒	胴部	I A 14 ~ 18 v ~ y	II層	灰・鉄	襷目	瀬戸		-	189
P15	陶器・腰筒	胴部	I A 20・21 g ~ i	I層			瀬戸		-	189
P16	陶器・腰筒	底部	I A 20 g	I層	灰・鉄	襷目	大塚相馬		-	189
P17	陶器・腰筒	口縁	II B 25 q	根掘乱	灰・鉄	襷目	瀬戸		-	189
P18	陶器・腰筒	胴部	II C 3・4 m		灰・鉄	襷目	瀬戸		-	189
P19	陶器・腰筒	口縁	SI 42	複乱	灰・鉄	襷目	瀬戸		-	189
P20	陶器・皿	口縁	I A 10 ~ 14 r	I層	銅緑		肥前		-	189
P21	陶器・皿	底部	I A 14 ~ 18 v ~ y	I層	志野		美濃		-	189
P22	陶器・皿	底部	I A 20・21 g ~ i	I層	灰	鉄絵	大塚相馬		-	189
P23	陶器・皿	底部	I A 20・21 g ~ i	I層	灰	鉄絵	大塚相馬		-	190
P24	陶器・鉢	口縁	I A 16 p	I層	鉄		瀬戸		-	190
P25	陶器・鉢	胴部	II C 6 m	I層	鉄		瀬戸		-	190
P26	陶器・鉢	口縁	調査区南西隅	I層	灰	緑釉落とし掛け			-	190
P27	陶器・片口	片口	I A 20 r	I層	灰		在地		-	190
P28	陶器・片口	片口	I A 21 h	I層	灰	窯灰粘出し	瀬戸		-	190
P29	磁器・碗	胴部	I A 18・19 p	I層	透明	二重網目文	肥前		-	190
P30	磁器・碗	胴部	I A 20・21 g ~ j	I層	透明	風景文	瀬戸		-	190
P31	磁器・碗	底部	II B 7 ~ 9 v ~ x	表土	青磁	蛇の目軸割ぎ	肥前?		-	190
P32	磁器・碗	底部	II C 12 h	表土	透明	草花文	肥前・大塚IV期		-	190
P33	磁器・碗	口~底	II C 3・4 k ~ m	I層	透明	二重網目文	肥前・大塚IV期		-	190
P34	磁器・碗	底部	SI 33・34	複乱	透明	網目文	肥前		-	190
P35	磁器・皿	底部	II C 7・8 a・f	I層	透明	草花文	肥前・大塚IV期		-	190
P36	磁器・灰鉢	底部	SI 33・34	複乱	青磁		肥前		-	190
P37	磁器・仏具	胴~底	II C 1・2 p ~ s	I層	透明		不明		-	190
P38	土器・片口?	把手	I A 20・21 g ~ i	I層					-	190

## VI 自然科学分析

### 1 赤前Ⅲ遺跡から出土した動物遺存体について

齊藤慶史（青森県教育庁文化財保護課）

#### はじめに

宮古市赤前Ⅲ遺跡は、宮古湾最奥部に位置する縄文時代と平安時代の遺跡である。平成25・26年度の発掘調査で、コンテナ1箱分の動物遺存体が出土しており、貝類7種、魚類2種、哺乳類3種が同定された。ここでは、出土動物遺存体の内容に関する調査結果をまとめ、当遺跡における動物利用の特徴を記載する。なお、報告する資料は、堆積土の掘削時に目視で確認して取り上げがなされたもので、土壌の篩がけを通じて回収されたものは含まれていない。分類群と遺構ごとの出土量については表1～5に示したので参照されたい。

#### 出土動物遺存体の内容

##### (1) 貝類

二枚貝綱7種（縄文時代3種、平安時代7種）が同定された（表2）。腹足綱は確認されておらず、貝類以外の無脊椎動物として、フジツボ類の殻破片が少量出土している（表3）。

平安時代のS I 06・12・13・37の堆積土中にはブロック貝層が検出されており、S I 06ではイソシジミが全体重の約55%を占め、主体をなす傾向が確認された。しかし、これ以外については遺構単位で見た場合、種ごとの割合はほぼ同率であり、卓越した主体貝の存在は不明瞭である。本遺跡に隣接する赤前Ⅳ八枚田遺跡では、平安時代の土坑からウバガイ、イガイ、オオノガイで構成されるブロック貝層が検出されており、ウバガイが主体をなす様子が確認されている（宮古市教育委員会1999）。また、遺構外の第Ⅲ層からウバガイ、イソシジミ、コタマガイが少量出土しており、ウバガイには幼貝も含まれる。これらは、出土層位から縄文時代に帰属するものと判断されている。

ウバガイは寒流系種であり、外洋の影響の強い浅海砂底域に生息する。宮古市高浜地区では、現在も小型船からヤスを使用した見突漁が行われており、初夏の数日間限定して漁禁日が設定されている。八戸市田向遺跡では、中近世の資料に刺突痕のあるウバガイの貝殻が含まれており、見突漁によって採集された可能性が指摘されている（杉山2005）。本遺跡の資料には、刺突痕はみられず、見突漁の対象に適さない幼貝も含まれることから、海水中の砂底を探り、タモ網や手で掬取るような方法で採られた可能性がある。

##### (2) 魚類

平安時代のS I 06およびS I 16から魚骨がわずかに出土しており、2種が同定された（表4）。いずれも、堆積土中に形成された貝層から出土したもので、S I 06はタラ科、S I 16はサケ属と同定されている。前者は、椎体幅11.0mm、椎体長14.5mmで、サイズからマダラと判断される。

両種は、宮古市島田Ⅱ遺跡や山田町沢田Ⅱ遺跡の貝層からも出土しており、平安時代の三陸地方では主要な漁撈対象魚であったと考えられる（佐藤・熊谷1997、熊谷2004）。本遺跡近くを流れる津軽石川は、サケ遡上河川として知られ、11月から2月にかけて、産卵個体の遡上が多数確認される。また、マダラは、季節によって深浅移動する習性があり、水温の低い冬～春季には100m以浅の浅い海域に、

水温の高い夏～秋季には水深 200 m 以下の深い海域に分布することが知られている（成松 2006）。夏から秋季に漁を行うことは著しく困難であるため、冬季から春季に、延縄や刺網などの方法で漁が行われた可能性がある。

### (3) 哺乳類

縄文時代と平安時代の他、時期不明の資料も含めて、3種が同定されている（表5）。

縄文前期末～中期初頭（大木6～7a式期）のS I 01の堆積土および床直から骨角器1点と獣骨片が出土しており、S I 06直下の黒色土層からイノシシの第二中手骨が出土している。いずれも被熱による白色灰化が顕著である。

平安時代のS I 06・11・12から大型陸獣（シカ・イノシシ相当）の骨片が出土している。S I 06の資料は貝層から出土したもので、焼けの痕跡がみられないが、これ以外については、いずれも被熱による白色灰化が著しい。

時期不明のP 142からは、ウマの上・下顎骨と上腕骨が出土している。部位の重複がみられないことから、同一個体に由来する可能性が高い。残存状態はあまり良くないが、上顎第四前臼歯と下顎第三後臼歯が未萌出の状態であるため、死亡年齢は3.5歳未満と推定される（Cornwall1956）。

このほか、S F 12付近からオオカミの犬歯1点が出土している。歯根端の尖孔が閉鎖しつつある状態で、重さから歯根内部に第二象牙質が充填されている様子が窺える。雌雄については判断できなかった。本資料の年代は、出土層位から平安時代以前（弥生時代か）と判断されている。

## おわりに

本遺跡では、主に縄文時代（前期末～中期初頭）と平安時代の動物遺存体が出土している。貝類以外については、平安時代のS I 06の堆積土中に形成された小規模な貝層から出土したものを除くと、大半が焼骨の状態でも出土した。一般に貝層以外から出土する骨は焼けていることが多いが、本遺跡における縄文時代の例も焼けて白色灰化したもので、いずれもひび割れたり、包含層中ですでに細片となっていた。これは、骨の中の蛋白質、脂質などが熱によって無機質化したため、廃棄後に微生物などによって分解を受けることなく土中に保存されたためと考えられる。

出土動物遺存体の分類群としては、縄文時代が貝類3種（ウバガイ・イソシジミ・コタマガイ）、哺乳類1種（イノシシ）であるのに対し、平安時代は貝類7種（イソシジミ・コタマガイ・アサリ・オオノガイ・ウバガイ・イガイ・マガキ）、魚類2種（サケ属・マダラ）、哺乳類1種（シカまたはイノシシ）であった。宮古湾周辺では、縄文時代に遡るマダラの出土例が確認されておらず、本地域におけるマダラ漁の発達は平安時代以降のことと考えられる。これを除けば、縄文・平安両時代でも出土している動物種はほぼ共通しており、宮古湾から津軽石川流域、そして後背地の丘陵部にかけての集落に近接する場所で多種多様な動物が捕らえられ、利用されていた様子が窺える。

今回扱った資料は、目視確認で取り上げられたものが中心であったため、小型種の確認と数量的な評価が不十分であった。水洗篩別を通じた海産・陸産微小貝および小型魚の内容確認を行い、定量的な評価を加えることが、今後の課題である。

## 謝 辞

資料の調査にあたり、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの村田淳氏、中村隼人氏、宮古市教育委員会の高橋憲太郎氏には多大なるご協力を頂きました。また、オオカミの同定には西本豊弘先生（国立歴史民俗博物館名誉教授）にご指導頂きました。記して感謝申し上げます。



1 赤前川遺跡から出土した動物遺存体について

表1 赤前川遺跡出土動物遺存体学名表

軟体動物門 Mollusca		節足動物門 Arthropoda		脊椎動物門 Vertebrata	
二枚貝類 Bivalvia	双脚巻貝 <i>Carpedia</i>	足跡巻貝 <i>Carpedia</i>	硬骨魚類 (両骨類) Osteichthyes (Teleostei)	ウバガイ <i>Mytilus coruscus</i>	ウバガイの一種 <i>Oncorhynchus</i> sp.
マガキ <i>Crasostrea gigas</i>	ナシマフジツボ <i>Balanus cariosus</i>	ナシマフジツボ <i>Balanus cariosus</i>	マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>	ウバガイ <i>Mytilus coruscus</i>	マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>
ウバガイ <i>Pseudocardium sachalinense</i>			哺乳類 Mammalia	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	オオカミ <i>Canis lupus</i>
イソシジミ <i>Nuttallia japonica</i>			イノシシ <i>Sus scrofa</i>	オオカミ <i>Canis lupus</i>	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>			ウマ <i>Equus caballus</i>	ウマ <i>Equus caballus</i>	ウマ <i>Equus caballus</i>
コトマガイ <i>Gomphina melanegis</i>				オオノガイ <i>Mya (Arenomya) arenaria onogai</i>	

表2 貝類出土量表

年度	遺構	位置	層位	種類	部位	左右	点数	備考	時期
2013	SI06	-	床面直上貝サンプル	イソシジミ		L	35		平安
						R	44		
						L	14		
				コトマガイ		R	10		
						L	9		
						R	14		
				オオノガイ		L	4	SL:70mm, SH:44.3mm <sup>1)</sup>	
	SI12	中央	床面直上貝サンプル	ウバガイ		L	3		平安
						R	4		
				イソシジミ		L	1		
				ウバガイ		R	1		
						L	1		
						R	1		
				ウバガイ		L	1	SL:62.3mm, SH:72.5mm <sup>1)</sup>	
オオノガイ		L	4	SH:54.6mm <sup>1)</sup>					
2014	遺構外	I A23 r-24 s	II層	アサリ		L	2	SL:57.1mm, SH:60.4mm <sup>1)</sup>	編文
				コトマガイ		R	2		
						L	2		
				イソシジミ		L	1		
				ウバガイ		R	1	貝片	
				イソシジミ		R	1		
				コトマガイ		L	1		
				イソシジミ		L	1		
				ウバガイ		R	1		
				イソシジミ		L	1		
				コトマガイ		L	1		

frg: 破片, SL: 殻長, SH: 殻高  
<sup>1)</sup> いずれも計測可能個体は1点のみ。

表3 フジツボ類出土量表

年度	遺構	層位	種類	部位	左右	点数	備考	時期
2013	SI06	床面直上貝サンプル	ナシマフジツボ	殻殻 frg	-	4		平安

frg: 破片

表4 魚類出土量表

年度	遺構	位置	層位	種類	部位	左右	点数	備考	時期
2013	SI06	-	床面直上貝サンプル	マダラ	腹椎	-	3	椎体長: 14.5mm, 椎体幅: 11.0mm.	平安
				魚骨(種-部位不明)	frg	-	-		
				サケ属の一種	尾椎	-	1	椎体長: 12.3mm, 椎体幅: 11.3mm.	

frg: 破片

表5 哺乳類出土量表

年度	遺構	位置	層位	種類	部位	左右	点数	備考	時期	
2013	SI01	北西区	SI06 直下黒色土	イノシシ	Mc2dist	R	1	焼熱による白色化。Bd: 115mm	縄文前期末-中期初 (大木6-7a)	
				シカ or イノシシ	肋骨計下	-	1			
				シカ or イノシシ	肋骨(種-部位不明)	frg	-	1		焼熱による白色化。
				シカ or イノシシ	肋骨(種-部位不明)	frg	-	1		焼熱による白色化。上肋骨?
				シカ or イノシシ	肋骨(種-部位不明)	frg	-	1		焼熱による白色化。上肋骨?
2014	遺構外	SF12 規辺	II層	ウマ	四肢長骨	不明	-	P3 未出。M3 未出。	平安以前 (弥生時代か)	
					上腕骨	R	1			
					下腕骨	L	1			

frg: 破片, Bd: 遠位端幅

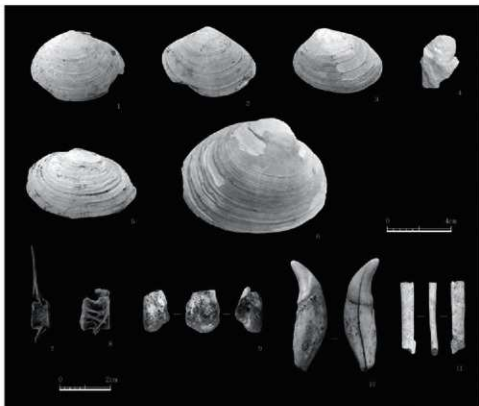
表6 イソシジミ計測値 (mm)

	0-5	5-10	10-15	15-20	20-25	25-30	30-35	35-40	40-45	45-50	50-55
殻長	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
殻高	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0

表7 コタマガイ計測値 (mm)

	0-5	5-10	10-15	15-20	20-25	25-30	30-35	35-40	40-45	45-50	50-55	55-60	60-65	65-70
殻長	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	0
殻高	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0

●アサリ、オオノガイ、ウバガイの計測値は表2備考欄に記載。



1 イソシジミ (左殻, S102) 2 コタマガイ (左殻, S102) 3 アサリ (左殻, S103) 4 マガキ (右殻, S104)  
5 オオノガイ (左殻, S102) 6 ウバガイ (右殻, S103) 7 サケ属 (尾椎, S107) 8 マダラ (尾椎, S102)  
9 イソシジミ 第二中骨 (右・遠位端, S101) 10 オオカミ 大歯 (左・下顎側, SF2周辺) 11 骨角器 (S101)

## 赤前Ⅲ遺跡出土動物遺存体

## 引用・参考文献

- 奥谷尚司編 2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会
- 熊谷 賢 2004 「高田Ⅱ遺跡出土動物遺存体について」『高田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書 第二分冊 (遺物・まとめ・自然科学的分析編)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集 pp.325-341
- 佐藤正彦・熊谷賢 1997 「沢田Ⅱ遺跡出土の動物遺存体」『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集 pp.119-135
- 斎藤弘吉 1963 『犬科動物骨格計測法』 私家版
- 杉山陽亮 2005 「八戸周辺域における貝類の利用について -ウバガイを一例に-」『北奥の考古学』 pp.439-453
- 成松龍二 2006 「マダラの生活史と繁殖生態 -繁殖特性の年変化を中心に-」『水産総合研究センター研究報告』別冊4 pp.137-146
- 宮古市 1980 『宮古市の自然』
- 宮古市教育委員会 1999 「赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚田遺跡 赤前Ⅴ柳沢遺跡 赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡 小堀内Ⅲ遺跡」宮古市埋蔵文化財調査報告書 53
- Cornwall, I.W. 1956 Bones for the Archaeologist. J.M.Dent & Sons Ltd.
- Driesch, A. von den. 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1.

## 2 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

## 1 測定対象試料

赤南Ⅲ遺跡は、岩手県宮古市赤南第7地割ほか(北緯 39° 34' 49", 東経 141° 57' 12") に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した土器付着炭化物2点・木炭5点である(表1)。

このうち試料6はS I 01の床面直上に薄く広がる炭化物層、試料7はS I 37 S XW 01の前庭部掻き出し口に堆積する黒色土から出土したものである。

## 2 測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

## 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>13</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOX II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年年代範囲であり、1標準偏差(1 $\sigma$  = 68.2%)あるいは2標準偏差(2 $\sigma$  = 95.4%)で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。試料の<sup>14</sup>C年代は、1が $4910 \pm 30\text{yrBP}$ 、2が $1330 \pm 30\text{yrBP}$ 、3が $1250 \pm 20\text{yrBP}$ 、4が $4180 \pm 30\text{yrBP}$ 、5が $4150 \pm 30\text{yrBP}$ 、6が $5030 \pm 30\text{yrBP}$ 、7が $1220 \pm 20\text{yrBP}$ である。S I 48の床面直上から出土した4と5の値は誤差( $\pm 1\sigma$ )の範囲で一致する。

暦年較正年代(1 $\sigma$ )は、1が縄文時代前期後葉頃、2が古墳時代終末期~古代頃、3・7が古代、4・5が縄文時代中期中葉~後葉頃、6が縄文時代中期中葉~後葉頃に相当する(小林編 2008、佐原 2005)。なお、一般的に土器付着炭化物については土器で調理された食物由来の炭素を含む可能性があるが、今回測定された試料1・2の $\delta^{13}\text{C}$ は、C3植物やそれを食べる草食動物等の範囲内に収まり(赤澤ほか 1993)、年代値に影響する海洋リザーバー効果等を示唆する値ではない。試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理・測定上の問題は認められない。

## 文献

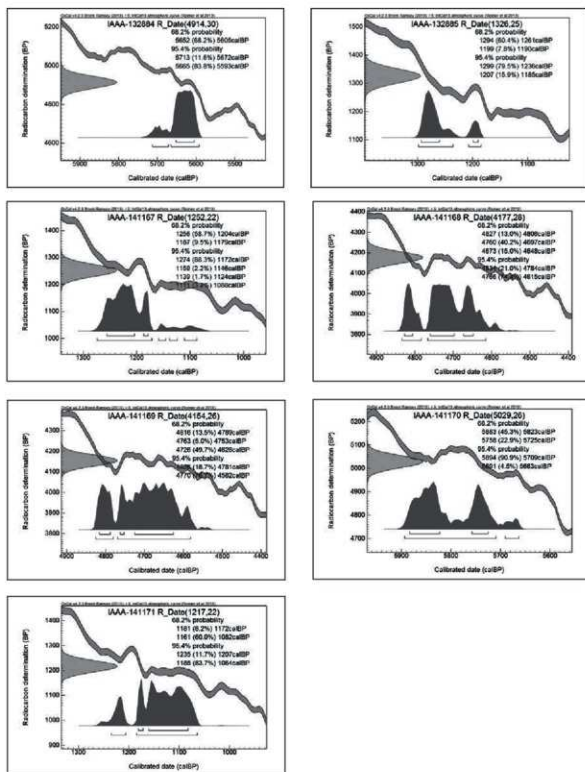
- 赤澤 米田 吉田 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 一明科町内一 北村遺跡 本文編(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 14), 長野県教育委員会, (財)長野県埋蔵文化財センター, 445-468
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 佐原 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原 眞, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念観説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132884	1	S 1 05 床面直上	土器付着炭化物	AAa	-26.17 ± 0.77	4910 ± 30	54.24 ± 0.20
IAAA-132885	2	S 1 30 埋土	土器付着炭化物	AAa	-24.95 ± 0.78	1330 ± 30	84.78 ± 0.27
IAAA-141167	3	S 1 64 床面直上 C-1	木炭	AAA	-22.30 ± 0.38	1250 ± 20	85.57 ± 0.24
IAAA-141168	4	S 1 48 床面直上 No.5	木炭	AAA	-17.84 ± 0.39	4180 ± 30	59.45 ± 0.21
IAAA-141169	5	S 1 48 床面直上 No.13	木炭	AAA	-17.86 ± 0.45	4150 ± 30	59.62 ± 0.20
IAAA-141170	6	S 1 01 床面直上東側	木炭	AAA	-24.16 ± 0.54	5030 ± 30	53.47 ± 0.18
IAAA-141171	7	S 1 37 S XW 01 前庭部黒色土	木炭	AAA	-24.47 ± 0.47	1220 ± 20	85.94 ± 0.24

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年校正用 14C 年代、校正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132884	4,900 ± 30	54.10 ± 0.19	4,914 ± 30	5652calBP - 5605calBP (68.2%)	5713calBP - 5672calBP (11.6%) 5665calBP - 5593calBP (83.8%)
IAAA-132885	1,330 ± 20	84.79 ± 0.23	1,336 ± 25	1294calBP - 1261calBP (60.4%) 1199calBP - 1190calBP (7.8%)	1299calBP - 1236calBP (79.5%) 1207calBP - 1185calBP (15.9%)
IAAA-141167	1,210 ± 20	86.04 ± 0.23	1,252 ± 22	1256calBP - 1204calBP (58.7%) 1187calBP - 1179calBP (9.5%)	1274calBP - 1172calBP (68.3%) 1159calBP - 1146calBP (2.2%) 1139calBP - 1124calBP (1.7%) 1111calBP - 1088calBP (3.2%)
IAAA-141168	4,060 ± 30	60.32 ± 0.21	4,177 ± 28	4827calBP - 4806calBP (13.0%) 4790calBP - 4697calBP (40.2%) 4673calBP - 4648calBP (15.0%)	4834calBP - 4784calBP (21.0%) 4766calBP - 4615calBP (74.4%)
IAAA-141169	4,040 ± 30	60.50 ± 0.19	4,154 ± 26	4816calBP - 4789calBP (13.5%) 4763calBP - 4753calBP (5.0%) 4726calBP - 4626calBP (49.7%)	4826calBP - 4781calBP (18.7%) 4770calBP - 4582calBP (76.7%)
IAAA-141170	5,020 ± 30	53.56 ± 0.17	5,029 ± 26	5883calBP - 5823calBP (45.3%) 5758calBP - 5725calBP (22.9%)	5894calBP - 5709calBP (60.9%) 5691calBP - 5663calBP (4.5%)
IAAA-141171	1,210 ± 20	86.03 ± 0.22	1,217 ± 22	1181calBP - 1172calBP (8.2%) 1161calBP - 1082calBP (60.0%)	1235calBP - 1207calBP (11.7%) 1185calBP - 1064calBP (83.7%)



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

### 3 鉄関連資料の金属考古学的調査

岩手県立博物館

#### はじめに

岩手県宮古市に所在する赤前Ⅲ遺跡は、東日本大震災で被災した沿岸部の大規模な復興事業に伴い、平成25・26年度に緊急発掘調査が実施された遺跡である。調査の結果、縄文時代の竪穴建物跡、古代の竪穴建物跡、鉄生産関連遺構等が確認された<sup>1)</sup>。古代の遺構からは相当量の鉄器も検出されている。古代、当該地域において鉄に関する生産活動が行われていたことは確実で、遺跡周辺に豊富な砂鉄が分布することをふまえると、製錬によって得られた鉄塊を素材としての鉄器製作が行われていた可能性を考えることができるもののその断定は難しい。上記プロセスとは別に、他地域からもたらされた原料鉄を素材としての鉄器製作、他地域からの鉄器搬入、利用目的を果たした鉄器の再利用なども考えられる。

鉄生産活動の実態に迫り、遺跡内における鉄の物質文化交流を解明する有効な手段として、鉄の金属考古学的解析がある。このたび公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの依頼により、赤前Ⅲ遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的調査を実施した。以下に調査結果を報告する。

#### (1) 調査資料

調査資料は表1に示す鉄器3点、鉄塊1点、鉄滓4点、砂鉄2点の合計10資料である。鉄器は刀子(No. 1)、紡錘車(No. 2)、鎌(No. 3)、鉄塊(No. 4)は鉄生産関連炉底滓と共に確認された資料である。No. 5～8は鉄滓で、板状もしくは流状である。No. 6・7はそれぞれ鉄生産関連炉の前庭部、底面直上から検出されており、炉内生成物の可能性が高く、鉄滓と共に鉄生産関連炉の機能を推定するうえで重要な資料である。No. 9・10は遺跡周辺2地点から採取された砂鉄である。

#### (2) 調査試料の抽出

鉄製品からの調査試料の抽出は、岩手県立博物館で実施された保存処理の際に、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル(以下、ハンドドリルという)を使って行われた。抽出部位は調査担当者である公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・村田淳氏により決定された。

鉄塊及び鉄滓については、各資料の試料抽出部位にハンドドリルでV字状の切り込みを入れ、試料片を切り出した。No. 7からは3つの異なる部位から3試料を抽出した。抽出した試料を二分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に用いた。No. 4については抽出した試料を二分し、それぞれを組織観察に供した。

#### (3) 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、鉄製品の地金及び鉄塊の成因を推定するうえで重要と判断された領域及び非金属介在物を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA: JEOL-JXA 8230)で分析した。抽出した試料にメタルの残存が認められたNo. 1については、ナイトール(硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5mlの混合溶液)で腐食し、組織観察した。

化学成分分析用試料は表面に付着する土砂及び錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアル

コール及びアセトンで超音波洗浄した。洗浄した試料を130℃で2時間以上乾かし、メタルと錆が混在したNo. 1については直接、他の試料についてはメノー乳鉢で粉砕した後テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、及びフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、全鉄(T.Fe)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、マンガン(Mn)、リン(P)、チタン(Ti)、ケイ素(Si)、アンチモン(Sb)、ジルコニウム(Zr)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)、砒素(As)、モリブデン(Mo)、及びイオウ(S)の17元素を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法：パーキンエルマー株式会社 Optima 4300)で分析した。

#### (4) 調査結果

##### 4-1 鉄器及び鉄塊の組織観察結果

No. 1から抽出した試料には少量のメタルが残っていたので、ナイターで腐食した。マクロエッチング組織は強く腐食された領域とそれほど腐食されない領域からなる。マクロエッチング組織領域(Reg1内部)はフェライト( $\alpha$  Fe)の中にやや強く腐食されたパーライト|フェライトとセメントタイト(Fe<sub>3</sub>C)の共析組織が混在する。領域(Reg2)内部はやや粒状化した微細なパーライトとフェライトからなる(図1)。標準炭素鋼の腐食組織(東北大学金属材料研究所編1953)(佐藤知雄編1968)と比較すると、領域(Reg1)は亜共析鋼(炭素量0.2~0.3mass%の鋼)、領域(Reg2)は炭素量0.4~0.5mass%の鋼と推定され、焼き入れ等の何らかの熱処理の影響を受けた試料とみることができる(図1)。

No. 1にはFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O-MgO-TiO<sub>2</sub>系のガラス質ケイ酸塩(GI)からなる非金属材料が検出された(図1、表2-2)。

No. 2・3(図2)から抽出した試料のマクロ組織はその全域が錆化した組織によって構成されていた。2試料のマクロ組織領域Reg1及びReg2内部のEPMA反射電子組成像(BEI)には、微細な金属光沢を呈する結晶Cmとその欠落孔と推定される空隙からなる組織が観察された(図2)。EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップによって、結晶CmはFe及び炭素(C)を主成分とすることがわかった。これまでに行われた出土鉄器の金属考古学的解析結果をふまえると(佐々木・村田1984)、結晶Cmは錆化前の鋼を構成するパーライト中のセメントタイト(Fe<sub>3</sub>C)、微細な空隙はその欠落孔と判定される。結晶Cm及びその欠落孔と推定される組織のマクロ組織における分布状況から、No. 2・3の錆化前の地金は、炭素量0.1~0.3mass%の鋼と推定される(東北大学金属材料研究所編1953)(佐藤知雄編1968)。No. 4 Sa1-1・Sa1-2のマクロ組織には、針状を呈する初析セメントタイト(PCm)が析出し、その周りはパーライト組織からなる(図3)。炭素量0.8mass%を上回る過共析鋼である。

No. 2にはチタノマグネタイトと推定される化合物(Tmag;表2-1)、No. 4 Sa1-1には灰色を呈するウスタイト(Wus)とやや暗灰色を呈する微小領域(Tmag)が混在した粒状領域と鉄かんらん石(Fa)、No. 4 Sa1-2にはチタノマグネタイト(Tmag)とFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O-MgO-TiO<sub>2</sub>系のガラス質ケイ酸塩(GI)からなる鉄滓が混在していた(図3、表2-2)<sup>2)</sup>。

##### 4-2 鉄器・鉄塊・砂鉄の化学組成

表3に鉄器、鉄塊、及び遺跡周辺採取砂鉄の化学組成を示す。No. 1及びNo. 4 Sa1-1のT.Feは83.68~92.56mass%で、ほぼメタルからなる試料またはメタルと錆が混在した試料が、No. 2及びNo. 3は59.74mass%、61.68mass%で、錆を主体とする試料が分析に供された。No. 1及びNo. 3からはいずれも0.013mass%以上のCu、0.026mass%以上のNi、0.05mass%以上のCoが検出された。No. 3には0.022mass%のCu及び0.09mass%のSが含有されている。これらはNo. 2及びNo. 4



Sal-1よりも高レベルである。

No. 1はほぼメタルからなる試料が分析されたため、検出された微量元素は地金そのものに含有されていた、とみることができる。No. 4 Sal-1はメタルに錆が混在した試料、No. 2及びNo. 3は錆化が進んだ試料である。このような場合、微量成分の埋蔵環境下からの富化、あるいは埋蔵環境下への溶出を吟味する必要がある(佐々木・村田1984)。表3の鉄器の中で最もT.Feが低いNo. 2のCu、Ni、及びCo含有量はいずれも0.01mass%未満である。この結果は、Cu、Ni、及びCo三成分の埋蔵環境下からの富化が乏しいことを示している。

#### 4-3 鉄滓の組織観察結果

既述の通り、No. 6・7は炉内で生成した鉄滓の可能性が高い。No. 6は板状、No. 7はほぼ溶融した後固化した試料と推定される。No. 5・8もNo. 7とほぼ同じ形状であった(図4・5)。

No. 5から抽出した試料には多数の空隙がみられた(図4)。マクロ組織領域(Reg1)内部のEPMA反射電子組成像(BEI)には、灰色を呈する領域(Wus)と暗灰色粒状領域(Ito)が混在した粒状物質がみられた。その回りには暗灰色を呈する柱状物質(Fa)が析出し、その外側は微細粒子が混在したガラス化した領域(Ma)によって構成されていた。マクロ組織領域(Reg2)内部も領域(Reg1)内部とほぼ同様の組織からなり、他に灰色角状を呈する鉱物(Tmag)が析出していた(図4)。EPMAによる定量分析によって、領域(Wus)はウスタイト、領域(Fa)は鉄かんらん石、領域(Tmag)はチタノマグネタイトと判定される(表2-2)。領域(Ito)はあまりにも微細なためEPMAによる定量はできなかったが、別途行われた含有元素濃度分布のカラーマップ及び定性分析によって鉄チタン酸化物であることが確認された。図4及び図5から明らかのように、No. 6マクロ組織領域(Reg1)内部、No. 7 Sal 領域(Reg1)内部、No. 7 Sa2-3領域(Reg1)及び領域(Reg2)内部もNo. 5マクロ組織領域(Reg2)内部とほぼ同じ組織によって構成されていた。

No. 6マクロ組織領域(Reg2)内部は灰色粒状を呈するウスタイト(Wus)と微細粒子が混在するガラス化した領域からなり、微細な鉄粒も析出していた(図4)。No. 8マクロ組織領域(Reg2)内部は灰色で粒状を呈するウスタイト(Wus)、暗灰色を呈するFe-Al-Si-O系領域、及び微細粒子が混在するガラス化した領域によって構成されていた。

#### 4.4 鉄滓の化学組成

表4に鉄滓の化学組成を示す。4点の鉄滓から抽出した5試料のT.Feは53.95～63.28mass%、Tiは0.501～1.49mass%、Siは3.95～9.33mass%、Alは1.11～3.41mass%で、ほぼ同様の化学組成をとる。Ti含有量は低く、酸化鉄に富んだ鉄滓である。

### (5) 考 察

#### 5-1 及び鉄塊系資料の分類

鉄製品製作の素材となる鉄は炭素量によって銹鉄と鋼に分類される。現代の金属工学の分類基準に従えば、炭素量2mass%以下の鉄を鋼、炭素量2mass%を上回る鉄を銹鉄という。生産方法、生産設備、生産道具、及び生産材料などが異なる現代の分類基準を、直ちに前近代の鉄生産に当てはめることはできない<sup>3)</sup>。本稿が対象とする赤前Ⅲ遺跡の時代には、当時の設備及び道具で溶融可能な鉄を銹鉄、溶融不能で、加熱・鍛打により加工・整形しなければならなかった鉄を鋼として扱ったものと考えられる。さらに、古墳時代出土刀剣類の断面構造解析によって、人為的に炭素量の高い硬い鋼(硬鋼)と炭素量の低い軟らかい鋼(軟鋼)を合わせ鍛えて製作されたこととみなすことができる直刀が複数確認されていること(依1982)をふまえると、赤前Ⅲ遺跡の時代に既に、硬鋼と軟鋼の少なくとも2

種類の鋼が認識されていたと推定される。

金属考古学的調査を行った No. 1～3 は全てにパーライト組織が確認され、マクロ組織に占める面積割合から、炭素量 0.5mass% 以下の亜共析鋼が配されていることがわかった。No. 1 のパーライトは微細で、一部球状化している。鋼の加工・整形を施しやすくするため、熱的処理がほどこされた可能性がある。この点については今後類似試料の蓄積を図り、検討する必要がある。

## 5-2 微量元素組成比に基づく鉄器・鉄塊の分類と遺跡周辺砂鉄との関係

表3に示す微量元素組成比を基に、調査した製品鉄器及び鉄塊を分類し、遺跡周辺から採取した砂鉄の組成比を加味し、遺跡内における原料から製品に至るまでの一貫生産の可能性を検討したい。既述のとおり、古代から近世の鋼製造法には複数の方法があり、いずれも多段階の工程を経て目的とする鋼が製造される。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、最終的に得られる鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ抽出した試料の化学組成や非金属介在物組成を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。製造法及び製造条件の如何にかかわらず、地金を高精度に分類する方法の確立が必要である。

錆化が進んだ試料を調査対象とする場合、埋蔵環境下からの富化についても吟味する必要がある。4-2で述べたとおり、本遺跡において Cu、Ni、及び Co の三成分は埋蔵環境下からの富化の影響が乏しい。上記三成分は生産過程で鉄とはほぼ同一挙動をとる。加えて、鉄よりも錆にくい金属のため、一度鉄中に取り込まれた後は鉄中に留まる。従って、操作の過程で合金添加が行われていなかったとすると、三成分の組成比は地金の製造に使用された製鉄原料の組成比に近似すると推定される<sup>4)</sup>。

図6は表3に示す製品鉄器、鉄塊、及び遺構周辺から採取された砂鉄の  $(\text{mass}\% \text{Co}) / (\text{mass}\% \text{Ni})$  ( $\text{Co}^*$ ) と  $(\text{mass}\% \text{Cu}) / (\text{mass}\% \text{Ni})$  ( $\text{Cu}^*$ )、 $(\text{mass}\% \text{Ni}) / (\text{mass}\% \text{Co})$  ( $\text{Ni}^*$ ) と  $(\text{mass}\% \text{Cu}) / (\text{mass}\% \text{Co})$  ( $\text{Cu}^*$ ) を求めプロットした図である。図では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった鉄製品を白丸 (○)、鉄チタン酸化物が見出された製品鉄器及び鉄塊を黒丸 (●)、非金属介在物が見出されなかった製品鉄器を白三角 (△)、及び遺構周辺採取砂鉄を星印 (\*) でプロットした。図には岩手県宮古市藤の川採取砂鉄 (関・女鹿・赤沼 2011) も示してある。

図6a1・b1によると、No. 2・3・4・9は近接した位置に分布する。図6c1・d1はNo. 2～4、及びNo. 9に含有される Ni と Co、Cu と Ni の相関を示したものである。Ni と Co、Ni と Cu の相関係数はいずれも 1 にきわめて近い。これらの調査結果を考え合わせると、No. 2～4は宮古市津軽石川河口付近から採取された砂鉄を使って生産された資料の可能性が高いことを指摘できる。No. 1については製品として遺跡内にもたらされたものと考えられる。

## 5-3 遺跡内における鉄器生産活動

調査した4点の鉄滓のうち2点は鉄生産関連遺跡内から検出された資料である。1点 (No. 6) は板状を呈しており、生産設備底面で生成した資料とみることができる。表1に示す検出状況とよく整合する。既述のとおり、分析した鉄滓は酸化鉄に富み、Ti含有量が低い。組織観察によって、調査した4つの鉄滓はそのほとんどがウスタイトと鉄チタン酸化物からなる領域が混在した粒状領域、鉄かんらん石、及び微細粒子が混在するガラス化した領域によって構成されていた。その成因として、低チタン砂鉄の還元過程での生成が考えられる。5-2で述べたように、宮古市津軽石川河口付近から採取した砂鉄と炉跡底部から採取した鉄塊に含有される Ni、Co、及び Cu の微量元素組成比がほぼ整合することを考え合わせると、検出された炉跡で砂鉄を還元し、鉄を生産する操作が実施されていた可能性は多分に考えられる。検出された炉跡の炉床部の構造、炉の上部構造等の復元を試みると、

製錬に不可欠な木炭の確保、砂鉄の保管場所等を明らかにすることによって、生産の実態に迫ることができると思われる。

## (6) まとめ

赤前Ⅲ遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的解析結果を述べてきた。これまでの解析結果を整理すると、以下の3点を指摘できる。

- (1) 赤前Ⅲ遺跡では遺跡周辺から採取される砂鉄を使い、鉄生産が行われていた可能性がある。
- (2) 生産された鉄を素材とし、日常生活に必要な鋼製鉄器を製作していた可能性がある。
- (3) (1) 及び (2) とは別に、遺跡内には他地域から鋼製鉄器がもたらされていた可能性が高い。

今後、ほぼ同時代に比定される周辺地域から出土する鉄関連資料の金属考古学的調査結果を加味することにより、平安時代の三陸地方における鉄器普及の実態が一層みえてくるにちがいない。

## 注

- 1) 公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・村田淳氏からのご教授による。
- 2) No. 4 Sa1-1 に見出されたウスタイトについては EPMA による状態分析でも確認された。
- 3) 古代の鋼製造法については複数の方法が提案されている。製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と鉄鉄に分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を抽出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある。製錬炉で直接に鋼がつくり出されるという意味での方法は、近世たたら吹製鉄における鋸押法によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが鉄鉄も混在すると考えられている）を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので（溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量 0.1 ~ 0.2mass% の鋼を溶融するためには少なくとも炉内温度を 1550℃ 以上に保つ必要がある）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述の事情によるものと推察される。夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の普及が示すように、遅くとも 9 世紀には鉄鉄を生産する技術、すなわち炉内で生成した鉄鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が提示されている。得られた鉄鉄を溶解し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作される。また、生産された鉄鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は鉄鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法に位置づけられる。
- 4) 早稲田大学理工学術院基礎理工学部・伊藤公久教授からのご教授による。

## 引用文献

- 佐々木稔、村田明美（1984）「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、pp.27-33
- 佐藤知雄編（1968）『鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社
- 関・女鹿・赤沼（2011）「古代仙台平野における鉄生産活動について－宮城県柏木遺跡検出整形形の再検討を通して－」岩手県立博物館研究報告 28号、pp.13-34
- 依国一（1982）『日本刀の科学的研究』日立印刷
- 東北大学金属材料研究所編（1953）『金属顕微鏡組織』丸善株式会社

表1 分析資料の概要

分析資料番号	考古学的情報		
	遺物番号	分類	出土地点
1	M 10	刀子	S I 13 南東区
2	M 19	紡錘車	S I 20
3	M 22	鏝	S I 31
4	5	鉄塊	S X W 02 炉底滓
5	1	鉄滓	S I 37 S X W 01 トレンチ炉内堆積土
6	2	鉄滓	S I 37 S X W 01 前庭部 黒色土
7	3	鉄滓	S X W 01 底面
8	4	鉄滓	S I 34 S X W 01 堆積土
9	6	砂鉄	宮古市津軽石川河口付近
10	7	砂鉄	宮古市白浜漁港付近

表2-1 鉄器・鉄滓に見出された鉱物相のEPMAによる定量分析結果(mass%)

No(試料番号)	種	測定した鉱物相	化学組成 (mass %)													合計
			Na	P	S	O	Ca	Ti	V	Mg	Al	K	Fe	Mn	Cr	
2	Sal	Tmag1	<0.01	<0.01	0.03	22.1	<0.01	10.9	12.7	0.41	2.5	<0.01	38.6	0.25	4.30	92.79
7	Sal	Tmag1	0.02	0.01	0.08	29.2	<0.01	9.7	1.9	0.25	6.6	0.00	49.1	0.24	0.11	97.21

注1) Noは表1に対応。Tmag = テナマガネタイト。

表2-2 鉄器・鉄塊・鉄滓に見出された鉱物相のEPMAによる定量分析結果(mass%)

No(試料番号)	種	測定した鉱物相	化学組成 (mass %)													合計
			Na <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SiO <sub>2</sub>	CaO	TiO <sub>2</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	FeO	MnO	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		
1	Sal	1d1	Gil	1.41	<0.01	37.1	3.06	2.68	0.43	1.62	18.4	3.84	6.76	0.20	0.04	96.69
		1d2	Gil	0.90	<0.01	54.3	5.12	4.24	0.07	2.58	19.7	4.38	3.85	0.17	<0.01	95.34
4	Sal-1	3	Wus1	0.04	<0.01	0.31	<0.01	0.55	0.21	0.11	0.18	<0.01	97.6	0.05	0.24	99.29
		3	Pat1	<0.01	0.12	28.1	0.24	0.15	0.04	1.52	0.38	0.01	68.7	0.31	0.03	99.60
	Sal-2	3	Tmag1	0.06	<0.01	0.73	0.12	15.0	2.30	0.04	7.66	0.02	6.96	0.12	0.64	96.19
		3	Tmag2	<0.01	<0.01	0.13	0.02	9.13	8.06	0.92	11.1	0.01	3.34	0.76	1.10	94.53
5	Sal	4	Tmag2	0.02	0.01	0.12	0.01	22.3	10.4	3.86	10.4	0.03	4.20	2.43	4.88	96.46
		4	Gil	1.14	0.10	59.9	5.72	4.98	<0.01	1.63	14.0	4.48	5.50	0.78	0.05	98.28
	Sal	4	Wus1	0.02	<0.01	0.29	0.04	0.97	0.36	0.21	0.27	0.01	95.8	0.22	0.07	98.26
		4	Pat1	0.05	0.15	28.9	1.49	0.27	0.05	2.90	0.17	<0.01	63.7	0.84	0.02	98.63
6	Sal	4	Wus1	<0.01	<0.01	0.35	0.04	1.24	0.28	0.25	0.37	<0.01	95.2	0.25	0.09	98.07
		4	Tmag1	<0.01	0.01	0.75	0.09	16.3	1.98	0.35	10.3	0.01	64.1	0.30	0.23	94.42
	Sal	4	Pat1	0.01	0.24	29.6	1.18	0.28	0.08	3.16	0.35	<0.01	63.0	0.83	0.03	98.76
		4	Wus1	0.01	<0.01	0.11	<0.01	1.39	0.94	0.98	0.18	0.02	94.9	0.37	0.16	99.06
7	Sal	4	Tmag1	<0.01	<0.01	0.08	0.03	98.3	3.26	0.89	1.45	0.01	79.7	0.74	0.31	96.30
		4	Pat1	0.22	2.30	29.0	4.64	0.40	0.08	4.12	0.69	0.13	56.0	1.25	0.03	98.86
	Sal	5	Wus1	<0.01	<0.01	0.35	0.08	1.05	0.05	0.04	0.37	0.02	94.8	0.20	0.02	95.98
		5	Tmag1	<0.01	0.02	0.12	0.10	19.5	4.46	0.59	7.50	0.01	63.4	0.32	0.50	96.52
7	Sal	5	Pat1	1.09	1.31	23.2	5.93	2.82	<0.01	0.30	6.53	1.90	5.24	0.45	<0.01	95.93
		5	Wus1	<0.01	<0.01	0.26	0.05	1.11	0.06	0.03	0.39	0.03	94.5	0.24	<0.01	96.67
	Sal	5	Pat1	<0.01	0.22	28.4	0.75	0.33	<0.01	1.31	0.29	0.01	66.3	0.82	0.04	98.47
		5	Hal1	0.02	0.02	0.30	0.96	7.25	0.19	0.16	32.3	0.01	54.7	0.21	0.03	95.25
7	Sa2	5	Wus1	0.02	0.01	0.29	0.06	0.65	0.12	0.08	0.26	0.04	97.2	0.21	<0.01	98.94
		5	Tmag1	0.07	<0.01	0.24	0.14	6.85	0.70	<0.01	2.18	0.05	85.2	0.24	0.01	95.98
	Sa2	5	Pat1	0.07	0.19	28.7	3.09	0.15	0.12	0.36	0.10	0.03	64.9	0.72	0.03	98.52
		5	Wus1	0.01	<0.01	0.37	0.02	0.83	0.05	<0.01	0.26	0.02	96.5	0.22	0.01	98.29
7	Sa3	5	Hal1	0.01	<0.01	0.22	0.04	3.77	0.41	0.33	0.83	0.01	51.6	0.28	<0.01	94.47
		5	Tmag1	0.01	<0.01	0.15	<0.01	16.0	3.52	0.43	12.7	0.01	63.0	0.33	0.14	96.29
	Sa3	5	Pat1	<0.01	0.17	28.7	1.30	0.23	0.08	0.87	0.10	<0.01	66.8	0.80	<0.01	99.06
		5	Wus1	0.01	<0.01	0.38	<0.01	1.04	0.22	0.10	0.47	<0.01	95.6	0.22	0.02	98.06
8	Sa1	4	Pat1	<0.01	0.37	28.5	0.78	0.38	0.09	1.54	0.49	<0.01	66.1	0.98	<0.01	99.23
		4	Wus1	0.01	<0.01	0.38	<0.01	1.35	0.46	0.02	0.34	<0.01	94.8	0.22	0.05	97.63
	Sa1	4	Tmag1	<0.01	<0.01	0.32	<0.01	15.2	3.63	0.39	14.2	<0.01	62.6	0.29	0.39	97.02
		4	Pat1	0.01	0.28	28.8	0.90	0.39	<0.01	1.29	0.17	<0.01	66.3	0.85	0.02	99.01
8	Sa1	4	Wus1	0.01	<0.01	0.28	<0.01	1.35	0.46	0.02	0.34	<0.01	94.8	0.22	0.05	97.65
		4	Pat1	0.01	0.28	28.8	0.90	0.39	<0.01	1.29	0.17	<0.01	66.3	0.85	0.02	99.01
	Sa1	4	Tmag1	<0.01	<0.01	0.17	<0.01	17.0	2.70	0.42	12.3	<0.01	63.7	0.34	0.09	96.72
		4	Pat1	0.01	0.28	28.8	0.90	0.39	<0.01	1.29	0.17	<0.01	66.3	0.85	0.02	99.01

注1) Noは表1に対応。Wus = ウスタイト、Tmag = テナマガネタイト、Fa = 鉄からん石、Ha = ハーソナイトに近い組成の化合物、Gl = ガラス質イリュメン。

表3 鉄器・鉄塊・砂鉄の分析結果

No. (分析試料番号)	化学組成 (mass%)														ミクロ組織					
	Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	S	Si	Sn	Zr	Ca	Al	Mg	V	As	Mo	Cr	S	
5	5.61	62.28	0.001	0.001	0.004	0.214	0.34	1.10	6.36	0.01	0.160	1.64	2.04	0.699	0.222	-0.01	-0.001	0.044	0.02	(Wiss,Ino,Pa,Ma)(Wiss,Ino,Trimg,Pa,Ma)
6	5.61	61.41	0.001	0.002	0.005	0.270	0.41	1.13	3.95	0.01	0.119	0.927	1.11	0.524	0.261	-0.01	-0.001	0.049	0.05	(Wiss,Trimg,Pa,Ma)(Wiss,Pa,Ma)
5a	57.65	0.001	0.001	0.003	0.274	0.27	1.21	7.47	0.01	0.168	1.15	2.97	0.724	0.318	-0.01	-0.001	0.020	0.05	-,Ino,Trimg,Pa,Ma	
7	5.62	54.54	0.001	0.001	0.003	0.285	0.42	1.43	9.15	0.01	0.184	1.74	3.28	0.269	0.192	-0.01	-0.001	0.033	0.05	(Wiss,Trimg,Pa,Ma)(Wiss,Trimg,Pa,Ma)
8a	3.035	0.001	0.001	0.003	0.282	0.49	1.49	9.33	0.01	0.179	1.70	3.41	0.411	0.203	-0.01	-0.001	0.015	0.04	Wiss,Trimg,Pa,Ma	
8	5.61	62.58	0.002	0.001	0.003	0.068	0.08	6.501	3.52	0.01	0.033	0.254	1.13	0.156	0.157	-0.01	-0.001	0.077	0.05	(Wiss,Trimg,Pa,Ma)(Wiss,Pa,Ma)(S&O系)

注1)No.は表1に於て、化学組成分析はICP-AES法による。

注2)Ma=鉄粒、Wiss=のスタイト、Trimg=メカニカルメカニカル、Ino=鉄ナタン酸化物、Pa=鉄からん石、Ha=ハーフナイトに於て組成の化合物、Gl=ガラス化した組成、Ma=微細粒子が混在するガラス化した組成。

表4 鉄滓の分析結果

No. (分析試料番号)	化学組成 (mass%)														ミクロ組織				Cu・Ni・Co三成分比																			
	Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	S	Si	Sn	Zr	Ca	Al	Mg	V	As	Mo	Cr	S	Gl	Trimg	Ma	Cr60-63b	Cr60-63b	Princ	Princ	Cu/Co(Ni)	Co/Fe(Ni)	Ni/Co(Ni)	Cu/Fe(Ni)	Co/Fe(Ni)	Ni/Co(Ni)	Cu/Fe(Ni)					
1	5.61	89.56	0.013	0.056	0.079	0.090	0.12	0.092	0.02	-0.01	-0.001	0.023	-0.001	0.002	0.01	-0.001	-0.001	0.001	0.001	Princ(94.94)5b	Gl	-	-	-	-	-	1.41	0.20	0.271	0.20	0.271	0.20	0.271	0.20	0.271	0.20	0.271	
2	5.61	29.71	0.023	0.003	0.009	0.099	0.32	0.990	0.54	-0.01	0.003	0.022	0.141	0.056	0.028	-0.01	-0.001	0.007	0.06	Cr60-63b	Trimg	Ma	-	-	-	-	3.00	1.00	0.33	3.00	1.00	0.33	3.00	1.00	0.33	3.00	1.00	0.33
3	5.61	61.66	0.022	0.026	0.059	0.032	0.19	0.034	0.36	-0.01	-0.003	0.007	0.336	0.011	0.003	-0.01	-0.001	-0.001	0.009	Cr60-63b	no	-	-	-	-	-	1.92	0.85	0.52	1.92	0.85	0.52	1.92	0.85	0.52	1.92	0.85	0.52
4	5.61-1	35.06	0.006	0.010	0.023	0.000	0.12	0.003	-	-0.01	-0.003	0.002	0.007	-0.001	0.002	-0.01	-0.001	0.003	0.01	Princ	(Wiss,Trimg,Pa)	-	-	-	-	-	2.20	0.60	0.43	2.20	0.60	0.43	2.20	0.60	0.43	2.20	0.60	0.43
5a	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Princ	Cr	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9	5.61	60.08	0.002	0.002	0.005	0.330	0.18	0.893	5.52	0.01	0.007	0.603	1.541	0.492	0.151	-0.01	-0.001	0.019	0.04	-	-	-	-	-	-	-	2.50	1.00	0.49	2.50	1.00	0.49	2.50	1.00	0.49	2.50	1.00	0.49
10	5.61	57.46	0.003	0.003	0.007	0.248	0.13	1.54	10.15	0.01	0.005	1.25	2.87	1.70	0.113	-0.01	-0.001	0.254	0.09	-	-	-	-	-	-	-	0.35	0.15	2.86	0.35	0.15	2.86	0.35	0.15	2.86	0.35	0.15	
10I	5.61	57.72	0.001	0.012	0.007	0.252	0.32	0.930	5.94	-	0.001	1.49	1.92	1.16	0.167	-	-	0.267	-0.01	-	-	-	-	-	-	-	0.58	0.08	1.71	0.58	0.08	1.71	0.58	0.08	1.71	0.58	0.08	
10E	5.61	61.78	0.001	0.011	0.008	0.248	0.34	0.819	5.62	-	0.005	1.27	1.43	0.903	0.180	-	-	0.269	-0.01	-	-	-	-	-	-	-	0.73	0.09	1.28	0.73	0.09	1.28	0.73	0.09	1.28	0.73	0.09	
10D	5.61	48.08	-0.001	0.021	0.007	0.202	0.31	0.851	9.18	-	0.031	1.35	2.69	1.15	0.136	-	-	0.432	-0.01	-	-	-	-	-	-	-	0.33	-	-	0.33	-	-	0.33	-	-	0.33	-	-

注1)No.は表1に於て、化学組成分析はICP-AES法による。

注2)Ma=鉄粒、Wiss=のスタイト、Trimg=メカニカルメカニカル、Ino=鉄ナタン酸化物、Pa=鉄からん石、Ha=ハーフナイトに於て組成の化合物、Gl=ガラス化した組成、Ma=微細粒子が混在するガラス化した組成、no=分析せず。

注3)Cu=銅、Ni=ニッケル、Co=コバルト、Cr=クロム、S=硫黄、Princ=微細粒子が混在するガラス化した組成、no=分析せず。

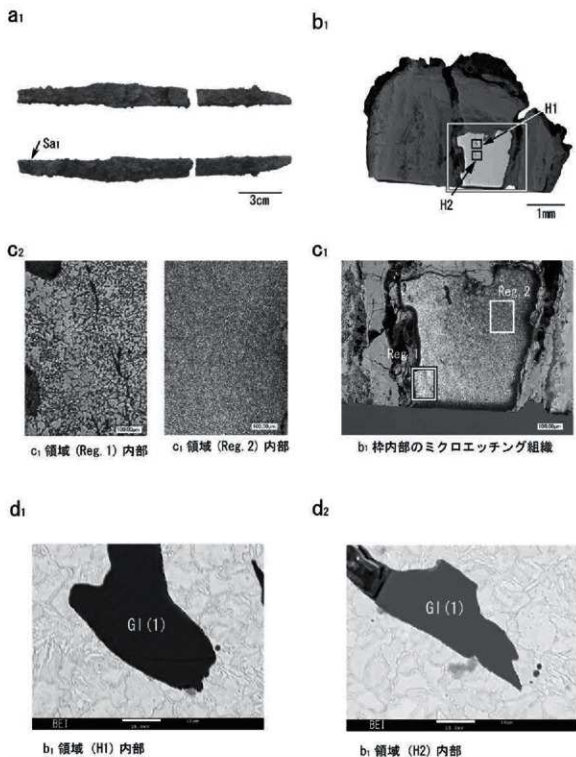


図1 No. 1の組織観察結果

a<sub>1</sub>: 外観の矢印は試料抽出位置。b<sub>1</sub>: マクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。  
 c<sub>1</sub>: b<sub>1</sub>枠内部のマイクロエッチング組織。c<sub>2</sub>: c<sub>1</sub>領域 (Reg. 1) および (Reg. 2) 内部。d<sub>1,2</sub>: b<sub>1</sub>領域 (H1) および (H2) 内部のEPMAによる反射電子組成像 (BEI)。GI=ガラス質ケイ酸塩。

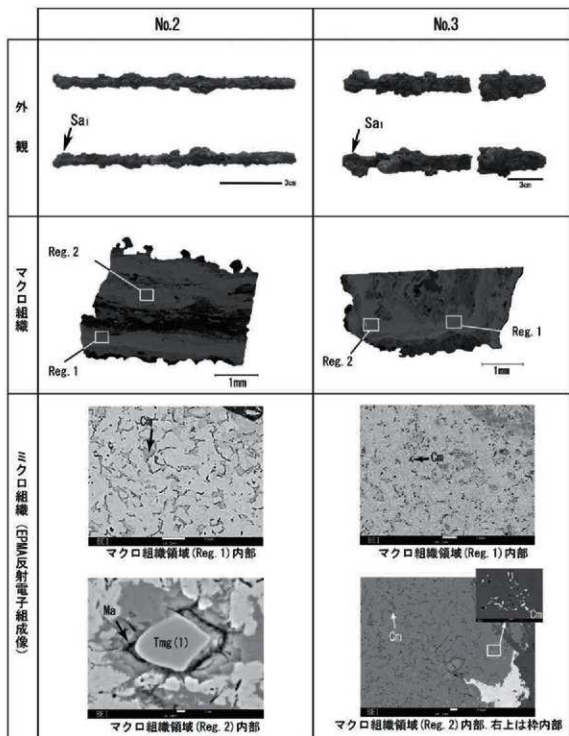


図2 No.2・No.3の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。BEI=EPMA反射電子組成像、Tmag=チタノマグネタイト、Ca=セメントイト、Ma=微細粒子が混在するガラス化した領域。

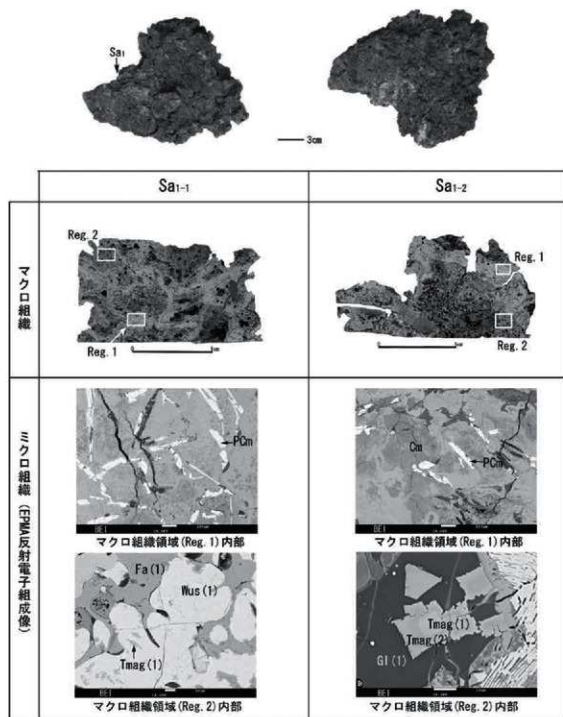


図3 No.4の組織観察結果

外觀の矢印は試料抽出位置。BEI=EPMA反射電子組成像、PCn=初析セメントライト、Cn=セメントライト、Wus=ウスタイト、Tmag=チタノマグネタイト、Fa=鉄かんらん石、GI=ガラス化した領域。



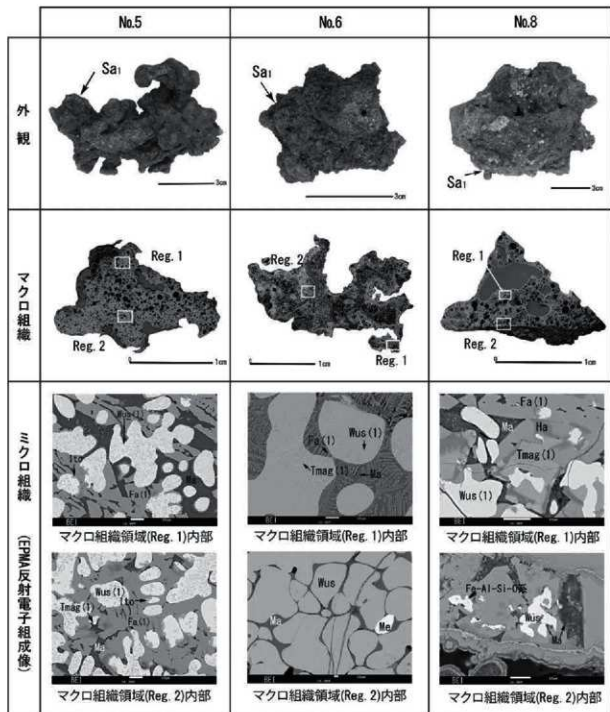


図4 No.5・No.6・No.8の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。BEI=EPMA反射電子組成像、Me=メタル、Wus=ウスタイト、Ito=鉄チタン酸化物(Tmag=チタノマグネタイト)、Fa=鉄かんらん石、Ha=FeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系化合物(ハースナイトに近い組成の鉱物相)、Ma=微細粒子が混在するガラス化した領域。

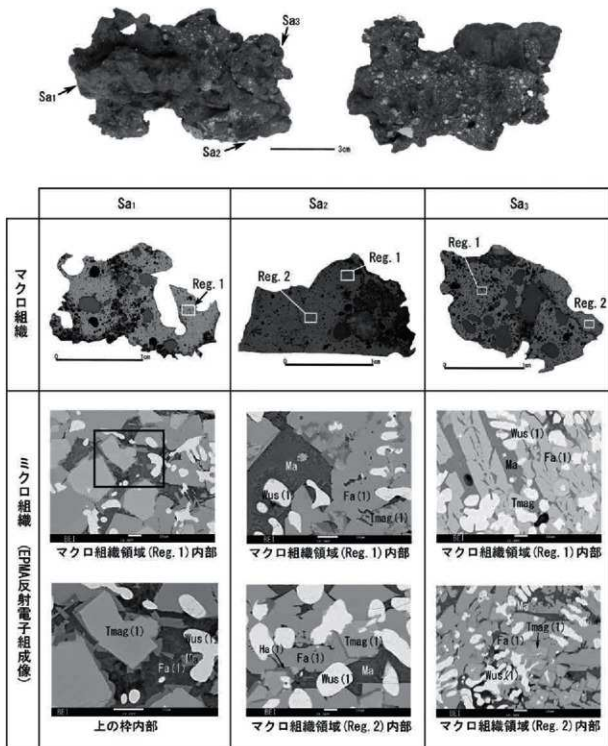
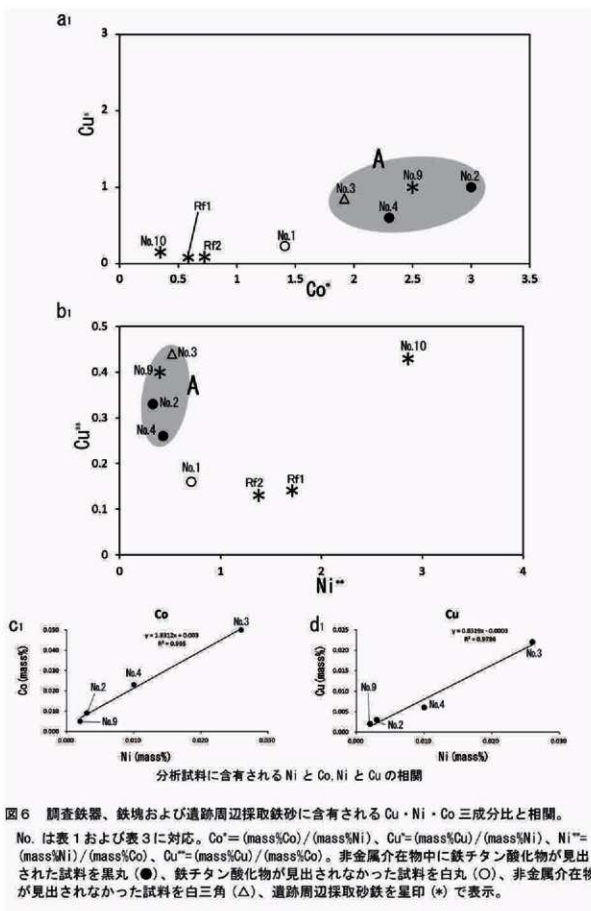


図5 No.7の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。BEI=EPMA反射電子組成像。Wus=ウスタイト、Tmag=チタノマグネタイト、Fa=鉄かんらん石、Ha=FeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系化合物(ハーシナイトに近い組成の鉱物相)、Ma=微粒子が混在するガラス化した領域。



## 4 炭化材樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

宮古市赤前Ⅲ遺跡は、津軽石川に面する緩斜面上に立地する。本遺跡の発掘調査では、縄文、古代、中世、近世の遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、古代の竪穴建物 S I 31 をはじめとする各種から出土した炭化材について樹種同定を行い、木材の利用について検討する。

### 1 試料

試料は、竪穴建物から採取された炭化材 9 点であり、S I 01・09・11・31・37・40 から各 1 点、S I 48 から 3 点が選択されている。

### 2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Wheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

### 3 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。炭化材は、広葉樹 2 分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

### 4 考察

本分析調査の結果、赤前Ⅲ遺跡で検出された竪穴建物から出土した炭化材には、コナラ節とクリの 2 種類が確認された。日本のコナラ節には、コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの 4 種がある。二次林や山地の落葉広葉樹林の主要な構成種となる落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。クリは、二次林などに生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

なお、S I 31 カマドから出土した炭化材はクリに同定された。出土した位置から燃料材としてクリが利用されたことが考えられる。また、S I 11 床面直上から出土したとされる炭化材は、コナラ節に同定された。竪穴建物床面における炭化材の出土状況を検討する必要はあるが、柱等の建築部材

として利用されたことが想定される。

いずれにしても、現在の本遺跡周辺の植生等を考慮すると、当時も周辺でコナラ節やクリに木材を得ることは可能であったと考えられ、燃料材や建築部材に火力や強度を考慮して、木材が選択されたことが示唆される。

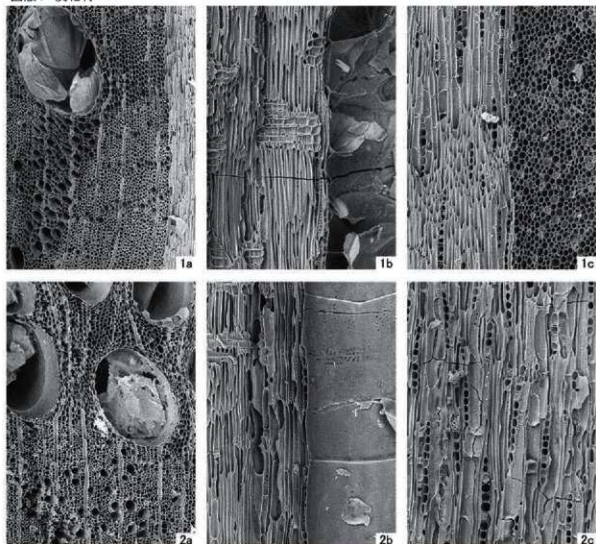
#### 引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。  
 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。  
 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。  
 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。  
 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。  
 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。  
 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p。  
 Wheeler E.A,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト,伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p。[Wheeler E.A,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of *Microscopic Features for Hardwood Identification*].

表1 樹種同定結果

遺構	位置	試料名	種類	備考
S109	堆積土	炭化物	クリ	
S101 東側	堆積土	炭化材	クリ	
S111 北東	床面直上	個体炭化物	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
SI37SXW01	前庭部 黒色土		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
SI31 カマド	燃焼部直上	炭化物	クリ	
SI40	床面直上	C-1	コナラ属コナラ亜属コナラ節	試料4
SI48	床面直上	No.5	クリ	試料1
SI48	床面直上	No.8	コナラ属コナラ亜属コナラ節	試料2
SI48	床面直上	No.13	クリ	試料3



図版1 炭化材



1.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SI01 東側:床直)

2.クリ(SI31カマド:燃焼部直上)

a.木口.b.柱目.c.板目

 100  $\mu$  m.a  
 100  $\mu$  m.b,c

## 5 火山灰分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

宮古市赤前Ⅲ遺跡は、津軽石川に面する緩斜面上に立地する。本遺跡の発掘調査では、縄文、古代、中世、近世の遺構・遺物が出土している。今回の分析調査では、堅穴建物 SI40 で採取された火山灰質試料を対象として、テフラの検出や屈折率測定を実施し、既知の火山灰との対比を行い、遺構の年代指標に関する資料を作成する。

### 1 試料

試料は、SI40 - 2層中から採取された火山灰質試料 1 点（試料名：S X 502 2層）で、岩相は浅黄色を呈する砂まじりシルトである。

### 2 分析方法

#### (1) テフラ検出同定

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

#### (2) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約 40g に水を加え超音波洗浄装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径 1/4mm - 1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下に 250 粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を 250 粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラ分析と同様である。

さらに火山ガラスおよび斜方輝石については、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

### 3 結果

#### (1) テフラ検出同定

結果を表 1 に記す。SI40 - 2層からは、軽石は検出されず、無色透明の軽石型火山ガラス、バブル型火山ガラスが少量混在する。

## (2) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

重鉱物・火山ガラス比分析の結果を表2・図1に記す。火山ガラスは、軽石型火山ガラスが多く含まれる。重鉱物では斜方輝石が最多であり、単斜輝石および不透明鉱物が次いで多く、角閃石が微量含まれる。

試料から回収した火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定結果を図2に示す。火山ガラスは、 $n_{1.509-1.517}$ というレンジであり、 $n_{1.514}$ での集中度が高い。また斜方輝石は、 $\gamma$  1.704-1.718と広いレンジを示し、モードは、 $\gamma$  1.711付近にある。

## 4 考 察

竪穴建物 SI40-2層から検出された火山ガラスは、本遺跡の地理的位置を考慮すると、十和田カルデラからの噴出物であることが考えられる。今回の結果のように、火山ガラスおよび斜方輝石が比較的高い屈折率を示す十和田カルデラのテフラには、十和田中掬テフラ(To-Cu:町田・新井,2003;Hayakawa,1985)と十和田南部テフラ(To-Nb:町田・新井,2003;Hayakawa,1985)がある。To-Cuの噴出年代は6,200年前、To-Nbは9,400年前の暦年較正年代(工藤・佐々木,2007)が得られている。

Hayakawa(1985)によれば、To-Nbは降下軽石火山礫層からなる南部軽石と細粒の降下火山灰層からなる貝守火山灰により構成され、南部軽石の分布は久慈市付近の岩手県北部までの記載があるが(町田・新井,2003)、貝守火山灰は給源付近までしか記載されていない(Hayakawa,1985)。一方、To-Cuは宮城県気仙沼付近まで確認されている(町田ほか,1984)。

上記の分析結果から、SI40-2層中にはTo-CuやTo-Nbのいずれか、あるいは両方のテフラが混在している可能性がある。なお、重鉱物組成中に微量含まれる角閃石は、To-CuやTo-Nb由来するテフラの本質物質ではなく、遺構周辺の土壤中に本来含まれる角閃石と考えられる。

当社による分析事例では、赤前Ⅲ遺跡が所在する宮古市より南部の岩手県山田町沢田Ⅲ遺跡において、To-NbあるいはTo-Cuと推定される火山ガラスを検出しており、本遺跡の結果との関連が注目される。

## 引用文献

- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別,地質学雑誌,101,123-133.
- Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano, Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo,vol.60,507-592.
- 工藤 崇・佐々木 寿,2007,十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年,地学雑誌,116,653-663.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-,渡辺直経編 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学,865-928.



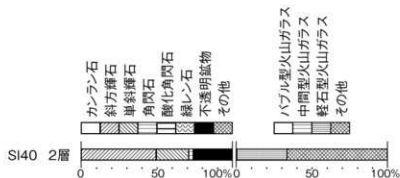


図1.重鉱物組成および火山ガラス比分析結果

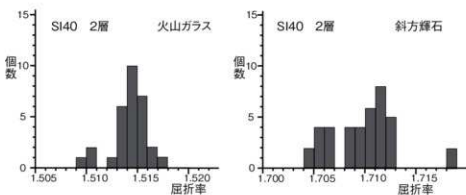


図2. 火山ガラス・斜方輝石の屈折率

表1 テフラ分析結果

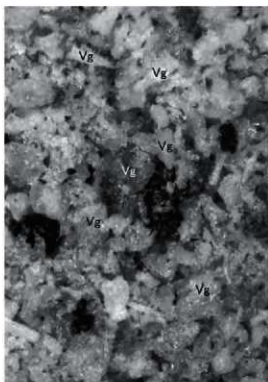
試料名	火山ガラス		軽石			備考
	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
SI40 2層	++	cl・pm>cl・bw>br・bw	-	-	-	

凡例 - :含まれない, ++:少量.  
cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, pm:軽石型.

表2 重鉱物火山ガラス分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
SI40 2層	0	124	54	7	0	0	64	1	250	1	0	83	166	250

図版1 テフラ・重鉱物・火山ガラス



1.テフラの状況(S140 2層)



2.重鉱物(S140 2層)



3.火山ガラス(S140 2層)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Op: 不透明鉱物, Vg: 火山ガラス,  
Qz: 石英, Pl: 斜長石.



## Ⅶ 調査のまとめ

赤前Ⅲ遺跡では、2箇年にわたる発掘調査によって多くの成果が得られた。以下では時代毎に特に成果のあった点について検討を加えることで調査のまとめとする。

### 1 縄文時代

#### (1) 土 器

今回の調査で最も出土量が多かった遺物である。前期～中期に属するものであり、ほぼ全てが大木式土器の範疇に含まれるものであった。本報告では第Ⅳ章でその型式に従ってグループ分けを行っているが、本節では各群の特徴を再度述べるとともに本遺跡における出土傾向と周辺遺跡の事例についてみていく。なお、記載にあたり代表的な事例を用いて分類図を作成した(第205・206図)

各群について記載する前に、その前段階である早期の可能性のある土器について触れておきたい。遺物包含層から出土した深鉢519(第167・206図)は、丸底あるいは尖底になると考えられる個体で、内外面ともにナデ調整が施される。同様の特徴を有する破片はこれ以外は確認できなかったが、本遺跡で前期以前にも何らかの活動が行われていたことを示すものといえる。

第Ⅰ群は大木1～2式(前期前葉)に比定されるグループである。大木1式に属する非結束羽状縄文が横方向に施文されるもの、大木2式に属する口縁部に結節回転文または隆帯貼付+刺突列点文、平行沈線文を施すものがある。口縁部形態は平縁と波状口縁、体部の施文は横方向の羽状縄文や木目状燃糸文がある。147・622等は胎土に繊維を含む。今回の調査ではS I 01や遺物包含層等、調査区南西側で出土している。また、過去に調査した遺跡範囲北西側でも出土しており(宮古市教委1999a)、本遺跡では標高の低い地点で出土する傾向がある。宮古市域では大木2式を主体としてこの時期の土器が出土する遺跡は比較的多く、周辺では赤前Ⅳ八枚田遺跡・弘川Ⅲ遺跡・八木沢野来遺跡・八木沢Ⅱ遺跡等で出土している。

第Ⅱ群は大木3式(前期中葉)に比定されるグループである。沈線による円文、細沈線貼付+キザミ、沈線+爪形文等が施文されるが、小破片のみの出土であり全形がわかる資料は無い。調査区南西側で出土する傾向があるが、遺構内としてはS I 01・SK 76から出土しているのみで、他は遺物包含層からの出土である。この時期の土器は宮古市域全域を見ても出土する遺跡は少なく、周辺では千鷲Ⅳ遺跡等で少量出土しているのみである。

第Ⅲ群は大木4～5式(前期中葉～後葉)に比定されるグループである。粘土紐による格子文や山形文、円形文やC字状文の貼付文、口縁部隆帯+指頭押圧が施される。器形的には体部が膨らむもの、直線的に立ち上がるものがあり、口縁部は頸部を持たず体部から直線的に立ち上がる平縁のものや直線的に大きく外方に開くものがある。今回の調査ではS I 01や遺物包含層等から出土しており、調査区南西側で出土する傾向がある。第Ⅱ群土器に比べて出土量は多く、宮古市域でも出土遺跡は前時期より増加している。周辺では八木沢野来遺跡や千鷲Ⅳ遺跡でまとまって出土している。

第Ⅳ群は大木6～7式(前期末～中期前葉)に比定されるグループであり、時期的に併行する円筒下層d～上層a式もここに含めた。今回の調査で最も出土量が多かったグループで、S I 01と遺物包含層から多量に出土している。この他、S I 01等が位置する調査区南西側の遺構外やS I 02～04が位置する調査区南側(I A 19～21 m～oグリッド)の遺構内外から出土している。大木式に

属するものは深鉢形が主体で、体部形状は長胴形で体部中央が膨らむものと底部から直線的に立ち上がるもの、球形のものがある。口縁部には円形や山形の貼付文、甕状工具や半裁竹管を使用した平行沈線文や山形文・鋸歯状文が施される。口縁部は平縁と4単位の波状口縁がある。体部には縦位または横位に綾織文が施されるものが多い。円筒土器は可能性のあるものを含めても個体数は非常に少ないが、円筒下層d～上層a式に属するものが出土している。器形が判明するものはいずれも深鉢形で、S I 05から出土した141は円筒下層d式、SK 30から出土した450と遺物包含層から出土した515は円筒上層a式に属すると考えられる。この時期の土器は周辺では津軽石大森遺跡(大木7式)や千鶴IV遺跡(大木6～7式)で出土しているが、宮古市域全域を見ても出土量は多くない。また、円筒土器はさらに少なく、周辺では時期的には第I群(前期前葉)に併行する円筒下層b式の深鉢が八木沢野来遺跡から出土している程度である。

第V群は大木8式(中期中葉)に比定されるグループである。いわゆるキャリパー形の深鉢が主体であり、口縁部及び体部には粘土紐貼付または沈線による渦巻文や波状文が施される。今回の調査ではS I 41～43が位置する調査区中央東側でまとまって出土している。本遺跡では過去の調査でも遺跡範囲北端部で出土しており(宮古市教委1984)、第IV群までと比べて標高の高い地点で出土する傾向がある。周辺では、赤前I牛子沢遺跡・高浜V下地神遺跡・重茂館遺跡群等で出土している。

第VI群は大木9～10式(中期後葉～末葉)に比定されるグループである。キャリパー形の器形が多いが、第V群のものとは異なり体部中位付近が屈曲する。区画縄文帯と素文帯で構成され、区画縄文帯は充填縄文のものより磨消縄文のものが多い。文様は、大木9式に属する「逆U字」状・ステッキ状・楕円文の素文帯をもつものと、大木10式に属する「C」・「S」・「U」等アルファベット状の素文帯を持つものがある。宮古市域ではこの時期の土器が出土する遺跡は多く、周辺では高浜VI地神遺跡・下大谷地I遺跡、八木沢野来遺跡、内陸部では袋帯遺跡等で出土している。

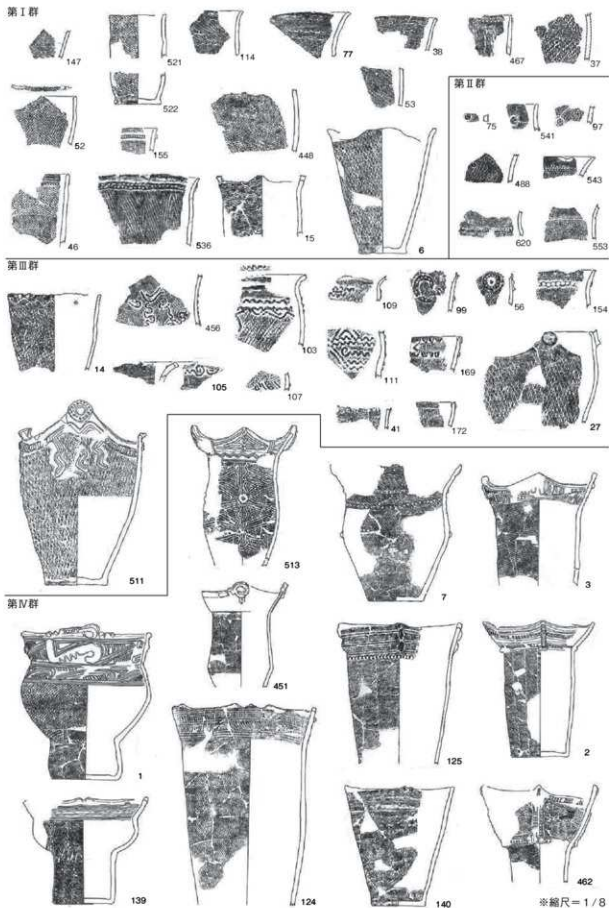
以上が本遺跡から出土した縄文土器の特徴と傾向である。宮古市域全体における出土状況を比べてみると、おおまかな出土量の推移は類似しているが、今回の調査ではこれまで出土量が少ないとされてきた前期末～中期前葉の土器がまとまって出土している点が注目される。

## (2) 大型堅穴建物S I 01に関する検討

調査区の南西側で長軸13mを超える、いわゆる「大型住居」と捉えられる堅穴建物S I 01(第12・13図、以下本遺構とする)を検出した(註1)。大型住居は岩手県内ではこれまでに約50遺跡で200例程確認されているが(北日本縄文文化研究会2011)、宮古市域では事例が少なく貴重な資料となるものである。以下では本遺構について若干の検討を加えるが、柱穴・溝の位置や重複関係から4回の建て替え(拡張)が行われていたと考えられることから、まず最初に構築当初から最終段階までを5つの段階に分け、その変遷についてみていくこととする。

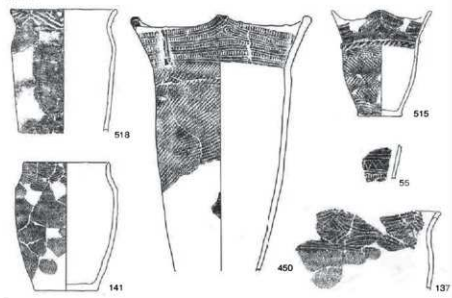
### 建て替え(拡張)の変遷

第1段階 構築当初の段階である。柱穴はP 16・20・28・34・43・46・49・50・52・56・61・64・67・73の15個、溝は溝2・3・7・8の4条がこの段階のものと考えられる。柱穴は南壁西寄りのP 34・50、北壁西端のP 52は溝内に掘削されている。P 20・43、P 52・64、P 34・50、P 28・73、P 46・56というように南北2個が対になり、床面の中軸線上には棟持柱と考えられるP 16・61がある。なお、柱穴と考えていたP 67は位置的には溝の一部になる可能性もある。以後の拡張の影響で壁面は残存していないが、柱穴と溝の位置関係から平面形は西側が広い台形状であったと考えられる。柱穴・溝端部から計測した規模は東西9.7m、南北3.8m(面積約37m<sup>2</sup>)であり、5段階の

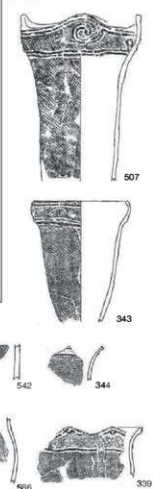


第205図 縄文土器分類図(1)

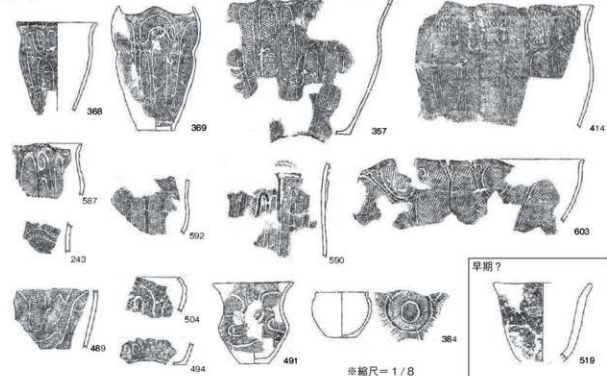
第Ⅳ群



第Ⅴ群



第Ⅵ群



第 206 図 縄文土器分類図 (2)

うちで最も規模が小さい。焼土は、第2段階以降の整地で削平されており確認できない。

**第2段階** 1回目の拡張の段階である。柱穴はP 03・12・20・26・30・31・32・39・49・65・77の11個、溝は溝1・3の2条がこの段階のものと考えられる。このうち、P 20・49は第1段階でも使用されている。柱穴の配置は東西方向に長い六角形状であり、第1段階の台形状から配置が変化している。柱穴は、南北壁に沿うP 26・30～32・39は溝内に掘削されている。P 03・20、P 30・32、P 26・31が対になり、間隔は短いP 12・65が棟持柱になると考えられる。なお、既に消失しているがP 39にも北側に対になる柱穴が存在していたと考えられる。壁面は、溝1の北側以外は以後の拡張あるいは後世の削平の影響で残存していない。溝と柱穴の位置関係から東西に長い長方形の平面形であったと考えられ、柱穴・溝端部から計測した規模は東西11.0m、南北4.0m（面積約44㎡）となり、第1段階よりも規模が拡大されている。焼土は、第3段階に属すると考えられるP 63に切られていることからSF 02がこの段階に属する可能性がある。なお、溝1はこの段階以降最後まで使用されており、それに伴って北壁の位置も固定され第5段階まで変化は無い。

**第3段階** 2回目の拡張の段階である。柱穴はP 25・33・36・38・44・46・52・56・57・72の13個、溝は1・4・10・12の4条がこの段階のものと考えられる。このうち、P 16・52・77は前段階でも使用されている。この段階以降、柱穴は溝より建物の内側に掘削されており、溝内に位置するものは無くなる。柱穴配置は第2段階と同じく東西方向に長い六角形状であるが、全て溝より内側に位置するため第2段階よりも南北方向が狭い。P 44・52、P 33・38、P 25・56、P 57・72が対になり、P 16・63が棟持柱になると考えられる。この段階では南壁の東寄りの位置に間仕切り溝と考えられる短小な溝（溝10）が掘削されている。北壁以外の壁面は残存していないが、柱穴・溝端部から計測した規模は東西11.0m、南北4.7m（面積約52㎡）となる。焼土は、柱穴や溝との位置関係からSF 01がこの段階～第5段階のいずれかに属すると考えられる。

**第4段階** 3回目の拡張の段階である。柱穴はP 01・02・04・20・25・29・41・43・45・46・48・51・52・57・68の15個、溝は溝1・5・11・13の4条がこの段階のものと考えられる。このうち、P 20・25・43・46・52・57は以前の段階でも使用されている。柱穴配置は第3段階の六角形状から変化し、西壁が広く南東隅が直角になるという歪な台形状となる。P 02・52、P 01・51、P 25・41、P 67・68が対になり、P 04・46が棟持柱になると考えられる。なお、北列のP 01と41、南列のP 25と51の間は約5mと間隔が広いが、この間には柱穴は検出されておらず、柱無しでこの部分に上屋を掛けることができたのかは検討を要する。壁面は北壁と東壁、南壁の西寄りの一部が残存しており、これらと柱穴・溝端部から計測した規模は東西10.8m、南北5.2m（面積約56㎡）となる。壁面付近に溝や柱穴が掘削されており、平面形は柱穴配置と同じく台形状となると考えられる。この時期にも間仕切り溝（溝11）が掘削されている。

**第5段階** 最終の拡張段階である。柱穴はP 02・03・06・09・33・35・45・46・48・51・55・56・74・76の14個、溝は溝1・6・9・12・14の5条がこの段階のものと考えられる。このうち、P 02・03・06・09・33・45・46・48・51・56は以前の段階でも使用されている。柱穴配置は再び東西に長い六角形状となるが、西側が広がる歪なものである。P 02・03、P 33・51、P 56・74、P 45・48が対になり、P 06・46・76が棟持柱になると考えられる。なお、既に消失しているがP 35にも北側に対になる柱穴が存在していたと考えられる。発掘時に確認された壁面はいずれもこの段階のものであり、西壁と南北壁の西寄り以外が残存している。拡張は主に東西方向に行われており、東～南東壁では第4段階の壁面の中位付近の外側に形成されたテラス状の平坦面がある。平面形は南東隅が角張る長楕円形であり、壁面と柱穴の端部から計測した規模は東西13.6m、南北5.6m（面積約76㎡）、

構築の当初段階である第1段階の約2倍の面積となっている。焼土は、柱穴との位置関係から南西側のSF 03がこの段階に属する可能性もあるが、現地性のものも含めて検討を要する。

以上が本遺構の建て替えの変遷である。溝や柱穴は前段階のものを再利用しながら徐々に規模が拡大されていることから、完全な造り替えではなく建て増しのような拡張であったと考えられる。柱穴配置は段階によって台形状か六角形状となるが、柱穴が南北一対になるという規則性は最終段階まで踏襲されている。なお、今回はどの段階とも示さなかったが、第1または2段階に使用されたと考えられる溝3の内部に掘削された柱穴は、これらの段階の壁面を構築する際に使用された壁を支える柱であった可能性も考えられる。

#### 周辺事例との比較

岩手県内ではこれまでに約200例の大型住居が確認されているが、宮古市域では千鶴IV遺跡・袋帯遺跡・高浜IV地神遺跡で計4例が確認されているのみである（北日本縄文文化研究会2011）。

まず宮古市域で検出された事例について簡単に触れておく。千鶴IV遺跡は重茂半島の東岸に位置し、前期中葉（大木4式期）の大型住居が1棟（D-7号竪穴住居跡）検出されている（宮古市教委1999b）。平面形は長方形で、3時期の変遷が考えられており、最大となるII期が長軸10.5m、短軸5.0m（面積約53㎡）である。II期に伴う炉跡は検出されていないが、地床炉の可能性はある。袋帯遺跡は内陸部の和井内地区に位置し、中期後葉（大木9式期）の大型住居が2棟（18・30号住居跡）検出されている（岩文振2008）。平面形は不整な円形で18号住居は長軸9m、短軸8.4m（面積約59㎡）、30号住居は長軸8.5m、短軸6.9m（面積約50㎡）である。いずれも複式炉を有しており、建て替えは認められない。高浜VI地神遺跡は宮古湾を挟んで本遺跡の対岸に位置し、中期末（大木10式期）の大型住居が1棟（8号住居跡）検出されている（宮古市教委2006）。平面形は円形で、長軸・短軸とも約8m（面積約50㎡）である。袋帯遺跡と同じく複式炉を有しており、建て替えは認められない。

これらの事例について大まかな傾向をみると、前期のものは長方形プランで地床炉（?）、中期のものは円形で複式炉（石囲炉）を有するようである。また、前期のものは建て替えが行われるが中期のものには認められない。これらと本遺構を比較すると、平面形や建て替えを行っている点は千鶴IV遺跡例と類似していることから、前期の大型住居の流れの中で構築されたものと考えられるが、規模は本遺構の第5段階が宮古市域では最大規模である。構築時期については沿岸部の他の事例を含めても山田町沢田I遺跡では前期前葉（大木2式期）、普代村力持遺跡では前期前葉（大木2式期）と中期前葉（大木7b式期）といったように本遺構と同時期の大型住居は検出されておらず、沿岸部では初の事例である。なお、大型住居の機能については諸説あるが、今回は1棟のみの検出であり炉跡など床面施設の状況も不明瞭であることから明確にすることはできなかった。

### (3) 集落の変遷

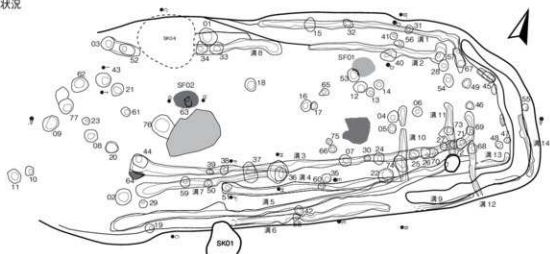
縄文時代の遺構は東西に長い調査区のはほぼ全域で検出されており、調査区全体が縄文時代前～中期に集落として利用されていたことが判明した。本節では本遺跡における縄文時代集落の変遷について、①前期中葉～後葉、②前期末～中期前葉、③中期中葉、④中期後葉～末の4期に区分して遺構の分布状況と主要遺構である竪穴建物・土坑の傾向についてみていく。

#### ①前期前葉～後葉

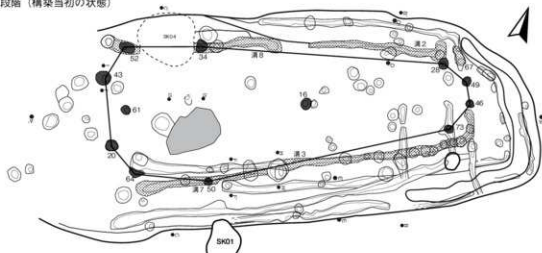
出土遺物としては第I～III群土器及び共伴する石器がある。出土遺物の年代観と遺構の重複関係から、SK 04～06・16・25・26・28～36・45・46・48～50・70・73・76・77等がこの時期に属する



完掘状況

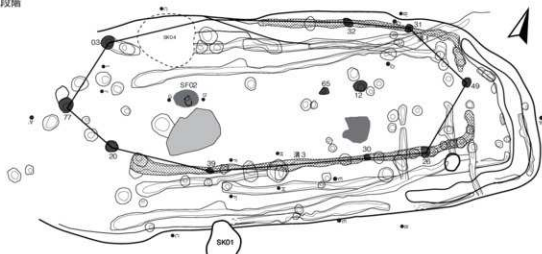


第1段階 (構築当初の状態)



※この段階に伴う焼土は未確認。(第2段階以降の整地で削平)

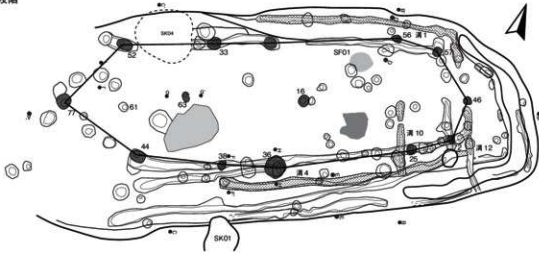
第2段階



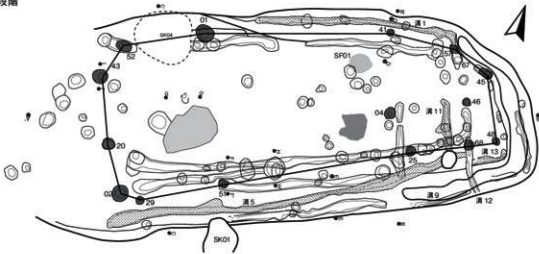
縮尺=1/100

第207図 S I 01 変遷図 (1)

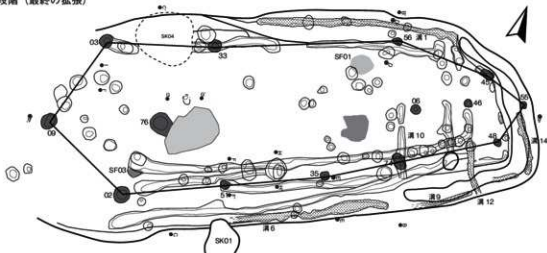
第3段階



第4段階



第5段階 (最終の拡張)



縮尺=1/100

第208図 S I 01 変遷図 (2)

と考えられる。平成25年度調査区の南西側に相当するIA16～22f～nグリッドにのみ分布している。この時期の土坑はいずれも円形プランで、中央に副穴を有する陥し穴が主体となる。これらは前期末以降に遺物包含層となる調査区南西隅の沢跡や調査区南端のII層分布範囲に集中する傾向があることから、この一帯を水場に寄ってくる動物を捕獲するための狩猟場として利用していたものと考えられる。なお、この時期に属する堅穴建物は検出されていないが、宮古市教育委員会が実施した遺跡範囲北西側の調査では1棟(B-4号堅穴住居跡)が検出されていることから(宮古市教委1999a)、調査区外にこの時期の建物が存在する可能性がある。

#### ②前期末～中期前葉

出土遺物としては第IV群土器及び共伴する石器・石製品があり、遺物出土量が最も多い時期である。出土遺物の年代観と遺構の重複関係から、SI01～05、SH01、SK02・03・07・42・67・68、遺物包含層等がこの時期に属すると考えられる。遺構は平成25年度調査区に相当する調査区西側のIA区範囲内、標高11～16mの地点にのみ分布している。詳細に見るとこの時期の中でも重複関係は認められ、特に貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑はかなり密集して掘削されている。遺構・遺物が最も多い時期であり、本遺跡における縄文時代集落のピークの時期の一つである。堅穴建物の分布状況を見ると、SI02・03・04は重複関係にあるが、これらとSI01・05は15m程の間隔で分布する。ただし、大幅な時間差ではないものの、重複関係と炉の構造からSI02・04はSI01・03・05よりやや遅れて構築されたものと考えられる。なお、SI01のような大型住居については、集落内では放射状の配列または地形の等高線に沿って立地するかのいずれかになるということである。本遺跡では調査区南西隅の調査区外にも大型住居が存在し、いずれかの配置をとる可能性はあるが、今回は1棟のみの検出であり明確にはできなかった。

この時期の堅穴建物は規模・形状共に多様である。SI01は長軸が13mを超える大型住居であり、SI04も長軸7.7mと規模は大きい、その他は長軸6m程度の通常規模のものである。ただし、通常規模といっても中期中葉以降のものと比較すると規模は大きい。平面形は長楕円形と円形、隅丸方形がある。炉が検出されている建物はSI03を除く4棟であり、地床炉(SI01・05)と複式炉(SI02・04)がある。なお、堅穴建物の炉の可能性のあるSH01は単室の石囲炉である。

#### ③中期中葉

出土遺物としては第V群土器及び共伴する石器がある。出土遺物の年代観と遺構の重複関係から、SI40～43・52・59、SK126、P43等がこの時期に属すると考えられる。遺構は調査区北西側に位置するP43を除く全てが平成26年度調査区に相当する調査区中央から調査区北東側、標高27～32mの地点に分布する。前後の時期に比べて遺構数・種別は少ないものの、この範囲では沢跡堆積土であるII層を中心にこの時期の遺物がまぎらまぎらして出土している。

堅穴建物の規模・形状は中期初頭までに比べて規格的になり、平面形はSI43が長楕円形である以外は円形プランである。規模もSI43が長軸7.1mである以外は直径5m未満となり、SI52は直径2.9mと小規模である。炉が検出されている建物は4棟あり、地床炉(SI42)、単室の石囲炉(SI41・43)、土器埋設炉(SI52)と多様である。

#### ④中期後葉～末

出土遺物としては第VI群土器及び共伴する石器がある。出土遺物の年代観と遺構の重複関係から、SI44・45・47・48・54・55・62、SK110・115・118・127・128・143・144・152等がこの時期に属すると考えられる。平成26年度調査区に相当する調査区北東側、31～34mの地点に分布している。前時期に比べて遺構数が増加しており、堅穴建物の検出数は全時期を通じて最も多い。遺物量は前期

末～中期前葉に比べて少ないが、堅穴建物の検出数から、この時期も本遺跡における縄文時代集落のピークの時期の一つと考えられる。

堅穴建物の規模・形状は中期中葉に比べてさらに規格的になり、ほぼ円形プランとなる。規模は炉の造り替えを行っている S I 53 が長軸 6.6 m とやや大きいのが、この他は長軸が 2.8～5.1 m と小型化する。特に長軸 3 m 前後のものが 4 棟 (S I 55・57・58・61) と多い点は他の時期と異なる特徴である。炉の形態は、地床炉 (S I 45・47・61)、単室の石囲炉 (S I 44・48・49・53～55・58・60・62)、複式炉 (S I 50・57) があり、単室の石囲炉が最も多い。単室の石囲炉の中には前庭部をもつもの (S I 44・48) がある。複式炉には石囲炉と土器埋設炉の併用 (S I 50) と石囲炉と地床炉の併用 (S I 57) がある。なお、土坑は多数検出されているが、前期末～中期初頭のものと比較しても規模・形状が一定ではなく性格が特定できるものはほとんど無い。

以上が本遺跡における縄文時代の遺構・遺物の変遷である。縄文時代前期～中期にかけて集落が形成されているが、分布状況と遺構の内容から時期毎に明瞭に分けられる。前期前葉～中期前葉 (縄文土器分類第 I～IV 群) の遺構・遺物は調査区の西側の標高の低い地点の狭い範囲の中で重複しながら構築されているが、一方で中期中葉～末 (土器分類第 V・VI 群) は調査区西側には明確な遺構は無く、調査区中央から東側にかけての標高の高い地点に一部重複しながらも間隔をあけて分布する傾向にある。このことから、本遺跡で生活を営んでいた集団は当初標高の低い地点で生活していたものの、何らかの要因によって徐々に標高の高い地点へ移動していったものと考えられる。

## 2 古 代

### (1) 土 器

出土量は縄文土器に比べて少ない。出土した器種は、土師器が坏・高台坏・甕、須恵器が瓶と大甕である。ここでは土師器の形態的特徴から年代観についてみていく。

土師器坏は内面に黒色処理を施す I 類が主体となり、黒色処理を施さない II 類と両面に黒色処理を施す III 類は少量である。轆轤成形のものが主体であり、非轆轤成形のものは S I 33・34 から出土した 303・304、S I 37 から出土した 323 の 3 点のみである。口縁部が内湾する A 類と外反する B 類があるが、その比率は約 2 : 1 で A 類が多い。形態的には A 類のほうが B 類よりも古いと思われるが、両者は S I 06・33・34 等では共伴しており、明確に年代が区分できるものではない。個体数は少ないが、形状と底径・口径比から推定すると、今回出土した轆轤成形の土師器坏はいずれも 9 世紀中葉～10 世紀初頭に属するものと考えられ、なかでも 9 世紀後葉のものが主体となる。非轆轤成形のものはいずれも I 類で、全形がわかる資料は無いが 303・304 は 8 世紀後半、323 は内面に明瞭な段を有することから 8 世紀前半に属するものと考えられる。

高台坏の出土数は少ないが、高台の高さが 1 cm 以上あり、断面形が直線的なものが主体であることから坏と同じく 9 世紀後葉～10 世紀初頭に属するものと考えられる。なお、S I 13 から出土した 214 のみ断面形が細長くハの字状に開くことから 10 世紀前葉に属するものと考えられる。

土師器甕はいずれも非轆轤成形で、口縁部が「く」の字状に屈曲する I 類が主体となり口縁部が直線的または内湾して立ち上がる II 類と受け口状の口縁部となる III 類はごく少数である。屈曲の強弱や大きさの大小はあるが、型式差に乏しく単体では年代特定が困難である為、今回は坏との共伴関係から 9 世紀中葉～10 世紀前葉に属するものと考えておきたい。ただし、III 類に分類される S I 33・34 から出土した 309 は 8 世紀代に属すると考えられる。

以上のように、今回の調査で出土した古代の土器は9世紀後葉を中心とする時期のものと考えられる。この時期の土器は宮古市域では内陸部の鯉沢遺跡・磯島館山遺跡、島田Ⅱ遺跡等で出土しているが、宮古湾沿岸でまとまって出土した事例としては本遺跡が初めてである。また、調査区外からの流れ込みと考えられるが、奈良時代（8世紀代）に属する土器も少量出土している。同時期の土器は周辺では小堀内Ⅲ遺跡や赤原Ⅳ八枚田遺跡、津軽石大森遺跡等で出土しており（宮古市教委1999a、岩文振2015c）、宮古湾沿岸にはこの時期の集落が多く存在していたものと考えられる。

なお、今回の調査ではS I 01・07・38、S K 19から各1点、合計4点の墨書土器が出土している（126・174・337・470）。現在のところ宮古市域では島田Ⅱ遺跡で2点、金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡で1点出土しているのみであり（北東北古代集落遺跡研究会2014）、本遺跡での出土量は宮古市域における一遺跡あたりの出土量としては最大である。

## （2）堅穴建物

古代に属する堅穴建物は41棟検出した。ここでは形態と内部施設の特徴についてみていく。平面形は正方形（S I 13・22等）、長方形（S I 19・29等）、隅丸方形（S I 11・32等）があり、長短の比率の差はあるが長方形プランのものが多い。全形が判明する堅穴建物19棟についてみると、長軸の平均値は4.4m、面積の平均値は20.2m<sup>2</sup>である。長軸の最大はS I 37の7.9m、最少はS I 12の3.1mとばらつきはあるが、6mを超えるものはS I 08・37・63の3棟のみであり、多くのものは3.1～5.2mの範囲に収まる。面積は最大がS I 37の54.51m<sup>2</sup>、最少はS I 12の8.06m<sup>2</sup>である。先述の平均値と比較すると、それよりも規模の小さなものが多く、30m<sup>2</sup>を超えるものはS I 37・63・64の3棟と全体の1割にも満たない。柱穴配置は2本柱（S I 19等）と4本柱（S I 24等）があるが、柱穴が無いものが多数である。また、特殊な事例であるがS I 09では北～西壁面で腰板を留めた銅線を納める柱穴と想定される直径10cm程度の小穴、S I 19では壁面の外側に外柱穴の可能性のある柱穴が確認されている。周溝が全周するものはS I 22のみで、その他は部分的に巡るもの（S I 11・19・22・31等）あるいは周溝を持たないものである。

カマドは35棟で検出されており、カマドを有する堅穴建物については住居とした。北～東方向に1基のみ設置されるものが基本であり、2基持つものはS I 11・33の2棟のみである。袖の芯材と屋根材に礫を使用し、粘質土で被覆するものがほとんどである。煙道は掘り込み式と刳り貫き式があり、掘り込み式のなかではS I 38が側壁と天井に、S I 08が側壁に礫を使用している。また、S I 12・16・18のように住居廃絶時に煙出しに礫を充填する事例も確認されている。

その他の施設としては炉と貯蔵穴があり、炉を有する堅穴建物については工房とした。詳細は後述するが、5棟で検出されている（S I 11・12・34・35・37）。明確な貯蔵穴を有する建物は2棟しかないが、S I 31 S K 01で須恵器大甕（289）が設置されていたと思われる状況で出土した。

## （3）鉄生産関連の遺構

今回の調査では、鉄生産関連炉が3基、内部に鉄生産関連炉を有する堅穴建物が5棟（S I 11・12・34・35・37）検出されており、遺跡内で鉄生産活動が行われていたことが判明した。いずれも小型のものであり、構造と出土した鉄滓の種類から精錬炉（S X W 01・02、S I 37 S X W 01）と鍛冶炉（S I 12 S X W 01、S I 34 S X W 01～03、S I 35 S X W 01～04、S I 37 S X W 02・03）があったと考えられる。このうち、S X W 01・S I 37 S X W 01は炉体が残存していることから上部構造がわかる事例であり、特にS I 37 S X W 01は板石を使用して炉体を構築するという珍しい事例である。

また、鉄製品及び鉄滓の比較資料として宮古湾沿岸部の砂浜で採集した砂鉄を分析したところ、鉄滓とは成分が類似するというところである（第Ⅶ章第3節参照）。このことから、本遺跡で生産される鉄の始発原料には宮古湾沿岸の砂鉄が使用されたと考えられるが、今回の調査区では精錬炉と鍛冶炉しか検出されておらず製鉄工程の実態については明らかにできなかった。調査区外に製鉄炉が存在する可能性はあるが、製鉄工程に伴う羽口や鉄滓がほとんど出土していないことから、鉄素材の生成は本遺跡では行われていなかったと考えられる。なお、赤前遺跡群の他の遺跡でも鉄生産関連炉は検出されているが、いずれも精錬炉や鍛冶炉であることから製鉄炉については赤前遺跡群以外の場所にある可能性がある。以上のことから、本遺跡を含む赤前地区では他地区の製鉄炉で生産された鉄素材（鉄鉄）を持ち込み、鋼を製造する精錬工程と鋼製鉄器を製作する鍛冶工程のみが行われていたと考えられる。なお、本遺跡では現在のところ燃料となる炭を生産する炭窯は検出されていないことから、鉄生産に必要な燃料の入手方法についても検討を加える必要がある。

#### （４）製 塩 土 器

製塩土器の破片は S I 17・18 から多量に出土している（第 175・176 図）。製塩土器は縄文時代からその存在が確認されているが、古代の製塩土器は色調が赤褐色で器壁が 1 cm 以上と厚手であることが特徴である。比較資料として古代の製塩遺跡と考えられる九戸郡洋野町二十一平遺跡出土資料をみると（君島 2004）、器面の内外面は輪積痕が残る粗雑な成形であり、白色の付着物（塩か）が認められる。残念ながら本遺跡出土資料には白色の付着物は認められないが、二十一平遺跡出土資料と特徴が非常に類似している。古代の製塩土器は、東北地方では仙台湾周辺と陸奥湾に出土遺跡が集中しており、岩手県内では沿岸部を中心に約 20 遺跡で出土が確認されている（北林 2008、君島 1999）。宮古市域では宮古湾沿岸部の遺跡で多く出土しており、中でも隣接する赤前Ⅳ八枚田遺跡の B・12 号竪穴住居跡や金浜Ⅰ・Ⅱ 遺跡Ⅰ号竪穴住居からは製塩土器・支脚の破片が多量に出土している（宮古市教委 1999、岩文振 2010b）。

なお、製塩土器は直火に触れ二次加熱を受けるという性格の遺物であることから、非常に脆く、破片状態で出土するため形状を復元できる個体は少ない。しかし、今回出土した 688 は口縁部の欠損を除けばほぼ形状が復元できる個体であり、当時の製塩土器の形状を知る上で貴重な資料である。

#### （５）集 落 の 様 相

縄文時代よりも分布域が狭く、調査区中央から西側の標高 12 ～ 26 m の範囲にのみ分布している。また、第Ⅴ章の冒頭で述べた通り環礁中範囲内には遺構は少なく、標高 14 ～ 17 m の礁が露出しない範囲に特に集中する傾向がある。検出遺構には竪穴建物（住居・工房）・鉄生産関連炉（精錬炉・鍛冶炉）・土坑（廃棄土坑含む）があるが、分布状況を見ても遺構ごとに明確に分布域が異なるわけではないことから場の使い分けは無かったと考えられる。竪穴建物の分布状況を見ると、S I 35・36 や S I 37 ～ 39 のような同一地点で住居から工房へと建て替えを行っているもの以外は直接的な重複関係にあるものは少なく、1 ～ 2 グリッド程度の間隔で構築されている。竪穴建物は出土した土器の年代観から 9 世紀中葉 ～ 10 世紀初頭に構築・使用されたものと考えられ、重複する遺構が少ないことから基本的には短期間で形成された集落であり、10 世紀前葉のうちには終焉を迎えたものと考えられる。また、工房・炉、鉄生産関連遺物が検出されていることと S I 17・18 から多量の製塩土器が出土していることから、生業として鉄生産と土器製塩を行っていた集落であることも明らかとなった。この他、釣針（S I 11 出土）・銛（S I 63 出土）等の漁撈具が出土していることと S I 06・11・12・

13・16・37で検出された動物遺存体（貝類・魚類・哺乳類）は（第VI章第1節参照）、当時の食料採集活動の一端を窺い知る資料となるものと考えられる。

宮古市域ではこれまで平安時代の竪穴建物は約400棟検出されているが（北東北古代集落遺跡研究会2014）、その約半数（214棟）は大規模な製鉄遺跡である島田Ⅱ遺跡で検出されている。赤前Ⅲ遺跡では、今回の調査で41棟、過去の調査を含めると50棟近い竪穴建物が検出されており（宮古市教委1984・1999）、島田Ⅱ遺跡よりは少ないが建物の検出数が多い（規模の大きい）遺跡であるといえる（註2）。また、周辺では赤前Ⅳ八枚田遺跡で12棟の竪穴建物と鉄生産関連炉、赤前Ⅴ柳沢遺跡で1棟の竪穴建物が検出されており、赤前地区では平安時代に鉄や塩作りを生業とした大規模な集落が形成されていたものと考えられる。

（村田）

### 3 中～近世

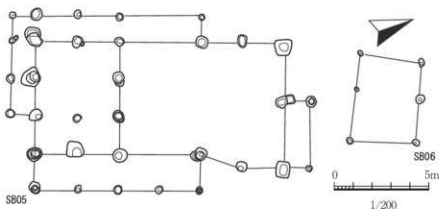
#### （1）掘立柱建物S B 05について

本遺跡では6棟の掘立柱建物跡が検出された。このうち本遺跡で検出された最大の掘立柱建物跡であるS B 05について考察を行いたい。

#### 間尺：予想される成立年代と建物の用途

初めに建物の間尺と建物の規模・軸組の特徴から本遺構の帰属年代を考えたい。S B 05の梁間方向の一間の間尺は六尺五寸（1,970mm）である。東北地方では中世後期から近世半ばまで一間の間尺であり続けたことが知られており、S B 05の帰属年代もまたこの年代幅の中で想定することができる。

なお、S B 05の平面規模は身舎梁間三間×桁行六間であるが、北東北で直屋の身舎梁間三間の掘立柱建物跡が検出されるのは中世城館遺跡ないしは近世集落遺跡に限定される傾向がある。ただし、遺物の出土傾向や地勢などの諸条件を勘案すると、本遺跡が中世城館の一部であったと考えることは難しい。また、S B 05では桁行方向の身舎筋の柱が抜かれる特徴がみられるが、同様の事例として八戸藩領では青森県八戸市の田向遺跡や新井田古館遺跡で検出された近世掘立柱建物跡を、盛岡藩領では岩手県遠野市向Ⅱ遺跡や岩手県二戸市吉田館遺跡で検出された近世掘立柱建物跡を挙げることができる。いずれも桁行の身舎筋の中でも中央付近の柱が抜かれる傾向がみられ類例は多い。中世城館遺跡で検出される直屋の身舎梁間三間掘立柱建物跡で桁行の身舎筋の柱が抜かれる事例が殆どないことや、近世集落で検出される身舎梁間三間の掘立柱建物跡の多くが、桁行六間ないし七間で、内部空間が間仕切りによって三空間に分節されることも含めてもS B 05の成立年代は近世と考えるべきで、



第209図 S B 05・06配置図

その用途は住宅（近世掘立民家）の主屋と考えるのが妥当であろう。

なお、八戸藩の事例になるが、共に古絵図が残り、発掘調査によって遺構が確認できる八戸城古御殿（青森県八戸市、掘立柱建物跡、成立年代不明、文政十年（1827）解体）と八戸城新御殿（青森県八戸市、礎石建物跡、文政十二年（1829）落成）では一間の間尺が異なることが知られている。中世由来の建物の伝承を持つ八戸城古御殿は近世御殿としては全国的に見ても例外的な掘立柱建物で、一間六尺五寸間隔の柱穴群が検出されている。一方、ほぼ同一箇所に建て替えられた新御殿段階の整地層からは、六尺三寸（1,909mm）の芯々寸法を持つ版築整地溝が検出されている。以上の状況から考えると近世後期に属する文政十二年段階には少なくとも領主層が普請した建物の間尺は六尺三寸に変化していたと考えて大過ない。領主層が普請した礎石建物と、おそらく庶民層が自作したであろう S B 05 の間尺の変化の時機を安易に比較することに問題はあがるが、この変化に大きな時間差が認められないとするならば、やはり S B 05 の帰属年代には近世前期から中期頃を想定するのが妥当であろう。

**構造：南北の妻で梁間寸法が大きく異なり身舎筋が屈曲する**

S B 05 は南北の妻で梁間寸法が大きく異なる。身舎筋が整形にならず屈曲する建物であるが、小屋組は成立する。なお、S B 05 の北側の梁は梁間三間半相当の長さが求められる。盛岡藩領の現存する近世社寺建築や民家建築では稀に三間半分の長さを持つ一本物の梁材をみることができる。しかし、盛岡藩領の近世集落で検出される掘立柱建物跡で同程度の長さを持つ梁材が確認されることはなく、例外的な長尺材が用いられていたと考えて良い。

**屋根：石置屋根・緩勾配・和小屋**

S B 05 を構成する柱穴群の堆積土は褐色土を主体とする単層で、その大半には黒褐色土塊と炭化物粒が混入していた。また、一部の柱穴の堆積土上層では径 15cm 程度の自然礫が一括廃棄されていた。全ての柱穴で柱痕が認められなかったことから考えると、建物廃絶後ないしは焼亡後に柱を抜き取り、周辺の土と石とを用い柱穴を埋め立て、平坦面とした可能性が高い。また、遺構の検出状況から考えるとこの礫は S B 05 に伴うものであったと考えるのが自然であるが、礫の大きさと形状から考えると石置屋根に付随する置石であったと想定するのが相応しいだろう。

置石は板や樹皮などを葺材とする屋根の屋根面に置かれる石で、葺材を打ちつけ、これ留める割木とともに、葺材の飛散を防止するために置かれた。S B 05 が板葺屋根ないしは樹皮葺屋根であったとするならば、屋根勾配は緩く、小屋は和小屋であったと考えて間違いのない。本遺跡の立地は浜風を受ける海際の斜面地に相当する。もともと小雪地域であるうえ、浜風によって屋根に積もった雪も飛散してしまうことから、多雪地方のように急勾配屋根とし、屋根から雪を滑落させ、積雪荷重を軽減する必要がない。遺跡周辺には多くの森林が残り、葺材も沢尻に入手できることから、地勢と周辺環境に適合した合理的な選択と評価できる。

なお、盛岡藩領での近世掘立柱建物跡の検出例の多くは内陸部に限定されている。沿岸部での検出例は現時点では希少である。変則的な軸組と例外的な小屋組を持っている点も含め、史料性の高い遺構と評価できる。

(中村)

## (2) 遺 物

縄文時代や古代に比べると絶対量は少ないが、S B 05 (P 312) から出土した青磁碗と調査区北西側の表土から出土した常滑窯産甕について触れておきたい(第 204 図)。青磁碗 (P 1) は体部のみ破片であるが、外面に蓮弁文が施されることと想定される器形から 14～15 世紀に製作された竜泉



窯系の製品と考えられる。本遺物は近世の掘立柱建物であるSB 05から出土しているが、製作年代と遺構の時期が大きく異なることから、SB 05が位置する調査区北東隅の調査区外に存在した中世の遺構からSB 05の柱穴内に流れ込んだものと考えられる。常滑窯産甕(P 2～8)は破片資料であるがほぼ同一個体と考えられ、口縁部破片であるP 2の特徴から常滑窯編年で第3～4型式(13世紀初頭)の製作と考えられる。岩手県内では内陸部に比べて沿岸部では12世紀以降の遺物が出土する遺跡は少ないが、周辺では赤前Ⅳ八枚田遺跡で常滑窯産大甕(宮古市教委1999)、赤前Ⅰ牛子沢遺跡で渥美窯産?鉢(宮古市教委1995)、金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡で青磁碗(岩文振2010b)、金浜館跡で天目茶碗(宮古市教委1985)が出土している。このなかで本遺跡の北側に位置する赤前Ⅳ八枚田遺跡の常滑窯産大甕は13世紀代に属するものであり、今回出土したものと時期的に近接する。本遺跡でも調査区北西側に中世の遺物の出土が集中し、この時期の可能性のあるSB 01も検出されていることから、遺跡範囲北側を中心に中世の遺構が存在する可能性を示唆するものと考えられる。

#### 4 総括

以上、本遺跡における調査成果について検討を行ってきた。本遺跡が含まれる赤前遺跡群ではこれまでも小学校・道路建設等に関わって発掘調査は行われていたが(宮古市教委1984・1999a)、一つの調査区で調査面積が10,000㎡を超える調査は初めてである。広範囲を調査した結果、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明し、多くの成果を得ることができた。最後に時代毎にその特徴を列記することで総括としたい。

##### 縄文時代

縄文時代前～中期を通じて集落として利用されていたと考えられる。遺構・遺物の分布状況を見ると、前期前葉～中期前葉のものは調査区南西側の低位部、中期中葉のものは調査区中央～北東側、中期後葉～末のものは調査区東側の高位部に集中する、というように時代が新しくなるにつれて徐々に標高の高い地点へと集落が移動していたことが判明した。このように縄文時代前～中期を通じて遺構が検出される遺跡は宮古市域では少なく、当時の集落の変遷を考えるうえで貴重な発見といえる。

縄文時代の遺構の種別は多岐にわたるが、なかでも堅穴建物S I 01は宮古市域では最大規模の大型住居であり、かつ前期末～中期初頭に属するものとしてこれまで4例しか検出されなかった大型住居について新たな事例を加えることができた。また、S I 01が構築された大木6～7式期の遺物(本報告の縄文土器第Ⅳ群)も豊富で、遺物包含層から出土したのも含めて宮古市域ではまとまった事例として注目される。

##### 弥生時代

遺構は焼土(S F 12・23)のみであるが、弥生土器の破片が少量出土している。近隣の遺跡では赤前Ⅳ八枚田遺跡で弥生時代初頭(砂沢式相当)と後期(赤穴式相当)の堅穴住居が各1棟検出されており(宮古市教委1999a)、本遺跡でも同時期の弥生土器は1点ずつ出土しており関連性が伺われる。また、本遺跡で最も出土量が多い中期後半の土器は対岸の金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡でまとめて出土している(岩文振2010b)。なお、この時期の遺物として特筆すべきものとしてはS F 12周辺から出土したオオカミの犬歯が挙げられる(第Ⅵ章第1節参照)。

##### 古代

最も堅穴建物の多い時期である。9世紀後半を中心とする比較的短期間に形成された集落であり、重複関係にある建物が少ないことから同時期に多くの建物が存在していたと考えられる。堅穴建物は

内部施設の内容から住居と工房があったと考えられ、複数の建物で精錬炉や鍛冶炉が検出されたことから、住居や工房で鉄生産活動が行われていたことが明らかとなった。今回の調査区では製鉄炉は検出されていないが、科学分析によって始発原料が宮古湾周辺で採取された砂鉄であることが判明したことから、今回検出された精錬炉と鍛冶炉では遺跡外の製鉄炉で生産された鉄素材を使用した精錬工程と鍛冶工程が行われていたものと考えられる。また、製塩土器の破片も多量に出土しており、遺跡内で土器製塩を行っていた可能性を指摘することもできた。

古代の遺跡は縄文時代に比べると少ないが、土器・石器・金属製品・鉄生産関連遺物・動物遺存体等多岐にわたる。今回詳しい検討は行っていないものの金属製品は種類が豊富で、刀子・鋸先といった農具の他に釣針や銚など漁撈具、鏃といった武器類が出土している（第196～198図）。この他、堅穴建物から貝類・魚類・哺乳類といった動物遺存体も出土しており、当時の沿岸部での食料採集活動を考える上で有効な資料となるものと考えられる。

#### 中～近世

縄文時代や古代に比べて遺構・遺物数は少ないが、このなかでは掘立柱建物S B 05が目目される。S B 05は変則的な軸組と小屋組を有する近世掘立柱民家の主屋と考えられるもので、掘立柱建物の検出数が少ない沿岸地域では貴重な資料である。今回の調査では時期が特定できる遺構は少ないが、調査区北西隅でまとまって出土した13世紀代の常滑窯産陶器や北東隅の柱穴から出土した14～15世紀代の青磁碗から、調査区外にこの時期の遺構が分布しているものと想定することができる。

（村田）

#### 註

1. 大型住居の定義については明確ではないが、今回は須原拓の論考（須原2007）を参照して直径5～6m程度のものを通常規模、それより規模の大きなものを大型とした。
2. 宮古湾南西部に位置する荷竹日向1遺跡（2014・15年度当センター調査）で古代の堅穴建物が50棟以上検出されるなど、復興関連に関わる広範囲の調査では50棟を超える大規模な集落が発見されている。

#### 参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系』
- 池谷信之 1988 「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民俗資料館
- 福野彰子 1991 「大木式土器にみられる球形形深鉢について」『北上市博物館研究報告』第8号
- 今村啓爾 2004 「大木6式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学文学部 考古学研究室研究紀要』第20号
- 岩手県企画開発室 1974 「北上山系開発地域土地分類基本調査 -宮古・鮎ヶ崎-」
- 小川 望 1985 「縄文時代の「大形住居」について（その1）」『東京大学文学部 考古学研究室研究紀要』第4号
- 小川 望 1989 「縄文時代の「大形住居」について（その2）」『東京大学文学部 考古学研究室研究紀要』第7号
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014 「9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実証的研究」2011年度～2013年度明治大学大久保忠和考古学振興基金奨励研究 研究成果報告書
- 北日本縄文文化研究会 2011 「北日本縄文時代大型住居集積」
- 北林八州晴 2008 「青森の製塩関連遺跡新資料」『青森県考古学』第16号 青森県考古学会
- 君島武史 1999 「東北地方の製塩土器 -三陸北部を中心に-」『北上市埋蔵文化財センター 紀要』第1号
- 君島武史 2004 「東北地方の製塩土器（2） -二十一平遺跡と三陸沿岸の古代製塩土器-」『北上市埋蔵文化財センター紀要』第3号

- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の福年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』
- 小林達雄編 2008 『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 佐々木聡ほか 2002 『鉄と銅の生産の歴史 古代から近世初頭にいたる』雄山閣出版
- 須原 拓 2007 『縄文時代前期の大形住居について』『伊岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 紀要 XXV』
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史編 六』
- 早瀬亮介・菅野智則・須藤隆 2006 『東北大学文学研究科 考古学陳列館所蔵大木貝塚出土基準資料 - 山内清福編年基準資料 -』『Bulletin of the Tohoku University Museum』No. 5 東北大学
- 松田光太郎 2003 『大木 6 式土器の変遷とその地域性』『神奈川考古』第 39 号 神奈川考古同人会
- 武藤康弘 1997 『縄文時代前・中期の長方形大形住居の研究』『住の考古学』同成社
- 盛岡市遺跡の学び館 2004 『縄文の彩華 - 中期の技と美 -』開館記念特別展図録
- 吉田尚・片田正人 1984 『宮古地域の地質』地質調査所
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は岩文振○集と省略)
- 2004 『高田Ⅱ遺跡第 2～4 次調査発掘調査報告書』岩文振第 450 集
- 2007 『平成 18 年度発掘調査報告書』岩文振第 505 集
- 2008a 『賽の神Ⅱ遺跡・賽の神遺跡・下大谷地Ⅰ遺跡・八木沢野来遺跡第 1 次発掘調査報告書』岩文振第 511 集
- 2008b 『俣帯遺跡発掘調査報告書』岩文振第 522 集
- 2008c 『平成 19 年度発掘調査報告書』岩文振第 524 集
- 2009a 『木戸井内Ⅳ遺跡・隠里Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩文振第 529 集
- 2009b 『賽の神Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩文振第 530 集
- 2010 『金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文振第 533 集
- 2011 『八木沢野来遺跡第 2 次発掘調査報告書』岩文振第 573 集
- 2014 『松山館遺跡発掘調査報告書』岩文振第 625 集
- 2015a 『峯岸遺跡発掘調査報告書』岩文振第 637 集
- 2015b 『間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩文振第 640 集
- 2015c 『津軽石大森遺跡発掘調査報告書』岩文振第 641 集
- 2015d 『弘川Ⅱ遺跡・弘川Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩文振第 643 集
- 富山県朝日町 1982 『国指定史跡 不動堂遺跡 - その概要と整備のあらまし -』
- 宮古市教育委員会 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書 1』宮古市埋蔵文化財調査報告書 3
- 1984a 『宮古市遺跡分布調査報告書 2』宮古市埋蔵文化財調査報告書 4
- 1984b 『赤前遺跡群 第 1 次・第 2 次発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書 5
- 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書 3』宮古市埋蔵文化財調査報告書 6
- 1985 『金浜館』宮古市埋蔵文化財調査報告書 7
- 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書 4』宮古市埋蔵文化財調査報告書 8
- 1986 『宮古市遺跡分布図』宮古市埋蔵文化財調査報告書 9
- 1992a 『金浜Ⅰ遺跡・大付遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 30
- 1992b 『重茂館遺跡群 第 1 次発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書 31
- 1995 『赤前Ⅰ牛子沢遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 42
- 1998 『藤畑遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 52
- 1999a 『赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚田遺跡 赤前Ⅴ櫛沢遺跡 赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡 小瓶内Ⅲ遺跡 - 宮古市水産課津軽石環境整備事業関係 -』宮古市埋蔵文化財調査報告書 53
- 1999b 『千鶴Ⅳ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 54
- 2006 『高浜Ⅵ地神遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 65

# 写 真 图 版



遺跡近景(北から)



S101 (東から)



S I 19 (南から)



S B 05 (南から)



遺跡遠景（北から）



調査区から宮古湾を望む（南から）



平成 25 年度 調査区全景 (直上)



平成 26 年度 調査区全景 (直上)

写真図版 2 調査区の状況(1)





遺跡近景 (西から)



南西側 (S I 01 周辺) 現況 (東から)



北西側 (S I 09・10 周辺) 現況 (東から)



東側斜面部現況 (東から)



東側斜面部確集中範囲 (南から)

写真図版3 調査区の状況 (2)



北調査区調査前現況（南から）



中央調査区南調査前現況（北東から）



南調査区調査前現況（東から）



西側終了全景（北東から）



北西側終了全景（東から）



中央付近終了全景（東から）



南側終了全景（南東から）



南西側終了全景（東から）

写真図版4 調査区終了（1）



南調査区東完掘（西から）



中央調査区中央終了全景（南から）



東調査区完掘（北から）



北調査区完掘（北から）



基本層序①（IA 30グリッド）（南から）



基本層序②（IA 7wグリッド）（東から）



調査区西側基本層序3（東から）



調査区中央基本層序1（南から）



実照(西から)



東側堆積土断面(北東から)



東側堆積土断面(北から)



中央部堆積土断面(北から)



中央部堆積土断面(東から)



完掘(南東から)



東壁付近の状況(北から)



S F 02 (南から)



P 43 断面(西から)



周溝 3・4 (F断面)(西から)



周溝 1、P 40・41 断面(東から)



北西区遺物出土状況(西から)



南東区1層土器出土状況(南東から)



完掘（南から）



堆積土断面（南から）



複式炉（南から）



複式炉断面（西から）



S I 03 完掘 (北東から)



S I 03-04、S K 32-34-35 堆積土断面 (北から)



S I 03 石囲炉 (南西から)



S I 03 石囲炉断面 (南西から)



S I 04 完掘 (北東から)



S I 04, S K 33・34・50 堆積土断面 (東から)



S I 03 SF 01 検出 (北西から)



S I 03, S K 42・45・46 堆積土断面 (西から)





完掘 (北東から)



堆積土断面 (南西から)



S F 01 検出 (北から)



土器 (139) 出土状況 (南から)



完掘（南から）



堆積土断面（南から）



北西区土器・貝類出土状況（西から）



カマド（南から）



カマド裁ち割り（西から）



完掘 (南から)



堆積土断面 (西から)



カマド遺物出土状況 (南から)



カマド完掘 (南から)



カマド・煙道断面 (西から)



完掘 (南から)



カマド (南から)



カマド燃焼部断面 (東から)



煙道部検出 (北から)



煙道部断面 (西から)



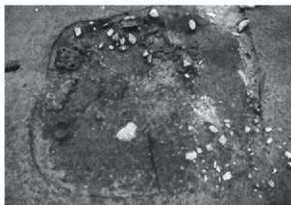
完掘（西から）



堆積土断面（南から）



カマド礫検出（北西から）



焼土・炭化物・粘土検出状況（西から）



床面の状況（西から）



完掘 (北から)



堆積土断面 (南から)



堆積土断面 (西から)



カマド断面 (西から)



カマド断面 (北から)



完掘 (南から)



堆積土断面 (東から)



1号カマド (南から)



2号カマド燃焼部断面 (西から)



SXW01 (東から)



完掘（西から）



堆積土断面（北から）



煙道断面（北から）



S X W 01 断面（南から）





完掘 (南から)



堆積土断面 (北西から)



煙道断面 (西から)



カマド裁ち割り (南から)



北東区遺物出土状況 (南東から)



完掘 (西から)



堆積土断面 (南から)



燃焼部破ち割り (南から)



煙道断面 (南から)



P 01 (西から)



完掘（南から）



堆積土断面（北から）



S I 15 煙道・SD 01 断面（西から）



燃焼部焼土断面（北から）



完掘 (北から)



堆積土断面 (南から)



煙道横断面 (南から)



カマド (北東から)



完掘 (南から)



S I 17・18 堆積土断面 (北から)



S I 17・18 堆積土断面 (西から)



羽口 (M103) 出土状況 (東から)



製塩土器片出土状況 (東から)



完掘 (南から)



カマド燃焼部 (南から)



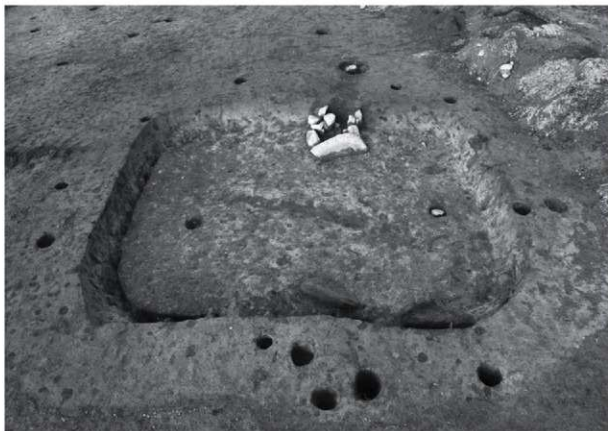
煙道断面 (東から)



羽口 (M81-82) 出土状況 (南西から)



17層砂鉄出土状況 (南から)



完掘 (南から)



堆積土断面 (北から)



カマド検出状況 (南から)



カマド燃焼部 (南から)



S I 20 完掘 (南から)



S I 20 堆積土断面 (北から)



S I 20 カマド断面 (西から)



S I 20 カマド遺物出土状況 (南から)





S I 20 完掘・S I 21 検出状況 (南から)



S I 20 SK 02 断面 (西から)



S I 20 紡錘車 (M19) 出土状況 (東から)



S I 21 煙道完掘 (東から)



S I 21 煙道断面 (北から)



完掘 (南から)



堆積土断面 (西から)



堆積土断面 (南から)



カマド・煙道断面 (東から)



完掘（西から）



堆積土断面（南から）



カマド燃焼部検出（北から）



カマド・煙道断面（西から）



完掘 (南から)



S I 24・SK 86 堆積土断面 (西から)



カマド断面 (南から)



土器 (271) 出土状況 (南から)



完掘 (西から)



カマド・煙道断面 (南から)



堆積土断面 (東から)



P 01 遺物出土状況 (西から)



完掘（南から）



カマド・煙道・貼床断面（東から）



煙道断面（東から）



検出状況（南から）



完掘（南から）



堆積土断面（東から）



カマド焼土断面（南から）



カマド右袖部断面（東から）



カマド構築確検出状況（東から）



完掘 (西から)



堆積土断面 (南から)



S K 01 完掘 (東から)



貼床断面 (西から)





完掘 (南西から)



堆積土断面 (北東から)



煙道断面 (北西から)



焼土検出状況 (南から)



P 01 断面 (南から)



完掘（西から）



堆積土断面（南から）



カマド検出（西から）



カマド・煙道断面（南から）



完掘 (西から)



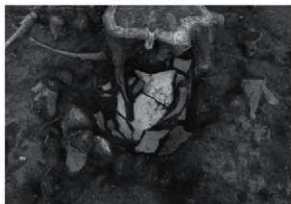
堆積土断面 (南から)



カマド (西から)



カマド・煙道断面 (北から)



S K 01 須恵器 (289) 出土状況 (南から)



完掘（北から）



堆積土断面（南から）



堆積土断面（東から）



煙道断面（東から）



S I 33・34 実掘 (北から)



S I 33・34 堆積土断面 (西から)



S I 33・34 堆積土断面 (北から)



S I 33 P 01 遺物出土状況 (西から)



S I 33 2号カマド断面 (南から)



S I 33 1号カマド断面 (南から)



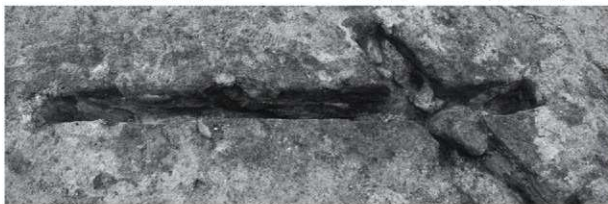
S I 33 S F 01 断面 (北から)



S I 34 S X W 02 断面 (北西から)



S I 34 床面・S I 33 S F 02 横出状況 (北から)



S I 34 S X W 01 断面 (南西から)



完掘 (南から)



堆積土断面 (南から)



S XW02~04 (西から)



S XW02 断面 (西から)



完掘（北から）



カマド（南から）



燃焼部焼土断面（西から）



煙道断面（西から）





完掘 (南から)



堆積土断面 (西から)



S XW 02 断面 (南から)



北東区羽口 (M96) 出土状況 (北から)



SXW01 完掘 (西から)



SXW01 検出 (南西から)



SXW01 前底部完掘 (西から)



SXW01 炉体石組 (西から)



SXW01 掘り方 (西から)



SXW01 堆積土・炉体断面 (西から)



SXW01 堆積土・炉体断面 (北から)



SXW01 内堆積土断面 (北から)



完掘（西から）



煙道南側壁（南から）



煙道北側壁（南から）



燃焼部焼土断面（南から）



S137台石（S157）出土状況（西から）



完掘（西から）



カマド・煙道断面（北から）



焼土検出状況（西から）



煙出し断面（西から）



完掘 (北西から)



堆積土断面 (南から)



検出 (西から)



断面 (東から)



完掘 (南から)



堆積土断面 (南から)



堆積土断面 (西から)



SH 01 (南から)



SH 01 断面 (西から)



完掘 (東から)



堆積土断面 (東から)



SK 01 完掘 (北から)



SF 01 断面 (南から)



完掘 (北から)



堆積土断面 (東から)



断面 (東から)



SH 01 (北から)



P 04 断面 (西から)





完掘 (北西から)



堆積土断面 (北から)



SH 01 (南から)



SH 02 (南から)



完掘（北から）



断面（西から）



S F 01（西から）



遺物出土状況（北から）



完掘（北から）



堆積土断面（東から）



堆積土断面（北から）



S147完掘（南から）



S148完掘（北から）



S I 47・48 堆積土断面 (西から)



S I 47・48 堆積土断面1 (北から)



S I 47・48 堆積土断面2 (北から)



S I 47 SF 01 (北西から)



S I 47 SF 02 (南から)



炭化材検出状況（南から）



北側炭化材検出状況（南から）



南側炭化材検出状況（西から）



SH 01（北から）



SK 01・SF 02（西から）



完掘 (西から)



SH 01・SF 01 断面① (東から)



SH 01・SF 01 断面② (東から)



SH 01 (東から)



SH 01 たちわり (北から)



SH 01 掘り方検出 (北西から)



SH 01 懸焼部焼土 (西から)



SH 01 断面① (南から)



SH 01 断面② (南から)



SH 01 断面③ (南から)





完掘（東から）



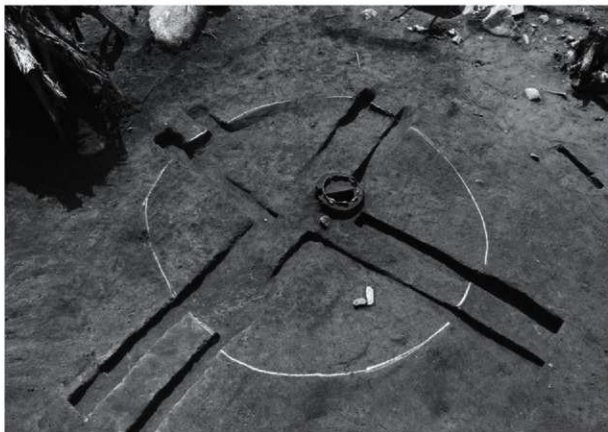
堆積土断面（東から）



床面直上遺物出土状況（東から）



堆積土中遺物出土状況（東から）



完掘 (北東から)



堆積土断面 (東から)



堆積土断面 (南から)



SH 01 断面 (南東から)



SH 01 掘り方、SF 01 (南東から)



完掘 (南西から)



堆積土断面 (西から)



堆積土断面 (北から)



SH 01 (南東から)



SH 02 断面 (東から)



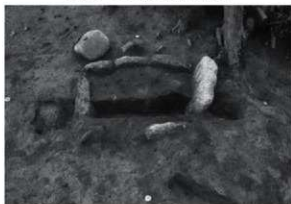
S I 54・55 完掘 (北から)



S I 54・55 堆積土断面 (南から)



S I 54・55 堆積土断面 (西から)



S I 54 SH 01 断面 (南西から)



S I 55 SH 01 断面 (東から)



完掘 (南西から)



堆積土断面 (南から)



S F 01 (南東から)



S F 01 断面 (西から)



完掘 (南西から)



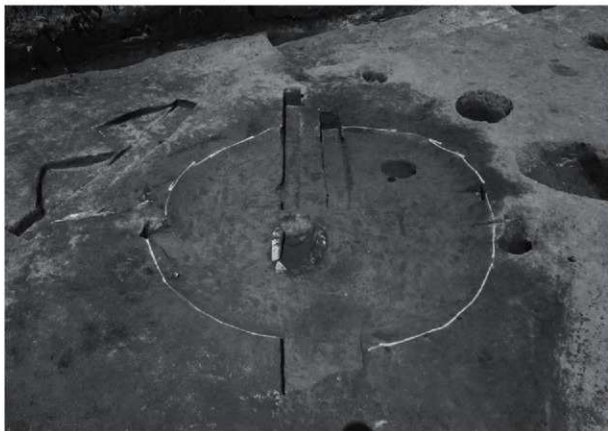
SH 01 断面① (東から)



SH 01 (南東から)



SH 01 断面② (東から)



完掘 (東から)



堆積土断面 (東から)



堆積土断面 (北から)



SH 01 (東から)



SH 01 断面 (南から)



完掘（南から）



堆積土断面（西から）



堆積土断面（南から）





完掘 (南から)



堆積土断面 (北から)



堆積土断面 (西から)



SH 01 (西から)



SH 01 断面 (北東から)



完掘 (南西から)



堆積土断面 (南から)



堆積土断面 (東から)



検出状況 (西から)



完掘 (西から)



堆積土断面 (西から)



堆積土断面 (北から)



堆積土上層遺物出土状況 (南西から)



SH01 断面 (南から)



完掘 (東から)



堆積土断面 (南から)



堆積土断面 (西から)



カマド煙道断面 (南から)



カマド完掘 (東から)



完掘 (西から)



堆積土断面 (東から)



堆積土断面 (南から)



焼土検出状況 (西から)



遺物出土状況 (西から)



完掘（北から）



横出状況（南から）



堆積土断面①（南から）



炉底面横出状況（南から）



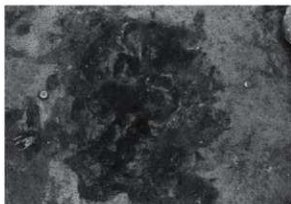
堆積土断面②（南から）



炉底面裁ち割り（南から）



炉底澤出土状況（北から）



S XW 02 完掘 (南から)



S XW 02 堆積土断面 (南から)



S XW 02 伊底澤出土状況 (南から)



S XW 02 伊底面たちわり (南から)



SH 01 完掘 (北西から)



SH 01 焼土断面 (南西から)



SH 02 (南から)



SH 02 断面 (北から)



完振（西から）



堆積土断面（北から）



堆積土断面（西から）





S F 01 (南から)



S F 01 断面 (南西から)



S F 02 (南西から)



S F 02 断面 (南から)



S F 03 (南から)



S F 03 断面 (西から)



S F 04 (北から)



S F 04 断面 (南から)



S F 05 (西から)



S F 05 断面 (南から)



S F 06 (西から)



S F 06 断面 (西から)



S F 07 (東から)



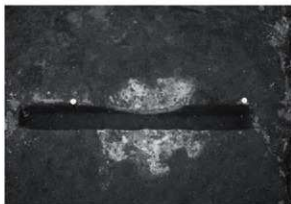
S F 07 断面 (東から)



S F 08 (南から)



S F 08 断面 (南から)



S F 09 (南から)



S F 09 断面 (南から)



S F 10 (南から)



S F 10 断面 (南から)



S F 11 (西から)



S F 11 断面 (西から)



S F 12 (南から)



S F 12 断面 (東から)



S F 13 (西から)



S F 13 断面 (東から)



S F 14 (南から)



S F 14 断面 (南から)



S F 15 (南から)



S F 15 断面 (南から)



S F 16 (北西から)



S F 16 断面 (北から)



S F 17 (北東から)



S F 17 断面 (東から)



S F 18 (南から)



S F 18 断面 (東から)



S F 19 (南から)



S F 19 断面 (南から)



S F 20 (北から)



S F 20 断面 (北から)



S F 21 (北から)



S F 21 断面 (北から)



S F 22 (北から)



S F 22 断面 (北から)



S F 23 (東から)



S F 24 断面 (南から)



S F 25 (北から)



S F 25 断面 (南から)



S F 26 (北から)



S F 26 断面 (西から)



S F 27 (西から)



S F 27 断面 (北から)



S F 28 (東から)



S F 28 断面 (南から)



S F 29 (南西から)



S F 29 断面 (南から)



S K 01 完掘 (南から)



S K 01 断面 (南から)



S K 02 完掘 (西から)



S K 02 断面 (西から)



S K 03 完掘 (北から)



S K 03 遺物出土状況 (北から)



S K 04 完掘 (東から)



S K 04 断面 (東から)





S K 05 完掘 (東から)



S K 05 断面 (東から)



S K 06 完掘 (南から)



S K 06 断面 (西から)



S K 07 完掘 (南から)



S K 07 断面 (南から)



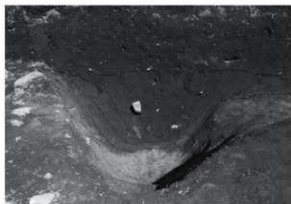
S K 08 完掘 (北から)



S K 08 断面 (北から)



S K 09 完掘 (南から)



S K 09 断面 (南から)



S K 10 完掘 (南から)



S K 10 断面 (西から)



S K 11 完掘 (南から)



S K 11 断面 (西から)



S K 12 完掘 (南から)



S K 12 断面 (南から)



SK 13 完掘 (南から)



SK 13 断面 (南から)



SK 14 完掘 (南から)



SK 14 断面 (南から)



SK 15 完掘 (南から)



SK 15 断面 (南から)



SK 16 完掘 (南から)



SK 16 断面 (南から)



S K 17・P 05 完掘 (南から)



S K 17・P 05 断面 (南から)



S K 18 断面 (南から)



S K 19 完掘 (南から)



S K 19 堆積土断面 (東から)



S K 19 炭素焼土層断面 (南から)



S K 20 完掘 (南から)



S K 20 断面 (南から)



S K 21 完掘 (西から)



S K 21 断面 (西から)



S K 22 完掘 (西から)



S K 22 断面 (西から)



S K 23 完掘 (西から)



S K 23 断面 (西から)



S K 24 完掘 (西から)



S K 24 断面 (西から)



S K 25・26 完掘 (北から)



S K 25・26 断面 (北から)



S K 27 完掘 (南から)



S K 27 断面 (南から)



S K 28 完掘 (北西から)



S K 28 断面 (西から)



S K 29・30 完掘 (北から)



S K 29・30 断面 (北から)



S K 31 完掘 (南から)



S K 31 断面 (南から)



S K 33 完掘 (東から)



S K 33-34 断面 (東から)



S K 34 完掘 (東から)



S K 32-34 断面 (北から)



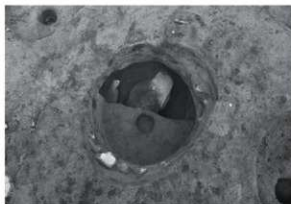
S K 37-38 完掘 (北西から)



S K 37-38 断面 (北から)



S K 38 完掘 (北から)



S K 35 完掘 (北から)



S K 35・36 断面 (北から)



S K 36 完掘 (北から)



S K 39 完掘 (北から)



S K 40 完掘 (北から)



S K 41 完掘 (北から)



S K 39・40・41 断面 (北から)





S K 42 完撮 (南東から)



S K 42 断面 (西から)



S K 43 完撮 (北から)



S K 43 断面 (南から)



S K 44 完撮 (西から)



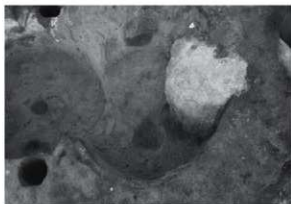
S K 44 断面 (西から)



S K 45 完撮 (北から)



S K 45 断面 (北から)



S K 46 完掘 (東から)



S K 46 断面 (西から)



S K 48 完掘 (東から)



S K 48・49・S I 03 断面 (北から)



S K 49 完掘 (北から)



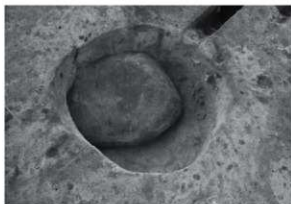
S K 49・S I 03 断面 (北から)



S K 50 完掘 (北から)



S K 50 断面 (東から)



S K 47 完掘 (北東から)



S K 47 断面 (南から)



S K 51 完掘 (南から)



S K 51 断面 (北から)



S K 52 完掘 (南から)



S K 52 断面 (南から)



S K 53 完掘 (東から)



S K 53 断面 (西から)



S K 54 完掘 (南から)



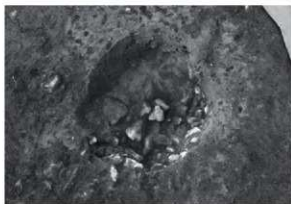
S K 54 断面 (南から)



S K 55 完掘 (西から)



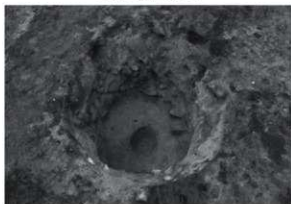
S K 55 断面 (南から)



S K 56 完掘 (南から)



S K 56 断面 (南から)



S K 57 完掘 (南から)



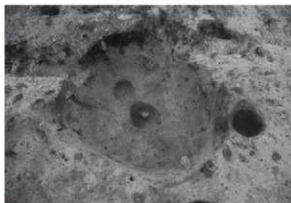
S K 57 断面 (南から)



S K 58 完掘 (南から)



S K 58 断面 (南から)



S K 59 完掘 (南から)



S K 59 断面 (南から)



S K 60 完掘 (東から)



S K 60 断面 (東から)



S K 61 完掘 (西から)



S K 61 断面 (東から)



S K 62 完掘 (北から)



S K 62 断面 (北から)



S K 63 完掘 (西から)



S K 63 断面 (西から)



S K 64 完掘 (南から)



S K 64 断面 (南から)



S K 65 完掘 (南から)



S K 65 断面 (南から)



S K 66 完掘 (東から)



S K 66 断面 (東から)



S K 67 完掘 (北から)



S K 67 断面 (北から)



S K 68 完掘 (南から)



S K 68 断面 (南から)



S K 69 完掘 (南から)



S K 69 断面 (南から)



S K 70 完掘 (西から)



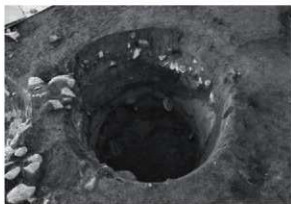
S K 70 断面 (西から)



S K 71 完掘 (西から)



S K 71 断面 (西から)



S K 72 完掘 (南東から)



S K 72 断面 (南東から)

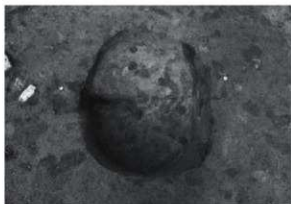


S K 73 完掘 (北から)



S K 73 断面 (西から)





S K 74 完掘 (南から)



S K 74 断面 (南から)



S K 75 完掘 (南から)



S K 75 断面 (南から)



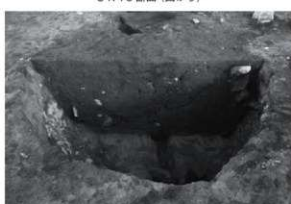
S K 76 完掘 (西から)



S K 76 断面 (西から)



S K 77 完掘 (西から)



S K 77 断面 (西から)



S K 78 完掘 (北東から)



S K 78 断面 (東から)



S K 79 完掘 (北から)



S K 79 断面 (北から)



S K 80 完掘 (西から)



S K 80 断面 (南から)



S K 81 完掘 (東から)



S K 81・S I 13 断面 (北から)



S K 82 完掘 (南から)



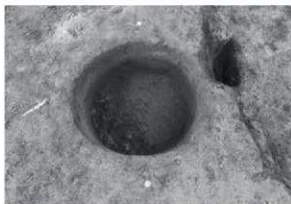
S K 82・S I 19 断面 (北から)



S K 83 完掘 (南から)



S K 83 断面 (南から)



S K 84 完掘 (東から)



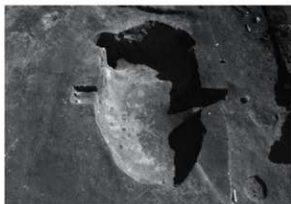
S K 84 断面 (南から)



S K 85 完掘 (東から)



S K 85 断面 (東から)



S K 86 完振 (西から)



S K 86 断面 (西から)



S K 87 完振 (東から)



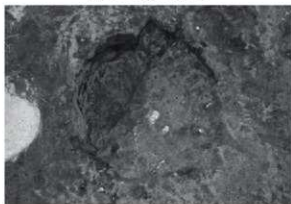
S K 87 断面 (東から)



S K 88-89 完振 (西から)



S K 88-89 断面 (南から)



S K 90 完振 (西から)



S K 90 断面 (南から)



SK 91 完掘 (北から)



SK 91 断面 (南から)



SK 92 完掘 (南から)



SK 94 完掘 (南西から)



SK 93 完掘 (北から)



SK 93 断面 (北から)



SK 95 完掘 (北から)



SK 95 断面 (北から)



S K 96 完掘 (北から)



S K 96 断面 (南から)



S K 97 完掘 (南から)



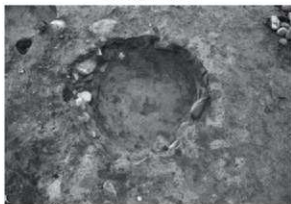
S K 97 断面 (西から)



S K 98 完掘 (南から)



S K 98 断面 (南から)



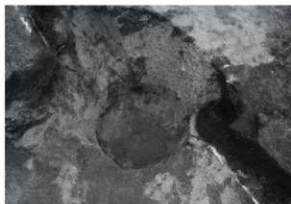
S K 99 完掘 (西から)



S K 99 断面 (南から)



S K 100 完掘 (西から)



S K 101 完掘 (北西から)



S K 101 断面 (北から)



S K 101 骨出土状況 (南東から)



S K 102 完掘 (西から)



S K 102 断面 (西から)



S K 103 完掘 (東から)



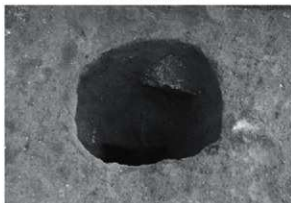
S K 103 断面 (東から)



S K 104 完振 (東から)



S K 104 断面 (南西から)



S K 105 完振 (北から)



S K 105 断面 (北から)



S K 106 完振 (西から)



S K 106 断面 (西から)

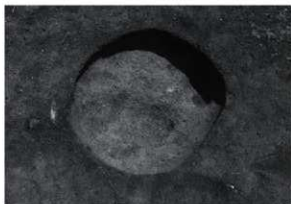


S K 107 完振 (東から)



S K 107 断面 (東から)





S K 108 完掘 (西から)



S K 108 断面 (西から)



S K 109 完掘 (南から)



S K 109 断面 (南から)



S K 110 完掘 (北西から)



S K 110 断面 (西から)



S K 111 完掘 (南から)



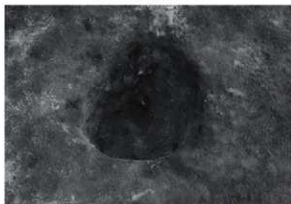
S K 111 断面 (南から)



SK 112 完掘 (北から)



SK 112 断面 (北から)



SK 113 完掘 (東から)



SK 113 断面 (東から)



SK 114 完掘 (東から)



SK 114 断面 (東から)



SK 115 完掘 (南から)



SK 115 断面 (南から)



S K 116 完掘 (北から)



S K 116 断面 (北から)



S K 117 完掘 (南から)



S K 117 断面 (南から)



S K 118 完掘 (西から)



S K 118 断面 (西から)



S K 119 完掘 (東から)



S K 124 断面 (西から)



S K 120 完掘 (東から)



S K 120 断面 (東から)



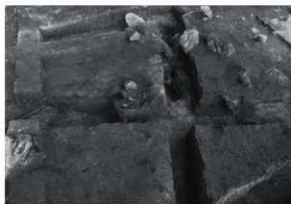
S K 121 完掘 (南から)



S K 121 断面 (南から)



S K 122 完掘 (南西から)



S K 122 断面 (南から)



S K 123 完掘 (北から)



S K 123 断面 (西から)



S K 125 完掘 (西から)



S K 125 断面 (西から)



S K 126 完掘 (西から)



S K 126 断面 (南から)



S K 127 完掘 (東から)



S K 127 断面 (東から)



S K 128 完掘 (南から)



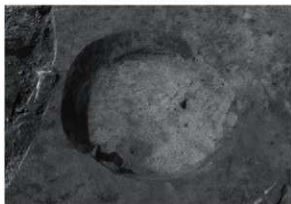
S K 128 断面 (南から)



S K 129-130 完掘 (東から)



S K 129-130 断面 (東から)



S K 131 完掘 (東から)



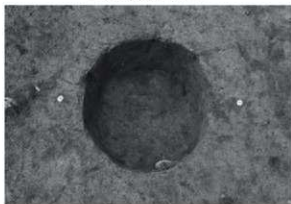
S K 131 断面 (東から)



S K 132 完掘 (南から)



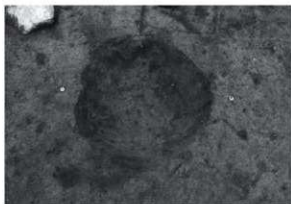
S K 132 断面 (南から)



S K 133 完掘 (南から)



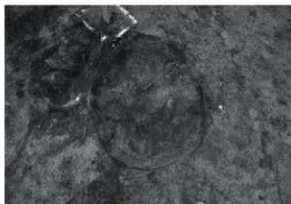
S K 133 断面 (南から)



S K 134 完掘 (南から)



S K 134 断面 (南から)



S K 135 完掘 (南から)



S K 135 断面 (南から)



S K 136 完掘 (南から)



S K 136 断面 (南から)



S K 137 完掘 (南西から)



S K 137 断面 (南西から)



S K 138 完掘 (北から)



S K 138 断面 (北から)



S K 139 完掘 (北東から)



S K 139 断面 (南から)



S K 140 完掘 (南から)



S K 140 断面 (南から)



S K 141 完掘 (西から)



S K 141 断面 (北から)





S K 142 完掘 (東から)



S K 142 断面 (南から)



S K 143・144 完掘 (東から)



S K 143 断面 (東から)



S K 145 完掘 (西から)



S K 145 断面 (北から)



S K 146 完掘 (東から)



S K 146 断面 (西から)



S K 147 完掘 (東から)



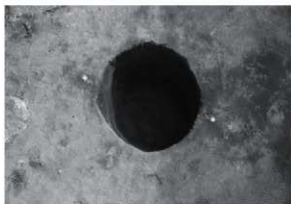
S K 147 断面 (東から)



S K 148 完掘 (南から)



S K 148 断面 (南東から)



S K 149 完掘 (北から)



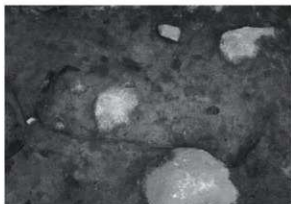
S K 149 断面 (南から)



S K 150 完掘 (南から)



S K 150 断面 (南西から)



S K 151 完掘 (東から)



S K 151 断面 (東から)



S K 152 完掘 (南から)



S K 152 断面 (南から)



S K 153・154 完掘 (西から)



S K 153・154・S F 26 断面 (西から)



作業風景



作業風景



完掘 (南から)



西ベルト堆積土断面 (南から)



東ベルト堆積土断面 (南から)



北ベルト堆積土断面① (西から)



北ベルト堆積土断面② (西から)



SD 01 完掘 (北から)



SD 01 断面 (西から)



SD 02 完掘 (東から)



SD 02 断面 (南から)



SD 03 完掘 (西から)



SD 03 断面 (西から)



SD 04 完掘 (東から)



SD 04 断面 (西から)



S D 05・08 完掘 (西から)



S D 06・07 完掘 (西から)



S D 05・06・07 完掘 (南西から)



S D 05・08 断面 (西から)



S D 07 完掘 (西から)



S D 07 断面 (西から)



S B 05 完掘 (北から)



S B 01 完掘 (南西から)



S B 03 完掘 (北西から)



S B 04 完掘 (東から)



S B 06 完掘 (北から)



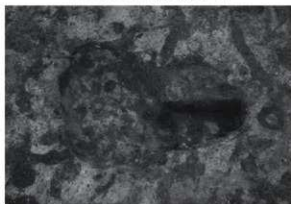
P 313 (S B 05) 断面 (南東から)



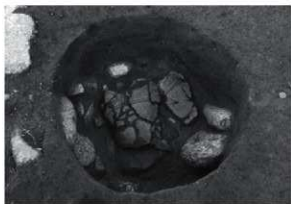
P 315 (S B 05) 断面 (南西から)



P 376 (S B 06) 断面 (南から)



P 142 断面 (東から)



P 43 土器 (507) 出土状況 (南から)



S X 01・S K 101 断面 (北から)



S X 01-02 完掘 (南から)





S X 02 完掘 (南東から)



S X 02 断面 (西から)



S X 03 完掘 (北から)



S X 03 断面 (西から)



S X 04 横出 (南から)



S X 04 断面 (南西から)



S X 05 横出 (東から)



S X 05 断面 (西から)



S X 06 検出 (南東から)



S X 06 断面 (東から)



S X 07 完掘 (西から)



S X 09 断面 (北から)



S X 13 検出 (北から)



S X 13 断面 (西から)



S X 16 検出 (西から)



S X 16 断面 (西から)



完掘（東から）



1区堆積土断面（東から）



3区堆積土断面（東から）



1区1層下位遺物出土状況（南から）



5区堆積土断面（東から）



3区1層遺物出土状況（南から）



作業風景（西から）



※縮尺=約1/3

写真図版 126 土器 (1)



6



9



7



8



12



11

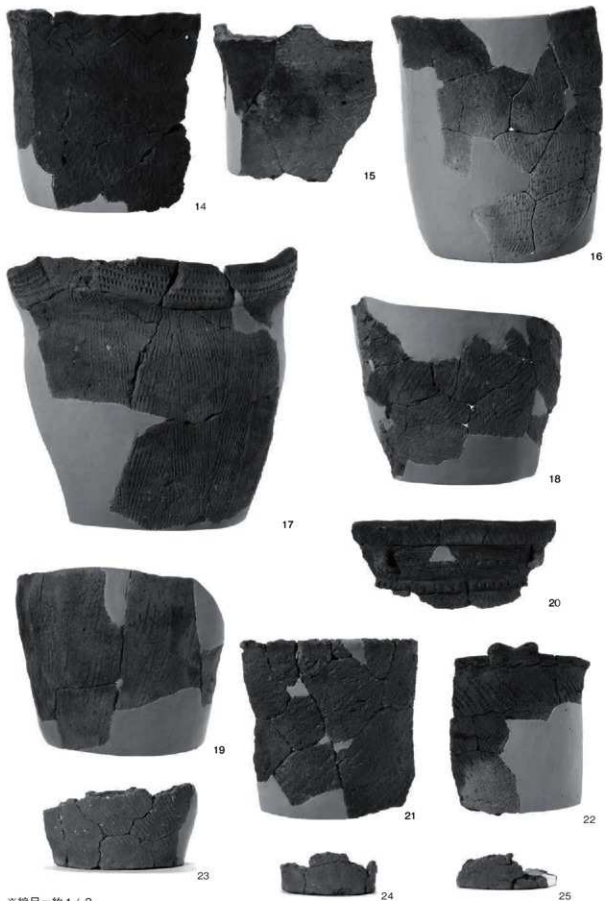


10



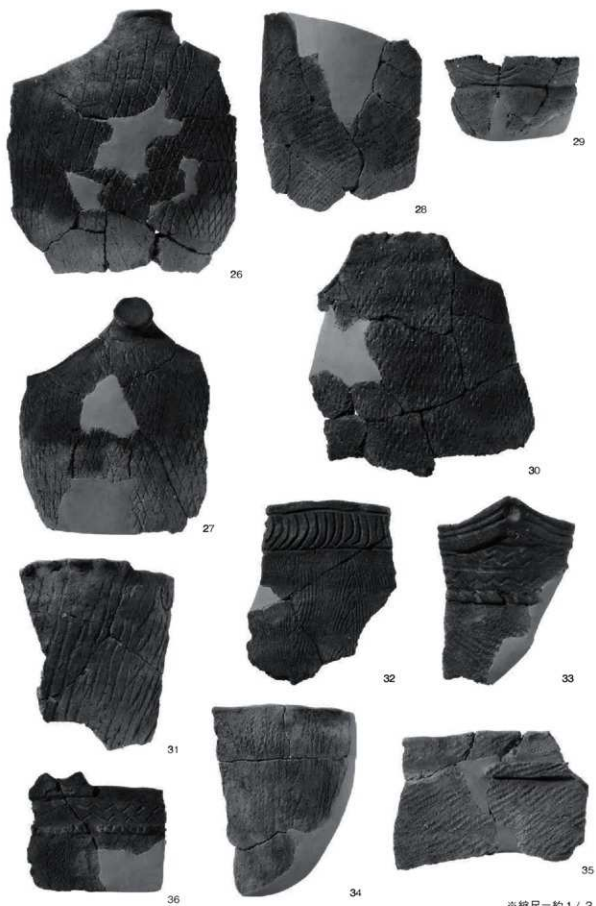
13

※縮尺=約1/3



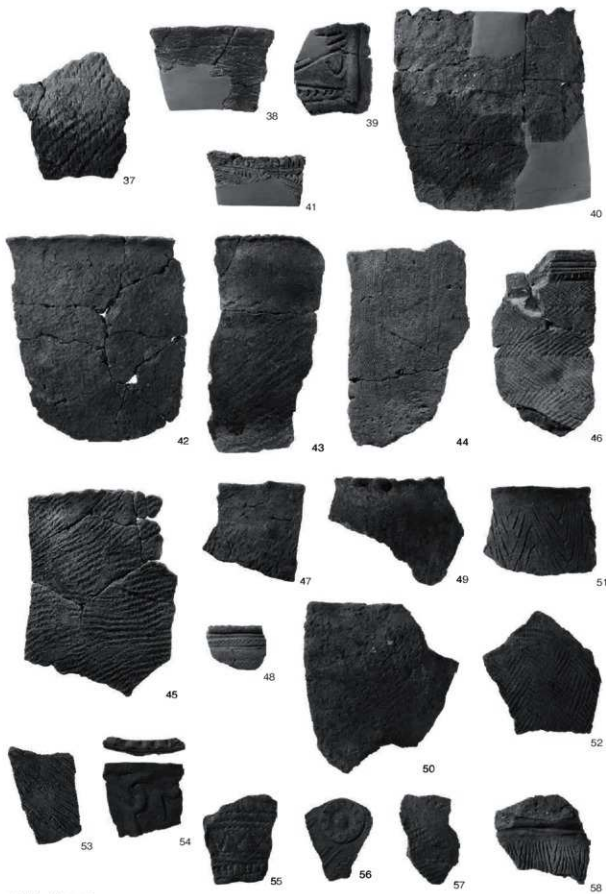
※縮尺=約 1/3

写真図版 128 土器 (3)



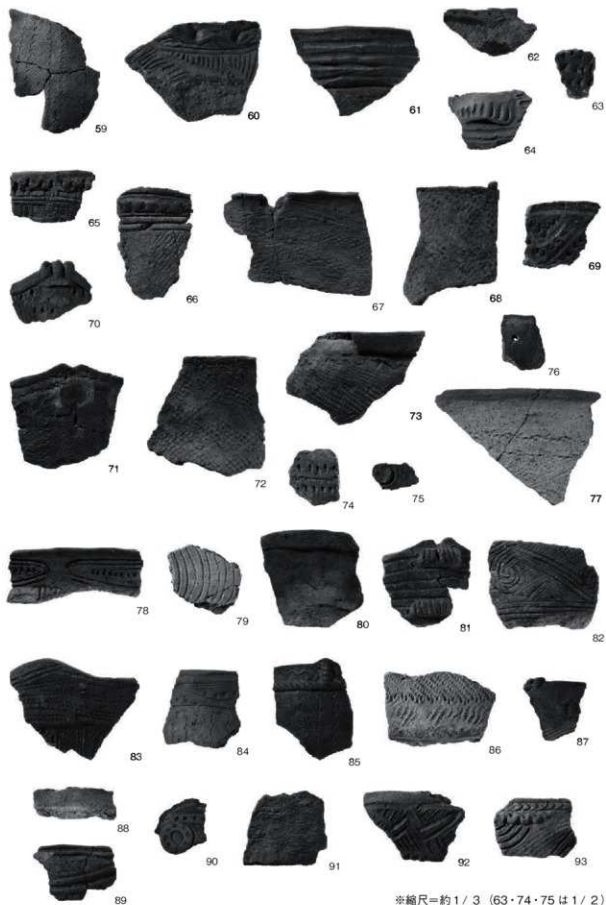
※縮尺=約 1/3

写真図版 129 土器 (4)

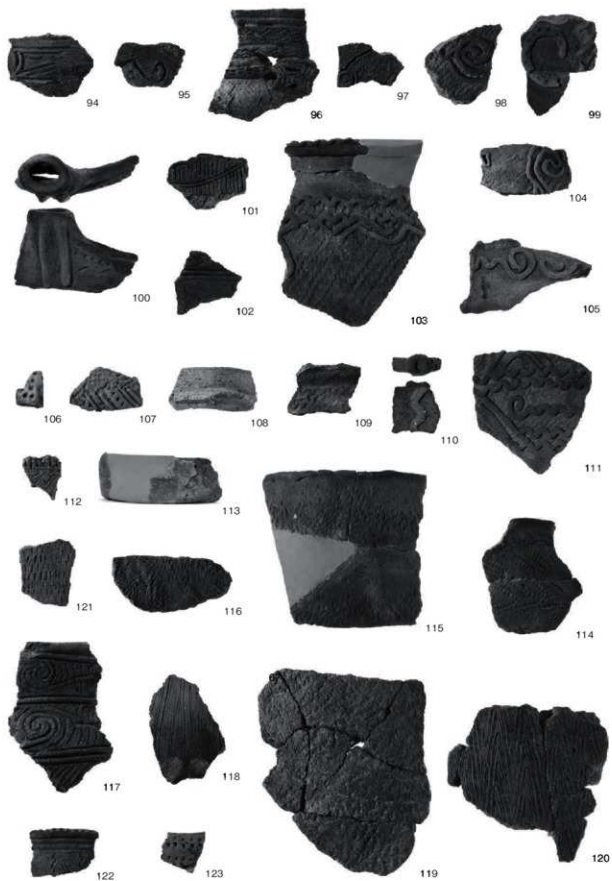


※縮尺=約 1 / 3





※縮尺=約 1/3 (63・74・75 は 1/2)



※縮尺=約1/3 (112は1/2)

写真図版 132 土器 (7)



124



125



126



127

128



129

130



132

133



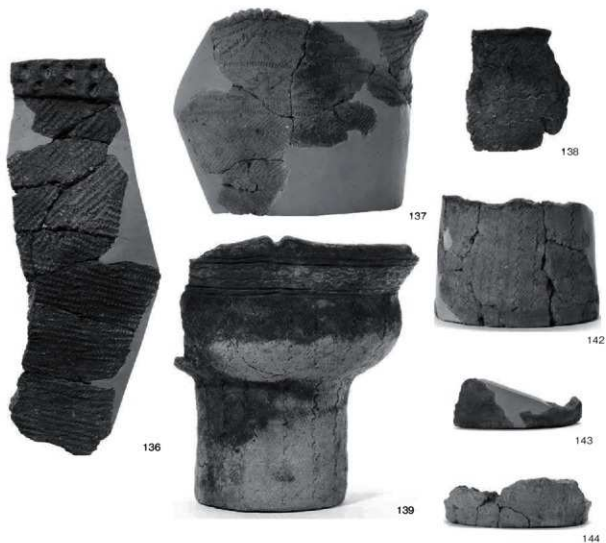
135

134



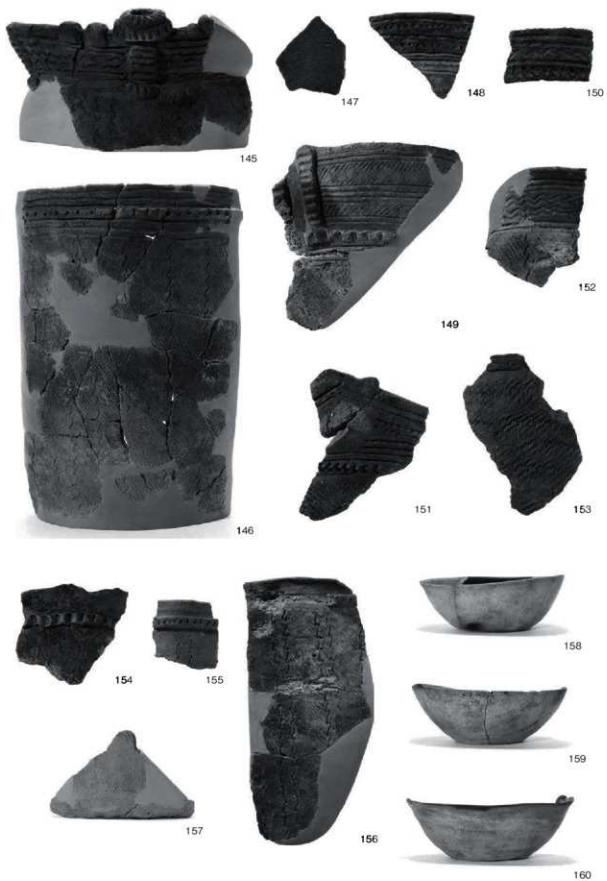
131

※縮尺=約 1 / 3



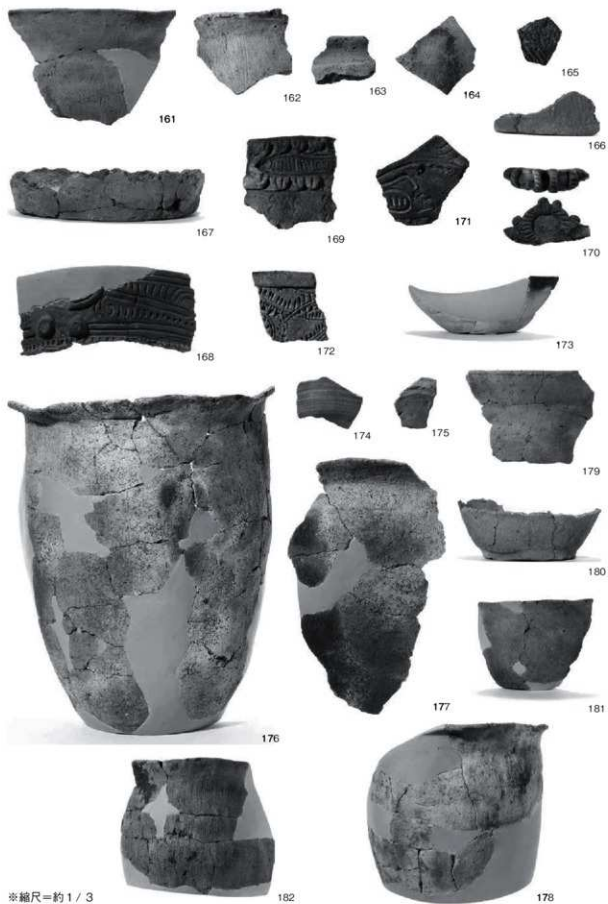
※縮尺=約 1 / 3

写真図版 134 土器 (9)



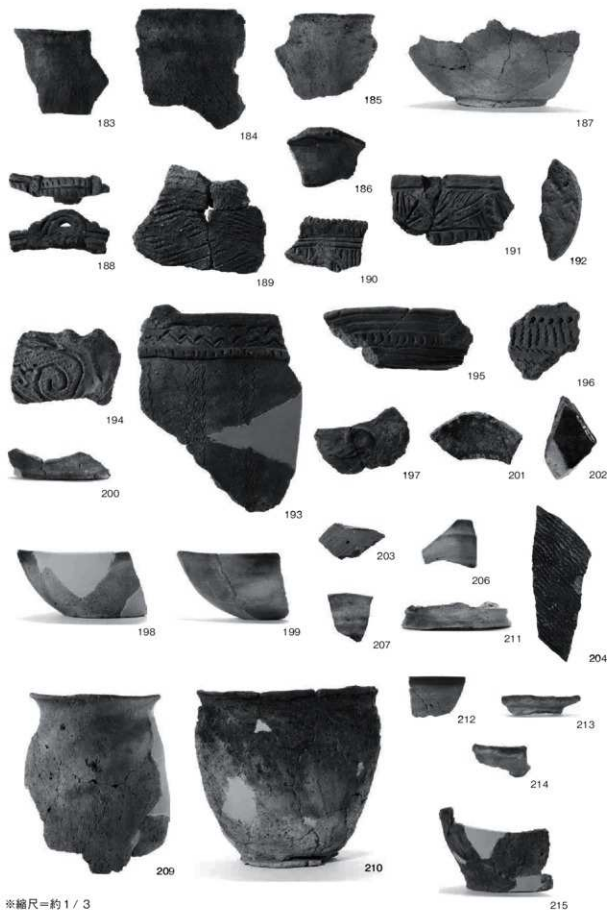
※縮尺=約 1 / 3

写真図版 135 土器 (10)

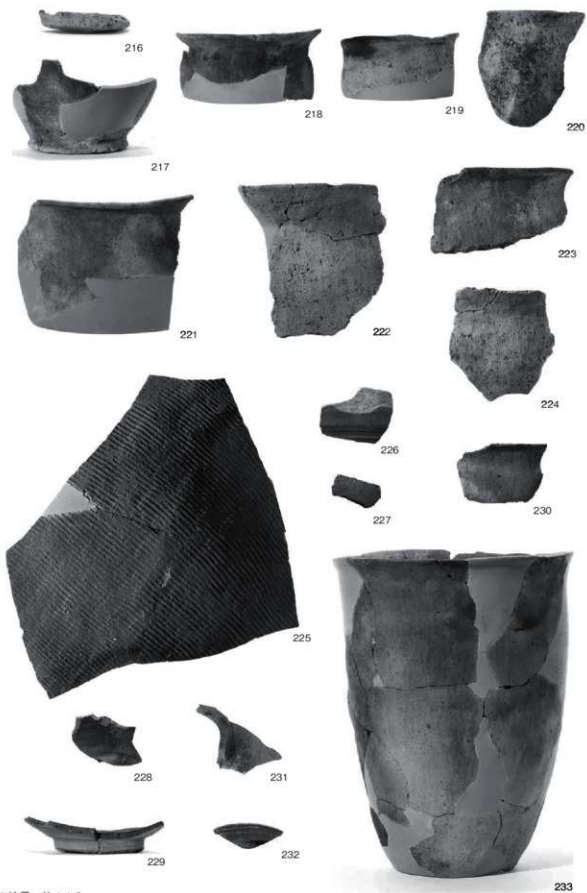


※縮尺=約 1 / 3

写真図版 136 土器 (11)



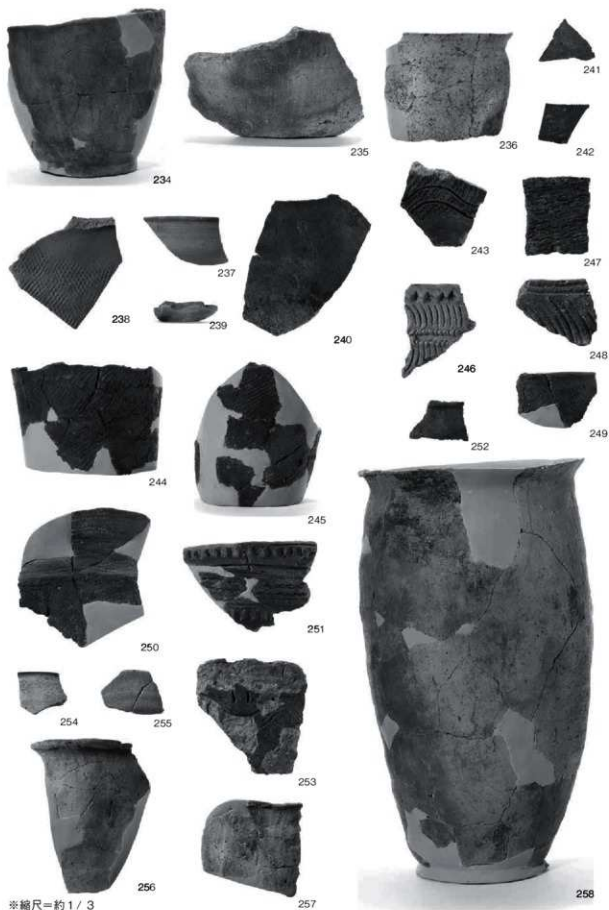
※縮尺=約 1 / 3



※縮尺=約1/3

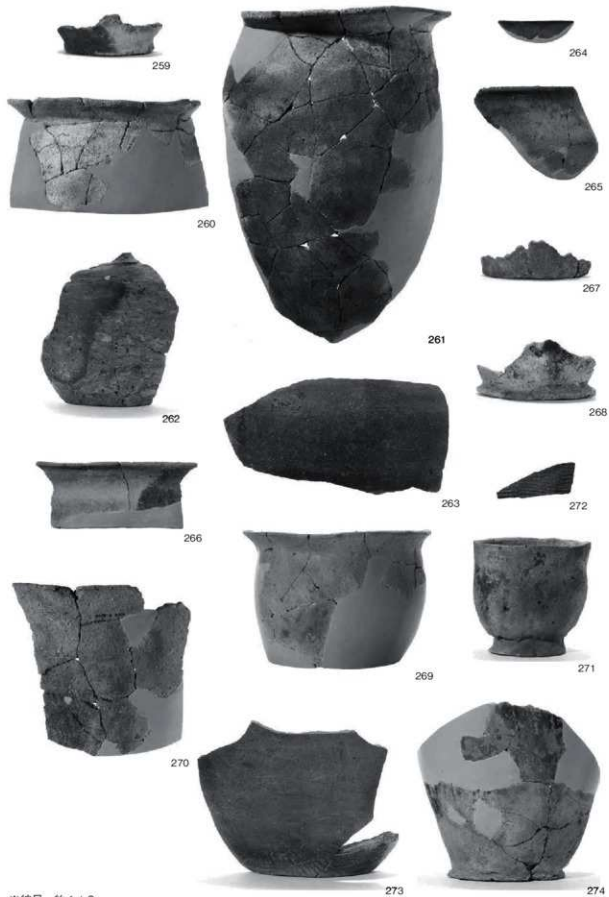
写真図版138 土器(13)





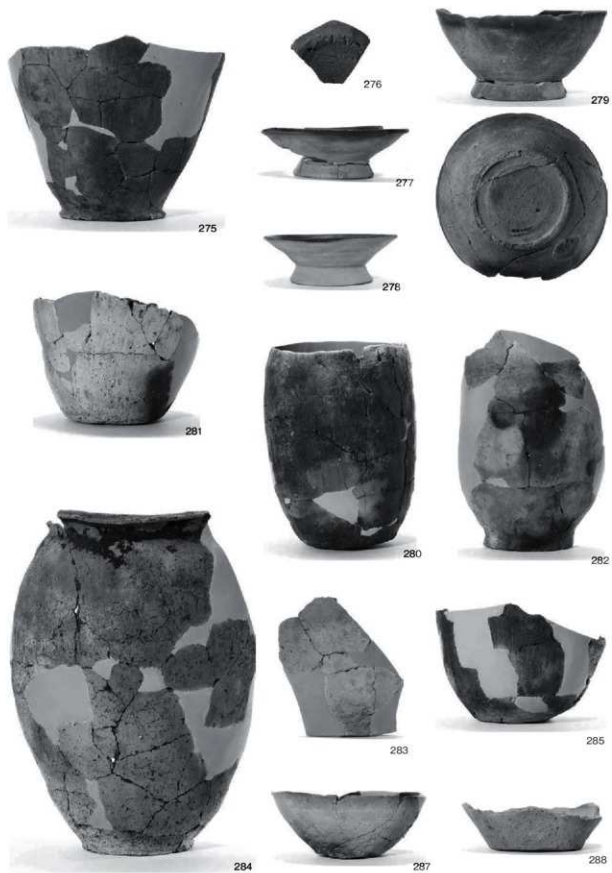
※縮尺=約 1 / 3

写真図版 139 土器 (14)

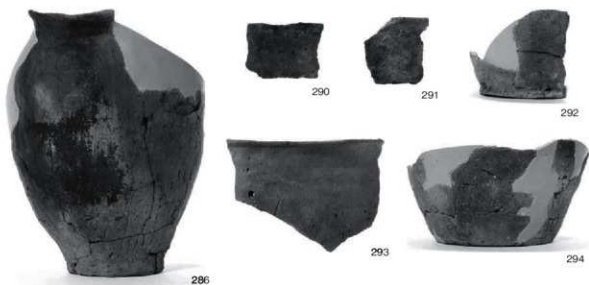


※縮尺=約1/3

写真図版 140 土器 (15)



※縮尺=約1/3



\*縮尺=約1/3 (289は1/4)

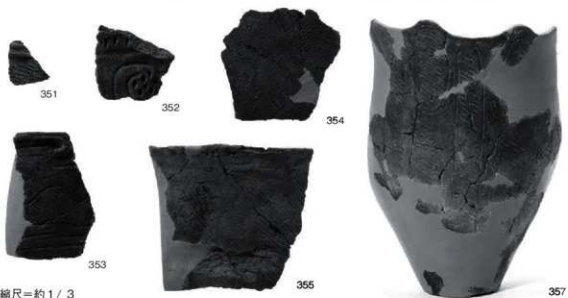
写真図版 142 土器 (17)



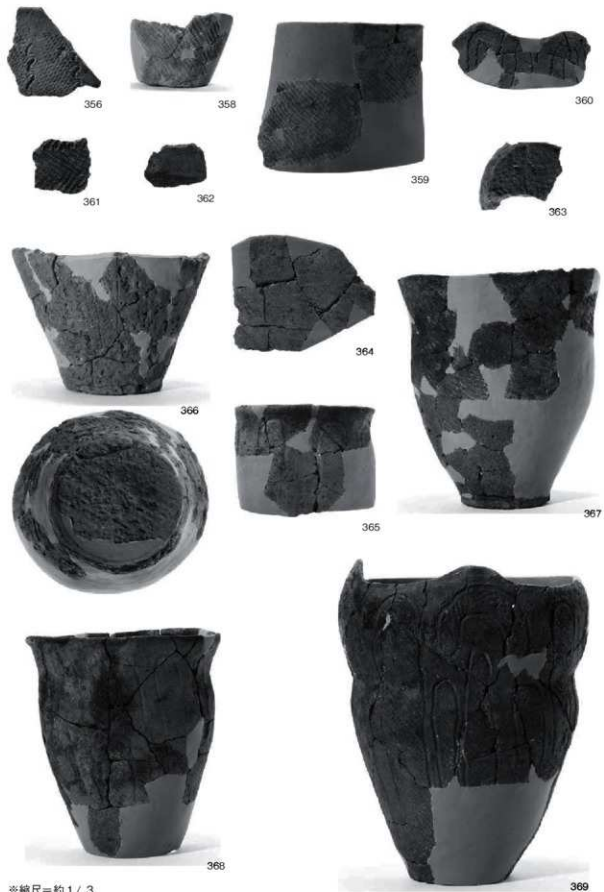
写真図版 143 土器 (18)



写真図版 144 土器 (19)



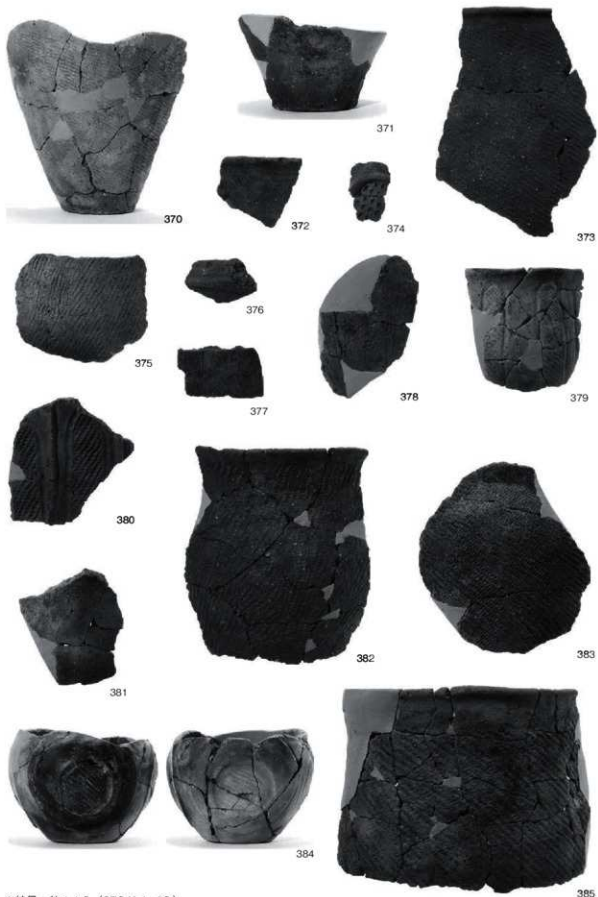
※縮尺=約 1/3



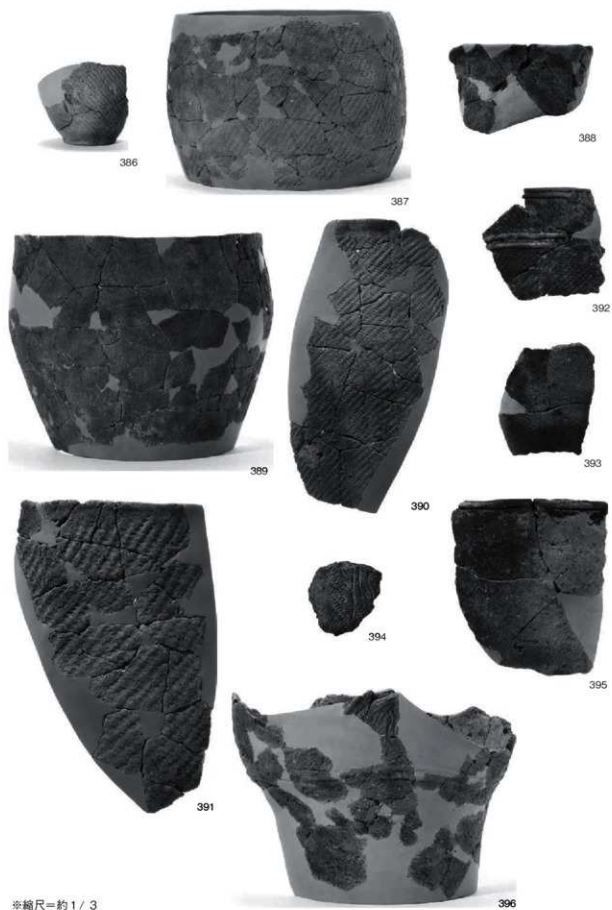
※縮尺=約 1 / 3

写真図版 146 土器 (21)





※縮尺=約1/3 (376は1/2)



※縮尺=約 1 / 3

写真図版 148 土器 (23)



397



398



400



401



399



402



403



404



405



407



408

※縮尺=約 1 / 3



406



409



411



410



412



414

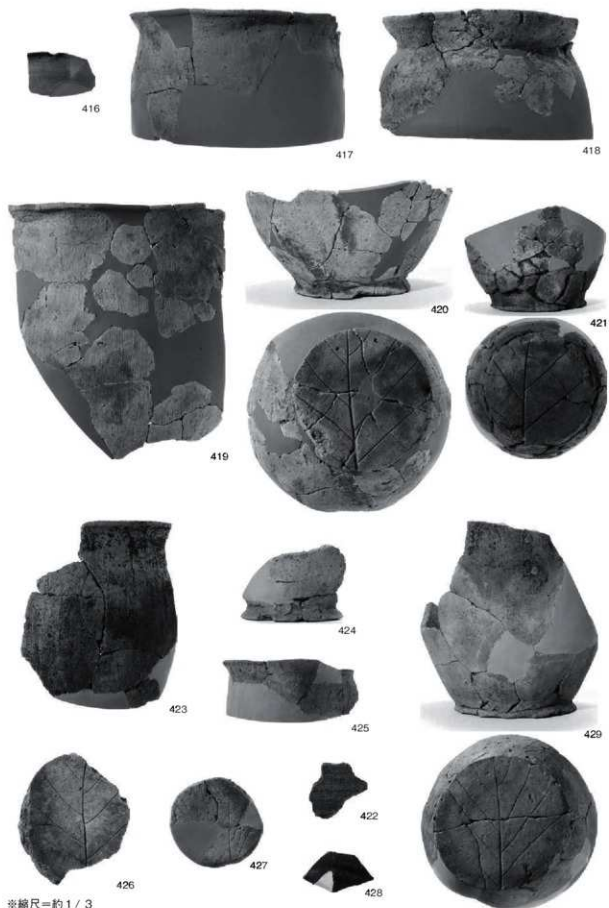


413

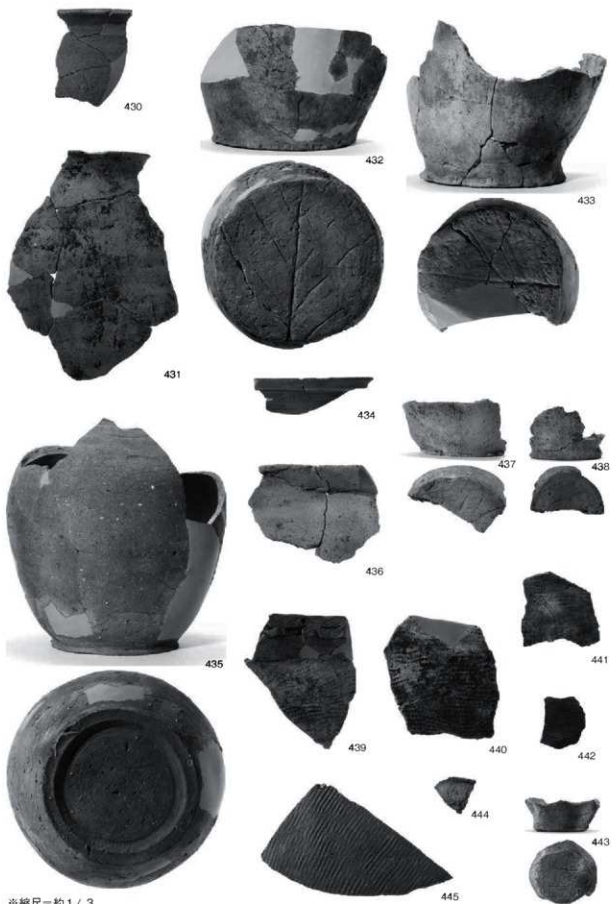


415

※縮尺=約 1/3



写真図版 151 土器 (26)



※縮尺=約 1 / 3

写真図版 152 土器 (27)



446



447



449



448



451

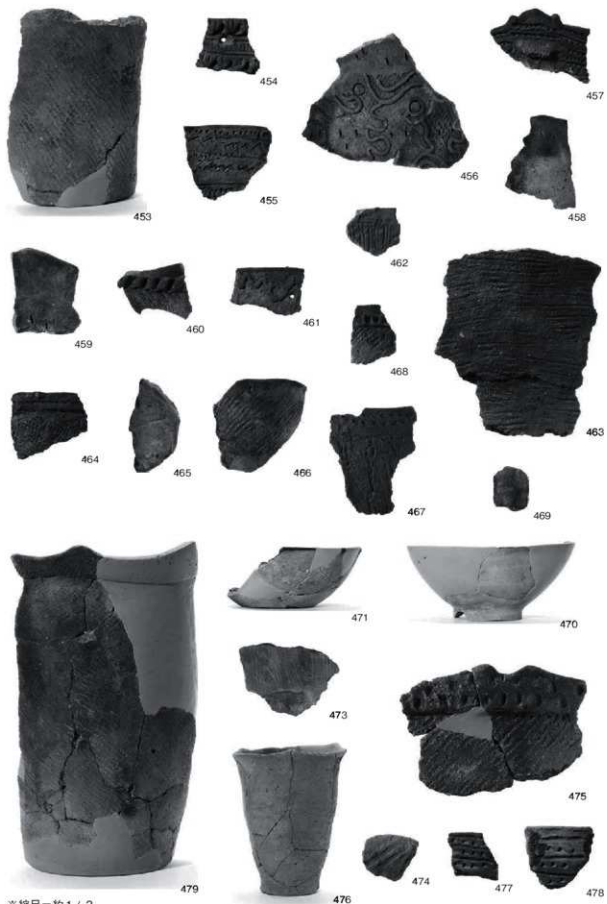


452



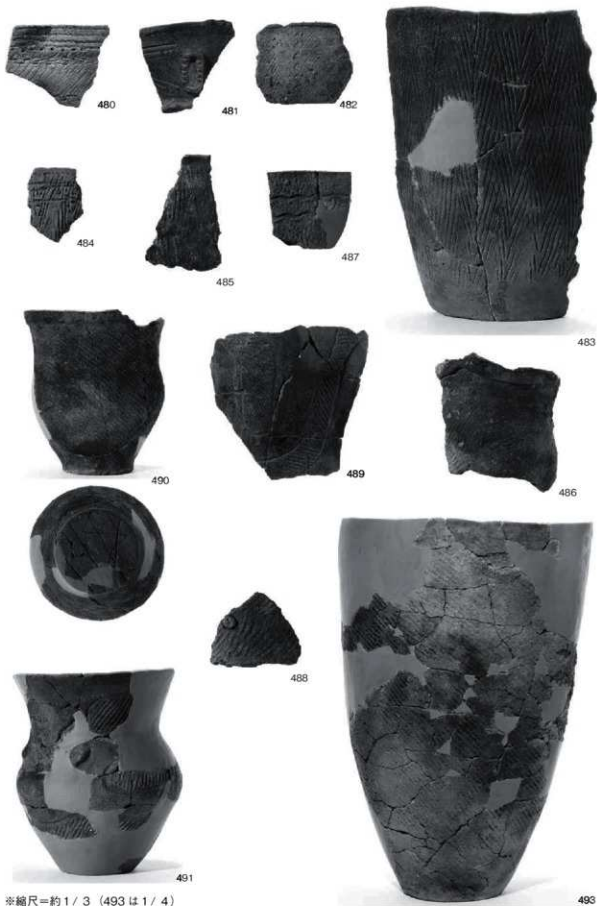
450

※縮尺=約1/3 (450は1/4)



写真図版 154 土器 (29)





※縮尺=約1/3 (493は1/4)



写真図版 156 土器 (31)



508



509



510



511



512



513

※縮尺=約1/3 (512は1/4)



514



515



516



517



518

※縮尺=約 1/3



519



520



521



523



522



524



525



526



527



528



531



529

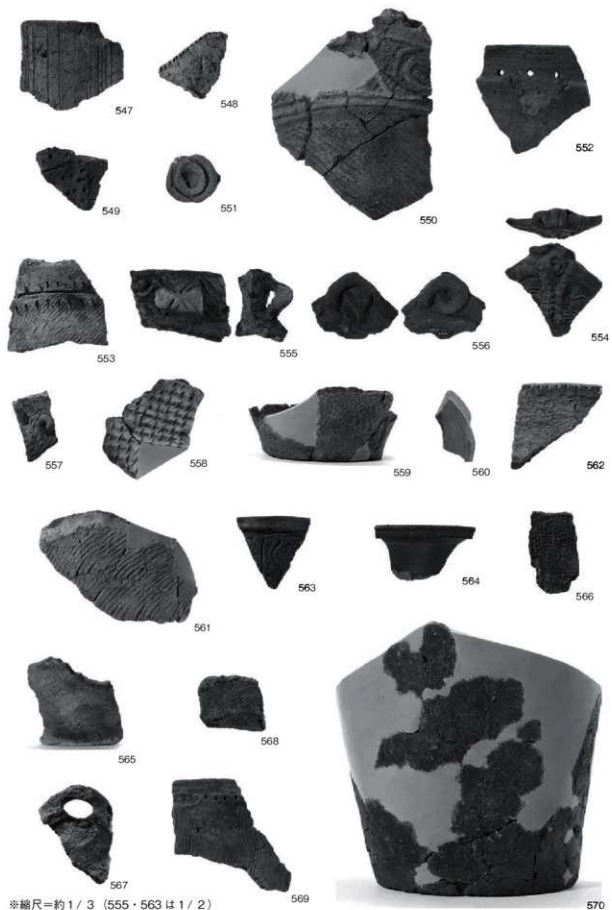


530

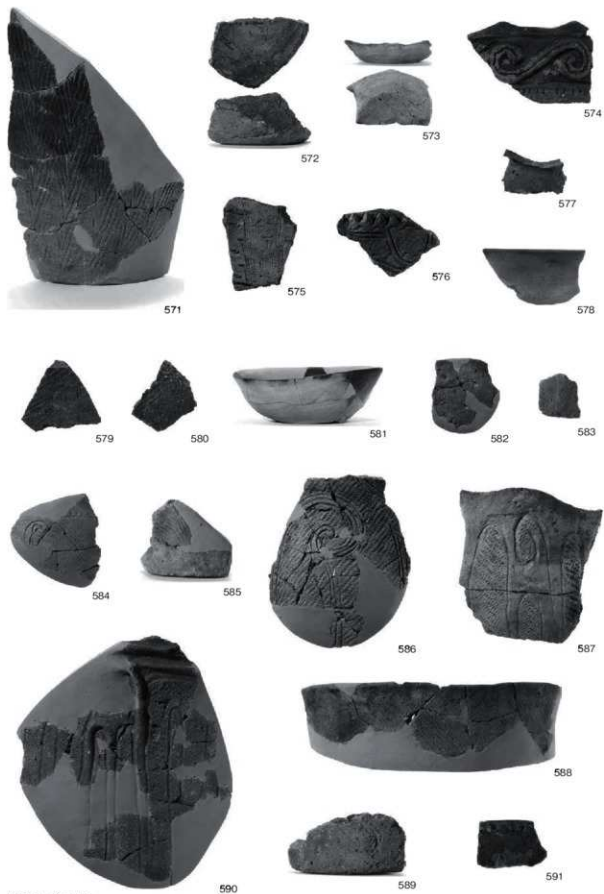
※縮尺=約 1 / 3



※縮尺=約 1 / 3



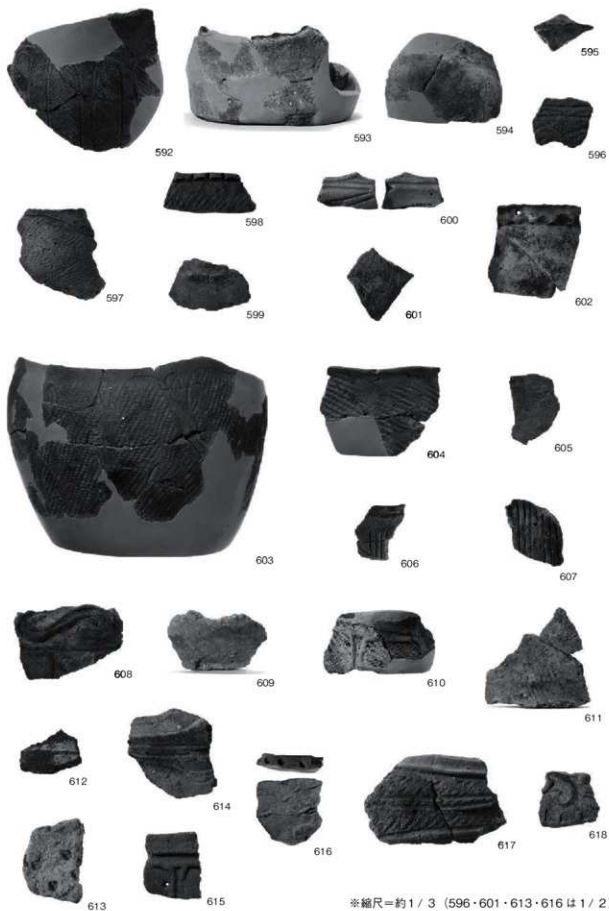
※縮尺=約 1/3 (555・563は 1/2)

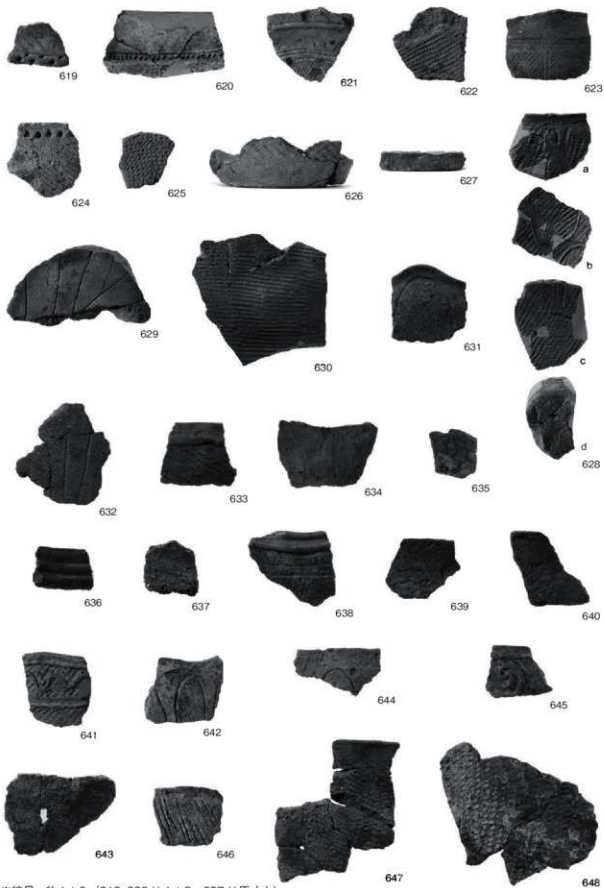


※縮尺=約 1 / 3

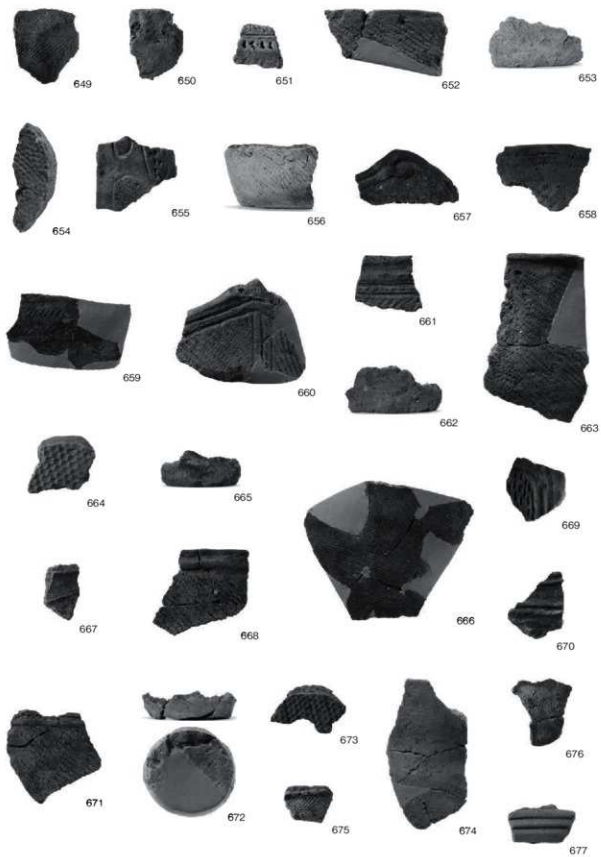
写真図版 162 土器 (37)







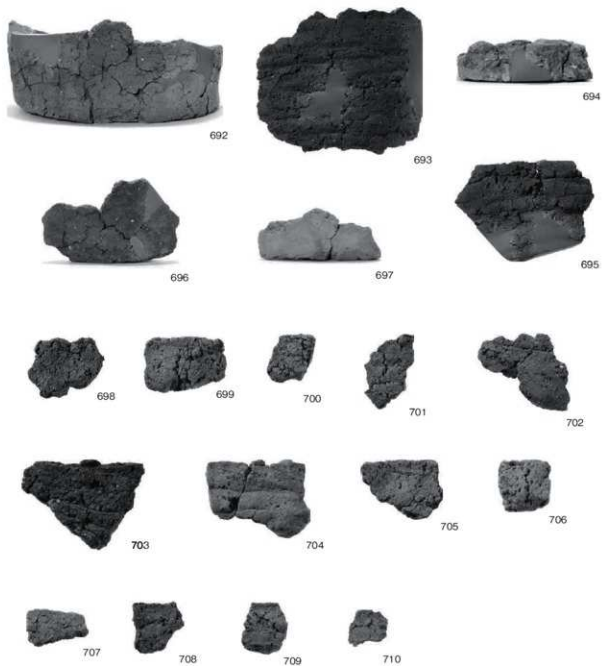
※縮尺=約1/3 (619-635は1/2、637は原寸大)



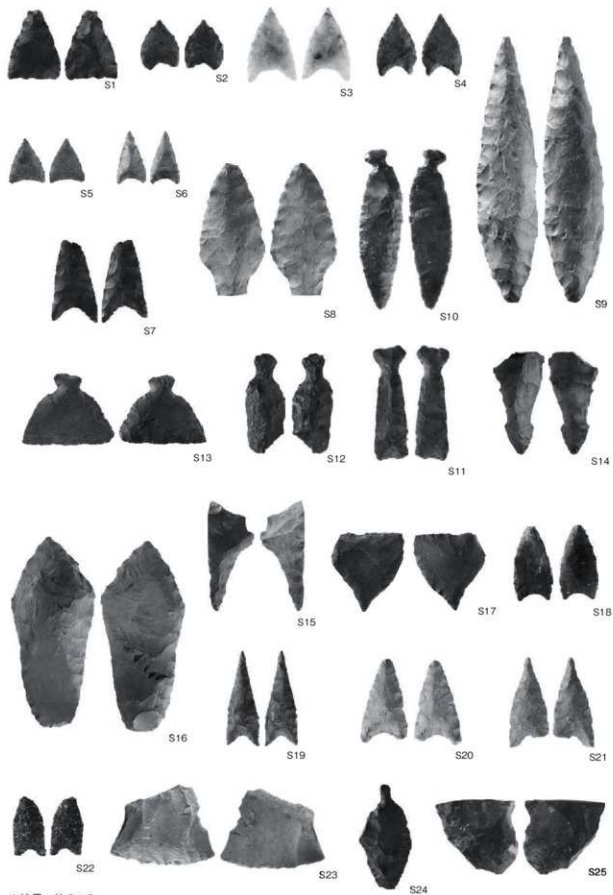
※縮尺=約 1 / 3 (651・667・677 は 1 / 2)



※縮尺= 678～687 は約 1/2、688～691 は 1/3

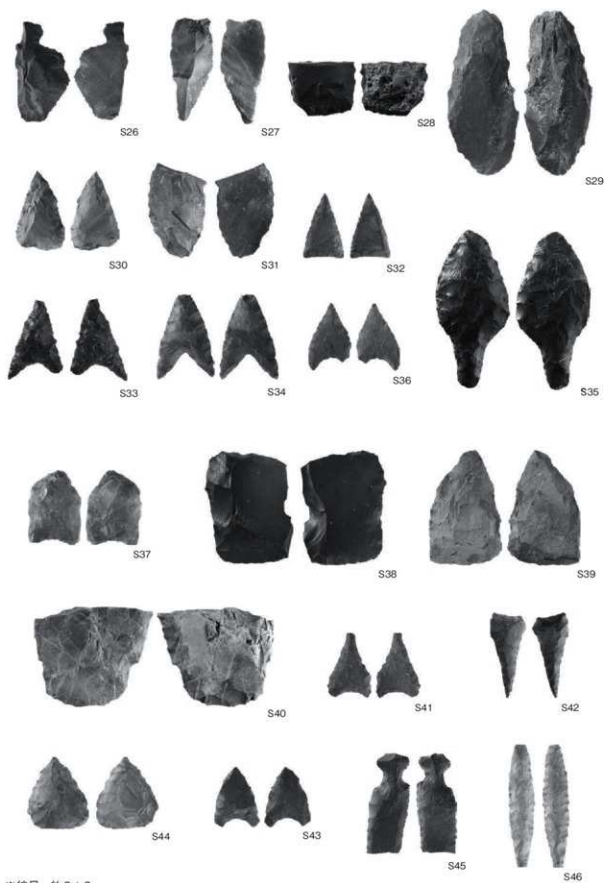


※縮尺= 692～697は約1/3、698～710は1/2

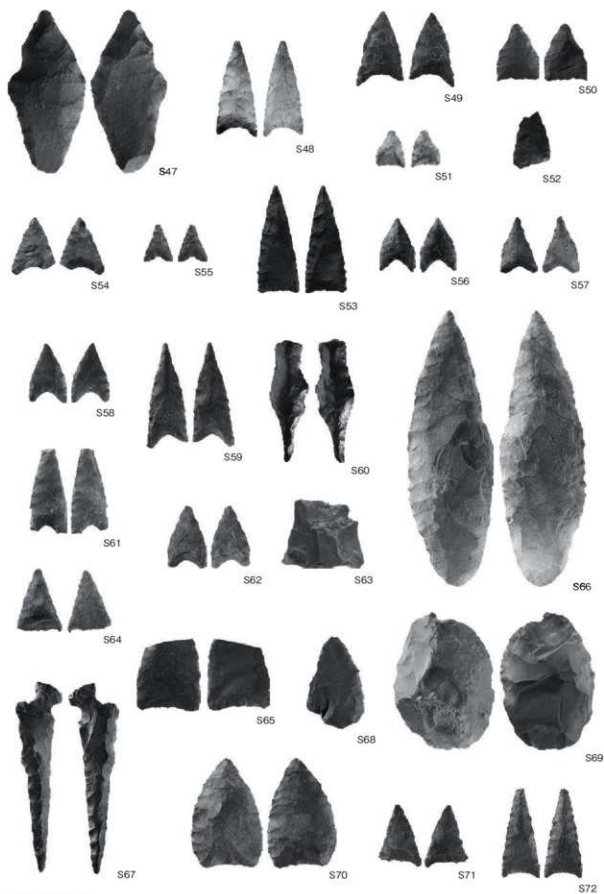


※縮尺=約2/3

写真図版 168 剥片石器 (1)



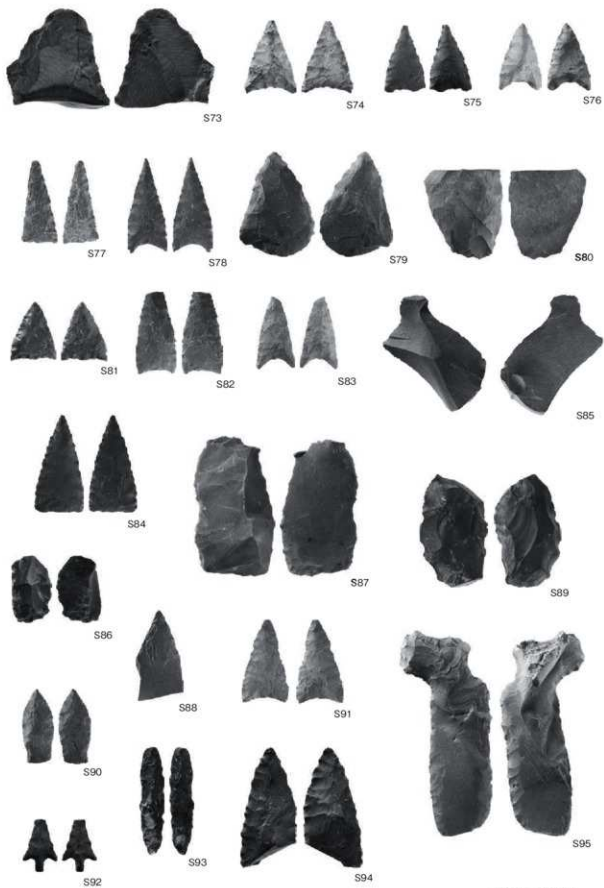
※縮尺=約2/3



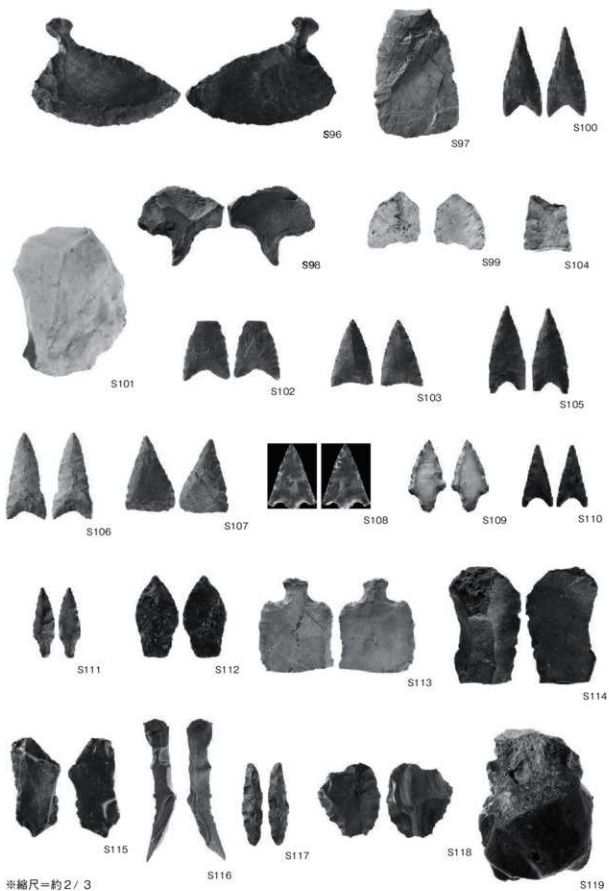
※縮尺=約2/3

写真図版 170 剥片石器 (3)

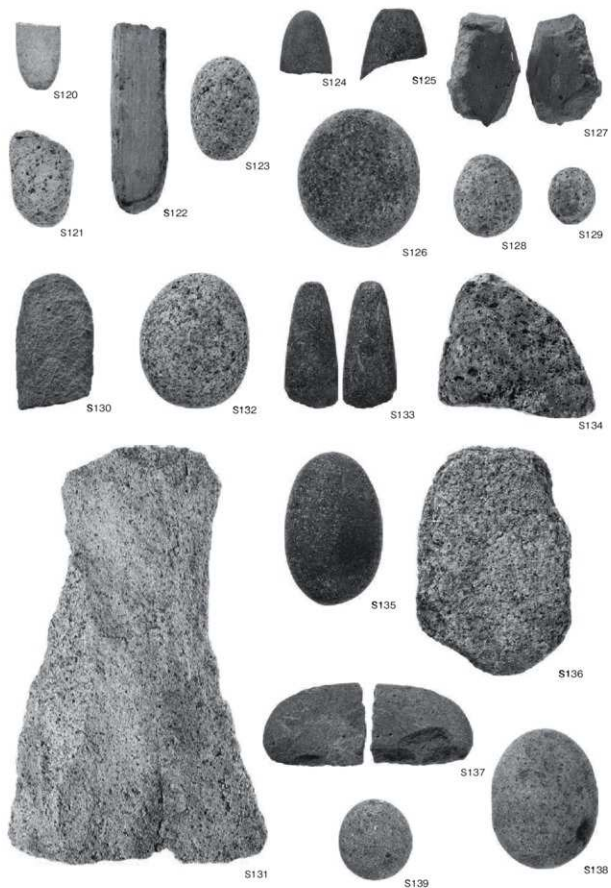




※縮尺=約2/3

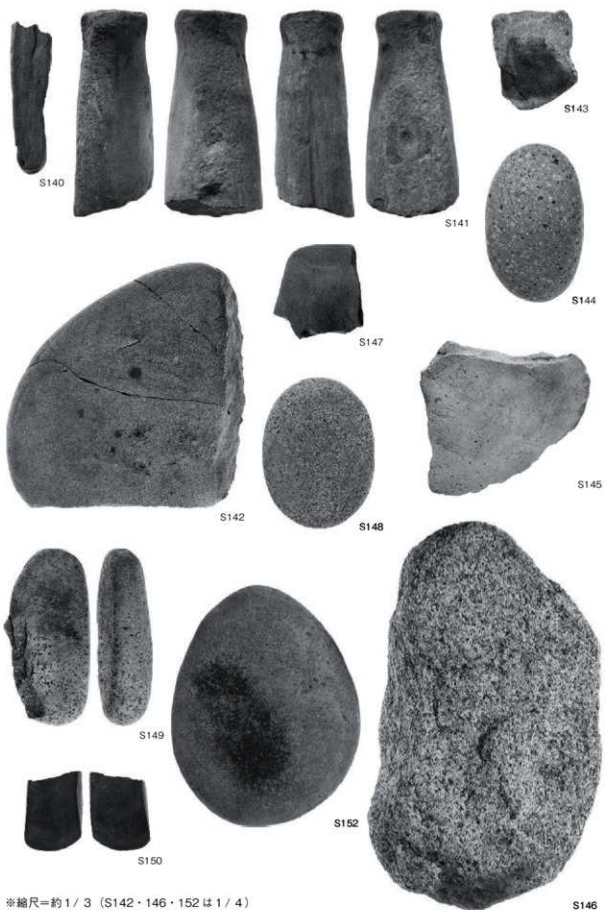


写真図版 172 剥片石器 (5)



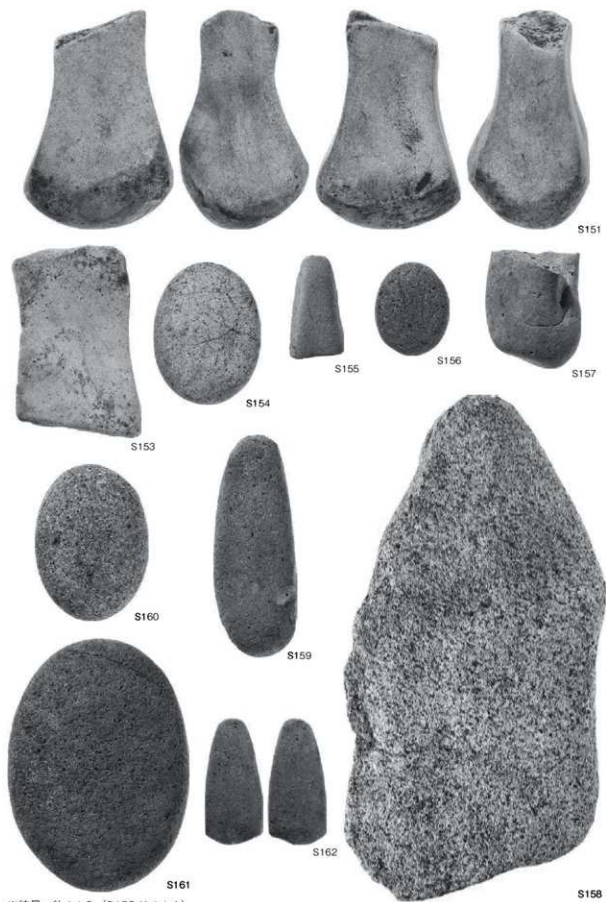
※縮尺=約1/3 (S131は1/4)

写真図版 173 礫石器 (1)



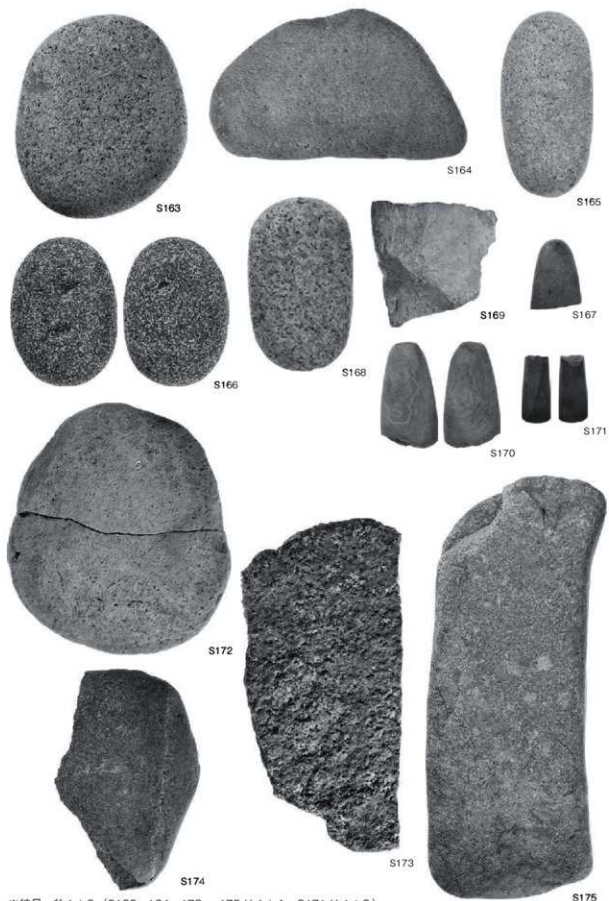
※縮尺=約 1 / 3 (S142・146・152 は 1 / 4)

写真図版 174 礫石器 (2)



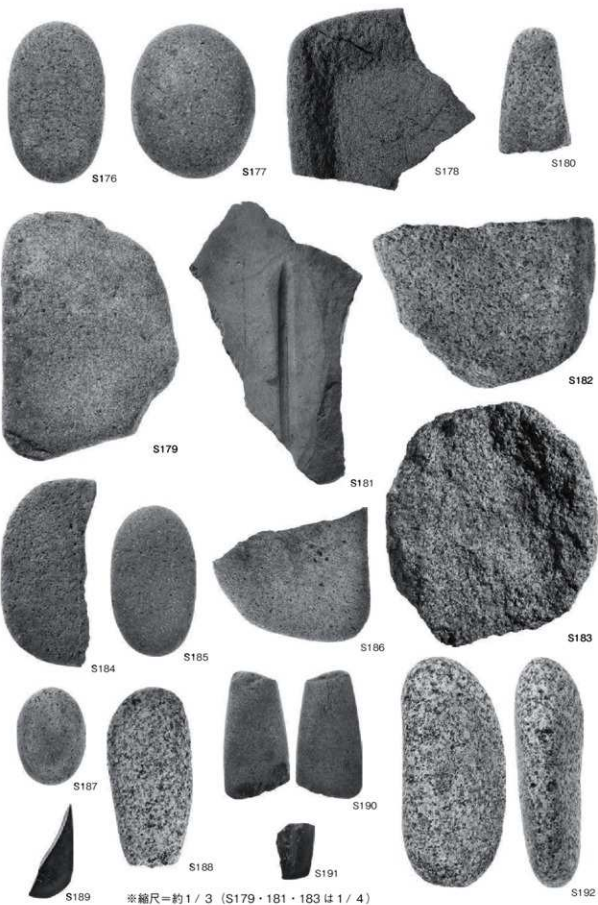
※縮尺=約1/3 (S158は1/4)

写真図版 175 礫石器 (3)

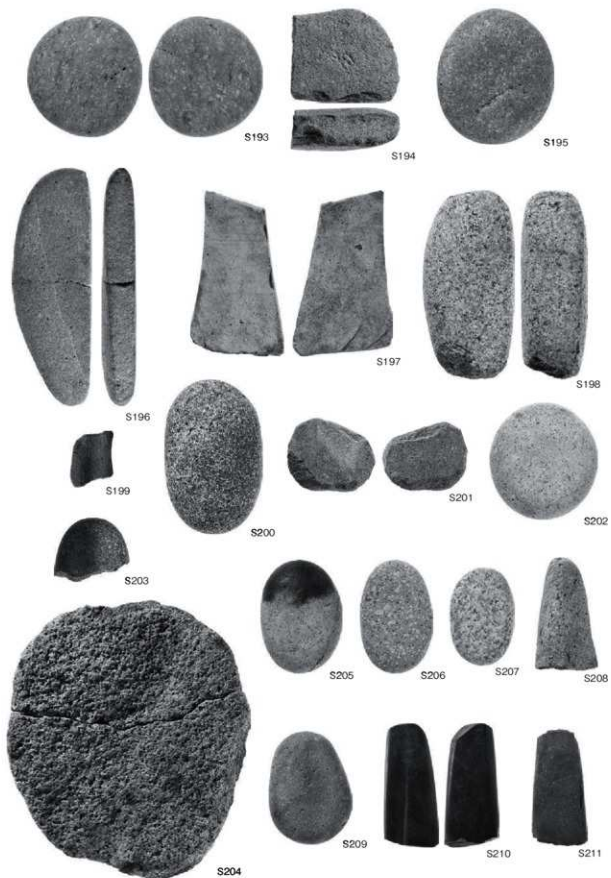


※縮尺=約1/3 (S163・164・172～175は1/4、S171は1/2)

写真図版 176 礫石器 (4)



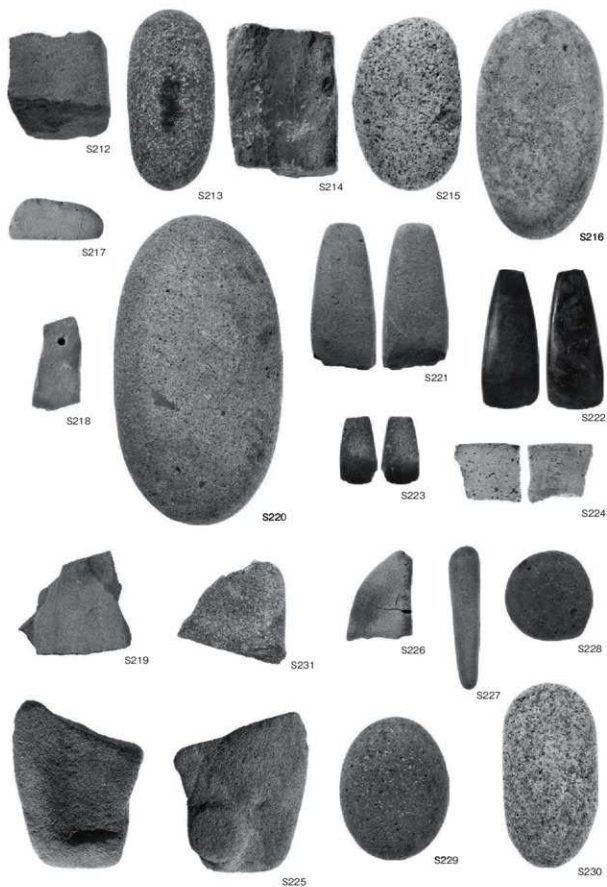
写真図版 177 礫石器 (5)



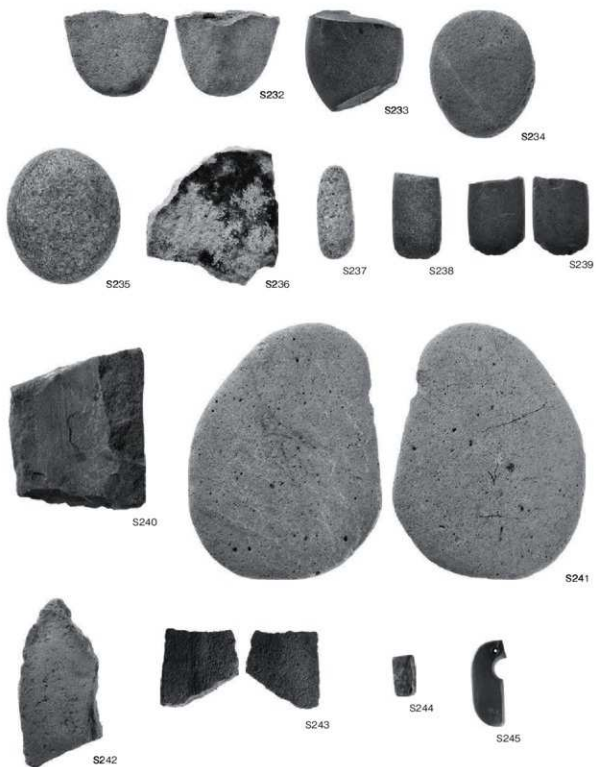
※縮尺=約 1 / 3

写真図版 178 礫石器 (6)

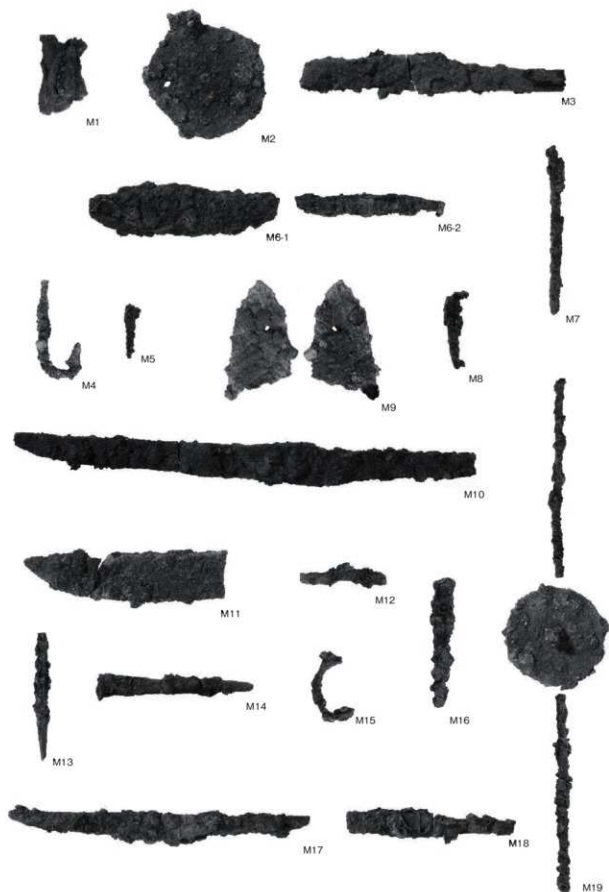




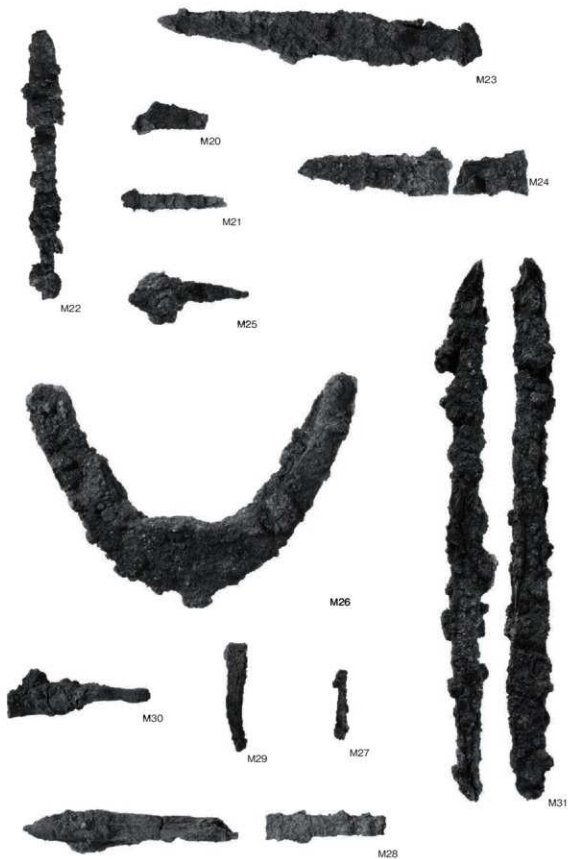
※縮尺=約1/3 (S220は1/4)



※縮尺=約 1 / 3 (S241 は 1 / 4、S244・245 は 1 / 2)



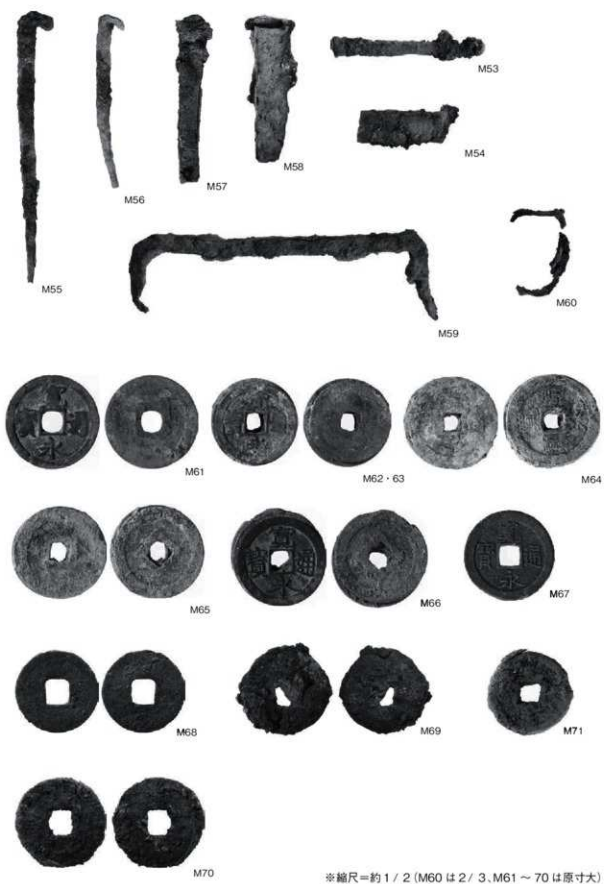
※縮尺=約1/2 (M1~6・9~11・17は2/3)



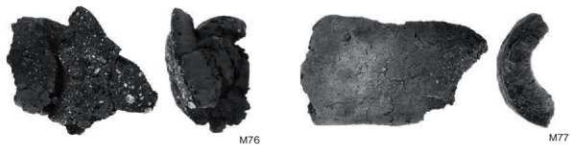
※縮尺=約1/2 (M22~24・26・31は2/3)



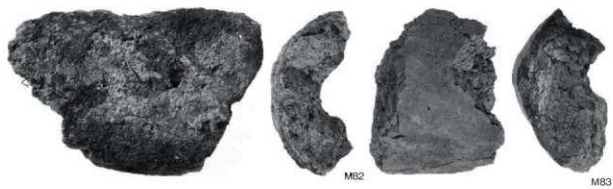
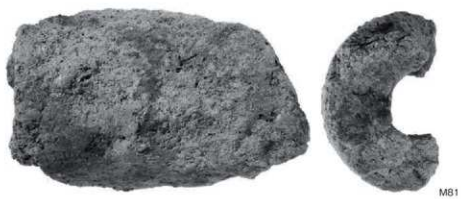
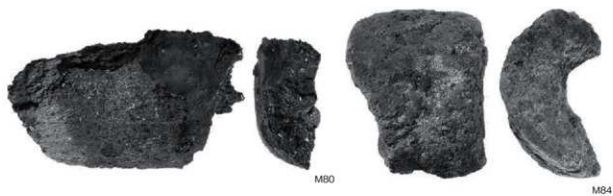
※縮尺=約1/2 (M35・36～41・45～48・51・52は2/3)



写真図版 184 金属製品 (4)・銭貨

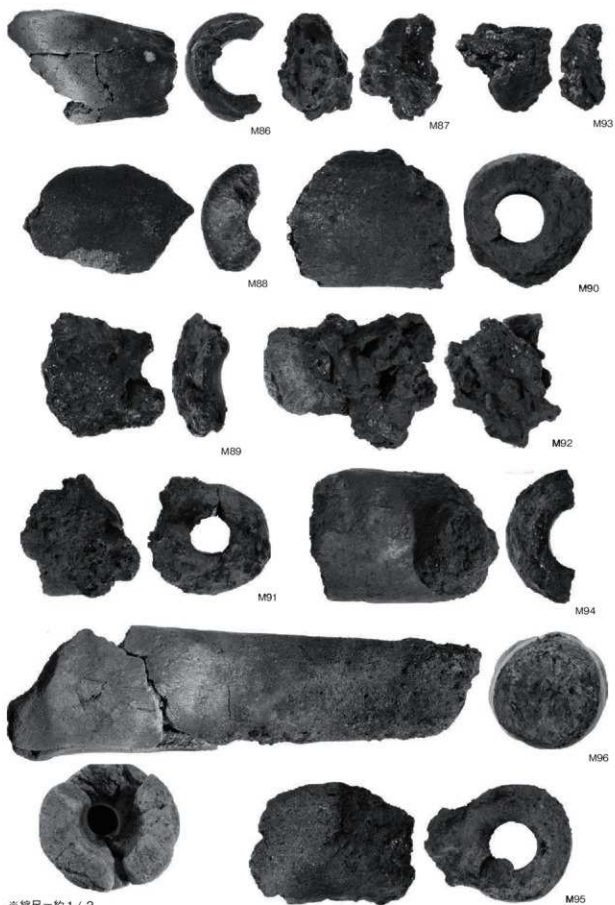


※縮尺=約 1/2

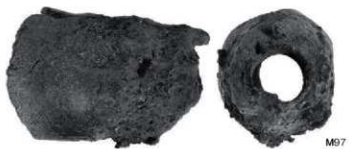


※縮尺=約 1 / 2





写真図版 187 羽口 (3)



M97



M99



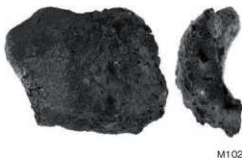
M98



M101



M100



M102



M103

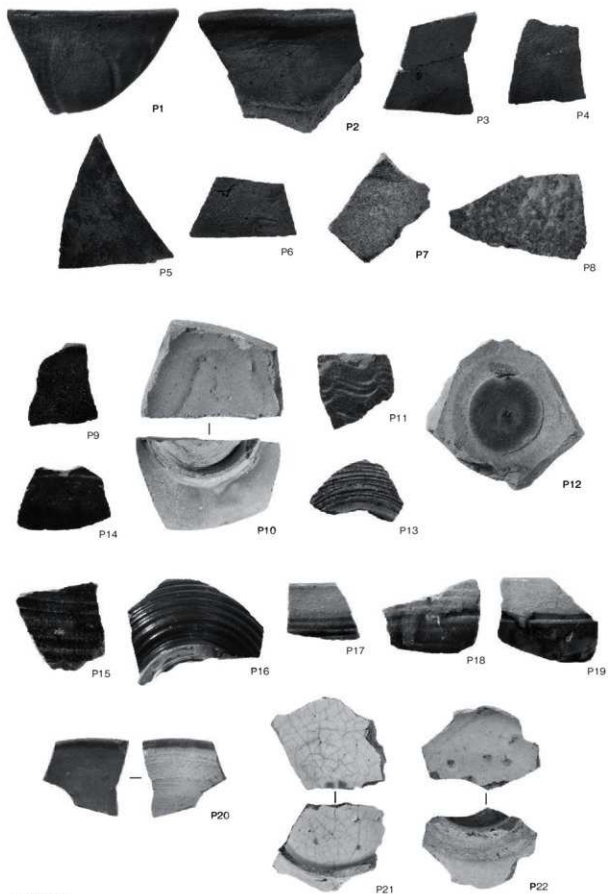


M104

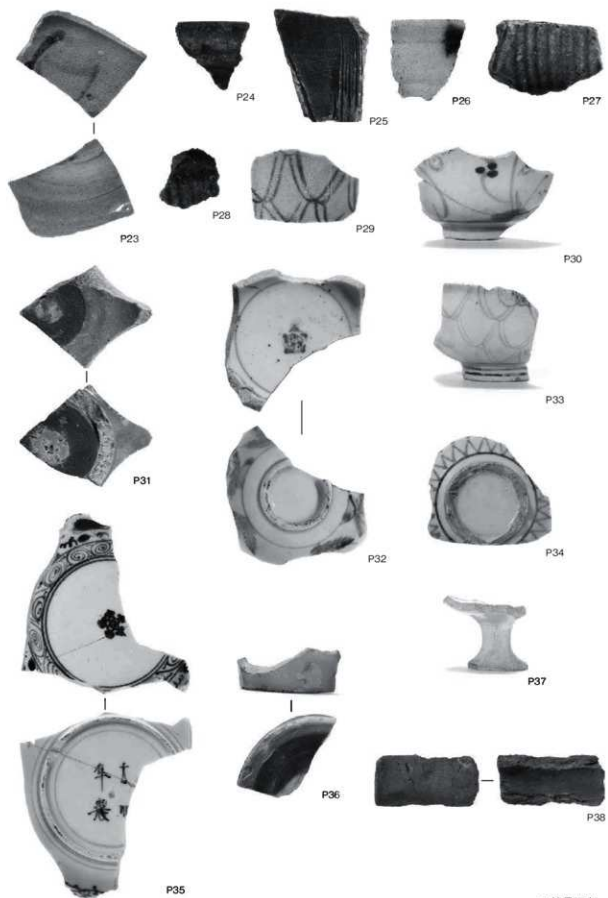


M105

※縮尺=約1/2



※縮尺不定



※縮尺不定

写真図版 190 陶磁器 (2)

## 報告書抄録

ふりがな	あかまえ3いせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	赤前Ⅲ遺跡発掘調査報告書							
副書名	防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第650集							
編著者名	村田 淳・中村隼人・高橋静歩・中島康佑							
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 Tel (019) 638-9001							
発行年月日	2016年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤前Ⅲ遺跡	岩手県宮古市赤前第7地割6番地1号ほか	03202	LG54-1025	39度 34分 50秒	141度 57分 13秒	2013.08.19 ～ 2013.12.20  2014.04.08 ～ 2014.09.12	5,900㎡   6,627㎡	防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
赤前Ⅲ遺跡	縄文	弥生	堅穴建物 23 （大型堅穴建物1含む） 陥し穴11・貯蔵穴12	縄文土器（早期～中期） 石器（鎌・鏃・匙・磨製石斧・礫石器）・土器片円盤・石製玉・珠状耳飾・動物遺存体		縄文時代前期末～中期初頭の大型住居、中期の堅穴建物、古代の鉄生産関連炉を伴う堅穴建物・円形周溝、中～近世の掘立柱建物・墓坑等を伴った。また、縄文～古代の遺構及びその周辺からは貝類・魚類・哺乳類などの動物遺存体が出土している。		
			狩猟場集落生産遺跡	焼土2	弥生土器（中期後半主体）・動物遺存体			
	古代	堅穴建物41 （工房3含む） 鉄生産関連炉3 円形周溝1 廃棄土坑？2	土師器・須恵器・製塩土器 鉄製品（鐔・鎌・釣針・銚など） 羽口・支脚・鉄斧・動物遺存体					
	中～近世	掘立柱建物6 墓坑5	陶磁器（青磁碗・常滑産陶器）・金属製品（小柄など）・銭貨					
	時期不明	土坑124 性格不明遺構20 溝8・欄列4・柱穴						
要約	<p>2箇年の調査により縄文時代・古代・中～近世の複合遺跡であることが明らかとなった。縄文時代の遺構としては前～中期の堅穴建物と貯蔵穴が主体であり、なかでも前期末～中期初頭に属する大型堅穴建物 S101 は宮古地区でも最大規模のものである。一方、中期中葉～後葉の堅穴建物は複式炉を有するが直径3～5m程度と小型のものである。縄文時代の遺構は時期毎に占地も異なり、中期前葉までの遺構は調査区西側の低位部、中期中葉以降の遺構は調査区東側の高位部に集中する。また、出土遺物も豊富で、大型堅穴建物と遺物包含層から出土した大木6～7式の土器は周辺地域ではまった出土量として注目される。</p> <p>古代は最も堅穴建物の多い時期である。堅穴建物は住居と工房があり、複数の建物で精錬炉または鍛冶炉が検出されていることから、建物内で鉄生産活動が行われていたと考えられる。また、S117・18からは製塩土器の破片がまとめて出土している。金属製品も豊富で、釣針や銚などの漁具が出土している。</p> <p>中～近世の遺構として注目されるのは、変則的な軸組と小屋組を有する近世掘立柱民家の主屋と考えられる掘立柱建物 SB05 であり、掘立柱建物の検出数が少ない沿岸地域では貴重な資料である。</p>							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 650 集

## 赤前Ⅲ遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）関連遺跡発掘調査

印刷 平成 28 年 3 月 11 日

発行 平成 28 年 3 月 18 日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話 (019) 638-9001

発行 宮古市都市整備部都市計画課

〒 027-8501 岩手県宮古市新川町 2 番 1 号

電話 (0193) 62-2111

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話 (019) 654-2235

印刷 河北印刷株式会社

〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 2 丁目 8 番 7 号

電話 (019) 623-4256